







芭蕉一代集

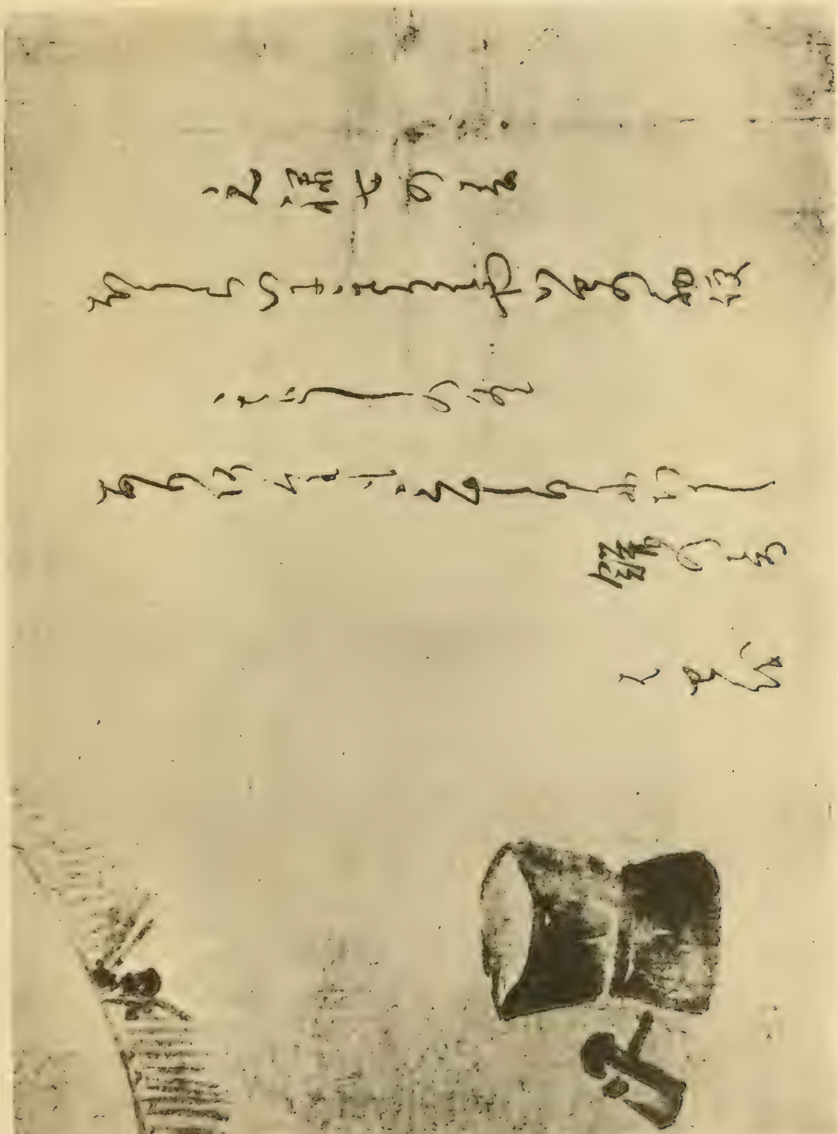
装幀津田青楓

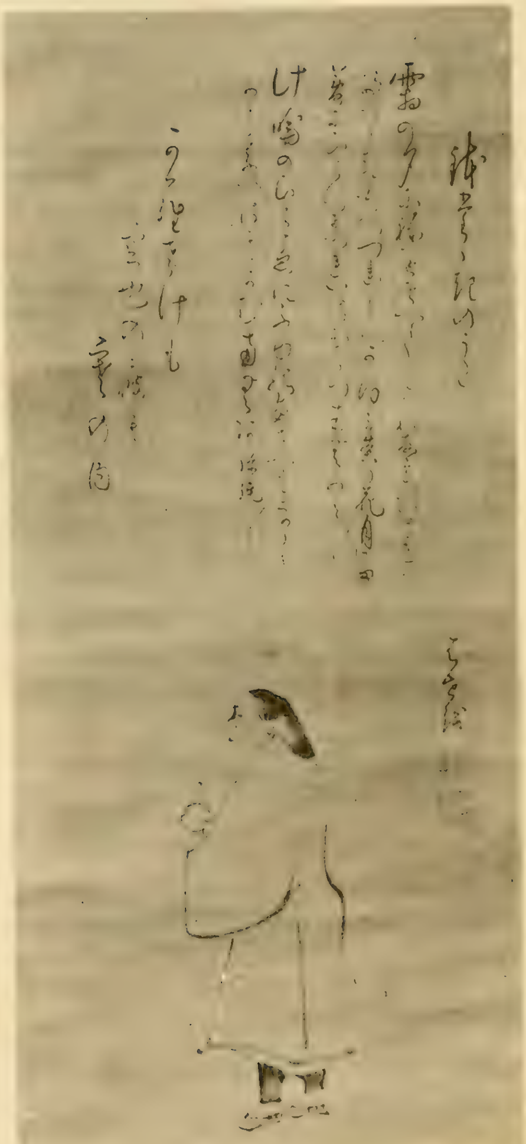


笠翁筆芭蕉像

鈴木廉平氏藏

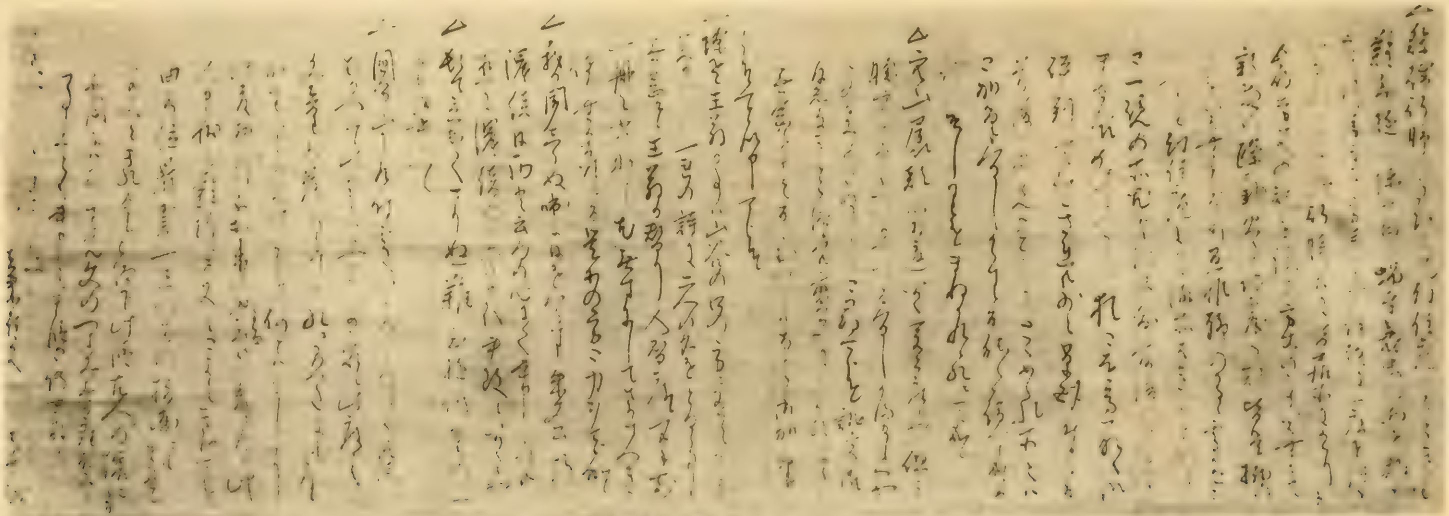
芭蕉自畫贊（二）　澤市郎右衛門氏藏





芭蕉自畫贊（二）

久保田初莜氏藏



芭蕉書翰眞蹟

幻住庵の記につき去來の意見を求めしもの

中邑翠濤氏藏

序并解題

俳書大系の編纂計畫を托された時、第一卷芭蕉一代集は古綠舍默池編『俳諧袖珍鈔』を底本として、年代その他を補記すればよい程度に考へて、第二卷以後收載する俳書の選擇及び系統別をより以上重大視してゐた。大系本としての全體の組織を立案して後も第一卷に就いて特に注意を要する點なきを信じてゐた。愈『袖珍鈔』の寫字原稿が手許に屆いて全文を通覽し、最初の豫定のあまりにかるがるしき事を悔いた。『袖珍鈔』を底本とする不安を感じたのである。『袖珍鈔』以前板行された幻窓湖中・古學庵佛兮共編『俳諧一葉集』は既に覆刻本が行はれてゐるので、其の以後の『袖珍鈔』は內容こそ類似して居るが多少の增補もされ、發句の部を季題別とした如き特色も存在するので格別の疑惑も抱かずして採擇する事に決したのであつた。其の豫期は幾多の誤謬の發見によつて端なく覆されたためこゝに甚しい困惑を來した。『一葉集』に準據し難き上に今又『袖珍鈔』を不可なりとすれば、勢ひ新規に一代集の編纂に着手しなければならない。豫約出版の期間を條件として果して此の企圖を完成し得らるゝであらうか。沈思——熟慮——校訂者の道德として、『袖珍鈔』の不備を忌避して新編輯の方針を取る事に決定した。寫字原稿を書直し再度稿を改めて、『芭蕉俳句類聚』の編輯のみに約一ヶ月を要した。連句の部は解題を一卷每に添へたので意外に進捗せず、印刷所よりの督促日一日と急を告げ、屢々徹宵して脫稿せる部分々々を廻附して其の責任を果しつゝあつた。然るに文集の部に從事するに至つて、豫定の頁數を或は超過するなきやの懸念を覺えた。『袖珍鈔』によつて內容見本に發表した遺語の部を撤回しなければ迚も收まらない。遺語の部は『袖珍鈔』にしても、『一葉集』にしても殆んど大半は『去來抄』・『三冊子』・『俳諧問答』・『芭蕉談』の抄錄と稱して好い。それらの芭蕉門人聞書の類は第四卷『蕉門俳諧文集』

に覆刻する豫定なので、寧ろ重複を避けて省略した方がよいかも知れない。全部を除いても敢て差間なからう。其の結果として遺語の部に收む可き芭蕉翁口訣、又は行脚掟の如きを遽に文集の部に採錄する事にしたので、遂に豫定の六百五十頁を超過する八十餘頁に至つたのである。春秋社の神田豐穗氏が此の過大の負擔を忍んで、編者の希望を快く容れられた事を德として、前記の事實に就き豫約者諸氏の賢察を仰ぎたい。

解題の前に一言して置きたい。それは本集の分類名義に關してゞあるが、芭蕉時代の用語例によれば俳諧といへば發句並に附句の兩者を其の語義に包含してゐるので、「芭蕉俳句類聚」及び「芭蕉連句集成」の如く俳句と連句と兩者を對立的に取扱つた場合はない。殊に芭蕉は俳句の語を用ひず時には狂句と稱し、或は發句、略してほくと呼ぶのを例としてゐた。とはいへ『虛栗』の序に「紛々俳句何須數」の如く芭蕉時代に俳句の語は存在しない事はなかつた。俳句より連句の用語例の方が遙かに發見し難い。俳諧の語を連句のみに用ひた例もない。俳諧といへば百韻・歌仙のやうな必らず發句のある場合の事で、發句のない短句から起つて長句を附ける單純な附句、並に前句附をも總括するところの特定語はなかつた。仍つて俳諧の發句を略して俳句と呼び、俳諧の連歌を略して俳歌といふ可きを明治以後の慣用語である連句と呼ぶ事として、兩者を對立的に前記の如く稱しても決して不合理ではあるまい。

本集の如き特殊の編纂書は解題の必要がないかも知れない。連句以後には簡略ながら解題式の說明があるので猶更その感のないではないが、汎例を更に詳しくした程度で記して置いても無用でなからう。

寛文四年板の「佐夜中山」所載の芭蕉二十一歳より其の五十一歳、元祿七年序の『枯尾花』に至る、主として芭蕉生前の諸集所載の俳句を輯めて、それに元祿以後の信憑す可き俳書中より抄錄せるものを添へ、多數の讀者の希望する類題別の配列を試みたのである。季題は芭蕉時代に行はれたものを本位としたので、現行の歳事記とは相違した個所が尠くない。たとへば晝寢の題は近世の季寄には夏季に扱つてゐるが、芭蕉時代は雜題であつて「ひや〳〵と壁をふまへて晝寢かな」の如く秋季の「冷やか」を主題として詠まれてゐるが如くである。毎句の括弧の中の年號は作句年代の推定である。詞書に年月のあるのは別として大體所載俳書の板行年代より推定したので、その年の作といふよりはその年以前の作である事を豫じめ知つて置いて頂きたい。同じく括弧内の書名は本文所載の俳書で年代の古き集を代表的に揭げ、漢字と假名の別は所載本のまゝ私意を挾む事をしなかつた。

芭蕉俳句異同考

芭蕉の俳句はその所傳に甚だしい異同があるので、孰れが初案か後案か疑惑を抱かせらるゝものが多い。たゞ異同を註記したのみでは鑑別するにも、其の異同のよつて來るところを味解するにも不都合であるから、一字一音の異同あるものと雖全句を揭出して、その異同の傍に黑き圏點を施して置いた。配列は季題別として各題ごとに行間をあけて、相紛るゝなく一見明瞭ならしむるやう考慮したのである。異同の孰れが芭蕉の最後の案と見るべきやは人々の見解によるが、「芭蕉俳句類聚」に選抄した分がそれに近いものと見て大過ないであらう。

芭蕉俳句不審抄

『一葉集』の如き充分信用して好いものですら、同名異人の宗房の作を混入して居る程であるから、寛政以後の諸集に輯められた芭蕉の俳句なるものは甚だ以て疑問である。検索の便を計つて發音順にそれらの疑はしき俳句を一括して置いた所以である。「不審抄」とは要するに不審紙の用語例によつて眞僞の不審なる事を意味するので、強ちこゝに收むるもの悉くが芭蕉の作でないと斷じたのでない。出典さへ明確になれば其の不審の晴るゝものもないとは限らぬ。不審抄の其の二は混入の形迹明瞭なるもので、小著『芭蕉俳句定本』によりて其後發見のものを附記したのである。

芭蕉連句集成

明治以後或る一派の政略から連句の進展を阻止されて、芭蕉の中心藝術である連句の研究も閑却されて來たが、其の研究を促進する第一階梯として芭蕉連句集の定本を提供する爲め、特に努力して一卷毎に小解題を設け、所載俳書名及び作の年代を擧げて、興行の場所・異本の有無に就いて説明して置いた。

百韻は表八句、初裏・二表・二裏・三表・三裏・名殘表各十四句づゝ、名殘の裏八句で成立する連句の一形式で芭蕉は延寶時代に多く試みてゐる。古式百韻一卷は表十句・名殘の裏六句である。

歌仙は芭蕉連句の本位で蕉風開發の後は全く歌仙式に準據してゐるといつて好い。表六句、裏・名殘表若くは二表各十二句づゝ、名殘の裏若くは二の裏六句を以て一卷となるのである。

百韻未滿は百韻と同一形式でその句數の百韻に達せざるもの、及び世吉と稱して四十四句を以て成立するものを收めてある。芭蕉の試みた連句の形式としては其の例に乏しい。

歌仙未滿は歌仙の三十六句に滿たざる卷で、その半數十八句のものは半歌仙又は十八公として一形式をなしてゐる。

芭蕉は晩年此の形式の單簡なるを喜んで、比較的多くの作例を殘してゐる。

表・第三・附句　表は百韻又は歌仙の表のみにて完了するもので、これを表合せと稱してゐるが、その數に滿たざるものをも收めてある。第三は發句・脇・第三の三句の場合をさしたので歳旦の三ツ物に準じてよい。附句は長短二句のものを稱し、前句附をもこの中に含めてある。

芭蕉句合・評語集

句合は詳しくは俳諧發句合といひ、俳句を一番づゝ組合せてそれに批判の言葉を施せるものである。評語は芭蕉時代の用語によれば批言といふのが正しい。連句の一句毎にその附け振り、一卷としての運びを說いたので芭蕉のうつり・馨・ひゞきを知るに最もよい。

貝おほひ　芭蕉の宗房時代、伊賀上野の天滿宮に奉納せる三十番發句合である。その判詞は流行小唄を巧みに且洒落れて作れるを得意とした戲作氣分の溢るゝものである。

田舍の句合　芭蕉の門人其角が、ねりまの農夫・かさいの野人の假托人物に擬して、二十五番の發句合を習作せるものに批言を施したので延寶八年の板行である。

常盤屋の句合　同じく門人杉風の發句合である。『江戸俳諧合』の題名で『田舍の句合』の姉妹卷として延寶八年出板されたのである。發句の野菜づくしに對して、判詞も亦野菜の緣語を用ひて其の技巧に苦心をしてゐる。

十八番發句合　寫本を以て傳へられたので板本の存在はいふまでもなく、『一葉集』にすら所載されざる未發表の發句合である。舊洒竹文庫にも別に一本を藏する筈であるが、比較校訂するを得なかつた。

續の原　編者は一柳軒不卜である。芭蕉は四季の句合の冬の部の判詞を擔當したので貞享四年の板行である。

初懷紙　其角の「鶴の歩み」を發句とした百韻の前半に文學的批評を試みたので、貞享三年既に蕉風俳諧の成立期に入つてゐるので、その評語よりして芭蕉の連句論を窺知し得るものである。

山中三吟　元祿二年加賀山中温泉にて同行の曾良及び金澤の北枝と三吟を試み、その附句を捌きつゝ敎旨した大意を北枝の聞書としたもので、芭蕉の捌きを直接見聞するが如き好個の評語である。

秋の夜　出羽の淵庵不玉の獨吟歌仙に對し、書面を以て批評せる一卷でその評語の小文體なるが珍らしい。元祿六年の評語であるが板行は延享年中である。

芭蕉紀行・日記集

旅人といはれた其の一生を象徴するが如く芭蕉は紀行文にその傑作を殘した。生前は筐底に收めてみだりに他見を許さなかつたが、歿後「奥の細道」を始め全部板行されてゐる。日記はたゞ一部の『嵯峨日記』のみで、これも未定稿のまゝ後人の手によつて出板されたのである。

甲子吟行　貞享元年門人千里を同行して江戸を旅立ち、東海道を通つて伊勢より故鄕伊賀に入り、芳野を越えて美濃・尾張を廻國した紀行である。翌二年の起稿である。

鹿嶋詣　常陸鹿嶋の根本寺に曉の月を賞した小紀行である。貞享四年の秋、同行は門人曾良・宗波の二人であつた。

笈の小文　此の書は芭蕉の隨時抄錄したものに題したので、その中の卯辰紀行を乙州が出板したので知られてゐる。越人を誘うて伊良古に杜國を訪ひ、後杜國と共に吉野の山踏みをしたもので元祿元年の起稿である。

更科紀行　元祿元年尾張より江戸へ歸る道すがら、越人と更科の月見をした紀行である。『笈の小文』の附錄に添へてある。

奥の細道　門人曾良を隨へて奥羽を行脚し、北越の暑濕になやみ、加賀にて曾良と別れ、一人殘つて越前より美濃に入り、伊勢の遷宮を拜みに行くまでの紀行である。紀行は元祿二年であるが出板は同十五年である。

嵯峨日記　洛外嵯峨にある去來の落柿舍に滯杖中の感想文である。元祿四年の遺稿で久しく世に現はれず、元文年中に至つて漸く板行を見たのである。

芭蕉文集

蝶夢の『芭蕉翁文集』は賦より誄に至る編輯法で紀行の類も收めてあるが、芭蕉時代の文章は許六の『本朝文選』にその文體と配列とが組織立てられてゐるが、芭蕉の文章をそれに準じて配列するのは煩はしいので、『幻住庵の記』を最初にかゝげ、その他は賦とか辭とかの名目によらず、内容の類似せるものを順次配列したのである。起稿の年代及び所載俳書名と共に『連句集成』と同じく一篇毎に小解題を添へた。

芭蕉書翰集

水鷄笛を愛玩して「我を戀者のやうに中をかしくゆ」の一笑宛、及び曲水に對して俳諧に三等の品あるを論した消息の類を見れば、芭蕉の洒脫なる人格、人の師として嚴乎たる風丰が窺はれて、芭蕉の遺語は門人の聞書よりむしろ書翰の部にありはしないかとさへ思はれるのである。推定によつて一通づゝ年代別に掲げ、引用俳書名を掲記したが、

原稿の整理中頻りに督促を受けたので、或は年次の配列に疎漏がありはしないかを疑惧してゐる。（勝峰晋風）

本文の振り假名の中、片假名は引用書にあるもので、平假名は編者の私見によつて振つたのである。

句讀及び濁點の大部分は亦編者の隨意に施したところが多い。

日本俳書大系 第一巻 芭蕉一代集 目次

口繪

芭蕉俳句類聚

芭蕉俳句類聚

勝峰晋風編

春の部

元日

歳旦　くれ〳〵て餅を木魂のわびね哉　【天和二年―歳旦發句集】

於春々大なる哉春と云々　【延寶七年―向の岡】

似合しや新年古き米五升　【貞享元年―[illegible]尾[illegible]】

年々や猿に着せたる猿の面　【元祿六年―翁草】

元日　元日やおもへば淋し秋の暮　【貞享四年―[illegible]】

元日に田ごとの日こそこひしけれ　【元祿二年―泊船集】

正月　正月も美濃と近江や閏月　【寛文二年―あとの木】

立春　春立つとわらはも知るや飾繩　【寛文十年―[illegible]香[illegible]】

風麥亭

春立てまだ九日の野山哉　【元祿元年―初蟬】

今朝の春　庭訓の往來誰が文庫より今朝の春　【延寶六年―江戸廣小路】

花の春

誰やらが形に似たりけさの春　【貞享四年――續虛栗】

二日にもぬかりはせじな花の春　【元祿元年――曠野】

都ちかき所にとしをとりて

薦を着て誰人います花のはる　【元祿三年――其袋】

千代の春

天秤や京江戸かけて千代の春　【延寶四年――當世男】

二見の圖を拜み侍りて

伊勢が賣家にも來たり千代の春　【貞享三年――もとの水】

浦の春

うたがふな潮の花も浦の春　【元祿二年――いつを昔】

宿の春

發句なり芭蕉桃青が宿の春　【貞享年中――ばせを翁】

高き屋にのぼりてみればといふ御製の有がたきを今も猶

庭竈

叡慮にて賑ふ民や庭竈　【元祿二年――庭竈集】

門松

門松やおもへば一夜三十年　【延寶五年――六百番發句合】

いくしもにこゝろばせをの松かざり　【貞享三年――桑　集】

歯朶

餅を夢に折結しだの草枕　【天和元年――東日記】

やまがにとしをこえて

誰が聟ぞしだにもちおふうしのとし　【貞享二年――桑　集】

蓬萊

蓬萊に聞ばや伊勢の初便　【元祿六年――炭俵】

筆始

三日口を閉て題二正月四日一

大津繪の筆のはじめは何佛　【元祿四年――勸進牒】

子の日

子の日しに都へ行ん友もがな　【貞享二年――芭蕉句選拾遺】

苔清水

凍解

凍解て筆に汲干す清水哉　【元祿元年――小文庫】

氷解

勢ひあり氷消ては瀧津魚　【天和三年――新虛栗】

霞

大比叡やしの字を引て一霞　【延寶五年――江戸廣小路】

季吟勸進卷頭

和歌の跡とふや出雲の八重霞　【延寶年中――もとの水】

春なれや名もなき山の朝がすみ　【貞享二年――小文庫】

陽炎

かれ芝やまだかげろふの一二寸　【元祿元年――曠野】

伊賀新大佛之記

丈六に陽炎高し石の上　【元祿元年――小文庫】

かげろふの我肩にたつ紙子哉　【元祿二年――伊達衣】

かげろふや柴胡の糸の薄曇　【元祿三年――猿蓑】

室八島

糸遊

糸遊に結びつきたるけぶりかな　【元祿二年――雪丸げ】

入かゝる日も糸遊の名殘かな　【元祿二年――初茄子】

暮遲　暮遲き四谷過けり紙草履　【貞享元祿年中――もとの水】

春の夜　春の夜や籠人ゆかし堂のすみ　【元祿元年――笈の小文】

春の夜は櫻に明て仕廻けり　【元祿四年――翁草】

笠寺奉納

春雨　笠寺やもらぬ窟も春の雨　【貞享二年――千鳥掛】

春雨の木下にかゝる雫かな　【元祿元年――小文庫】

春雨や蓬をのばす草の道　【元祿二年――草の道】

不性さやかき起されし春の雨　【元祿三年――猿蓑】

春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏　【元祿六年――炭俵】

春雨や蓑吹かへす川柳　【元祿七年――芭蕉句選拾遺】

若菜　蒟蒻にけふは賣かつ若菜哉　【元祿二年――若菜集】

薺　古畑や薺摘行男ども　【貞享三年――桂歴】

よもに打薺もしどろもどろ哉　【貞享年中――續深川】

一とせに一度つまるゝなづな哉　【元祿四年――芭蕉句選】

薺花　よく見れば薺花さく垣ねかな　【貞享四年――續虛栗】

石川北鯤生のおとうと山店子我つれ〴〵なぐさめんとて、芹の食煮させてふかゞは（深川）まで持來る。青泥坊庭の芹にやあらんと其世の

芹

わびもいまさらに覺ゆ

我ためか鶴はみのこす芹の食　【天和二年――續深川】

若草

前髪もまだ若草の匂ひかな　【元祿七年――翁草】

春草

團扇に讚ヲ望ム

木曾の情雪や生ぬく春の草　【元祿五年――小文庫】

薺堀

菩提山

山寺のかなしさつげよ薺ほり　【元祿元年――笈日記】

獨活

雪間より薄紫の芽獨活哉　【元祿四年――翁草】

畑打

畑打音やあらしのさくら麻　【元祿三年――花摘】

海苔

淺草　あさくさ千里がもとにて

苔汁の手ぎは見せけり淺黄椀　【貞享元年――茶草子】

老懶

蠣よりは海苔をば老の賣もせで　【貞享四年――續虛栗】

衰

おとろへや齒に喰あてし海苔の砂　【元祿四年――今日の昔】

梅

盛なる梅にす手引風もがな　【寛文七年――續山井】

此梅に牛も初音と鳴つべし　【延寶四年――江戸兩吟集】

あるひさいかくれ家がなたづね侍るに、あるじ

我も神のひさうやあふぐ梅の花　【延寶四年――續連珠】

は寺に詣(まうで)けるよしにて、さし老たるおのこ獨(ひとり)庵をまもりゐける。かきほ(垣穂)の梅さかりなりければ、これなむあるじがほ(顔)なりといひけるを、かのおのこ、よそのかきほにさぶらふ(候)と云(いふ)をきゝて

るす(留守)に來て梅さへよそ(餘所)のかきほかな　【貞享元年――栞　集】

伊賀にて

旅がらす(鳥)古巣はむめに成にけり　【貞享二年――鳥の道】

梅林

梅白しきのふや鶴をぬすまれし　【貞享二年――孤　松】

梅咲てよろこぶ鳥のけしき哉　【貞享三年――芭蕉句選拾遺】

梅折て椿に迷ふたもと哉　【貞享四年――もとの水】

さと(里)のこ(子)よ梅おり(折)のこせうしのむち(鞭)　【貞享四年――栞　集】

ひとゝせ(一年)、みやこの空にたび寢せしころ、みち(道)にて行脚(あんぎや)の僧にしろ人になり侍るに、このはる(春)みちのおく見にゆく(行)さて、わが草庵をとひ(訪)ければ

また(又)もと(訪)へやぶ(藪)の中なるむめの花　【貞享四年――栞　集】

去來子へつかはす

蒟蒻のさしみもすこし梅の花　【元祿元年——小文庫】

山家

手鼻かむ音さへ梅のさかり哉　【元祿元年——卯辰集】

伊賀の城下に、うにと云ものあり、わるくさき香なり

香にゝほへうにほる岡の梅のはな　【元祿元年——有磯海】

風麥亭にて

あこくその心もしらず梅の花　【元祿元年——芭蕉句選拾遺】

網代民部の息に逢て

梅の木になほやどり木や梅の花　【元祿元年——曠野】

子良館の後に梅有といへば

御子良子の一もとゆかし梅の花　【元祿元年——猿蓑】

園女亭

のうれんの奥物ゆかし北の梅　【元祿三年——菊の塵】

卓袋亭月待

月まちや梅かたげ行小山伏　【元祿四年——芭蕉翁全傳】

餞二乙州東武行一

柳

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　〔元禄四年——猿蓑〕

梅が香やしらゝおちくぼ京太郎　〔元禄五年——忘れ梅〕

春もやゝけしきとゝのふ月と梅　〔元禄五年——薦獅子〕

人も見ぬ春や鏡のうらの梅　〔元禄五年——己が光〕

梅が香にのつと日の出る山路哉　〔元禄六年——炭俵〕

古郷の梅や浪花の二年越　〔貞享元禄年中——もとの水〕

梅さくやちやうやうふりやう黒木賣　〔貞享元禄年中——芭蕉葉舟〕

梅が香に昔の一字あはれ也　〔貞享元禄年中——笈日記〕

梅が香や見ぬ世の人に御意を得る　〔元禄年中——續寒菊〕

梅が香に追ひもどさるゝ寒かな　〔元禄年中——荒小田〕

あちこちや面々さばき柳髪　〔寛文七年——續山井〕

餅花をしら糸となす柳かな　〔寛文七年——續山井〕

うぐひすを魂にねむるか嬌柳　〔天和二年——虚栗〕

贈ル杜國ニ

笠の緒に柳綰る旅出かな　〔元禄元年——もとの水〕

はれ物に柳のさはるしなへかな　〔元禄六年——小文庫〕

八九間空で雨降る柳かな　〔元禄七年——續猿蓑〕

入口は柳にのぼるよし野かな　〔元禄元年——眞蹟〕

梅柳

うめ柳さぞ若衆かな女かな　【天和元年――武蔵曲】

かぞへ来ぬ屋鋪々々のうめ柳　【元禄五年――一字幽蘭集】

椿

鶯の笠おとしたる椿かな　【元禄三年――猿蓑】

葉にそむく椿や花のよそごゝろ　【元禄四年――もとの水】

落ざまに水こぼしけり花椿　【元禄年中――芭蕉句選】

遣水や椿ながるゝ竹のおく　【元禄年中――もとの水】

富士に行き椿にかくれ家に出づ　【元禄年中――西花句帳】

春の駒

しほじりの尻も居らぬ春の駒　【貞享年中――もとの水】

猫の恋

猫の恋へつゐの崩より通ひけり　【延宝五年――江戸廣小路】

またふどな犬ふみつけて猫の恋　【天和三年――茶草子】

田家

麦めしにやつるゝ恋か猫の妻　【元禄四年――猿蓑】

猫の恋やむとき閨の朧月　【元禄五年――己が光】

白魚

藻にすだく白魚やとらば消ぬべき　【延宝八年――東日記】

白魚に價あることぞ恨なれ　【天和三年――たがまき】

明ぼのやしら魚白きこと一寸　【貞享元年――冬の日】

常陸下向に江戸を出る時、送りの人に

鮎の子の白魚送る別かな　【元禄二年――伊達衣】

蜆子の畫讃

白魚や黑き目を明ク法の網　【元祿二年――曠野】

獺祭魚

膳所へ行く人の許にて

獺の祭見て來よ瀬田のおく　【元祿三年――花摘】

鶯

相國寺にて

鶯に感ある竹のはやし哉　【元祿四年――もとの水】

鶯や餅に糞する椽の先　【元祿五年――葛松原】

うぐひすや柳のうしろ藪の前　【元祿五年――續猿蓑】

鶯や雀よけ行枝うつり　【元祿七年――平安廿歌仙】

鶯や茶袋かゝる庵の垣　【元祿年中――續寒菊】

雲雀

永き日を囀たらぬひばりかな　【貞享四年――續虛栗】

原中や物にもつかず鳴雲雀　【貞享四年――續虛栗】

杉風夢想

雲雀より上にやすらふ峠かな　【元祿元年――曠野】

二月

さゝげたり二月中旬初茄子　【延寶七年――一葉集】

二月十七日神路山を出るとて

はだかにはまだ衣更着のあらし哉　【元祿元年――其袋】

朧月

花の顏に晴うてしてや朧月　【寛文七年――續山井】

貝寄　貝寄る風の手じなや若の浦　【延寶年中――もとの水】

初午　二月吉日とて是橘が剃髪入醫門を賀す
はつうまに狐のそりし頭哉　【元祿六年――末若葉】

涅槃會　伊勢にて
神がきやおもひもかけず涅槃像　【元祿元年――曠野】
ねはん會や皺手合する珠數の音　【元祿七年――續猿蓑】

水取　二月堂水取
水とりや氷の僧の沓の音　【貞享二年――小文庫】

初櫻　藥師寺月次初會
初ざくら折しもけふはよき日なり　【元祿元年――芭蕉句選拾遺】
咲みだす桃の中よりはつ櫻　【元祿元年――小文庫】
顏に似ぬ發句も出よはつ櫻　【元祿七年――續猿蓑】

紅梅　紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ　【貞享元祿年中――蟋蟀の卷】

接穗　捨もののに梨の接穗や山屋敷　【元祿元年――もとの水】

種芋　芋種や花のさかりを賣ありく　【元祿三年――己が光】

此筋にのぞまれて茅舍の畫讚
葎若葉　むぐらさへ若葉はやさし破れ家　【元祿二年――後の旅】

李下ばせをを送る

芭蕉植る　ばせを植てまづにくむ荻の二ば哉　【天和二年――續深川】

逢二龍尚舍一

荻若葉　物の名を先とふ荻の若葉哉　【元祿元年――笈日記】

楠邊

燕　盃に泥な落しそむら燕　【元祿元年――笈日記】

すゝほりてごみ燒宿に啼燕　【元祿年中――芭蕉句選拾遺】

壁土の家する木曾のつばめ哉　【元祿年中――芭蕉句選拾遺】

雉子　婕石と啼かはしたる雉子哉　【延寶年中――もとの水】

高野にて

父母のしきりに戀し雉子のこゑ　【元祿元年――曠野】

山居

蛇くふと聞ばおそろしきじの聲　【元祿元年――勸進牒】

ひばり鳴く中の拍子や雉子の聲　【元祿三年――猿蓑】

東武におもむく時、友達の許へ留別

歸雁　雲に隔つ友にや雁の生わかれ　【寛文十二年――芭蕉翁全傳】

雀子　すゞめ子と聲鳴かはす鼠の巣　【元祿四年――韻塞】

桑門宗波行脚せんとて、たび立けるを送る

鳥の巣　古巣只あはれなるべき隣かな　【貞享三年――續深川】

蛙

古池や蛙飛こむ水の音　【貞享三年——春の日】

蝶

荘子畫讃

もろこしの俳諧とはん飛ぶ小蝶　【貞享元年——芭蕉句選拾遺】

野中の日影

蝶の飛ばかり野中の日かげ哉　【貞享二年——笈日記】

起よ〳〵わが友にせんぬる胡蝶　【貞享四年——己が光】

乍木亭

もの好やにほはぬ草にとまる蝶　【元禄三年——京羽二重】

てふの羽の幾度越る塀のやね　【元禄三年——芭蕉句選拾遺】

君や蝶我や荘子が夢心　【貞享年中——百歌仙】

田螺

袖よごすらん田にしの海士の隙をなみ　【貞享元年——芭蕉句選拾遺】

芳野を下る時

飯貝や雨にとまりて田螺聞　【元禄元年——もとの水】

雛

太裏雛人形天皇の御宇とかや　【延寶六年——江戸廣小路】

住る方は人に讓り、杉風が別墅に移るに

草の戸も住替る代ぞ雛の家　【元禄二年——奥の細道】

潮干

上巳

龍宮もけふの鹽路や土用干　【延寶五年——六百番發句合】

青柳の泥にしだるゝ(枝垂)潮干哉　【元祿七年――炭俵】

草餅

草庵に桃櫻あり、門人に其角嵐雪有

雨の手に桃とさくらや草の餅　【元祿五年――桃の實】

峰入

峰入や一里を(遲)くるゝ小山伏　【元祿元年――もとの水】

桃

伏見の任口上人にあふて

我衣にふしみの桃の雫せよ　【貞享二年――菊の香】

鳴海潟眺望

舟足も休む時あり濱の桃　【貞享二年――船庫集】

煩へば餅こそ喰はねもゝの花　【貞享三年――芭蕉句選拾遺】

古寺の桃に米ふむ男かな　【貞享四年――もとの水】

尙白と涙花に下る

たゞ一夜桃に宿かる木幡哉　【元祿四年――もとの水】

水口にて廿年を經て故人にあふ(逢)

櫻

命ふたつの中に活たる櫻かな　【貞享二年――菊の香】

故主君蟬吟公の庭前にて

さまざまの事おもひ出す櫻かな　【元祿元年――笈日記】

乾坤無住

芳野にてさくら見せうぞ檜の木笠　【元祿元年――笈日記】

扇にて酒くむかげやちる櫻　【元祿元年――笈日記】

山家

鶴の巢にあらしの外の櫻かな　【元祿二年――焦尾琴】

木の下に汁も膾も櫻かな　【元祿三年――ひさご】

萬乎が別墅にて

年々やさくらを肥す花の塵　【元祿四年――芭蕉翁全傳】

聲よくばうたはむものをさくらちる　【貞享元祿年中――鹿島紀行附録】

遲櫻

櫻より松は二木を三月越　【元祿二年――奥細道】

山櫻

初瀬にて人々花見けるに

うかれけり人やはつ瀨の山ざくら　【寛文七年――續山井】

雨ふりければ

草履の尻折りて歸らん山ざくら　【延寶七年――江戸蛇の鮓】

やまざくら瓦ふくもの先ふたつ　【貞享三年――笈日記】

歌よみの先達多し山ざくら　【元祿二年――もとの水】

羨

うらやましうき世の北の山櫻　【元祿四年――北の山】

山ざくら象戲の盤を片荷かな　【元祿年中――百家僊】

八重櫻

奈良七重七堂伽藍八重櫻　【貞享年中――泊船集】

糸櫻

いとざくらこや歸るさの足もつれ　【寛文七年――續山井】

姥桜

半日の雨より長し糸桜　【元禄二年――もとの水】

姥桜さくや老後の思ひ出　【寛文四年――佐夜中山】

児桜

植る事子のごとくせよ児桜　【延宝四年――續連珠】

犬桜

風吹ば尾細うなるや犬桜　【寛文七年――續山井】

桜狩

桜がりきとくや日々に五里六里　【元禄元年――笈の小文】

似合しや豆の粉めしに桜狩　【元禄三年――芭蕉句選拾遺】

花見

艶なるやつこ花見るや誰歌いさま　【貞享元年――芭蕉句選拾遺】

菜畠に花見顔なる雀かな　【貞享二年――其便】

景清も花見の座には七兵衛　【元禄元年――翁草】

路通がみちのくにおもむくに

くさまくらまことの花見しても来よ　【元禄三年――茶草子】

うへ野の花見にまかり侍りしに、人々幕打さわぎ、ものゝ音、小うたいこゑ、さまざまなりにけるかたはらの松かげをたのみて

四つ五器の揃はぬ花見心かな　【元禄六年――炭俵】

苙虎子の旅館にて

花見にとさす舟遅し柳原　【元禄七年――芭蕉翁全傳】

病起の眺望

花の雲　觀音のいらかみやりつ花の雲　【貞享三年――末若葉】

草庵

花の雲鐘は上野か淺草か　【貞享四年――續虚栗】

花の雪　先しるや宜竹が竹に花の雪　【延寶五年――江戸廣小路】

僧專吟餞別

鶴の毛のくろき衣や花の雲　【元祿六年――のぼり鶴】

花衣　きてもみよ甚べが羽折花ごろも　【寛文十二年――貝おほひ】

伊賀の國花垣の庄は、そのかみ南良の八重櫻の料に附られけるといひ傳へはんべれば

花守　一里はみな花守の子孫かや　【元祿三年――猿蓑】

大和山邊郡宇知山

花盛　うち山や外様しらずの花盛　【寛文十年――大和順禮】

さかりじや花に坐浮法師ぬめり妻　【延寶八年――東日記】

世にさかる花にも念佛申けり　【貞享元年――芭蕉句選拾遺】

芳野

花ざかり山は日ごろのあさぼらけ　【元祿元年――小文庫】

花のもとにて發句望れ侍りければ

花　花に明ぬなげきや我が歌ぶくろ　【寛文七年――續山井】

春風に吹出し笑ふ花もがな 【寛文七年―續山井】

夏ちかしその口たばへ花の風 【寛文七年―續山井】

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍 【延寶七年―江戸蛇の鮓】

上野の春興

花に醉り羽織着てかたな指す女 【延寶年中―續深川】

憂方知酒聖、貧始覺錢神

花にうき世我酒白く食黑し 【天和三年―虛栗】

大津尚白亭にて

辛崎の松は花より朧にて 【貞享二年―雜談集】

ある人の山家にいたりて

樫の木の花にかまはぬすがたかな 【貞享二年―曠野】

三月廿日即興

花咲て七日鶴見るふもと哉 【貞享三年―一橋】

物皆自得

花に遊ぶ虻な喰ひそ友雀 【貞享四年―續の原】

鸛の巢もみらるゝ花の葉越哉 【貞享四年―續虛栗】

法師の蝠取たる畫に

蝙蝠も出よ浮世の花に鳥 【貞享年中―西華集】

いざ落花眠裏のほこりはらはせん　【貞享年中――百歌仙】

古衿や花の旅出の拾ひばき　【貞享年中――芭蕉句選拾遺】

花の陰硯にかはるまる瓦　【貞享年中――もとの水】

大和國草尾村にて

花のかげ謡に似たる旅ねかな　【元祿元年――曠野】

かつらき山の麓を通り侍る比

猶見たし花に明行神の顔　【元祿元年――信夫摺】

あすは檜の木とかや、谷の老木のいへる事あり、きのふは夢と過て、あすはいまだ来らず、たゞ生前一樽のたのしびの外に、あすは〳〵と言くらして終に賢者の誓をうけぬ。

さびしさや花のあたりのあすならう　【元祿元年――陸奥衛】

宗無亭にて

花を宿にはじめ終りや二十日程　【元祿元年――初蟬】

旅立日

此ほどを花に禮いふわかれかな　【元祿元年――芭蕉句選拾遺】

龍門

龍門の花や上戸の土産にせん　【元祿元年――笈の小文】

酒のみに語らんかゝる瀧の花　【元禄元年――笈の小文】

しばらくは花の上なる月夜かな　【元禄元年――初蟬】

山行

何の木の花とはしらず匂ひ哉　【元禄元年――名月集】

紙衣のぬるとも折む雨の花　【元禄元年――一幅半】

酒呑み居たる人の繪に

月花もなくて酒のむひとり哉　【元禄二年――曠野】

鐘消て花の香は撞く夕かな　【元禄三年――都曲集】

橋木子の許にて

酒落堂の記

土手の松花や木深き殿作り　【元禄三年――芭蕉翁全傳】

四方より花吹入て鳰の海　【元禄三年――卯辰集】

嵐やま

花の山二町のぼれば大悲閣　【元禄四年――もとの水】

のみ明て花生にせん二升樽　【元禄四年――芭蕉句選拾遺】

支考東行餞別

此こゝろ推せよ花に五器一具　【元禄五年――葛の松原】

子に飽クと申す人には花もなし　【元禄五年――藪柑子】

廬山子いもさめ、畫は探雪なり。琴さ笙卜太

彼ミ讃をのぞまれしに

散花や鳥もおどろく琴の塵　【元祿六年――末若葉】

露沾公にて

西行の庵もあらむ花の庭　【元祿六年――芭蕉句選】

櫻なばなどれ寢所ごころにせぬぞ、はなにれぬは春るの鳥のこゝろよ

花にねぬ此もたぐひか鼠の巣　【元祿七年――有磯海】

茶摘

摘けんや茶を凩の秋ともしらで　【延寶八年――東日記】

躑躅

茶唐郎與

つゝじ生て其陰に干鱈裂女　【貞享二年――熱田三歌仙】

畫讃

猿山や虹吐あとの夕つゝじ　【元祿四年――もとの水】

ひとり尼わら家すげなし白つゝじ　【元祿年中――芭蕉句選拾遺】

藤

草臥て宿かる比や藤の花　【元祿三年――猿蓑】

山吹

山吹の露菜の花のかこち顔なるや　【延寶八年――東日記】

ほろほろと山吹ちるか瀧のおと　【元祿元年――曠野】

畫讃

山吹や宇治の焙爐の匂ふ時　【元祿四年――猿蓑】

山吹や笠にさすべき枝の形　【元祿四年――芭蕉翁全傳】

薊

花は賤の目にも見えけり鬼薊　【寛文七年――續山井】

菫

二度草堂をいでゝ、尾陽に來るとき箱根にて

山路來て何やらゆかしすみれ草　【貞享二年――鵲尾冠】

悼呂丸

當歸よりあはれは塚のすみれ草　【元祿五年――泊船集】

春の暮

鐘つかぬ里は何をか春の暮　【元祿二年――雪丸げ】

田家にはるのくれをわぶ

入あひのかねもきこえずはるのくれ　【元祿二年――もゝよ草】

行く春

行春にわかの浦にて追付たり　【元祿元年――笈の小文】

留別

行春や鳥啼魚の目は泪　【元祿二年――奥細道】

望湖水惜春

行春を近江の人とおしみける　【元祿四年――猿蓑】

春雜

杵折の讃

此槌のむかし椿か梅の木か　【元祿元年――芭蕉句選拾遺】

夏の部

木曾路を經て武の深川へくだるとて

四月　思ひ出す木曾や、四月の櫻がり　【貞享二年――熱田三歌仙】

更衣　ひとつ脱でうしろに負ぬ更衣　【元祿元年――曠野】

短夜　みじか夜や驛路の鈴の耳につく　【元祿四年――もとの水】

奈良にて

灌佛　灌佛の日に生れあふ鹿の子かな　【元祿元年――曠野】

桐葉のもとを別るゝとて

牡丹　牡丹蕋深く這出る蝶の別れかな　【貞享二年――ゆめのあと】

贈ル二桃隣新宅一自畫自讃

寒からぬ露やぼたんの花の蜜　【元祿七年――別座鋪】

杜若　かきつばたにたりやにたり水の影　【寛文七年――續山井】

杜若われに發句のおもひあり　【貞享二年――千鳥掛】

津の國大江の岸にやどる

杜若語るも旅のひとつかな　【元祿元年――芭蕉翁全傳】

山崎宗鑑が舊跡

有がたきすがた拜まん杜若　【元祿元年――泊船集】

手のとゞく水際うれしかきつばた　【元祿年中――芭蕉句選拾遺】

罌粟

贈杜國子

白けしに羽もぐ蝶のかた見哉　【貞享二年――罌粟合】

白芥子や時雨の花の咲つらん　【貞享三年――鵲尾冠】

首夏

海士の顔先見らるゝやけしの花　【元祿元年――罌粟合】

麥

秋や須磨すまや秋知る麥日和　【延寶年中――もとの水】

行脚の客にあふて

いざ共に穗麥喰はん草枕　【貞享二年――孤松】

甲斐にて

行駒の麥になぐさむやどりかな　【貞享二年――小文庫】

麥の穗や涙に染て啼雲雀　【元祿四年――嵯峨日記】

人々川崎まで送りて餞別の句を云、其かへし

麥の穗を便につかむ別かな　【元祿七年――有磯海】

青葉

西大寺に詣して

青葉して御目の雫拭はゞや　【元祿元年――笈日記】

日光山

あらたうと青葉若葉の日の光　【元祿二年――奥細道】

木下闇

須磨の浦一見の時

須磨寺や吹ぬ笛きく木下やみ　【元祿元年――續有磯海】

夏木立

雲岸寺佛頂禪師舊跡

木啄も庵は破らず夏木立　【元祿二年――伊達衣】

茂

幻住庵の記

先たのむ椎の木もあり夏木立　【元祿三年――猿蓑】

城主の君、日光御代を勤させ給ふに屈從ス岡

雲を根に富士は杉なりの茂かな　【延寶四年――續連珠】

田氏何某によす

篠の露袴にかけし茂かな　【元祿六年――徒の旅】

嵐山藪の茂りや風のすぢ　【元祿四年――嵯峨日記】

柚の花

落柿舍閑居

柚の花にむかしをしのぶ料理の間　【元祿四年――小文庫】

卯の花

悼二大顚和尚一

梅戀て卯の花拜むなみだかな　【貞享二年――新山家】

其角母五七日追善

卯花も母なき巢ぞ冷じき　【貞享四年――續虛栗】

卯の花やくらき柳の及ごし　【元祿七年――炭俵】

花橘　駿河路や花橘も茶の匂ひ　【元祿七年――炭俵】

二乘軒

藪椿　藪椿門はむぐら（葎）の若葉哉　【元祿元年――笈日記】

關の住、素牛何がし大垣の旅店を訪れしに、彼ふぢしろ（藤代）、みさかといひけん花は宗祇のむかしに匂ひて

藤の實　藤の實は俳諧にせん花の跡　【元祿四年――藤の實】

許六が木曾路におもむく時

椎の花　旅人のこゝろにも似よ椎の花　【元祿六年――續猿蓑】

筍　たかうなや雫もよゝの篠の露　【延寶四年――續連珠】

たけのこや稚き時の繪のすさび　【元祿四年――猿蓑】

小督やしき

うきふしや竹の子となる人の果　【元祿四年――嵯峨日記】

鰹　又越む佐夜の中山はつ松魚　【貞享三年――もとの水】

鰹賣いかなる人を醉すらん　【貞享四年――いつを昔】

鎌倉を生て出けん初鰹　【元祿五年――葛の松原】

美濃の國にて旅のさし

鮎　またゝぐひながら（長良）の川の鮎鱠　【元祿元年――己が光】

杜鵑

岩躑躅染る泪やほとゝぎす　【寛文七年――續山井】

またぬのに菜賣は來たか時鳥　【延寶五年――六百番俳諧發句合】

ほとゝぎす今は俳諧師なき世哉　【延寶年中――鹿島紀行附録】

蜀魂まねくか麥のむら尾花　【天和元年――後双六】

清く聞ん耳に香燒て子規　【天和三年――虚栗】

ほとゝぎす正月は梅の花咲り　【天和三年――虚栗】

子規なくや黑戸の濱びさし　【貞享三年――もとの水】

郭公なき〳〵飛ぞ閙はし　【貞享四年――續虚栗】

さし竿翳たる扇に

鳥さしも竿や捨けんほとゝぎす　【貞享四年――千鳥掛】

須磨の蜑の矢さきに啼や郭公　【元祿元年――泊船集】

あかし（明石）

ほとゝぎす消え行方や島ひとつ　【元祿元年――小文庫】

郭公うらみ（裏・見）の瀧のうらおもて　【元祿二年――俳諧曾我】

みちのく一見の桑門同行二人、那須の篠原をたづねて、猶殺生石みんと急ぎ侍る程に、あめ降出ければ先此處にとゞまり候

落くる（來）やたかく（高久）の宿の郭公　【元祿二年――もゝよ草】

麥や田や中にも夏はほとゝぎす　【元祿二年——もゝよ草】

野を横に馬引むけよほとゝぎす　【元祿二年——曠野】

橘やいつの野中の郭公　【元祿三年——卯辰集】

子規大竹藪をもる月夜　【元祿四年——嵯峨日記】

旅寓

京に居て京なつかしや時鳥　【元祿四年——一字幽蘭集】

ほとゝぎす啼や五尺のあやめ草　【元祿五年——伊達衣】

不卜一周忌　琴風興行

杜鵑鳴音や古き硯箱　【元祿五年——陸奥鵆】

郭公聲横たふや水の上　【元祿五年——藤の實】

烏賊賣の聲まぎらはし杜宇　【元祿七年——韻塞】

木がくれて茶摘も聞やほとゝぎす　【元祿七年——炭俵】

あけぼのやまだ朔日にほとゝぎす　【元祿年中——芭蕉句選拾遺】

閑子鳥

うき我をさびしがらせよかんこ鳥　【元祿四年——猿蓑】

行々子

能なしの睡たし我をぎやう／＼し　【元祿四年——嵯峨日記】

老鶯

鶯や竹の子藪に老を鳴　【元祿七年——別座鋪】

鵜飼

おもしろうてやがてかなしき鵜舟哉　【元祿元年——曠野】

奈良にて故人に別る

鹿袋角　二股にわかれ初けり鹿の角　【元禄元年―韻塞】

此境はひわたるほどゝいへるもこゝの事にや

蝸牛　かたつぶり角ふりわけよ須磨明石　【元禄元年―猿蓑】

蠅　うき人の旅にも習へ木曾の蠅　【元禄六年―韻塞】

蚊　わが宿は蚊のちいさきを馳走也　【元禄三年―小文庫】

蚤　不二の山蚤か茶臼の覆かな　【延宝四年―続連珠】

貧家ニ舎る

蚤虱馬の尿するまくらもと　【元禄二年―陸奥衛】

蟾　這出よかひ屋が下の蟾の聲　【元禄二年―猿蓑】

螢　愚にくらくいばらをつかむ螢哉　【延宝八年―東日記】

木曾路の旅をおもひ立て、大津にとゞまる比、先せたの螢を見に出て

此ほたる田ごとの月にくらべみん　【元禄元年―みつのかほ】

草の葉を落るより飛螢哉　【元禄三年―いつを昔】

ほたる見や船頭酔ておぼつかな　【元禄三年―猿蓑】

己が火を木々の螢や花の宿　【元禄三年―己が光】

晝見れば首筋赤きほたる哉　【元禄年中―芭蕉句選】

奥州名取の郡に入て、中將實方の塚はいづくにやと尋侍れば、道より一里半ばかり左の方、笠島といふ處に有とをしゆ。ふりつゞきたる五月雨もいとわりなく打過るに

五月

笠しまはいづこ五月のぬかり道　【元祿二年――猿蓑】

箱根の關越て

目にかゝる時や殊更五月不二　【元祿七年――芭蕉翁行狀記】

海は晴て比叡降殘す五月哉　【元祿年中――芭蕉翁發句拾遺】

五月雨

五月雨に御物遠や月のかほ　【寛文七年――續山井】

大和吉野郡見馴河

五月雨も瀨ぶみ尋ねぬ見馴河　【寛文十年――大和順禮】

五月雨や龍燈あぐる番太郎　【延寶五年――江戸新道】

髮はえて容顏青し五月雨　【貞享四年――續虛栗】

露沾公に申侍る

五月雨に鳰の浮巣を見に行ん　【貞享四年――笈日記】

五月雨にかくれぬものや瀨田の橋　【元祿元年――曠野】

須加川の驛より二里ばかりに石河の瀧といふ有よし、行てみん事を思ひ催し侍れど、この

ごろの雨にみかさはりて河を渡る事かなはず
まさいごにてやみければ

五月雨は瀧降うづむみかさ哉　【元禄二年―[illegible]】

五月雨のふり殘してや光堂　【元禄二年―奥の細道】

五月雨をあつめて早し最上川　【元禄二年―奥の細道】

日の道や葵傾く五月雨　【元禄二年―猿蓑】

さみだれや色紙へぎたる壁の跡　【元禄四年―嵯峨日記】

さみだれや蠶煩ふ桑の畑　【元禄五年―續猿蓑】

さみだれの雲吹おとせ大井川　【元禄七年―芭蕉翁眞蹟集】

梅雨

降音や耳もすうなる梅の雨　【寛文七年―續山井】

しなのゝ洗馬

つゆばれのわたくし雨や雲ちぎれ　【元禄年中―もとの水】

幟

笈も太刀も五月にかざれ紙幟　【元禄二年―奥の細道】

端午

あすは粽難波の枯葉夢なれや　【延寶五年―六百番發句合】

粽

粽結ふかた手にはさむ額髪　【元禄四年―猿蓑】

青ざし

青ざしや草餅の穂に出つらん　【天和三年―虚栗】

菖蒲

あやめ生り軒の鰯のされかうべ　【延寶六年―江戸廣小路】

俗士にさそはれ、さ月四日吉岡求馬を見るに五日はや死す。よつて追善

はなあやめ一夜にかれし求馬哉　【元祿元年――芭蕉句選拾遺】

あやめ草足にむすばん草鞋の緒　【元祿二年――鳥の道】

田植

田一枚植て立去る柳かな　【元祿二年――信夫摺】

みちのくの名所〳〵心におもひこめて、先關屋の跡なつかしきまゝに、ふる道にかゝりていまのしら河も越えぬ。頓ていはせの郡にいたりて、乍單齋等躬子の芳扉を扣。彼陽關を出て故人に逢なるべし

風流のはじめや奥の田植歌　【元祿二年――信夫摺】

いぬの夏荷兮亭

世を旅に代かく小田の行戻り　【元祿七年――ゆすりもの】

猿雖宅にて

柴つけし馬のもどりや田うへ樽　【元祿七年――芭蕉翁全傳】

岱水亭影待に

早苗

雨折〳〵思ふ事なき早苗哉　【元祿四年――木曾の谷】

しら河の關をこゆるさて、ふるみちをたどる

まゝに・

西か東か先早苗にも風の音　【元禄二年――信夫摺】

奥州今のしら河に出る

早苗にもわがいろ黒き日数哉　【元禄二年――泊船集】

文字摺石

早苗とる手もとや昔忍ぶずり　【元禄二年――小文庫】

手ばなせば夕風やどる早苗哉　【元禄年中――俳諧古選】

早乙女

五月乙女に仕方望んしのぶ摺　【元禄二年――雪丸げ】

紅の花

出羽の最上を過るとて

眉掃を面影にして紅粉の花　【元禄二年――猿蓑】

行末は誰肌ふれむ紅の花　【元禄二年――西華集】

紫陽花

子珊亭

紫陽花や藪を小庭の別坐鋪　【元禄七年――別座鋪】

紫陽花や帷子時の薄浅黄　【元禄年中――蓮実集】

撫子

正成之像　鐵肝石心此人之情

なでしこにかゝるなみだや楠の露　【元禄四年――小文庫】

河野松波宅にて

酔て寝むなでしこ咲る石の上　【元禄四年――栞集】

瓜の花　瓜の花雫いかなるわすれ草　【貞享二年――類柑子】

夕にも朝にもつかず瓜の花　【元禄三年――藤の實】

花と實と一度に瓜のさかりかな　【元禄三年――木がらし】

鶴が岡　重行亭

茄子　めづらしや山を出羽の初茄子　【元禄二年――初茄子集】

五月の雨かぜしきりにおちて、大井がは水出侍りければ、しまだにとゞめられて如舟、如竹などいふ人のもとにありて

ちさはまだ青ばながらに茄子汁　【元禄七年――芭蕉翁眞蹟集】

畫竹ヲ自ラ讃ス

竹植　ふらずとも竹植る日は蓑と笠　【元禄七年――末若葉】

己白亭

藜　やどりせむあかざの杖になる日まで　【貞享四年――笈日記】

桑の實　椹や花なき蝶の世すて酒　【天和三年――虚栗】

栗の花　世の人の見付ぬ花や軒の栗　【元禄二年――奥の細道】

道芝にやすらひて

樗の花　どむみりとあふちや雨の花曇　【元禄七年――芭蕉翁行状記】

六月十七日朝象潟雨降、夕止。舟にて潟を廻る

合歓の花　象潟や雨に西施がねぶの花　【元禄二年――雪丸げ】

白川に住、何云にゝたつかはすはしに

水鶏　關守の宿を水鶏にとはふもの　【元禄二年――伊達衣】

湖仙亭に行きて

此宿は水鶏もしらぬ扉かな　【元禄四年――笈日記】

六月　六月や峰に雲置あらし山　【元禄七年――句兄弟】

水無月　望の蝕左勝水無月の鯉　【貞享三年――蠹集】

水無月はふく病やみの暑かな　【元禄四年――芭蕉句選拾遺】

水無月や鯛はあれども塩くじら　【元禄五年――葛の松原】

千子が身まかりけるをきゝて、みのゝ国より去来がもとへ申つかはし侍りける

土用干　なき人の小袖も今や土用干　【元禄元年――猿蓑】

かけて置く帽子は智恵の土用干　【貞享年中――芭蕉句選拾遺】

暑　蛤の口しめてゐる暑かな　【貞享年中――[illegible]】

新庄風流亭

暑き日を海に入たり最上川　【元禄二年――鳥の道】

氷室　水の奥氷室尋ぬる柳かな　【元禄二年――奥細道拾遺】

月山

雲の峰

雲の峰いくつ崩れて月の山　【元祿二年――花摘】

本間氏主馬が亭にまねかれしに、太夫が家名を稱して

ひら〳〵とあぐる扇や雲の峰　【元祿四年――笈日記】

湖やあつさをおしむ雲のみね　【元祿七年――笈日記】

風薫る

南谷にて

有がたや雪を薫らす南谷　【元祿二年――小弓俳諧集】

石川丈山之像ニ謁ス

風かほる羽織は襟もつくろはず　【元祿四年――小文庫】

納涼

さゞ浪や風の薫の相拍子　【元祿七年――笈日記】

小倉山院

松杉をほめてや風のかほる音　【元祿七年――笈日記】

涼

小夜の中山にて

命なりわづかの笠の下涼み　【寛文十二年――芭蕉翁全傳】

山岸半殘が會

百里來たりほどは雲井の下涼み　【延寶四年――芭蕉翁全傳】

風瀑餞別

わすれずば佐夜の中山にて涼め　【貞享元年――丙寅紀行】

破風口に日影やよはる夕涼　【貞享三年――三日月日記】

むぐら生しげれる古跡をさして

瓜作る君かあれなど夕すゞみ　【貞享四年――栞集】

松風の落葉か風の音すゞし　【貞享年中――貞享正風句解】

河邊眺望

此あたり目に見ゆるものみなすゞし　【元祿元年――曠野後集】

尾花澤清風亭にて

すゞしさを我宿にしてねまる也　【元祿二年――初蟬】

涼しさやほの三日月の羽黒山　【元祿二年――奥細道】

江上眺望

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ　【元祿二年――繼尾集】

汐ごしや鶴はぎぬれて海涼し　【元祿二年――[illegible]】

西行櫻

夕晴や櫻にすゞむ波の花　【元祿二年――泊船集】

小鯛さす柳すゞしや海士が妻　【元祿二年――雪丸げ】

四條の川原のすゞみとて、夕月夜のころより

有明過る比まで、川中に床をならべて夜すがら

らさけのみもつくひあそぶ。おさこには羽織ながら着なして、法師、老人さもに交り、桶や、かぢやのでしこまで、いさまゝ顔にいゝしる。さすがに都いけしきなるべし。

川かぜや薄がききたる夕すゞみ　【元祿四年——己が光】

曲翠亭にあそぶさて、田家さいへる題を置て

めしあふぐ嬶が馳走や夕すゞみ　【元祿四年——笈日記】

閑居たおもひ立ける人のもさに行て

涼しさはさし圖に見ゆる住居哉　【元祿七年——笈日記】

野明亭

すゞしさを繪にうつし嵯峨の竹　【元祿七年——泊船集】

涼しさや竹握り行藪通り　【元祿七年——熊野がらす】

東武より上りて人々に對す

東路の毛髓恥かし床すゞみ　【元祿七年——はせを翁】

紫芝亭

涼しさやすぐに野松の枝の形　【元祿七年——笈日記】

皿鉢もほのかに闇の宵すゞみ　【元祿七年——其便】

清水

さゞれ蟹足はひのほる清水哉　【貞享四年——續虚栗】

芳野西行庵

硯洗ふ智恵は出たり苔清水　【元禄元年――もとの水】

岐阜山にて

城あとや古井の清水先問む　【元禄元年――笈日記】

那須温泉

湯をむすぶ誓も同じ岩清水　【元禄二年――陸奥衛】

泉

結ぶより早歯にひゞく泉哉　【元禄三年――都曲集】

汗

汗水や吉野どまりの笈由伎　【元禄年中――[illegible]】

晋の淵明をうらやむ

簟

窓形に昼寝の台や簟　【元禄五年――[illegible]】

盤斎背むきの像

團

團もてあふがん人の背つき　【貞享二年――笈日記】

扇

富士の風や扇にのせて江戸土産　【延宝四年――芭蕉翁全伝】

蚊帳

近江蚊屋汗やさゞ波夜の床　【延宝[illegible]年――[illegible]】

野明亭

心太

清瀧の水汲よせてところてん　【元禄七年――笈日記】

木下亡母追悼

道明寺

水むけて跡とひたまへ道明寺　【延宝六年――江戸廣小路】

蓮　枝なくて世にかゝはらぬ蓮哉　【元祿元年――熊野がらす】

本間主馬亭

蓮の香に目をかよはすや面の鼻　【元祿四年――笈日記】

晝顏

祖師の自畫讃

ひるがほに米つき涼むあはれ也　【貞享四年――續柵子】

寄香亭

鼓子花のみじか夜ねぶる晝間哉　【元祿三年――芭蕉翁俳諧集】

子ども等よ晝顏咲ぬ瓜むかん　【元祿五年――藤の實】

李由が許へ文のおとづれに

ひるがほに晝寢せうもの床の山　【元祿七年――韻塞】

夕顏　夕顏にみとるゝや身もうかりひよん　【寛文七年――續山井】

夕顏の白ク夜ルの後架に紙燭とりて　【天和元年――武藏曲】

夕顏や醉てかほ(顏)出す窓の穴　【元祿五年――續猿蓑】

夕顏にかんぺう(干瓢)むいてあそびけり　【元祿七年――有磯海】

水葱　なまぐさしこなぎが上の鮠の腸　【元祿六年――笈日記】

甲斐山中

葎茂る　山賤のおとがひ(頤)閉るむぐらかな　【貞享二年――續虛栗】

一つ葉　夏來てもたゞ一つ葉の一つかな　【元祿元年――曠野】

瓜

美濃に入て

山陰や身を養はん瓜畠 【元禄元年――いつた昔】

朝露によごれて凉し瓜の土 【元禄七年――續猿蓑】

人々つどひて、瓜の名所なむ、あまたいひ出たる中に

瓜の皮むいた所や蓮臺野 【元禄七年――笈日記】

眞桑瓜

闇夜きつね下はふ玉眞桑 【延寶八年――東日記】

はつ眞桑たてにやわらん輪にやせむ 【元禄二年――泊船集】

柳骨柳片荷は凉し初眞桑 【元禄七年――市の庵】

門人魂之道に

我に似な二ッにわれし眞桑瓜 【元禄七年――初蟬】

散松葉

清瀧眺望

清瀧や波に散込青松葉 【元禄七年――翁草】

蟬

梢よりあだに落けり蟬のから 【延寶五年――江戸廣小路】

杉風生夏衣いさ清らかに調じて送りけるを

いでや我よきゝぬ着たり蟬衣 【天和二年――續深川】

稲葉山

撞鐘もひゞくやうなり蟬の聲 【元禄七年――笈日記】

立石寺

しづかさや岩にしみ入蝉の聲　【元祿二年――陸奥衞】

頓て死ぬけしきは見えず蝉の聲　【元祿三年――猿蓑】

夏の月

夏の月御油より出て赤坂や　【延寶七年――向の岡】

蛸壺やはかなき夢を夏の月　【元祿元年――陸奥衞】

卯月の中比須磨の浦一見す。うしろの山は青ばうるはしく、月はいまだおぼろにて、はるの名殘もあはれながら、たゞ此浦のまことは秋なむねとするにや、心にもの〻たらぬけしきあれば

夏はあれど留守のやう也須磨の月　【元祿元年――芭蕉翁眞蹟集】

須磨

月を見ても物たらはずや須磨の夏　【元祿元年――小文庫】

手を打ば木魂に明る夏の月　【元祿四年――嵯峨日記】

夏の夜

夏の夜や崩れて明し冷し物　【元祿七年――續猿蓑】

夏の雨

楢山や柴して戻る夏の雨　【元祿年中――芭蕉句選拾遺】

那須光明寺

夏山

夏山に足駄を拜む首途かな　【元祿二年――奥細道】

なつ山や紙すく里は飯時分　【元禄年中——もとの水】

夏山や杉に夕日の一里鐘　【元禄年中——[illegible]】

落梧のぬし、たな子なきもの失へる事をいたみて

夏野　もろき人にたとへむ花も夏野哉　【元禄六年——笈日記】

陸奥に下らんとして下野の國まで旅立ける に、那須の黒羽といふ所に翠桃何某の住ける を尋て、深き野を分入ほど、道もまがふばかり 草深ければ

秣負ふ人を枝折の夏野かな　【元禄二年——奥の細道】

殺生石

夏草　石の香や夏草赤く露暑し　【元禄二年——奥の細道】

平泉古戰場

夏草や兵どもが夢のあと　【元禄二年——伊駒堂】

松島

夏の海　島々や千々にくだきて夏の海　【貞享年中——芭蕉句選拾遺】

秋鴉主人の佳景に對す

夏座敷　山も庭もうごき入るゝや夏座敷　【元禄二年——雪丸げ】

卯月のはじめ庵に歸りて、旅のつかれをはらす程に

夏衣(ころも)　なつ衣いまだ虱をとりつくさず　【元祿元年――小文庫】

夏羽織　別ればや笠手に提て夏羽織　【元祿年中――白馬集】

辨慶は夏も紙子の羽織かな　【貞享元祿年中――芭蕉翁消息集】

夏籠　しばらくは瀧に籠るや夏の始　【元祿二年――鳥の道】

世の夏や湖水に浮む浪の上　【元祿四年――芭蕉句選拾遺】

秋の部

文月　文月や六日も常の夜には似ず　【元祿二年――猿蓑】

今朝の秋　張りぬきの猫も知るべしけさの秋　【延寶年中――芭蕉句選拾遺】

初秋　鳴海眺望

はつ秋や海も青田の一みどり　【元祿元年――千鳥掛】

はつ秋やたゝみながらの蚊帳の夜着　【元祿四年――曠野後集】

來る秋　殘暑の心を

秋來にけり耳をたづねて枕の風　【延寶五年――六百番發句合】

冷(ひややか)　ひやひやと壁をふまへて晝寢哉　【元祿七年――芭蕉翁行狀記】

武藏野の草分つゝ

身にしむ

野ざらしを心に風のしむ身哉　【貞享元年——後の旅】

稲妻

いなづまを手にとる闇の紙燭哉　【貞享三年——續虚栗】

あの雲は稲妻をまつたよりかな　【元禄二年——曠野】

寄₂李下₁

ある智識ののたまはく、なま禪大疵のもとひとかや。いとありがたく覺えて

稲妻にさとらぬ人の貴さよ　【元禄四年——己が光】

本間主馬が宅に、骸骨どもの笛、鼓をかまへて能する所を畫て、舞臺の壁にかけたり。まことに生前のたはぶれ、などかこのあそびにことならんや。かの髑髏を枕として終に夢うつゝをわかたざるも、たゞこの生前をしめさるゝものなり。

稲妻や顔のところが薄の穂　【元禄七年——續猿蓑】

稲妻や闇の方行く五位の聲　【元禄七年——續猿蓑】

七夕

七夕のあはぬこゝろや雨中天　【寛文七年——續山井】

なにがし御代官に随身して、四國へ赴く人に

七夕や裸すゞいの袋たび　【元禄五年——もとの水】

星合

七夕や秋をさだむるはじめの夜 【元祿七年——有磯海】

星合の中や絶なむ此川 【延寶年中——もとの水】

合歡の木の葉ごしもいとへ星の影 【元祿三年——猿蓑】

素堂が母、七十あまりて七といふ秋七月七日に、こゝさする、萬葉の七くさをもて題さす。これに一句なる者七人、此結縁にふれて、各〻た七叟の齢にならはむ。

七株の萩の手本や星の秋 【元祿五年——韻塞】

弔初秋七日雨星　小町が歌

高水に星も旅寢や岩の上 【元祿六年——小文庫】

天の川

水學も乘物かさん天の川 【延寶六年——江戸廣小路】

いづも崎にて

あら海や佐渡によこたふ天の川 【元祿二年——勸進牒】

盆

夕風や盆提灯も糊ばなれ 【貞享三年　もとの水】

甲戌の夏、大津にはべりしを、このかみのもとより消息せられければ、舊里に歸りて盆會をいとなむとて

墓參

家はみな杖に白髮の墓參 【元祿七年——續猿蓑】

魂祭

蓮池や折らで其まゝ玉まつり　【貞享四年——千鳥掛

くま坂ざかといふ所にて

熊坂が其名やいつの玉まつり　【元禄二年——卯辰集】

鳥部山

玉祭けふも焼場のけぶり哉　【元禄三年——笈日記】

尼寿貞が身まかりけるときゝて

数ならぬ身となおもひそ玉祭り　【元禄七年——有磯海

二百十日

嵐雪が四国に渡る時

旅がらす二百十日も船支度　【貞享四年——もとの水】

扇置

松岡にて

もの書て扇引さく名残かな　【元禄二年——卯辰集】

角力

角髪やおくを田舎の相撲とり　【貞享年中——もとの水】

許六が畫に

むかしきけちゝぶ殿さへすまふとり　【元禄四年——小文庫

よし野の奥にて

勝角力いつも上手に米の飯　【元禄三年——もとの水】

露

二見の浦にて

露とく／＼こゝろみにうき世すゝがばや　【貞享元年——枯尾花】

硯かとひろふやくぼき石の露　【元祿元年――芭蕉句選】

畫讃

西行の草鞋もかゝれ松の露　【元祿元年――笈日記】

一草庵にて

白露のさびしき味をわするゝな　【元祿二年――俳諧世說】

於二君崎一

松なれや霧えいさらえいと引ほどに　【延寶年中――翁草】

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き　【貞享元年――初蟬】

士峰

雲霧の暫時百景をつくしけり　【貞享年中――芭蕉句選拾遺】

野分

猪も共に吹るゝ野分かな　【貞享三年――篇突】

吹飛す石は淺間の野分かな　【元祿元年――更科紀行】

秋風

秋風の鑓戸の口やとがりごゑ　【寬文七年――續山井】

枝もろし緋唐紙やぶる秋の風　【延寶五年――六百番發句合】

蜘何と音を何と鳴く秋の風　【延寶七年――向の岡】

猿を聞人捨子に秋の風いかに　【貞享元年――甲子吟行】

不破にて

義朝の心に似たり秋の風　【貞享元年――伊勢紀行】

秋風や藪もはたけもふはの關　【貞享元年――小文庫】

一笑を弔ふ

塚もうごけ我泣聲は秋の風　【元祿二年――雜談集】

那谷の觀音にて

赤々と日はつれなくもあきの風　【元祿二年――卯辰集】

石山のいしより白し秋の風　【元祿二年――鳥の道】

加賀山中、桃夭に

桃の木に其葉ちらすな秋の風　【元祿二年――泊船集】

いせの國中村といふ所にて

秋の風伊勢の墓原猶すごし（凄）　【元祿二年――花摘】

野水が旅行を送りて

見送りのうしろや寂し秋の風　【元祿四年――みつのかほ】

秋風のふけども青し栗のいが（毬）　【元祿四年――木がらし】

座右の銘

人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ

物いへば唇寒し秋の風　【元祿四年――小文庫】

牛部屋に蚊の聲よはし（弱）秋の風　【元祿四年――小文庫】

悼二松倉嵐蘭一

秋風に折て悲しき桑の杖　【元祿六年――末若葉】

散柳

柳陰軒

ちる柳あるじも我も鐘をきく　【元祿二年――俳諧世説】

全昌寺にて

庭掃て出ばや寺に散る柳　【元祿二年――鳥の道】

木槿

花むくげはだか童のかざし哉　【延寶八年――東日記】

馬上吟

道のべの木槿は馬にくはれけり　【貞享元年――甲子吟行】

桐一葉

よるべをいつ一葉に虫の旅ねして　【延寶八年――東日記】

我宿のさびしさおもへ桐一葉　【元祿年中――百歌仙】

朝顔

和二角蓼螢句一

あさがほに我は食くふをとこ哉　【天和二年――虚栗】

當麻寺にて

僧朝顔幾死かへる法の松　【貞享元年――甲子吟行】

あさがほの花に鳴行蚊のよはり　【貞享二年――芭蕉句選拾遺】

嵐雪がゑがきしに、さんのぞみければ

蕣は下手のかくさへ哀也　【貞享四年――いつを昔】

朝がほは酒盛しらぬさかり哉　【元禄元年―曠野】

閉關

朝がほや晝は錠おろす門の垣　【元禄五年―炭俵】

深川閉關の比

蕣や是も又我が友ならず　【元禄五年―今日の昔】

てふと云ける女、あが名に發句せよと云て白きぬ出しけるに書付はべる。

蘭の香やてふの翅にたき物す　【貞享元年―芭蕉翁眞蹟集】

蘭

伊勢守栄院

門に入ばそてつ（蘇鐵）に蘭のにほひ哉　【元禄元年―笈日記】

畫讃

秋海棠

秋海棠西瓜の色に咲にけり　【元禄五年―正風彦根體】

女郎花

見るに我もおれる（下（折））斗ぞ女郎花　【延寳四年―續連珠】

玉川の水におぼれそ女郎花　【貞享四年―芭蕉句選】

ひよろひよろと猶露けしや女郎花　【元禄元年―曠野】

芭蕉

茅舍の感

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉　【天和元年―武藏曲】

此寺は庭一盃のばせを哉　【元禄五年―俳諧曾我】

荻　萩

書讀

鶴啼やその聲に芭蕉やれぬべし　【元祿年中——雪丸げ】

荻の聲こや秋風の口うつし　【寛文七年——續山井】

寢たる萩や容顏無禮花の顏　【寛文七年——續山井】

萩原や一夜はやどせ山の犬　【貞享四年——續虚栗】

一家に遊女も寢たり萩と月　【元祿二年——鳥の道】

ぬれて行や人もおかしき雨の萩　【元祿二年——印の竿】

等栽ますほの小貝ひろはむと種の濱に舟のり出たり。法花寺にあがりて酒のむ。

浪の間や小がひにまじる萩の塵　【元祿二年——類柑子】

いろの濱に誘引れて

小萩ちれますほの小貝小盃　【元祿二年——薦獅子】

白露もこぼさぬ萩のうねりかな　【元祿四年——小文庫】

支虎子の宅

風色やしどろに植る庭の萩　【元祿七年——芭蕉翁全傳】

芒

毒海長老、我草の戸にして身まかり侍るを葬りて

何ごともまねき果たるすゝき哉　【天和貞享年中——續深川】

角觝草

道ほそし相撲とり草の花の露　【元祿七年――笈日記】

蔦

廬牧亭

蔦植て竹四五本のあらし哉　【貞享元年――笈日記】

蔦の葉はむかしめきたる紅葉哉　【貞享三年――信夫摺】

棧やいのちをからむつたかつら　【元祿元年――更科紀行】

梧うごく秋の終りやつたの霜　【元祿四年――小文庫】

鬼灯

鬼灯は實も葉もからも紅葉哉　【元祿四年――小文庫】

草の花

草いろ〱各花の手柄哉　【元祿元年――笈日記】

入二醫家一

藥欄にいづれの花を草まくら　【元祿二年――みとせ草】

瓢

仲秋中一、鳴海此處に遊んで

夕がほや秋はいろ〱のふくべ哉　【元祿五年――千鳥掛】

葱

吉野天皇の御廟にまうでゝ

御廟千とせしのぶは何を葱草　【貞享元年――孤松】

唐辛子

三州鳥巣にあそびて

かくさぬぞ宿は菜汁に唐辛子　【元祿元年――猿耳集】

木曾塚の舊草にありて、敲戸の人々に對す

草の戸をしれや穂蓼に唐がらし　【元祿三年――笈日記】

大風のあしたも赤し唐辛子　【元祿三年――もとの水】

青くても有べきものを唐辛子　【元祿五年――深川集】

綿

わた弓や琵琶になぐさむ竹のおく　【貞享元年――初蟬】

冬瓜

冬瓜やたがひにかはる顔の形　【元祿七年――西華集】

芋

芋あらふ女西行ならば歌よまむ　【貞享元年――甲子吟行】

悼ム仙風ニ

手向けり芋は蓮に似たるとて　【貞享四年――續深川】

虫

夜ル竊ニ虫は月下の栗を穿つ　【延寶八年――東日記】

盆すぎて宵闇くらし虫の聲　【元祿四年――小文庫】

加賀の小松と云處、多田の神社の寶物として、實盛が菊からくさのかぶと、同じく錦のきれ有、遠き事ながらまのあたりあはれにおぼえて

むざんやな甲の下のきりぐす　【元祿二年――猿蓑】

蟋蟀

白髪ぬく枕の下やきりぐす　【元祿三年――江鮭子】

淋しさや釘にかけたるきりぐす　【元祿四年――草庵集】

しづかさやゑかゝる壁のきりぐす　【元祿四年――芭蕉翁消息集】

床に來て鼾に入やきりぐす　【元祿六年――木がらし】

猪の床にもいるやきり／＼す　【元禄七年——芭蕉句選、遺】

海士の家は小海老に交るいとゞ哉　【元禄四年——猿蓑】

蜻蛉

蜻蛉やとりつきかねし草の上　【元禄二年——笈日記】

蓑虫

聽閑

蓑虫の音を聞に來よ草の庵　【貞享四年——續虚栗】

鶉

桐の木に鶉鳴なる塀の内　【元禄三年——猿蓑】

鷹の目もいまや暮ぬと啼鶉　【元禄四年——小文庫】

鳴鹿

田中の法藏寺にて

刈あとや早稲かた／＼の鴫の聲　【貞享四年——笈日記】

女夫鹿や毛に毛がそろふて毛むつかし　【寛文十二年——貝おほひ】

武藏野や一寸ほどな鹿の聲　【延寶四年——當世男】

奈良にて

びいと啼尻聲悲し夜の鹿　【元禄七年——笈日記】

木啄

木啄のはしらをたゝく住居かな　【元禄年中——芭蕉句選拾遺】

八朔

八朔や天の橋立たばね熨斗　【延寶年中——もとの水】

入麪の下燒立る夜寒かな　【元禄四年——己が光】

秋の暮

愚案ずるに冥途もかくや秋の暮　【延寶七年——向の岡】

かれ枝に烏のとまりたるや秋の暮　【延寶八年——東日記】

死もせぬ旅寢のはてよ秋の暮　【貞享元年――小文庫】

六介・六兵衞の二人に芭蕉庵を訪れて、故郷の安否を聞く。

いく千里へだつおもひや秋の暮　【貞享年中――もとの水】

船頭の尻聲さむし秋の暮　【元祿元年――もとの水】

雲竹自畫像

こちらむけ我もさびしき秋の暮　【元祿三年――笈日記】

あきのくれ客か亭主か中はしら　【元祿五年――風俗文選大註解】

所思

此道や行人なしに秋の暮　【元祿七年――其便】

落し水

みちのくにて

くりからや三度起ても落水　【元祿二年――もとの水】

初月

初月や向ひに家のなき所　【元祿年中――俳諧古選】

三日月

三ケ月や朝顏の夕べつぼむらん　【天和二年――虛栗】

明行や二十七夜も三日の月　【貞享二年――孤松】

何事の見たてにも似ず三かの月　【元祿元年――曠野】

三日月や地は朧なる蕎麥畠　【元祿五年――三日月日記】

九月三日嵐蘭詣墓

みしやその七日は墓の三日の月　【元禄六年——笈日記】

名月

武藏守泰時。仁愛を先とし、政以去慾爲先。

名月の出るや五十一ヶ條　【元禄元年——庭竈】

草庵の月見

名月や池をめぐつて夜もすがら　【貞享四年——續虚栗】

名月となる迄月のはし居哉　【貞享年中——眞蹟】

敦賀にて

名月や北國日和定めなき　【元祿二年——陸奥衞】

名月や兒たち並ぶ堂の椽　【元祿四年——初蟬】

名月や海にむかへば七小町　【元祿四年——初蟬】

名月はふたつ有ても瀨田の月　【元祿四年——西の雲】

名月や我家へ戻る門徒坊　【元祿四年——もとの水】

名月や門にさし來る潮がしら　【元祿五年——名月集】

良夜吟引付

夏かけて名月あつきすゞみ哉　【元祿六年——萩の露】

名月の花かと見えて棉畠　【元祿七年——續猿蓑】

名月に麓の霧や田のくもり　【元祿七年——續猿蓑】

重々と名月の夜や茶臼山　【元祿七年——さいつころ】

今日の月

名月。や鶴脛高き遠干潟　【元祿年中――あとの水】

名月やわれを筆架のかげぼうし　【元祿年中――あとの水】

たんたすめ住ば都ぞけふの月　【寛文七年――續山井】

蒼海の浪酒臭しけふの月　【延寶六年――坂東太郎】

木を伐て本口見るやけふの月　【延寶七年――江戸廣小路】

武藏野と笠の間なれ今日の月　【貞享年中――蕨讀】

三井寺の門たゝかばやけふの月　【元祿四年――雜談集】

月見

けふの今宵寢る時もなき月見哉　【延寶四年――續連珠】

雲折々人をやすむる月見哉　【貞享二年――春の日】

見る影やまだ片なりも宵月夜　【貞享二年――鳥の道】

座頭かと人に見られて月見哉　【貞享三年――木がらし】

鹿島に詣ける比、宿根本寺

寺にねて誠がほなる月見哉　【貞享四年――續虛栗】

賤のこやいね摺かけて月をみる　【貞享四年――鹿島紀行】

淺水のはしを渡る時、俗あさうづといふ。清少納言の橋はと有、一條、あさむつのとかける所也。

あさむつや月見の旅の明はなれ　【元祿二年――其袋】

月見せよ玉江の芦を刈ぬ先　【元祿二年――[illegible]の跋】

古寺翫月

月見する座にうつくしき顔もなし　【元祿四年――夕顏の歌】

十五夜

米くるゝ友を今宵の月の客　【元祿四年――笈日記】

十六夜

いざよひもまださらしなの郡哉　【元祿元年――小文庫】

十六夜や海老煮る程の宵の闇　【元祿四年――笈日記】

堅田旣望

安々と出ていざよふ月の雲　【元祿四年――旣望集】

十六夜はわづかに闇の初哉　【元祿六年――續猿蓑】

月

月ぞしるべこなたへいらせ月の宿　【寛文四年――佐夜中山】

影は天の下てる姫か月のかほ　【寛文七年――續山井】

かつら男すまずなりけり雨の月　【延寶二年――如意寶珠】

詠るや江戸にはまれな山の月　【延寶四年――芭蕉翁全傳】

今宵の月磨出せ人見出雲守　【延寶五年――六百番發句合】

實や月間口千金の通り町　【延寶六年――江戸通り町】

月をわび身をわび拙きをわびて、わぶと答へんとすれど問ふ人もなし。猶わび〳〵て

侘テすめ月侘齋がなら(奈良)茶歌　【天和元年——武藏曲】

武藏野の月の若ばえや松島種　【天和二年——松島眺望集】

移ス二芭蕉ヲ一詞

ばせを葉をはしらに懸ん庵の月　【天和三年——芭蕉句選拾遺】

馬に寢て殘夢月遠し茶のけぶり　【貞享元年——甲子吟行】

みそか(晦日)月なし千とせの杉を抱あらし(嵐)　【貞享元年——甲子吟行】

わが宿は四角な影を窓の月　【貞享元年——小文庫】

川舟やよい茶よい酒よい月夜　【貞享三年——もとの水】

月はや(早)し梢は雨を持ながら　【貞享四年——鹿島紀行】

田家

かり(刈)かけし田づらの鶴や里の秋　【貞享四年——鹿島紀行】

玉川にて

飛鮎も月の光りのあまり哉　【貞享年中——眞蹟】

玉川や此上あらば月日貝　【貞享年中——眞蹟】

武藏野

むさし野や入方も見へず枝の月　【貞享年中——眞蹟】

あの中に蒔繪書たし宿の月　【元祿元年——木曾の谿】

俤や姨ひとり泣月の友　【元祿元年——笈　草】

善光寺

月影や四門四宗もたゞ一つ　【元祿元年——更科紀行】

悼二天宥法印一

其玉や羽黒にかへす法の月　【元祿二年——南谷集】

湯尾

月に名を包みかねてやいもの神　【元祿二年——晝寢の種】

燧山

義仲の寢覺の山か月悲し　【元祿元年——晝寢の種】

濱

月のみか雨に相撲もなかりけり　【元祿二年——晝寢の種】

元祿二年つるがの湊に月を見て、氣比の明神に詣、遊行上人の古例をきく。

月清し遊行のもてる砂の上　【元祿二年——猿蓑】

中秋の夜は敦賀にさまりぬ。雨降ければ

月いづこ鐘はしづみて海の底　【元祿二年——草庵集】

戸をひらけばにしに山あり、伊吹といふ。花にもよらず、雪にもよらず、只これ孤山の德あり。

其まゝに月もたのまじいぶき山　【元祿二年――笈日記】

正秀亭初會興行の時

月代や膝に手を置宵の宿　【元祿三年――笈日記】

水油なくて寢る夜や窓の月　【元祿四年――もとの水】

柴の庵ときけばいやしき名なれども世に
このもしき物にぞありける

此歌は東山に住みける僧を尋ねて、西行のよませ給ふよし山家集にのせられたり。いかなる住居にやと先その坊なつかしければ

柴の戸の月や其まゝあみだ坊　【元祿四年――小文庫】

九たび起ても月の七ツ哉　【元祿四年――雜談集】

月やその鉢の木の日のした面　【元祿六年――翁草】

深川の末、五本松といふ所に船をさして

川上とこの川しもや月の友　【元祿六年――續猿蓑】

東順傳

入月の跡は机の四隅哉　【元祿六年――句兄弟】

八月十五日

今宵誰よし野の月も十六里　【元祿七年――笈日記】

畦止亭即興、月下送レ兒

月澄や狐こはがる兒の供　【元祿七年――其便】

其柳亭

秋もはやはらつく雨に月の形　【元祿七年――笈日記】

後の月

芭蕉庵十三夜

木曾の瘦もまだなをらぬに後の月　【元祿元年――笈日記】

後の名月、石山にまうでゝ

橋桁のしのぶは月の名殘哉　【元祿四年――己が光】

駒迎

町醫者や屋敷かたより駒迎　【延寶三年――五十番發句合】

棧や先おもひいづ駒むかへ　【元祿元年――更科紀行】

砧

針立や肩に槌うつから衣　【延寶三年――江戸新道】

よしのにて

きぬたうちて我にきかせよ坊が妻　【貞享元年――曠野】

聲澄て北斗にひゞく砧かな　【元祿三年――都曲集】

猿引は猿の小袖をきぬたかな　【元祿四年――猿舞師】

近江路を通りける比、日野山のほとりにて、胡麻といふものに上の絹をさられて

剝れたる身には砧のひゞき哉　【元祿年中――ばせを盥】

藥堀　醫師何某が像
村雨を背中におふて柴胡堀　【貞享四年――もとの水】

芙蓉　畫讃
枝ぶりの日にゝかはる芙蓉哉　【元祿二年――後れ馳】

霧雨の空を芙蓉の天氣哉　【元祿四年――[illegible]寒】

雁來紅
雞頭や雁の來る時なをあかし　【元祿六年――初蟬】

芦
芦の穗やかしらを摑む羅生門　【元祿四年――鹿島紀行附錄】

蜀黍
蜀黍や軒端の荻のとりちがへ　【延寶五年――江戸廣小路】

粟　杉の竹葉軒といふ草庵をたづねて
粟稗にまづしくもなし草の庵　【元祿元年――笈日記】

賀知足新宅
よき家や雀よろこぶ背戸の粟　【元祿元年――千鳥掛】

蕎麥　いせの斗從に山家をとはれて
蕎麥はまだ花でもてなす山路かな　【元祿七年――續猿蓑】

初茸
初茸やまだ日數へぬ秋の露　【元祿五年――小文庫】

松茸
松茸やかぶれた程は松の形　【元祿五年――俳諧曾我】

まつ茸やしらぬ木の葉のへばりつく　【元祿七年――續猿蓑】

茸狩
茸狩やあぶなきことに夕時雨　【元祿二年――芭蕉句選拾遺】

早稲
越中に入て
早稲の香や分入右は有磯海　【元禄二年――卯辰集】

稲刈
人に米をもらひて
よの中は稲かる頃か草の庵　【貞享四年――續深川】

落穂
いたゞいておち穂拾む關の前　【元禄年中――ゑとの水】

案山子
ちかづきに成つて別るゝかゝし哉　【元禄年中――芭蕉句選拾遺】

稲雀
稲すゞめ茶の木畠や逃どころ　【元禄三年――笈日記】

燕歸る
花に来て花野に歸る燕哉　【元禄年中――芭蕉句選拾遺】

渡り鳥
めにかゝる雲やしばしの渡り鳥　【元禄七年――芭蕉句選拾遺】

四十雀
老の名の有ともしらで四十雀　【元禄六年――續猿蓑】

雁
堅田にて
病雁の夜寒に落て旅ね哉　【元禄三年――猿蓑】

鰍
山中十景。高瀬漁火
いさり火にかじかや浪の下むせび　【元禄二年――卯辰集】

江鮭
江鮭ありもやすらむ富士の湖　【元禄年中――芭蕉句選拾遺】

舛市
住吉の市に立て
舛買て分別かはる月見哉　【元禄七年――芭蕉翁行状記】

御遷宮
たふとさに皆おしあひぬ御遷宮　【元禄二年――花摘】

秋の霜 手にとらば消んなみだぞあつき秋の霜 【貞享元年――和漢文藻】

白髮吟

菊

重陽

盃の下ゆく菊や朽木盆 【延寶四年――當世男】

盃や山路の菊と是を干す 【延寶七年――坂東太郎】

痩ながらわりなき菊のつぼみ哉 貞享元年――續虚栗】

草庵雨

起あがる菊ほのか也水のあと 【貞享四年――續虚栗】

秋をへて蝶もなめるや菊の露 貞享二年――笈日記】

蓮池の主翁、又菊を愛す。きのふは龍山の宴をひらき、けふはその酒のあまりをすゝ(侑)めて、狂吟のたはぶれとなす。なを明年誰かすこ(健)やかならん事を

いざよひのいづれか今朝に殘る菊 【元祿元年――笈日記】

加州山中重陽

山中や菊は手を(折)らぬ湯の匂ひ 【元祿二年――[illegible] 塞】

左柳亭

はやくさ(咲)け九日もちかし菊の花 【元祿二年――笈日記】

木因亭

かくれ家や月と菊とに田三反　【元禄二年―笈日記】

きくの菊落て拾へばぬかごかな　【元禄二年―小文庫】

田家に宿して

稲こきの姥もめでたし菊の花　【元禄四年―笈日記】

片田何某が亭にて

蝶も來て酢を吸ふ菊のすあへ哉　【元禄四年―[illegible]突】

菊の後大根の外更になし　【元禄四年―陸奥衛】

旅行

草の戸に日暮てくれし菊の酒　【元禄四年―きさらぎ】

見所のあれや野分の後の菊　【元禄四年―陸奥衛】

琴箱や古ものの店の背戸の菊　【元禄四年―泊船集】

朝茶のむ僧しづかなり菊の花　【元禄四年―ばせを翁】

岱水亭

影まちや菊の香のする豆腐ぐし　【元禄六年―杉丸太】

菊の花咲や石屋の石の間　【元禄六年―藤の實】

元禄癸酉之初冬九日素堂菊園之遊

重陽の宴を神無月のけふにまうけ侍る事は、

その比は花いまだめぐみもやらず、菊花ひらく時則重陽といへるこゝろにより、かつは展重陽のためしなきにしもあらねば、なを秋菊を詠じて人々なすゝめられける事になりぬ。

菊の香や庭に切たる履の底　元祿六年―續猿蓑

九月九日

菊の香や奈良には古き佛達　元祿七年―笈日記

菊の香や奈良は幾代の男ぶり　〔元祿七年―芭蕉翁眞蹟集〕

くらがり峠にて

菊の香にくらがり登る節句哉　元祿七年―菊の香

生玉の邊より日をくらして

菊に出て奈良と難波は宵月夜　〔元祿七年―笈日記〕

園女が風雅の美を

白菊の目にたてゝ見る塵もなし　元祿七年―笈日記

畫讃

折ふしは酢になる菊のさかな哉　〔元祿年中―鳩の水〕

紅葉

色付や豆腐に落て薄紅葉　〔延寶七年―芭蕉杉風兩吟百韻〕

百景や杉の木の間のいろみ草　〔元祿年中―柴橋〕

木の實

恕水子別墅にて即興

こもり居て木の實草のみひろはゞや　【元祿二年——後の旅】

榎の實

榎の實ちるむくの羽音や朝あらし　【元祿六年——笈日記】

橡

木曾の橡うき世の人のみやげかな　【元祿元年——更科紀行】

橙

橙や伊勢の白子の店さらし　【元祿三年——もとの水】

柿

李由、去來の二人に

蒟蒻と柿とうれしき草の庵　【元祿三年——もとの水】

祖父親孫のさかえや柿みかん　【元祿四年——駒さらへ】

里ふりて柿の木もたぬ家もなし　【元祿七年——芭蕉翁全傳】

澁柿や一口はくふ猿のつら　【元祿年中——芭蕉句選拾遺】

行秋

八月九日望翠宅にて

行秋や身に引まとふ三布蒲團　【元祿元年——韻塞】

いせのせんぐうにまうで侍りしふれの中にて

蛤のふた見にわかれ行秋ぞ　【元祿二年——後の旅】

行秋の猶たのもしや青蜜柑　【元祿五年——浮世の北】

ゆく秋や手をひろげたる栗のいが　【元祿七年——續猿蓑】

暮秋

懷二老杜一

風髭ヲ吹て暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ　【天和二年——虛栗】

大阪茶屋四郎左衛門亭にて秋なな(惜)しむ。

松風や軒をめぐつて秋くれぬ
【元祿七年――木がらし】

秋の空

蝶鳥のしらぬ花あり秋のそら
【元祿年中――芭蕉句選拾遺】

幻住庵

秋の山

旅くせや寢冷煩ふ秋のやま
【元祿四年――もとの水】

秋の夜

秋の夜を打崩したる咄かな
【元祿七年――笈日記】

秋の雜

雨の日や世間の秋を堺町
【延寶六年――江戸廣小路】

見渡せば詠れば見れば須磨の秋
【天和二年――芝肴】

秋十とせ却て江を指古鄕
【貞享元年――甲子吟行】

神前

この松のみばへ(實生)せし代や神の秋
貞享四年――鹿島紀行

田家

かりかけした(田面)づらのつる(鶴)やさとの秋
貞享四年――鹿島紀行

さらでさへ秋よ野寺の一ッ鐘
【貞享年中――もとの水】

(武藏)國分寺懷古

伽藍なし秋のみ深き木々の奥
【貞享年中――眞蹟】

むかふが丘

むかふから暮て見せけり丘の秋
【貞享年中――眞蹟】

秋すゞし手毎にむけや瓜茄子　元祿二年―――鳥の道

越前いろの濱にて

さびしさや須磨にかちたるうらの秋　元祿二年―――初蟬

胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉　元祿二年―――己が光

秋のいろぬかみそつぼもなかりけり　元祿四年―――炸原

女木澤桐奚興行

秋に添て行ばや末は小松川　元祿五年―――陸奧鵆

旅懷

此秋を何で年よる雲に鳥　元祿七年―――芭蕉翁行狀記

秋深き隣は何をする人ぞ　元祿七年―――笈日記

なに喰て小家は秋の柳陰　元祿七年―――茶草子

冬の部

小春

月の鏡小春にみるや目正月　寛文六年―――續山井

初時雨

人の方へ初て行て

初しぐれ初の字を我時雨かな　貞享四年―――芭蕉選拾遺

十月十一日餞別會

旅人と我名よばれん初霽　貞享四年―――續虛栗

時雨

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　【元祿二年――猿蓑】

十月三日許六亭興行

けふばかり人も年よれ初時雨　【元祿五年――韻塞】

行雲や犬の迯ぼえむらしぐれ　【延寶五年――江戸新道】

一時雨礫や降て小石川　【延寶六年――江戸廣小路】

いづく霽傘を手にさげて歸る僧　【延寶八年――東日記】

旅亭桐葉のぬし、心ざしあさからざりければしばらくとゞまらんとせしほどに

此海に草鞋すてん笠しぐれ　【貞享元年――皺筥物語】

草枕犬も時雨るゝか夜のこゑ　【貞享元年――曠野】

しぐれ行や船の舳綱にとり付て　【貞享三年――柱暦】

途中時雨

笠もなき我を時雨るゝか何と〱　【貞享四年――熱田三歌仙】

鷄の聲にしぐるゝ牛屋かな　【貞享四年――もとの水】

一尾根はしぐるゝ雲かふじのゆき　【貞享四年――泊船集】

途中吟

山城へ井出の駕籠かるしぐれ哉　【貞享四年――焦尾琴】

配力亭にて

人々をしぐれよ宿は寒くとも　【元祿二年――芭蕉翁全傳】

舊里の道すがら

しぐるゝや田のあらかぶの黑む程　【元祿三年――泊船集】

悪津の草庵より武江におもむくとて、島田の驛塚本が家にいたりて

宿かりて名をなのらする時雨哉　【元祿三年――續猿蓑】

馬かたはしらじしぐれの大井川　【元祿三年――泊船集】

矩外がもとに冬籠して

つくり木の庭をいさめる時雨かな　【元祿四年――芭蕉句拾遺】

新藁の出そめて早き時雨かな　【元祿七年――芭蕉翁全傳】

木枯

笠は長途の雨にほころび、紙衣はとまり〳〵の嵐にもめたり。侘つくしたるわび人、我さへあはれにおぼえける。むかし狂歌の才士此國にたどりし事を不圖おもひ出て申侍る。

狂句木がらしの身は竹齋に似たる哉　【貞享元年――冬の日】

竹畫讃

木枯や竹にかくれてしづまりぬ　【貞享二年――鳥の道】

こがらしや頰腫痛む人の顏　【元祿三年――猿蓑】

菅沼耕月亭にて

京にあきて此木がらしや冬住居　【元祿四年――きれ〳〵打込】

鳳來寺に參籠して

木枯に岩吹とがる杉間かな　【元祿四年――笈日記】

羽紅のもとよりこしわたをつくりてをくられしに

初霜

初霜や菊冷え初る腰の綿　【元祿四年――荒小田】

十二月九日はつ雪降のよろこび

初雪

初雪や幸ヒ庵ンに罷有ル　【貞享三年――續虚栗】

初雪や水仙の葉の撓むまで　【貞享三年――陸奥衛】

大佛榮興をよろこびて

はつ雪やいつ大佛のはしら立　【元祿二年――笈日記】

旅行

はつ雪や聖小僧の笈の色　【元祿三年――勸進牒】

深川大橋半かゝりける比

はつ雪やかけかゝりたる橋の上　【元祿五年――其便】

初氷

芹燒やすそわの田井の初氷　【元祿六年――其便】

冬籠

冬ごもり又よりそはむ此はしら　【元祿元年――曠野】

しばし、かくれゐける人に申遣す

先祝へ梅を心の冬籠り　【元禄元年――曠野】

金屏の松の古さよ冬籠　【元禄二年――炭俵】

千川亭

折々に伊吹を見てや冬籠　【元禄四年――笈日記】

贈ニ酒堂一

湖水の磯を這出たる田螺一疋、蘆間の蟹のはさみをおそれよ。牛にも馬にも踏るゝ事なかれ。

難波津や田螺の蓋も冬ごもり　【元禄六年――市の庵】

爐開

爐開や左官老行鬢の霜　【元禄五年――陸奥衛】

支梁亭口切

口切

口切に堺の庭ぞなつかしき　【元禄五年――深川集】

神の留守

留守のまにあれたる神の落葉哉　【元禄元年――小文庫】

お留守居に頼みおくべし玉津島　【元禄年中――いと切齒】

神の旅

都出て神も旅寝の日数哉　【元禄四年――己が光】

夷講

ゑびす講酢賣に袴着せにける　【元禄四年――續猿蓑】

神無月廿日深川にて即興

振賣の雁あはれ也ゑびす講　【元祿六年――炭俵】

御命講

御命講や油のやうな酒五升　【元祿元年――小文庫】

菊鷄頭きり盡しけり御命講　【元祿五年――忘れ梅】

冬枯

冬がれや世は一色に風の音　【元祿年中――もとの水】

月の澤と聞え侍る明照寺に、羈旅の心を澄して

散紅葉

たふとがる涙やそめてちる紅葉　【元祿四年――笈日記】

多度の權現を過るとて

落葉

宮人よわが名をちらせ落葉川　【貞享四年――笈日記】

宿二明照寺一

當寺此平田に地をうつされてより、已に百年におよぶとかや。御堂奉賀の辭に曰、竹樹密に土石老たりと、誠に木立物ふりて、殊勝に覺え侍りければ

百年の氣色を庭の落葉哉　【元祿四年――韻塞】

皂角子の實は其まゝの落葉哉　【元祿年中――續寒菊】

こゝのとせの春秋、市中に住侘て、居を深川の邊りに移す。長安は古來名利の地、空手にし

て益なきものは行路難しと云けむ人のかし
こく覺へ侍るは、この身のさぼしき故にや。

木の葉

しばの戸にちやをこの葉かくあらし哉　〔天和元年——續深川〕

大津にて

三尺の山も嵐の木の葉哉　〔元祿三年——己が光〕

歸り花

浪の花と雪もや水のかへり花　〔延寶二年——如意寶珠〕

耕雪子別墅即時

凩に匂ひやつけし歸花　〔元祿四年——後の旅〕

麥蒔

逢杜國

麥はえてよき隱家や畠村　〔貞享四年——笈日記〕

蕎麥刈

刈あとやものに紛ぬ蕎麥の莖　〔元祿年中——芭蕉句選拾遺〕

大根

口上に書おとしけり土大根　〔元祿三年——もとの水〕

大根引といふ事を

鞍壺に小坊主乘や大根引　〔元祿六年——炭俵〕

菜根を喫して終日丈夫に談話す。

武士の大根からきはなしかな　〔元祿六年——金蘭集〕

草枯

霜の後、花をさひて

花みな枯れて哀をこぼす草の種　〔貞享二年——泊船集〕

枯荵
神前の茶店にて
しのぶさへ枯て餅買ふ舍かな　【貞享元年――皺筥物語】

枯尾花
行脚したかさね(重)て東武にかへりて
ともかくもならでや雪のかれ尾花　【元祿四年――北の山】
古益亭

冬牡丹
熱田、梅人亭に宿して
冬牡丹千鳥か雪のほとゝぎす　【貞享元年――笈日記】

水仙
水仙や白き障子のとも移り　【元祿四年――笈日記】
少年の才たよみして、是た桃先・桃後と名づけて
其にほひ桃より白し水仙花　【元祿四年――笈日記】

寒菊
寒菊や粉糠のかゝる臼の端　【元祿六年――炭俵】

冬菜
さし籠る葎の友やふゆなうり　【貞享年中――鹿島紀行附錄】

枯野
旅に病で夢は枯野をかけ廻る　【元祿七年――枯尾花】

霜
霜枯に咲は辛氣の花野哉　【寛文六年――續山井】
霜をき(着)て衣かたしく捨子哉　【延寶七年――坂東太郎】
貧山の釜霜に啼聲寒し　【天和元年――虛栗】
土屋四友子た送りて、かまくら(鎌倉)までまかるとて
霜をふむでちむ(踏)ば引まで送けり　【天和三年――茶草子】

雪(ゆき)

から〳〵と折ふしすごし竹の霜　【貞享二年――芭蕉句選拾遺】

人のいほりをたづねて

さればこそあれたき儘の霜の宿　【貞享四年――曠野】

病中

薬のむさらでも霜の枕かな　【貞享四年――笈日記】

葛の葉のおもて也けりけさの霜　【元祿四年――雜談集】

新大橋初めてかゝりし時

有難やいたゞいて踏む橋の霜　【元祿六年――芭蕉句選】

ひつぢ(穭)田に霜の花見る朝(あした)かな　【元祿年中――もとの水】

夜すがらや竹こほらするけさのしも　【元祿年中――芭蕉翁眞蹟集】

時雨をやもどかしがりて松の雪　【寛文六年――續山井】

子におくれたる人の本(もと)にて

しほれふすや世はさかさま(逆)の雪の竹　【寛文六年――續山井】

霰まじる帷子(かたびら)雪はこもんかな　【寛文六年――續山井】

今朝の雪根深(ねぶか)を園の枝折哉　【延寶七年――向の岡】

富士の雪盧生(ろせい)が夢をつがせけり　【延寶五年――六百番發句合】

雪の朝獨り干鮭(からざけ)を噛(か)み得たり　【延寶八年――東日記】

ゆきの竹笛つくるべう節あらん　【延寶年中――もとの水】

夜着は重し呉天に雪を見るあらん　【天和三年――虚栗】

抱月亭

市人にいで是うらん雪の笠　【貞享元年――笈日記】

馬をさへ詠る雪の朝かな　【貞享元年――皺筥物語】

深川雪夜

酒のめばいとゞ寢られぬ夜の雪　【貞享二年――勸進牒】

伊羅古に行道、越人醉て馬に乘る

ゆきや砂むまより落て酒の醉　【貞享四年――合歡のいびき】

杜國亭にて、中あしき人の事取つくろひて

雪と雪今宵師走の名月か　【貞享四年――笈日記】

箱根こす人もあるらし今朝の雪　【貞享四年――たねだはら】

京まではまだなかぞらや雪の雲　【貞享四年――千鳥掛】

御修覆ありし社頭に再拜せんとまうでたまひて

磨直す鏡も清し雪の花　【貞享四年――皺筥物語】

信濃路を過るに

雪ちるや穗屋の薄の刈殘し　【元祿元年――猿蓑】

雪の中に兎の皮の髭作れ　【元祿二年――いつを昔】

尾張十藏越人と號す、越路の人なればなり。

粟飯柴薪のたよりに市中に隠れ、二日つとめて二日遊び、三日つとめて三日あそぶ。性酒をこのみ酔和する時は平家をうたふ。これ我友なり。

二人見し雪は今年もふりけるか　〔元禄二年――庭竈〕

大津にて智月といふ尼のすみかを尋て、をのが音の少将とかや、老の後此あたりちかくかくれ侍しといふをおもひ出て

少将の尼のはなしや志賀の雪　〔元禄三年――芭蕉句選拾遺〕

湖水眺望

比良みかみ雪指しわたせ鷺の橋　〔元禄三年――翁草〕

大雪や婆々ひとり住藪の家　〔元禄三年――もとの水〕

耕月亭

雪をまつ上戸の顔やいなびかり　〔元禄四年――茶草子〕

ひごろにくき烏も雪の朝哉　〔元禄四年――薦獅子〕

小町画讃

たふとさや雪ふらぬ日も蓑と笠　〔元禄四年――己が光〕

草庵に士あり

木枕に油ぬぐふやよるの雪　〔元祿四年――もとの水〕

寒山自畫自讚

庭はきて雪をわするゝはゝきかな　〔元祿五年――篇突〕

竹ノ讚

たはみては雪まつ竹のけしきかな　〔元祿六年――笈日記〕

雪見

對ニス友人ニ

いざ行む雪見にころぶ處まで　〔貞享四年――曠野〕

雪丸げ

君火をたけよきもの見せむ雪まるげ　〔貞享三年――續虛栗〕

氷

深川冬夜の感

櫓の聲波を打て腸氷ル夜や涙　〔天和元年――武藏曲〕

茅舍買フ氷ヲ

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり　〔天和二年――虛栗〕

訪フ杜國ヲ紀行

すくみ行や馬上に氷る影法師　〔貞享四年――笈日記〕

范蠡が趙南の心をいへる山家集の題に習ふ。

一露もこぼさぬ菊の氷かな　〔元祿六年――續猿蓑〕

寒夜ノ吟

瓶わるゝ夜の氷のねざめ哉　〔元祿六年――筑藻集〕

霰

ふたゝび芭蕉庵を造りいとなみて

あられきくやこの身はもとのふる柏　〔天和三年――續深川〕

如行亭

琵琶行の夜や三味線の音霰　〔貞享元年――後の旅〕

いざ子供はしりありかん玉霰　〔元祿二年――木葉集〕

石山の石にたばしるあられ哉　〔元祿二年――麻生〕

いかめしき音や霰の檜木笠　〔元祿二年――陸奥衛〕

膳所の草庵を人々とひけるに

霰せば網代の氷魚を煮て出さん　〔元祿二年――花摘〕

雑水に琵琶きく軒の霰哉　〔元祿三年――有磯海〕

いさみたつ鷹引据る霰哉　〔元祿六年――續深川〕

元起和尚より涌（酒カ）をたまはりけるかへしにたてまつりける

水寒く寝入かねたるかもめ哉　〔貞享三年――栞集〕

寒

旅宿

ごを焼て手拭あぶる寒さ哉　〔貞享四年――笈日記〕

よし田に泊る夜

寒けれど二人旅寝ぞたのもしき　〔貞享四年――合歡いびき〕

仙化が父追善

袖のいろよごれて寒しこい鼠　【元祿四年——芭蕉句選拾遺】

鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店　【元祿五年——薦獅子】

葱白くあらひたてたるさむさ哉　【元祿五年——韻塞】

火燵

硯このむ奈良の法師が炬燵かな　【貞享三年——もとの水】

きりぎりすわすれ音に啼く火燵かな　【元祿三年——芭蕉翁全傳】

住つかぬ旅のこゝろや置火燵　【元祿三年——猿蓑】

圍爐裏

五つ六つ茶の子にならぶ圍爐裏哉　【元祿元年——茶草子】

火桶

あらがねの土よりおこる火桶かな　【貞享三年——もとの水】

古き代をしのびて

霜の後撫子咲る火桶かな　【元祿三年——勸進牒】

炭

白炭や彼うら島が老のはて　【延寶五年——六百番發句合】

小野炭や手習ふ人の灰せゝり　【延寶七年——向の岡】

けし炭に薪わる音かをのゝおく　【天和元年——續深川】

ある人の追善に

埋火

埋火もきゆやなみだの烹る音　【元祿元年——曠野】

埋火や壁には客の影ぼうし　【元祿六年——續猿蓑】

深川八貧　米買

頭巾(づきん)　米かひに雪の袋やなげ頭巾　【貞享三年——泊船集】

紙衣(かみこ)　ためつけて雪見にまかる紙子哉　【貞享四年——曠野後集】

蒲團(ふとん)　李下(りか)が妻の追悼
被(かづ)ぎ伏(ふす)蒲團や寒き夜やすごき　【貞享三年——鹿島紀行附録】

夜着(よぎ)　鳳來寺(ほうらいじ)
夜着ひとつ祈り出して旅ねかな　【元祿四年——茶草子】
夜着に寢てかり(雁)がね寒し旅の宿　【元祿年中——芭蕉句拾】

衾(ふすま)　たのむぞよ寢酒なき夜の紙衾　【元祿五年——其帰木綿】

鉢叩(はちたゝき)　長嘯(ちやうせう)の墓もめぐるかはち敲　【元祿二年——錦繡段】
納豆(なつと)きる音しばし待て鉢扣　【元祿五年——韻塞】

乾鮭(からざけ)　乾鮭や何がし殿は毛唐人　【天和貞享年中——もとの水】

河豚(ふぐ)　あら何ともなきの(昨)ふ(日)は過(すぎ)てふぐと汁　【延寶五年——江戸三吟】
ふぐ汁や鯛もあるのに無分別　【貞享二年——芭蕉句選拾遺】
桑名(くはな)にあそびて、あつた(熱田)にいたる。
あそび來ぬ鮑(ふぐ)釣(つり)かねて七里迄　【貞享元年——皺筥物語】
家にふるき奴僕(ぬぼく)ありて、かたく聖(ひじり)の教(をしへ)を守る。
兄弟のくす(醫)し(師)憎むや河豚汁　【元祿四年——もとの水】

海鼠(なまこ)　生(いき)ながらひとつに氷る海鼠哉　【元祿六年——木曾の谿】

鴨

尾張國あつた（熱田）にまかりける比、人々師走の海みんとて舟さしけるに

海くれて鴨の聲ほのかに白し　〔貞享元年――皺筥物語〕

氅（ケゴロモ）につゝみてぬくし鴨の足　〔元祿六年――續猿蓑〕

千鳥

星崎の闇を見よとや啼千鳥　〔貞享四年――千鳥掛〕

闇の夜や巣をまどはしてなく鵆　〔元祿四年――猿蓑〕

鷹

いらこ崎を見渡して

鷹ひとつ見つけて嬉し伊良古崎　〔貞享四年――笈日記〕

杜國が不幸を伊良古崎にたづねて、鷹のこゑを折ふし聞て

夢よりも現の鷹ぞ頼母しき　〔貞享四年――鵲尾冠〕

師走

月白き師走は子路が寢覺かな　〔貞享二年――泊船集〕

十二月九日一井亭

たび寢よし宿は師走の夕月夜　〔貞享四年――熱田三歌仙〕

何に此師走の市へ行鳥　〔元祿二年――伊駒堂〕

かくれけり師走の海の鸊（かいつぶり）　〔元祿三年――新花鳥〕

寒

乾鮭も空也の痩も寒の内　〔元祿三年――陸奥鵆〕

月花の愚に針たてん寒の入　〔元祿五年――薦獅子〕

雁さはぐ鳥羽の田づらや寒の雨　【元禄六年――西華集】

早咲

三州ほびといふ所にて

梅つばき早咲ほめむ保美の里　【貞享四年――猫耳集】

探梅

防川亭

香を探る梅に家見る軒端哉　【貞享四年――笈日記】

十二月廿日

打よりて花入探れ梅つばき　【元禄五年――句兄弟】

節季候

果の朔日の朝から

節季候の來れば風雅も師走哉　【元禄三年――勸進牒】

忘年書懷　素堂亭

節季候を雀のわらふ出立かな　【元禄四年――深川集】

厄拂

うとまるゝ身は梶原か厄拂　【元禄年中――射水川】

煤掃

すゝはきや暮ゆく宿の高鼾　【貞享三年――小文庫】

煤掃の説

旅ねしてみしやうき世のすゝ拂　【貞享四年――曠野】

路通曰　つくしのかたにまかりし比、頭陀に入し五器一具、難波の旅亭に捨しを破らず、七とせの後湖上の粟津迄送りければ、是をさへ過しかた

餅搗　餅花　衣配　古暦　年忘

をおもひ出して哀なりしまゝに、翁へ此事物
語し侍りければ

これや世の煤にそまらぬ古合子　【元祿三年――勸進牒】

煤はきは己が棚つる大工かな　【元祿六年――炭俵】

旅行

煤掃は杉の木の間の嵐哉　【元祿四年――己が光】

有明も三十日にちかし餅の音　【元祿六年――笈日記】

餅花やかざしにさせる嫁が君　【天和―享年中――齒がため】

松島や雪の白地の衣くばり　【延寶年中――もとの水】

うか〳〵と年よる人やふる暦　【貞享三年――もとの水】

年わすれ三人寄て喧嘩かな　【貞享三年――もとの水】

御靈別當景桃丸興行

半日は神を友にやとし忘　【元祿三年――物の親】

乙州が新宅にて

人に家を買はせて我は年忘　【元祿三年――猿蓑】

魚鳥の心はしらずとしわすれ　【元祿四年――小文庫】

此わすれ流るゝ年の淀ならん　【元祿四年――葛の松原】

せつかれて年忘するきげんかな　【元祿五年――小文庫】

年取

海ある寺にたばねたる柴を繪書て

須磨の浦の年取ものや柴一把　【天和 享年中――茶草子】

年の市

年の市線香買に出ばやな　【貞享三年――續虚栗】

一休が土器買む年の市　【元祿年中――もとの水】

年の暮

成にけり成にけり迄年の暮　【延寶五年――六百番發句合】

わすれ草菜飯に摘ん年の暮　【延寶七年――江戸蛇の鮓】

爰に草鞋を解、かしこに杖を捨て、旅寐ながらに年のくれければ

年くれぬ笠着て草鞋はきながら　【貞享元年――今日の昔】

乞て喰ひ貰ふて喰ひ、さすがに年の暮ければ

めでたき人の數にも入らん老の暮　【貞享二年――陸奥鵆】

月雪とのさばりけらし年の昏　【貞享三年――續虚栗】

ふる里や臍の緒になくとしの暮　【貞享四年――曠野】

みなおがめ二見の七五三を年の暮　【元祿元年――金蘭集】

蛤の生るかひあれとしの暮　【元祿五年――萬獅子】

盗人に逢た夜もあり年の暮　【元祿六年――續猿蓑】

分別の底たゝきけり年の暮　【元祿六年――翁草】

古法眼出どころあはれ年の暮　【元祿年中――みつのかほ】

行年

ゆく年や薬に見たき梅のはな　〔元祿四年――もとの水〕

冬の雨

面白し雪にやならん冬の雨　〔貞享四年――千鳥掛〕

鳴海、出羽守氏雲宅にて

冬雜

塩にしていざことづてん都鳥　〔延寶六年――武藏十歌仙〕

石かれて水しぼめるや冬もなし　〔延寶八年――東日記〕

大通庵の主、道圓居士芳名をきくことさしたしきまゝに、まみえむことをちぎりて、つひにその日をまたず、初冬一夜の霜と降ぬ。けふは猶ほひさめぐりにあたれりといふをきゝて

其かたち見ばや枯木の枝の長　〔元祿元年――小文庫〕

冬庭や月もいとなるむしの吟　〔元祿二年――芭蕉翁全傳〕

ほね柴やかくと見るより蝶の殼　〔元祿三年――もとの水〕

雜の部

手づから雨のわび笠をはりて

世にふるもさらに宗祇のやどり哉　〔天和二年――虚栗〕

もの一つ我が世はかろきひさごかな　〔貞享元年――桼集〕

かちならば杖つき坂を落馬哉　〔貞享四年――笈日記〕

朝よさを誰まつしまぞかたごゝろ　【元和元年——桃ねぶり】

語られぬ湯殿にぬらす袂かな　【元祿二年——奥細道】

海にふる雨や戀しきうき身宿　【元祿二年——俳諧古事談】

三聖人圖

月花の是やまことの主（あるじ）達（たち）　【元祿六年——笈日記】

畫讚

物ほしや袋の中の月と花　【元祿七年——旅袋】

塔山（たふざん）產業の爲に江府に居る事三月、予はかれが朝寢をおごろかせば、彼は己が宵なたゝきて方寸（はうすん）なくみしり、寢食なさもにしたる人に似たり。けふや故鄕に歸るな見おくらむと、杖な曳（ひき）てよろぼひ出たるに、秋は名殘もさもにな惜しまれて

むさし野やさはるものなき君が笠　【貞享元祿年中——續寒菊】

芭蕉俳句異同考

芭蕉俳句異同考

春の部

元日に田毎の日こそ戀しけれ　【泊船集・[illegible]句選】
元日は田毎の日こそ戀しけれ　【[illegible]】

年々や猿に着せたる猿の面　【翁草・陸奥】
元日や狙にきせたる狙の面　【[illegible]柑子】

似合しや新年古き米五升　【庭竈】
年立や新年ふるし米五升　【泊船集】
とし立や新年ふくべ米五升　【芭蕉句選】
春立や新年ふるき米五升　【三冊子・芭蕉翁發句集】

誰やらが形に似たりけさの春　【續虚栗】
誰やらが姿に似たりけさの春　【泊船集・芭蕉句選】

菰を着て主人います花の春　【[illegible]】
主人か菰着ています花の春　【[illegible]】
何人か菰着ています花の春　【[illegible]】

發句なり芭蕉桃青宿の春　【[illegible]】
發句なりはせを桃青宿の春　【[illegible]】

餅を夢に折結しだの草枕　【東日記】
餅を夢に折詰齒朶の草枕　【[illegible]】

誰聟ぞ餅に齒朶をふうしの年　【一幅半】
誰聟ぞ齒朶に餅おふうしの年　【甲子吟行・[illegible]集】

大津繪の筆のはじめは何佛　【[illegible]・泊船集】
大津繪の筆のはじめやなに佛　【[illegible]・小文庫】

凍とけて筆に汲干す清水哉　【小文庫・泊船集】
露凍て筆に汲干ス清水哉　【熱田三歌仙・みつのかほ】

大比叡やしの字を引て一霞【六百番發句合・江戸廣小路】

大日枝やしを引捨し一かすみ【芭蕉句選・芭蕉翁發句評題林】

春なれや名もなき山の朝がすみ【小文庫・芭蕉句選】

春なれや名もなき山の薄霞【甲子吟行】

かれ芝やまだかげろふの一二寸【曠野・泊船集】

枯芝ややゝかげろふの一二寸【笈の小文】

丈六に陽炎高し石の上【小文庫・泊船集】

丈六のかげろふ高し石の上【笈日記・三册子】

陽炎に俤つくれ石の上【三册子】

かげろふや柴胡の糸の薄曇【猿蓑・泊船集】

かげろふや柴胡の原のうす曇【芭蕉句選・芭蕉翁發句集】

笠寺やもらぬ崫も春の雨【千鳥掛・熱田三歌仙】

笠寺や窟ももらず五月雨【芭蕉句選拾遺】

はる雨の木下にかゝる雫かな【小文庫・泊船集】

春雨のこしたにつたふ清水哉【笈の小文】

古畑や薺摘行男ども【桂曆・栞集】

古畑に薺摘行男ども【俳諧曾我】

山寺のかなしさつげよ野老ほり【笈日記・泊船集】

此山のかなしさ告よ野老堀【笈の小文】

衰や歯に喰あてし海苔の砂【己が光】

おとろひや歯に喰あてし海苔の砂【今日の昔・芭蕉句選】

おとろへや歯に喰あてし海苔の砂【芭蕉翁發句集】

噛當る身のおとろへや苔の砂【西の雲】

蛎よりは海苔をば老の賣もせで【續虛栗・芭蕉句選】

蠣よりも海苔をば老の賣もせで【芭蕉翁發句集】

またもとハやぶの中なるむめの花【栞集・一葉集】
忘るなよ藪の中なる梅の花【初蟬・泊船集】

さとのこよ梅おりのこせうしのむち【栞集】
子共らよ梅折のこせ牛の策【芭蕉句選】
里の子等梅折のこせ牛の鞭【芭蕉翁發句集】

るすにきて梅さへよそのかきほかな【栞集】
留主に來て梅さへ餘所の垣根哉【芭蕉句選拾遺・芭蕉翁發句集】

のうれんの奥物ゆかし北の梅【菊の塵・後日記】
暖簾の奥ものふかし北の梅【芭蕉翁發句集】

御子良子の一もとゆかし梅の花【[illegible]・笈の小文】
梅がゝや一もとゆかし子良の舘【[illegible]題名家發句集】

はれ物に柳のさはるしなへかな【小文庫・泊船集】
はれ物にさはる柳のしなへかな【有磯海・芭蕉句選】

まとふどな犬ふみつけて猫の戀【茶草子・一葉集】
まとふとな犬ふみつけて猫の戀【芭蕉翁[illegible]】
まだふ人な犬ふみつけて猫の戀【菊の道】

藻にすだく白魚やとらば消ぬべき【東日記・一葉集】
藻にすだく白魚も取ば消ぬべき【芭蕉翁發句集】

鶯や餅に糞する椽のさき【葛の松原・[illegible]】
鶯や餅に屎する椽の上【末若葉】

永き日を囀たらぬひばりかな【[illegible]・笈日記】
ながき日も囀りたらぬ雲雀かな【芭蕉翁發句集】

雲雀より上にやすらふ峠かな【曠野・卯辰集】
雲雀より空にやすらふ峠哉【笈の小文】

ねはん會や皺手合する珠數の音【續猿蓑・泊船集】

灌佛や皺手合する珠數の音　【三册子・芭蕉翁發句集】

水とりや氷の僧の沓のおと　【小文庫・甲子吟行】

水とりやこもりの僧の沓の音　【芭蕉翁繪詞傳・芭蕉翁發句集】

咲みだす桃の中よりはつ櫻　【小文庫・芭蕉翁發句集】

最中の桃の中よりはつざくら　【泊船集・芭蕉句選】

こまかなる雨や二葉の茄子種　【芭蕉翁全傳・芭蕉翁發句集】

春雨や二葉にもえる茄子種　【芭蕉翁發句引題集・一葉集】

種芋や花のさかりを賣ありく　【己か光・泊船集】

芋種や花の盛を賣ありく　【今日の昔】

芋種や花のさかりに賣ありく　【一葉集】

物の名を先とふ荻の若葉哉　【笈日記・泊船集】

物の名を先とふ蘆のわか葉哉　【笈の小文】

雲とへだつ友にや雁の生わかれ　【芭蕉翁全傳】

雲とへだつ友かや雁の活わかれ　【もとの水・芭蕉翁繪詞傳】

太裏雛人形天皇の御宇とかや　【江戸廣小路】

内裡雛人形天皇の御宇とかよ　【芭蕉句選・芭蕉翁發句集】

古池や蛙飛こむ水の音　【蛙合・春の日】

山吹や蛙飛込水の音　【晒山集】

草の戸も住替る代ぞひなの家　【奥細道・芭蕉句選】

草の戸も住かはる世や雛の家　【笈日記・泊船集】

草の戸も住かゆる代ぞ雛の家　【芭蕉翁發句集】

わすらへば餅をも食はず桃の花　【桃盗人】

煩へば餅こそ喰はねものはな　【芭蕉句選拾遺・芭蕉翁發句集】

命二ツの中に活たる櫻哉　【甲子吟行・熱田三歌仙】

命二ツ中に活たるさくら哉　【菊の香】

鶴の巣にあらしの外の櫻かな【蕉尾琴・芭蕉句選】
鶴の巣にあらしの外のさくらかな【[illegible]尾花・芭蕉發句集】

景清も花見の座には七兵衛【翁草・江戸菅笠】
景清も花見の座では七兵衛【きれぐ打込】

花に遊ぶ虻なくらひそ友すゞめ【蒼か原・芭蕉句選】
花を吸ふ虻なくらひそ友すゞめ【笈日記・泊船集】

扇にて酒くむかげやちる櫻【笈の小文・芭蕉句選】
扇子にて酒くむ花の木陰かな【明すらへ】

四方より花吹入れてにほの波【白馬集】
四方より花吹入れて鳰の海【卯辰集・芭蕉句選】
四方より花ふき入て湖の波【今日昔 芭蕉翁發句集】
四方より花吹入て湖の海【泊船集】

觀音のいらか見やりつ花の雲【末若葉・泊船集】
觀音の甍見やりつ花の雲【芭蕉翁發句集】

しばらくは花の上なる月夜かな【初蟬・蕉の名殘】
しばらくは花の色なる月夜かな【芭蕉句選】

先しるや宜竹が竹に花の雪【江戸蛇之鮓・一葉集】
先しるや義竹が竹にはなの雪【六番船發句合】

から崎の松は花よりおぼろにて【曠野・甲子吟行】
辛崎の松は花よりおぼろ哉【暁山集】

花咲て七日鶴見る麓哉【[illegible]・花集】
花ざかり七日鶴見る麓哉【[illegible]友】
鶴下りて七日花見るふもとかな【芭蕉句選】

さびしさや花のあたりのあすならふ【笈日記・[illegible]】
日は花に暮てさびしやあすならふ【笈の小文】

何の木の華ともしらず匂ひかな　【名月集・泊船集】

何の木の花とはしらず匂哉　【笈の小文】

何の木の花ともしれぬ匂哉　【反古衾】

山路來て何やらゆかしすみれ草　【笈日記・鵲尾冠】

何とはなしに何やら床し菫草　【皺筥物語・熱田三歌仙】

夏の部

ひとつ脱でうしろにおひぬ更衣　【曠野・笈の小文】

一つ脱でせなに負けり衣がへ　【小文庫】

牡丹蘂ふかく分出る蜂の名殘かな　【甲子吟行・芭蕉句選】

牡丹蘂分て這出る蜂の名殘哉　【皺筥物語・熱田三歌仙】

牡丹しべを分て這出る蜂の名殘哉　【笈日記】

牡丹蘂深く這出る蜂の別れ哉　【ゆめのあと】

麥の穗を便につかむ別かな　【有磯海・芭蕉翁行状記】

麥の穗を力につかむ別かな　【陸奥衛・芭蕉句選】

青葉して御目の雫拭ばや　【笈日記・泊船集】

若葉して御めの雫ぬぐはばや　【笈の小文】

あらたうと青葉若葉の日の光　【奥細道・芭蕉句選】

たふとさや青葉若葉の日の光　【初蟬】

あらたふと木の下闇も日の光　【もゝよ草】

須磨寺に吹ぬ笛きく木下やみ　【續有磯海・芭蕉句選】

須磨寺やふかぬ笛きく木下やみ　【笈の小文】

柚の花にむかしを忍ぶ料理の間　【小文庫・泊船集】

柚の花やむかしのばん料理の間　【嵯峨日記】

柚の花にむかし忍ばん料理の間　【芭蕉翁發句集】

藪椿門はむぐらの若葉哉　【笈日記・泊船集】

いも植て門は葎のわか葉哉　【笈の小文】

旅人のこゝろにも似よ椎の花　【續猿蓑・芭蕉句選】
椎の花のこゝろにも似よ木曾の旅　【韻塞】

鎌倉を生て出けむ初鰹　【葛の松原・陸奥衛】
かまくらは活て出けんはつ堅魚　【類柑子】

またゝぐひ長良の川の鮎鱠　【己が光・泊船集】
又やたぐひ長良の川の鮎なます　【笈日記】

ほとゝぎす今は俳諧師なき世哉　【鹿島紀行附録】
時鳥いまだ俳諧師なき世かな　【芭蕉翁發句題葉集 一葉集】

ほとゝぎす正月は梅の花咲り　【虚栗・芭蕉翁眞蹟集】
郭公正月は梅の花ざかり　【泊船集・芭蕉句選】

京に居て京なつかしや時鳥　【一字幽蘭集・曠野後集】
京にても京なつかしやほとゝぎす　【己が光・陸奥衛】

郭公聲横たふや水の上　【藤の實・泊船集】
鶗鴂聲や横ふ水の上　【陸奥衛】
一聲の江に横たふやほとゝぎす　【笈日記・芭蕉句選】

ほとゝぎす大竹藪をもる月ぞ　【小文庫】
子規大竹藪をもる月夜　【嵯峨日記 芭蕉翁發句集】
ほとゝぎす大竹原を漏る月夜　【笈日記・泊船集】

麥や田や中にも夏はほとゝぎす　【もゝよ草】
田や麥や中にも夏の時鳥　【雪丸げ】
田や麥や中にも市の時鳥　【一葉集 芭蕉翁發句題葉集】

おもしろうてやがて悲しき鵜舟哉　【曠野・笈日記】
おもしろうやがてかなしき鵜舟かな　【初蟬】
面白うてやがてながるゝ鵜ふねかな　【菊の香】

わが宿は蚊のちいさきを馳走也　【小文庫】

我がやどは蚊のちいさきを馳走哉　【芭蕉句選・俳諧世説】
わが宿は蚊の小さきも馳走哉　【芭蕉翁發句集】
ほたる見や船頭醉ておぼつかな　【猿蓑・芭蕉句選】
ほたる火や船頭醉ておぼつかな　【泊船集】
笠じまはいづこ五月のぬかり道　【奥細道】
笠島やいづこ五月のぬかり道　【猿蓑・卯辰集】
海は晴て比叡降殘す五月哉　【芭蕉翁發句拾遺】
海ははれてひえ降の寺五月かな　【一葉集・芭蕉翁發句題集】
蚤虱馬の尿する枕もと　【陸奥鵆・奥細道】
蚤虱馬の尿こく枕もと　【今日の昔】
蚤虱馬のはりこくまくらもと　【泊船集】
不二の山蚤が茶臼の覆かな　【鏡[illegible]】
山のすがた蚤(蠶カ)が茶臼の覆ひかな　【芭蕉翁全傳・芭蕉句選拾遺】

さみだれを集てはやし最上川　【鳥の道・奥細道】
五月雨をあつめて涼し最上川　【伊達衣・雪丸げ】
五月雨や色紙へぎたる壁の跡　【雜談集・嵯峨日記】
五月雨や色紙まくれし壁の跡　【笈日記】
さみだれや蠶煩ふ桑の畑　【續猿蓑・小文庫】
五月雨や蠶わづらふ桑はたけ　【韻塞】
さみだれの雲吹おとせ大井川　【笈日記・芭蕉翁眞蹟集】
さみだれの空吹おとせ大井川　【有磯海・泊船集】
五月雨の雲吹落す大井川　【芭蕉翁行状記】
あやめ生り軒の鰯のされかうべ　【江戸廣小路・芭蕉翁發句集】
あやめ生けり軒の鰯のしやれ頭　【みつのかほ】
あやめ生い去年の鰯の髑髏　【はせを盥】

あやめ草足にむすばむ草鞋の緒　【鳥の道・奥細道】
あやめ草紐にむすばん草鞋の緒　【泊船集】

早苗とる手もとや昔忍ぶ摺　【小文庫・奥細道】
早苗つかむ手もとや昔しのぶ摺　【卯辰集・花の雲】

あきはまだ青葉ながらになすび汁　【笈日記・芭蕉翁句解集】
苔はまだ青葉ながらや茄子汁　【芭蕉翁発句集】

世の人の見付ぬ花や軒の栗　【奥細道・鳥の道】
隠れ家や目だゝぬ花を軒の栗　【伊達衣・雪まるけ】

關守の宿を水鶏にとはふもの　【伊達衣】
關守の宿を水鶏に問ふものを　【雪丸け・芭蕉翁発句集】

昔は猶腹病煩の暑さ哉　【瓜作・百歌仙】
みな月はふく病やみの暑さかな　【芭蕉句選拾遺・芭蕉翁発句集】

象潟や雨に西施がねぶの花　【奥細道】
象潟の雨や西施が合歓の花　【継尾集・泊船集】

暑き日を海に入たり最上川　【奥細道・鳥の道】
すゞしさや海に入たる最上川　【雪まるけ・奥の枝折】

風かほる羽織は襟もつくろはず　【小文庫・泊船集】
風薫るはをりや襟もつくろはず　【芭蕉句選】

有難や雪をかほらす南谷　【奥細道・三日月俳諧集】
有難や雪をかをらす南谷　【花摘・菊谷集】

此あたり目に見ゆるものみなすゞし　【蕉翁遺稿・芭蕉翁発句集】
此あたり目に見ゆるものは皆涼し　【笈日記・今日の昔】

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ　【継尾集・泊船集】
あつみ山や福浦かけてゆふ涼み　【鳥の道】
あつみ山吹浦かけて夕すゞみ　【[illegible]集・類柑子】

汐越や鶴はぎぬれて海涼し　【奥細道・續柑子】

腰長や鶴脛ぬれて海涼し　【泊船集】

破風口に日影やよはる夕涼　【三日月日記・芭蕉句選】

唐破風の入日や薄き夕涼み　【泊船集】

唐破風や日影かげろふ夕すゞみ　【芭蕉句解】

小鯛さす柳すゞしや海士が妻　【雪まろげ】

小鯛さす柳すゞしや蜑が軒　【芭蕉翁發句集・一葉集】

涼しさはさし圖に見ゆる住居哉　【笈日記・泊船集】

涼しさを飛彈のたくみが指圖かな　【陸奥衛】

涼しさを指圖にも知住居哉　【渚草日記】

窓形に晝寢の臺や簟　【續猿蓑・泊船集】

窓形に晝寢のござやたかむしろ　【芭蕉翁發句集】

團もてあふがん人の背つき　【笈日記・泊船集】

團扇とつてあふがん人の後ろ向　【三冊子・芭蕉翁發句集】

蓮の香に目をかよはすや面の鼻　【笈日記・泊船集】

蓮の香や目より潜て面ンの鼻　【翁草】

清瀧の水汲よせてところてん　【笈日記・一葉集】

清瀧の水くませてやところてん　【泊船集】

晝顔に米搗涼むあはれ也　【續の原・續柑子】

ゆふがほに米やすむ哀なり　【桑集】

夕顔にみとるゝや身もうかりひよん　【續山井・一葉集】

夕顔の花に心やうかりひよん　【耳無草】

初眞桑たてにやわらん輪に切ん　【泊船集】

初眞桑四にや斷ン輪に切ン　【しはふくかぜ】

【四】初眞桑四にやわらん輪にやせん　【芭蕉翁發句集・芭蕉句選】

朝露によごれて涼し瓜の土【續猿蓑・泊船集】
朝露によごれて涼し瓜の泥【木がらし・笈日記】

閑さや岩にしみ入蟬の聲【奥細道・陸奥鵆】
さびしさや岩にしみ込蟬のこゑ【初蟬・泊船集】
淋しさの岩にしみ込せみの聲【木がらし】

馬ぼく／＼我を絵に見る夏野哉【水の友・芭蕉翁發句集】
馬ぼく／＼我を絵に見る枯野哉【泊船集】
夏馬の遅行我を絵に見る心かな【一葉集】

夏來てもたゞ一つ葉のひとつかな【曠野・一葉集】
夏來てもたゞひとつ葉の一葉哉【笈日記・泊船集】

夏の月御油より出て赤坂や【向の岡・涼み石】
夏の月御油より出て赤坂か【芭蕉翁發句集】

いでや我よききぬ着たり蟬衣【[illegible]】
行や我よき布着たり蟬衣【芭蕉句選】

清瀧や浪にちり込青松葉【笈日記・翁草】
清瀧や波に塵なき夏の月【陸奥鵆】
大井川浪に塵なし夏の月【笈日記・三冊子】

月を見ても物たらはずや須磨の夏【小文庫・花の雲】
月見ても物たらはずや須磨の夏【笈の小文】

月はあれど留主のやう也須磨の夏【笈の小文】
夏はあれど留守のやう也須磨の月【芭蕉翁眞蹟集】

世の夏や湖水に疊む浪の上【芭蕉句選拾遺】
世の夏や湖水にうかぶ浪の上【芭蕉翁發句集・一葉集】

櫻より松は二木を三月越【奥細道・一葉集】
櫻より松は二木を三月越【烏の道】

秋の部

はつ秋や海も青田の一みどり 【千鳥掛・芭蕉翁發句集】
鳴海かたや青田にかはる一みどり 【鹿島紀行踏餘】
初秋や海も青田の一くもり 【金蘭集】
初秋は海やら田やらみどりかな 【金蘭集】

秋風のふけども青し栗のいが 【木から、・泊船集】
はつ嵐ふけども青し栗のいが 【小文庫】

牛部屋に蚊の聲よはし秋の風 【小文庫・星合集】
牛部屋に蚊の聲闇き殘暑哉 【芭蕉翁發句集】

西東あはれさひとつ秋の風 【伊勢紀行】
東西あはれさひとつ秋の風 【あか冠】
西東あはれさおなじ秋の風 【笈日記・泊船集】
西東あはれも同じ秋の風 【芭蕉句選】

七夕や秋をさだむるはじめの夜 【有磯海・泊船集】
たなばたや秋をさだむる夜のはじめ 【笈日記】

七株の萩の手もとやほしの秋 【蒲簑・泊船集】
七かぶの萩の手もとや星の緣 【秋の七草】
七かぶの萩の千もとや星の秋 【秋の七草・一翁四哲集】
七株の萩にならはん星の秋 【遺書名】

水學も乘物かさん天の川 【[illegible]小路・一葉集】
水草も乘物かさん天の川 【芭蕉句選拾遺】

熊坂が其の名やいつの玉まつり 【卯辰集】
熊坂がゆかりやいつの玉まつり 【笈日記・芭蕉句選】
熊坂をとふ人もなし玉祭 【翁草】

もの書て扇引さく名殘かな 【卯辰集・奧細道】
もの書て扇へぎ分る別かな 【古今抄】

けふよりや書付消さむ笠の露【奥の道・奥細道】
さびしさに書付消さんかさの露【芭蕉翁略傳】

吹飛す石は淺間の野分かな【更科紀行・一葉集】
吹とばす石は淺間の野分かな【芭蕉翁發句集】
吹落す石を淺間の野分かな【更科紀行眞蹟】
吹颪あさまは石の野分哉【更科紀行眞蹟】
秋風や石吹颪すあさま山【更科紀行眞蹟】

秋の風伊勢の墓原猶すごし【花摘・一葉集】
秋も末伊勢の墓原尙淋し【[illegible]小田】

庭掃て出ばや寺に散る柳【奥の道・泊船集】
庭掃て出るや寺に散柳【奥細道・芭蕉句選】

道のべの木槿は馬にくはれけり【甲子吟行・泊船集】
道の邊の槿は馬の喰ひけり【伊達衣】
道のべのむくげは馬にくはれたり【歴代滑稽傳】
道ばたのむくげは馬にくはれけり【[illegible]・一葉集】

門に入ればそてつに蘭のにほひ哉【笈日記・芭蕉句選】
門に入れば蘭に蘇鐵のにほひ哉【泊船集】

ひよろひよろと猶露けしや女郎花【曠野・小文庫】
ひよろひよろとこけて露けし女郎花【笈日記】
よろよろとこけて露けし女郎花【[illegible]代句選】

萩原や一夜はやどせ山の犬【[illegible]・鹿島紀行】
狼も一夜はやどせ萩の花【笈日記】
狼も一夜はやどせ萩がもと【泊船集】

ぬれて行く人もをかしや雨の萩【[illegible]・芭蕉句選】
ぬれて行や人もをかしき雨の萩【[illegible]】

しら露もこぼさぬ萩のうねりかな【小文庫・三上吟】
白露をこぼさぬ萩のうねりかな【木からし・泊船集】

白露もこぼれぬ萩のうねりかな【栞　集】
月かげをこぼさぬ萩のうねりかな【鳩の水】

風色やしどろに植ゑ庭の萩【芭蕉翁全傳】
風いろやしどろに植し庭の萩【芭蕉句選拾遺】
風色やしどろに栽し庭の萩【三冊子・芭蕉翁發句集】

棧やいのちをからむつたかつら【更科紀行・泊船集】
棧や命をからむ蔦もみぢ【韻　塞】

梧うごく秋の終りやつたの霜【小文庫・泊船集】
秋風や桐に動きてつたの霜【芭蕉句選・三冊子】

藥欄にいづれの花を草まくら【みとせ草・芭蕉翁發句集】
藥園にいづれの花を草まくら【泊船集・雪丸げ】

御廟千とせしのぶは何を荵草【孤　松】
御廟年經て忍は何をしのぶ草【甲子吟行】
御廟年を經てしのぶは何をしのぶ草【泊船集・芭蕉句選】

白髮ぬく枕の下やきり〴〵す【江鮭子・泊船集】
白髮ぬく枕の下やきり〴〵す【芭蕉句選】

むざんやな甲の下のきり〴〵す【猿蓑・奥細道】
あなむざんやな甲の下のきり〴〵す【卯辰集】

ぴいと啼尻聲かなし夜の鹿【笈日記・陸奥鵆】
ひいと啼尻聲寒し夜の鹿【芭蕉句選】

死にもせぬ旅寢の果よあきの暮【小文庫・甲子吟行】
死よしなぬ旅寢の果は秋の暮【後ノ旅】

枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮【東日記】
かれ枝に鳥のとまりけり秋のくれ　曠野・泊船集】

此道や行人なしに秋の暮【其便・枯尾花】

此道を行人なしや秋の暮　【淡路島】
人聲や此道かへる秋の暮　【笈日記・泊船集】

明行や廿七夜も三日の月　【孤松・菜集】
あけぼのや廿七夜も三日の月　【小文庫・泊船集】

何事の見立にも似ず三かの月　【曠野・芭蕉句選】
有とあるたとへにも似ず三日の月　【笈日記・泊船集】

三日月や地は朧なる蕎麦畠　【三日月日記】
三日月の地はおぼろ也蕎麦畠　【泊船集・芭蕉句選】
三日月に地はおぼろなり蕎麦の花　【蕎兄弟】

木を伐て本口見るやけふの月　【江戸廣小路】
木を伐て本口見ばやけふの月　【芭蕉句選拾遺】

重々と名月の夜や茶臼山　【さいつころ】
名月の夜やおも〳〵と茶臼山　【駒水川・芭蕉翁發句集】

名月はふたつ有ても瀬田の月　【西の雲】
名月や二つ有ても瀬田の月　【芭蕉句選・芭蕉新巻】

名月や門にさし來る潮がしら　【名月集・芭蕉翁發句集】
名月や門へさしくる潮がしら　【[illegible]・雲・[illegible]】
名月や門にさし込潮がしら　【小文庫】

名月の花かと見えて棉畠　【續猿蓑・泊船集】
名月や花かと見えて綿はたけ　【有磯海】
名月の花かとばかり綿畠　【芭蕉句選】

名月にふもとの霧や田のくもり　【續猿蓑・泊船集】
名月に麓の霧か田の曇　【[illegible]】

名月や池をめぐりて夜もすがら　【孤松・蕉の松原】
名月や池をめぐつて夜もすがら　【續虚栗・雜談集】

雲折〳〵人をやすむる月見哉　【春の日・續虚栗】

雲おり／＼人を休める月見哉【[illegible]笠】

馬に寢て殘夢月遠し茶の烟【笈日記・甲子吟行】

馬上眠らんとして殘夢殘月茶の烟【三冊子】

馬にねて殘夢殘月茶の烟【三冊子】

月さびよ明智の妻のはなしせん【勧進牒・泊船集】

月さびて明智の妻の咄せむ【小文庫】

月いづこ鐘はしづみて海の底【草庵集】

月いづこ鐘はしづめる海の底【四幅對・芭蕉翁發句集】

俤や姨ひとり泣月の友【いつを昔・更科紀行】

俤は姥ひとりなく月の友【小文庫】

その玉や羽黒にかへす法の月【三山雅集・南谷集】

その玉を羽黒へかへせ法の月【芭蕉句選】

やす／＼と出ていざよふ月の雲【小文庫・泊船集】

やす／＼と出ていざよふ月見かな【木がらし】

十六夜はわづかに闇のはじめ哉【續猿蓑・泊船集】

十六夜はとり分闇のはじめ哉【蓮實・[illegible]紙】

棧や先おもひいづ駒むかへ【更科紀行】

棧やまづおもひ出る駒むかへ【芭蕉翁發句集】

秋もはやはらつく雨に月の形【笈日記・泊船集】

昨日からちよつ／＼と秋も時雨かな【笈日記】

月代や膝に手を置宵の宿【笈日記・泊船集】

月代や膝に手を置宵の内【芭蕉翁發句集】

碪打て我に聞せよ坊が妻【曠野・芭蕉句選】

碪打て我にきかせよや坊が妻【甲子吟行・續虚栗】

芦の穂やかしらを摑羅生門 【鹿島紀行附録】

荻の穂や頭をつかむ羅生門 芭蕉翁發句集】

栗稗にまづしくもなし草の庵 【笈日記・泊船集】

栗稗にとほしくもあらず草の庵 【秋の日】

栗稗にまづしくもあらず草の庵 芭蕉翁發句集】

初茸やまだ日數へぬ秋の露 【小文庫・泊船集】

初茸やすたりかぞへぬ秋の露 【芭蕉句選】

病雁の夜寒に落て旅ね哉 【猿蓑・泊船集】

病雁のかた田におりて旅ね哉 【枯尾花】

いさり火にかじかや波の下むせび 【卯辰集】

かゞり火にかじかや浪の下むせび 【東西夜話・芭蕉句選】

秋をへて蝶もなめるや菊の露 【笈日記・芭蕉句選】

秋を經て蝶もなめるや菊の霜 【小文庫】

山中や菊はたおらぬ湯の匂ひ 【奥細道・蕉塞】

山中や菊は手折らじ湯の匂ひ 【山中集・ただまき】

朝茶のむ僧しづかなり菊の花 【ばせを翁・芭蕉句選拾遺】

朝茶のむ僧しづかさよ菊の霜 【柿表紙】

菊に出て奈良と難波は宵月夜 【笈日記・柴橋

きくにいてゝ奈良と難波は薄月夜 【芭蕉翁行状記】

草の戸や日暮てくれし菊の酒 【笈日記・泊船集】

草の戸に日暮てくれし菊の酒 【きさらぎ】

いざよひのいづれか今朝に殘る菊 【笈日記・陸奥衛】

いざよひのいつしか今朝に殘る菊 【翁草】

木曾の椽うき世の人のみやけかな 更科紀行・芭蕉句選】

よにありし人にとらせん木曾の椽　〔更科紀行眞蹟〕

祖父親孫のさかえや柿みかん　〔駒ざらへ〕

祖父と親その子の庭や柿みかん　〔芭蕉句選拾遺〕

松風や軒をめぐつて秋くれぬ　〔木がらし・笈日記〕

松風の軒をめぐつて秋くれぬ　〔泊船集〕

松風の軒をめぐりて秋くれぬ　〔芭蕉句選・芭蕉翁發句集〕

松の風軒を廻つて穐暮ぬ　〔翁草〕

秋涼し手毎にむけや瓜なすび　〔鳥の道・奥細道〕

秋さびし手毎にむけや瓜茄子　〔韻塞〕

殘暑しばし手毎にむけや瓜茄子　〔西の雲・花の故事〕

さびしさや須磨にかちたるうらの秋　〔初蟬・泊船集〕

さびしさや須磨にかちたる濱の秋　〔奥細道・芭蕉翁發句集〕

冬の部

行雲や犬の迯ぼえむらしぐれ　〔江戸新道〕

行雲や犬の欠尿むらしぐれ　〔六百番發句合〕

笠もなき我を時雨るゝか何と〳〵　〔熱田三歌仙〕

笠もなき我を時雨るゝかこは何と　〔栞集〕

宿かりて名をなのらする時雨哉　〔續猿蓑・泊船集〕

宿かして名をなのらする時雨哉　〔小文庫・芭蕉句選〕

しぐれ行や船の舳綱にとり付て　〔柱曆・俳諧曾我〕

時雨行や舟の帆つなに取付て　〔もとの水〕

初雪や水仙の葉の撓むまで　〔陸奥衛・栞集〕

初雪や水仙の葉のたはむほど　〔篇突・芭蕉句選〕

米買ひに雪の袋や投頭巾　〔泊船集・雪丸げ〕

米買て雪の袋や投頭巾【今日の昔】

一尾根はしぐるゝ雲かふじのゆき【泊船集・芭蕉句選】
一をねはしぐるゝ雲か雨の雪【芭蕉句選拾遺】

人々をしぐれよ宿は寒くとも【芭蕉翁全傳・芭蕉翁發句集】
人々をしぐれよ宿は寒けれども【芭蕉句選拾遺】

はつ雪やいつ大佛のはしら立【笈日記・淡路島】
雪かなしいつ大佛の瓦葺【花摘】

ひごろにくき烏も雪の朝哉【薦獅子・泊船集】
つねににくむ烏も雪の朝かな【芭蕉翁發句集】

二人見し雪は今年もふりけるか【庭竈・笈日記】
二人見し雪はことしも降にけり【芭蕉句選】

折々に伊吹を見てや冬籠【笈日記・泊船集】
折々に伊吹を見ては冬籠【後の旅】

金屏の松の古さよ冬籠【炭俵序・續五論】
金屏の松の古びや冬籠【笈日記・陸奥鵆】

ゑびす講酢うりに袴着せにける【續猿蓑・小文庫】
ゑびす講酢賣に袴着せに鳧【泊船集・芭蕉句選】

鞍壺に小坊主乘や大根引【炭俵・藤の實】
鞍壺に小坊主のせて大根引【陸奥鵆】

しのぶさへ枯て餅買ふ舍かな【[illegible]・甲子吟行】
葱さへ枯て餅うるやどりかな【後の旅】

明ぼのやしら魚白きこと一寸【甲子吟行】
雪薄し白魚白きこと一寸【笈日記・熱田三歌仙】

冬ぼたんちどりか雪のほとゝぎす【笈日記】

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす　【甲子吟行・芭蕉句選】

旅に病て夢は枯野をかけ廻る　【枯尾花・笈日記】

旅に病て枯野を廻るゆめ心　【枯尾花】

葛の葉のおもて也けりけさの霜　【雜談集】

葛の葉のおもてみせけり今朝の霜　【芭蕉翁眞蹟集・陸奥衡】

雪をまつ上戸の顔やいなびかり　【茶草子】

雪をまつ上戸のひたひいなびかり　【芭蕉句選拾遺】

雪の中に兎の皮の髭作れ　【いつを昔・泊船集】

はつ雪に兎の皮の髭作れ　【三册子・芭蕉翁發句集】

市人にいで是うらん笠の雪　【笈日記】

市人にいで是うらん雪の笠　【芭蕉句選・芭蕉翁發句集】

市人よ此笠うらふ雪の傘　【甲子吟行】

いざ行む雪見にころぶ處まで　【曠野・笈の小文】

いざ出むゆきみにころぶ所まで　【鶉衣】

いざさらば雪見に轉ぶ所まで　【花摘・陸奥衡】

君火をたけよきもの見せむ雪まるげ　【續虚栗】

君火たけよき物みせむ雪丸げ　【笈日記・泊船集】

さればこそあれたき儘の霜の宿　【曠野・芭蕉句選】

さればこそ逢ひたきまゝの霜の宿　【笈日記】

さればこそあれたきまゝの霜の庵　【泊船集・枝葉集】

櫓の聲波ッ打て腸氷ル夜やなみだ　【武藏曲・泊船集】

櫓聲波を打て腸氷る夜は泪　【芭蕉翁發句集】

櫓の聲にはらはた氷る夜やなみだ　【續深川】

すくみ行や馬上に氷る影法師　【笈日記・泊船集】

冬の日や馬上に氷る影法師　【笈の小文】

さむき田や馬上にすくむ影法師　【合歡のいびき】

あられせば網代の氷魚を煮て出さん　【花摘】
みぞれせば網代の氷魚を煮て出さむ　忘れ梅】
霰せよ網代の氷魚煮て出さん　【芭蕉翁發句集】
寒けれど二人旅ねぞたのもしき　【曠野・合歡のいびき】
寒けれど二人旅ねぞおもしろき　【笈日記・泊船集】
白炭や彼浦島が老の霜　【江戸廣小路】
白炭や彼うら島が老のはこ　【六百番發句合】
あら何ともなやきのふは過てふぐと汁　【江戸三吟 芭蕉翁俳諧集】
あら何ともなきのふは過てふぐと汁　芭蕉翁發句集】
星崎の闇を見よとや啼千鳥　【千鳥掛・笈の小文】
星崎や闇を見よとて啼千鳥　【泊船集】
かくれけり師走の海のかいつぶり　【新花鳥・己が光】
のがれけり師走の海の鵆　【蓮の實】
梅つばき早咲ほめむ保美の里　【猫耳集・芭蕉翁發句集】
梅椿はや咲つぼむ保美の里　【芭蕉句選】
香を探る梅に家見る軒端哉　【笈日記・泊船集】
香を探る梅に藏見る軒端哉　【笈の小文】
有明も三十日にちかし餅の音　【眞蹟・笈日記】
月代や三十日に近き餅の音　【芭蕉翁行狀記・翁草】
何に此師走の市へ行鳥　伊駒堂】
何に此師走の市にゆくからす　【花摘・芭蕉翁發句集】
何をこの師走の市を行からす　泊船集
何をこの師走の市に行鳥　芭蕉句選・芭蕉翁文集】
魚鳥の心は知らず年の暮　【陸奥衛・泊船集】
魚鳥の心はしらず年わすれ　小文庫・浮世の北】

雜の部

もの一我がよはかろきひさご哉　【桒　集】

物ひとつ瓢はかろきわが世かな　【隨齋諧話】

世にふるもさらに宗祇のやどり哉　【虛栗・泊船集】

世にふるはさらに宗祇のやどり哉　【和漢文藻・雪の葉】

世の中はさらに宗祇のやどり哉　【笈日記】

語られぬ湯殿にぬらす袂かな　【奧細道】

語られぬ湯殿にぬるゝ袂哉　【花摘・芭蕉句選】

發音檢索 芭蕉俳句不審抄

芭蕉俳句不審抄　其の一

あ

雨中庵の庭に遊ぶ事七々日人々に

青苔や玉まく芭蕉一株二株　【翁反故】

陽柳觀音の畫讃

青柳の我からむすぶ佛かな　【同】

曉の山兀として郭公　【芭蕉翁句解參考】

前書たゝれみへず

あかしがたさいわい雨のふる日哉　【翁反故】

秋來ぬと妻乞ほしや鹿の皮　【一葉集】

秋の野や草の中ゆく風のおと　【同】

秋の日のいろこそかへね松の聲　【芭蕉翁句解參考】

兼好の賛

秋の夜をうしろに仕たる法師哉　【同】

瀬田に泊りて曉石山寺にまうでかの源氏の間をみる

曙はまだむらさきにほとゝぎす　【諸國翁墳記】

淺香山帷子ほして通りけり　【芭蕉翁句解參考】

朝風や只しら雲に雁ひとつ　【翁反故】

朝な／＼手習すゝむきり／＼す　【一葉集】

あすの月雨うらなはむ比那が島　【芭蕉翁句解參考】

光明寺にて

汗の香に衣ふるはむ行者堂　【一葉集】

汗のごひ下女にとらせりけさの秋　【芭蕉翁句解參考】

畔物の亥子の餅や歸花　【同】

紫陽花や乞食煩ふ草の上　【同】

紫陽花や三島は水のうら通り　【同】

あてもなくうつや霜夜のそらきぬた　【翁反故】

欹器の圖に題す

あとさきをおもへばさびしけふの月　【芭蕉翁句解參考】

あはれさは鳶の巣に鳴蛙哉　【同】

雨霰雪も氷も師走かな　【翁反故】

藍壺に栽を失ふ寒さかな　【芭蕉翁句解參考】

荒物のほこる日ざしや雲の峰　【同】

あらがねの蕪めされて若菜哉 【同】
あらがねの土よりおこる火桶かな 【一葉集】

い、ゐ

いく秋のせまりて罌子にかくれけり 【一葉集】
十六夜の月と見はやせ残る菊 芭蕉翁句解參考
石に置て香爐をぬらす時雨哉 【同】
伊勢に居て三國一の初日の出 【同】
磯の宮森の露ちる旭かな 【翁反故】
磯山や櫻をゆする波の音 【芭蕉翁句解參考】
僞りの舌に骨なし厄ばらひ 同
一ぴきのはね馬もなし川千鳥 【一葉集】

旅中

いづれ名の付べき土手ぞ啼鶉 【芭蕉翁句解參考】
糸薄蛇にまかれてねまりけり 蟋蟀の巻
電の壁にしむ夜やきりぎりす 【芭蕉翁句解參考】
稲妻や椽まで來てはかへる波 【同】
稲の穗のつゆばかりなる魂まつり 【翁反故】

慇懃になりて別るゝ藤の花 芭蕉翁句解參考
精進日に殘りおほさやはつ鰹 【同】

いらこ崎程近ければ見に行て

いらこ崎似るものもなし鷹の聲 【同】

う

高砂の松は寛永年中に枯けり今若
木猶〳〵古しへな忍れけり

植かへて日出度松のみどり哉 【翁反故】
上野から時雨て來るや車坂 芭蕉翁句解參考
うき草やしかも山田の落し水 【同】
鶯の岡で鳴日はうす着かな 芭蕉句選後拾遺
鶯の椋の葉みかき聲聞む 【芭蕉翁句解參考】
鶯や老をなぐさむ茶臼山 【同】
美しき其ひめゆりや后ざね 【一葉集】
鵜のつらに篝こぼれて哀也 【芭蕉袖草紙】
鵜の觜のはだをさすらん秋の風 【翁反故】
うの花やまがきを 未破滅 【同】

乳母草に誰むすべとて朝の露　【同】

馬士に落さるゝ身は木子かな　【芭蕉翁句解參考】

梅櫻翁よりのちの歸ばな　【同】

梅櫻松は御前に夏の月　【千里獨歩】

梅白し年立色の小醒ケ井　【芭蕉翁句解參考】

梅の錠汝とわれと鎰ひとつ　【俳諧耳底記】

大年の夜ねずみにあひて

梅干にかよふ黄鳥あはれなり　【一葉集】

梅柳いだすか年の御撫もの　【芭蕉翁句解參考】

埋木のよしや　此末切レてなし　【翁反故】

奈良の片わきのささにありて

于蘭盆や家のうらとふ墓參　【芭蕉翁句解參考】

うるしかきに我も出んな朝鳥　【翁反故】

え

江の水にしら魚にほへ梅の花　【芭蕉翁句解參考】

白畵自讃

恵方から曳やことしも牛の玉　【一葉集】

椽のはな立はなれ得ぬ薫哉　【芭蕉翁句解參考】

お、を

旅行に

翁起な起ば浮世に秋を見む　【芭蕉翁句解參考】

押遣ればおしやる儘の竹婦人　【同】

瀬田夕照

遲き日に乾かぬ網の左袖　【あさかり】

をだまきの正月さまや若菜の下　【芭蕉翁句解參考】

御供所の疊冷しきり〳〵す　【同】

己が身を枕に鴨のうき寢哉　【同】

面白き朝のはじめや三ッの花　【同】

か

かいつぶり顔見合せて又這入　【芭蕉翁句解參考】

悦堂和尚の隱室にまねかれて

香を殘す蘭帳蘭のやどり哉　【一葉集】

猿はしに宿りし時

棧（かけはし）や殘暑に夜着を着て寢ける　【芭蕉翁句解參考】

龜水塚

笠を敷て手をいれてしる龜の水　【諸國翁墳記】

觀音寺に詣でゝ

笠寺や乘敷さます一すゞみ　【新撰翁草】

笠の緒や咽喰ひしむる不二の雪　【一葉集】

須磨寺

風なきに散やわかきの花櫻　【翁反故】

風の香も南に近し最上川　【芭蕉翁發句集】

風妖てすゝきに夜の雨すごし　【芭蕉翁句解參考】

勝沼や馬士（まご）は葡萄を喰ながら　【同】

悲しまんや墨子芹燒を見ても猶　【一葉集】

或山寺にて

鐘も撞住持も仕たり麥の秋　【芭蕉翁句解參考】

川音や五條の月の古び樣　【同】

蛙子は目すり鱠を啼音哉　【一葉集】

かぴたんもつくばはせけり君が春　【同】

竈風呂や梅も櫻ものぶ草　【芭蕉翁句解參考】

紙子にも霜や置かと撫て見し　【一葉集】

かやぶきの隣ありけり蔦紅葉　【翁反故】

蚊やりせよ夢見て行ん竹瓦　【翁反故】

かりてねむ案山子の袖や夜半の霜　【一葉集】

枯芦に何を時雨の葉毎哉　【芭蕉翁句解參考】

枯芦や難波の舟の五文字みへず　【翁反故】

枯たつや伊駒ヶ嶽の松斗（はかり）　【芭蕉翁句解參考】

き

木啄の入廻りけり藪の松　【芭蕉翁句解參考】

きのふをも峠といひし暑さかな　【有也無也関】

きのふけふ樗（あふち）にくもる山路かな　【翁反故】

きのへ子に寢て待ほどぞ郭公　【同】

甲州郡内といふ瀧にて

勢ひある山部（やまべ）も春の瀧つ魚　【芭蕉翁句解參考】

題畫屏

君も臣もうきにはたへね秋の風　【同】

清瀧のなみにあらふや夏の月　【同】

蛬普門品よむ右ひだり　〔同〕

伐株の芽立を見れば櫻かな　〔同〕

く

宮部丹後のちか〳〵旅より歸るときゝて

草の戸や貯も露の待まうけ　〔芭蕉翁句解參考〕

草の戸や我もの顏にもる時雨　〔同〕

草もなき大井かはらに鳴雲雀　〔芭蕉翁發句拾遺〕

口切やたしか内儀は小紫　〔芭蕉翁句解參考〕

口すべれ油月夜のほとゝぎす　〔一葉集〕

國々や八景さらに氣比の月　〔芭蕉翁句解參考〕

曇りやら花の雲やら烟やら　〔同〕

黑森を何といふとも今朝の雪　〔一葉集〕

黑燒釜わつて捨けりほとゝぎす　〔同〕

暮かぬる日の床しさよ山ざくら　〔翁反故〕

け

佐夜の中山にて

けゝらなくよこをりふせて郭公　〔芭蕉翁句解參考〕

八月十三日夜江月庵にあそぶ

下戸の身に寒き池田の月夜哉　〔翁反故〕

けさ買む葎の宿の雜煮椀　〔芭蕉翁句解參考〕

けさ散し甲斐の落ばや田子の浦　〔同〕

梅若の塚にて

側りかけしても柳は亂れ髮　〔同〕

けふひがん菩提の種を蒔日かな　〔一葉集〕

こ

聲あらば鮎も鳴らんうがひ舟　〔芭蕉袖草紙〕

子を背山妹山おろしうばら聲　〔芭蕉翁句解參考〕

曲水亭

小頭の數の子くさき年始哉　〔同〕

後家の秋ものゝあはれをとゞめたり　〔一葉集〕

小倉山にて時雨にあひて

爰に來てかりそめならぬ時雨哉　〔翁反故〕

こゝも三河むらさき麥のかきつばた　【一葉集】

拵ふておれば水鷄やわたし守　【芭蕉句選後拾遺】

湖水から光り出しけり比良の雪　【一葉集】

小僧村といふ所にて

小僧とは辨慶崩早松茸　【芭蕉翁句解參考】

去年ははやそこへすされよ次郎月　【一葉集】

この頃の暑さは何とかはしやうよう　【芭蕉翁句解參考】

此花のあるじ顏なり尾長鳥　【芭蕉句選後拾遺】

翁石塚　周防吉木ノ浦

此葉より外に伊達なる傳授なし　【諸國翁墳記】

此道に出てすゞしさよ松の月　【芭蕉句選後拾遺】

瓢の銘

米のなき時は瓢にをみなへし　【一葉集】

籠らばや八鹽の里に夏三月　【芭蕉翁句解參考】

是は／＼香取は杉のよい處　【同】

衣着て小貝拾はむいろの月　【同】

五文字不見　此菜畑のぬしやたれ　【翁反故】

さ

三井晩鐘

盃に片われはなし花の鐘　【あさかり】

靈岸島の人來るに三人皆七兵衞と
いふにたはふれて

盃に三ツ名をくむ今宵かな　【芭蕉翁句解參考】

能馬の影見む關のわたし舟　【一葉集】

さかなにやいてちと妻もよめがはぎ　【芭蕉翁句解參考】

咲亂す山路の菊を燈籠哉　【同】

櫻哉小町が姉の名はしらず　【有也無也關】

櫻咲てあるじ二人の庵りかな　【翁反故】

粟津晴嵐

さぞ野分人の淡だつ市の聲　【あさかり】

比良暮雪

さそへ雲白衣の天狗比良の雪　【同】

五月の雨岩檜葉の翠いつまでぞ　【一葉集】

四考塚　肥後宇土圓應寺

里の名も聞たき夜の山の道　【諸國翁墳記】

嵐雪におくる
さびしさを問てくれぬか桐一葉　【一葉集】

さびしさや花のあたりの野人參　【一串抄】

さびしさや湯守の寒くなるまゝに　【芭蕉翁句解參考】

淋しさよ右も左も　五文字みへず　【翁反故】

拙虫損抔は野に臥こそもたのしき
やなごあるじの問れければ
さみだれに寒いまゝなり旅すがた　【一葉集】

五月雨も後の五月の小紋かな　【一串抄】

五月雨や桶の輪きれる夜の音　【芭蕉翁句解參考】

さみだれや此笠森をさしもぐさ　【一葉集】

五月雨や東寺の沙彌の髭ぼう／＼　【芭蕉翁句解參考】

十二月十五日
寒き夜に不破の關もる人はたぞ　【翁反故】

し

十月やいづくへ雲の黑み行　【芭蕉翁發句拾遺】

時雨ふる仰の背戸や草の庵　【芭蕉翁句解參考】

しぐれふれ笠松に着日也けり　【同】

しばし間もまつやほとゝぎす千年　【一葉集】

石山秋月
汐やかぬ須磨よ此海秋の月　【あさかり】

清水ほど流るゝ沖の汐干哉　【芭蕉翁句解參考】

新麥や竹の子時の草の庵　【芭蕉翁句鑑】

言葉書破失
霜に起氷りに枕する身かな　【翁反故】

太顚和尙の來るさて來ざりければ
鶺鴒待て垣のさゝげは老にけり　【芭蕉翁句解參考】

白魚や石にさはらば消ぬべし　【同】

白川の春の末なり旅まくら　【同】

白芥子に羽もて蝶の化粧かな　【同】

す

涼しさや行先々の最上川　【芭蕉翁句解參考】

巢立せり鵜の子や海を戀るらん　【芭蕉新巻】

すへたのしひよくの中は花に鳥　【芭蕉句選後遺】
李青く竹笠破て石あぶなし　【一　葉　集】

せ

橋にせきれいの自畫に
鶺鴒の足もとかろし橋の霜　【翁　反　故】
蟬をもつて天の曰ふあつさ哉　【芭蕉翁句解參考】
門人に對す
梅檀も一鋤ヅヽの田打かな　【同】
船頭の小宿はいりやみそさゞる　【同】
船頭の妻迎へたる時雨哉　【同】

そ

紀三井寺に休らへば宗祇の故事を
れもごろになしへて
宗祇にもめぐり逢けり遲櫻　新撰翁草
掃除して來ぬ日は庭に鶯の　【芭蕉句選後拾遺】
園ひろき德ありてこそふきのとう　【翁　反　故】

其まゝに折ばや折ん松の雪　【同】
そり橋のかゝる宮井や　五文字みへず　【同】

た

天神の贊
大威德あり〱梅の二柱　【芭蕉翁句解參考】
松明に醉ふか杜に雨蛙　【同】
高足のあとや雲雀のま一暮　【同】
誰がうゑた菖蒲刀の鮫の粒　【同】
誰が畑ぞ木棉なだるゝ秋の雨　【同】
誰〱もひがし向らん月の暮　【十家類題集】
竹の間の茨見せしやほとゝぎす　【芭蕉翁句解參考】
立せ給ふ佛も人の案山子哉　【同】
旅じや喰へ都は日たつ柏もち　【同】
旅僧の晝寢の床や秋の風　【同】
旅人の寢てから霞む野梅哉　【同】
蒲公英や鶴も來てつめ松のかげ　【同】

ち

千鳥聞夜ごと　未破還　【翁反故】

千鳥聞ばかり　未交墨滴シ　【同】

坦室和尚を悼む

地にたふれ根により花のわかれ哉　【一葉集】

茶の花に人里ちかき山路哉　【芭蕉翁句解參考】

發心の時

散ばちれ千里一風の鐵線花　【一葉集】

散る時もあればこそあれ廿日草　【翁反故】

つ

天宥法印の賛

月か花か問へば四睡の眠り哉　【芭蕉翁句解參考】

月消て秋は入日の跡の不二　【同】

長柄の文臺のうら書に

月の洩るむかしの橋の板目哉　【同】

月弓や壻の一藝男七夕　【一葉集】

頭巾着た顏さしこむや繩すだれ　【同】

蔦の葉の時雨にしぐれ降夜哉　【芭蕉翁句解參考】

常のはなし遁れにけりな梅の花　【芭蕉句選後拾遺】

茶臼に眠る兒の畫讃

ツモレ〳〵とく起て見ん夜の雪　【翁反故】

露しぐれ萱草の色にしみたらず　【芭蕉翁句解參考】

て

蝶鳥のうはつき立や花の雲　【一葉集】

手をのべて寢盃子喰けり馬の上　【十家類題集】

手車となるや折とる風車　【芭蕉翁句解參考】

自畫讃

寺ひら〳〵坊主の形や初時雨　【同】

と

遠乘の出合がしらや原の雉　【芭蕉翁句解參考】

とし波や蜑のあまたの伊勢參　【同】

年や人にとられていつもわか夷　【一葉集】

戸の口に宿札なのれ郭公　【一葉集】

とまる氣と見えて秋から巨燵かな　【芭蕉翁句解參考】

堅田落雁

鳥の文かた田の雁よ片便り　【あさかり】

な

越の中山

中山や越路も月は又いのち　【芭蕉翁句解參考】

啼けやなけ耳のすうなるほとゝぎす　【一葉集】

薺つむけふはな燒そ鳥部山　【芭蕉翁句解參考】

撫子の暑さわするゝ野菊かな　【一串抄】

菜の花に成て戀るやねこの妻　【芭蕉翁句解參考】

に

廿九日投こそ得たれ雲の峰　【芭蕉新卷】

ぬ

糠星や契りて後の手水の粉　【千家類題集】

主なきをうらみ顏なる野梅哉　【翁反故】

ぬれ蓑を手柄にしたる雪見哉　【同】

ね

根は月に枯れ其芋がらや雪の飯　【芭蕉翁句解參考】

の

後の世はいかゞなるらん冬ごもり　【翁反故】

畫讃

野は山の中に一本柳かな　【芭蕉翁句解參考】

のりたやと子の聲くらき鵜舟哉　【一葉集】

は

萩の露米搗宿のとなり哉　【芭蕉翁句解參考】

箱押よとちも身のため夕すゞみ　【一葉集】

春は鳥ゝ背利さは其浦人の言葉さや

背とくば硯を作れ和歌の浦　【翁反故】

蓮の葉や夕かほでせし馬合羽　【芭蕉翁句解参考】

角力の畫讃

裸身で押合ふものや月と風　【同】

はつしぐれ瀞に渡れかつら川　【翁反故】

初茸やもと來しみちへ又出る　【芭蕉翁句解参考】

初花にいのち七十五年ほど　【一葉集】

はつ夢にふじを（未きれて不レ知）　【翁反故】

花咲ばつけむと云ふや小短冊　【芭蕉翁句鑑】

花ちらす風は皇帝の臣下かな　【芭蕉翁句解参考】

花に似ぬ木や臈黒き梅根性　【同】

花に舎り瓢先生と自云り　【同】

花の香もおなじ祝の白茶哉　【同】

花のとき斧はめで度なられけり　【同】

花の山袈裟落されな坊主達　【芭蕉新巻】

花〳〵を百あはせてや百合の花　【芭蕉翁句解参考】

花は世を江戸方角の法師哉　【同】

春雨やなほしほれたる破レ座具　【同】

春の日はしだり柳や尾長鳥　【芭蕉翁句解参考】

はるもなし踏てをしまぬ蝸の殻　【一葉集】

五百丸へ元服の祝として

春や立まだ春を見ぬ此師走　【一葉集】

ひ

火を焼て今宵は屋根の霜消む　【芭蕉翁句解参考】

東山月の出やうがよいでない　【同】

極月廿八日

髭面を人なとがめそとしの市　【翁反・故】

ひだるさよ寒さよ須磨の饑衛　【翁反故】

ひと色を千々の錦や萩見寺　【[illegible]】

何某が適のぬし牛島に閑居しける

な

一夜焼て寒さくらべな草の庵　【[illegible]】

人なきを咲ぬがほなる野菊かな　【翁反故】

日の跡や夕顔黒し紅芙蓉　【芭蕉翁句解参考】

柊の葉にはなかへるあらし哉　【翁反故】

火吹竹音やしぐれて小豆食　【一葉集】

百日紅まづ四五日はへらしけり　【芭蕉翁句解參考】

前書破失

晝がほの花にねぶたき庇かな　【翁反故】

ひれふりて牝鹿もよるや牡鹿島　【一葉集】

ふ

深川に松をかぞへむ千代の春　【芭蕉翁句解參考】

芭蕉庵は火の爲に破れてある人の許に春をわびけるに軒の梅に雪の降かゝるを見て

深川の松はなくらむ雪の梅　【同】

深川や所〳〵に花ふゞき　【同】

深川や根ごしの芭蕉雪がこひ　【一葉集】

深草や是も淺草火鉢かな　【一葉集】

鰒汁やあはうになりとならばなれ　【華鳥文庫】

吹たびに蝶の居直るやなぎかな　【一葉集】

梟のねぶりおちたる柳かな　【一串抄】

二人して一つ釣けり江の鱠　【芭蕉翁句解參考】

船いそぎなれも汐干にゆく人か　【むつのゆかり】

文ならぬいろはもかきて火中哉　【一葉集】

ふる袷物見の松にはづかしや　【芭蕉翁句解參考】

古川にこびて芽をはる柳哉　【一葉集】

古寺や誰が植捨し花一木　【翁反故】

へ

屏風には山を繪書て冬籠　【芭蕉翁句解參考】

ほ

穗薄におもふまゝなる野分哉　【翁反故】

ほろさせと鳴さへあるに棉の虫　【芭蕉翁句解參考】

ま

枕つく乘合舟やほとゝぎす　【芭蕉翁句解參考】

藏王堂に休む

まだ咲ぬ花のありかや藏王堂　【翁反故】

まち兼て隣の梅を折にゆく　【一葉集】

まつ花や藤三郎がよしの山　【同　】
待宵や松に音して初あらし　【芭蕉翁句解參考】
松植て竹のほしさよ秋の風　【翁反故】
松風や犬の付たる鉢たゝき　【芭蕉翁句解參考】
松杉の尾上の鐘や秋の暮　【同　】
松嶋や夏を衣裳の水と月　【一葉集】
松の華笘屋見に来る序哉　【芭蕉翁松島賞吟】
まふくだか袴よそふかつく〳〵し　【一葉集】
万歳のひとり歸るや薄月夜　【芭蕉翁句解參考】

み

紀三井寺
見上れば櫻しまふて紀三井寺　【芭蕉翁句解參考】

笈負僧　虫損
みえばやな出立〳〵のほとゝぎす　【一葉集】
三日月は正月ばかり誠にて　【芭蕉家卷】

三日月塚　伯陽の、某郡倉吉府東口松原
三日月や早手にさはる草の露　【諸國翁墳記】

見かへりの松
見かへりの松の木ずへやほとゝぎす　【翁反故】

甲斐猿橋
水くらく日のまふ谷やよぶこ鳥　【芭蕉翁句解參考】

安部川に名のみして
水上はうぐひす啼て水淺し　【芭蕉句選後拾遺】

兩國の橋かゝりければ
持出て橋をいたゞく霜路哉　【芭蕉翁發句拾遺】
水無月の水を種にや水仙花　【芭蕉翁句解參考】

コッチ法印の靈地にて
みな月やから鮭拜む野枯山　【芭蕉翁句選】
峯過すわかれも鷹の眼哉　【花蔭】
見渡せば花ばかりなり春や京　【芭蕉翁句選】

む

孤石がみちのく行を送る
麥苅て稻舟見せよ最上川　【芭蕉翁句解參考】
むく起に隣の花のにほひかな　【一葉集】

むら時雨てれふれ町の名なるべし　【同　　　】

め

等栽に尋あひて
名月の見處問ん旅寢せむ　【一　葉　集】
名月や雨に深川酒うすし　【芭蕉翁句解參考】
名月やたしかに渡る鶴の聲　【同　　　】
名月や西にもほしき窓ひとつ　【一　葉　集】
明月や鼻の先なる光明寺　【芭蕉翁句解參考】
名月や水にはやらじ蓮の上　【十家類題集】
名月や我世も更むいつかまた　【芭蕉翁句解參考】
名月や我を筆架のかけほうし　【一　葉　集】
飯櫃にかけもたらぬか蟬の聲　【十家類題集】

も

餅搗や都の町の朝月夜　【芭蕉翁句解參考】
寛文辛亥　走　末梅雪老の許にて
餅雪の落やめば早梅芬々　【同　　　】

もて來つる是ぞ年玉こゝろ玉　【一　葉　集】
物識の心問たし後の月　【芭蕉句選拾遺】
物やあらむ人や兎の板庇　【芭蕉翁句解參考】

や

臼塚　湖東十輪坊
野洲川（ヤスカハ）や身は安からぬさらし臼　【諸國翁墳記】
痩臑もあればぞ花のよしの山　【芭蕉翁句解參考】
柳見にさそふや梅の都人　【芭蕉翁句解參考】
藪うめや日影はしらず梅の花　【新撰翁草】
破れみのかりてきたりなすゝ拂　【翁　反　故】
山寒し心の底や水の月　【二十五條】
山下や廣葉の露に雨の音　【芭蕉翁句解參考】
山鳥よ我もかもねん宵まどひ　【一　葉　集】
功成遂レ名而身退（ゲ　ソ　シテ　ク）
山の名を得てちるをこそ櫻なれ　【芭蕉翁句解參考】
みちのゝ名所の内、猫山
山は猫眠りはいでや雪のひま　【一　葉　集】

山は不二この陸奥に櫻哉　【芭蕉翁句解參考】

山吹や井手の長者の年の宿　【同】

山々の　五文字にかゝりて未詳　【翁反故】

ゆ

夕がほやかいまはるほど秋は來ぬ　【一葉集】

矢橋歸帆

夕がすみ赤石の浦を帆のおもて　【あさかり】

夕立の跡の匂ひや三穗の松　【芭蕉翁句解參考】

雪消に簇はづるゝやなぎかな　【同】

十二月十四日

雪寒し馬にも乘ぬ我身哉　【翁反故】

はし書切失

雪白しいかさま三穗の冬なれや　【同】

雪の內昔顏かれぬ日影かな　【雪のかつら】

雪の旅それらではなし秋のくれ　【一葉集】

雪の日や羅紗の羽折にたゝき鞘　【同】

雪ふりや乞食ながめて居る乞食　【芭蕉翁句解參考】

行燕また來る芽張御まで　【同】

畫讃

ゆく年や汝が親の小松うり　【一葉集】

暮春に碓氷を越る

ゆくにまだ春を見しらぬ木芽哉　【芭蕉翁句解參考】

行船や何國の浦に年取む　【同】

湯の名殘こよひは肌の寒からむ　【同】

よ

世をいかに捨どころなき山櫻　【芭蕉翁句解參考】

翁塚　信州高井郡安田村

横吹や駒もいなゝく雪あらし　【高國翁墳記】

吉野まで行ずに歸る寒かな　【翁反故】

竹內一枝軒にて

世に匂へ梅花一枝のみそさゞゐ　【一葉集】

世や人や花にも其智三十里　【芭蕉翁句解參考】

ら

蠟燭に顏のてらつく寒かな　【芭蕉翁句鑑】

る

那須の雲岸寺佛頂禪師の小庵を尋て

留守に來て棚さがしする藤の花　【一葉集】

ろ・

朧梅やむかし永井の金渡し　【芭蕉翁句解參考】

わ

我黑髮撫付にして頭巾かな　【芭蕉袖日記】

我爲に日はうらゝ也冬の空　【一葉集】

我年を棚へあげてや若ゑびす　【同】

雪塚

我身かな乘らぬ馬にも雪寒し　【茗荷圖會】

若草や狼かよふ道ながら　【翁反故】

餞別

わがぬるや青柳茂る染火繩　【芭蕉翁句解參考】

三面大黑の讃

忘るなよ神の頭巾の績くゝり　【翁反故】

旅情の靜なるは錢無によろし

渡し呼ぶ人は我なりはつ時雨　【同】

綿弓や窓に入日の影さぶき　【一葉集】

輪乘する若衆に暮るゝ柳哉　【芭蕉翁句解參考】

わびしさや櫻がもとの野人參　【同】

わるあつく吹や一本の松の音　【同】

芭蕉俳句不審抄　其の二

いぬとさるの世の中よかれ酉の年　【奥細道菅菰抄】

菅菰抄の著者蓑笠庵梨一が伊賀の桐雨筆記に據つて明暦三年芭蕉十四歳の作と傳へて以來、世人に信じられてゐるが、西武の鷹筑波に

犬と猿の中立なれや酉の年

といふ先案がある。作者は一葉子で、その外に

殘る雪や今朝けしかくる犬年

去年は戌跡にゐなる今年哉

さは姫のめごや象の卦牛の年

など十二支を題材にしたものがあつて、「世の中よかれ」は一葉子の作から誤聞されたのであらう。

歯朶の葉もなきにもちひの鏡かな　【一葉集】

もて來つる是ぞ年玉こゝろ玉　【同】

重頼の毛吹草に芭蕉の前名と同じく宗房の作とあるのに誤られたのである。毛吹草の開板は正保二年二月で芭蕉の二歳の時だから同名異人の作なることは明瞭である。

物の名の蛸や故郷の凧幟　【芭蕉袖日記】

江戸三吟に「さぞな都」の巻と共にある百韻の發句で信徳の吟である。

物の名も蛸や故郷のいかのぼり　信徳

あふのく空は百餘里の空　桃青

峰の雪かれのわらんぢ解そめて　信章

布門の紙鳶にも再錄されてゐる。

元日や何となけれど遲櫻　【芭蕉翁句解參考】

曠野集の歳旦にある路通の作で、原句は「元朝や」になつてゐる。

てきちよくにもててふ來るや花見酒　【一葉集】

隨流の鶯笛にある句で、作者はこれも同名異人の宗房の句である。

氏もよし生立もよしや藤の花　【同】

雪花は南の枝や遲櫻　【同】

毛吹草及び小町踊の兩集に載つてゐる。小町踊は寛

文五年の出版で、芭蕉の宗房は其の前年の小夜中山集に初めて現はれてゐるが、此の二句が毛吹草と共通なので、やはり同名異人の宗房である事が判明する。

氣のつかぬ所を土堤の菫かな　〔此　華〕

元祿六年の此華集に芭蕉と明記してあるが、彼の白炭の忠知の作に

何の氣もつかぬに土手のすみれ哉

といふ類作があつて、然も七部集の一の曠野に擧つてゐる。

さぞな都淨るり小うた爰の花　〔泊　船　集〕

江戸三吟の百韻中に

さぞな都淨瑠璃小歌はこゝの花　信　章
霞とともに道化人形　信　徳
青いつら笑ふ山より春見えて　桃　青

とあつて、疑ひもなく信章後の素堂の發句である。

奈良七重七堂伽藍八重櫻　〔同　〕

風國の泊船集　外に支考は古今抄に疊字の格を此句に就いて論證してゐるが、風俗文選犬註解の著者菲廿介我は、俳諧あやめ草に作者は椎本才麿だと云つてゐる。介我の說も直ちに承認し難いが、芭蕉生前の諸集に見あたらないので確實性に乏しいため、芭蕉俳句類聚には收錄したが、猶こゝに念の爲め一言して置く。

梅が香や通り過れば弓の音　〔ばせを翁〕

近江の毛紈の作である。元祿六年の三つ物に

梅が香や通り過れば弓の音　毛　紈

と見えて居る。

布子着て夏より暑し桃の花　〔同　〕

支考の作である。その家集の蓮二吟集に出てゐる。華雀の芭蕉句選は再び誤りを重ねて、芭蕉の作として收めてゐる。

いろ／＼の名も紛らはし春の草　〔芭蕉句選〕

ひさごの選者珍碩後の洒堂の作である。句選も頭書「ひさご集に珍碩が句にして翁の脇あり」といふて訂正してゐる。

あしだはく僧もみえたり花の雨　〔同　〕

笈の小文の「初瀬　春の夜や籠り人ゆかし堂のすみ」の次にあるが、作者は同行の萬菊丸即ち杜國である。

春雨や枕くづるゝものゝ本　【芭蕉句選】

作者は支考である。續猿蓑に「なにがし主馬、武江の旅店をたづねける時」と前文附で

春雨や枕くづるゝうたひ本　支考

とある。

聞こえてこゝも藤しろみさか哉　【十家類題集】

宗祇の名高い發句で芭蕉もこの句によつて「藤の實は俳諧にせむ花の跡」といふ句を惟然坊に與へてゐる。原句は「こゝは藤しろみさか哉」である。

一僕とぼく〳〵ありく花見哉　【十家類題集】

季吟の作である。近くは嘯山の「俳諧古選」を見ても知れる。

猿橋や蝶も居直る笠の上　【一串抄】

一串抄に「甲斐の猿橋の吟なり」とあるが、何丸の說によると鳥醉の「かけはしや蠅も居直る笠の上」といふ頃作のあやまり傳へたのであらう。

とらへたき聲ばかり見る青間哉　【一葉集】

これもまた水生木やもみぢ鮒　【同　】

此の二句は共に立圃の小町踊に出て居る。作者は毛吹草と同人の京の宗房である。

渺々と尻ならべたる田うへかな　【笈日記】

風國は泊船集に「笈日記に入集すれども、伊丹の句にして翁の句にあらず」と早く指摘してゐる。正德五年の鉢敲に「尻ならべたる田植かなと笑はれしことを思ひ出て」といふ春堂の詞書があるから、伊丹派の一人蟻道の發句であらう。

つく〴〵と榎の花の袖にちる　【芭蕉翁發句集】

尾張の蕉門桐葉の作で、熱田三歌仙に

つく〴〵と榎の花の袖にちる　桐葉
獨茶をのむ藪の一家　芭蕉

とあつて、芭蕉は脇句を附けてゐる。

つかみ合ふ子供のたけや麥ばたけ　【芭蕉翁[illegible]】

嵯峨日記の寶暦版に四月廿日「去來京より來る、途中の吟とて語る」とあつて去來の作である。去來抄には近江の遊刀の句にあげて居る。

かさねとは八重撫子の名なるべし　【芭蕉袖日記】

奥細道に「獨は小姫にて名をかさねと云、聞なれぬ名のやさしかりければ」とあつて曾良の句である。元祿十五年版の升形本と呼ばれるものにも明和七年の蝶夢の刊本にも作者曾良とあるが、袖日記及び明治になつて出た其角の眞蹟を摹刻したといふ本には作者名がない爲め、芭蕉の作と誤られてゐる。

大峰やよし野の奥も花の果　【同　】

熊野路や分つゝ入れば夏の海　【芭蕉翁句解參考】

元祿四年五月二日、嵯峨の落柿舍に芭蕉を訪れた曾良が、その旅行の收穫として示した發句で、二句とも嵯峨日記に出てゐる。寶曆版には作者名を省いてあるので、芭蕉の作と誤信されたのであらう。

またれつる五月も近し聟ちまき　【同　】

嵯峨日記に大津の尙白からの消息にある句で、還岐といふ前書があり、尙白の吟である。

下闇や地中ながらの蟬の聲　【十家類題集】

後猿蓑集にある嵐雪の作で、「地虫ながらの」が正しい。

笠松の夜雨

笠松やまづ夕だちの逃どころ　【もゝよ草】

飯縄山秋月

夏の月胸にものなし飯縄山　【同　】

八鹽の晴嵐

籠らばや八鹽の里に夏三月　【同　】

前田川歸帆

鵜匠ども遣ふて見せよ前田川　【同　】

下野黑羽の俳人が寛政五年芭蕉百回忌に梓行したもゝよ草に、以上四句を黑羽根八景中に擧げ、茶臼嶽暮雪、犬追馬場夕照、大豆田落雁、大雄寺晩鐘「殘り四景の句紛失」としてある。然るに芭蕉の門人桃隣の陸奥衞卷五に、同じく黑羽八景の中として右の四句を載せ、作者は桃隣その人である事が判然する。されぱもゝよ草の編者が翁の作として掲げたのは、年月の經過にしたがつて芭蕉の作の如く誤傳された爲めであらう。

廿日道出るや名殘三日の月　【一　葉　集】

からの字につれて渡るや鳥の聲　【未　が　ら　し】

此句は續猿蓑集の馬莧、沾圃、里圃の三吟歌仙に

雀の字や揃ふて渡る鳥の聲　馬　莧

とある發句で、作者は鷺流の狂言師馬莧である。

詫てすめ月網笠の窓を家として　【泊　船　集】

風國の誤寫である。天和二年の武藏曲に

うかれ行月網笠の窓を家として　角　止

侘てすめ月侘齋がなら茶歌　芭　蕉

と二句ならんでゐるので、筆寫の際うつかり隣の句なそれと氣附かないで寫してしまつたのだらう。

野の宮の花表に蔦もなかりけり　【同　】

蓼太の芭蕉句解に「涼菟句選に出たり」―と稱する如く、門人涼菟の作である。元祿十二年版の皮籠摺に涼菟自らの作なる事を明記してあるからには疑ふ處はない。

船となり帆となる風のばせをかな　同

傍註に「此句翁の製なりとある人申されし、實否はしらず」と云つてゐる。播磨の春也の奄徒抄に

船にたり帆になり風の芭蕉かな　一晶

とあつて作者は芳賀一晶である。

たなばたにかさねばうとし絹合羽　【芭　蕉　句　選】

芭蕉の吊ニ初秋七日雨星ーと題する文にある句で小文庫及び泊船集にも芭蕉は小町の歌によつて一高水に星も旅寢や岩の上」と詠じ、杉風が遍昭のうたとして此句を吟じたことが記してある。

終夜秋かぜ聞くやうらの山　【同　】

奥の細道に「曾良は前の夜此寺に泊りて、終夜秋風聞やうらの山、と殘す」と大聖寺の城外全昌寺で、一夜の隔て𛂞悲しんで居るから曾良の發句に相違ない。

出羽の國に越へ、陸奥のさかひを過て

そのかみは谷地なりけらし小夜砧　【同　】

猿續蓑集にある、作者は出羽の岸本公羽である。これは續猿蓑の書損ではなくて、華雀の誤讀である。

ちかづきに成つて別るゝかゝし哉　【芭蕉翁句集拾遺】

此の句の作者は惟然坊である。秋擧の惟然坊句集に
伊賀意專老人宛の手紙に

先日奈良越にて

近付になりて別るゝ案山子かな
錢百のちがひが出來た奈良の菊

右兩句いたし申候、御聞可レ被レ下候

とある。意專は猿雖の薙髮後改めた號である。

深川やばせをゝ富士に預け行　【芭蕉翁句選拾遺】

甲子吟行による千里の句である。句選拾遺の傍註「貞元道記」は、貞享元年芭蕉翁道の記の略稱で、泊船集にはさう紀行名がなつてゐるが、甲子吟行と同文で、兩方とも作者チリと明記してある。

秋の暮男はなかぬものなればこそ　【同　】

調寶の俳諧白根獄といふ貞享二年の刊本に

秋は夕べな男は泣ぬものなればこそ　才麿

と椎本才麿の作が揭げてある。恐らくそれが誤傳されて、芭蕉の句にされたのだらう。

によき〳〵と帆柱寒き入江哉　【反古集】

芭蕉句選年考の校訂者は俳要抄に作者湖春とあるといふて居るので、其の註を信じてこれを除く。但し積翠は「何れの年の吟にや未レ知」とだけ云つて深くふれて居ない。

木曾の虚翁が許にやどをもとめて

木曾殿とうしろ合せの寒哉　【芭蕉翁句解參考】

支考の葛の松原に

木曾塚に旅寢せし比

木曾殿と脊あはする夜寒哉　又玄

兀峰の桃の實集には

木曾殿と脊あはする夜寒哉　又玄

車庸の己が光には

木曾塚無名庵に一夜あかして

木曾殿と脊な合す夜寒哉　伊勢　又玄

とあつて、芭蕉生前の板本三書に又玄とあるから、芭蕉の作でない事は確實である。ところが元祿五年の季範の編集「きさらぎ」には

木曾殿と脊合する夜寒哉　尾州　越人

ともなつてゐる。

川中の根木によころぶ涼みかな　〔炭　俵〕

冬枯の礎に今朝みるとさか哉　〔同　　〕

芭蕉が元祿七年十月大阪の花屋裏で書いた涙花の遺言状に、「羽州岸本氏の發句、炭俵に紛入候。公羽と可レ有レ之、杉風より御斷賴入候」とあるが此二句である。種文の猿舞師には兩句とも「右の句、翁の句也と誰やらが集に書入たるは、翁と公羽の文字を讀たがへると、史子（史邦）申されける」と同文の註が附いてゐる。

雪ごとに梁(うつばり)たはむ住居かな　〔小　文　庫〕

岱水の發句で、その十吟歌仙に

雪ごとに梁たわむ住居哉　岱　水
けぶらで寒し濾の鹽やき　路　通
さまざまの魚の心も年くれて　芭　蕉

とあつて、芭蕉は第三を附け發句の作者は岱水である。

水鼻にまこと見せけり御取越　〔芭　蕉　句　選〕

句選年考に芭蕉が明石去水といふ者に送つた書翰を引いて、其の中にある句だと考證して居るが、許六と李由の共著韻塞の十卷十月の部に、作者は近江の蕉門十那となつて居る。

薄氷折目のまゝの茶巾かな　〔芭蕉翁句選拾遺〕

江戸の蕉門普船の作である。後に其角に屬して介我といつた人である。月の本素水の芭蕉翁一代集にその事が指示してある。

着て立てば夜の衾もなかりけり　〔芭蕉袖日記〕

丈草の句である。蝶夢が安永四年に刊行した丈草發句集は、追加の部に入れて「着てたてば」となつて居る。

飛ものは雲ばかりなり石の上　〔句　甲〕

下野國那須野の殺生石に芭蕉の此の句碑があるが、蝶夢の名所小鏡によると作者は越中の俳人麻文である。

山は皆蜜柑の色の黄になりて　〔一　葉　集〕

笈日記の元祿七年九月八日に「その日はかならず奈良までといそぎて、笠置より河舟にのりて錢司とい

ふ所を過るに、山の脇すべて蜜柑なり。されば先の夜ならん、

山は皆蜜柑の色の黄になりて

と承し句は、正しく此處にこそ候へと申ければ、あはれ吾腸を見せけるよと阿叟も見つゝわらひ申されし」とあるのを風國は發句と思ひ込んだらう。

鷺の足雉子脛ながく繼そへて　【芭蕉翁發句集】

信德の七百五十韻の第八が五十韻で了つてゐるので、芭蕉はその後を繼いで、次韻を興したのである。だから次韻の最初に

挨拶を爰では仕たい花なれど　正長
又かされての春もあるべく　常文

といふ七百五十韻の末の二句を前に置いて、「鷺の足」と附けて行つたのである。

有蘭草菊宜止　【一葉集】

其角の虛栗に重陽三句として

○風ノ菊ノ盞笠ノ冠止　嵐朝
○有ニ蘭ノ草ノ菊ノ宜止　芭蕉

○俳門ノ有ニ芳菊一止　嵐雪

としてあるが、これは漢句である。傍訓によると

にほひぐさありそへがみによろしといへり

と訓むのである。

かけ乞に戀のこゝろを持せばや　【一串抄】

元祿三年の深川夜遊「青くてもあるべきものを唐がらし、芭蕉」を發句として四吟歌仙の裏に

ふすま摑んで洗ふ油手　岱水
掛乞に戀のこゝろをもたせばや　芭蕉
簗簾にみそるゝド加茂の社家　洒堂

とある戀句の附けである。

芭蕉連句集成

芭蕉連句集成

勝峰晋風編

百韻の部

江戸兩吟集 其の一 延寶四年作

桃靑時代、山口信章（後素堂）と兩吟にて菅神奉納の二百韻を試み、延寶四年春三月『江戸兩吟集』の標題にて開板せるものである。後、延享四年、一浮齋瑩永「芭蕉素堂兩聲たる梅花の韻は亡父一葉軒一永が古文庫より出たり」として此の一卷を『梅の牛』の題名にて再刻したものが世に行はれる。『江戸兩吟集』は今その所在を知らず、文政四年三月柳亭種彦が古板本より筆寫せるもの、並に『奉納貳百韻』と題せる別寫本を本文とし、『梅の牛』及び『一葉集』と對校し兩者の異同は別に卷末に掲ぐ。

此梅に牛も初音と鳴つべし　桃青
　ましてや蛙人間の作　信章
春雨のかるうしやれたる世の中に　、
　酢味噌まじりの野邊の下萠　青
雷盆を（一）若紫のすりごろも　、
　（二）むかし働の男ありけり　章
骶の（三）ひらけ初たる宵の月　、
　つまたてゝゆくあし引の山　青
五寸程手の屆かざる歌の道　章
　ひとかいあまりすみよしの松　青
淡路島（四）仕形ばなしの餘所に見て　章
　とも呼（五）とりの笑ひ聲なる　青
（六）靑鷺の又白鷺の權之進　章
　森の下風木（七）葉六ぱう　青
眞葛原ふまれてはふて逃にけり　章

(八)むかし島までむがうなびかぬ　青
戀の秋爰にたとへの(九)有磯海　章
吉祥天女もこれ程の月(一〇)　青
あつらへの瓔珞かゝる山かつら　章
松のあらしの響く耳たぶ(一一)　青
大黒の袋は花にほころびて　章
(一二)霞にもろき天竺のきぬ　、
今朝の雪貧女一文が糊を解ク　青
風進退を削る竹べら　章
臍の緒の吉原がよひきれはてゝ　青
(一三)かみなりの太鼓うらめしの中　章
地にあらば石臼などゝちかひてし　青
末の松山莖漬の水　章
千賀の浦しほがま居(一四)て場の隅　青
雪隱さびて見へ渡るかな　章
たまさかにことゝふ物はげたの音　青
なを山ふかく入し水風呂　章
よしやよしこぬか袋の濁る世に　青
千里をかける馬士はあれども　章
(一五)西の月見ぬ六道の札の辻　青
えんまの町〳〵引わたす霧　章

二ウ
煩惱の本綱中づな末の露　青
人足あれば山姥もあり　章
谷の戸をたゝき起して觸流し　青
諸鳥の小頭うぐひすのころ　章
花をふんですゝめは千(一六)の歩行の衆　青
上野下(一七)屋の竹のはるかぜ　章
鍔目貫朝の霜に朽はてゝ　青
鑓は毛ぎれ虫は音をいれ　章
ことあらばやせたれどあの薤薄　青
もゝとせの餓鬼も人數の月　章
大無盡世尊を親に取立て　青
公儀の掟はのがれ給はず　章
土も木も三間(一八)ばりに野づら石　青
此山ひとつ隱居料にと　、

三
富士の獄いたゞく雪を剃こぼし　章

人穴ふかきはや桶の底　青
蝙蝠や三角の紙の散まよふ　章
山椒つぶや胡椒なるらん　青
小枕やころ〱ふしは引たふしは　章
臺所より下女のよびごゑ　青
通路の二階はすこし遠けれど　章
かしこは揚屋高砂の松　青
とりなりを長柄の橋(一七)もつくる也　章
能因法師若衆のとき　青
照つけて色の黒きや(二〇)侘つらん　章
わたもち(二一)のみいら眼前の月　青
飢饉年よはり果ぬる秋のくれ　章
多くは傷寒荻の上風　青
一葉づゝ柳の髮やはげぬらん　章
これも虛空にはひ〱げじ〱　青
判官の身はうき雲のさだめなき　章
時雨ふり置むかし淨瑠璃　青
おもくれたらうさいかたばち山端に　章
松ふく風や風呂屋ものなる　青
君愛にもみの二布の下紅葉　章
契りし秋は產婦なりけり　青
月すごく草履のはなを中絕て　章
河内の國へかよふ飛石　青
四疊半くつ屋の(二二)里の浦近く　章
浪に芦がきつかまつつたり　青
時は花入江の鴈の中歸り　章
やはら一流松に藤まき　、
ナいでさらば魔法に春を(二三)とめて見よ　青
七リン響(二四)く入相のかね　章
藥鍋三井の古寺波あげて　青
落させられし宮のうち疵　章
階の九ツ目より八ツ目より　青
湯立の釜に置合せあり　章
旣に神にじりあがらせ給ひけり　青
白髭殿は御年よられて　章
つく〲と向にたてる鏡山　青

わけ入ル部屋は小野の細みち　章
忍ぶ夜は狐の穴にまよふらん　青
あぶらに揚しねづなきの聲　章
唐人も夕の月にうかれ出て　青
古文眞寶氣のつまる秋　章
名ウ 酒の露たはけ起て白雲飛ブ　青
天狗どふしや人のたふれや　章
ねのよわき杉の大木大問屋　青
跡をひかへて糸荷より來る　章
秤にて日本の智惠や懸ぬらん　青
霰の玉をつらぬかれけり　章
花にわりご麓の里は十園子　青
日坂こゆれば峰のさわらび　章

〔一〕『梅の牛』に「樹鉢に」
〔二〕同「庭働の男置キけり」
〔三〕同「ひらけかゝりし二日月」、『奉納貳百韵』・『一葉集』に「ひらけそめたる空の月」
〔四〕『梅の牛』に「淡路島さいさ囀の」
〔五〕同「友呼ぶ千鳥」
〔六〕同「去程に面白鷺の欃の丞」、『一葉集』に「青鷺のまた白鷺の欃の允」
〔七〕『梅の牛』に「下風ざわ〳〵さ」
〔八〕同・『奉納貳百韵』・『一葉集』に「虫鳴までに」
〔九〕同・『一葉集』に「有てさよ」・『奉納貳百韵』に「道ぞさよ」
〔一〇〕『梅の牛』に「天女もそれ」
〔一一〕『江戸兩吟集』種彦註に「響くに似たり」
〔一二〕『梅の牛』に「、海苔もろき」
〔一三〕同「ほりこむ返事」
〔一四〕同「鹽釜居ん場の隅」
〔一五〕同「雨の月」
〔一六〕同「千の御歩行の衆」
〔一七〕同「上野淺草」
〔一八〕同「土も木も三間ばかりに」
〔一九〕同「橋やつくるらむ」
〔二〇〕同「黑きに住けらし」
〔二一〕同「腸もちの木の」
〔二二〕同「府屋の里の」
〔二三〕同「に止め見よ」
〔二四〕同「七厘暗く」

江戸兩吟集　其の二　延寶四年作

菅神奉納二百韵の一巻なるが、前記『梅の牛』

には此の卷を載せず、仍つて『江戸兩吟集』及び『年納貳百韻』を本文とし、『一葉集』と對校して異同を註記すること前卷と同じ。

梅の風俳諧國にさかむなり　信章
　こちとうづれも此時の春　桃青
さやりんず霞のきぬの袖はえて　、
　けんやくしらぬ心のどけき　章
してこゝに中比公方おはします　、
　かたぢの空のはげてさびしき　青
海見えて筆のしづくに月少し　、
　趣向うかべる船のあさ霧　章
いかに漁翁心得たるか秋の風　青
　實土用なりあまの羽衣　章
うつせみも吉野の山に琴ひきて　青
　青嵐ふくひとよぎりふく　章
松杉の木の間の庵京ばなれ　青
　糞擔桶きよし村雨の空　章
夕陽に牛ひき歸る遠の雲　青
　老子のすがた山の端がくれ　章
寓言のむかしの落葉かきすてゝ　青
　桐壺はゝ木ゞしめぢ初茸　章
鍋の露夕の煙すみやかに　青
　釘五六升こけらもる月　章
古里のふるがねの聲花散て　青
　志賀山の松ふるとふく風　、

二

さゞ浪や二藏が袖のさえかへり　章
　あかゞり洗ふあし原のすゑ　青
ある説に泡のかたまる石一ツ　章
　玉子の前やうちくだく覽　青
傳聞唐のやうかんかすていら　章
　上碧落より下は杉折　青
付うどのたとひ千尋のそこまでも　章
　親類分はのかれがたしや　青
世間に大名あれば町人あり　章

柳は綠かけは取がち　青
古帳の(五)横點を引朝霞　章
火鉢をはりし氷ながるゝ　青
かねのあみかゝれとてしも浪の月　章
河童のいけどり秋をかなしむ　、

二ウ

うそばなし聞ばそなたは荻の聲　青
地ごくのゆふべさうもあらうか　章
飛螢水はかへつてもえあがり　青
熊手鳶口勢田の長はし　章
釣瓶取龍宮までも(六)搜ぬらん　青
龜はたちまち下女にあらはれ　章
老鶴の隱居さまへの御使に　青
白むくそへて粟五十石　章
田舍寺跡とぶらひてたび給へ　青
ぬるい若衆も夢の秋風　章
床は海朝鮮人のねやの月　青
虎の毛ごろも別行露　、
くろがねの築地の崩花をふんで　章
草もえあがる秦の虫くそ　青

三

朝霞徐福が(七)賢のうり藥　章
まづ壺ひとつ乾坤の外　青
瀨戸の土金輪際(八)より堀ぬきて　章
辨才天に鯰さゝぐる　青
かまぼこの鹽ならぬ海このところ　章
その夜は(九)不二に足打の山　青
かんな屑たいまつはつとふりあげて(一〇)　章
見よ〱成佛はきだめの虫　青
雞の御齋を中今朝の月　章
龍田の紅葉豆腐四五丁　青
むら時雨衆道ぐるひの二道に　章
人死の戀風さはぐなり　青
大火事を袖行水にふせぎかね　章
やう〱こゆる土手の松山　、

三ウ

日本橋ちんば馬にて踏ならし　青
方々見せうぞ佐野の源助(一一)　章
かいつかみはねうち拂ふ雪の暮　青

鷲はかへつて鳶となりけり　章
浪に聲芦にものいふ世の中に　青
何とて松はすねて見ゆらん　章
薄柿と茶ともわかれぬ峰の雲　青
淺間の土を燒歸しゝて　章
物語伊勢白粉とよまれたり　青
剃刀も內侍所も水の月　章
平家の秋に痤あれ行　青
のうれんかけしとこやみの霧　章
衣屋も既に彌勒の花待て　青
かねの御嶽を兩替の春　、

名
岩橋のりんとかけたる一かすみ　章
天につらぬく虹のつゝぱり　青
その四隅多門は手木を横たへて　章
日傭の札に惡魔おさむる　青
獨過都鄙安全になすべしと　章
慈悲はかみよりさがる米の直　青
人として思はざらんや親の五器　章
願によつて雪の竹箸　青
いきの松ひねり艾葉ののる迄も　章
氣根の色を小謠に見す　青
朝より庭訓今川童子敎　章
さてこなたには二條喜右衛門　青
宿の月城を弓手に肘曲り　章
後陣はいまだ横町の露　青

名ウ
上々新蕎麥面もふらず切て出　章
大根の情たちかくれけり　青
終夜此本草を讀誦する　章
南無いき藥師來迎の時　青
紫の蛸は雲路にはひ出て　章
とがり矢二筋まなばしの先　青
軍は花追手勝手をもみ合　章
其勢何百きさらぎの卷　青

〔一〕『梅の牛』『一葉集』に「春ふいごふく風」
〔二〕『梅の牛』に「袖にさえかへり」
〔三〕同「何さゞけたさひ」

〔四〕同「世中よ大名あれば」
〔五〕同「古帳に」
〔六〕同「さゝすらん」
〔七〕同「似せいうり薬」
〔八〕同「金輪際をほりぬきて」
〔九〕同「その夜の不二に」
〔一〇〕同「ふり立て」
〔一一〕同「佐野ゝ源介」
〔一二〕同「岩橋や」
〔一三〕同「艾薬の百までも」

江戸三吟　其の一　延寶六年作

京都の伊藤信徳を江戸に迎へ、信徳が政定及び仙菴と試みたる『京三吟』ならび、『江戸三吟』と題し京都の書肆寺田重徳方より板行せるである。信徳・桃青・信章の三吟三百韻にて、拗堂著『俳諧三人張』に再刻せる以外覆刻本を見ない。蝶夢の『芭蕉翁俳諧集』には各巻一折づゝを掲ぐるのみである。『一葉集』及び『袖珍鈔』は全巻を収録してあるが、『江戸三吟』と對校するに順序に狂ひあり、本文亦多少の異同がある。

物の名も蛸や古郷のいかのぼり（紙鳶）　信徳
あふのく空は百餘里の春　桃青
嶺に雪かねの草鞋（わらんぢ）解そめて　信章
千人力の東風（こち）わたる也　德
〔三〕熊つかひむかへば月の薄曇り　青
水右衛をわらふ初かりの聲　章
墨の髭萩の下葉のうつろひて　德
尾花か袖に鏡かさうか　青
判はんじいかなる風の閑にふく　章
おつとは山伏海士の呼聲　德
一念の鰻（うなぎ）となつて七まとひ　青
かたちは鬼の火鉢いたゞく　章
紙ふのり伊勢の國より登りけり　德
神のいがきを越（こえ）し壁ぬり　青
總階子夜の契りやきれつらん　章

さすがわかれのちんばひくみゆ　徳
骨うづき忍び笠にて顔かくし　青
立出るよりふまれての露　章
夕間暮小風呂に流す水の月　徳
木綿ざらさの紅葉かたしく　青
花に風荒木珍太をあたゝめて　章
むねにつかえし霞はれゆく　徳
天津鴈借錢なして歸りけり　青
勘當ゆるす二月中旬　章
釋迦已に跡式讓り給ふらん　徳
八萬諸聖經古手形なり　青
腰張や十方世界法の聲　章
凡命は赤土の露　徳
いつ迄か砲碌賣の老の秋　青
ころばぬやうに杖でゆく月　章
駒留て下踏打たゝく雪の暮　徳
東坡が小者竹の一むら　青
其里へ石摺の文かよひけり　章
緞子の染木藍のさすまで　徳
土用しれ山は紺地の青嵐　青
谷水たゝえて蔓惟のごとし　章
異風者金柑淵に遣捨る　徳
吹矢を折て墨染の月　青
秋の哀隣の茶屋もはやらねば　章
松虫鈴虫囀たふるゝ　徳
戀草をつれて走りし末がれて　青
其業平に請人やなき　章
木賊色の狩衣質に置し時　徳
貧乏神の社見かぎる　青
出雲にて世間咄のわる口に　章
松江の浦の相店のかゝ　徳
塗桶に鱸のわたをつみかけて　徳
ひらめ白うらむくの黒鯛　章
花なるらん龍の宮古の驕りもの　徳
父大臣のかねつぶす春　青
手道具や十二ひとへの薄霞　章

笈の中より遠山の月　徳
小男鹿の妻をとられな宿かすな　青
公儀のおふれむさし野の秋　章
闕所もの拂ふ草(五)より草の露　徳
火つけの螢とられゆくらん　青
本三位戾子をはりたるごとくにて　章
貢の箱や粭おこしなる　徳
かたぐまに難波の梅の兄弟　青
貫之が筆朝書の春　章
それの年(六)德壺利の氷とけそめて　徳
濕飩きり落す橋の下水　青
つゐものに中の間の障子引放し　章
戀のやごろさねだり來にけり　徳
買かゝりしれぬ憂名を付かけて　青
いつの大よせいつの御一座　章
朝比奈の三ぶ樣四郎さま五郎樣の　徳
地獄やぶりや芝居やぶりや　青
小柄ぬき釵の枝のたわむ迄　章
滅金の日影にぎる修羅王　徳
千早振木で作りたる神姿　青
岩戸ひらけて饅頭の見世　章
錢の文字一分もいまださだまらず　徳
捉のかはる六道の月　青
秋やむかし二代目の地藏出たまふ　章
鎧腹帶のこしをく露　徳
花の枝綺麗高麗切とりて　青
煮しめの蕨人參甘草　章
春霞氣をひき立る薄醬油　徳
杓子はこけて足がひよろつく　青
やゝしばし下女と〳〵のたゝかひに　章
赤前だれの旗をなびかす　徳
酒桶に引導の一句しめされて　青
つら〳〵おもんみれば人は穴藏　章
うらがへす壘破れて夢もなし　徳
蚤にくはれて來ぬ夜數かく　青
君ゝ〳〵爪の先程おもはぬか　章

しのぶることのまくら點とり　　徳

戀よはし内親王の御言葉　　青

乳母さへあらば黒がねの楯　　章

いもの(疱瘡)神鬼神なりとも闇の月　　徳

ましてや面は張貫の露　　青

翁草布の衣裳をひるがへし　　章

松はいく世の青砥左衛門　　徳

北條の宿を嵐に尋ぬれば　　青

彼是をつぶしてひとつになる雲　　章

火神鳴たゝらをふんでひゞくらん　　徳

菅丞相も本庄の末　　青

江戸の花延喜このかたの時とかや　　章

鷺白鳥も驚かぬ春　　執筆

〔一〕『芭蕉翁俳諧集』に「水衣に笑ふ」、『一葉集』に「水衣た咲ふ」

〔二〕『袖珍鈔』に「花に嵐あきみ誹諧」

〔三〕『一葉集』に「雪の音」

〔四〕同「投捨る」

〔五〕同「拂ふ露より」

〔六〕同「それのさし肉の氷」

江戸三吟　其の二　延寶六年作

江戸三吟の第二の卷である。前卷と同じく『芭蕉翁俳諧集』には一折を載するのみで、『一葉集』及び『袖珍鈔』には全卷を收めてある。

あら何ともなやきのふも過てふぐと汁　　桃青

寒しざつて足の先迄　　信章

居合ぬき霰の玉や亂すらん　　信徳

拙者名字は風のしのはら(篠原)　　青

相應の御用もあらば池のほとり　　章

海老ざこ(雜魚)まじりに折節は鮒　　徳

醬油の後は湯水に月澄て　　青

更てしば〳〵小便の露　　章

きゝ耳や餘所にあやしき狄の聲　徳
　難波の芦は伊勢のよもいち　青
屋敷がたあなたへざらりこなたへも　章
　爲替小判や袖にこぼるゝ　徳
ものぎわよ理りしらぬ我泪　青
　干鱈四五枚是式の戀を　章
寺のほりおもひ初たる衆道とて　徳
　みじかきこゝろ錐で肩つく　青
ぬか釘のわづかの事を言つのり　章
　露がつもつて鐘鑄の功德　徳
うそつきの坊主も秋やかなしむらん　青
　其一休にみせばやの月　章
花のいろ朱鞘を殘す夕間暮　徳
　いつやきつけの岸の款冬　青
芳野川春もながるゝ水茶碗　章
　紙袋より粉雪とけゆく　徳
風青く楊枝百本けづるらん　青
　野郎ぞろへの紋のうつり香　章
双六の菩薩も爰に伊達姿　徳
　衆生の錢をすくひとらるゝ　青
目の前に島田金谷の三瀬川　章
　から尻しづむ淵は有けり　徳
小蒲團に大蛇の恨み鱗形　青
　かねの飯櫃湯となりし中　章
一二獻跡は淋しく暮過て　徳
　月はむかしの親仁友達　青
蛬無筆な佗そきり〴〵す　章
　胸算用の薄みだるゝ　徳
勝負も半の秋の濱風に　青
　われになりたる波の關守　章
あらはれて石魂忽飛千鳥　徳
　古い地藏の茅原更ゆく　青
鹽うりの人かよひけり跡見へて　章
　文正が子を戀路ならなん　徳
今日より新狂言と書くどき　青
　物にならずにものおもへとや　章

或時は藏の二階に追込て　德
　何ぞと問ば猫の目の露　青
月影や似せの琥珀に曇るらん　章
　隱元衣うつゝか夢か　德
法の聲卽身卽非花散て　青
　餘波の鴈も一くだりゆく　章
上下のこしのしら山薄霞　德
　百萬石の梅匂ふなり　青
むかし棹今の帝の御時に　章
　守隨ぎはめの哥の撰集　德
掛乞も小町の方へといそぎゆ　青
　これなる朽木の横にねさうな　章
小夜あらしとぼそ落ては堂の月　德
　古入道は失にけり露　青
海尊やちかいころまで山の秋　章
　さる柴人がことの葉の色　德
縄帶のそのさまいやしとかゝれたり　青
　これぞ雨夜のかち合羽なる　章

飛乘の馬からうとや時鳥　德
　森の朝影(二)狐ではないか　青
二柱彌右衛門と見えて立かくれ　章
　三笠の山をひつかぶりつゝ　德
萬代の古着かはうとよばふなる　青
　質のながれの天の羽衣　章
田子の浦波打よせて負博奕　德
　不首尾で歸る海士の釣舟　青
前は海入日を洗ふうしろ疵　章
　松が根枕石のわたとる　德
つゞれとや仙(三)女が夜なべ散杪　青
　瓦燈の烟に佛の月　章
我戀を鼠のひきしあしたの秋　德
　泪しみたるつききれ(四)の露　青
衣裝繪の姿うごかす花の風　章
　匂ひをかくる願主しら藤　德
鈴の音一貫二百春くれて　青
　片荷はさいふめては香久山　章

雲介(五)がた六引空に來にけらし　德
　幽靈となつて婁婁の小盞ゝ　青
無緣寺の橋の上より落さるゝ　章
　都合その勢万口まゐり　德
祖父(ヲヂ)祖母(ウバ)早うつたてやものどもとて　青
　鼓をいだきわらぢ(草鞋)しめはく　章
米袋(六)口をむすんで肩にかけ　德
　木賃(チン)のゆふべ風の三郎　青
韋(イ)駄(ダ)天もしばし休ふ早飛脚　章
　出せや出せとせむる川舟　德
はしり込追手顏なる波の月　青
　すは請人か芦の穗の聲　章
物の賭(カケ)振廻にする天津鴈　德
　木(キ)鑵(ハン)子(ス)の尻山の端の雲　青
人形の鍬の下より行嵐　章
　はたけにかはる芝居淋しき　德
此翁茶屋をする事七度迄　青
　住よし諸(しろ)白(はく)砂ごしの海　章
淡路潟かよひに花の香をとめて　德
　神代このかたお出入の春　執筆

〔一〕『袖珍鈔』に「新狂言と書ききく」
〔二〕『一葉集』に「森の朝風」
〔三〕同「つゞれさや仙女の」
〔四〕同「突きりの露」
〔五〕同「雲介の」
〔六〕同「米俵」

江戸三吟　其の三　延寶六年作

江戸三吟の最後の百韵である。抱室の『三人張』には「延寶六之春　三字中略之百韵　三吟」とある。本文の校合には『江戸三吟』の原本及び『一葉集』・『袖珍鈔』を用ゐた。『俳諧集』は前二卷と同じく一折のみを擧ぐ。

さぞな都淨瑠璃小哥は爰の花　信章
　霞とゝもに道化(ダウケ)人形　信徳
青いつら笑ふ山より春みえて　桃青
　土器(かはらけ)の瀧のめばのむほど　章
聲がたつ嵐に波のあそび舟　徳
　鴈よ千どりよあほう友達　青
五間口(ごけんぐち)淋しき月に其名をうる　章
　松を證據(マヽ)に禮金の秋　徳
手かけ者相とりのやうに覺えたり　青
　おもひのきづなしめごろしして　章
木綿賣ある夕暮のことなるに　徳
　門ほと〳〵とたゝく書出し　青
鎌田段身(一)體むきをたのまれて　章
　二人の若の牢人(らうにん)小姓　徳
竹馬にちぎれたりとも此具足　青
　つゞけやつゞけ紙張の母衣(ほろ)　章
心太水の逆卷く所をば　徳
　渋せき入れて大釜の淵(二)　青
落(三)瀧津地獄の底へさかさまに　章
　鐵杖鯉の骨をくだくか　徳
酒の月後妻(うはなり)うちの御(四)振舞　青
　隣の内儀相客の露　章
眉をとり袖(五)ふさがする花芒　徳
　野風も今は世帯持なり　青
鍋の尻入江の汐に氣をつけて　章
　のつぺいうしと鴨の鳴らむ　徳
山陰に精進落ちて松の聲　青
　三十三年杉たてる庵　章
開帳や俊成作の本尊かけて　徳
　寂蓮法師小僧新發意　青
伊呂波韻横立山もなかりけり　章
　雲を增補に時雨ふる秋　徳
影ひとり長月頃の氣根もの　青
　野の宮の夜すがら袷一枚　章
駕籠かきも浮(六)世をわたる蜉蝣なれや　徳
　まよひ子の母腰がぬけたか　青

傷寒を人〳〵いかにととがめしに
悪鬼と成て姿はそのまゝ
正三の書置れたる物がたり
こゝに道春これもこれとて
前は池東叡山の大屋敷
花の盛に町中をよぶ
青柳の髪ゆひ〳〵〳〵やい
舞臺に出る胡蝶鶯
つれぶしには(七)哥うたひの蛙啼
禿が的に雨の夕ぐれ
戀の土手雲な(八)へだてそ打またげ
御朱印使風の玉章・
心中に山林竹木指きること
末世の衆道菩提所の月
十歳の和尚のうは氣秋ふけて
彌陀はかゝさま消やすき露
蓮のいと組屋の店の風凉し
わかいもののよる暖簾の波

章 徳 青 章 徳 青 章 徳 青 章 徳 青 章 徳 青 章 徳 青

戀の淵水におぼるゝ人相あり
首だけの思ひつゝしみてよし
うき中は下せうもかれてよは〳〵と
家〳〵の書に寝汗かゝるゝ
しなひうち大夜着の裏表迄
鞍馬僧正床入のやま
若衆方先つくしには彦太郎
かつら姿や右近なるらん
暮の月橋の精あらはれて
すもゝ山もゝ悉皆成佛
見性の眼のひかり錫の鉢
髑髏のめぐり因果則
ゐいやとさ爰にひとつの(九)片輪もの
敷がねとして十貫目箱
代(一〇)八やしのび車のしのぶらん
日傭をめして夕がほの宿
山雀のかきふんどしに尻からげ
青茶の日白羽織着て行

章 徳 青 章 徳 青 章 徳 青 章 徳 青 章 徳 青 章 徳 青

〔一〇〕青葉の木の實のうみや流るらん　章
よこねおろしに谷ふかき月　徳
山高く湯船へだつる木造し　青
淺間の烟り輕石がとぶ　章
しらなへし花の雪吹の信濃なる　徳
甲頭巾に駒いはふ春　青
熊坂も中間かすみ引つれて　章
山また山や三國の九郎介　徳
關手形安宅にはやく着にけり　青
松風落て漉紙をとく　章
ふとものの庭の芭蕉葉五六端　徳
そこ〳〵のかたはら横町の秋　青
邯鄲の里の新道〔一一〕月明て　章
よく〳〵おもへば會所を求る　徳
千句より十萬億も鼻の先　青
われらがための守武菩薩　章
音樂の小弓三味線あいの山　徳
四竹さはく竹の都路　青
姥そひて御伽比丘尼ゆゝござる　章
後家ぞまことの佛にてまします　徳
讀られし黄金の膚こまやかに　青
小ぬかみがきの革袋あり　章
旅枕油くさゝ〔一二〕や嫌ふらん　徳
鰯でかりの契りこ〔一三〕がるゝ　青
はかゆきにざく〳〵汁の薄情　章
連理の箸のかた〔一四〕しをもつて　徳
實や花白樂天が燒筆に　青
唐土へ歸る羽箒の鷹　執筆

〔一〕『一葉集』に「進退むきた」
〔二〕『三人張』に「大釜の割」
〔三〕同「あたまから地獄の底へずつぽんざ」
〔四〕同「後妻うちいさふらはむ」
〔五〕同「袖にさかする」
〔六〕同「鴬かきて」
〔七〕同「其歌諷ひ」
〔八〕『一葉集』に「雲な隱しそ」
〔九〕同「ひさつの堅いもの」
〔一〇〕同「青葉に木の實のうみやながすらん」

〔一一〕『三人張』に「里の眠りの」

〔一二〕同「旅枕油臭きや」

〔一三〕『一葉集』に「ちきり燒るゝ」

〔一四〕『三人張』に「箸の片端を持て」

芝肴集　其の一　延寶六年作

此の三吟二百韻は『芭蕉翁俳諧集』には各一折を採り、延寶天和年中の作とあるが『一葉集』には延寶六年秋と推定して居る。作者の一人似春は小西氏・その著『芝肴集』に收めて出板した。枯魚の校本『芭蕉翁俳諧大全』は『芝肴集』より再錄し、『一葉集』は其の引用書を擧げて居ない。本文は大體枯魚の校本によつて『一葉集』『拾珍鈔』を以て校合した。

於四友亭興行

須磨ぞ秋志賀奈良伏見でも是は　似春

ほの〳〵の浦さし添へてつき月　四友

沖の石玉屋が袖の霧晴て　桃青

見きられてや鳫の啼らん　、

山颪小柴の蔭にさつと吹　春

白雲輕き手水手〔一〕拭ひ　、

紺淺黄鹿子交りに櫻咲　青

ふもとは藤のつゞら明行　、

ウ

盗人と三笠の春〔二〕や呼ふらん　春

火付の野守とらへられ〔三〕たり　青

草薙の風公儀より烈しくて　春

御宿老には白髭の神　青

置頭巾額に畳む漣や　春

洲崎の松のひとり狂言　青

てうち〳〵眞砂の鶴の子を思ふ　春

涎のいとに撥通ふらむ　青

又や來る酒屋門前の物羅ひ　春

南朝四百八十目米　青

芳野山亂れて武士の世也けり　春

波こす岩を切つてのはつての　青
花の庭月の夜嵐ねめ付て　春
　青柳弱き女房あなづる　青
二
血の道氣(四)うらみ幾日の春の雨　春
　胸の煙に捜す茶袋　青
朝飯(五)の待間ほどふる我戀は　春
　時雨の松の鍼立を呼ぶ　青
お夜づめに這まつはりし蘿　春
　寢まきの月はいたうくらきに　青
燒亡や褌さはぐ秋の風　春
　芦の丸家にうつけ有けり　青
うら千鳥踏れて歸る浪のおと　春
　さし出の磯に住天の邪魔　青
甲斐が根や須彌の麓に分入ば　春
　口上人の影てらす也　青
瓦燈の灯沙らぬ宿に小夜更て　春
　神代の鼠まくら驚く　青
二ウ
明ぬれば荻原どのゝ(六)鶉なく　春
　かぜに芒のぬるい若黨　青
お使に行とも秋の果所なき　春
　二間ほどかく文箱の露　青
宿の月やりてや鞘をはづすらん　春
　既によし(七)原の合戰破れし　青
流行唄さすが名を得し其身迚　春
　丁稚小坊主男業平　青
ひや飯を鬼一口に喰てけり　春
　是生滅法生姜梅漬　青
煩惱の夢を覺して棚捜し　春
　冥きに迷ふ道は紙燭で　青
くちをしの花の契りやぬく太郎　春
　ふられてけさはあたら山吹　、
三
ひよんな戀笑止がりてや啼蛙　青
　あたまくだしに通路の雨　春
御(八)情にあづかるほどの木也とて　青
　根なしかつらのかゝる浪人　春
長髮の霜より霜に朽んとは　青

藥違ひに風寒きまで　春
幾月の小松が原や隱すらん　青
とへど岩根の下女は答へず　春
磯清水汝が(九)ながれを立ぬかと　青
いかつに情を杓で汲よる　春
戀衣紺の袂にはし折て　青
雲引かづく星の通ひ路　春
ほと〳〵と天の戸ほその暮の月　青
帝近所へ夜嘶の秋　春
三ウ
錦かと田樂そむる龍田川　青
山は時雨て摺木の音　春
うき雲のそなたに近き隱れ里　青
日影をぬすみ仙境に入　春
幻を提灯持や尋ぬらん　青
夢はやぶれて杖と草履と　春
(一〇)しにはづれ此頃の禮御門まで　青
衣を肩にかゝる仕あはせ　春
酒手乞白雲帶を解せたり　青

秋風起て出る(一一)より棒　春
氣違を月の誘へば忽に　青
尼を引摺て森の下草　春
御神體則花は散給ふ　青
簑紫はるかに春ぞ飛行　春
名
さゝげたる二ッの玉子かいわりて　青
うち股廣き國の守へと　春
雪隱に伊豫の湯桁も打渡し　青
ふみ石九ッ中は十六　春
山作り硯にむかひ筆とりて　青
、夢窓國師もいでや此世に　春
(一二)物相を都の西に參りつゝ　青
茶の湯の古道跡は有けり　春
太閤の下駄一足や殘らん　青
高麗迄も隣歩行に　春
秋の寢覺火入を提て行ものは　青
悋氣の袖に月を打わる　春
忍ひ路の霧の妻戸を突倒し　青

喧嘩眼に口說く夕ぐれ　春

ナウ
薄情かゝりがましき若いもの　青

黑手に刎て殺すは〳〵　、

追剝の跡は裝ぬけと成にけり　春

蝦蟆鐵拐や吐息つくらん　、

千年の青藥すでに和らぎて　青

折ふし松に藤の丸さく　、

より金の花ほとゝぎす春の暮　春（一三）

山もかすみの唐で我を折　執筆

（一）『芭蕉翁俳諧大全』に「手水手洗」

（二）同「三笠の松や」

（三）『一葉集』に「さらへられけり」

（四）『芭蕉翁俳諧大全』に「血の道は寺帳幾日の」

（五）『一葉集』に「朝めしなまつ間」

（六）『芭蕉翁俳諧大全』に「萩原どのゝ草枕」

（七）同「既に其夜の」

（八）同「此影にあづかる」

（九）『一葉集』に「磯清水汝ながれたし」

（一〇）『芭蕉翁俳諧大全』に「城にづれ此頃の供追付て」

（一一）同「出てよりの棒」

（一二）同「揚物な都の」

（一三）同「よりかゝい花ほとゝぎす」

芝肴集　其の二　延寶六年作

前卷の如く前文はないが、同じく須磨の秋の題詠で同時に出來た百韻である。『芝肴集』の外、『芭蕉翁俳諧大全』にも亦『一葉集』にも載つて居る。

見渡せば詠（ながむ）れば見れば須磨の秋　桃青

桂の帆ばしら十分の月　四友

盃に（一）文（ふみ）を飛（とば）する鵰啼て　似春

山は錦に歌よむもあり　、

烏帽子着て家に歸ると人や云　青

承（うけたまは）りし日帝大將　、

備には鍋鐵魚鱗鶴の翼　春

前は畠に峰高うして　、

ウ
隠居にはおもしろき所にてい　青
おしゑ(押絵)さま〴〵松有菊有　、
金砂子打はらふにも千代の秋　春
みがゝれ出るお廣間の月　、
木賊刈山を(二)後に長裃　青
鷺が袂は木曾の麻衣　、
身を墨に何を恨みて鳴鳥　春
意見は余(よ)所(そ)吹森の風　、
揚錢を其後の(三)掛の大拂　青
長者の如き君にぞ有ける　、
供養する別れの鐘や響くらん　春
寝もの語りを筆にまかせ(四)る　、
花の香を驪山の宮より聞傳へ　青
宗盛の心よぎもない春　春
二
しろた(五)への旗に紛れて殘る雪　青
ふじを軒端にあやめ葺比　春
世の聞へ定家西行時鳥　青
貫之已後の有明の月　春
八百年御灯の光露更て　青
狸のこつちやう如來寺の秋　春
狼や香の衣に散る紅葉　青
骸(トハネ)みちびく僧正が谷　春
一喧嘩岩に殘りし(六)太刀の跡　青
ところ立のく浪の瀬兵衛　春
今は早すり切はてゝ飛螢　青
賢(七)の似せそこなひ竹の一村　春
鋸を挽てかへりし短氣者　青
己(おのれ)が胸の火事場空しく　春
ニウ
立さわぐ車長持押やられ　青
いざ又人を賣(八)るものもなし　春
錢の數素盞烏よりも讀初て　青
正哉勝々双六に勝　春
おもへらく輕板(カルタ)は釋迦の道也と　青
親仁の説法きけばきく程　春
茶小紋の羽折は墨に染ね共　青
強さうな絹の日の山に入　春

簡略を木幡の關や守るらん　青
(九)竹輿はあれども毛見を思へば　春
腰の骨いたくもあるゝ里の月　青
又なげられし丸山の色　春
片非盤都の東花散て　青
霞の間より膳が出ました　、
三 立はるや乗掛付て待うちに　春
股引脚半着そ始して　青
御供にはなまぐさものゝ小殿原　春
つゞく兵鱠大こん　青
(一〇)無盡宿先を懸んもおとなげなし　春
萬事は未來前世の商　青
因果は夫秤の皿を巡るらん　春
善男善四と説せ給ひし　青
又爰に孔子字は忠治郎(一一)　春
時に(一二)あはねば落す前髪　青
不心中世に交りて何かせん　春
(一三)君は誰笛我ほてつぱら　青

しのぶ夜は取手にかゝる閨の月　春
秋を通さぬ中の關口　青
三ウ 寂滅の貝吹立る(一四)初嵐　春
石こづめなる山本の雲　青
大地震續て龍や登るらん　春
長十丈の鱠なりけり　青
かまぼこの橋板遠く見渡して　春
傘升瀬田より参る包丁　青
ぬれ椽や北に出れば手盥の　春
粉糠こぼれて時雨初けん　青
六藏が伊駒の山の雲はやみ　春
河内は在所とゝのあきかぜ　青
さられては飯匙こぼす袖の露　春
顏は鍋蓋胸焦す月　青
腫氣さす姿忽花もなし　春
春半より西瓜は〳〵　青
ナ 新道の温泉流す薄氷　春
代八草御幸珍し　青

伺公する例の與三郎大納言　春
　たわけ狂ひのよし野軍に　青
口舌には空腹切て伏たりけり　春
　弓手(ゆんで)の脇より赤いふんどし　青
道具持つかへや京へ登るらん　春
　團子則五粒づゝのむ　青
もろこしに獨の茶數寄有けるが　春
　織部燒なる秦の舊跡　青
鉢ひとつ萬民これを賞翫す　春
　けんどん蕎麥や山の端(一五)の雲　青
小半の雫に濁る月(一六)も月　春
　屈平(くつぺい)沈む瓢簞の露　青
ナウ
鸞鳳も山雀籠に隱けり　春
　からくりの天下おだやかにして　、
臣は水游ぎ人形波風も　青
　海士のむかしは斯のごとくに　、
安房(あはう)斬芦火にあたりて終夜(よもすがら)　春
　八盃豆腐冬籠る空　、
おもかげのおろし大根花見して　青
　明り障子にかすむ夜の月　春

〔一〕『一葉集』に「ふみをこはする」
〔二〕同「山はうしろに」
〔三〕同「其後の桂の大はらひ」
〔四〕同「筆にまかすう」
〔五〕同「白砂の旗にまがへて」
〔六〕『芭蕉翁俳諧大全』に「岩に殘りて太刀の疵」
〔七〕同「賢」似せあり竹の一村」
〔八〕同「賣るよしなし」、『一葉集』に「うり物もなし」
〔九〕『一葉集』に「駕籠はあれども」
〔一〇〕『芭蕉翁俳諧大全』に「無盡講先な」
〔一一〕『一葉集』に「孔子字は忠二郎」
〔一二〕『芭蕉翁俳諧大全』に「一時にあはれは落す」
〔一三〕『一葉集』に「君が喉笛」
〔一四〕『芭蕉翁俳諧大全』に「貝ふき立る秋の風」
〔一五〕同「山の井の水」
〔一六〕同「濁る月さ月」

芭蕉杉風 両吟百韵　延寶七年作

江戸の俳人獨庵三世寛美は「ばせを翁若かりし時、杉風とかたみに口吟(くちずさみ)なせる百員、獨庵傳來の一巻あり」其の師買明出板の意圖ありし」果さず、仍って、桃青眞蹟其儘にうつし」天明六年秋本書の開板を行つたので、桃青時代の筆蹟を見るによく、且草稿に訂正の跡あつて研究資料としても好箇な一巻である。寛美は「延寶のすゑ天和のころとも見つべきか」といつて居るが、『一葉集』の編者湖中は延寶七年の作と推定し、私見もこれと同意なので同年作として掲げた。「芭蕉杉風両吟百韵」は寛美の開板した本書の題名である。本文は同書により『一葉集』及び『袖珍鈔』と對校した。

いろつくや豆腐に落て薄紅葉　桃青
山をしほりし雁の下露　杉風
手みづ桶雲の廣袖月もりて　、
こぬか亂るゝ風の夕暮　青
或時は餅に詠(ながむ)る雪の空　、
猿子をだいて峰の松原　風
朝日影岩根の床のわき風　、
熱湯(あつゆ)をながす末の白浪　青

ウ

茶巾さばき袖よりつたふ風過て　風
何と軒號(けんがう)窓の明ほの　青
五十點在(ある)が中にもほとゝぎす　風
一村雲を纖紙になむ　青
縦簾に好んでとほる瀧の糸　風
音羽嵐の松も姫君　青
小夜時雨忍ばせ給ひける程に　風
はねのあがりし衣(きぬ)〲の末　青
風匂ふ小便壺に浪越て　風
灰吹捨る(二)●跡の夕露　青
唐金(からかね)の秋や袂に磨らん　風

ろくしやう青き山のはの月　青
島の氣色胡粉に寄る花の浪　風
霞も空に烟るかきがら　、

二

そぎ板の破に春のしらみ來て　青
鼠の跡はえ方也けり　風
米俵ふまへてますぞ有難き　青
心に叶ふ長持の蓋　風
迯り膳道すこしだに(三)隔ねば　青
普請の積りよい手廻しの　風
親仁殿扱法體はいつ比ぞ　青
されば夏たけ彼岸たつ空　風
秋風や奇妙發願蟬の聲　青
草庵淋し森の下露　風
此月に藥鑵の口も物をいへ　青
酒はこぼれてねぶり驚　風
乘掛はたまりもあへず馬上より　青
四里のぼりたる關の岩角　、

二ウ

見渡せば雲ははがれて雪の峰　風
松のふぐりに下帶もなし　青
(一)是もをかし磯うつ浪の子安貝　風
灘の鹽屋の櫛箱の底　青
破小船削しらけて(四)よい道工　風
木賊にかゝる眞砂地の露　青
その原やこゝに築せて庭の月　風
かうした所が木曾山の秋　青
味噌すこしさびしき旅の谷傳　風
三千せつかいよしや修行者　青
つら〳〵思ふ火宅の門や火吹竹　風
時に和尚のときしのり賣　、

三

花曇五ケ庄より空晴れて　青
遠の里橋おもしろの春　風
薄氷や繪書が胸に流るらん　青
羽箒とれば風わたるなり　風
窓ちかき(五)小さゝみだるゝ竹の皮　青
夕日こぼれて袖べしかたまる　風
小德利の(六)露もあらしと山やおもふ　青

(七)色替へぬ松を砕く燈　風
でかいたぞ明日の足(八)中牛の脊　青
雜水の桶のからりとしたは　風
上方のかたき忘れぬ使たて　青
はねもと結にかざすさし櫛　風
縿付や二度返る事なかれ　青
若もみつちやに戀やさめなん　風
岩橋のよるの(九)小袖を引かぶり　青
一汗流す谷川の月　、
三ウ
手拭の雫に浪やよごす覽　風
六根罪障うたかたの淡　青
とろゝ汁生死の海を湛たり　風
(一〇)元小だゝみは無面目にて　青
開闢の天地すでに(一一)大砂鉢　風
岩戸に隱し給ふ行燈　青
つらからむ鬼の日掛の初袘　風
思ひの烟果は釜焦　青
菜刀の先にうらみは盡すまじ　風

後妻打や相槌のつゆ　青
唐衣涙洗し袖の月　風
終には無常早薬の灰　青
花紅葉明し暮して物として　風
葛籠一荷にためし夏冬　、
名
古郷へは(一二)裁付着てや歸るらん　青
笹の宿もおもふ獅子舞　風
笛の聲嵐木枯吹れたり　青
義經足にて雪の曉　風
玉子(一三)酒郎事に須磨を打つぶし　青
冷も發(一四)らぬ大浪の跡　風
痲氣持藻(一五)に住虫の音絕て　青
朝霧たゝむ夜着の芦田鶴　風
揚屋より月は雲るに歸るゝ　青
乙女の姿白しゆすの帶　風
呉服物後藤源氏の物思ひ　青
石山寺に殘るうち敷　風
夕暮は御前蠟燭飛螢　青

是彼岸の〔一六〕浮草の浪　　風
ナウ
六度まで渡かねたる橋越て　　青
よしなき〔一七〕千万　　風
夢なれや〔一八〕夢なれや　　、
扨々荒(あれ)し軒の宿札　　青
〔一九〕朝ぼらけ原吉原を打過て　　、
壹分にいくら相場聞(き)也　　風
折添て薪に花は〳〵　　青
都のぐるり山里の春　　風

〔一〕原作「灰吹捨し」の「し」を消して「捨る」とす。
〔二〕『一葉集』「道すこしだも」
〔三〕原作「是もなかし」の「是」を消し、「またか」と疑を存せるまゝ。
〔四〕原作「よい細工」を消し、「道具とすか」と同じく疑を存せるまゝ。
〔五〕原作「いさゝ村竹」を消し、「小ざゝみだるゝ」と訂正。『一葉集』に「ふさしみだるゝ」
〔六〕原作「小徳利もあらじ今はと山や思ふ」とあるを本文の如く改む。
〔七〕原作「炭を碎てほそき燈」とあるを本文の如く再案。
〔八〕『一葉集』に「明日の足半」
〔九〕原作「岩橋の夜の物をは」を「小袖を」とす。
〔一〇〕原作「たしむなまこは本無面目」を本文の如く改む。『一葉集』に「もて小たゝみは」
〔一一〕一葉集に「すでに火砂鉢」
〔一二〕原作「古鄉へは輕袗」とあるを「裁付」と再考。
〔一三〕原句「玉子酒卽座に」を「卽事に」と改む。『一葉集』に「卽時に」
〔一四〕原作「冷も起らぬ大浪の矢場」を本文の如く再按。
〔一五〕『一葉集』に「藻に住吉の」
〔一六〕同「是彼岸の浪草の浪」
〔一七〕〔一八〕本文に二句「虫みみ見えず」とあり。
〔一九〕原作「明過る」を再案「明て今朝」となし、更に本文の如く直しあり。

誹諧次韵　其の一　延寶九年作

京都の伊藤信德は同調の新俳人と八吟の連句を試み、延寶九年『誹諧七百五十韵』と名附けて出板した。題名の如く、十百韵には二百五十韵の

不足である。桃青はこれに刺激され、其の最後の五十韻を次いで百韻とし、それに二百韻を加へ、十百韻に滿尾さする爲め、其角・才丸・楊水と共に四吟連句を行ひ『誹諧次韻』と題名して板に起したのである。古板本は寛政時代に早くも坊間に其の跡を絶つたので、尾張の下郷氏知足齋草海は、紀六林の序文を得て、寛政二年春、名古屋の書林片野東四郎をして兩書を再刻せしめた。現存書は此折の再刻本である。『芭蕉翁草紙』・『一葉集』・『袖珍鈔』ともに『次韻』のみを收め、「鶯の足」の附句を恰も發句の如く扱つて居る。其の誤解を訂す爲め、こゝに先づ『七百五十韻』の最後の五十韻を掲げ、『次韻』の本文に接續さする事とした。

八人や誹諧うたふ里神樂　如泉
　かざしの豆腐玉串の霜　信德
釣藥罐千枝の眞杉片折て　如風
風にひゞきのなをし釘けり　青澄
假縅の雲かさなりて白妙に　政定
　青物使あけぼのゝ屑　仙菴
久堅の中間男影出て　常之
　薄がもとの乞食斬らむ　正長
ウ
旦には箔椀おつて魚の骨　執筆
　悟たぶんの世にもすむかな　泉
花山や大名隱居いまそかり　德
　銀幾億のひかりをぞ見る　風
あさましの鳥羽の玉蛭ひろひ捨　澄
　清渚に古血きたなく　定
伊勢の海とりあげ蛋の袖ぬれて　菴
　醉を燒煙我ぞまされる　之
冬膾別れる泪むすぼほれ　長
　神の御折敷中な隔てそ　德
嫗でのべざいてん樣えびす樣　泉
　德屋あぐり八歲　澄
袖は花しんこの轡はませつゝ　風
　盃甲梅かざす月　菴
春なれや太平樂の大さはぎ　定

上氣の皇子いにしへの夢　長
淺茅原瑠璃の礎のみ也けり　之
狐が里の穴のしのゝめ　泉
隱れ笠かくれ羽織な詠めやる　德
はしり女の行衛しられず　風
あそこ小督さがすや月のもなかくに　澄
口眞似草の口眞似の露　定
彌高き伽藍のひゞき野分風　菴
浮たつ雲に龍がぬれゆく　之
七面そのかみ爰の山がくれ　長
柴積車千里一時　德
稗團子或は松の葉を喰ひ　泉
べウタレ青き苔の小筵　澄
相住の比丘尼道心軒ふりて　風
男惡みやさられたるなんど　菴
あだし戀氣隨意何れの時にか有けん　定
朝政手代まかせぞ　長
はしたなく御格子明させ店はかせ　之
隣の神も涼みやらぬかさ　泉
肥肉の大黑殿や寢ぐるしき　德
いか程過し飯もりの山　風
跡の峯早道人にこさゝはん　澄
嵐に落る腸もちの鮎　定
石川やそへ小刀の月さびて　菴
君が代かへし文臺の露　德
挨拶な爰では仕たい花なれど　長
又かされての春もあるべく　之

表題

晉伯倫傳酒德頌、樂天繼以酒功讃。青追之續信德七百五十韻

あいさつな爰ではしたい花なれど
又かされての春もあるべく
鷺の足雉脛長く繼添て　桃青
這句以荘子可見矣　其角
禪骨の力たはゝに成までに　才丸
しばらく風の松におかしき　楊水
夢に來て僻を語る郭公　角

灯心うりと詠じけん月　青
微雨行脚がら山の木の間より　水
粟に稗さく黍原の守り　丸
ウ
佗雀畫眉を客によびつらん　青
慈悲齋が閑つれ〳〵にして　角
風の乞食に軒の下を借ス　丸
先祖を見知ル霜の夜語り　水
灯火をぐらく幽靈を世に返ス也　角
古きかうべに鬘引かけ　青
武士の刄祭を荒にける　水
女はおくに早きとていむ　丸
様あしく鏡のひづみたる恨ゝ　青
心の猫の月に孕ける　角
露に寝て且易レ醒易レ忘レ　丸
乳なしの嫛のかへる葛のは　水
春秋を花と淦とに暇なき　角
白魚をかざすより許春の宴　青
二
寛平のおゝん俳諧合あり　水
衛士提灯を枕して睡る　丸
はしたなりける女房の聲更て　青
血摺のねまき夜や忍ぶらん　角
別れ來しむくろは起てたよ〳〵と　丸
囚獄正を物ぐるはしむ　水
天帝に目安を書て聞えあげ　角
桂を堀つて星種を植　青
雨の擔子風のかますの冷かに　水
秋に對して所帶堂の記　丸
白親仁紅葉村に送レ聟　青
漁の火影鯛を射ル　角
鰤魚は諫め鰻は胸を割ける　丸
安房の御崎に流人身を泣ク　水
二ウ
向後にて行德寺の晩鐘を　角
枸杞に初音の魂鳥の魄　青
戀人の袂に似たるかりぎかな　水
雨をくねるか夏風がつま　丸
夕暮は息に烟を吐思ひ　青

民屋あつて腹をせばむる　角
笑の木愁る草の野は昧く　丸
　亦露分る婆々の古道　水
月見けん高雄が手向嬉しくて　角
　哀れと文を躍る夜総　青
脱置し小袖よ何と物いはぬ　水
　朝枕にとゞめをどろく　丸
花に照る太神宮の奇特也　青
　幣に巣作る託の鳥　角

誹諧次韻　其の二　延寶九年作

前卷は『七百五十韻』を承けた五十韻であるが、此の卷は百韻完備して居る。其角の發句、前書に「鴈にきけといふ五文字をこたふ」とあるは『七百五十韻』第五の卷、

鴈にきけいなおほせ鳥といへるあり　春澄

右の春澄の句に應酬したので、其角の機智を見るべき作である。

鴈にきけといふ五文字をこたふ

春澄にとへ稲負鳥といへるあり　其角
　ことし此秋京を寢覺て　才丸
月を連に坐烏帽子をかぶる也　揚水
　笹に徳利を折かたげしや　桃青
おぼこさす川添草の葉をしごき　丸
　卑山路に錢とらせきる　角
夕こゆる關をかますにかくれ來て　青
　夜盗松風の音を相圖に　水
雨の闇にすけて敵を討せたる　角
　舞臺に柴の庇しをり戸　丸
とひやう仁うは氣より世を驚て　水
　大切つてその聲のかなしく　青
ねさま佗て雪の爐に根深溫る　丸
　あらしはいづく帳の紙室　角

女の影歸ると見えて跡すごく　青
若衆氣にしてやつれ凋るゝ　水
ストント。茶入落しては命とも　角
とりあへず狂哥仕る月　丸
秋の末つかた嵯峨野を
とほり侍りて　水
薄の院の御陵をとふ　青
兎飼舍人は花に隱るめり　丸
子丑の番を寅に預ケて　角

二

渾沌翠に乘て氣に遊ぶ　青
朝咲しらむ馬鹿々々の山　水
雲の別れ女房に髭のある有けり　角
吉原君をぬすみいざなふ　丸
棒軍勇やつふせぎ止まつて　水
つきうすの陰より杵に弦引　青
富の屋を徳明王の守ります　丸
摩訶右衛門苦奈國に生ル　角
愛を捨子を捨。毗盧遮阿毗羅吽　青
嵐と落て風はやり吹　水
夜の食乏しく寢覺ける比は　角
蚯蚓の音さへ耳に腹だつ　丸
月の秋うらみはこべの旦夕て　水
露にしがらむ妹が前髮　青

二ウ

物いふて鏡に顏の殘り見えよ　丸
繪と酒もりの興盡て泣ク　角
小袖かす木枕の帶さうぞきて　青
納豆の神を齋し祭ル　水
煤掃之禮用於鯨之脯　角
やとひの翁齒朶刈りに入　丸
風いたく牛さへ氷る也けるに　水
荒屋に馬の枯屎をたく　青
慄しと白骨のかね付て居たる　丸
曾呂利新話讀に夜長し　角
禪小僧豆腐に月の詩チ刻ム　青
雷盆鳴て芭蕉には風　水
花の今朝驛に羊を直切る也　角

楼に草鞋をつるす比春・　丸
三　所帯わび息子はこその雪を掃　水
箕を着て寒く雀とるらん　青
凩のからしの枝に薬干セル　丸
山彦嫁をだいてうせけり　角
忍びふす人は地蔵にて明過し　青
木槿のまなじり木瓜の唇　水
細殿に鬼灯の燈籠照したる　角
をどり狩衣の裾にたつ浪　丸
酒の月お伽坊主の夕ばへて　水
眞糸流しやる奥の泉水　青
河骨の葉にほれ歌を書やつす　丸
ほむらにたへて蛇見た化　角
築地ある根の底に車引止め　青
天火々々闇の金掘の傘　水
三ウ　・蜆江の礒傳岸等は白波に　角
青海苔うたひ蜑浮を擧　丸
花の笘屋芝に旅泊を貪る　水

月に秋とふ東金の僧　青
淋しさを蕎麥に露干す豆俵　丸
夕顔重く貧居ひしげる　角
桃の木に蟬鳴く比は外に寢ゝ　青
枕の濤水香薷散くむ　水
夢の身を何と鰹にさめかねて　角
我聞ク○俗は口にきたなき　丸
生づらを蹴折かれては念無量　水
泥坊消て雨の火青し　青
草の奥下妻が原にくれかゝり　丸
狹の里の足あらひ鍋　角
ナ　配所人芦の小着布を干かねて　青
あらめの茵辛螺を枕と　水
心地やむ鯛に針さす生小船　角
ふれに尾だきを出し山老　丸
麥星の豐の光を覺けり　水
勅使芋原の朝臣蕪房　青
秋を啼鳥の鳥を迎へせし　丸

夏やきのふの郭公さに　角
津の國の生田の森の初月夜　讀人不知
道さまたけに乞食接す　水
霜下て更行里の粥配　角
寺々の納豆の聲。あした冴ュ　丸
よすがなき橘花黄の老を泣ク　水
團炭荷ふて小野に歸りし　青
ナウ
黥をぞ洗ふ朧の淸水影迚は　角
茂みがくれに牛逃したる　丸
竹の戸を人待下女が寢忘れて　水
打ぞつぶてに恨み答へよ　青
泪のみすほん〳〵と鳴をれば　丸
千とせをくさる水の埋木　角
葉傳ひて寸龍花にのぼるかと　青
如泉法師が春力あり　水

誹諧次韻　其の三　延寶九年作

此卷は『次韻』第三の卷である。三卷孰れも『福草紙』その他との間に異同夥しい。たゞ書損とも見ゆる處はあつたが、其の文字に對して訂する事もないので、異同は卷末に附するのは見合せた。餘興の「附贅一つ」は芳賀一晶が獨吟を以て次ぎ、百五十韻としたが全卷に關係がないので採錄しない。

世に有て家立は秋の野中かな　才丸
詠置月にかぶ萩を買　楊水
あはれとも茄子は菊にうら枯れて　桃青
鮎さびすたり海鼠漸ク　其角
雫の客霙の客とふるまへば　水
蘇鐵の亭に題を設る　丸
樂やつこかくれて風流林とよぶ　角

樽に羽織を着せてあふぎし　青
ウ
嬉しきや女房のせいて泣付くを　丸
戀あふれたる弟手討に　水
音更て槙の戸枚をこぢ放ス　青
枯ゆく宿に冬子うむ犬　角
髮結の住みけん庭は蓬して　水
卒都婆の男ゆかた凋れる　丸
骨刀土器鍔のもろきなり　角
痩せたる馬の影に鞭うつ　青
内に寢ても心はきのふ羇旅　丸
米とぐ音の耳に露けき　水
扨もかびて簀子折たく秋しもぞ　青
無錢居士とて朝深き月　角
筆耕青磁の牛に花付て　水
燕茶水の流れ汲らん　丸
二
后宮のやぶ入車やどりふる　角
ねたしや上の御若衆の樣　青
頭巾かつぎさげて。夜の雪踏の忍ぶ音　丸

挑灯切つて霜のかげろひ　水
風前の角内と身を悟りける　青
入ルの山ぶみ狼にのり　角
雷の斧丁々として音さらに　水
玄々玄し龍頭の國　丸
俗のいふ鹿島の海の底なるや　角
朝の日の東本地赤螺　青
何を覺て蛤の寢て夢見たる　丸
ひそか〱と雨蓑をもる　水
月を葺夕芋の葉の片軒端　青
栗刈敷て團子干す頃　角
二ウ
露雞の羽がひの鷇ひよ〱と　水
水くみ起て帚尋ねる　丸
釜かぶる人は忍びて別るなり　角
槌を子にだくまぼろしの君　青
古家の泣聲闇にさへなれば　丸
いたちの禿倉風の荒ぶる　水
麻の葉に生る小鮒を折交て　青

かた枝さすなる生の浦柚子　角
きたなくて清き隣と住月に　水
明て寢御座をかけ渡す露　丸
晝夢の食たく程に夕ぐるゝ　角
人死を待て生たはいなし　青
石ガ曰ク花の目出度咲にけり　丸
木玉にかなで風を舞柳　水

三

飛雨臺の跡は霞ニ空シキヅ　青
驢馬ノ進マザル轡キラ〳〵シ　角
大根の葉越の闕のこなたより　水
雪のから鮭に文付てやる　丸
衰へや火桶の嫗の腰寒き　角
有佗し床にふとん引づる　青
もや〳〵と寢入かねくとくにたえて　丸
通はす首の泣てたゝずむ　水
迷ひしれ恨が原の目かけ塚　青
横雲別之介修行し暮て　角
今宵月に村風と申す三味線を　水
やさしや薄涓こぼすか　丸
秋の霜腹切草をことはれば　角
住持ゆるして明る柴の戸　青

三ウ

面白く盞○曲を狂ひしに　丸
海老ちらしたる海苔の青衣　水
戀崎の松が娘の花の臺　青
契世にのこる雪の明神　角
ト問し鷺の翁のしら〳〵と　水
蛇の氣立て草の煩　丸
笹深き皇居にかりの紙帳釣ル　角
清水の司麥を糝く　青
いつも参る法味寺の醬色殊に　丸
老尼はなしの紋ありけり　水
哀餘る捨子ひろひに遣して　青
外里に鹿の襦引て入　角
松茸に道しまがへば枯いばら　水
栗の梢にあり明のいが　丸

ナ

佗簷に蛬の音をしのぶなる　角

足袋さす宿に風霜をまつ　青
扇折る女は夏に捨られて　丸
夫は江戸に戀わすれさく　水
むさし壹歩さすがにと讀でやみけり　青
艶なる茶のみ所求めて　角
夜々に來て上るり語る聲細く　水
法眼が書し武者繪とやらん　丸
宮造る虛の匠の名乘して　角
熨斗を冠の纓に折かけ　青
鰯なる翠簾のうるめは枯殘り　丸
故園今とへば蘭腥し　水
風の月熱の御靈を鎭めける　青
黄なる小僧の怪しさよ露　角
ナウ
山路わくいくちの笠の置忘レ　水
篠の枝折を猿にことわる　丸
岩彦の栖を深く立のぞき　青
氣を奪れし人のぬけがら　角
血を踏て風太刀を折ル音嚴　水
古脊をとつて野邊に枕ス　丸
行くれて花に夜着かる芝筵　角
狐は醉て酴醾に入ル　青

餘興（誹諧次韵）

附贅一つ爰に置けり曰ク露　楊水
無用の枝を立し犬蘭　桃青
夜ル顏の朝咲花にあらそひて　其角
蘆裡の四虫音を隱る也　才丸

武藏曲　天和二年作

京都の俳人大原千春が江戸の諸作者に接して此の『武藏曲』を得たのである。旣に蕉風俳諧の開發期にあるので、百韵中には言水・似春の如き他門の人もゐるが、多分の蕉風味を含んで

居る。古板本も現存し、「新七部集」に再錄され、『一葉集』その他にも收めてある。本文は天和二年三月京都の書肆寺田重德板によつてこゝに收めた。

錦とる都にうらん百つゝじ　麋塒
壹花さくら二番山ぶき　千春
凪の愛三線の記を和らげて　卜尺
雨双六に雷を忘るゝ　曉雲
宵うつり盞の陣を退りける　其角
せんじ所の茶に月を汲　芭蕉
霧輕く寒や溫やの語を盡ス　素堂
梧桐の夕孺子を抱エて　似春

ウ
孤村遙に悲風夫を恨ーかと　昨雲
媒酒旗に咲を進ムル　言水
別るゝに馬手は山崎小錢寺　執筆
猶ほれ塚を回向して過グ　麋塒
袖桶に忘れぬ草の哀折ル　千春
小海老爪白母を慰む　卜尺
悴たる鶯の鬢を黑やかに　曉雲
捨杭の精かいとり立り　素堂
行脚坊卒都婆を夢の草枕　芭蕉
八聲の月に笠を揮ク　其角
味噌樽にもる露深き夜の戸は　言水
泣ておのゝく荻の小女　昨雲
妻戀る花馴駒の見入タル　似春
杜杖に蚫をきる心春　千春

二
陽炎の形をさして神なしと　麋塒
紙鳶に乘て佛界に飛　曉雲
秦の代は隣の町と戰ひし　其角
ねり物高く五歩に一樓　芭蕉
露淡く瑠璃の眞瓜に錫寒し　素堂
蚊の聲甑に血を含ーらん　言水
夜ヲ離レ蟻の漏より旅立て　卜尺
槐のかくるゝ迄に歸り見しはや　似春
匂落ッ杏に酒を買ところ　芭蕉

強盜春の雨をひそめく　昨雲
嵐更ヶ破魔矢つまよる音すごく　千春
鎧の櫃に餅荷ひける　麋塒
末の五器頭巾に帶て夕月夜　曉雲
猫口ばしる荻のさは〳〵　素堂
二ウ
あさがほに齋まつりし颶姫　言水
藏守の叟霜を身に着ル　芭蕉
此所難波の北の濱なれや　似春
紀の舟伊勢の舟尾張船　麋塒
波は白浪さゞ波も又おかし　素堂
傾城に袴着せて見る心　曉雲
今宵年忘〇念の榮を盡スらん　其角
柊が枝に小哥たてまつりける　昨雲
庭稻荷樅に隱れて仄なる　卜尺
いたらぬ役者藝冥加あれ　千春
豐さはぎ院に日待をもよほされ　芭蕉
霞の外の權田樂をなん召ス　素堂
榮の鰯を花に折しきて　言水

しだのみ荒し棟の宿　其角
三
去年の月の三十日の月くらし　曉雲
雫ものぐるひ筆を杖つく　卜尺
山鳥の音に羽ぬけ子や尋ぬらん　千春
鶴の箔衣ありし佛　似春
夢に入ッ玉落の瀧雲の洞　昨雲
日を額にうつ不二の棟上ゲ　芭蕉
松髮の祖父蔦上下に出立て　麋塒
城主に靈の蜜柑獻ズル　嵐蘭
或トに火あての鰹生かへり　峡水
旅小刀の吼脫て行　曉雲
世捨木や世捨の松に名を朽て　其角
からすの衣堤にくらし　素堂
橋上の番太は鐘を恨みたる　嵐蘭
西瓜はしらず潮滿らん　千春
三ウ
露くだるしたれ角豆の散柳　曉雲
月は築地の古キにやどる　麋塒
遁世のよ所に妻子をのぞき見て　芭蕉

つぎ哥耳に残るよし原　峡水
歩別レ馬はまつらん榎陰　其角
百姓の家に入て腹切ル　嵐蘭
是此年先祖の榾の火の消ヌ　昨雲
時ならず米に生る菌　千春
雨を聞て放下の村に閑カなる　素堂
燕尾小勝が暮に落くる　曉雲
衣裳草萠出る翠ノ紅に　槃埒
雪ふゞき茶や花の端つゞき　其角
御池漕扈従の渡守しばし　峡水
薫ふるふか水引の蕤　昨雲
名
張雀鳴子〳〵におどろきて　槃埒
無レ情人秋の蟬　嵐蘭
月は問ッ山寺どのを離に　其角
石風呂の跡は哀ありける　素堂
篠木の茂きは鍬に夭せられ　千春
今共とかげ金色の王　峡水
袖に入蝸夢を契りけん　芭蕉
涙の玉あり明ヶ昏レにかはかす　槃埒
我聞ケリ鈍士は胸の中黒しと　昨雲
閣思ク君境町に溺る丶　其角
肩を踏で短冊とりに立躁グ　曉雲
與にての御遊隔レ昇ノ戀　芭蕉
篝火を刀に掛て忍ぶ山　嵐蘭
浪は井積にかくす落人　千春
ウ
物あらふ盥をふせて暮る程に　峡水
藍搗臼のごほ〳〵し聲　槃埒
市賤の木びらを展る木陰には　曉雲
日傘さす子と嫗と男と　嵐蘭
玄關にて神樂をまうけ給ひけり　昨雲
夜と共てらす袋挑灯　素堂
花の奥盗人待に消して　芭蕉
八重〳〵霞飛行小天狗　其角

槃埒 十一　似春 五　千春 十　昨雲 十
卜尺 五　青水 五　曉雲 十　筆 一
其角 十一　嵐蘭 六　桃青（芭蕉13） 十一

峽水　五　素堂　十

芭蕉翁古式之俳諧　貞享二年作

古式之俳諧とは清水連歌の事で、表十句、名殘の裏六句で百韵の表及び名殘の裏とも各八句なると相違して居る。尾花澤の鈴木清風が江戸に於て貞享二年六月芭蕉からその制式傳授を受け後、門人芝嵐に授與し、芝嵐の孫其日庵尺艾が享和三年正月『芭蕉翁古式之俳諧』といふ書名で、京都の橘治から出版したのである。本文は『一葉集』と對校して別に異同はない。

貞享二年六月二日東武於小石川興行
賦花何俳諧之連歌

涼しさの凝くだくるか水車　清風
青鷺草を見越す朝月　芭蕉
松風のはかた箱崎露けくて　嵐雪
酒店の秋を障子あかるき　其角
社日來にけり尋常の煤はくや　才丸
舞ふ蝶仰ぐ我にしたしく　コ齋
みちの記も今は其儘に霞こめ　素堂
髭を花なれいやよひの雛　清風
老てだに侍從は老をへりくだり　芭蕉
氷きよしと打守りけり　嵐雪

ウ

戶隱の山下小家のしづかにて　其角
阿闍梨もてなす父の三年　才丸
笑顏よくむまれ自慢の一器量　コ齋
船に夜〱いのち商ふ　素堂
雨そぼつ蚊やり火いたく煙てし　清風
草庵あれも夏を十疊　芭蕉
旣にたつ菲に稀人をあざむきて　嵐雪
鴻鴈高く白眼ども落ず　其角
晩稻苅干みちのくの月よ日よ　才丸
淨瑠璃聞んやど借らん秋　コ齋

椎の實の價算ふる半蔀に　素堂
うしろ見せたる美婦妬しき　清風
花ちらす五日の風はたがいのり　芭蕉
北京遠き丸山の春　嵐雪

二

三尺の鯉に小鮎に料理の間　其角
はや兼好をにくむ此とし　才丸
幾回の戰ひ夢と覺やらす　コ齋
逝水やみを捨ぬものかは　素堂
白鳥のはふり湯立の十五日　清風
夫醉醒の愚に嘘して　芭蕉
樏のすゝみかねたる黄昏に　嵐雪
おし鳥恩愛の澤を二羽たつ　其角
棧造り曲輪のつみを指おらん　才丸
きぬぎぬの衣薄きにぞ泣く　コ齋
いかなればつくしの人のさはがしや　素堂
古梵のせがき花皿を花　清風
ひぐらしの聲絶るかたに月見窓　芭蕉
卵殺を業とするおのこ嗅く　嵐雪

二ウ

武士のものすさまじき艤ひ　其角
七里法華の七里秋風　コ齋
丑三の雷南の雲と化し　才丸
槐の小鳥高くねぐらす　芭蕉
陰陽神の留主其儘の假屋建　素堂
狂女さまよふ跡したふなる　清風
情しる身は黄金の朽てより　芭蕉
輕く味ふ出羽の鰰　才丸
寒月のともづなあからさまなりし　嵐雪
枯てあらしのつのる荻萩　其角
獨樂の茶に起伏を舍るのみ　才丸
三里も居ず不二いまだ見ず　コ齋
鹿を追ふ弓咲花に分入て　素堂
春を愁る小の晦日　清風

三

陽炎に生す椽低く狹かりき　芭蕉
硯水さよむる五郎入道　嵐雪
悴もたばゞ上戸も譲るかくごなり　其角
雲ちりぢりに風薫る藪　才丸

伊豫すだれ湯桁の數はいざしらず　コ齋
入院見舞の長に酌とる　素堂
一陽を襲正月はやり來て　清風
汝さくらにかへり咲ずや　芭蕉
染殿のあるじ朝日を拝む哉　嵐雪
しのぶのみだれ瘧もゝたび　其角
うき世とはうきかは竹をはづかしめ　才丸
名をあふ坂をこしてあらはす　コ齋
後の月家に入る尉出る兒　素堂
わけてさびしき五器の燒米　清風
三ウ
みの虫の狂詩つくれと啼ならん　芭蕉
忠に死たる塚に彳ム　嵐雪
初雪の石凸凹に〳〵　其角
小女郎小まんが大根引ころ　才丸
血をそゝぐ起請もふけば譏り　コ齋
見よもの好の門は西むき　素堂
御明しの夜をさゝがにの影消て　清風
汗深かりしいき(憤)どふる夢　芭蕉

はらからの旅等閑に言葉なく　嵐雪
ふるごとさとる小夜の中山　其角
枝花をそむくる月の有明て　才丸
ふらこゝつらん何某が軒　コ齋
禰して修理する舟の春となり　素堂
立初る虹の岩をいろどる　清風
名
きれだ(凪)こに乳人が魂は空に飛　芭蕉
麻布の寢覺ほとゝぎす啼け　嵐雪
わくら葉やいなりの鳥居顯れて　其角
文治二年のちから石もつ　才丸
亂れ髪俣くゞりしと僞らん　コ齋
礫に通ふこゝろくるはし　素堂
三日月の影西須磨に落て梟　清風
秋はものかはあけ捨の棟　芭蕉
燈しんを負ばかならずはつ嵐　嵐雪
只一眼もみちはひとすじ(筋)　其角
特のくろきもさすがゆふ間ぐれ　才丸
定家かづらの挑む冬ざれ　コ齋

低く咲花を八手と見るばかり　素堂
桶の輪入れの住居いやしく　清風
ナウ
ひだるさを鎌にかへたるこゝろ太　芭蕉
瀧をおしまぬ不動尊き　嵐雪
聲なくてさびしかりけるむら雀　其角
出る日はれて四方しづかなり　才丸
花降らば我を匠（たくみ）と人やいはん　コ斎
さくら〳〵の奥深き園　執筆

鶴の歩　貞享三年作

初懐紙の百韻として著名な連句である。前半五十韻は芭蕉の自註が存するので殊に知られて居る。江戸の俳人平野鶴歩が享保十五年「貞享三のとし丙寅に晋子、日の春の百韻初懐紙と號して世に鳴ことひさし。予其丙寅に生れ、鶴のあゆみの一軸、杉風いもとに有しを」譲受け、その表徳を鶴歩と號して『鶴の歩』と標題で此の百韻を板行した。『初懐紙』の表題本は寶暦十一年板である。兩者の作者に異同がある。前半の五十韻註釋は闌更の『花の古事』・『落葉考』にあるが、大集『句評』の部を參照されたい。後半五十韻は眠郎の『雪の薄』にも收めてある。

日の春をさすがに鶴の歩み哉　其角
砌（みぎり）に高き去年の桐の實　文鱗
雪村（せつそん）が柳見にゆく棹さして　枳風
酒の幌（とばり）に入あひの月　コ斎
秋の山手束（たつか）の弓の鳥賓（うら）ん　（二）芳重
炭竈こねて冬のこしらへ　杉風
里〳〵の麥ほのかなるむら綠　仙化
我のる駒に雨おほひせよ　李下
ウ
朝まだき三島を拜む道なれば　挙白
念佛にくるふ（狂）僧いづくより　朱弦

あさましく連歌の興をさます覽　蚊足
敵よせ來る松の聲　ちり
有明の梨子打烏帽子着たりける　芭蕉
うき世の露を宴の見おさめ　執筆
にくまれし宿の木槿の散たゝに　文鱗
後住む女きぬたうち〳〵　其角
山深み乳をのむ猿の聲悲し　コ齋
命を甲斐の筏ともみよ　枳風
法の土我剃り髮を埋み置ん　杉風
はづかしの記をとづる草の戸　(三)芳重
さく日より車かぞゆる花の陰　(二)李下
橋は小雨をもゆるかげろふ　仙化

二

殘る雪のこる案山子のめづらしく　朱弦
しづかに醉て蝶をとる歌　擧白
殿守がねぶたがりつるあさぼらけ　ちり
はげたる眉をかくすきぬ〳〵　芭蕉
罌子咲て情に見ゆる宿なれや　枳風
はわけの風に矢篦切に入　コ齋
かゝれとて下手のかけたる狐わな　其角
あられ月夜のくもる傘　文鱗
石の戸樋鞍馬の坊に音すみて　擧白
われ三代の刀うつ鍛冶　李下
永祿は金乏しく松の風　仙化
近江の田植美濃に恥らん　朱弦
とく起て聞勝にせん時鳥　(五)芳重
舟に茶の湯の浦あはれ也　其角

二ウ

つくしまで人の娘をめしつれて　李下
彌勒の堂におもひうちふし　枳風
待かひの鐘は墮たる草の中　(六)はせを
友よぶ蟾の物うきの聲　仙化
雨さへぞいやしかりける鄙ぐもり　コ齋
門は魚ほす磯ぎはの寺　擧白
理不盡に物くふ武者等六七騎　(七)芳重
あら野の牧の御召撰みに　其角
鵙の一聲夕日を月にあらためて　文鱗
糺の飴屋秋さむきなり　李下

電の木の間を花のこゝろばせ　擧白
つれなきひじり野に笈をとく　枳風
人あまた年とり物をかつぎ行　揚水
さかもりいさむ金山がほら(七)　朱絃
三
此國の武仙を名ある繪にかゝせ　其角
京に汲する醒井の水　コ齋
玉川やをの／＼六ッの所みて　芭蕉
江湖／＼に年よりにけり　仙化
卯の花のみな精にもよめるかな(八)　芳重
竹うごかせば雀かたよる　揚水
南むく葛屋の畑の霜消て　不卜
親と碁をうつ昔のつれ／＼　文鱗
餅作る奈良(九)の廣葉を打合せ　枳風
贄に買るゝ秋の心は　芭蕉
鹿の音を物いはぬ子(一〇)も聞つらめ　朱絃
にくき男の鼾すむ月　不卜
篠の雨袂七里をぬらす覽　李下
生駒河内の冬の川づら　揚水

三ウ
水車米つく音はあらし(一一)にて　其角
梅はさかりの院々を閉(一二)　(一三)千春
二月の蓬萊人もすさめずや　コ齋
姉待牛のおそき日の影　芳重
胸あはぬ越の縮をおりかねて　芭蕉
おもひあらはす菅の刈さし　枳風
菱のはをしがらみふせてたかべ鴨　文鱗
木魚きこゆる山陰にしも　李下
囚人をやがて休むる朝月夜　コ齋
萩さし出す長がつれあひ　不卜
聞し時雲と禿に名を付て　千春
心なからん世は蟬のから　朱絃
三度踏むよし野の櫻芳野山　仙化
あるじは春(一四)か草の崩れ家　李下
ナ
傾城を忘れぬきのふけふことし　文鱗
經よみ習ふ聲のうつくし　芳重
竹深き笋折(一五)に駕かりて　擧白
梅また若キ匂ひなりけり　コ齋

村雨に石の灯ふき消ぬ　　　(一一)峡水
　鮑とる夜の沖も静に　　　仙化
(一七)伊勢を乗ル月に朝日の有がたき　　　不卜
　欅より(一八)きて橋造る秋　　　李下
信長の治れる代や聞ゆらん　　　楊水
(一九)居士とよばるゝから國の兒　　　文鱗
紅に牡丹千里の香を分て　　　千春
　雲すむ谷に出る温泉をきく　　　峡水
岩ね(二〇)ふむ重き地藏を荷ひ捨　　　其角
　笑へや三井の若法師とも　　　コ斎
ナウ
逢ぬ戀よしなきやつ(二一)に返哥して　　　仙化
　管弦をさます宵は泣るゝ　　　芳重
足引の廬山に泊るさびしさよ　　　楊水
　千聲となふる觀音の御名　　　其角
舟いくつ涼みながらの川傳ひ　　　枳風
(二二)をなこにまじる松の白鷺　　　峡水
寝莚の七符に契る花匂へ　　　不卜
　連衆くはゝる春ぞ久しき　　　擧白

〔一一〕『落葉考』に作者「芳里」
〔一二〕同、作者「芳里」
〔一三〕『袖珍鈔』に「車よそふる」
〔一四〕『落葉考』に作者「杉風」
〔一五〕同・『初懐紙』に作者「芳里」
〔一六〕『芭蕉翁俳諧集』に「まい宵の鐘は」
〔一七〕『初懐紙』・『落葉考』に作者「芳里」
〔一八〕『芭蕉翁俳諧集』に「みな精にも見ゆる哉」
〔九〕同「楢の廣葉な」
〔一〇〕同・『雪の薄』に「ものいはぬ人も」
〔一一〕『婆心錄』に「米つく音は師走にて」
〔一二〕同「隙〳〵い閑」
〔一三〕『婆心錄』に作者「似春」
〔一四〕『雪の薄』に「あるしは春の草の」
〔一五〕『婆心錄』に「笋ほりに」
〔一六〕『雪の薄』に作者「峡山」
〔一七〕『婆心錄』に「伊勢小野の月に」
〔一八〕同「欅より來て」
〔一九〕同「胡子と呼ばるゝ」
〔二〇〕『芭蕉翁俳諧集』に「岩根ふみ重き」
〔二一〕『雪の薄』に「よしなき人に」
〔二二〕『婆心錄』に「尾長にまじる」

歌仙の部

武藏十歌仙　其の一　延寶六年作

京都の青木春澄が松島見物の道すがら、江戸に立寄つて知名の俳諧師と一座して歌仙十卷を行ひ、その卷々を『武藏十歌仙』と外題し、延寶六年十一月書肆寺田與平次をして板行させた。桃青一座の卷は三歌仙ある。これは「第八」として掲げてある卷である。

のまれけり都の大氣江戸の秋　春澄
詞のかはせ千金の月　似春
菊やど(何)の家に久しき鳫鳴て　桃青
酒舟あれば汀浪こす　澄
碓の音いそがしの松の風　春

ウ
與作おやまつて仙境に入る　青
はやり哥も雲の上まで聞えあげ　澄
いつも初音の〳〵　春
御所にて其御姿は〳〵　青
あしたのだて(伊達)染夕のときわけ　澄
むつ言のきがねの聲のはい出て　春
釋迦にそひね(添寢)の夢の短夜　青
所作らしい諸行無常のかねの聲　澄
鼓の下手くそ寺は柱の　春
小芝居を君もおかしとおぼしめし(召)　青
鬼こらへずを生捕にして　澄
天も花に毒の醋狂月に影　春
馥のこてふの春になり行く　青

二
聲霞む猫はかへ(却)つて野ら遠し　澄
へつ(竈)いの下に草はもえなん　春
夜の中に名もなき茸のされはこそ　青
金輪際より島山の露　澄
毘沙門の鉾のしたゝり國の秋　春

外道の首の落かゝる月　青
蛬吾は八つにやさけぬらん　澄
空誓文に霜枯し中　春
藥物右近が哥を煎じても　青
古川のべにぶたを見ましや　澄
先爰にパウの二けんの杉高し　青
日待に來たか山郭公　春
二ウ
やすき夜も寢ぬに目覺ずならちやずき　澄
雲のいづこに匂ふ燒みそ　春
內熱に遠の嵐やにくむらん　青
松はすねたる入道相國　澄
花はとぶ袖は錦の長絹きて　青
はだにはきむく鶯の聲　春

武藏十歌仙　其の二　延寶六年作

此の三吟歌仙は春澄の『武藏十歌仙』の「第九」の卷に收めてある。本文「やよ時鳥天帝のさた」の天帝にはダイウスと特に振り假名を施してある。

青葉より紅葉散けり旅ぎせる　似春
時を感じては眠る遠山　春澄
頰杖にかたぶく月の影消て　桃青
座頭はかたを衣うつ也　春
糸よせてしめ木わがぬる秋の風　澄
天下一竹田稻色になる　青
ウ
淀鳥羽も鏡のかげに見えたりや　春
やよ郭公天帝のさた　澄
鶯の不受不施だにも置ぬ世に　青
殘るものとては古寺の雪　春

花は根にもとの採でかへる也　澄
水風呂の底は龍宮の春　青
出女の玉依姫はこれとかや　春
神代もきかず百文の戀　澄
靈寶の枕草紙をふし拜み　青
奉加の帳の首書まで　春
爰に中比儒者一人の月澄て　澄
或は廣澤熊澤の秋　青

二オ

狀箱の名をわすれたる雁の聲　春
とかういふ間にしほむ初萩　澄
ふり袖の薄も髭と生出て　青
小町が果の女方とも　春
戀訴訟ふしんながらも指上ル　澄
告にまかせて口說申ゆ　青
あゝ稲荷くるしき中をおもへたゞ　春
杉の庵に腹ぞさびしき　澄
針立の玄賓俗都見まはれて　青
秋はてぬれば湯山の月　春
あみ楊枝きのふは峰の薄紅葉　澄
四五文ほどが露時雨るらん　青

二ウ

夕日影光はちよくにかたぶきて　春
鹽からあらふ沖津白浪　澄
竹戸棚阿波の鳴門や明ぬらん　青
渇きり〳〵とよさし蛸の巣　春
山一つこぶの根おろし花の雲　青
耳せゝかくす峯の青柳　澄

武藏十歌仙　其の三　延寶六年作

前卷と同じく三吟歌仙ながら桃青の發句で、「武藏十歌仙」「第十」の卷に入れてある。

鹽にしてもいざことづてん都鳥　桃青
只今のほる波のあおだ鴨　春澄
川淀の杭木や龍のつたふらん　似春

千年になる苺みどり也　青
またとはゞいかなるうそを岩根の月　澄
高う吹出す山の秋風　春
ウ
ふらすこの見えすく空に霧晴て　青
油なに〱雲ぞなだるゝ　澄
浦島や櫛箱あけてくやむらん　春
鼠あれゆく與謝の夕浪　青
捨小舟米蛇の跡さびて　澄
藏も籬も水草生けり　春
今朝みればゐてこし女は貧報神　青
大酒くらひ口そへて露　澄
一座の月八ツのかしらをふり立て　春
ばくちに成し小男鹿の角　青
數芝居ぬれてや袖の雨の花　澄
在郷寺を宿として春　春
二オ
麥飯の芹や爰に霞むらん　青
妙なるのりととろゝとかるゝ　澄
幽靈は紙漉舟にうかび出　春

さかさまにはひよる淺草の浪　青
またぐらから金龍山やみえつらん　澄
聖天高くつもるそろばん　春
帳面のしめを油にあげられて　青
ながるゝ年は石川五右衛門　澄
まかなひをすいたの太郎左いかならん　春
旣に所帶も軍やぶれて　青
軒の月横町さして落給ふ　澄
後家を相手に戀衣うつ　春
二ウ
去男かねにほれたる秋更て　青
鶉の床にしめころし鳴ク　澄
産出すを見ぐるし野とや思ふらん　春
きせうものなき天のかぐ山　青
さほ姫のよめり時分も花過て　春
古巣にかへる仲人の鳥　澄

江戸通り町　延寶六年作

談林系統の俳人蝶々子貞宣の倅二葉子は年少その俳才を知られた。十二歳にして延寶六年七月『江戸通り町』二卷を板行した。「松花軒二葉子十二歳撰」といふ署名がある。校合は水谷和石子である。下卷の追加に「四吟哥僊」として載するのがこの一卷で、其のころ既に三十五歳の桃青が十二歳の少年と一座として、まじめに歌仙を行つたとすればそこに一段の興趣を添へる。本文は現存古板本によつて校合した。

賀や月間口千金の通り町　桃青
　爰に數ならぬ看板の露　二葉子
新蕎麥や三島がくれに田鶴鳴て　紀子
　芦の葉こゆるたれ味噌の浪　卜尺
臺處棚なし小舟こぎかへり　二葉子

ウ
　下男には與市その時　桃青
乘物を光悦流にかゝれたり　卜尺
　藥草喩品くすりごしらへ　紀子
眞鍮の彌陀の鋺を戴て　桃青
　西をはるかに緑青の山　二葉子
隈どりの嶺より月の落かゝり　紀子
　秋を坐布の床の山風　卜尺
燒鳥の鷄なくなる夕まぐれ　二葉子
　精進あげの三位入道　桃青
かゝと寢て花咲事もなかりしよ〔二〕　卜尺
　又孕せて蛙子ぞなく　紀子
鶯の宿が〔一〕金子をねだるらん　桃青
　龍田のおくに博奕こうじて　二葉子

ニオ
毛氈を御門の口には錦かと　紀子
　そよや覺裳羅漢舞する　卜尺
破れ袈裟雲のかよひぢ吹とぢよ　二葉子
　鼠に猫か子規とぶ　桃青
押入や淀のわたりの箱階子　卜尺

織ものゝ巻(三)衣笠の森　紀子
能太夫(のうだいふ)末は時雨の松見えて　桃青
殿様かたへゆくあらしかな　二葉子
鷹鶴も高ねの雲の立まとひ(四)　紀子
俎板(まないた)の月揩鉢の不二　卜尺
昔の秋三千人(五)の拂(はらふ)物　二葉子
釋迦も此よを欠落の時　桃青
ニウ
放埒に精舎のかねをつかひ捨(すて)　卜尺
大坂くづれ瓦のこれる　紀子
神鳴の火入とかやは是とかや　桃青
鬼一口に伽羅を喰割(くひわり)　二葉子
花の時千方といつつ(六)若衆なり　紀子
戀のくせもの王代の春　卜尺

〔一〕『二葉集』に「花咲事もなかりしに」
〔二〕同「鶯の宿り」
〔三〕同「織もの卷物」
〔四〕同「高根の雲の立まよひ」
〔五〕同「三千餘人の」
〔六〕同「千方さいつし」

一葉集　延寶七年作

佛兮・湖中共編の『俳諧一葉集』に「延寶七年己未冬」の作としてある。以前の諸集に所見なき三吟歌仙である。『一葉集』は引用書を一切擧げて居ないので、いかなる板本より採つたか明瞭しない。默池編の『俳諧袖珍鈔』には「拾遺」として、諸集に洩れたるを編者の拾遺したるかの如く記してある。仍つて本文は『一葉集』から再録し、傍ら『袖珍鈔』を校合用に參照した。

わすれ草(一)煎菜につまん年の暮　桃青
笊籬(ざる)味噌こし岸傳ふ雪　千春
濱風の菲盤に餘る音冴て　信徳
磯なれ衣おもくかけつゝ　青

鼠とりこれにも月の入たるや　春
紙燭けしては鶉啼也　徳
ウ
あゝ誰じや下女が枕の初尾花　青
百にぎらせてたはぶれの秋　春
仇し世をかるたの釋迦の詫れしは　徳
〔二〕あるひはてつち十六羅漢　青
又男か姿かたちはかはらねど　春
古い羽折に老ぞしらるゝ　徳
つく〴〵と記念のやゝを寝させ置　青
結びもとめぬざんぎりの露　春
鎖がまもれて出たる三日の月　徳
雲井に落る鷹の細首　青
料理人御前を立て花の浪　春
木具屋の扇沖の春風　徳
ニオ
住吉の汐干に見えぬ小刀砥　青
箔の姫松縫ものをとく　春
じゝばゝに襁褓も袖も絞りつゝ　徳
枕ならべし腰ぬけの君　青
踏はづす天の浮はし中絶て　春
脛の白きに錢をうしなふ　徳
滑川ひねり艾に火をとぼし　青
鶴が岡より猪鯖の風　春
いはうさはう利久といつし法師有て　徳
朝比奈の三郎よし秀の月　青
虫の聲つゞり置たる糯藁し　春
いさご長して石摺の露　徳
ニウ
とんよなも今此時をいはひ哥　青
園生の末葉ならす四竹　春
馴てやさし乞食の妹春花に蝶　徳
うぐひす啼てこものきぬ〴〵　青
思ひ川垢離も七日の朝霞　春
南無や稲荷の瀧つせの春　徳

〔一〕「稿珍鈔」に「わすれ草菜飯に」
〔二〕同「あたひはてつち」

虚栗

其の一　天和二年作

蕉門の俊才晋其角が「紛々俳句何須ㇾ數」と喝破し、警拔なる新句體を採つて天和三年夏に『虚栗』二卷を板行した。其の上卷春の部に收めた五吟歌仙である。天明七年開板の『其角七部集』には『虚栗』も再録されて居るが、筆耕の不用意から甚しい誤寫を來してゐる。本文は『虚栗』の古板本によつて『一葉集』その他と對校をした。

憂テハ方ニ知リ酒ノ聖ヲ　貧シテハ始テ覺ル錢ノ神ヲ

花にうきよ我酒白く食黑し　芭蕉
　眼ヲ盡ス陽炎の痩　一晶
鶴啼て青鷺夏を隣るらん　嵐雪
　童子礫を手折ル唐梅　其角
月を濁す汀の蓼ヲ芦刈て　嵐蘭
　浪のさゞれにたなご釣影　筆

琵琶洗ふ雨よし朝の時雨よし　一晶
　朝にえぼしをふるふ紙衣　芭蕉
浪人の戀するを詰おぼしめす　嵐雪
　やぶの一夜に入ルかひぞなき　嵐蘭
散さくら同じ宗旨を誓ひける　其角
　藤は退之が肝魂ヲ奪フ　一晶
雷鳥のはつねは鶯ノ鳴ルならん　芭蕉
　汐てる海に鰹孕る　嵐雪
傾城の鏡を撫し神代ヨリ　一晶
　羽をりに角をかくす風流雄ヲ　其角
化しのゝ棺ヲ出て草の月　嵐蘭
　破蕉誤ツテ詩の上を次ク　嵐雪

二

朝鮮に西瓜を贈る遙ナリ　芭蕉
　つくししらぬひの松浦片撥　一晶
めづら見るあげや〱の萱庇　嵐雪
　蚤は私の盞をのむ　嵐蘭
櫛入レぬ影は六十の荊にて　其角
　御所に胡座かく世を夷也　芭蕉

人の怪異穂長の宵の熨子黒ク　一晶
松田くびなき雪の曙　嵐雪
きたなしや陣中に似せ斬かく　其角
山ン野に飢て餅を貪る　嵐蘭
盞ミ井の月に館夷が足あらふ　芭蕉
とくさは武士の憤リ艸　其角
二ウ
見ぐるしき艶書をやくや柴艳　嵐蘭
笑ひさんやに歸ル魂　一晶
曉の寐言を母にさまされて　嵐雪
つるに發心ならず也けり　芭蕉
花に栖廬山の殘をはねたらん　其角
柳にすねて瀑布を酒呑　嵐蘭

〔一〕『一葉集』に「松たぐひなき」

虚栗　其の二　天和三年作

これも『虚栗』の下巻冬の部に附録されてゐるが、芭蕉は名殘の裏の第二句にたゞ一句附けて居るのみである。『其角七部集』には名殘の表第九句に「詩きんご」の卷表四句より名殘の表第三句までの附句十八を竄入し、此の卷の附句數五十四句といふ杜撰さを見せて居る。

一年三百六十日　開テレ口ヲ笑コト無ニ二三日一

飽アクやことし心と臼の轟と　李下
世は白波に大根こぐ舟　其角
月雪を芋のあみ戸や枯つらん　同
こほろぎは書をよみ明ス帷　下
百ヲふる狐と秋を慰めし　同
傾婦を蘭の肆イチグラにうる　角
ウ
敵ある泪の色をいはす草　下

然れば天下一番の顔　角
文盲な金持は金ヲ以テ鳴ル　下
にはとり豚はつち養ふ　角
其池を忍ばずといふかび屋敷　下
士峰の雲を望む加賀殿　角
柚めして國に千曳の鏡割　下
名にたつかざし黒木串柿　角
髭あらの花見る男内ゆかし　下
春ノ宵君とはりあひのなき　角
月に鳴ノ生憎のうかれ上戸や　下
薄も白くたぶさ刈る鎌　角
二オ　朝顔は道歌の種をうへたらん　角
院の後家のあるかなき宿　下
都近き島原小野をおもひ出る　角
仕組をくだす八重のとぢ文　下
墨染に女房ふたりを賴む哉　角
ねみだれかもじ虵と成夢　下
笛による骸骨何をその情　角

凪そよ夕べ切籠灯の記　下
醉はらふ冷茶は秋のむかしにて　角
こぬ夜の格子鴫を憐レム　下
名月の前は泪にくもりつゝ　角
金橙径に粕がみを思ふ　下
二ウ　葉生姜を世捨ぬやつにたとへけん　同
摺鉢かぶる艸堂の霜　角
寸ノ法師切レの衣のみじかきに　芭蕉
昔を力ㇾ卒都婆大小　下
佛の多門を見せよ花の雲　角
凡夫三百人のはる風　同

虚栗　其の三　天和三年作

前卷と同じく『虚栗』の下卷冬の部に附錄され、この一卷が同書の卷軸となつてゐる。其角・芭蕉の兩吟である。『其角七部集』は前卷に表第四句

より十八句を奪はれたので、半歌仙の體裁で揭げてある。

酒債尋常往處有 人生七十古來稀

詩あきんど年を貪ル酒債哉　其角
冬、湖日暮て駕レ馬ニ鯉　芭蕉
干鈍き夷に關をゆるすらん　同
三線○人の鬼を泣しむ　角
月は袖かうろぎ睡る膝のうへに　同
鴫の羽しばる夜深き也　蕉

ウ
恥しらぬ僧を笑ふか草薄　同
しぐれ山崎傘を舞ふ　角
笹竹のどてらを藍に染なして　蕉
狩場の雲に若殿を戀ふ　角
一の姫里の庄家に養はれ　蕉
鼾名にたつと云題を責けり　角
ほとゝぎす怨の靈と啼かへり　蕉
うき世に沈む寒食の痩　角
春は花貧重し室はきん僕　蕉
芭蕉あるじの蝶丁見よ　角
腐レたる俳諧犬もくらはずや　蕉
繹々として寐ぬ夜ねぬ月　角

二オ
聟入の近づくまゝに初砧　角
たゝかひやんで葛うらみなし　蕉
嘲りぞ黄金は鑄ル小紫　角
黒鯛くろしおとく女が乳　蕉
枯藻髪榮螺の角を卷折らん　角
魔神を使トス荒海の崎　蕉
鐵の弓とり猛き世に出よ　角
虎懷に姙るあかつき　蕉
山寒く四睡の床をふくあらし　角
うづみ火消て指の灯　蕉
下司后朝をねたみ月を閉　角
西瓜を綾に包ムあやにく　同

二ウ
哀いかに宮城野のほた吹凋るらん　蕉
みちのくの夷しらぬ石臼　角

武士の鎧の丸寐まくらかす　蕉
八聲の駒の雪を告つゝ　角
詩あきんど花を貪、酒債哉　、
春湖日くれて駕レ輿ニ吟　蕉

蓑虫庵小集　天和三年作

伊賀の蕉門猿雖の曾孫桐雨が文政七年『蓑虫庵小集』と題して板行した書に、「翁書連句二卷の内」として掲記されてゐる。按ずるに天和二年冬深川の芭蕉庵類焼して甲斐に逃れ、所謂芭蕉洞にて高山麋塒・芳賀一晶の兩人と鼎坐し、此の三吟歌仙を試みたのであらう。本文は『蓑虫庵小集』により『一葉集』その他と對校した。

胡草垣穗に木瓜も無家哉　麋塒
笠おもしろや卯の實むら雨　一晶
ちるほたる沓にさくらを拂ふらん　芭蕉
市に小言をになふ朝月　塒
やゝさぶの殿は小袖をうちかけて　晶
紅白の菊かぜに恭を採　蕉
ウ　しづかなる卯塔雨の日をくらく　塒
とねりは椽をかりて居ねぶる　晶
楊弓のそれ矢は御簾にとゞまりて　蕉
上氣の神といはふ三線　塒
うば玉の裸を箔に彩けり　晶
密男はおよいのちつれなき　蕉
あさがほのくねるにゆすりをこされて　塒
うしと髪きる葛のいつはり　晶
母の親にあまえて月を背けをり　蕉
うもれてはてぬ身を支離にて　塒
通夜堂のかいくれ花をのぞくころ　晶
さくら子消てつり鐘に垂　蕉
ニオ　春風の池にかゞみをほり出す　塒
鳥は椽をつぐるふくどり　晶

陸の田に餅米苅らん君とつれて　蕉
青萩ぞめのはかま織らする　塒
風のきぬけぶりの音をや括〔二〕らん　晶
月野をたどる道行の感　蕉
あたらしき塚ゆさ〳〵とぞ呼凄し　塒
耆を後の臣にいさめる　晶
千金はいやしく糞土をたからとす　蕉
麗姫もすつればあぶらくさしや　塒
吉原の三十年を老の九十九髮　晶
ねやのはしらに念佛書をく　蕉
二ウ
よもぎふに火をけす狐來ざりけり　塒
ひとり胡弓をつくすよすがら　晶
島もりの髭等に酒を買せつゝ　蕉
松に巣をもる蝙蝠の千代　塒
俳諧のそらごと花の浮狂人　晶
馬蹄に皷おくるはるかぜ　蕉

〔一〕『一葉集』に「通夜堂の階・暮花を」
〔二〕同「音をや括すら・ん」

一　葉　集　　天和三年作

桐雨の『蓑虫庵小集』に「翁耆連句二巻之内」の其の一巻であらうと思ふが、同集には一巻より載せてない。三吟の作者も前巻と同一であるから、甲斐流寓中の作であらう。『一葉集』から採録した。

夏馬の遅行我を繪に見る心かな　芭蕉
變〔一〕手ぬるゝ瀧凋む瀧　麋塒
蕗の葉に酒灑竹の宿〔二〕徹て　一晶
弦なき琵琶にとまる黄鳥
面洗ふ瀧の鏡などゝては
さくらは二十八計けん
ウ
きさらぎや武者物語申上

後家御靈雨の率雁の居がくれ
かくらても旅ねは少し矢背の里
更てはるかに門たゝくおと
斯る雪詩を買に來る人あらん
一爐の粥に江の燒屋舟
國荒て憎しと雁肥にけり
暮風鎭偸の宿
クツワ子が鞘卷望む月照せ
妹萩米也もうき世萬葉〔一〕
花あはせ櫻は判をしりぞいて
燕尾は風の裾をかへす也

二

陽炎の其殿屋作る日の大工
嫁に嫁喚百年の粟
今朝の／＼うかれ道者の袖を引
櫛のり坂の清水濁るな
血に染る甲を松にかけ置て
餅を拜する大年の例
長史なる乞食は京の棠帥
千本をふとる牛茶の糞
崩たる顏は又鳥の娟をかり
古佛の腹に假寢せし月
身をしぐれ荒山伏の袖ぬれて
佛白雲の后こがるゝ

二ウ

ちぎり寺牡丹は晝のかゞり火に
白袋袖躍あやめ髮結
我ほめる乙罕ばかり雨降な
夕影長者旦まつらん
九ツの鼎に赤き花を煉
序を書殘す藤の文橋

〔一〕「萬葉集」の草體明瞭ならず、「變手」とも見ゆれど季なし。しばらく「麥手」(むぎのて)と判讀して置く。
〔二〕同「宿懲て」とも見ゆ。

金蘭集

天和年中作

加賀の蕉門萬子の遺稿『金蘭集』に芭蕉の連句百餘卷ありしを同國の僧一翎書寫し、越後の俳人甘井に授與した。南無庵耆虬が一翎・甘井兩人の遺志をつぎ、文化三年出板したのが、現存の『金蘭集』二卷である。杉風・芭蕉兩吟の歌仙も同書に收めてある。『一葉集』は天和年中の作として收錄してゐるので、年代はそれに從つて本文を『金蘭集』及び『一葉集』を對校して掲ぐ。

時節さぞ伊賀の山越花の雪　杉風
　身はこゝもとに霞む武藏野　(一)桃青
店賃の高き軒端に春の來て　、
　どうやらかうやらくるゝ年波　風
發句脇されば(二)名殘の月遠し　、
　たぞこい鐘は八ッか七ッか

ウ
寐苦敷例の痞に夢覺て
　昨日の酒をとふほとゝぎす
浮雲の消えて跡なき紙帳
　觀仁已来の山下風の風
古郷の松ははびこる境杭
　朱印を染て時雨降行く
探幽が籠の雲に殘る月
　京ばし渡る初雁の聲
伏見鴛投其頃は秋の風
　かこひを亭に手枕の露
一生(四)はおこり氣のなき我思
　世をうき物にかるうして置

二オ
張
はりぬきに都の辰巳山見えて
　ふのりをときし寺さふらふな
前髪に立名を包絹の帽
　淚をむすぶ編笠の紐
落らるゝ心の中ぞ哀なる
　まつさかさまにきしのしら露

又獨(ひとり)つゞいて進む法師武者

　いさごを蹴立尻馬に鞭

寐とぼけて夜深ゝ刀に旅衣

　三里斗(ばかり)の跡に朝霧

追剝に扨もあぶなき野路の露

　うけて流いた太刀風の米〔五〕

ニウ
吉岡の松にかゝれる雲はれて

　雨やくろちや(茶)をそめて行らん

消殘る手摺の幕の夕日影

　火縄のはしの一二寸程

何者か詠捨たる花の跡〔六〕

　江戸にも上野國木の春

〔一〕『一葉集』に作者名「芭蕉」

〔二〕同「發句脇されて」

〔三〕『金蘭集』に「寐苦敷」とあれど『一葉集』「寐くるしき」とあれば「苦」は「苦」の書損なるべし。

〔四〕『一葉集』に「一生は起る氣の」

〔五〕『金蘭集』・『一葉集』ともに「太刀風の米」とあれど「米」は「末」の草體の誤寫ならん。

〔六〕『一葉集』に「花のかげ」

冬の日　其の一　貞享元年作

七部集の第一編である『冬の日』（一二尾張五歌仙）は貞享元年冬京都の井筒屋庄兵衛から板行されたが、寛政以後その古板本と思はるゝものが發見されない。曲齋は『婆心錄』に再板本を難じてゐるが、曲齋自身も古板本を見て論じたのでない。こゝに收めたのも再板本（二種アリ）の善本に依つたので、曉臺の『幽蘭集』その他を參照して古板本の俤を傳ふる事にした。

笠は長途(ちやうと)の雨にほころび、紙衣(かみこ)はとまり／＼のあらしにもめたり。侘つくしたるわび人、我さへあはれにおぼえける。むかし狂哥の才士此國に

たどりしさまを不圖おもひ出て申侍る

狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉　芭蕉
　たそやとばしる笠の山茶花　野水
有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮
　かしらの露をふるふあかうま　重五
朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　杜國
　日のちり〳〵に野に米を苅　正平

ウ

わがいほは鷺にやどかすあたりにて　野水
　髮はやすまをしのぶ身のほど　芭蕉
いつはりのつらしと乳をしぼりすて　重五
　きえぬそとばにすご〳〵となく　荷兮
影法のあかつきさむく火を燒て　芭蕉
　あるじはひんにたえし虛家　杜國
田中なるこまんが柳落るころ　荷兮
　霧にふね引人はちんばか　野水
たそがれを橫にながむる月ほそし　杜國
　となりさかしき町に下り居る　重五
二の尼に近衞の花のさかりきく　野水

二オ

　蝶はむぐらにとばかり鼻かむ　芭蕉
のり物に簾透顏おぼろなる　重五
　いまぞ恨の矢をはなつ聲　荷兮
ぬす人の記念の松の吹おれて　芭蕉
　しばし宗祇の名を付し水　杜國
笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮
　冬かれわけてひとり唐苣　野水
しら〳〵と碎けしは人の骨か何　杜國
　烏賊はゑびすの國のうらかた　芭蕉
あはれさの謎にもとけし郭公　野水
　秋水一斗もりつくす夜ぞ　芭蕉
日東の李白が坊に月を見て　重五
　巾に木槿をはさむ琵琶打　荷兮

二ウ

うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに　芭蕉
　箕に鮗の魚をいたゞき　杜國
わがいのりあけがたの星孕むべく　荷兮
　けふはいもとのまゆかきにゆき　野水
綾ひとへ居湯に志賀の花漉て　杜國

廊下は藤のかげつたふ也　重五

冬の日　其の二　貞享元年作

前巻と同じく『冬の日』五歌仙の第二の巻である。

おもへども壯年いまだころもを振はず

はつ雪にことしも袴きてかへる　野水
霜にまた見る蕣の食　杜國
野菊までたづぬる蝶の羽おれて　芭蕉
うづらふけれとくるまひきけり　荷兮
麻呂が月袖に鞨鼓をならすらん　重五
桃花をたをる貞徳の富　正平
ウ
雨こゆる淺香の田螺ほりうへて　杜國
奥のきさらぎを只なきになく　野水
床ふけて語ればいとこなる男　荷兮
縁さまたげの恨みのこりし　はせを
口おしと瘤をちぎるちからなき　野水
明日はかたきにくび送りせん　重五
小三太に盃とらせひとつうたひ　芭蕉
月は遅かれ牡丹ぬす人　杜國
縄あみのかゞりはやぶれ壁落て　重五
こつ〳〵のみ地藏切町　荷兮
初はなの世とや嫁のいかめしく　杜國
かぶろいくらの春ぞかはゆき　野水
二オ
櫛ばこに餅すゆるねやほのかなる　かけい
うぐひす起よ帋燭とぼして　芭蕉
篠ふかく梢は柿の蔕さびし　野水
三絃からん不破のせき人　重五
道すがら美濃で打ける碁を忘る　芭蕉
ねざめ〳〵のさても七十　杜國
奉加めす御堂に金うちになひ　重五
ひとつの傘の下舉りさす　荷兮
蓮池に鷺の子遊ぶ夕まぐれ　杜國

まどに手づから薄様をすき　野水
月にたてる唐輪の髮の赤枯て　荷兮
戀せぬきぬた臨濟をまつ　はせを
ニウ
秋蟬の虛に聲きくしづかさは　野水
藤の實つたふ雫ほつちり　重五
袂より硯をひらき山かげに　芭蕉
ひとりは典侍か局か内侍か　杜國
三ケの花鸚鵡尾ながの鳥いくさ　重五
しらかみいさむ越の獨活苅　荷兮

〔一一〕『幽蘭集』に「初花の世とてや嫁の」
〔一二〕同「三線からむ」

冬の日　其の三　貞享元年作

同じく『冬の日』五歌仙の第三の巻である。

つえをひく事僅に十歩

つゝみかねて月とり落す霽蕭　杜國
こほりふみ行水のいなづま　重五
歯朶の葉を初狩人の矢に負て　野水
北の御門をおしあけのはる　芭蕉
馬糞掻あふぎに風の打かすみ　荷兮
茶の湯者おしむ野べの蒲公英　正平
ウ
らうたけに物よむ娘かしづきて　重五
燈籠ふたつになさけくらぶる　杜國
つゆ萩のすまふ力を撰ばれす　芭蕉
蕎麥さへ青し滋賀樂の坊　野水
朝月夜双六うちの旅ねして　杜國
紅花買みちにほとゝぎすきく　荷兮
しのぶまのわざとて雛を作り居る　野水
命婦の君より米なんどこす　重五
まがきまで津浪の水にくづれ行　荷兮
佛喰たる魚解きけり　芭蕉
縣ふるはな見次郎と仰がれて　重五
五形菫の畠六反　とこく

二オ

うれしげに囀る雲雀ちり／＼と　芭蕉

眞晝の馬のねふたがほ也　野水

おかざきや矢矧の橋のながきかな　杜國

庄屋のまつをよみて送りぬ　荷兮

捨し子は柴刈長にのびつらん　野水

晦日をさむく刀賣る年　重五

雪の狂呉の國の笠めづらしき　荷兮

襟に高尾が片袖をとく　はせを

あだ人と樽を棺に呑ほさん　重五

芥子のひとへに名をこぼす禪　杜國

三ヶ月の東は暗く鐘の聲　芭蕉

秋湖かすかに琴かへす者　野水

二ウ

烹る事をゆるしてはぜを放ける　杜國

聲よき念佛藪をへだつる　荷兮

かげうすき行燈けしに起侘て　野水

おもひかねつも夜るの帶引　重五

こがれ飛たましゐ花のかげに入　荷兮

その望の日を我もおなじく　はせを

〔一〕『幽蘭集』に「栗」を「あられ哉」に讀誤る

冬の日　其の四　貞享元年作

これも『冬の日』五歌仙の第四の卷である。

なには津にあし火燒家はすゝけたれど

炭賣のをのがつまこそ黑からめ　重五

ひとの粧ひを鏡磨寒　荷兮

花薊馬骨の霜に咲かへり　杜國

鶴見るまどの月かすかなり　野水

かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉

(二)荻織るかさを市に振する　羽笠

ウ

加茂川や胡麻千代祭り微近ゝ　荷兮

いはくらの聟なつかしのころ　重五

おもふこと布搗哥にわらはれて　野水

うきははたちをこゆる三平　杜國

捨られてくねるか鴛の離れ鳥　羽笠
火をかぬ火燵なき人を見む　芭蕉
門守の翁に帋衣かりて寢る　重五
血刀かくす月の暗きに　荷兮
霧下りて本郷の鐘七つきく　杜國
ふゆまつ納豆たゝくなるべし　野水
はなに泣櫻の黴とすてにける　芭蕉
僧ものいはす款冬を呑　羽笠

二オ
白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　荷兮
宣旨かしこく釵を鑄る　重五
八十年を三つ見る童母もちて　野水
なかだちそむる七夕のつま　杜國
西南に桂の花のつぼむとき　羽笠
蘭のあぶらに卜木うつ音　芭蕉
賤が家に賢なる女見てかへる　重五
釣瓶に粟をあらふ日のくれ　荷兮
はやり來て撫子かざる正月に　杜國
つゞみ手向る辨慶の宮　野水

寅の日の旦を鍛冶の急起て　芭蕉
雲かうばしき南京の地　羽笠

二ウ
いがきして誰ともしらぬ人の像　荷兮
泥にこゝろのきよき芹の根　重五
粥すゝるあかつき花にかしこまり　やすい
狩衣の下に鎧ふ春風　芭蕉
北の方なく／＼簾おしやりて　羽笠
ねられぬ夢を責るむら雨　杜國

〔一〕『曠野集』に「萩織かさね」

冬の日　其の五　貞享元年作

これも同じく『冬の日』五歌仙の第五の終で、これを以て一集は終つてゐるが、別に追加、六句を掲げてある。

田家眺望

霜月や鸛のイ／＼ならびゐて　荷兮
　冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉
樫檜山家の体を木の葉降　重五
　ひきずる牛の鹽こぼれつゝ　杜國
音もなき具足に月のうす／＼と　羽笠
　酌とる童蘭切にいで　野水
ウ
秋のころ旅の御連歌いとかりに　芭蕉
　漸くはれて富士見ゆる寺　荷兮
寂として椿の花の落る音　杜國
　茶に糸遊をそむる風の香　重五
雉追に烏帽子の女五三十　野水
　庭に木曽作るこひの薄衣　羽笠
なつふかき山橋にさくら見ん　荷兮
　麻かりといふ哥の集あむ　芭蕉
江を近く獨樂庵と世を捨て　重五
　我月出よ身はおぼろなる　杜國
たび衣笛に落花を打拂　羽笠
　籠輿ゆるす木瓜の山あひ　野水

二オ
骨を見て坐に泪ぐみうちかへり　芭蕉
　乞食の簑をもらふしのゝめ　荷兮
泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て　杜國
　御幸に進む水のみくすり　重五
ことにてる年の小角豆の花もろし　野水
　萱屋まばらに炭團つく臼　羽笠
芥子あまの小坊交りに打むれて　荷兮
　おるゝ蓮のみたてる蓮の實　芭蕉
しづかさに飯臺のぞく月の前　重五
　露おくきつね風やかなしき　杜國
釣柿に屋根ふかれたる片庇　羽笠
　豆腐つくりて母の喪に入　野水
二ウ
元政の草の袂も破ぬべし　芭蕉
　伏見木幡の鐘はなをうつ　かける
いろふかき男猫ひとつを捨かねて　杜國
　春のしらすの雪はきをよぶ　重五
水干を秀句の聖わかやかに　野水
　山茶花匂ふ笠のこがらし　羽笠

皺筥物語

貞享元年作

芭蕉の歿後尾張熱田の蕉門東藤・桐葉及び梅人の徒が、師芭蕉の同國にしば〳〵來つて俳諧を行へる事蹟を追慕し、元祿八年『皺筥物語』を板行した。此の卷は其の書に掲げてあるが、安永四年名古屋の蘂雨巷曉臺は別に『熱田三歌仙』にこれを收めて世に廣めた。本文は『皺筥物語』より採つて『熱田三歌仙』を參照校合した。

尾張の國あつた（熱田）にまかりける比、人々師走の海みんとて、船さしけるに

海くれて鴨の聲ほのかに白し　翁（一）
　串に鯨をあぶる盃　桐葉
二百年吾此やまに斧取て　東藤
　樫のたねまく秋はきにけり　工山
入月に鵤の鳥のわたる空　葉
　駕籠なき國の露負れ行　翁
ウ
降雨は老たる母の泪かと　山
　一輪咲し芍藥の窓　藤
師
恭の工夫二日とおたる日を晒て　翁
　周にかへると狐なくなり　葉
露芝堀河原はるかに暮かゝり　藤
　花表はげたる松の入口　山
笠敷て衣のやぶれ綴り居る　葉
　あきの鳥の人喰にゆく　翁
一昨日の野分の濱は月澄て　山
　霧の雫に龍を書續ぐ　藤
華曇る石の扉を押開き　葉
　美人のかたち拜むかげろふ　山
二オ
蝦夷の聟聲なき蝶と身を佗て　翁
　生海鼠干にも袖はぬれけり　藤
木の間より西に御堂の壁白く　山
　藪に（三）葛屋の十ばかり見ゆ　翁
ほつ〳〵と（二）爐つくる祖父ひとり　藤

京に名高し瘤の呪咀　　葉
富士の根と笠きて馬に乘ながら　　翁
寐に行鶴のひとつ飛らん　　山
待暮に鏡をしのび薄粧ひ　　葉
衣かつく小性萩の戸を推　　藤
月細く土圭の響八ツなりて　　山
棺いそぐ消がたの露　　翁
二ウ
破れたる具足を国に送りけり　　藤
高麗のあがたに畠つくりて　　葉
紅粉染の唐紙に花の香をしぼり　　翁
ちいさき宮の永き日の伽　　山
春雨の新發意粽荷ひ來て　　翁
春草ちらす藤のつぼ折　　藤

〔一〕『熱田三歌仙』に「芭蕉」
〔二〕『熱田三歌仙』に「藪にくすや」、『一葉集』に「藪に居屋」
〔三〕同「ほつ〳〵さ炮碌」

元祿風韻　其の一　貞享元年作

曲齋瓢子の『貞享式海印錄』に「祇翁出席卷」として、『元祿風韻』の書名を擧げ、本文に本卷の附句を引用してゐる。桃鏡の『春と秋』、柳條の『奥の枝折』は發句・脇のみを載せ、『一葉集』亦これに據つて全卷を逸してゐる。幸ひ曲齋門人倉重逸志の筆寫した『元祿風韻』には此の時の歌仙全部があるので、逸志の寫本によつてこゝに揭ぐ。

師の櫻むかし拾はん落葉哉　　嗒山
薄を霜の髭四十一　　芭蕉
月夜すむ竹の曲錄琵琶澄て　　木因
簾に鱅の聲を設し　　如行
洞鴨の石の古巣も冷じく　　蕉

作らぬ松の雨にのびたる　山
草鞋を印の塚に築しより　行
嵐の太郎熊狩に入　因
武かれと聟の心やためすらん　山
破軍の誓ヒ餅北に搗　蕉
日の諷ひ簇を踊る果の國　因
早苗はじめて得し寶草　行
世の愛を産けん人の御粧　蕉
縫降雪のうへの月しらむ　山
曙の三味せん杖にすがりたる　行
寄手を招く水曳の攙　因
花を射て梢を船に贈けり　蕉
詩を啼烏柳みどりに　山
不二の晴蜆に雪を斗り見る　因
女に法を說く夜千年　行
朝がほに髪結ふ人ぞあわれなる　山
貧のやつれに萩の庭賣る　蕉
犬捨る名殘は露を吼けらし　行
馬塊三谷の楊貴妃の杖　因
誰が國の記念ぞ鏡すむ月は　蕉
琴の唱歌に作り艶れて　山
明石なるしらゝ吹上須磨明石　因
夕べ佗しらぬ鯛寺に絓む　行
霰うつ草刈鼓とり出て　山
棺に菌を飾る年の夜　蕉
愚を溺て金を我子に隱したる　行
二疋の牛を市に吟ずる　因
鶉分鶉分朝の啼き　蕉
美山の瀧を産水に浸む　山
散レと折ル花に白髮の香　因
世の外輕し身は野老賣り　行

嗒山九　芭蕉九　木因九　如行九

〔一一〕『春と秋』に「すゝきに霜の」

熱田三歌仙 其の一 貞享二年作

此卷は曉臺が芭蕉眞蹟を所藏し『熱田三歌仙』の一卷としたので、『芭蕉翁眞蹟有三暮雨卷二』と卷末に附記してある。白雄（昨烏しら尾坊）の著『枕表紙』にも此卷を轉錄してあるが、別に異同といふ程の事はない。本文は『熱田三歌仙』に據つた。『一葉集』には「貞享二乙丑年三月廿七日」と前文が附いてゐる。

何とはなしに何やらゆかし菫艸　芭蕉
あみ笠しきて蛙聴居る　叩端
田螺わる賤が童のあたゝかに　桐葉
公家に宿かす竹の中みち　蕉
月曇る雪の夜桐の下駄すげて　端
酒飲む姨のいかに淋しき　葉
ウ
双六のうらみを文に書盡し　蕉

琴爪をしむ袖の移り香　端
髪下す侍從が娘おとろへて　葉
野の宮のあらし妓王寺の鉦　蕉
虚樽に色なる草をかたげ添　端
雲者をとむる名月の關　葉
面白の遊女の秋の夜すがらや　蕉
遊風をしのぶ紅粉皿　端
川瀬行髻を角に結分て　葉
舎利とる瀧に朝日うつろふ　蕉
畏る石の御坐の花久し　端
羽織に酒をかへる櫻屋　葉
二
歌よみて女に鑿おくりけり　蕉
枕屏風の書になみだぐみ　端
聞なれし笛のいろえの遠ざかり　葉
三ッ股のふね深川の夜　蕉
庵住やひとり杜鵑を味ひて　端
花幽なる竹こきの蕎麥　葉
いかに鳴百舌鳥は吹矢を負ながら　蕉

水汲む小僧袖ひやゝかに　端
月明て打板山をへだつらん　葉
雲は夜盗の跡捜むなり　蕉
むら雨のそゝぎ捨たる馬の沓　端
ひとつ兎の瓜喰ふ音　葉

二ウ
笠見ゆる人は葎にとぢられて　蕉
男やもめの老ぞかなしき　端
風くらき大年の夜の七ツ聞　端
御門を叩く生鯉の奏　蕉
常盤山常盤之助が花咲て　葉
俤に残る連歌師の松　端

熱田三歌仙　其の二　貞享二年作

『鐵宮物語』に「（貞享）おなじく二年の春、又わらぢをさきて、景清が屋敷をさぶらひ、頼朝誕生の舊跡見んとのたまひければ人々それに應ず。道のほどにて」とあつて「つく〴〵と」の發句及び芭蕉の脇句を擧げて、第三より省略されて居るが、『熱田三歌仙』には一巻全部を載せ、『一葉集』には「何とはなしに」の巻と同日の作としてある。『八橋集』にも再録されて居る。

つく〴〵と榎の花の袖にちる　桐葉
獨茶をつむ藪の一家　芭蕉
日かげ山雉子の雛をおはへ來て　叩端
清水をすくふ馬柄杓の月　〔二〕閑水
面白き野邊に鮓賣ル草の上　東藤
宿のみやげに撫子を堀る　蕉

ウ
はな紙に都の連歌書つけて　端
暮る大津に三井の鐘きく　山
雪を佗ぶ漁の姥が袖を見よ　端
寝に行鴨の四五百の空　葉
松風の〔三〕甕に酒を飲つくし　水
ほとけを刻む西谷の僧　藤

烏羽玉の髪切ル女夢に来て　端
　戀をみやぶる朝顔の月　蕉
秋は猶唯味き物喰ひけり　葉
　白子の太夫わが霧の海　山
浪よする鯨の骨に花植て　藤
　陰干す於期のかつら這ふ道　端
二オ
笠持て霞に立るやせ男　蕉
　五重の塔のほとり夕暮　桂　枏
鶺鴒の尾を蜘の圍に懸られて　端
　風に身を置けふの討死　葉
筆とりて枏の廣葉を引撓め　端
　田舎祭りに物見そめたる　藤
うちかつぐ前だれの香のなつかしく　枏(三)
　たはれて君と酒買にゆく　蕉
銀の鉢に鮊およがせて　葉
　おほん歸京の時を占ふ　山
韃靼の東の寺に月凄く　藤
　猿手の栗の何をまねくぞ　端
二ウ
蟬鳴てまた澁柿の秋の空　蕉
　草屋幽に馬の尾の琴　山
哀なる乘物燒て歸る野に　藤
　入日の跡の星一ツ三ツ　葉
宵寺が油さげつも花の奥　蕉
　つゝじのふすま着たる西行　枏

（一）『幽蘭集』に作者「黄口」
（二）同「松のひゞきに」
（三）同、作者名「口一」とあり黄口の略

ゆめのあと

貞享二年作

此の卷は近江佐々木の神職大江春彦の所持せるた車蓋が希因の家より乞受け、寛政九年『ゆめのあさ』に收めて板行したのである。同書に「貞享二年叔父桐葉のもとを別るゝとて」とあるは舊藏者春彦の書添へであらう。

牡丹蘂(一)深く這出る蜂の別れ哉　　芭蕉
　朝月涼し露の玉ほこ(鉾)　　桐葉
歌袋望(つぞみ)なき身に打かけて　　叩端
　たま〱膳について箸とる　　蕉
新屋根になじまぬ板の雨雫　　葉
　二百ちがひに馬の落札　　端
ウ
たぶさ引跡は小聲の男同士　　蕉
　涙に濁る池の人かげ　　葉
竹蜂のするどき月の夕あらし　　端
　茶の實こき行牛の噍(にれかむ)　　蕉
年ふりて苔妻祭りの關ヶ原　　葉
　かちん(褐)のくゝり高き宿老(しゆくらう)　　端
薄ぐらき簾にはさむ紙の屑　　蕉
　硯のはらの合(あは)ぬひら筆　　葉
くり〱と醒たる酒の醉ごゝろ　　端
　谷眞風をかつぐ舟の眞下り　　蕉
花散りて近き見越の角矢倉(すみやぐら)　　葉
　燕の泥を落す屑ぎぬ　　端

二オ
出代の腰に提(さげ)たる持草履　　蕉
　晝の日脚に過る風そら　　葉
地(ぢ)雷(らい)火(くわ)に逆立浪の赤はしり　　端
　鷺の塒(ねぐら)を替る枯柳　　蕉
僧正のさ(二)かやき寒き童子様　　葉
　忘れて焦(こが)す飯の焚しり　　端
お茶壺の雨にむかひて扇子敷　　蕉
　旅の乞食の寄る小所　　葉
物買(一)の袂へおろす上﨟　　端
　鉦の音響く盆(四)の灯燈(とうろう)　　蕉
蝙蝠のかけ廻りつる月の暮　　葉
　風冷初る馬場の白砂　　端
二ウ
振鉾を幾つも仕たる仲間入(ちゆうまいり)　　蕉
　衾かぶりて顔を繪に書　　葉
燃口の煙りにからき醬油　　端
　湯さやの杉の廣き木宮　　蕉
花垣に邊(あた)りの青葉引挽メ　　葉
　かれも角組はるの蝸牛(でゝむし)　　端

(一)『一葉集』に「牡丹蘂を深く」
(二)同「僧正の天窓の」
(三)同「粉賣の袂へ」
(四)同「盆の燈籠」

無底籠　貞享三年作

京都の車蓋が天明七年『誹諧哥仙七部拾遺』と題し芭蕉の連句草稿六卷を梓　したが享和三年『初懷紙』その他を翻刻して同名の『七部集拾遺』と名附け、出板せる際に再びこれを附錄した。車蓋の初板『七部拾遺』の後、享和二年寶晋堂奥山は奥州行脚中、たま〳〵別に此の卷を得、其の著『無底籠』に收めて板行した。仍つて本文は『無底籠』により初板『七部拾遺』と對校し、兩者の異同を附記する事にした。

貞享三丙寅正月

久方やこなれ〳〵とはつ雲雀(ひばり)　去來
旅なる友をさそひ越す春　芭蕉
(一)からばかす櫻の庵掃過て　其角
(二)よろしく長き一瓢の酒　嵐雪
月はれて灯火赤き海の上　蕉
峠(たうげ)のそこにふく秋の音　來
ウ
牛縄に袷お(三)もたく羽折ける　雪
官位あたへて美女召具せり　角
挑灯に大蠟燭の高けぶり　來
出水にくだる(四)宮の材木　蕉
世わたりは關に道ある寺の脊戸(せど)　角
つゝむにあまる腹氣押へし　雪
化人(あだびと)のためにかくまで氏をすて　蕉
何についたる年暮の雪　來
なきおくる八重山木の犬の聲　雪
軍の加減うとき長おひ(追)　角
さる程に心にそまぬ月も花も　來
やよひ(彌生)へかけて蝦夷(えぞ)の帳合　蕉

二オ
(五)雨もやう陽炎消ゆるばかり也　角
小姓泣行葬禮の中　雪
叮寧も事によるべき杖嚢　蕉
敷ものとても須磨の鹽薦　來
あはれます昔がたりの杳手鳥　雪
橋やせし竹の夕陰(六)　角
冥加なふ(七)藥すゝめにお腰もと　來
毛氈をしき書畫のはじまり　蕉
こぢあくる庇の下(八)の十萬家　角
日は何時ぞ醉ざめの月　雪
きり〴〵すいかで心(九)の情なき　蕉
莖たくましき筒の雞頭花　來

二ウ
いつとても雨部の護摩の片燃に　雪
四ツの智慧には過た家の子　角
鼻つまむ晝より先の生肴　來
あはつに負ぬ串(一〇)の有さま　蕉
繩きれて架木に咲る花かろく(一一)　角
遊ぶ思案のわけて長閑し　雪

(一)『七部拾遺』に「借れば貸す櫻の庵捨置て」
(二)同「よしさ口きる一瓶の酒」
(三)同「袷持せて羽織ける」
(四)『一葉集』に「出水にくだす」
(五)同「雨催ひ」
(六)『七部拾遺』「竹の夕影」
(七)同「冥加なう夜食すゝめる」
(八)同「庇の下に」
(九)同「いかで浮身の」
(一〇)『一葉集』に「負ぬ公事の」
(一一)同「花もろく」

一　橋　　貞享三年作

羽州尾花澤の鈴木清風が京・江戸の知名な俳諧師と一坐して、相詠じた連句を『誹諧一橋』と題し、貞享三年秋板行した中の一歌仙である。芭蕉は『奥細道』に清風を「富るものなれども志いやしからず」と稱揚してゐる。此の巻は芭蕉一門との六吟で『七部拾遺』にも採錄されて居る。

三月廿日即興

花咲て七日鶴見る麓かな　芭蕉
懼て蛙のわたる細橋　清風
足踏木を春また氷る筏して　學白
米一舛をはかる關の戸　曾良
名月を隣はねたる草枕　コ齋
枝みぐるしき桐の葉を刈　其角
墨衣ふるへば虫のから落て　清風
内外の下向しづか也けり　學白
すでに立ッ討手の使いかめしき　曾良
一夜の契り錢かづけたる　芭蕉
松明に顔みんといふ君はたゞ　キ角
生て捨子の水に流るゝ　清風
影形チしれぬ敵を世になげき　曾良
ことしの餅をおもふ山寺　コ齋
雪を持樫やさはらに露みえて　學白
虹のはじめは日も匂なき　キ角
しづみては溫泉を醒す月すごし　はせを
三ッゆく鹿のひとつ矢を負ふ　コ齋
彌々と軍に氣ある朝薄　嵐雪
男ながらの白粉をぬる　清風
膝琴に明の風雅を忘れざる　キ角
涙おり／＼牡丹ちりつゝ　學白
耳うとく妹が告たる時鳥　芭蕉
つれなき美濃に茶屋をしてゐる　曾良
札燒て刀ばかりは傳えけり　清風
我がうつ鷹を殿の御拳　キ角
楢紅葉狂歌やさしくよみそへて　コ齋
京の月夜はさぞ踊〻らん　嵐雪
物となくものやむ人の獨寢に　學白
眉ぬく神の翠簾にうつぶき　芭蕉
からのふみよめぬ所をうちやりて　曾良
ひともじ買に雪の山道　コ齋
哀さは苫屋に捨し破れ網　清風
何やらなくて鹽やかぬ浦　芭蕉
相國の植たまひけん花と松　キ角

車を下りて春のやすらひ　擧白

三日月日記　貞享三年作

『芭蕉庵三日月日記』といふ芭蕉の手稿本である。出羽の圖司呂丸が芭蕉から授與され、呂丸から佐川李夕の手に渡り、享保十五年支考の序を附して出板されたのである。其の中の芭蕉・素堂兩吟の和漢連句が此の一卷で、日記の末に「元祿八月八日終」となつて居る。日記の本文を見れば元祿年中の作らしくも思はれるが、『一葉集』その他、貞享三年の部にあるので、しばらく同年の作として置く。

納涼の折〳〵いひ捨たる和漢、月の前にしてみたしむ。

破風口に日影やよはる夕涼　芭蕉
煮レバ茶ヲ蠅避ク烟ヲ　素堂
合歡醒ム馬上ニ　同
かさなる小田の水落すなり　蕉
月代見ル金氣ヲ　堂
露繁ケサ添フ玉涎ノ　同
張旭が物かきなぐる醉の中　蕉
幮を左右にわくる村竹　同
挈テ帶ノ驅ル偷鼠ノ　堂
ふるき都に殘るお魂屋　蕉
くろからぬ首かきたる栢の撥　同
乳をのむ膝に何を夢見る　同
舟ハ鎖ユルク風早ノ浦　堂
鐘ハ絕ツ日高川　同
顏ばかり早苗の泥によごされて　蕉
食はすゝけぬ蚊遣火のかげ　同
詫ヘ敎メ三社ノ本ヲ　堂
韻ヘ使メ五車ノ墳ヲ　同
花月丈山閑ン　同

篠を杖つく老の鶯　　蕉
剪テレ銀ノ鮎一寸　　堂
箕面の瀧や玉を簸らん　　蕉
朝日影頭の鉦をかゞやかし　　同
風冷喉早乾カハク　　同
よられつる黍の葉あつく秋立て　　堂
内は火とほす庭の夕月　　蕉
霧ノ籬顔執イツレ與　　堂
霖シグレノ浦目ヘ潸ナミダ焉クム　　蕉
ふとん着て共夜に似たる鳥の聲　　堂
わすれぬ旅の珠數と脇指　　蕉
山伏ヘ山平地　　堂
門番門小天　　同
鵜鶘窺ニ水鉢ヲ　　蕉
霜にくもりて明る雲やけ　　堂
奥ふかき初瀬の舞臺に花を見て　　蕉
臨テレ谷ヲ伴フニ蛙仙ニ　　堂

元祿八月八日終

元祿風韻　其の二　貞享四年作

「師の櫻」と同じく逸志の寫本『元祿風韻』にある歌仙で、發句は『續の原』その他に見えるが、歌仙は本書以外にない。『一葉集』にもこれが逸してゐる。前書に「貞享四　江戸」とあるから、『句餞別』以前卽ち貞享四年春、深川の芭蕉庵で催したのであらう。本文書損と思はるゝところもあるが、校合すべき善本なきまゝ、逸志本の通りにして置いた。

花園　貞享四　江戸

花に遊(一)ぶ虻なくらひそ友雀　　芭蕉
猫和らかにゆるゝ緒柳　　岩松
春雨に留主の隣の屋根見へて　　古益
碁盤によりし翁三人　　爐方
るりの酒水晶の月重ねたる　　松

鸞の卵をくゝむ桐の葉　蕉
朝露の夢に佛を孕らん　方
　笠の下端に結ぶ御祓　益
盗人の關は戸ざしもなかりけり　蕉
　あわれに枯し樗一本　方
風寒き夕日に鳶の聲引て　益
　軍にあすの首を占ふ　蕉
肌衣汗を筧にすゝぐらむ　方
　荆に閉る松の潛り戸　松
都より三里遊女を忍ばせて　蕉
　思ひ内にあれば日は何時ぞ　益
共まぎれ敵打べき雨の月　松
　玉むし賣て酒屋尋る　方
お針して秋も命の緒を繋ぎ　益
　琴引娘八ッになりける　蕉
石竹に小百合の露のこぼれつゝ　方
　風の南に麝香驚く　松
此山に尊の沓を踏たまひ　蕉
　松の鱗をはがす幕綱　益
紅の蔦は梢をかざるらん　松
　二聲啼て鶴月に入　方
西に見る長安城に霧細く　益
　大樽荷ふ上戸百人　蕉
舁乘て箔置牛の靜なる　方
　牡丹を手をる牡丹花の戀　益
薄やうの文に櫻の實を染て　蕉
　ねりの裳に螢つゝめる　方
しよぼ〳〵と信樂笠に小雨ふり　益
　出代り佗る一條の辻　蕉
寺々や社々の花ざかり　益
　雲は彌生のぬひものゝ天　方

〔一〕『泊船集』に「花を吸ふ」

句餞別　　貞享四年作

芭蕉は貞享四年十月、深川の庵を門人擧白に預けて上方の旅に立つた。其の餞別の詠草を寛保四年『句餞別』の表題で江戸の書肆川村源左衛門方から出板された。奥書に「續猿みのゝ例にまかせて草稿のまゝ梓になしぬ」と書いてある。潮米の本間字で芭蕉の眞蹟を摹刻した『夏しぐれ』は『句餞別』以後年數がたつて居るので、草稿のところ〴〵を虫に喰はれてゐる。

旅泊に年を越て、よしのゝ花にこゝろせん事を申す。

時は秋吉野をこめし旅のつと　露沾
　雁をともねに雲風の月　芭蕉
山陰に刈田の顔のにぎ賑はひて　沾蓬
　武者追つめし早川の水　其角
くれかゝる空につめたき横あられ　露荷
ウ
　をろさぬ窓に枝覗く松　沾荷
傘の繪をかくかしらかたぶけて　翁
　祭むかへし神山の氏　沾
暑キ日の汗をかなしむ猿の聲　セン荷
　捨し戸のよみがへりたる　蓬
行盡す五天むかしの法もなく　角
　髮ある僧に鐘つかせ聞　ロカ
戀を斷ッ鎌倉山の奥ふかし　沾
　しぼるたもとを匂ふ風蘭　翁
月清く夕立洗ふみすの煤　蓬
　客をつかふて鯉てうじける　角
花咲て人〳〵參る草の庵　ロカ
　額板ひろふ山吹の橋　センカ
二オ
信濃路やたゝらの峽の春さえて　沾
　磬ィうつかたに鳥歸る道　沾徳
楢の葉に我文集を書終り　翁
　弟にゆるす妻のさかづき　ロカ
物かげは忍び安キに月晴て　センカ

琴を聞する夜のあさがほ　蓬
馬を下りて野服をかいとる秋の露　ロカ
九輪指さす尾上はるけき　沾
風の音ならぶ蘇鐵のいかめしく　蓬
大口着たる庭の雪掃　翁
うへもなく鳩の群立千木さびて　沾
獨旅を編くらす妻　センカ

ウ

一軸の形見の連歌膝に置　ロカ
名を恥ぬべき越のたゝかひ　沾
面かけて鏡にむかふ男つき　蓬
みはしをのぼるから獅子の聲　センカ
襁織花の錦のおさ打て　翁
柳の水のすみかへる春　執筆

千鳥掛　其の一　貞享四年作

芭蕉が尾張の鳴海にて　此所は名護屋・あつたにちかく、桑名・大垣へもまた遠からず、千鳥がけに行通ひ」といつた言葉を題名に、同所の千代倉知足は『千鳥掛』を撰し、其の子蝶羽これを健・風二卷として正德二年出板した。闌更編『續七部集』に再錄されて居る。『誹諧如行子』には「貞享四年卯十一月五日」と業言亭で此の句を詠じた月日を擧げ「鳴海寺島氏業言に飛鳥井亞相の御詠草のかゝり侍りし哥に和す」といふ前文が掲げてある。

京まではまだなかぞらや雪の雲　芭蕉
千鳥しばらく此海の月　業言
小蛤ふめどたまらず袖ひぢて　知足
酒氣さむればうらなしの風　如風
引捨し琵琶の囊を打はらひ　安信
僕はおくれて牛いそぐ也　自笑

ウ

ふたつみつ反哺の鳥鳴つるゝ　重辰
明日の命の飯けぶりたつ　信
わたり舟夜も明がたに山みえて　笑

鐘いくところにしかひかしか　蕉
其すがた別の後もひとわらひ　足
なみだをそへて鄙の腰折　言
髪けづる熊の油の名もつらく　蕉
身に瘡出て秋の寝苦し　風
釣簾の外にたばこをたゝむ月の前　信
楊枝すまふの力あらそひ　足
小袖して花の風をもいとふべし　辰
こがるゝ猫の子を捨て行　信
名オ
うき年を取てはたちもやゝ過ぬ　足
父のいくさを起ふしの夢　蕉
松陰にすこし草ある波の聲　笑
翅をふるふ鳰ひとつがひ　言
しづかなる龜は朝日を戴きて　信
三度ほしたる勅のかはらけ　笑
山守が車にけづる木をになひ　蕉
燧ならして岩を打かく　足
瀧津瀬に行ふ法の朝嵐　風

狐かくるゝ蔦のくさむら　笑
殿やれて月はむかしの影ながら　言
老かむうばがころも打音　蕉
ウ
ふすぶりし榾の煙のしらけたる　辰
陣のかり屋に碁を作る程　信
山更によこをりふせる雨の脚　風
氣をたすけなんほとゝぎす聞ヶ　足
花盛文をあつむる窓閉て　言
御燈かゝぐる神垣の梅　筆

冬のうちわ

貞享四年作

『合歡のいびき』に尾張鳴海の千代倉知足の、芭蕉曳杖中の記事があり、貞享四年十一月の日記が載せてある。それに「六日晴天　如意寺にてはいかい有、桃靑老夕食振舞」と見え、『如行子』に「同じ六日鳴海如意寺會」として「めづらし

や落葉分いる翁草」から第三までが收めてある。『千鳥掛』は前文なく表六句を記し「歌仙　略之」とあるが、寶曆十三年知足の孫蝶羅の著した『冬のうちわ』には知足亭の會として此の時の歌仙一巻を板行して居る。

はせをの翁を知足亭に訪ひ侍りて

めづらしや落葉のころの翁草　如風
　衛士の薪と手折冬梅　芭蕉
御車のしばらくとまる雪かきて　安信
　錢を袂にうつす夕月　重辰
矢中の聲ほそながき荻の風　自笑
　かしこの薄爰の篠庭　知足

ウ

岡野邊に(一)こゝろを外の家立て　業言
　妾がなつけしひよこ鳴なり　信
木綿機はてぬ泪にぬらしける　風
　とはん佛の共日ちかづく　足
白雲をわけて故郷の山(二)しろし　笑
　はなてる鶴の鳴かへる見ゆ　蕉
霜覆ひ蘇鐵の冬の季をこめて　信
　煤けし額の軒にもる月　辰
秋やむかし三ッにわけたる客とかや　足
　いろ〳〵置る夕ぐれの露　風
散しとこそ簔着てゆする花の陰　信
　痩たる馬の春につながる　辰

名

米かりに草の戸出る朝かすみ　蕉
　山のわらびをつゝむ藁つと　信
我戀は岸を隔つるひとつ松　風
　うき名をせむるさゞ波の音　笑
けふのみと北の櫓の添ぶしに　足
　琵琶にあはれを楚の歌のさま　言
色白き有髪の僧の衣着て　蕉
　疊に似たる岩たゝみあげ　辰
柱引御代のはじめのうねび山　言
　さゝらにけづる伊勢の濱竹　蕉
貝のから色どる月の影清く　辰

部屋にやしなふ籠の松虫　信
ナウ
句へとぞ(三)鉢に植たる菊かりて　蕉
母のいのちを(四)ちかふ初霜　辰
羊啼その曉のあさあらし　笑
外山の花の又夢に咲　足
日はながく雨のひらたに笘葺て　信
鴈のなごりをまねくおの〳〵　言

（一）『袖草紙』に「岡野邊のこゝろ」
（二）同「故鄉の山おろし」
（三）同「匂へさて鉢に」
（四）同「いのちをおもふはつ霜」

千鳥掛　其の二　貞享四年作

『全歡のいびき』の知足の日記に「七日晴天　安信にて俳諧有、桃の老參會」とあるのが、此の一巻で貞享四年十一月七日の事である。連句は『千鳥掛』の上巻に載つてゐる。『鐵筥物語』には「寝覺は松風の里、呼續は夜明てから笠寺は雪のふる日」といふ詞書が此の折の發句に附いてゐる。『千鳥掛』は詞書を省く。

星崎の闇を見よとや鳴千鳥　芭蕉
船調ふる海士の埋火　安信
築山のなだれに梅を植かけて　自笑
あそぶ子猫の春に逢つゝ　知足
鶯の聲夜を待月のほのか也　業言
岡のこなたの野邊(一)青き風　如風
ウ
一里の雲母ながるゝ川上に　重辰
祠さだめて門ぞはびこる　言
市に出てしばし心を師走哉　足
牛にれかみて寒さわするゝ　信
籾臼の音聞ながら我いびき　風
月をほしたる螺の酒　蕉
高紐に甲をかけて秋の風　笑

渡り初する宇治の橋守　風
庵作る西行谷のあはれとへ　足
　啄木鳥（つゝき）たゝく杉の古枝　信
咲花に（二）昼食（ひるけ）の時を忘れけり　辰
　山も（三）霞むとまではつゞけし　足
二オ
幸蝶がらの油ながるゝ薄氷　風
　角（すみ）ある眉を化粧する霜　蕉
待宵の文（ふみ）を喰さく帳の内　言
　寐られぬ夢に枕あつかひ　風
罪なくて配所にうたひ慰まん　信
　庶子にゆづりし家の（四）つり物　足
式日の日はかたぶきてこゝろせく　風
　あさくさ（浅草）米の出る川口　辰
欄干に顚（おとろひ）ならぶ（五）夕涼　蕉
　笠持（テ）あふつ螢火の影　笑
初月に外里の嫁の行通ひ　足
　薄（すゝき）はまねく荆（いばら）袖引（ひく）　蕉
二ウ
鯛霧につらきは鴻の觜ならす　辰
あかゞねかはらなめらかにして　笑
氏人の庄園多き花ざかり　言
　（六）鶺鴒幾むれの春とゞまらす　風
田をかへすあたりに山の名を聞て　信
　かすみの外に鐘をかぞへる　執筆

〔一〕『一葉集』に「野は青き風」
〔二〕『幽蘭集』に「昼飯時な」、『袖草紙』に「昼餉の時な」
〔三〕『一葉集』に「山もかすみさ」
〔四〕『幽蘭集』に「家の兵」、『一葉集』に「家の形物」
〔五〕『幽蘭集』・『袖草紙』に「顚ならぶる夕すゞみ」
〔六〕『袖草紙』に「竹輿幾むれの」

雪の花　貞享四年作

『鞍笥物語』には「御修覆ありし社頭に再拜せんとまふでたまひ」として發句と脇を掲げ、熱田『三歌仙』には「みしふくありし御やしろにふた

たびまうでゝ」として同じく發句と脇を載せてある。『芭蕉袖草紙』には『雪の花』を引いて本文の如く一歌仙を收めてある。仍つて同書及び『幽蘭集』幷に『一葉集』を對校してこゝに其の全卷を擧ぐ。

(一)熱田の社、御修覆ありければ

磨直す鏡も淸し雪の花　芭蕉
石しく庭のさむきあかつき　桐葉
時〴〵は松笠落る風やみて　、
我鳩歸る山のかげろひ　蕉
秋くれて月なき岡の一ッ家　、
杖にもらひし店きびのから　葉
ウ
肌寒く習はぬ錢を襟にかけ　、
こぼるゝ鬢の黑き剛力　蕉
明わたる鐘ぬすむ夜はしら〴〵と　葉
破れし國の境守る庇　蕉
古畑にひとり生たる麥かりて　葉
物よぶ聲や野馬とるらん　蕉
松明に飯荷ひ行秋の風　葉
宮もよし野ゝ哀しる月　蕉
就中峰のきぬたぞ聞ゆなる　葉
溫泉はにえて人もすさめず　蕉
此塚の女は花の名にたはれ　葉
たが泣顏を咲るつゝじぞ　蕉
二オ
朝鷹にくまれて侘る雉の聲　、
ゆう〳〵下る坂の乘かけ　葉
水溜る一里の河原わづらひて　蕉
あらしにしづむ軒の砂除　葉
はつ(三)霙幾度こけて起直り　蕉
勅衣をまとふ身こそ高けれ　葉
鰐そふて經積船を送るかと　蕉
汐越す岩のかくれあらはれ　葉
打ゆがむ松にも似たる戀をして　蕉
縣の聟のしり目なる月　葉
あき山の伏猪を告る聲〴〵に　蕉

道一すぢを刈分る萱　葉
二ウ　優婆塞が御廟つとむる文讀て　蕉
落人起す夜は明にけり　、
煎藥にぬれ柴いぶす雨の音　葉
水桶のぼる蝸牛はかなき　、
西行の辭にならふ花さきて　蕉
春の袂に皷うつなり　葉

〔一〕『幽蘭集』に「貞享四年十一月廿四日」と詞書の前に與行の年月日あり。
〔二〕『袖草紙』に「松笠さゆる」
〔三〕『幽蘭集』に「はつあられ幾度こけて」

如行子

貞享四年作

標題に『如行子』とある稿本に、貞享四年十一月廿八日名古屋の昌碧亭の會の作として此の一巻が收錄してある。天明八年板の『桃の白實』には詞書なく歌仙のみを載せ、文字の異同が尠くない。本文は右兩書を對照し、別に『金蘭集』及び『一葉集』を參考して校合した。

ためつけて雪見にまかる〔一〕紙衣哉　はせを
凍ゐている土に拾はれぬ蘆　昌碧
松風に睡る日向のすくなくて　龜洞
鶴白鳥の下りておもしろ　荷兮
水淺く舟押ほどの秋の暮　野水
もう山〔二〕の端に月の一ひろ　〔三〕聽雪
ウ　きぬ〴〵や烏帽子置床忘れけり　越人
眉ほそむるも恥るうかれ女　舟泉
寄手〔四〕等はいつともなげに歌よみて　執筆
干飯の水のつめたきもよし　洞
着て來たる布子苦になる晝の比　碧
なみだうつりて能は覺へず　水
門跡の顏見る人はなかりけり　兮
笈に雨もる峰の稲妻　蕉

よいほどに寝てから後の礁きく　雪(五)

夜の(六)明やと膽つぶす月　人

うかうかと律義に花のまたれつる　泉

雛ともしらで飼るうぐひす　洞

二オ

尼寺に(七)春雨つゞくしとしと　碧

釣瓶なければ水に(八)とぎれて　雪(九)

夕顔の軒にとりつく久しさよ　人

布杭二本よるは淋しき　兮

隙くれし妹をあつかふ人も来ず　蕉

食焼事を(一〇)倦て泣けり　碧

旅立の心はむさきものなれや　泉

けふ髪剃に鴨川の水　水

蟬の音に單の衣も身に付す　洞

細きかひなの枕いたけに　人

月しのぶ紙燭をけしてすべり入(一一)　兮

もの着て君をおどす秋風　蕉

二ウ

此橋を好てかへる霧の中　泉

山引出して乗初る駒　雪(一二)

しでかけて鴈股つがふ弓ふとく　洞

狩(一三)ころびてよりひまころびけり　人

何(一四)かたも花に成たる花の陰　水

藪の中にも椿山吹　雪(一五)

〔一〕『桃の白實』に「雪見に轉ぶ」

〔二〕同「最う岸端に」

〔三〕同、作者名「聽處」

〔四〕同「寄子にはいつさも」

〔五〕同、作者名「雪」

〔六〕同「夜の明也さ」、『金蘭集』に「夜明るなりさ」

〔七〕『桃の白實』に「尼寺に春雨くらく」、『金蘭集』に「尼寺の春雨續く」、『一葉集』に「尼寺の春雨くらく」

〔八〕『金蘭集』・『一葉集』に「水のさきる」

〔九〕『桃の白實』に作者名「處」

〔一〇〕『金蘭集』に「食煮事をわびて」、『一葉集』に「食たく事をわびて」

〔一一〕『桃の白實』に「消して忍び入」

〔一二〕『桃の白實』に作者名「處」

〔一三〕『金蘭集』に此の附句を脱す。『一葉集』に「獨ころびてより」

〔一四〕『一葉集』に「何事も花に」

〔一五〕『金蘭集』に作者名「處」

たねたはら

貞享四年作

『如行子』に「四日はみやの聽雪子にさゞめらるゝ、その夜の會」といふ詞書が發句の前に附いてゐる。閑更の『たねたはら』には「翁みのふの哥仙は久しく南無庵の家珍なりしを」本書に載する旨記して天明六年板行した。『桃の白實』と對照すると其の間に異同がある。本文は『たねたはら』により『如行子』・『桃の白實』その他と對校した。

箱根越す人もあるらし今朝の雪　芭蕉
舟に焼火を入るゝ松の葉　(一)聽雪
五六丁布綱干せる家見えて　如行
朸むれつゝ(二)葭の中行　野水
明るまで戻らぬ月の(三)酒の醉　越人

ウ
蔀〳〵を揚る盆の夜　荷兮
帷子に袷羽織も秋めきて　執筆
(四)食早稲くさき田舎なりけり　芭蕉
神主も常は大方烏帽子なく　(五)雪
塘見えすく藪の下苅　行
どや〳〵と還御の跡に鶴釣て(六)　兮
誰やら申出す念佛　人
しのび入戸を明かねて蚊にくはれ　水
浮名は(七)つれる川のからかさ　行
長き夜を泣たるまゝの重たげに　人
人に(八)懐れて船をあがりぬ　水
花の賀にけふ狩衣を(九)緞にする　(一〇)處
そのまゝ椿を植る幕串　(一一)蕉
是よりは人々のおもむき有て出がちに物せんといさみて(一二)かく

ニオ
下ごゝろ彌生千句の俳諧に　行
あさつき喰ふ人の臭さよ　兮
とろ〳〵と一寝入して目の覺る　人

堂もる雨の鎧通りぬ(一三)　行
ごろつくはみな團栗の落しなり　水
その鬼見たし簑虫の父　蕉
布衣(一四)やぶれ次第の秋の風　行
松島の月松嶋の月　人
ひよつとした(一五)歌の五文字を忘れたり　雪(一六)
妻戸たゝきて逊て歸りぬ　蕉
泣〳〵てしやくりの留る果もなし　水
あたら姿にかしら剃られず　行
二ウ　世の中の茶筌賣こそ嬉しけれ　兮
ねぶたき晝はまろび轉けて　雪(一七)
旅衣尾張の國の十藏か　蕉
富士書かねて又馬に乘　水
懐に盃入るゝ花なり(一八)し　行
かけ和らかに柳ながるゝ　人

〔一〕『桃の白實』に作者名「聽虚」
〔二〕『如行子』に「藪の中ゆく」
〔三〕『幽蘭集』に「月の酒きけん」

〔四〕『如行子』に「食早苗くさき」
〔五〕『桃の白實』に作者名「虚」
〔六〕『如行子』に「跡に鶴なりて」
〔七〕同・『桃の白實』に「浮名しれつる月の衾」
〔八〕『桃の白實』に「人に抱れて」
〔九〕『たれたはら』に「狩衣を雛にする」とあれど「皺」の書損なるべければ改む。
〔一〇〕『如行子』に作者名「兮」
〔一一〕同書に作者名「雪」
〔一二〕『桃の白實』に「いさみあひて」
〔一三〕『如行子』に「鎧さおりて」
〔一四〕『一葉集』に「布袋」
〔一五〕『桃の白實』に「ひよつさして」
〔一六〕同、作者名「虚」
〔一七〕同、作者名「虚」
〔一八〕同「入るゝ花おかし」

陽炎集　貞享四年作

鬼貫の遺弟桀殘の遺稿として、其の子桀映が天明四年板行した『陽炎集』に此の歌仙を收めてある。『一葉集』その他に全く傳はらぬ巻である。

第三の作者卜枝は近江日野の人で初名遠方といひ、後尾張の津島に住した『曠野』作者で、第四句の作者園勝は貞室の門人である。興行の年次及び場所は記してないが、芭蕉の旅行の徑路及び巻中作者の事蹟から貞享四年前後の作と推定してよからう。

はせを江戸にて相しれるよしにて、叔父外記のもとにたづねよられけるをさらへて

いざかたれ馳走はなくともふゆごもり　網彦
　火燵へとゞく引窓の月　芭蕉
山ざとの軒にゆがみしまつふりて　卜枝
　人にしらせず文をまなべる　園勝
何やらんからす二三羽立さはぎ　蕉
　ちり雲とてもなき天氣なり　彦
ゆつたりと物ゆたけしや君が代の　同
　岩かき紅葉あるじおもはる　蕉
霧ふかし小家がちなる宿はづれ　枝
　夜あけの月に馬のいなゝく　勝
これわらをはたけへ鸛のかきちらけ　彦
　鹽風あたり眞くろな松　枝
日毎〳〵遊女あつまる船がゝり　勝
　しばしうつとりとしたるきぬ〴〵　彦
ほぐれたつ髪かきあげて伸をする　勝
　かくも不性になりしはるさめ　枝
山でらの窓見おろせば谷の花　同
　ぬるぬる水にかはづあそべる　蕉
百千鳥なけば世間のうかれたち　彦
　鈴篠ふかく道をうづみし　枝
此さとに國名を呼べる縣御子　勝
　べつたりうんかかゝる蜘蛛の巣　蕉
戸の透へ雨夜の風のほそ〳〵と　同
　油たうけになりし番小屋　勝
八文がさけにうき世をわすれたり　枝
　雲を見やりて秋の船まち　勝

眞くらや月の出しほの山の陰　彦
　唐黍の露あびるしのび路　蕉
村中にうらやまれたる戀の中　枝
　姉にもちたる京の御局　勝
かしこくも魚ナ召さどりし乳人の日　彦
　又もはもろきなみだこぼする　蕉
夜もすがら奥のはなしのしめやかに　枝
　雪解の水のながれくるおと　彦
近道を志賀の山越花になを　蕉
　すみれの色のあさきくさむら　勝

芭蕉翁俳諧集

元祿元年作

蝶夢が安永五年に編輯した『芭蕉翁俳諧集』に此の歌仙を収めてある。板行は天明六年七月である。同書は「元祿三午年」の部に入れてあるが『金蘭集』及び『一葉集』には「貞享五戊辰年」の作としてある。元祿元年は其の改元の年である。同年杜國を同行した『笈の小文』の旅中、伊勢山田で興行したのであらう。初裏第七句に「ゐ人」とあるは杜國の事で、『如行子』には

冬あれの砂吹あぐる花の波　閭人 野仁

とある。『金蘭集』には卷末に「ますみつもさめによりて筆をそむ　はせを」といふ奥書が附いてゐる。

何の木の花ともしら（二）ず匂ひ哉　芭蕉
　こゑに朝日を含むうぐひす　益光
春深き柴の橋もり雪掃て　又玄
　二葉のすみれ御幸まちけり　雲（三）庵
有明の草紙を細に引つゝみ　勝延
　寢覺はながき夜のあぶら火　清里
釣柿に鼠のかよふ音聞て　光
　門細めなる山の中の寺　蕉
山路來て清水まれなる袖の汗　庵

（二）わづらふ鷹をたのむ悲しさ　玄
女のみ古き御館の破すたれ　蕉
碁に肘つけて泪落しつ　延
いねがてに酒さへならず（三）物思ひの（四）　人
陣のかり屋に僧のこもりて　光
しら雲にのぼれと鷹を放つらし　旦
はじめて得たる國のはつ稲　庵
漏月を賤がはた織る窓にみて　玄
藍にしみつく指かくすらん　蕉

名

神役にやとはれ來ぬる注連の内　光
返歌につまるきぬの俤　人
こひ草と池のあやめを折かねて　延
水鶏を追（五）に起し曉　玄
多葉粉すふ簾の跡のけぶりたる　庵
誰が乘ものに霜かゝるまで　旦
あくがるゝ樂の一手を聽とりて　蕉
釣の玉子（六）の浦はさひけり　光
壁立て華表に殘る秋の蟬　玄
しぐるゝ風に點香吹ちる　延
筏かけて夜毎の月を見ありきし　人
心とすさむ家の圖もきえ（本ノマヽ）　庵

ウ

親ひとり茶によき水と歎つる　光
まづ初瓜を米に代なす　蕉
此坊を郭公きくやどりにて　正永
ゆりこむ櫂に舟繫ぎけり　玄
もいゝふの弓弦に花を引掫め　延
短冊のこす神垣の春　人

〔一〕『金蘭集』に「花さはしらず」
〔二〕同、作者名「平庵」
〔三〕同「酒さへなくす」
〔四〕『一葉集』に作者名「野人」
〔五〕本文「山に起し」は「追」の書損ならん、『金蘭集』・『一葉集』ともに「追に起し」とあり。
〔六〕『金蘭集』に「釣の玉子の」

幽蘭集　其の一　元祿元年作

莫雨巷曉臺の『幽蘭集』は「貞享四年卯夏」の作さしてあるが、同年夏は江戸に寓居中なので、連衆孰れも尾張熱田の人であるのさ矛盾する。『一葉集』に貞享五年の部に配列してあるのに據つて、同年改元元祿元年の作と推定し、本文は雨巷を對校して掲ぐ。

ほとゝぎす爰を西へかひがしへか　如行
うす〳〵晴るさみだれの暮　卯端
茸ぶきのわづかな塵を掃もせで　閑水
人のたからはとしの數なり　はせを
有明に土圭のかげん直し置　桐葉
植木のかげに今にのこる蚊　東藤
ウ
物ずきは律にかなふて靜さよ　ユ山
聟がまはればいつも零風　桂楫
篠竹の虎も居さうな谷つゞき　執筆
（二）はら〳〵と火うち出は手のさえ　如行
觸事も田舍となればゆるやかさ　卯端
蜘でのはしのかけつはづしつ　閑水
戀ぐさを其中將と重ひわび　翁
かくせば文の袖に重たき　桐葉
隙明の用は序になりもせず　東藤
一里までなき產神の森　ユ山
散はなを待せて月も山ぎはに　桂楫
窓から東風のけふもきのふも　卯端
二オ
あたゝかな空は早くもかはる雨　如行
談義濟たる椽のとろ〳〵　東藤
挟みてはあるかと腰の汗ぬぐひ　桐葉
非人も都そだちなりけり　翁
脫かぬるひとつ羽おりのひとつ紋　閑水
五寸と書て一寸の雪　如行
寒梅の床から添る茶の匂ひ　ユ山
やかましい日は鐘も覺えず　桐葉

又しても忘れた物を月あかり　翁
どこやらすごき秋の水音　桿
眞くろな石のそばたつ霧の中　端
手前の杖をいたゞいておく　水
二ウ
お十二に過た何かの御きようさ　葉
不淨をよける金襴の徳　翁
釋教も末がすゑ程〔三〕あじになり　藤
治めかねたる儒者の小宅　山
六經のはなを古瀬戸に秘藏せむ　行
邪なしとおもへ日ながく　桿

〔一〕本文のまゝ「はら〳〵と火うち」にて字餘り
〔二〕『一葉集』に「あぢになり」

幽蘭集　其の二　元祿元年作

この巻も『幽蘭集』は前巻の次に「おなじ秋」と記してゐるが、『一葉集』に「元祿元九月改元」とあるに従つて同年の作と推定する。本文も同じく兩書を對照して校合した。

色〳〵のきくもひとつの匂ひ哉　叩端
松のひゞきを草庵の秋　桐葉
まんまるに有明月のかげ〔二〕みえて　はせを
みちの早きは人のとりへか　東藤
聲高な笑ひも腹を立よりは　工山
あげ場へふねの付かねるやら　閑水
ウ
此あたり何をしるべに住居せん　執筆
けしなどありて竹瘦し村　端
かつぎ取顏におどろく一むかし　葉
この髮そらんことの安さよ　翁
精出て金もつ心はづかしく　藤
もみぢをのみに薪伐やま　山
雨ふりの蜩こゑのあはれ也　水
硯をさぐる月のをぐらき　葉
氣ばらしは何をおもひの窓の本　翁

まだ日のさめぬ酒のらうたき　藤
散もせず撞樓にちかき花ざかり　端
飛行てふ（蝶）の高くなりけり　水
ニオ
青〳〵と動かぬ石の長閑にて　山
醉て又ねる（寝）此はし（橋）の上　翁
夕ぐれは謡もきかぬ蓮池に　葉
行水したるさまのちご（兒）ども　端
追かへる木幡の馬をかざりつれ　翁
半よごれし蔀おろしつ　山
急ぐほど繪を書さしてよこ（横）になり　藤
女しはす（師走）の月とちぎる（契）か　葉
雪の日の砧になみだおとし（落）ける　水
柴たく壁のゑみてほろ〳〵　藤
砂川を關にこちらも宮ありて　端
息る牛を捨ずつり行　山
ニウ
奥ふかき事も悟ればちかい筈　葉
行灯の火の細き明がた　端
くもるかと思へば果は風になり　藤
筆一本にはなの一時　翁
誰かしる桃源洞のかうばしき（芳）　山
茶に酒に先水のあたゝか　葉

〔一〕『幽蘭集』に「かげみえて」の右傍に小さく「月イ」とあり。

幽蘭集　其の三　元祿元年作

『千鳥掛』に「鳴海眺望」として表六句をあげ「哥仙有略」となつて居る。『幽蘭集』は其の歌仙一巻をかゝげ、句の右傍に「はつ秋や海も青田のひとみどりと後に改」と註がある。『金蘭集』はそれと同じく『一葉集』は再案の發句を据ゑて、「七月十三日鳴海眺望」といふ詞書を附してある。本文は『幽蘭集』により『一葉集』その他を以て校合した。

初秋は海やら田やらみどりかな　はせを
乗行馬の口とむる月　重辰
藁庇霧ほのくらく茶を酌て　知足
やせたる藪の竹まばらなり　如風
蛤のからふみわくる高砂子(二)　安信
笠ふりあけて船まねく也(三)　自咲

ウ
白雨の雲つゝみ行雨の脚　風
田づらにむれし鷺の羽をのす　足
御乳そひてわかふにものや云ぬらむ　風
おもひ残せる達の園かへ　咲
琵琶弾て今宵は泣て明すべき　翁
釣簾のひとへも恥るくろ髪　信
軒高き瓦の鬼のかげさびし　辰
施餓鬼過たる入相の幡　翁
浅瀬川むかふに角力とりそめて　風
樽切ほどき月を酌けり　信
花の雪鷹に見せたきとまりやま　足
水おもしろき寺のはるかぜ　牛歩

ニオ
勢田の橋なかばは霞たえ〴〵に　信
白壁遠く炭をうる市　足
芝はらの朝霜はらふ布ごろも　咲
けふ一七日戸帳ひらきて　足
かしこまる百首のうたをよみをはり　翁
妻に聞せん尺八の曲　信
湯あがりの肌には伽羅を焼こがし　足
むかし恥かし今の竹垣　歩
ゐのころのふみからしたる蘭の鉢(三)　咲
魚つむ船の岸による月　辰
露の身の島の乞食とくゐ果　翁
次第にさむき明くれの風　足

ニウ
猿の子の親なつかしくさけびけむ　信
からすも鳩も柴の戸の伽　翁
石ふみてかたさがりなる岨の道　風
杉菜まじりのつく〴〵しつむ　足
かんざしにはな折娘うちむれて　信
胡蝶をはやす鶴かめの舞　咲

〔一〕『幽蘭集』に「高砂に」とあれど「高砂子」の草體の誤りなるべし。
〔二〕『一葉集』に「船まねく聲」
〔三〕同「ふみあらしたる」

秋の日

元祿元年作

曉臺が門人馱六の家に傳來する荷兮筆の歌仙なりと、其の著『秋の日』に收めて安永元年出板した。その一卷で也有の序に詳しく記されてゐる。肩書に「貞享五戊辰七月廿日」の興行とある。蝶夢の『芭蕉翁俳諧集』は別の稿本から採つたと見えて文字に異同がある。本文は『秋の日』により、『俳諧集』と對校して掲げた。

於竹葉軒長虹興行

粟稗に(一)とぼしくもあらず草の庵　芭蕉
藪の中より見ゆる青柿　長虹
秋の雨歩行鵜に出る暮かけて　荷兮
月なき岨をまがる山あひ　一井
ひだるしと人の申せばひだるさよ　越人
藁もちよりて屋根葺にけり　胡及
木の葉ちる榎の木の末も神無月　鼠彈
つて待かぬる島のくひ物　蕉
蓬着て蚊の啼聲に睡られず　虹
われに狂ふや妾がおとろへ　兮
水つけず立たる髮の冷じく　井
死て間もなき玉まつるなり　人
石籠もあらはれ出る夜の月　及
簑をくむとて寐ぬわたし守　彈
火ぶりして歸るおのこ(三)は何者ぞ　井
白きたもとの見ゆる輿かき　蕉
雨乞にすは〳〵華のうるほひて　兮
竹ゆひそゆる軒の連翹　虹
二オ
日和さよけふは氣あいの少しよく　兮

木馬直して子ものせにけり　及
色黒き下部つまけてかしこまり　彈
切籠おり(三)かけすごき夕ぐれ　井
さまざまの香かをりけり(四)月の影　人
人一代の戀をとふ秋　蕉
捨し世はくずのうらみも引むしり　虹
きたなくなれどかほも洗はず　人
懐に脇指さしてまた出る　及
下戸をにくめる雪の夜の亭　兮
早咲の梅をわが身に(五)たとへたり　蕉
嫁せぬむすめの眉かゝでおる　彈

二ウ

しのび音にすがゞきならす垣の奥　及
ふみきやさせる松のともし火　人
明やすき夜をますらをが腹立て　兮
なにを啼行ほとゝきすやら　蕉
花によるすゞりのふたに物かきぬ　彈
簾はり出すはるの夕ぐれ　虹

芭蕉六　越人五　長虹五　胡及五
荷兮六　鼠彈五　一井四

〔一〕『芭蕉翁俳諧集』に「栗稗にまづしくもあらず」
〔二〕同「歸るたのこには」
〔三〕同「切籠なりかけ」
〔四〕同「香かたり來る」
〔五〕同「わが身のたとへもの」

曠野　元祿元年作

芭蕉は名古屋から越人を伴ひ木曾路を通つて、元祿元年の秋深川の舊庵に歸つた。其の折の師弟兩吟の連句で、翌二年名古屋の荷兮が出板した『曠野集』に發表されて居る。東京の井上辰九郎氏は此の卷の古い草稿を所持して居るが、數ヶ所本文と相違し殊にその二句は全然別の附句である。多分初案の草稿であらう。

深川の夜

鴈がねもしづかに聞ばからびずや(一)　越人
　酒しゐならふこの比の月　芭蕉
藤ばかま誰窮屈にめでつらん　同
　理をはなれたる秋の夕ぐれ　越人
瓢箪の大きさ五石ばかり也　同
　風にふかれて歸る市人　芭蕉
なに事も長安は是名利の地　同
　醫のおほきこそ目ぐるほしけれ　越人
いそがし(二)と師走の空に立出て　芭蕉
　ひとり世話やく寺の跡とり　越人
此里に古き玄番の名をつたへ　芭蕉
　足駄はかせぬ雨のあけぼの　越人
きぬ〴〵(三)やあまりかぼそくあてやかに　芭蕉
　風ひきたまふ聲のうつくし　越人
手もつかず晝の御膳もすべりきぬ　芭蕉
　物いそくさき舟路なりけり　越人
月と花比良の高ねを北にして　芭蕉
　雲雀(四)さえづるころの肌ぬき　越人
二オ
破れ戸の釘うち付る春の末(五)　同
　見世はさびしき麥のひきわり　芭蕉
(六)家なくて服紗につゝむ十寸鏡　越人
　ものおもひゐる神子のものいひ　芭蕉
人去ていまだ御座(七)の匂ひける　越人
　初瀬に籠る堂の片隅　芭蕉
ほとゝぎす鼠のあるゝ最中に　越人
　垣穗のさゝげ露はこぼれて　芭蕉
あやにくに煩ふ妹が夕ながめ　越人
　あの雲はたがなみだつゝむぞ　芭蕉
行月のうはの空にて消さうに　越人
　砧も遠く鞍にいねぶり　芭蕉
二ウ
秋の田をからせぬ公事の長びきて　越人
　さい〳〵ながら文字問にくる　芭蕉
いかめしく瓦庇の木藥屋　越人
　馳走する子の痩てかひなき　芭蕉
花の比談義參りもうらやまし　越人

田にしをくふて腥き口　蕉

〔一〕『婆心錄』に「聒すや」
〔二〕井上氏所持草稿に「關を師走の」
〔三〕同「きぬ〳〵のあまり」
〔四〕同「雲雀なくより肌ぬぎになる」
〔五〕同「春の窓」
〔六〕『一葉集』に「面なくて服紗に」、井上氏所持草稿に「紅粉染のふくさかけたる鏡立」
〔七〕『曠野』再刻本に「いまだ法坐」

幽蘭集　其の四　元祿元年作

附句の作者は江戸深川邊の人々なので、此の卷は芭蕉庵で大通庵道圓追善の爲め興行したものであらう。大通庵道圓といふ俳人は一向知れない。『幽蘭集』所載の卷を本文として、『一葉集』と對校した。興行の年代は『一葉集』に元祿元年とあるに從つた。

大通庵道圓追善

其かたち見ばや枯木の杖の長　芭蕉
ちどり來て啼よしがきの池　夕菊
篗つくりみの作りさす雨やみて　苔翠
風のしきりにならすもの音　友五
内洞のくぼかなるよりもるゝ月　素堂
油單をかくる蔦のもみぢ葉　路通
ウ
つゝめどもやがてひえたる物喰て　曾良
われをおもはぬ家童子かも　堂
君はこでからすの森を出るまで　五
聲うつくしき念佛聞ゆる　翠
篠がはとなかばかたぶく島の御所　通
となりをおこす雪の明ほの　菊
藪の月風吹たびにかげ細く　良
地にいなづまの種を蒔らん　蕉
ひろはれぬ金の氣ながら秋のきて　堂
無理に笠をかけし師の坊　良
峰の供はなの岩屋もつらからめ　通

登る小鮎をくまむ谷川　五

二オ
わかき身の隱居と成て日は長し　翠

顏のほくろをくやむ(悔)乙(おと)の子　通

舞衣〔二〕むなしくたゝむ箱の内　翁

猿は木ずゑの松かさをうつ　五

苔(コケ)はへし佛の膝をまくらして　良

ゆめとおもひて覺かぬる夢　菊

振袖にいつまでおがむ月のかげ　通

興じてぬすむ蘭の一もと　翠

露深き無言の僧の戸を明て　翁

身の賣(うり)代(しろ)を子に殘し行　五

なき顏をうつすはたけの忘れ水　菊

奈良にも恥ぬわきし(脇師)なるらん　良

二ウ
酒〔三〕に名を付ては人に惡(にく)まるゝ　翠

壁をもおかぬ庭の砂かむ　通

くみあぐる御堂の朝時ほのか也　五

蚊にせゝられてかぶる笈摺(おひずる)　翁

淸き地に骨を納(をさむ)る花のかげ　良

春くれて行香の一時　菊

〔一〕『一葉集』に「油單なかける」
〔二〕同「舞衣な」
〔三〕同「酒な名に付て」

幽蘭集　其の五　元祿元年作

これ亦深川の芭蕉庵にて興行せしなる可く、作者は深川附近に寓居した人々である。『幽蘭集』を本文として『一葉集』と對校した。但し『幽蘭集』は「元祿六年丙冬」の作としてゐる。

雪の夜は竹馬の跡に我つれよ　路通

はなや(花屋)をとはん梅のはやざき(早咲)　宗波

うち渡す外面(そとも)に酒の飯ほして　友五

鶴鳴あはす旅だちのそら　はせを

こ(轉)ろびたる舟の乘場にのこる月　岱水

火をたく窓をさし覗(のぞ)く秋　曾良
ウ てう／＼とはたおる虫の聲澄て〔一〕　夕菊
旭にむかひきるゝ珠數(じゆず)のを(緒)　水
生れ付(つき)みにくき人のうらやまし(浦山)　良
親にうらるゝしな(品)も有けり　通
世のさわぎ關もこさせぬ御調物(みつぎ)　波
蔓のあくたをあらす野鼠〔二〕　五
不二(ふじ)詣おひねたわらを草枕　翁
母のほとけをかりに預る　水
産棚に白繪の桶を居(すゑ)ならべ　五
濁をすます砂川の水　菊
よもすがらつぶねは川につかはれて　通
やぶれ(破)あふぎ(扇)のほね(骨)をつながむ　五
二オ はつ秋はまだかたびら(帷子)の氣色也　菊
腹わづらひ(煩)てにくむくひもの　翁
さんといふ娘の顔のうつくしき　水
いやしき家につもる文づか(塚)　通
解わ(分)くる垣ねに黄なる綿かけて　五
うばより先にしらが(白髪)おろさむ　水
刈比(ころ)にいつかなるべきもち(糯)の稲　良
あらしに月を吐出すくも　菊
秋山にあら山伏の祈る聲　翁
樵(こ)る人もなくこけし神の木　五
うちみだれ何をか蟻のいそがしき　通
こゝろをけしに入(いる)るかくれ家　翁
二ウ 文字ひとつふしては習ふ腹の上　良
まなこくぢひてあはれいくとし(幾年)〔三〕　通
俤をうき世袋に殘しけり　五
馬賣かへて酒ひらく家　水
花に舞次男に名乗ゆづるらん　菊
貧にほこりし鍛冶の春風　翁

〔一〕『一葉集』に「てう／＼と機おり虫の」
〔二〕同「蔓のあこたを」
〔三〕同「まなこくじいて」

幽蘭集 其の六 元禄元年作

これも前巻と同じく深川の作者が芭蕉を中心とした十一吟の歌仙である。本文は『幽蘭集』にもとづき『一葉集』を以て校合した。

雪ごとにうつばりたはむ住居哉　岱水
けむらで寒し浦のしほ焼　路通
さまざまの魚の心もとし暮て　はせを
はじめて鴈の北にむく顔　友五
のけぞりて峰の梅咲朝月夜　曾良
瓢箪荷ふ春のあけまき　宗波

ウ

一里は其時よりの神さびて　嵐竹
尺とりてみむ頼朝の釜　雨洞
からげたる書物を夜の草枕　夕菊
かたむく松に母のおもかげ　綠糸
宿かりて頃日うつる三井の坊　通
ちからもちするたはら一俵　翁
放されてねりかむ牛の夕すゞみ　五
〔三〕つかへにさはる旅のいなづま　水
西行の像を拜する浦の月　波
誰かすむらむ碑の銘の露　洞
わかばえを朽木の花に植そへて　良
春の遊びに母袋かゞるらん　通

ニオ

餡うりの霞を分るやせの里　綠
野火たき捨てみちかはるなり　竹
後の世の罪とやならん毒ながし　五
九輪はおちて青石の塔　良
〔三〕ひとかひの松うごく程吹あらし　水
むくろばかりを残す夕月　竹
秋さむくあはれと〔三〕拾ふ虫の殼　菊
瘦たる乳をしほる露けさ　糸
とはぬ夜に膳さしいるゝ蚊やの内　翁
ひるが小じまも情しるらん　通

其まゝに剃たるを僧師と頼む　良

生木〔四〕もやしてあたる冬の日　水

二ウ　かた〳〵は袖なききぬにもる時雨　竹

悴四五人ほえてくるしき　翁

菅笠もあはれにみゆる熊野道　通

峰には猿の小ざる手を引　絲

優婆塞もはなに心や動らん　五

扉のはおりにつゝむ山ぶき　菊

〔一〕『一葉集』に「つかえに障る」
〔二〕同「一かいの松うごく」
〔三〕『幽蘭集』に「哀飛かふ」
〔四〕同「生木を燃て」

若菜　元祿二年作

芭蕉の一週忌に高弟嵐雪が同門と追善俳諧を行つて『若菜』と題し、元祿八年出板した書の巻頭に載せてある。此の書は元文三年冬江戸の大和屋武兵衛が再刻した。此の巻の年代は『芭蕉袖草紙』に「元祿九年」とある。『幽蘭集』に「元祿二年巳春」、『一葉集』に「元祿二年巳」とある年代によつて同年作と認め、本文は『若菜』から引いて『幽蘭集』その他と對校したが、孰れも名殘の裏五・六の兩句を缺くので、『芭蕉袖草紙』によつて補つて置いた。

蒟蒻にけふは賣かつ若菜哉　はせを

吹揚らるゝ春の雪花　嵐雪

かへる鴨かへらぬ鴨もさはたちて　同

七曜山を出かゝる月　はせを

町作り栗の焦タル砂畑　同

露霜窪く溜ル馬の血　嵐雪

ウ　坊主とも老ともいはず追立歩　はせを

土の餅つく祭事おそろし　同

生簀に燃つく烟雨となり　嵐雪

日暮て殘る杣が切かけ　はせを
眞白な鹽なき飯をつき向て　嵐雪
泪に顏をよごす眼藥　はせを
舌根の念佛(二)を雇ふ居士衣　嵐雪
小城は稻の中につゝ立　はせを
杖を(三)うつ座頭が砧上手也　嵐雪
いざりふびんやおば捨の月　はせを
散花に垣根を穿ッ取宿　嵐雪
かげろふ重き籾の下敷　はせを

二オ

身のうさも弟子の見繼に春(四)たちて　同(五)
和泉のかつら桶の名を取　(六)嵐雪
柴垣のふるき都は(七)破まさり　はせを
讀もよんだり(八)椎は黑石　嵐雪
年寄の忍びてわせる秋の風　はせを
髮切宥の月ぞひがめく　嵐雪
長門より西の咄の根問して　はせを
粥に玉子はなにと喰らん　嵐雪
山茶花の後は水仙梅椿　はせを
雪に鞍置く八貫が馬　嵐雪
やどりせん大江の岸は八間屋　はせを
削りへらひ(九)た狀箱のふた　嵐雪

二ウ

御謀反も先調はぬ金の沙汰　はせを
禰宜が袂に神も嘘つく　嵐雪
花曇鮑も物を思ふらん　はせを
誰こいくと田鶴渡ル春　嵐雪
(一〇)赤人も今一しほの酒機嫌　珍碩
(一一)かはらけ哭き公家の振舞　はせを

〔一〕『芭蕉翁草紙』に「老さもいはす追たて〻」
〔二〕同「念佛に痩る」
〔三〕同「杖てうつ座頭の」
〔四〕同「身繼に春も立」
〔五〕同、作者名「雪」
〔六〕同、作者名「蕉」
〔七〕同「都は荒まさり」
〔八〕『幽蘭集』に「墳は黑石」
〔九〕同「削りへらいた」、『芭蕉翁草紙』に「削りへらした」
〔一〇〕『芭蕉翁草紙』に此の附句作者「珍碩」として出す。

〔一一〕同、作者「蕉」として此一句芭蕉とあれど『若菜』・『幽蘭集』・『一葉集』には本文の如し。

雪の薄　元祿二年作

『芭蕉翁草紙』に等躬の『伊達衣』を出典としてあるが、『伊達衣』には芭蕉の發句のみで歌仙はない。曾良の『雪丸げ』に此の一卷を載せてゐる。信濃の俳人眠郎が安永五年板行した『雪の薄』に「曾良眞蹟臨書ス」として石刷とせるものを本文としてこゝに收めた。同じく信濃の濤觀若人の『花綸』に諏訪久保島氏所持の芭蕉筆と稱する石刷を掲げてある。

〔一〕元祿二年春

かげろふの我肩に立かみこかな　はせを

水やはらかにはしり行おと　曾良

柚がやにうどのあへものあつらへて　嵐山

身はかりそめにさるのこしかけ　此筋

いざよひもおなじ名所に歸りけり　良

心をかくすもの賣が秋　翁

ウ

萩原は露にぬれても面白き〔三〕　筋

ぶとふり拂ふ供のたいまつ　山

五月迄小袖のわたもぬぎあへず　翁

おもたる髪をときそろへつゝ　良

こひられてこふ人よりも物ぐるし　山

ほそく書たるふみのやさしき　筋

盃をそこらにこたへ取まきて　良

年寄一人日待つとむる　翁

ものゝ音もたつは夏なぞふきにける　嵐蘭

きりの立たる其かげの家　山

たびぐるまあくるひがしは月と花　良

〔五〕なみはかすみのふじをうごかす　蘭

二オ

答とびてしほひながらのいかなます　翁

いぬにおはるゝあおりのむらどり　良

城北のはつ雪はるゝみ(蓑)のぬぎて　山
　おきて火をふくかねつきが妻　翁
行歸りまよひ子よばる星月夜　蘭
　組でこかせば鹿驚(かかし)なりけり　山
やまかぜにきびしく落る栗のいが　良
　黑木ふすべるたに(谷)かげの小屋　北鯤
たがよめ(嫁)と身をや任せん物思ひ　翁
　あら野のゆり(百合)になみだかけつゝ　蘭
おほかみ(狼)の罙(六)してあくる夏の月　嵐竹
　(七)三ツのいはや(窟)に佛つくりて　山
二ウ
麥ふます諏訪のいで湯のにへかへり　翁
　たび寐侘たる關のうちもの　良
何ゆへに人のじうさ(八)(從者)と身をさけて　蘭
　膳にすはれば鯛のはまやき　山
一門の花見衣のさま〴〵(九)に　鯤
　(一〇)つたはる藤の筋のどか(長閑)なり　竹

〔一〕『花館』に「睹山旅店にて」
〔二〕同「ものうりの秋」
〔三〕『幽蘭集』に「露にぬれてもおもしろい」
〔四〕『花館』に「きりのたう立」
〔五〕『雪の薄』に「なみはかすみの」より「是より末は紙もめて臨書しがたし」とありて普通の板下なり。
〔六〕『幽蘭集』に「狼の貌みて明る」
〔七〕『幽蘭集』に「水の岩屋に」
〔八〕『雪丸げ』に「何故に人の喧花さ」
〔九〕『幽蘭集』に「花見の衆の」
〔一〇〕同「藤なつたふる攝政の筋」

陸奥鵆　元祿二年作

奥細道の行脚に第一に出來た連句である。桃隣の『陸奥鵆』に本文の如く前書がある。曾良の『雪丸げ』にも出てゐるが、附句の異同が甚しい。本文は『陸奥鵆』によつて『雪丸げ』の分は卷後に全文を附載し、本文と異同ある附句には圏點を施した。

陸奥(みちのく)にくだらむとして、下野國ま

で旅立けるに、那須の黒羽と云所に翠桃何某の住けるを尋て、深き野を分入る程、道もまがふばかり草ふかければ

秣負ふ人を枝折の夏野哉　芭蕉
　青き覆盆子をこぼす椎の葉　翠桃
村雨に市の假屋を吹とりて　曾良
　町の中行川音の月　芭蕉
鷹の子を手に居ながらきり〴〵す　翠桃
　萩の暈繪の縮緬は誰　曾良
ウ
物いへば小笠に顏を押入るゝ　芭蕉
　みだれた髪のつらき乘合　翅輪
尋るに火を焼付る家もなし　曾良
　盗人こわき二十六の里　翠桃
松の根に笈を僂て年とらん　芭蕉
　雪になるから連歌はじむる　翠桃
麁相にておかしき小野の炭俵　翅輪
　碪うたるゝ尼達の家　曾良

あの月も戀故にこそ悲しけれ　翠桃
　露とも消ぬ胸の痛きに　芭蕉
錦繡に時めく花の憎かりし　曾良
　己が羽に乘る蝶の小車　翠桃
名
日傘さす子どもすかして春の庭　翅輪
　ころもを捨て輕き世の中　桃里
酒呑ば谷の朽木も佛也　芭蕉
　狩人歸ル閨の松明　曾良
落武者の明日の道問ふ草枕　翠桃
　水こと〴〵と御手洗の音　翅輪
日中の鐘撞比に成にけり　桃里
　一釜かする美濃の蕉長　曾良
乞食ともしらで浮世の物がたり　翅輪
　洞の地藏に籠ル有明　翠桃
蔦の葉は猿の涙や染つらん　芭蕉
　冬を隣て流人柴刈　桃里
ウ
けふも又朝日を拜む石の上　芭蕉
　殿付られて唯のする舟　翅輪

奥筋も時は替らずほとゝぎす　曾良
　噛ずに呑メと投ル丸薬(ぐわんやく)　翅輪
花の宿馳走をせぬが馳走也　桃里
　ふさぐといふて火燵共まゝ　翠桃

〔一〕珪川の『黛麓夜話』に「二十六の里」の訓み方に就き、愚案さゝろくの里と讀て可なるべし、今市より東へ一里半ばかり隔てゝ、さゝろくの村といふあり」と見ゆ。

奈須余瀬(よせ)翠桃亭訪て（雪丸げ）

秣おふ人を枝折の夏野哉　はせを
　青き覆盆子をこぼす椎の葉　翠桃
村雨に市のかりやを吹とりて　曾良
　町中を行川音の月　翁
はし鷹を手に居ながら夕涼　桃
　秋草畫く帷子はたそ　良
物いへば扇に顔を隠されて　翁
　寢亂れ髪のつらき乘合　翅輪
尋るに火を焼つける家もなし　良
　盗人こはき廿六の里　桃
松の根に笈をならへて年取ん　翁
　雪かきわけて連哥始る　桃
名所のおかしき小野の炭俵　輪
　碓うたるゝ尼達の家　桃
あの月も戀ゆへにこそ悲しけれ　輪
　露とも消えぬ胸のいたさよ　良
錦繡の時めく花の憎かりし　桃
　己か羽に乗る蝶の翥　翁
日傘さす子供誘ふて春の庭　輪
　衣を捨て輕き世の中　良
酒呑めは谷の朽木も佛なり　翁
　狩人かへる岨の松明　良
落武者の明日の道問ふ草枕　桃
　森透間に千木の片そき　輪
日中の鐘つく比に成にけり　里
　一釜の茶もかすり終りぬ　良
乞食ともしらて浮世のものかたり　輪

洞の地藏にこもる有明　桃

蔦の葉は猿の泪や染つらん　翁

流人柴かる秋風の音　里

今日も又朝日を拝む石の上　翁

米さきあらす瀧のしら浪　二寸

籬の手の雲かとみえて鱗り　良

奥の風雅を物に書つゝ　輪

珍らしき行脚を花に留置て　秋鴉

彌生暮せる春の晦日　里

芭蕉八　翠桃八　曾良八　翅輪六
桃里四　二寸一　秋鴉一

信夫摺

元祿二年作

岩城國須賀川の俳人相樂等躬はその著『信夫摺』を江戸の一蜂の序を得て元祿元年板行の豫定であつたが、事情あつて果さず、翌二年芭蕉の行脚を迎へて三吟歌仙を試み、これを本集に加へ同年上下二卷として出板した。蓼太は延享元年板の『奥細道拾遺』に收め、其後安永二年板の『表紙』も此の卷を再錄し、車蓋は天明七年板の『誹諧歌仙七部拾遺』に公にしたので、世上に廣く流布してゐる。曾良の『雪丸げ』にもある。

みちのくの名所〳〵心におもひこめて、先關屋の跡なつかしきまゝに、ふるみち(古道)にかゝりて、いまのしら河も越えぬ。頓ていはせ(岩瀬)の郡にいたりて、乍單齋等躬子の芳扉を扣、彼陽關を出て故人に逢なるべし。

風流のはじめや奥の田植哥　芭蕉

覆盆(いちご)を折て我まうけ草　等躬

水せきて晝寢の石やなをすらん　曾良

籮(ビク)に鮇(かじか)の聲いかすなり(生)　蕉

一葉して月に益なき川柳　躬

(二)雁(エイ)に屋根ふく村ぞ秋なる　良

ウ
賤の女が上總念佛に茶を汲て　蕉
世をたのしやと涼む敷もの　躬
〔二〕有時は蟬にもユメの入ぬらむ　良
槿の小えだに戀を隔てゝ　蕉
うらみては嫁が畠の名もにくし　躬
〔三〕霜降〃山や白髪おもかげ　良
酒盛は軍を送る關に來て　蕉
秋をしる身と物讀し僧　躬
更る夜の壁突破る鹿の角　良
〔四〕島の御伽の泣伏る月　蕉
色々の祈を華にこもりゐて　躬
悲しきにねをつなぐ糸ゆふ　良
二
〔五〕やま鳥の尾にをく年やむすぶらん　蕉
芹堀許清水つめたき　躬
薪木引雪舟一筋の跡有て　良
をの〳〵武士の冬ごもる宿　蕉
筆とらぬ物ゆへ戀の世にあはず　躬
宮にめされし憂名恥かし　良
手枕にほそき肱をさし入て　蕉
何やら事の足らぬ七夕　躬
住かへる宿の柱の月を見よ　良
薄赤らむ六條の髮　蕉
剪樒枝うるさゝに撰殘し　躬
太山つぐみの聲ぞしぐるゝ　良
二ウ
淋しさや湯守も寒く成まゝに　蕉
殺生石の下はしる水　躬
華遠き馬に遊行を道引て　良
酒のまよひの醒る春風　蕉
六十の後こそ人の睦月なれ　躬
〔六〕蠶飼する家に小袖かさなる　良

〔一〕『雪丸げ』に「日雇屋根ふく村ぞ秋なり」、『奥細道拾遺』に「雁ふやれやむし村ぞ」
〔二〕『雪丸げ』に「有明は蟬にも聲の」
〔三〕同「雪降山や」
〔四〕同「僧の御伽の」
〔五〕同「山鳥の尾におし鳥や向ふらん」
〔六〕『奥細道拾遺』に「小袖かさぬる」

伊達衣　元祿二年作

『信夫摺』の撰者等躬は元祿十二年前集に洩れたものを『伊達衣』に收めて出板した。此卷も前集に入るべきであるが、何かの都合で見合せたのである。『雪丸げ』には表四句だけ載つてゐる。『芭蕉翁俳諧集』にも收めてあるが、本文は『伊達衣』から採つて、その他の諸集と對校した。

序に芭蕉から其の隱逸を稱された可伸は『伊達衣』卷下に「予が軒の栗に更に行基のよすがにもあらず、唯實をとりて喰のみ成しを、いにし夏芭蕉翁、みちのく行脚の折から一句を殘せしより人々愛る事と成侍りぬ」といふ前文附きで

梅が香を今朝は借すらん軒の栗　須加川栗齋 可伸

の句を詠んでゐる。

桑門可伸は栗の木の下のもとに庵をむすべり。傳へ聞行基丼の古は西に緣有木なりと杖にも柱にも用ひ給ひけるとかや。幽栖心ある分野にて、彌陀の誓ひもいとたのもし。

かくれ家や目だゝぬ花を軒の栗　芭蕉
まれに螢のとまる露艸(一)　栗齋
切崩す山の井の名は有ふれて　等躬
畔つたひする石の棚橋　曾良
(三)把ねたる眞柴に月の暮かゝり　等雲
秋しり顔の矮屋はなれず　須竿
ウ
梓弓矢の羽の露をかはかせて　素蘭
願書をよめる暁の聲　芭蕉
松歯朶に吹よはりたる年の暮　栗齋
酒の遺恨をいふ心なし　等躬
聟入は誰に聞ても恥しき　曾良
ざれて泣れる傾城の文　等雲
貧しさを神にうらむるつたなさよ　須竿
月のひづみを心より見る　素蘭
獨して沙魚釣舍し高瀨守　等躬

笠の端をする芦のうら枯　栗齋
梅に出て初瀬や芳野に花の時　芭蕉
かすめる谷の鉦鼓折々　曾良
名
あるほどに春をしらする鳥の聲　素蘭
水ゆるされぬ黑髮ぞうき　等躬
まだ雛をいたはる年のうつくしく　須竿
かゝえし琴の膝やおもたき　芭蕉
轉寢の夢さへ(五)うとき御所の中(六)　栗齋
朴をかたる市の酒(七)醉　等躬
行脚に三社の詫を戴きて　曾良
乘合まてば明六の鐘　素蘭
伽になる島鵯の餌を慕ひ　等躬
四五日月を見たる蜑の屋　栗齋
(八)徒にのみかひなき里のむら樵　等雲
鹿の音絶て祭せぬ宮(九)　曾良
ウ
冠をも落すばかりに泣しほれ　芭蕉
(一〇)うつかりつゞく文をわするゝ　等躬
戀すれば世に(一一)うまれてにくい顔　素蘭
氣もせきせはし忍夜の道　栗齋
入口は四門に法の花の山　曾良
つばめをとむる蓬生の垣(一二)　等雲

〔一〕『芭蕉袖草紙』に「さまろ夏草」
〔二〕同「イ二」として「蔦かゝる眞菜に月も見のこさず」
〔三〕同「イ二」として「葛屋の秋はいとゞさびしき」
〔四〕『芭蕉翁俳諧集』に「神にうらめる」
〔五〕『芭蕉袖草紙』に「イ二」として「夢さへ古き」
〔六〕同「御所のさま」
〔七〕同「市の生醉」
〔八〕同「色付てかひなき」
〔九〕同「祭りせぬ村」
〔一〇〕同「イ二」として「文なわするゝおもひはかなし」
〔一一〕同「世にうとき人にくき人」
〔一二〕同「蓬生の宿」

雪の薄　元祿二年作

出羽の新庄に風流亭を訪ひ挨拶の發句にたゞち

に脇を附け、同座の人々と一歌仙を巻いたので、『雪の薄』に「此　は風流亭にて孤松といふものの直筆なるよし、出羽國湯澤といふ所にあり」とある。『雪丸げ』及び『叺細道拾遺』・『奥の枝折』にもあるが『雪　薄』を本文として對校した。

お尋(一)に我宿せばし破れ蚊帳　風流
　はじめてかほる風の薫物　芭蕉
菊作る鍬に薄を折(二)添て　孤松
　霧立かくす虹のもとすゑ(末)　曾良
そゞろなる月に二ツ(三)里隔けり　柳風
　馬市くれて駒むかへせん　執筆
ウ
すゝ(煤)けたる父が弓矢をとり傳へ　蕉
　筆こゝろみて判を定る　流
梅かざすみき(三寸)もやさしき唐瓶子　良
　雁をあけてとを(通)すつばくろ　如柳
三夜サ見る夢に故郷のおもはれし(四)　木端
　浪の音聞島の墓はら　風
雪(五)ふらぬ松はをのれとふとりけり(七)　御
　萩踏しける猪のつま(妻)　蕉
(六)やゝ寒し月を燈の小社にて　松
　硯洗はんと露そゝぐなり　端
散花の今は衣をきせたまへ　蕉
　陽炎消る庭前の石(七)　良
二オ
たのしみと茶をひ(挽)かせたる春の水　流
　果なき戀に長きさかやき(月代)　端
釉香爐煙は糸(八)に立添ひて　風
　ほたん(牡丹)の牢風ほのかなり　柳
老僧いいで小盞はじめんと　蕉
　武士みだれ入東西の門　良
自づから鹿も鳴なる奥の原　端
　羽織に包む茸狩の月　流
秋更て捨子(九)かさん菅の笠　柳
　うたひ(一〇)すませる美濃の谷汲　蕉
乘放す牛を尋るゆふまぐれ　風
　(一一)出城の裾に見ゆるかゞり火　端

二ウ
奉る供御の肴も疎にて　蕉
よごれて寒き(一二)禰宜の白張　流
ほり／＼し石のからとの崩けり　風
しらざる山も雨のつれ／＼　柳
咲かゝる花を左りに袖敷きて　端
鶯かたり(一三)胡蝶まふ宿　良

〔一〕『雪丸げ』に「お尋の我宿」
〔二〕『奥の枝折』に「薄なうち添へて」
〔三〕『雪丸げ』に「二千里隔てたり」
〔四〕同「古郷の思はれて」
〔五〕『芭蕉翁草紙』に「雪しらぬ松は」
〔六〕『奥細道拾遺』に「行盡し月を」
〔七〕『奥の枝折』に「庵前の松」
〔八〕『芭蕉袖草紙』に「イニ」として「草に」
〔九〕『奥細道拾遺』に「捨すにかさん」
〔一〇〕『奥の枝折』に「うたひすきさる」
〔一一〕同「お城の裾に」
〔一二〕同「よごれて重き」
〔一三〕『芭蕉袖草紙』に「イニ」として「うたひ」

花摘　元祿二年作

其角の『花摘』の廿八日の日記に「此　閑に飽て翁行脚の折ふし、羽黒山於ニ本坊ニ興行の歌仙をひらく、元祿二年六月にや」と記して此の歌仙を掲げてある。『花摘』は元祿三年の板行であるから、芭蕉から送られた草稿から寫したのだらう。出羽の松童窟文二は文政元年「南谷集」を出板して「この一巻は晋子が花つみ集にもいでゝ、あまねく世にしる所也。おくの奥道には雪なかならす南谷　とあれば例の後に再案せられしなるべし」といつて再錄してゐる。『雪丸げ』には「元祿二　六月四日羽黒山本坊において興行」といふ前文がある。

有難や雪をめぐらす風の音　翁
住(二)ほど人のむすぶ夏草　露丸
川舟の綱に螢を引立て　曾良

鶏のとぶあとに見ゆる三日月　　釣雪
(一)澄水に天をうかべる秋の昏(くれ)　　珠妙
北も南もきぬた打けり(二)　　梨水
ウ(三)眠ては晝の陰(カゲリ)に笠ぬぎて　　釣雪
百里の旅を木曾の牛追(四)　　翁
山つくす心に城の記を書ん　　露丸
斧持すくむ神木の森　　曾良
哥よみの跡したひ行家なくて(五)　　釣雪
豆うたぬ夜は何と啼(ク)鬼　　露丸
古御所を寺になしたる檜(ひ)はだ葺(ぶき)(六)　　翁
糸に立枝にさまざまの萩　　梨水
月見よと引起されて恥しき　　曾良
髪あふがする羅(ウスモノ)の露　　翁
まつはるゝ犬のかざしに花折て　　露丸
的場の末に咲る山吹　　釣雪
ナ 春を經し七ッの年の力石　　翁
汲ていたゞく醒が井の水　　露丸
足引のこしかた迄もひねり簑　　圓入
敵の門に二夜ねにけり　　そら
かき消る夢は野中の地藏にて　　露丸
妻ごひするか山犬の聲　　翁
うす雪は橡(トチ)のかれ葉の上寒く　　梨水
湯の香にくもる旭淋しき　　翁
鼯(ムサヽビ)の音を狩宿に矢をはぎて(烟)　　釣雪
篠(スヽ)かけしぼる夜すがらの法　　圓入
(七)月山のあらしの風ぞ骨にしむ　　曾良
鍛冶が火のこす電(いなづま)の影　　梨水
ナウ(八)ちるかひの梧(きり)に見付しこゝろふと(心太)　　露丸
鳴子おどろく片藪の窓　　釣雪
盗(ヌスイト)につれそふ妹が身を泣て　　翁
祈も盡ぬ關々の神　　曾良
盃の肴(さかな)に流す花の波　　會覺
幕うちあぐる燕(つばくろ)の舞　　梨水

〔一〕『雪丸げ』に「住けん人の」
〔二〕同「汲む水に天も浮べる秋の風」
〔三〕同「居ねむりて晝もかけ地に」
〔四〕「木曾の馬追」

〔五〕同「したひ行宿なくて」
〔六〕同「寺となしたる」
〔七〕同「月の山嵐の」
〔八〕同「散かゝる桐に」

繼尾集　元祿二年作

出羽羽黒山の會覺が芭蕉の餞別に發句を送り、これに挨拶の脇句をつけたものを、後に酒田の淵庵不玉が美濃の己白と韵を次ぎ、更に支考等が加つて一歌仙としたもので、第三以下は一座に會して興行したのではない。不玉は元祿五年『繼尾集』の下卷に入れて出板した。「南谷集」は表六句を收めてゐるが作者及び附句が相違してゐる。仍つて第三以下は參考の爲めこれを添ふる事として全卷を揭げる。

餞別

忘るなよ虹に蟬啼く山の雪　羽黒本坊 會覺
　杉のしげみをかへりみか月〔一〕　はせを
弦かくる弓筈〔二〕を膝に押し當て　不玉
　〔三〕まへ振されば能似合たり　己白
〔四〕ばらばらに食くふ家のむづかしく　釣雪
　〔五〕漏もしぞろに晴るゝ村さめ　筆
ウ
笠島を見による箸の馬かりて　ミノ己白
　入日かゞやく藪のはりの木　不玉
足うらの米をいたゞく里神樂　同
　むすめ（黑）をふれば襟をつくろふ　白
待宵に枕香爐のほのめきて　同
　横川に月のはつる中ぞら　玉
降やめど傘はすぼめぬ秋しぐれ　同
　八朔ちかきふところの樣　白
薄綠の下に雪踏をはき込て　同
　しばした（多）薬粉をさむる立願　玉
夜もすがら笈に花ちる夢心　白
　河原おもてを渡る朝東風　玉
二
立あがる鷺の栗の春日影　ミノ如行

しもくにおろす撞(六)鐘の錠　　支考
こぎ込の茶を干ちらす六月に　　行
子の遣かゝる膳もちえつく　　考
小屑灰(七)に齒黒の皿を突すへて　　行
いもくしの名を立るいさかひ　　考
霙降る庄司が門の唐(八)居敷　　行
水をしたむる蛤の錢　　考
下帶の跡のみ白き裸身に　　同
雲母坂より一のしにやる　　行
末枯のクノ木に月の殘りけり　　同
あきやゝ寒き饅頭の湯氣　　考
日雀鳴籠の日ごとの物おもひ　　同
木の葉散しくのしふきの屋根　　行
何事をむすこ坊主のやつれけむ　　同
さもし火のこる宵の庚申　　考
初花に酒のちか(九)ひを借よせて　　行
かすみはるかに脊戸の撞(一〇)部屋　　考

〔一〕『奥の枝折』に「かへる見る月」
〔二〕『雪丸げ』に「弦かくる千束の弓を携へ」、『南谷集』に「幾[illegible]たる手束の弓を携へ」
〔三〕『雪丸げ』に「汐に絶たる馬のあし跡」、『南谷集』に「汐に濡たる馬の足跡」作者名「曾良」
〔四〕『南谷集』に「年をへし人商人の家かまへ」作者名「重行」
〔五〕同「李の花のあそこゝに咲」作者名「露丸」
〔六〕『奥の枝折』に「おろす酒樽の」
〔七〕『雪丸げ』に「小屑灰に齒黒の皿をいきのけて」
〔八〕『奥の枝折』に「門の唐敷居」
〔九〕同「酒の通をかり持て」
〔一〇〕同「綿部屋」

つなぎ橋　其の一　元祿二年作

此の卷は須賀川の等躬の後なる相樂家に傳はれるを、石井雨考が發見し、たま〳〵行脚し來れる俳人幽嘯に授けたので、文政二年『つなぎ橋』と題し江戸にて出板せるものである。尾花澤の清風亭にて興行せる卷がどうして等躬の手許に殘されたのか、その點は知れないが、『つなぎ橋』以前の古集に載つて居ない。本文は『一葉集』

さ對校して掲ぐ。

すゞしさを我やどにしてねまる也　芭蕉
つねのかやりに草の葉も燒　清風
鹿子立をのへのし水田にかけて　曾良
ゆふづきまろし二の丸の跡　素英
稻紅葉人かげみえぬ笙のおと　風
鵙のつれくるいろ〳〵の鳥　風流
ウ
ふりにける石にむすびしみしめ繩　英
山はこがれて(二)石に血もぬる　蕉
わづかなる世をや繼母に僞られ　流
秋田酒田の波まくらうき　良
うまとむる關の小家もあはれ也　蕉
桑くふむしの雷に恐ツ(三)　風
なつ痩に美人の形おとろひて　良
靈まつる日は誓ひはづかし　英
入月や申酉のかたおくもなく　風
鴈をはなちてやぶる草の戸　蕉

ほし鮎の盡きては寒く花ちりて　英
去年のはたけに牛房芽を出す　良
二オ
蛙寢てこてふに夢をかりぬらん　蕉
ほぐしるべに國の名をきく　風
あふぎにはやさしき連歌一兩句　良
ぬしうたれては香を殘す松　英
はる(三)ゝ日は石の井なでる天をとめ　風
えんなる窓に法華よむ聲　蕉
勅に來て六位なみだに彳みし　英
わかれをせむる炷のかず　良
一さしは射向の袖をひるがへす　蕉
かはきつかれてみたらしの水　風
夕月夜宿とり貝も吹よはり　良
とくさかる男や鎌わすれけん　英
二ウ
たまさかに五穀のまじる秋の露　風
篝にあける金山の神　蕉
行人の子をなす石に沓ぬれて　英
ものかきながす川上の家　良

追もうし花すゝ虫の春ばかり　風
　夜のあらしに巣をふせぐ鳥　英

〔一〕『一葉集』に「草に血をぬる」
〔二〕同「かたち衰へて」
〔三〕同「にれる日は石の井」

つなぎ橋　其の二　元祿二年作

須賀川の雨考が發見し幽嘯の出板した『つなぎ橋』所載の別卷である。本文は前卷と同じく『一葉集』と對校した。

おきふしの麻にあらはす小家かな　清風
　狗ほえかゝるゆふだちの簔　芭蕉
ゆく翅いくたび罠のにくからん　素英
　石ふみかへす飛こえ〔一〕の月　曾良
露きよき青花摘の朝もよひ　芭蕉
　火の氣たえては秋をとよみぬ　風
ウ　この島に乞食せよとや捨つらん　良
　雷きかぬ日は椋のたねとる　英
立どまる鶴のから巣の霜さむく　風
　わがのがるべき地を見置也　蕉
いさめても美女を愛する國有て　英
　べにおしろひの市の爭ひ　良
秀句には秋の千種のさまぐ＼に　蕉
　碑に寢てきさかたの月　風
篷むしろ舟の中なるきりぐ＼す　良
　つかね捨たる薪雨にほす　英
貧僧が花よりのちは人も來ず　蕉
　灸すえながら眠きはるの夜　風
二オ　まつほどは足おとなくてとぶ蛙　英
　菅かいれてせばき賤が屋　良
はての日は梓にかたるあはれさよ　風
　今ぞうき世を鏡うりける　蕉
二の宮はやへの几帳にときめきて　良

鳥はなしやる月の十五夜　英

舎利ひろふ津輕の秋の汐ひがた　蕉

椒かける三ッの樺の木　凮

つく〴〵とはたちばかりに夫なくて　良

父が旅寝を泣あかすねや　英

うごかすも雲の遮る北のほし　蕉

けふも坐禪に登る石上　凮

二ウ

盜人の裡にすてる山がたな　良

簗にかゝりし子の行へきく　英

繫ばし導く猿にまかすらん　蕉

けぶりとほし〔二〕き夜の詩のいへ　凮

花とちる身は遺愛寺の鐘撞て　良

鳥の餌わたす春の山守　蕉

〔一〕『一葉集』に「飛こしの月」

〔二〕同「けふりさもしき」

奥細道拾遺　元祿二年作

大島蓼太が蓼太郎時代、奥羽を行脚して芭蕉の遺句を採訪し、江戸の俳人莎青に書送つたのを延享元年「奥細道拾遺」と題し板行した。これも其の中の一歌仙である。『雪丸げ』に善本を得ないので、『奥の枝折』と共に本文の校訂に用ひた。前書は『奥細道拾遺』には「山形町にて」『雪丸げ』には「大石田高野平左衛門亭にて」『奥の枝折』には「出羽大石田にて興行」とあるが、大石田高野一榮亭の作と見るのが正しからう。

山形町にて

さみだれを〔一〕集て早し最上川　翁

〔二〕螢をつなぐ岸の船杭　一榮

瓜畑いざよふ空に〔三〕影まちて　曾良

〔四〕里をむかふに桑の細道　川水

牛の子に心なぐさむ夕まぐれ　榮
(五)雨雲重し懐の硊　翁
ウ
侘笠を枕にたて(六)ゝ山おろし　水
松むすび置國の境目　良
永樂の古き寺領をいたゞきて　翁
夢と合する大鷹の紙　榮
薫の香を曉とかこちた(七)る　良
爪紅うつ(八)る双六の石　水
まき揚る簾に兒の這入て　榮
煩ふ人に告る秋風　翁
水かふ(九)る井手の月こそ哀なれ　水
礁うちとて(一〇)えらび出さる　良
花の後花を織する花むしろ　榮
涅槃いとなむ山陰の塔　水
二オ
穢多村は浮世の外の春富て　翁
(一一)かたながりする甲斐の一亂　良
葎垣人(一二)も通らぬ關所　水
物書たびに削る松の木　榮
星祭る髮は白(一三)髮にかゝる迄　良
集に遊女の名をと(一四)ゞむ月　翁
鹿笛に貰うてをかし塗足駄　榮
(一五)柴賣に出て家路忘るゝ　水
合歡
ねふた咲木陰を畫のかげろひに　翁
たえ〴〵ならす(一六)千日の鐘　良
古郷の友か(一七)と跡をふりかへり　水
言葉論ずる舟の乘合　榮
ウ
雪霙師走の市の名殘とて　良
煤掃の日を草庵の客　翁
亡人を古き懐紙にかぞへられ　榮
やもめ鴉の迷ふ入逢　水
平づゝみ翌は越べき峰の花　翁
山(二二)田の種を祝ふむら雨　良

最上川のほとり一榮子の宅において興行

元祿二仲夏　芭蕉庵桃青書

〔一〕『奥の枝折』に「五月雨やあつめて」

〔二〕『雪丸げ』に「岸に螢をつなぐ舟杭」
〔三〕『奥の枝折』に「空に月なき見て」
〔四〕『雪丸げ』に「里をむかひに」、『奥の枝折』に「里のむかひに」
〔五〕『雪丸げ』に「水雲重しふところの笠」
〔六〕同「枕にあてゝ」
〔七〕同「かこちたり」、『奥の枝折』に「かこちける」
〔八〕『雪丸げ』に「爪紅うつり」
〔九〕『雪丸げ』に「水かはる」
〔一〇〕同「撰て出さるゝ」
〔一一〕同「力もたずる」、『奥の枝折』に「刀持すも」
〔一二〕『奥の枝折』に「むく起に人も」、『雪丸げ』に「人の通らぬ關所也」
〔一三〕『雪丸げ』に「白毛に枯るまて」
〔一四〕同「名をさむる月」
〔一五〕同「柴買に出て」
〔一六〕同「万日の鐘」
〔一七〕同「左ぞさ跡を」

初茄子　元祿二年作

出羽國鶴岡の長山重行亭興行の一卷である。享保十二年板の『初茄子』吾仲の序に「我翁の奥の細道に羽黒山を立て、鶴が岡 城下、長山氏重行といふものゝ家にむかへられて俳諧一卷あり、左吉もともに送りぬるぞ」とある。左吉 呂丸の俗名である。本文は『初茄子』により『雪丸げ』・『奥の枝折』を以て校合した。

羽黒山を出、鶴が岡重行亭

めづらしや山を出羽(いでは)の初茄子　芭蕉
蟬に車の音(おと)添ふる井戸　重行
絹〔一〕機(はた)の暮いそがしう梭(おさ)打て　曾良
閏彌生(うるふやよひ)のすゑの三日月　呂丸
吾顏に散かゝりたる梨の花　行〔二〕
銘〔三〕に胡蝶と付しさかづき　蕉

ウ

山の端〔四〕にきえかへり行帆懸船　丸
〔五〕蘂なき里は心とまらず　良
粟稗を日毎の齋(とき)に喰飽て　蕉
弓のちからを祈る石の戸　行
赤樫を母の記念(かたみ)に植おかれ　良

雀に残す(六)小田の刈初　丸
此坂も門の板橋崩れけり　行
赦免にもれて獨見る月　蕉
きぬ〴〵は夜なべも同じ寺の鐘(七)　丸
宿の女の妬き(八)物かげ　良
塀入の花見る馬に打群て　行
もとの廓は畑に焼ける(九)　丸

二
金銀の春も壹歩にあらたまり　蕉
奈良のみやこに豆腐始る　行
此雪に先あたれとや釜揚て　良
寝巻ながらのけはひ(化粧)うつくし　翁
逢けさは目を泣はらす筑紫船　丸
(一〇)ところ〴〵に友をうたせて　良
千日の庵を結ぶ小松原　行
蝸牛の殻を踏つぶす音　丸
身は蟻のあなうと夢や覺(一一)つらん　蕉
こけて露けき(一二)女郎花々　行(一三)
明(一四)はつる月を行脚の空に見て　良(一五)
温泉かぞふる陸奥の秋風　蕉(一六)

二ウ
初雁の比よりおもふ(一七)氷の様　丸(一八)
山そ(一九)き作る宮の葺替　良(二一)
尼衣男にまさるこゝろ(二〇)にて　行(二二)
行かよふべき歌(二三)のつぎはし　丸(二四)
花の時鳴とやらいふよぶこ鳥　蕉(二五)
艶にくもりし春の山ひこ　良(二六)

〔一〕『奥の枝折』に「紹織の暮いそがしく」、『雪丸げ』に「いそがしき」
〔二〕『雪丸げ』に作者名「曾良」
〔三〕同「銘を胡蝶さ」作者名「露丸」
〔四〕同「山の端のさへかへり」作者名「行」
〔五〕同「繁らむ里は」作者名「丸」
〔六〕同「雀に殘る」
〔七〕同「寺の月」
〔八〕『奥の枝折』に「女のねたむ」
〔九〕『雪丸げ』に「畑焼けり」
〔一〇〕同「所〳〵に友を勢ふて」、『奥の枝折』に「さふ〳〵に」
〔一一〕『雪丸げ』に「夢や覺すらん」
〔一二〕同「女郎花かも」、『奥の枝折』に「女郎花なき」
〔一三〕『雪丸げ』に作者名「良」

〔一四〕『奧の枝折』に「明はなつ月を」
〔一五〕同、作者名「翁」
〔一六〕同、作者名「丸」
〔一七〕『丸雪げ』に「思ふ氷のためし」、『奧の枝折』に「思ふ氷のさま」
〔一八〕『雪丸げ』に作者名「良」
〔一九〕同「山樵が作る」
〔二〇〕同、作者名「行」
〔二一〕同「まさる心して」
〔二二〕同、作者名「丸」
〔二三〕『雪丸げ』に「君のつき橋」
〔二四〕『奧の枝折』に作者名「良」
〔二五〕同、作者名「良」
〔二六〕同、作者名を脱す。

繼尾集

元祿二年作

出羽　袖の浦に舟を泛べて三吟を試み、舟を上つて雲龍寺に於て一卷を成　させた歌仙　ある。不玉　酒田の醫師伊東元順である。元祿五年板の不玉撰『繼尾集』に載つてゐる。『俳諧袖の浦』に、雲龍寺に此時の草稿を傳へたが寛延四年の春燒失した事が見える。本文は『繼尾集』により『雪丸げ』その他と對校した。

江上晚望

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ　芭蕉
　海松かる磯にたゝむ帆むしろ（二）　不玉
（三）月出は關屋をからん酒持て　曾良
　（一）土もの竈のけぶる秋風　芭蕉
しるしたて（一）ほりに遣たる色柏　玉
　あられの玉をふるふ篗の毛　良
ウ
鳥屋（五）作る鵜飼の宿に冬の來て　蕉
　火をたくかげに白髮たれつゝ　玉
海道は道もなきまで切せばめ　良
　松笠をくる武隈の土產　蕉
草枕おかしき戀もしならひて　玉
　ちまたの神に（六）巾かねごと　良
お供して當なき我も忍らん　蕉

この世の末もみよし野に入る　玉
朝づとめ妻帯寺のかねの聲　良
けふもいのちと島の乞食　蕉
(七)かじけたる花し散なと茱萸折て　玉
おぼろの鳩の寝どころの月(八)　良

二オ
物いへば木魂にひゞく春の風　(九)蕉
すがたは瀧にきゆる山姫　(一〇)玉
剛力がけつまづきたる笹傳ひ　良
棺をおさむる塚の荒芝　玉
初霜はよしなき岩を粧ふらん　蕉
ゐびすの(一一)衣を縫〳〵ぞ泣　良
明日しめん雁を俵に生置て　玉
月さへすごき陣中の市　蕉
御輿は眞葛が奥にかくし(一二)いれ(入)　良
小袖袴をおくる戒の師　玉
我かほの母に似たるとゆかしくて　蕉
貧に(一三)はめらぬ家はうれども　良

二ウ
奈良の京持傳たる古今集　玉
はなに(一四)符をきる坊が酒藏　蕉
鶯の巣を立初る羽づかひ　良
蠶種うごきて箒手にとる(一五)　玉
錦木を作りて古き戀を見ん　翁
ことなる(一六)色をこのむ宮達　良

〔一〕『奥の枝折』に「たゝむ帆柱」
〔二〕『雪丸げ』に「月い出に」
〔三〕『芭蕉袖草紙』に「民の竈い」
〔四〕同「しるしゝて堀に」、『雪丸げ』に「しるしたつ」
〔五〕『雪丸げ』に「鳥屋籠る」
〔六〕『芭蕉袖草紙』に「祈るかねこさ」
〔七〕同「からにたる花し」
〔八〕『袖の浦』に「寐ごころの用」
〔九〕同、作者名「玉」
〔一〇〕同、作者名「蕉」
〔一一〕『芭蕉袖草紙』に「悪比手衣な」
〔一二〕『奥の枝折』に「奥にかんし入」
〔一三〕同「貧にぬかれぬ」
〔一四〕『芭蕉袖草紙』に「花に封切る」
〔一五〕『雪丸げ』に「箒手にさい」
〔一六〕『芭蕉袖草紙』に「こさなき色な」

印の竿

元祿二年作

加賀にて巻いた三吟歌仙であるが、同行の曾良の出座しないのは不審である。默池の『袖珍鈔』は『印の竿』を出典に擧げてゐるが、寶永二年板の同書には載せて居ない。或は同名異本かも知れないが、『袖珍鈔』は其の點で信用の置けない本なので何かの思ひ誤りであらうとも疑はれる。本文は『一葉集』により『袖珍鈔』及び『玉葉集』を校合に用ひた。

あなむざんやな冑の下のきり〴〵す　翁
　ちからも枯し霜の秋草　亭子
渡し守綱よる丘の月かげに　皷蟾
　しばし住べき屋しき見立る　翁
酒肴片手に雪の傘さして　子
　ひそかにひらく大年の梅　蟾

ウ
遣水や二日ながるゝ煠のいろ　翁
　音問る油隣はづかし　子
初戀に文書すべもたど〳〵し　蟾
　世につかはれて僧のなまめく　翁
提灯を湯女にあづけるむつまじさ　子
　玉子貰ふて戻る山もと　蟾
柴の戸は納豆たゝく比靜也　翁
　朝露ながら竹輪きる藪　子
貽落す人は二十にみたぬ顔　蟾
　よせて舟かす月の川端　翁
鍋持ぬ芦屋は花もなかりけり　子
　去年の軍の骨は白暴　蟾

二
やぶ入の嫁や送らむけふの雨　翁
　霞にほひの髮洗ふころ　子
うつくしき佛を御所に賜て　蟾
　つゞけてかちし圍碁の仕合　翁
暮かけて年の餅搗いそがしき　子
　蕪ひくなる志賀の古里　蟾

しら〳〵と明る夜明の犬の聲　翁
　舍利を唱ふる陵の坊　子
竹ひねて割し筧の岩根水　蟾
　本家の早苗もらふ百姓　翁
朝の月闇車に赤子をゆすり捨　子
　討ぬ敵の繪圖はうき秋　蟾
ニウ
良寒く行は筑紫の船に醉　翁
　守の館にて簫かりて籟　子
十重二十重花のかげ行午時の庭　蟾
　杉菜一荷をわける里人　翁
鳩の來て天窓にとまる世の長閑　子
　馳走の雜煮はこぶ神垣　蟾

卯辰集　元祿二年作

加賀の山中溫泉にて見送の北枝と三吟の歌仙である。楚常の遺稿『卯辰集』に收めて元祿四年北枝がこれを出板した。此の時芭蕉は一卷に加筆し、曾良・北枝の附句を批評したものが指月の『山中集』にあるが、句評の部に掲記して置いた。此の卷は『芭蕉翁草紙』に『燕歌仙』を引用書に擧げ、『芭蕉翁俳諧集』その他にも載せてゐる。

元祿二ノ秋翁をおくりて山中溫泉に遊ぶ　三兩吟

馬かりて燕追行わかれかな　北枝
　花野みだるゝ山の曲め　曾良
月よしと相撲に袴踏ぬぎて　翁
　鞘はしりしをやがてとめけり　枝
青淵に獺の飛込水の音　良
　柴かりこかす峰の笹道　翁
ウ
霰降左の山は菅の寺　枝
　遊女四五人田舍わたらひ　良
落書に戀しき君が名も有て　翁

髪はそらねど魚くはぬ也　　枝
蓮の糸とるも中〳〵罪ふかき　　良
先祖の貧をつたへたる門　　翁
有明の祭の上座かたくなに〔三〕　　枝
露まづ拂ふ獵の弓竹　　良
秋風は物いはぬ子も涙にて〔四〕　　翁
白きたもとの續く葬禮　　枝
花の香は古き都の町造り　　良
春をのこせる玄仍の箱　　翁

二オ
長閑さやしらゝ難波の貝づくし　　枝
銀の小鍋を出す芹燒　　良
手枕にしとねのほこり打拂　　翁
美しかれとのぞく覆面　　枝
つき小袖薫賣の古風也　　翁
非藏人なるひとの菊畑　　、
鳴ふたつ臺にすへても淋しさよ　　枝
あはれに作る三ヶ月の膓　　、
初發心草の枕に修行して　　翁
小畑も近く伊勢の神風　　、
疱瘡〔五〕は桑名日永もはやり過　　枝
雨晴くもり枇杷つはる也　　、
細長き仙女の姿たをやかに　　翁
あかねをしぼる水の白波　　、
仲綱が宇治の網代と打詠　　枝
寺に使を立る口上　　、
鐘ついて遊ん花のちりかゝる〔六〕　　翁
〔七〕醉狂人と彌生暮行　　筆

〔一〕『芭蕉翁俳諧集』に「剃はしりしこ」
〔二〕同「戀しき聖の」
〔三〕『續七部集』に「上座　たくなし」
〔四〕『芭蕉』草紙』に「物いはぬ子の」
〔五〕同「疱瘡の」
〔六〕同「遊ゞん花も散りけり」
〔七〕『芭蕉翁俳諧集』に「醉くるひつゝやよひ暮ゆく」

桃の白實

元祿二年作

『奥細道』によると元祿二年八月敦賀にて路通の出迎を受け大垣に入れば、山中温泉で別れた「曾良も伊勢より來り合、越人も馬をとばせて如行が家に入集る」とある。此の歌仙は大垣左柳亭でそれらの人々と催したので、九月六日伊勢の遷宮を拜みに行く前の作である。『金蘭集』には「左柳亭」といふ前書も附いてゐる。『福珍鈔』には『鄙懷紙』を引いてゐるが、本文は『桃の白實』によつた。

はやく咲(さき)九日も近し宿の菊　芭蕉
　心うきたつ宵月の露　左柳
新畠去年の鶉の啼出(一)して　路通
　雲うす〴〵と山の重(かさな)り　文鳥
酒飲のくせ(癖)に障子を明たがり(二)　越人
　なをおかしくも文をくるはす(狂)　如行

ウ
足のうらなでゝ眠をすゝめけり　荊口
　年を(三)わすれてふすま(衾)かぶりぬ　此筋
二人目の妻にこゝろや解ぬらん　木因
　けづり(削)鰹に精進落(四)たり　殘香
とかくして灸(やいと)する座をのがれ出　曾良
　書物のうちの虫はらひ捨　斜嶺
飽果し旅も此頃戀しくて　柳
　歯ぬけとなれば(ば)貝も吹れず　蕉
月寒く頭巾(づきん)あぶりてかぶる也　鳥
　あかつき替る宵(五)の分別　口
一棒にあづかる山の花咲て　通
　盬すくひ込春の鰊味噌　人

ニオ
万歳の姿斗(ばかり)はいかめしく　因
　村はづれまで犬に追るゝ　嶺
はなし聞(きゝ)行脚(あんぎや)の道のおもしろや(一)　筋
　二代上手の腎(じん)はなかりけり　香

楊弓の工(たくみ)する程むつかしき　良
烏帽子か(七)ぶらぬ髪もうすくて　行
冬籠物覺(おぼえ)ての大雪に　柳
茶の立やうも不案内なる　鳥
美くしう(八)顔生付(うまれつく)物憂さよ　人
尼になるべき宵のきぬぐ\　通
月影に(九)鎧(よろひ)とやらを見透して　蕉
萩とぞ思ふ一株の萩(一〇)　口
ニウ
何事も盆を仕舞て隙(ひま)に成(なり)　筋
追手も連に誘ふ參宮　良
丸腰に捨て中々暮(くら)しよき　香
ものゝわけしる母の尊さ　四
花の陰鎌倉どのゝ草まくら　行
梅山吹にのこるつぎ歌　嶺

（一）『袖珍鈔』に「鶏の啼立て」
（二）『一葉集』に「障子を明たがる」
（三）『袖珍鈔』に「年をわすれて」
（四）『金蘭集』・『一葉集』に「精進わするゝ」
（五）『金蘭集』・『袖珍鈔』に「夜の分別」
（六）同「道のおもしろさ」
（七）『金蘭集』・『一葉集』に「烏帽子かゝらぬ」
（八）同「美しく顔生れつく」
（九）『一葉集』・『袖珍鈔』に「具足とやらをすかし見て」
（一〇）同「一株の荻」

萩の枕　元祿二年作

其日庵二世馬光が寛保三年十月芭蕉五十忌を營める『芭蕉林俳諧集』には「元祿二年九月八日祖翁は伊賀の上野の何がしが許にて、一座の哥仙ありて翌の日は遷宮拜み給んとて、はまぐりの二見と聞えしも此折からにや」とあるが、此の歌仙　作者は伊賀の人にあらず、曾良・路通・木因の外は伊勢の作者でないかと思はれる。『一葉集』には「九月八日小むしろの哥仙」とある。『芭蕉袖草紙』所引の『萩の枕』を本文として、

『芭蕉林俳諧集』を以て校合した。

一　泊り見かはる萩の枕かな　　路通
　むしのわび音を薄縁の下　　菊夕
紙子もむ夕邊ながらに月澄て　　白之
　あらしにたはむ笹のこまかき　　殘夜
植木屋は植木に蚪をかくすらん　　芭蕉
　食のすゝまぬことはおぼえず　　曾良
ウ　肌ぬぎて人に見せたる夕間ぐれ　　通
　見そゝのかす時のおかしさ　　夕
たき物のけぶりに染し破れ翠簾　　良
　ほそき聲して拔菜呼入　　木因
蕣に雀も遠く鳴にけり　　夜
　月見歩行し旅の裝束　　之
さまぐ〵の貝拾ふたる布袋　　蕉
　地獄繪を書く様の哀さ　　通
きぬぐ〵の尻目に鐘を恨らん　　因
　賤が垣根になやむおもかげ　　夜
豆腐ひく音さへ聞ぬ郷の花(三)　　之
　鳥の巣もりと住あらす庵　　蕉
二オ　きさらぎや落行兜おもたくて　　夕
　あらしに光る宵の明星　　良
苫まくり船に米つむかしましさ　　夜
　此ごろ室に身をうられたる　　通
文書てたのむたよりのかゞみ研　　蕉
　旅からたびにおもひ立ぬる　　之
傘さは熊野參りの唱して　　夜
　薬手づから人に施す　　通
田を買ふてわびしくもなき桑門　　蕉
　犬吼かゝる森の入り口　　夕
夕月夜笈をうしろにつき張りて　　良
　そろ〳〵寒き秋の炭やき　　夜
二ウ　谷越に新酒呑とよばるなり　　夕
　はや辻堂のかろき棟上　　通
うちむれて疫病送る朝ぼらけ　　之
　麥もかじけて一もとのまゝ(三)　　蕉

鷹すゑて近う召るゝはな作り　夕
　胡蝶みだるゝ盃の影　筆

〔一〕『芭蕉林俳諧集』に「きかぬ里の花」
〔二〕同「參らかしけて春本ノマヽはせを」とありて「春」の下の文字を缺く。

木葉集　元祿二年作

伊賀上野の女流蕉門梢風尼の句集『木葉集』に收めて寳暦二年出板になつた。蘭更の『多胡碑集』亦この歌仙を再錄して安永二年板行した。前文は『木葉集』と同じく元祿二年十一月梢風尼の夫友田良品亭の興行となつて居る。本文は『木葉集』により『多胡碑集』外『芭蕉翁俳諧集』その他を參照した。

元祿二年霜月朔日於二良品亭一

誹諧歌仙

いざ子供はしりありかん玉霰　芭蕉
　折敷に寒き椿水仙　良品
羽箒の風やむ時に軸まきて　梢風
　居(一)すまいはじむ月の小莚　三(二)園
鹿の聲簑のかり着の哀さ(三)や　土芳
　さら〱落る峰のど(四)ん栗　半殘

ウ

雞頭の愛なきまどに打折て　品
　物喰うちの蠅の苦しさ(五)　蕉
常ながらの(六)し乾て居る海士が妻　園(七)
　つかれたすけよ(八)雨の手枕　風
疊紙しのび〲に濕かみて　殘
　袴もとらではやわかれけり　芳
馬の音傍輩(九)達のとり〲に　蕉
　月入かゝる不二の頂　風
秋風の靡ふるへば雲出て　品
　(一〇)笛によりける藪の山雀　園(一一)
へし折ば雫にぬるゝ花のかさ　芳

羽織そろへて春の參宮　蕉
二オ 鍬立て耕す肩をうち休(やすめ)　風
首のはげたる頼朝の鶴　殘
初雪に先下の句を出しけり　蕉
（一三）間事多し奥州の客　品
（一二）若生(なえ)し君の卒塔婆に泣こがれ　園（一四）
林はづれに結ぶ柴の戸　風
寢る時も馴(なる)れば安き瀧の音　芳
風雅仕上げし酒のみの弟子　蕉
世の中は機嫌かひなる旅ごろも　品
よき石見れば佛切たく（一五）　殘
瑠(る)璃(り)燈は月を（一六）くゝりし如く也　風
僧の髮剃盆の夕暮　園（一七）
二ウ 女郎花(をみなへし)なまめくなりと踏敷(ふみ)て　蕉
兎かゝれと畦に網はる　風
生れ來てたばこのまぬも氣の樂か（一八）　品
白髮ながらに初子かゝへる　芳
左義長のあたゝかさより花を待　殘
ながるゝ雪に道（一九）すべる岡　園（二〇）

〔一〕『多胡碑集』に「居住居はしむ」、『一葉集』に「居相撲」
〔二〕『多胡碑集』に作者名「之燕」
〔三〕同「かり着の哀れなる」
〔四〕同「峠の落栗」
〔五〕同「蠅のくしき」、『袖珍鈔』に「蠅のうるさき」
〔六〕『多胡碑集』に「常ながら熨斗干佗る」
〔七〕同、作者名「燕」
〔八〕『袖珍鈔』に「尼の手枕」
〔九〕『芭蕉翁俳諧集』に「倦猫連の」
〔一〇〕『多胡碑集』に「籬によりける」
〔一一〕同、作者名「燕」
〔一二〕同「いふ事多し」
〔一三〕同「草生し君の」
〔一四〕同、作者名「燕」
〔一五〕『袖珍鈔』に「佛切たき」
〔一六〕同「月を作りし」
〔一七〕『多胡碑集』に作者名「燕」
〔一八〕『袖珍鈔』に「氣の樂さ」
〔一九〕『多胡碑集』に「道すへる「」
〔二〇〕同、作者名「燕」

壬生山家　元祿二年作

江戸の松露庵鳥醉は寶暦六年九月廿八日攝津の北壬生山淨春寺の芭蕉舊址「金龍庵」を訪ひ、寺僧に乞ふて芭蕉に關する寺什を一見し、その中の連句一卷を『壬生山家』に入れて寶暦八年板行した。これは其の一卷で卷末に「草稿の處々消したる所ありて文字さだかならず、開板すべきにもあらじと後の人の譏もあらんか。只金龍庵に殘るものなればやむ事を得ずとゞめ侍るのみ」と附記してゐる。『金蘭集』の前文に「元祿七年六月廿一日大津木節庵にて」とあるのは全く誤謬で伊賀百歲亭の興行で『一葉集』に元祿二年の部に收めたのが正しい。

(一)霜に今行や北斗の星の前　百歲
笛の音こほるあかつきの橋　式之
一つがひ鶴の來て寢る松ふりて　芭蕉
まばらにかりし田の面遙けし　夢牛
盃の名をあらためん暮の月　村鼓
腕押つよき露の衣手　槐市
ウ
若殿の簾の中の大笑ひ　梅額
ならの小禰宜も宿に下りし　芭蕉
挑燈をともせといひし鐘の音　夢牛
紙子羽織を少し匂はせ　式之
浦々を見に行人へ文書て(二)　百
古き名染の家おしへけり　額
有明の飼置く(三)鴫に餌をかはせ　市
(四)……つくりたる青山の秋　村
手習のきぬを裾にうたせける　蕉
瓶子に添て出すしら糸　之
杖つきてのほれば坊が華の場　額
窓あたゝかに……(五)……怠たり　百
二オ
春の來て猿に小哥を舞せけり　村
翠簾の屏風に繪く獅子　額
面影に打かざしたる唐團　はせを

夜着の移り香風にしらるゝ　牛
はら〳〵と霰の音の過る也　之
群る雀藪くゞり行　村
柴賣の市の歸りに酒買て　市
明日の鐘鑄の月も晴たり　之
稲妻に船こぎならふ渡守　村
露にけさばや着物の紋　百
子どもらが傳る家をあらそひて　はせを
ちぎのひまより見ゆる棟札　之
二ウ　かりぎぬに下知のふぼしをかたぶけし　梅
幕をしぼれば皆はしをとる　はせを
鶏のうたふも花の晝なれや　之
畑うつ跡にもゆる陽炎　市
初春の射場やあらんと弓提て　百
鐙につける菫一房　村

〔一〕『金蘭集』に「霜下り行や」『袖珍鈔』に「初霜に」
〔二〕『金蘭集』に「人に文ひさ」
〔三〕『金蘭集』に「何置く時に」、『芭蕉翁俳諧集』に「時に」
〔四〕『金蘭集』に「しつくりしたる」『袖珍鈔』に「米[illegible]くぞふ」
〔五〕『金蘭集』に「空あたゝかに（霞）」、『一葉集』に「あたゝかにつゞめ忘る」

何袋　元祿三年作

今日庵一峨の『何袋』に「いにし丁卯（文化四年）の春、伊賀越しけるおりから、上野ゝ城下たる何某がもとにて、ふるき懐帋を得たり。このはいかいいまだ世に流布せざればとおもふものから、その懐帋其筆のまゝをこゝにあらはす」とて模刻し、文化九年出板した。端作りに元祿三年二月六日とある如く『ひさご』時代の歌仙である。

元祿三年二月六日
誹諧之連歌

鶯の笠落したる椿かな　桃青

古井の蛙草に入聲　乍木
陽炎の消さま見たる夕影に　百歳
　指さすかたに月ひづむ也　村皷
梢なる隣の梢をからすらん　式之
　きびを吹折る風のあらさよ　梅額
ウ
佗しらに牛の子にがす朝ぼらけ　一桐
　世を土なべといのちなりけり　槐市
俤に妹が袷をうへに着て　村皷
　夢さへ酒に二日醉する　桃青
古郷をわすれぬ馬にほく〱と　乍木
　はへて程なき月の花蕎麥　百歳
住持なき庭に木の實の落るをと　梅額
　鳩吹人のなり窄き也　一桐
給物は麓の市にはし賣て　吳雪
　機嫌にむけば幸若の舞　式之
孫曾孫うちならべたる花のかげ　百歳
　藤むらさきにさま〲の蝶　乍木
二オ
春の色新古今こそあはれなれ　桃青
　尾上をへだつ木魚はかなき　槐市
むら雨の笠きぬ程に降過て　村皷
　桑も早苗も一度成けり　吳雪
ゆるされて流され人の立かへり　一桐
　泣てゐる子のかほのきたなさ　梅額
宿かして米搗程は火も焼ず　桃青
　脚氣を佗て膏藥をはる　槐市
大内に井戸ほりを召す秋のくれ　一桐
　地震にころぶ松の下露　乍木
有明に母の里より文をこし　百歳
　形見にびんを殘す陸奥　式之
二ウ
掛香を小袖のふりに縫ふくみ　村皷
　三味糸引てならぶ乞食　桃青
東山中にもはなは清水寺　乍木
　けにのどかなる知恩院のかね　一桐
連哥師の杖をわするゝ春の空　式之
　すいかむたいむ庭の若草　吳雪

桃青五句　梅額三句　乍木五句　一桐五句

百歳四句　槐市三句　村鼓四句　呉雪三句
式之四句

己ヶ光　　元祿三年作

伊賀上野に歸省し姉聟山岸半殘の家にて興行した一巻である。大阪の車庸が元祿五年『己ヶ光』を撰集の際乞ふて其の中に收めたが、車蓋は『誹諧歌仙七部拾遺』に再錄し、後『七部集拾遺』を出板する時に又々これを附錄したので、芭蕉に關する連句集には大概所載されて居る。本文は『己ヶ光』によつて『七部拾遺』その他と對校した。

午ノ年伊賀の山中

春興

種芋や花の盛に賣ありく　翁
　こたつふさげば風かはる也　半殘
酒好のかしらも結ず春暮て　土芳
　ぬぎかへがたき革の衣手　良品
有明の七ッ起なる藥院に　殘
　ひさごの札を付わたしけり　翁
ウ
秋風に槇の戸こぢる膝入れて　品
　小僧のくせに口ごたへする　芳
やす〳〵と矢州の河原のかち渉り　翁
　多賀の杓子もいつのことぶき　殘
手枕のおとこも持たで三つ輪組　芳
　人にとりつく憂名くちおし　品
萱草の色もかはらぬ戀をして　殘
　秋たつ蟬の啼しに〻けり　翁
月暮て石屋根まくる風の音　品
　こぼれて靑き藍瓶の露　芳
蕣の花の手際に咲そめて　翁
　細〔三〕や鳴來る水のかはりめ　殘
二オ
猫の目の六ッ柿核に四ッ圓く　芳
　あすのもよひの纎蘿蔔きる　品
からうすも病人あればかさぬ也　殘

たゞさゝやいて出る髮ゆひ　翁
とり／＼に紺屋の形を取散し　品
冬至の〔三〕緣に物おもひます　芳
けはへ(化粧)どもよそへども君かへりみず　翁
まだ元服のあどなかりける　殘
朝夕にきらひの多き膳まはり　芳
いとあはれなる野の宮の衆　品
田鼠の稻はみあらす月澄て　殘
風ひえ(冷)そむる牛の子の旅　翁
ニウ
露しぐれ越のさきおり袖もなし　品
しなずば人の何に成べき　芳
神風や吹起されてかい覺ぬ　翁
筆を落せば追〔四〕書出す　殘
しら／＼とひとへの花に指むかひ　芳
長閑き雲の太鼓うちけり　品

〔一〕『七部拾遺』に「いつのこさふろ」
〔二〕同「腹の鳴來ろ」
〔三〕同「冬至の宴に」
〔四〕『金蘭集』に「烏鳴出す」

ひさご　其の一　元祿三年作

近江膳所の濱田珍碩（後酒堂）が元祿三年『ひさご』を撰した中の一卷である。發句は同年伊賀の作でないかと思はるゝのは『葛虫庵小集』及び『花はさくら』に同一の發句で伊賀の作者との連句が別に存するからである。珍碩・曲水の二子と對座中、たま／＼此の發句を提出して三吟を卷き、その出來榮が芭蕉の氣に入つたので『ひさご』の中に採錄を許し、伊賀の卷は未發表のまゝ傳へられたのではあるまいか。

花見

木のもとに汁も膾(なます)も櫻かな　芭蕉
西日のどか(長閑)によき天氣なり　珍碩

旅人の虱かき行春暮て　曲水
はきも習はぬ太刀の鞘　蕉
月待て假の内裏の司召　硯
籾臼つくる杣がはやわざ　水
ウ
鞍置る三歳駒に秋の來て　蕉
名はさま〴〵に降替る雨　硯
入込に諏訪の涌湯の夕ま暮　水
中にもせいの高き山伏　蕉
いふ事を唯一方え落しけり　硯
ほそき筋より戀つのりつゝ　水
物おもふ身にもの喰へとせつかれて　蕉
月見る顔の袖おもき露　硯
秋風の船をこはがる波の音　水
鴈ゆくかたや白子若松　蕉
千部讀花の盛の一身田　硯
巡禮死ぬる道のかげろふ　水
ニオ
何よりも蝶の現ぞあはれなる　蕉
文書ほどの力さへなき　硯

羅に日をいとはるゝ御かたち　水
熊野みたきと泣給ひけり　蕉
手束弓紀の關守が頑に　硯
酒ではげたるあたま成覽　水
双六の目をのぞくまで暮かゝり　蕉
假の持佛にむかふ念佛　硯
中〳〵に土間に居れば蚤もなし　水
我名は里のなぶりもの也　蕉
憎れていらぬ躍の肝を煎　硯
月夜〳〵に明渡る月　水
ニウ
花薄あまり招けばうら枯て　蕉
唯四方なる草庵の露　硯
一貫の錢むつかしと返しけり　水
醫者のくすりは飲ぬ分別　蕉
花咲けば芳野あたりを欠廻　水
虻にさゝるゝ春の山中　硯

蓑虫庵小集

元祿三年作

前記『ひさご』の花見の巻と同一の發句で作者は伊賀の人のみである。桐雨の『蓑虫庵小集』に「右一巻之連句ハ柳下生ノ家ニ藏ス今乞テ世ニ披露ス」とある。恐らく未定稿のまゝ作者の一人が保存して置いたのであらう。次の『花はさくら』の巻と參照されたい。

木のもとに汁も鱠もさくらかな　翁
明日來る人はくやし（口惜）がる春　風麥
蝶蜂を愛するほどのなさけ（情）にて　良品
水のにほひ（臭）をわづらひ（煩）にける　土芳
くさまくら（草枕）このごろになき月のはれ　雷洞
猿のなみだかおつる椎の實　翁
ウ
石だん（壇）の繼目（つぎめ）も見えずこけ（苔）のつゆ　麥
顏よごれたる賤の子ども等　品
はうぐはん（判官）の烏帽子ほしやとおもふらん　芳
木幡（こはた）あたりのゆき（雪）のゆふぐれ　麥
賣庵を見せんと人のみちびきて　蕉
井戸のはた（端）なるいぶききるなり　洞
涼しさははたか（裸）になりて月をまつ　品
むしろ（筵）をたてにはしり飛ばせる　蕉
寢てゐたかをかしく犬の尾をすへて　麥
神事見たつる脇持子が太刀　芳
まんぢうの紅つけちらす花さかり　半　殘
日ながき空に二日醉さけ　三　蘭
二ウ
陽炎のみぎりに榻（しぢ）をひきづられ　蕉
すげなくせいのたかきさげ髮　品
しのぶ夜の蠟燭おとす橋のもと　洞
ひとへのきぬに蚤うつりけり　蘭
賤の屋もかひこ（飼蠶）じまへば廣くなり　品
またあたらしき（新）麥うたをきく　麥
御佛につかゆる日よりまづしくて　芳
源氏をうつす手はさがりつゝ　殘
ひちりきの音をふきいれるよもすがら　麥

燕子楼のたち火の氣たえたり　翁
ゆふ月を扇に繪がくあきの風　蘭
露こひしがる人はみのむし　芳
ニウ
しらぎくの花の弟と名をつけて　殘
能見にゆかん日よりよければ　洞
乘いるゝ二歳の駒をなでさすり　蘭
躙書さへならぬ老の身　品
降かゝる花になみだもこぼれずや　麥
雉やかましく家居しにけり　芳

花はさくら

三祿元年作

『蓑虫庵小集』所載の連句とは二の表より附句を異にする別巻で、歌仙より四句多く全巻四十句を以て成立してゐる。桃亭秋屋の『花はさくら』に「爰に伊陽なる小川氏風麥のもとにて興行有ける一巻あり、此發句にての歌仙ひさごに入といへども、全篇抜群にかはれり。初折にあるじ風麥の執毫にして二の表より翁の筆也」となし、遺稿の所持者聴雨に乞ひ得たる旨を序文にかゝげ寛政十三年これを出板した。又、天然居士著『十丈園筆記』の巻一には「余むかし伊勢にて祖翁伊賀の一巻を見る。歌仙にして四十句に充り、いかなる故にや此巻を弘く流布せず依て記す」として收載して居る。『一葉集』は元祿四年の部の終りに此の巻を附して「元祿庚午の春木のもとに汁も鱠もさくら哉の立句にて哥仙有、此巻と一折までは大かた同じ。末廿二句は大に異也。然ども祖翁の作なること明らけし。故に諸書所見なしといへども脱捨るに忍びず、爰に擧て考證となす」と註記して居る。『花はさくら』が出板の年代も古いので本文は同書により『十丈園筆記』・『一葉集』と對校して其の異同——主として作者——を揭ぐる事とした。

(一)元祿三年三月二日

俳諧之連歌

木のもとに汁も膾も櫻かな　はせを
　明日來る人はくやしがる春　風麥
蝶蜂を愛する程の情にて　良品(二)
　水のにほひをわづらひにける　土方(三)
卯枕此ごろになき月の晴　雷洞(四)
　猿のなみだか落る椎の實　芭蕉
石壇の縫目も見へず苔の露　風麥(五)
　顏よごれたる賤(しづ)の子供等　良品
判官の烏帽子ほしやと思ふらん　土方
　(六)木幡あたりの雪の夕ぐれ　風麥
賣庵を見せんと人の道びきて　芭蕉
　井戸の端なる(七)ゆふき伐也　雷洞(八)
すゞしさの躰になりて月を待　良品
　莚をたてにはしりさびする　芭蕉
寐て居かおかしく犬の尾をすへ(九)て　風麥(一〇)
　神事見たつるわ・き・も・子・がたち　土方(一一)
饅頭(一二)の紅粉つけちらす花ざかり　半殘(一三)
　(一四)日ながき空に二日醉さけ　三園(一五)
鐘かすむ喰さき紙を飛つきて　風麥(一六)
　荷ひ(一七)突たる番匠のこぎ　芭蕉
何事にいそぐめ(二一)くらのひず(一八)むらん　土方(一九)
　かざす扇のかなめはしりし　雷洞(二〇)
(二二)おかしきは鼓(つゞみ)の拍子打のつて　風麥(二三)
　氣おもに(二三)見ゆる脇息の上　良品(二四)
かけかねのひとりはづれ(二五)し夕嵐　三園(二六)
　香ひ(二七)しみたる狆の首たま　木白(二八)
はり道を傘さ(二九)してひとひつき　良品(三〇)
　飯のこわきを好れにけり(三一)　土方(三二)
月影に燈籠張て泣暮し　三園(三三)
　髮筋よりもほそき秋風　芭蕉(三四)
鶴の夢すゝきの中にまどろみて　雷洞(三五)
　冬のかゝしの弓を失ふ　三園(三六)
房は(三七)留守佛はうにゝふすぼりし　木白(三八)
　けやき碁盤の板の薄さよ　風麥(三九)
老(四〇)ながら廿日鼠の哀にて　半殘(四一)

石菖青く眼をさましつゝ(四二)　良品
着かゆれば染ものくさき單物　芭蕉
おくの座敷へ膳すゆるなり(四三)　(四四)土方
花あればいやしき(四五)家にとゞめられ　(四六)三園
終に出來たる燕(つばくろ)の土　(四七)雷洞
(四八)木白あさよいきたりければ、興に乘じ付延し侍る。されどさり鐘に筆をとゞむ。

〔一〕『一葉集』に『元祿三年三月廿七日伊賀上野(ママ)瀑亭にて』
〔二〕『一葉集』に作者名「風瀑」
〔三〕同、作者名「土芳」
〔四〕同、作者名「半殘」
〔五〕同、作者名「瀑」
〔六〕同「鳥羽田あたりの」
〔七〕同「いふききる也」
〔八〕同作者名「瀑」
〔九〕同「犬の尾なすべて」さ濁點あり
〔一〇〕同、作者名「殘」
〔一一〕同、作者名「芳」
〔一二〕同「饅頭に紅粉」
〔一三〕同、作者名「瀑」
〔一四〕同「長閑さ空に」
〔一五〕同、作者名「品」
〔一六〕同、作者名「芳」
〔一七〕同「荷ひませたる」
〔一八〕同「めくらのひつむらん」
〔一九〕同、作者名「品」
〔二〇〕同、作者名「瀑」
〔二一〕同「なかしさは皷い拍子打のへて」
〔二二〕同、作者名「瀑」
〔二三〕同「氣おもく見ゆる」
〔二四〕同、作者名「芳」
〔二五〕同「ひさりはづるゝ」
〔二六〕同、作者名「翁」
〔二七〕同「にほひに染し」
〔二八〕同、作者「殘」
〔二九〕同「からかさ提て」
〔三〇〕同、作者名「瀑」
〔三一〕同「好れにける」
〔三二〕同、作者名「品」
〔三三〕同「翁」
〔三四〕同「瀑」
〔三五〕同「芳」
〔三六〕同「殘」
〔三七〕同「房の留主佛は石灰にふすぼりて」
〔三八〕同、作者名「品」

〔三九〕同「芳」
〔四〇〕同「老にけるはつか鼠いあはれさは」
〔四一〕同、作者名「湯」
〔四二〕同「目を覺しぬる」
〔四三〕同「膳すゑる也」
〔四四〕同、作者名「殘」
〔四五〕同「むさき家にも」
〔四六〕同、作者名「芳」
〔四七〕同「湯」
〔四八〕同、此の附言なし

ひさご　其の二　元祿三年作

芭蕉は此の歌仙に脇句のみを附け、第三より路通・珍碩の兩吟となり、二の表より荷兮・越人の兩吟となつてゐるので、諸集第三までを掲げ以下を省略して居る。烏雀巷布磧は天明二年『誹諧諸集訂誤』を板行して其の中に

一ひさご始メ摺たる本には
いろ〳〵の名もまぎらはし春の草　珍碩

うたれて蝶の夢覺しぬる　翁
とあり、後に名もむつかしやとし、夢はさめぬると直せり。それといろを付て見れば字の付ケやう木を入かへたる所あらは也。
といひ、支考の『二十五ヶ條』により書林の斯くは板木を直せるが如く疑つて居る。曲齋瓢子は『婆心錄』に七部集の再板本に就いて論難してゐるが、『ひさご』の本文は其の再板本に據つて『三冊子』を引用し「紛らはしの方作よし」と評して居る。『一葉集』は發句「まぎらはし」脇句「目はさましぬる」として第三句までを掲げてある。現存の『ひさご』は『諸集訂誤』に指摘せる再板本であつて、初摺本を發見し難いが、もし此の歌仙を芭蕉の捌きならずとせば脇句までを採つて第三以下を省略す可きである。『一葉集』の如、第三を存するならば、すくなくも半歌仙だけを取らなければならぬ。爰には諸說を參酌して歌仙の前半は芭蕉の捌きを受けたものと見、後半に荷兮・越人の追加として參考の爲め附添へ、且つ存

の『ひさご』から再錄する事とした。

いろ〱の名もむつかしや春の草　珍碩
　うたれて蝶の夢はさめぬる　翁
蝙蝠ののどか(長閑)につらをさし出して　路通
　駕籠のとをらぬ峠越たり　同
紫蘇(しそ)の實をかます(叺)に入る夕ま暮　碩
　親子ならびて月に物くふ　同
秋の色宮ものぞかせ給ひけり　通
　こそぐられてはわらふ俤　同
うつり香の羽織を首にひきまきて　碩
　小六うたひし市のかへるさ　同
鮠(はえ)釣のちいさく見ゆる川の端　通
　念佛申ておがむみづかき(瑞籬)　同
こしらえし藥もうれず年の暮　碩
　庄野ゝ里の犬におどされ　同
旅姿稚き人の嫗つれて　通
　花はあかいよ月は朧夜　同
しほ(汐)のさす椽の下迄和日也　碩
　生鯛あがる浦の春哉　同

二オ
此村の廣きに醫者のなかりけり　荷兮
　そろばんをけ(置)ばものしりといふ　越人
かはらざる世を退屈もせずに過　兮
　また泣出す酒のさめぎ(際)は　人
ながめやる秋の夕ぞだゝひろき　兮
　蕎麥眞白に山の胴(どう)中(なか)　人
うどんうつ里のはづれの月の影　兮
　すもゝ(杏桃)もつ子のみな躶むし　人
めづらしやまゆ烹(にる)也と立とまり　兮
　文珠の智惠も槃特(はんどく)が愚擬　人
なれ加減又とは出來ジひしほ味噌　兮
　何ともせぬに落る釣棚　人

二ウ
しのぶ夜のおかしうなりて笑出ス　兮
　逢ふより顏を見ぬ別して　同
汗の香をかゝえて衣をさり殘し　人
　しきりに雨はうちあけてふる　同
花ざかり又百人の膳立に　兮

春は旅さもおもはさる旅　　口

珍碩九　翁一　路通八　荷兮十　越人八

芭蕉翁俳諧集　　元祿三年作

元祿三年の初夏石山の幻住庵に入る以前、大津の奇香亭の作である。第三の尙白その他近江の人々で蝶夢の『芭蕉翁俳諧集』に收めてある。本文は同集により『一葉集』を參照校合した。

鼓子花の短夜ねぶる晝間哉　　芭蕉
せめてすゞしき蔦の青壁　　奇香
初月の影長檠にたゝかひて　　尙白
石にいとゞの聲ひゞく也　　白笑
松の木を秋風さそふ折〳〵に　　通雪
砧をやめて琴の糸よる　　松洞
ウ
うかれたる女になれて口の積る　　香
矢數に腕のよはる戀草　　蕉
古塚に古郷の文を捨にけり　　笑
柿の葉とる童部かしまし　　雪
まだ暮ぬ先より出て螢狩　　宜秀
浮世の外の清水わく寺　　白
嵐ふく雲間をわくる月一ッ　　洞
杖にまくらに菅笠の露　　江山
稻妻に時〳〵社務まれて　　蕉
横しまの身の汗ぞ流るゝ　　笑
花を見て芳野は見ずに歸りきや　　白
雨に肥たる峰のさわらび　　香
二オ
麥めしに鶯まねく友ならん　　雪
ざれたる窓に鉦の音きく　　山
ともし火の幽にうつる松の枝　　香
出よときそふ舟のむら雨　　宦江
道心のとふて悲しき野邊の墓　　一龍
追れて鹿の子を捨てゆく　　蕉
中の秋嵯峨なる竹を伐せけり　　雪
三線ちかく萩を踏折ル　　香

うき人を咎ては譏る月の前　白
大勢よせて遊ぶたはれ女　香
一條や二條あたりの小袖うり　洞
亥の子告こす比叡の山風　白
二ウ
ころ／＼と雪にまぶれて千鳥鳴　江
〔一〕薔朶を荷〔二〕ふてかへる晦道　雪
醉ふ時は伯父の顏さへ見忘るゝ　香
都の姉が子を產にくる　龍
機たゝむ妻戶に花の香を焚て　蕉
よき夢かたるけふのはつ春　白

凡兆　十二　芭蕉　十二　去來　十二

〔一〕『一葉集』に「杖をまくらに」
〔二〕同「斧を荷ふて」

猿蓑　其の一　元祿三年作

『猿蓑』の撰者凡兆・去來との三吟歌仙で、芭蕉の連句の最も老熟した時代の作である。その中にも洗練された歌仙として註釋書も多いが、惟々庵由誓舊藏の猿蓑草稿の一部には板本と相違した附句がある。一句と雖等閑にせざる芭蕉の嚴格なる捌き振りが見る可く、卷末に草稿との異同を附記して置く。

市中は物のにほひや夏の月　凡兆
あつし／＼と門／＼の聲　芭蕉
二番草取りも果さず穗に出て　去來
〔一〕灰うちたゝくうるめ一枚　兆
此筋は銀も見しらず不自由さよ　蕉
たゞとひやうしに長き脇指　來
ウ
草むらに蛙こはがる夕まぐれ　兆
蕗の芽とりに行燈ゆりけす　蕉
〔三〕道心のおこりは花のつぼむ時　來
能登の七尾の冬は住うき　兆
魚の骨しはぶる迄の老を見て　蕉

待人入し小御門の鎰　來
立かゝり屏風を倒す女子共　兆
湯殿は竹の簀子侘しき　蕉
茴香の實を吹落す夕嵐　來
僧やゝさむく寺にかへるか　兆
さる引の猿と世を經る秌の月　蕉
年に一斗の〔三〕地子はかる也　來
名
五六本生木つけたる瀦　兆
足袋ふみよごす黑ほこの道　蕉
〔四〕追たてゝ早き御馬の刀持　來
〔五〕でつちが荷ふ水こぼしたり　兆
戸障子も莚がこひの賣屋敷　蕉
てんじやうまもり〔六〕いつか色づく　來
こそ〳〵と草鞋を作る月夜ざし　兆
蚤をふるひに起し初秋　蕉
そのまゝに〔七〕ころび落たる升落　來
〔八〕ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　兆
草庵に暫く居ては打やぶり　蕉

いのち嬉しき撰集のさた　來
ウ
さま〲に品かはりたる戀をして　兆
浮世の果は皆小町なり　蕉
なに故ぞ〔九〕粥すゝるにも涙ぐみ　來
御留主となれば廣き板敷　兆
手のひらに虱這はする花のかげ　蕉
かすみうごかぬ晝のねむたさ　來

〔一〕由誓傳藏『猿蓑』草稿に「破れすり鉢にむしかさびいな」
〔二〕同「發心のなこりな花のつぼむ時」
〔三〕同「一斗の地代」
〔四〕同「お馬には槍持徧付ならむ」
〔五〕同「わつばがこえな打こぼしけり」
〔六〕同「いろ付にけり」
〔七〕同「打こけてある升落」
〔八〕同「ひづみて蓋の」
〔九〕同「何故か粥すゝる」

猿蓑　其の二　元祿三年作

『猿蓑』の兩撰者に尾張の野水をさし加へて四吟歌仙を試みたもので、去來の「糸櫻腹いつぱいに咲にけり」は「句我ままなり」と芭蕉の微笑をうけつゝ、匂ひの花に異例となる櫻を詠じた挿話なども傳へられて居る。蕉門俳諧の絶對境に到達した一卷として古來その註釋書に乏しくない。本文は『猿蓑』の古板本より採錄したので、原作通りになつて居る。

灰汁桶の雫やみけりきりぎりす　凡兆
　あぶらかすりて宵寢する秋　芭蕉
新疊敷ならしたる月かげに　野水
　ならべて嬉し十のさかづき　去來
千代經べき物を樣々子日して　芭蕉
　鶯の音にたびら雪降る　兆

ウ
乘出して肱に餘る春の駒　來
　摩耶が高根に雲のかゝる　水
タ
ゆふめしにかますこくへば風薫　兆
　蛭の口處をかきて氣味よき　蕉
ものおもひけふは忘れて休む日に　水
　迎せはしき殿よりのふみ　來
金鍔と人によばるゝ身のやすさ　蕉
　あつ風呂ずきの宵々の月　兆
町内の秋も更行明やしき　來
　何を見るにも露ばかり也　水
花とちる身は西念が衣着て　蕉
　木曾の酢莖に春もくれつゝ　兆
名
かへるやら山陰傳ふ四十から　水
　柴さす家のむねをからげる　來
冬空のあれに成たる北颪　兆
　旅の馳走に有明しをく　蕉
すさまじき女の智慧もはかなくて　來
　何おもひぐさ狼のなく　水

夕月夜岡の萱ねの御廟守る　蕉
人もわすれしあかそぶの水　兆
うそつきに自慢いはせて遊ぶらん　水
又も大事の鮓を取出す　來
堤より田の青やぎていさぎよき　兆
加茂のやしろはよき社なり　蕉
ウ
物うりの尻聲高く名乘すて　來
雨のやどりの無常迅速　水
晝ねぶる青鷺の身のたふとさよ　蕉
しよろ〳〵水に藺のそよぐらん　兆
糸櫻腹一ぱいに咲にけり　來
春は三月曙のそら　水

凡兆九　芭蕉九　野水九　去來九

江鮭子　元祿三年作

大阪の桃之道（後に謂竹）が近江にて蕉門の作者と吟遊し、元祿三年『江鮭子』と題して板行した中にある一卷で、芭蕉は二の裏の第四句より一座して居る。本文は右の『江鮭子』により『芭蕉翁俳諧集』その他を以て校合した。

秋立て干瓜辛き雨氣かな　及肩
敷居ふまへて戸をはづす月　珍碩
早稲稿をすぐり仕まへば用もなし　之道
人はしり寄辻の放下師　昌房
膳棚も淋しく見ゆる田舍旅　正秀
もがりつぶれし頃日の風　探志
ウ
畚提て船のこけらを拾ふらむ　碩
はすね頭の髪もたばねず　道
居[三]ならぶ增水時の夕まぐれ　房
神鳴おぢる娘かはゆき　秀
掛て置合羽の雫たりやまず　道
肌寒〳〵と博奕初める　碩
月の前酒にせわしき近喝佃　秀

茱を蒔なりと寺の傭人(ヤトヒ)　志
上はり(張)に鶏盗む臼の陰　房
日和にむきし霜の朝あけ　扇
どし／＼と板(二)椽ぬぐふ花盛　碩
荷ひつれたる春の(三)入草　道
ニオ
幅廣き砂川渡る長閑さよ　志
羽折そろ(揃)ゆる講参り也　扇
行にして朝起ならふ五六日　道
薬を休む喰ものの味　芭蕉
母親の仕立て見せる嫁入(よめり)夜着　秀
継にさし出る旦那山伏　房
江戸(四)棚(だな)を持て在所の門がまへ　碩
麦を煎香(いりか)に咽(のど)のかはきし　道
股引の間を蚤にせゝられて　志
宵の小雨に眞竹(五)生出る　扇
森々と閑居(カコキ)の伊豫(イヨス)簾もる月に　秀
こゝろを告る秋のひよどり　扇
ニウ
山畑の木練色づく風の音　蕉
石地の坂をかへる宮坊　碩
情(ジャウ)強き聟(ムコ)の大工嘲(アザケリ)して　道
かた(六)ぎを残す奈良の借上　蕉
野の廣さとし／＼花を植ひろげ　秀
がら／＼(七)とする春の曙　碩

（一）『芭蕉翁俳諧集』に「雑炊時の」
（二）同「椽板ぬぐふ」
（三）『稿珍鈔』に「春の刈草」
（四）『芭蕉翁俳諧集』に「江戸店を持て」
（五）『一葉集』に「眞竹生出る」
（六）『江鮭子』の本文に「かたぎ」と濁點あり。
（七）同「がら／＼と」と濁點あり。

夕顔の歌　元禄三年作

近江大津の蕉門尚白の歿後、其の筐底から發見された兩吟歌仙で、享保七年板の『夕顔の歌』に「此一巻に師筐笥に藏せること年ひさし、今

印板の次、表し侍りぬ」とある。『芭蕉翁俳諧集』は元祿四年の部に採錄して居るが、『一葉集』の推定によつて同三年の作と認めて『夕顔の歌』から本文を轉載した。

古寺翫月

月見する坐にうつくしき顔もなし　芭蕉
庭の柿の葉みの虫になれ　尚白
火桶ぬる窓の手際(二)を身にしめて　同
別當殿の古き扶持米　蕉
尾頭のめでたかりつる鹽小鯛　同
百家しめたる川の水上　白

ウ

寂寞と參る人なき藥師堂　同
雨の曇りに蚤蚊ねさせぬ　蕉
一むしろなぐれて殘る市の草　白
這かゝる子の飯つかむなり　蕉
いそがしとさがしかねたる油筒　白
ねぶと踏れてわかれ侘つゝ　蕉

月の前おさへてしゐる小屋の宿(二)　白
桔梗かるかや夜すがらの虫　蕉
(三)位散る髮は黄色に秋暮て　白
大工の損を祈る迁宮　蕉
(四)三石の猿樂やとふ花ざかり　白
八ッさがりより春の吹降　蕉

ニオ

鷹歸る白根に雲のひろがりて　白
うちのる馬にすくむ襟卷　蕉
商人も(五)腰に指たる綿秤　白
物よくしやべるいわらしの顔　同
蒜の香に寄もつかれぬ戀をして　蕉
暑氣によはる水無月の蚊屋　白
蜩の聲つくしたる玄關番　蕉
高宮ねぎる盆も來にけり　白
薏苡仁に栗の葉向の風たち(六)て　蕉
隨分細き小の三日月　白
たかとりの城にのぼれば一里半　蕉
さても鳴たるほとゝぎすかな　白

ニウ
西行の無言の時の夕間暮　蕉
　小草ちら〳〵野は遙なり　白
薄雪のやがて晴たる日の寒さ　同
　水汲かへて捨る宵の茶　蕉
窓あけて雀をいるゝ軒の花　同
　折掛垣にいろ〳〵の蝶　白

〔一〕『芭蕉翁俳諧集』に「手際の手にしみて」
〔二〕同「しひろ小屋のもの」
〔三〕同「信濃る髮は」
〔四〕『一葉集』に「三郷の猿樂」
〔五〕『芭蕉翁俳諧集』に「商人の擾に」
〔六〕『一葉集』に「葉向の風さわぐ」

猿蓑　其の三　元祿三年作

『猿蓑』の卷之五、歌仙のはじめに載せてある四吟である。去來・凡兆及び院の御所に勤めて居た史邦をまじへ、芭蕉の嚴格な捌きを受けたので句々孰れも緊張して、これ亦蕉門俳諧の壓卷の一と稱されて居る。『幽蘭集』は元祿四年の部に擧げてあるが、『猿蓑』の板行が同年夏であるから、前年即元祿三年の作とする『一葉集』に従ふ可きである。

鳶の羽も刷(カイツクロヒ)ぬ初しぐれ　去來
　一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉
股引(もゝひき)の朝からぬるゝ川こえて　凡兆
　たぬきをゝどす篠張の弓　史邦
まいら戸に蔦這かゝる宵の月　蕉
　人にもくれず名物の梨　來
ウ
書なぐる墨繪おかしく秋暮て　邦
　はきごゝろよきめりやすの足袋　兆
何事も無言の内はしづかなり　來
　里見え初て午の貝ふく　蕉
ほつれたる去年のねござのしたゝるく　兆
　芙蓉のはなのはら〳〵とちる　邦

吸物は先出來されしすいぜんじ(水前寺)　蕉
　三里あまりの道かゝえける　來
此春も廬同か男居なりにて　邦
　さし木つきたる月の朧夜　兆
苔ながら花に並ぶる手水鉢　蕉
　ひとり直りし今朝の腹立　來
いちどきに二日の物も喰て置(名)　兆
　雪げにさむき島の北風　邦
火ともしに暮れば登る峰の寺　來
　ほとゝぎす皆鳴仕舞たり　蕉
痩骨のまだ起直る力なき　邦
　隣をかりて車引こむ　兆
うき人を枳殻垣よりくゞらせん　蕉
　いまや別の刀さし出す　來
せはしげに櫛でかしらをかきちらし　兆
　おもひ切たる死ぐるひ見よ　邦
青天に有明月の朝ぼらけ　來
　湖水の秋の比良のはつ霜　蕉
(ウ)柴の戸や蕎麥ぬすまれて歌をよむ　邦
　ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ　兆
押合て寢ては又立つかりまくら　蕉
　たゝらの雲のまだ赤き空　來
一構鞦つくる窓のはな　兆
　枇杷の古葉に木の芽もえたつ　邦

去來九　芭蕉九　凡兆九　史邦九

鶴の音

元祿三年作

加賀の槐庵馬來が寛政三年出板した『鶴の音』の下卷に故人乙菊行脚中寫し置いた芭蕉の連句で、未發表の一卷として掲ぐ。但し二の表第二句は「此所一句失 本ノマヽ」とあるが、曉臺の『幽蘭集』には「髭のまばらに白うなるとし」といふ附句を存してゐる。『金蘭集』に「聽新堂序」といふ前文が發句の前にある。

ひき起す霜の薄や朝の門(一)　丈草
　柿の落葉をさがす焚付(二)　支考
(三)月にまつ狸の糞をしるしにて　翁
　いそやまかげに鵜の啼こゑ　史邦
雜てなほす旅の勞りの雨　去來
　かみまきそへてかろき笠の緒　野童
ウ
人の見ぬ時〴〵は泣ものおもひ　考
　こよひもふねにゆりおこす夢　草
山あひに蕨のきれたる枝つゞき　邦
　尾張をうつす木曾の大根　來(四)
(五)やれ残る茶碗ひとつはいそがしき　童
　かゝげてから(六)に呼る堂の火　來(七)
孤ばかり身に巻人を見知かね　草
　湯の時ふるみ夕ぐれの月　考
業笛をしふて合する秋の風　翁
　虫の啼べき庭をこしらへ　邦
花さくを旅すく人もなかりけり　來
　舟ならべたる桧本の春　童

二オ
北の方若狹さかひに晴る雪　考
　髭のまばらに白うなるとし　草
酒入の小さき折籠けなされて　邦
　ものゝかげより拜む行幸　翁
うれしさもつらさも藤太冑也　童
　膝おどろかす(九)鮓もなほらず　來
ひき切し桐の枕も手もとり(一〇)に　草
　薫物燒て雪にたす茶　考
かけ合に中て通る鉢たゝき　翁
　御番にあがる中立の門　邦
夕月をことゝ見習ふ山の端に　來
　盆の佛の名はあまたなり　童
二ウ(一一)垣合に湯殿の前の荻咲て　考
　小童のおつぎの千湯かはれる　草
傘たゝむ夫にも老の世話やかれ　邦
　經一口もしらぬ齋の日　翁
散花を掃あつめてぞ歸りけり(一三)　童
　何くつろぎて(一二)ながる陽炎　來

〔一〕『幽蘭集』に「すゝきや朝の内」、『一葉集』に「朝の月」。
〔二〕『一葉集』に「罠にまつ狸の」
〔三〕『幽蘭集』に「つかれの晝の雨」
〔四〕同、作者名「翁」
〔五〕同「われ殘る茶碗」
〔六〕同「からす啼る」
〔七〕『鶴の音』にこれより以下作者名を省く、今『一葉集』によつて補ふ。
〔八〕『幽蘭集』に「たゝのひとり也」
〔九〕『一葉集』に「膝おさらかす」
〔一〇〕『幽蘭集』に「まくらも手元にて」
〔一一〕同「垣間に湯殿」
〔一二〕『一葉集』に「あつめてそ歸りける」
〔一三〕『幽蘭集』に「なかのかけろふ」

一葉集　元祿三年作

此の卷は尾張名古屋の鼠彈が丈草・去來と共に一座して居る。『猿蓑』の机右日記には鼠彈の名はないから幻住庵の作とは思へない。『一葉集』以前の諸集に所見なき爲めそれらの疑問をたしかめ難い。仍て本文は『一葉集』により其の以後の『袖珍鈔』・『玉葉集』を以て校合した。

さびしさの底ぬけて降(ふる)霙哉　丈草
　ちら／＼光る鰷の埋火〔一〕　去來
鯨ひく沖に一濱家あけて　翁
　苗裁(うゑ)初(そむ)る砂留の松　鼠彈
つるかけの入口に月の打しらみ　來
　露におもたき族の帷子(かたびら)　草

ウ
有付の心にすまぬ初奉公　彈
　戸尻につまる馬の干草　翁
里富て實(げ)にも梅田の丘堤　草
　かゝる血くさき世の修行人(しゆぎやうにん)　來
つぶ足に草鞋(わらんぢ)ふとき二階堂　翁
　こもに火のもる舟ごしの小屋　彈
啼飛や塒をよそに月の鶴　來
　青き木實を絶す猿〔三〕ばう　草
踊場にかりて長吏の三千歩　彈

なさけしらずの袖を引さく　翁
冊子の葉末にぬるゝ花筐　草
しら木の樽のにほふ宜春　來
二オ
今川の武威を籠たる諷初　翁
泣て手をする夫の不屈き　彈
張籠に五百ばかりの米の錢　來
節句の宵に祭りかさなる　草
町端の埃掃ためて火に燃す　彈
死をわすれたる祖父の岩疊　翁
月まちの謂れ尊き臺の鹽　草
内裏の帳に入し牛の子　來
萩垣の川をさかひに原の末　翁
墓にものいふ秋は來にけり　彈
傘取にやるほどもなき月の雲　來
挑灯さわぐ切の狂言　草
二ウ
蠣がらの庇に辷る店の先　彈
肥て氣味よき家の寢姿　翁
ひとり子の分に過たる榮耀事　草
呼にもゆかぬ醫者の乘物　來
花咲て軒端明るき鼠壁　翁
他の國まで凡中に慰む　彈

〔一〕『玉葉集』に「糠の埋め火」
〔二〕同「猿嗛」として「バツ」と振り假名あり。

物の親　元祿三年作

京都上御靈社の別當景桃丸の家にて元祿三年の年忘れの會に卷いた歌仙である。此の發句は現に上御靈神社の境内に石碑となつて居る。水壺廬葛人は天明三年『物の親』に「芭蕉翁哥仙一卷はひさ度山櫻といへる集にいづるといへども、今は只名のみ殘りて」傳はらざるを傷め、再錄した次第を記して掲げて居る。『一葉集』の前文には「御靈別當景桃丸興行」とある。

上御靈にて

半日は神を友にやとし忘　芭蕉
雫に土民の供物納る　示石
水光る芦のふけはら鶴啼て　凡兆
闇の夜わたる表樺の聲(一)　去來
なまらずに言ふ月の都人　(二)景桃
秋に突折る虫喰の杖　乙州
ウ
質入よき岡部の早田赤らみて　史邦
里近くなる馬の足蹟(三)　玄哉
押わつて犬にくれけり灸もち　石
春加に出る僧の首途　蕉
白川や關屋の土をふし拜　來
右も左も荊蕀咲けり　兆
洗濯にやとはれありく賤が業　州
猫のいがみの聲もうらめし　桃
上はかみしもは下とて物おもひ　蕉
みな白張のふすま也けり　石
高麗人に名所を見する月と花　好春
春のうみ邊に鯛の濱燒　邦
二オ
晝下り寢たらぬ空に歸る鴈　兆
雨ほろ／＼と南吹なり　來
米餅隣ちからのものがたり　桃
日をかぞへても鴬は戻らず　蕉
くだりばら短夜ながら九十度　哉
おきへはづして蚤逃しける(四)　來
閑成窓に繪筆を引ちらし　邦
麓の里のおてゝ戀しき　兆
首取かよらるべきかの鳥鳴　石
野中に捨る錢の有たけ　春
月細く小雨にぬるゝ石地藏　邦
世は成次第いも燒て喰ふ　兆
二ウ
萩を子に薄を妻に家建て　蕉
あやの寐卷に匂ふ日の影(五)　石
泣／＼も小き草鞋求かね　來
たばこの形の風にうごける　哉
(六)眞向に花表を見こむ花盛　桃

霞にあへる鷹の羽遣ひ　邦

〔一〕『芭蕉翁俳諧集』に「おゝ禰の音」
〔二〕同、作者名「景桃丸」、『一葉集』にも同じく「景桃丸」とありて、『物の親』に「桃」とある異名を両集ともに「丸」として掲げたり。
〔三〕『一葉集』に「馬のあし音」
〔四〕同「蚤逃しけり」
〔五〕『芭蕉翁俳諧集』に「雛まきにうつる」
〔六〕同「眞白に花ちる」

猿蓑　其の四　元祿四年作

近江大津の乙州は芭蕉をその家に待遇し、母智月と共に蕉門作者として名を知られた。元祿四年所用あつて江戸に赴きし時、芭蕉の餞別吟を立句として此の連句を行つたのであるが、二の表第三句からは伊賀の作者が加はり、二の裏には江戸の嵐蘭、尾張の野水が附句を試みて居るので、一巻同時に成就したのではあるまいと思ふ。

餞ニ乙州東武行一

梅若菜まりこ(鞠子)の宿のとろゝ汁　芭蕉
かさ(笠)あたらしき春の曙　乙州
雲雀なく小田に土持比なれや　珍碩
しとぎ(粢)祝ふて下されにけり　素男
片隅に虫歯かゝえて暮の月　乙州
二階の客はたゝれたるあき　芭蕉
ウ 放やるうづら(鶉)の跡は見えもせず　素男
稲の葉延の力なきかぜ(風)　珍碩
ほつしん(發心)の初にこゆる(越)鈴鹿山　芭蕉
内藏頭かと呼聲はたれ(誰)　乙州
卯の刻の箕手に並ぶ小西方　珍碩
すみきる松のしづかなりけり　素男
萩の札すゝきの札によみなして　乙州
雀かたよる百舌鳥の一聲　智月
懐に手をあたゝむる秋の月　凡兆

汐さだまらぬ外の海づら　州
鑓の柄に立すがりたる花のくれ　去來
灰まきちらすからしなの跡　兆
ニオ
春の日に仕舞てかへる經机　正秀
店屋物くふ供の手がはり　來
汗ぬぐひ端のしるしの紺の糸　半殘
わかれせはしき鷄の下　土芳
大膽におもひくづれぬ戀をして　殘
身はぬれ紙の取所なき　芳
小刀の蛤刃なる細工ばこ　殘
棚に火ともす大年の夜　園風
こゝもとはおもふ便も須磨の浦　猿雖
むね打合せ着たるかたぎぬ　殘
此夏もかなめをくゝる破扇　風
醤油ねさせてしばし月見る　雖
ニウ
咳聲の隣はちかき椽づたひ　芳
添へばそふほどこくめんな顔　風
形なき繪を習ひたる會津盆　嵐蘭
うす雪かゝる竹の割下駄　史邦
花に又ことしのつれも定らず　野水
雛の袂を染るはるかぜ　羽紅

芭蕉三　乙州五　土芳三　珍碩三　園風三
素男三　猿雖二　智月一　嵐蘭一　凡兆二
史邦一　去來二　野水一　正秀一　羽紅一
半殘四

勸進牒　元祿四年作

路通の『勸進牒』は『猿蓑』と同じく元祿四年井筒屋の出板である。前記「梅若菜」の卷を收めて居るが、二の表第三句からは全く別卷である。按ずるに二の表第二句までは近江にて興行され、其の殘りの卷を乙州が江戸へ携へ來つて、江戸の作者と共に卷き足して此の一卷となり、一方芭蕉は伊賀に未定稿の卷を逐つて前記『猿蓑』の一卷となつたのであらう。『勸進牒』の後半

は芭蕉の捌きを受けたのでなからうか。右の關係から参考の爲め特に後半の巻を區別してこゝに載せる。

乙州が江戸へ起(マヽ)くとき

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁　芭蕉
笠あたらしき春のあけぼの　乙州
雲雀啼小田に土持ころなれや　珍碩
しとぎいはうて下されにけり　素男
片隅に虫齒かゝえて暮の月　乙州
二階の客はたゝれたるあき　芭蕉
はなちやる鶉の跡は見えもせず　素男
稲の葉延のちからなき風　珍碩
發心の初にこもる鈴鹿やま　芭蕉
内藏頭かとよふ聲にたれ　乙州
卯の刻の簑の手に並ぶ小西方　珍碩
すみきる松のしづかなりけり　素男
萩の札すゝきのふたによみなして　乙州
雀かたよる百舌鳥の一こゑ　智月

懐に手をあたゝむる秋の月　凡兆
汐さだまらぬ外の海づら　乙州
鑓の柄に立すがりたるはなのくれ　去來
灰まきちらすからしなのあと　凡兆
春の日に仕舞てかへる經机　正秀
店屋もの喰供の手がにり　去來
肩重きさかり衣のうそよごれ(汚)　探志
繼の作繪(つくりゑ)つかふまつらせ　其角
しづかなる杉を拜めば三輪の神　路通
出し入(いれ)やすきはやみちの錢　曲水
まぎれずに返す芝居のたばこ盆　其角
蝋の面つる家が淋しき　乙州
樂々とやはら教へて五人口　曲水
よめかぬれども日蓮(にちれん)の御書(ごしよ)　路通
行(ゆき)月(つき)の牛につけたる鹽俵　里東
松にすゝきを二方荒神　芹花
畑もの一口なすび(茄子)もぎとりて　キ角
かりなる物は島原の坪　素葉

あそこ爰(二)ぬひなをしたる戀衣　塞水
　二番煎じは茶のはながなき　落荷
散花にさそふて見れど誰もこず　路通
　しきりに雉子のほろゝうつ朝　至陰

春と秋　元祿四年作

芭蕉の通家と稱する氷上亭松村桃鏡は「元祿の歌仙ふたつ、春の卷はいまだ世に彫刻ならざるもの」といひて此の歌仙を『春と秋』に入れて寶暦十二年十月出板した。『芭蕉翁俳諧集』は元祿六年の作とし、『一葉集』は同四年の部に收めてある。本文は『春と秋』作の年代は『一葉集』の推定に從つて爰に掲ぐ。

水仙は見るまを春に得たりけり　路通
　窓のほそめに開(ひら)く歳旦　杏(一)沓

我猫に野等猫(二)とをる鳴侘て　翁
　ほし忘れたるきぬ張の月　龜(三)仙
槿(あさがほ)にいらぬ糸爪のからみあひ　泉(四)川
　仁といはれてわたる白つゆ　執筆
ウ
鉀入に茶簀も已が名を替て　沓
　戀に古風の殘る奥筋　翁
めづらしき哥かき付(つけ)て覺ゆらむ　仙
　形(なり)もおかしうそだつ賤の子　通
(五)此里に持つたへたる布袴　翁
　餅そなへ置く名月の空　沓
はら〳〵と葉廣柏の露のをと(音)　川
　一むれあくる鴈の朝啄　仙
折ふしは鹽屋まで來る物もらひ　通
　亂より後は知らぬ年號　翁
猪猿や無下に見殘す花のおく　川
　雪のふ(六)すまをまくる春風　通
名
此石のうへを浮世にとし取て　翁
　彼岸にいると鐘聞ゆなり　仙

ゆき逢ふ中に我子に似たるなし　杏
　いはぬおもひのしるゝ溜息　川
元ゆひのほつれてかゝる衣かつぎ　通
　人のなさけを〔七〕つたふ柴かく　翁
語〔八〕つゝ萩さく秋の戀しさを　仙
　陀袋さがす木曾の橡の實　通
月の宿亭主盃持・いでよ　翁
　朽たる舟のそこ作りけり　杏
唐人の知れぬ詞にうなづきて　川
　しばらく俗に身をかゆる〔九〕僧　翁
飼立し鳥も頃日見えぬなり　通
　塘の家を降うづむ雪　川
あけぼのは筏の上にたく篝　仙
　あかきかしらを撫る青柳　通
華〔一〇〕さけり靜が舞を形見にて　翁
　うぐひすあそぶ中だちの聲　杏

〔一〕『一葉集』に作者名「殘香」

〔二〕『芭蕉翁俳諧集』に「野等猫とまる」、『芭蕉袖草紙』に「野等猫通ふ」

〔三〕『一葉集』に作者名「此筋」

〔四〕同、作者名「千川」以下本文の作者名杏とあるのは「香」、仙とあるは「筋」、川とあるは千川の「川」となり居れり。

〔五〕『芭蕉袖草紙』に「片里に持つたへ」

〔六〕同「雪の衾を」

〔七〕同「なさけつたふ柑柴」、『一葉集』に「ほだに焚く」

〔八〕『芭蕉袖草紙』に「語り出づ萩さく」、『一葉集』に「かたりたし」

〔九〕『芭蕉翁俳諧集』に「身をかへる僧」

〔一〇〕同「花ざかり靜が」

眞向翁

元祿四年作

風化坊の『眞向翁』（安永二年の板行で此の連句を載せてゐる。『芭蕉袖草紙』は桃鏡の『春さ秋』から引用して居る。『春さ秋』は寶曆十二年以後數册出板されてゐるので、此の歌仙のある

分は第何編か知り得ない。仍つて本文は『眞向翁』より再錄し、『芭蕉翁俳諧集』並に『芭蕉袖草紙』を參考して異同を卷末に註記した。

衣更して梅改むる匂ひかな　曾良
蝶めづらしき入口の松(一)　前川
掃よせて消る雪をやかこふ覽　路通
石の窪に墨を摺けり　はせを
月移る臺の芭を踏敷て　川
のた打猪の歸る芋畑　良
ウ
賤の子が待戀習ふ秋の風　蕉
あかね染干す窓のおも影　通
あぢきなく落殘りたる齒の脇　川
寺の物かる罪の深さよ　良
振あげて杖あてられぬ犬の聲　通
習のりはつを町にひろめん　川
手作りの酒の辛みも付にけり　良
月も今宵と見(三)ぬ驁馬の市　蕉
狩衣を砧のぬしに打くれて　通
我がおさな名を君はしら(四)ずや　蕉
花の顏室の湊(五)に泣せけり　通
古巣の鳩の子を捨たぬ戀(六)　良
ナオ
講堂に僧立ならぶ春の暮　川
流れにたつ(七)る惡水の札　良
(八)尸に生膾箸ならす注連の內　蕉
こぼるゝ星の寒き霜風　通
(九)宇葺も哀成けり不破の關　良
植おくれたる田の中の小田　川
子規瘦(一〇)てや空に鳴つらん　通
我が物おもひ浮世壹人　蕉
此戀をいわんとすればどもりにて　川
打れて歸る中の戶の御簾　良
柊木に日をさす程の星(一一)月夜　蕉
つらのをかしき谷の梟　通
ナウ
火を燒ば岩(一二)の洞にも冬籠　良
國(一三)を半に殘す順禮　蕉

衰ふる(一四)父の白髪を氣にかけて　通
折にのせたる草の初物　川
入過(すぎ)て餘りよし野の花の奥　蕉
何が何やらはるのしら雲　川

(一)『一葉集』に「入口の杉」
(二)『芭蕉袖草紙』に作者名「嗒山」、以下本文作者名の川とあるは同書に塔山の「山」となり居れり。
(三)『芭蕉翁俳諧集』に「見ぬ馬の市」、『芭蕉袖草紙』に「今宵と見ん驢馬の市」
(四)『芭蕉袖草紙』に「君は覺ゆや」
(五)同「室の泊に」
(六)同「子な持ぬ蕾」、『芭蕉翁俳諧集』に「持ぬこゑ」
(七)『一葉集』に「なかれにたてる」
(八)『芭蕉袖草紙』に「形代になき箸ならす」
(九)『芭蕉翁俳諧集』に「取葬も哀也けり」、『芭蕉袖草紙』に「やれふきも」、『一葉集』に「軒葺も」
(一〇)『芭蕉袖草紙』に「やせて空にや」
(一一)『一葉集』に「夕月夜」
(一二)『芭蕉翁俳諧集』に「岩根の洞に」
(一三)同「國も半に」
(一四)『芭蕉袖草紙』に「祖父の白髪を」

折つゝじ

元祿四年作

陽明舍文雄の『折つゝじ』に「左の一卷は落梅舍主人、長崎往來の時、此驛(筑前博多)にやどりして親しく書殘されし世の俤のゆかしくてしるす」といふ前文附で此の歌仙を擧げ、安永元年板行されてゐるが、道彦・華兆・宗讃共撰の『あみだ坊』にも「たれが集にももれたるさて、ある人のおくれるを爰にあぐ」とて寛政五年再刻して居る。本文は『折つゝじ』により『あみだ坊』及び『芭蕉翁俳諧集』その他に所藏の卷を以て校合した。

蝠ならぶはや初秋の(一)日數かな　(二)去來
葛(三)もうら吹帷子の袂　舍
小灯を(四)障らぬ萩にかけ捨て　路通
釣して來たる魚の腸(はらわた)　(五)丈草
一通りみ(六)ぞれにくもる朝月に　(七)惟然

只そろ／＼と脊中打する　(七)來

ウ
打明ていはれぬ人を思ひかね　(八)翁

手水つかひに出る面影　(九)通

物干のはづれかゝりて危けれ　(一〇)草

取そろへ〔揃〕たる芝の小肴　(一一)然

夕まぐれ烟管お〔落〕として立(一二)歸り　(一三)來

泥うちかはす早乙女のざれ　翁

石佛いづれか〔欠〕けぬはなかりけり　(一四)通

牛の骨にて牛作らばや　(一五)草

酒の徳かぞへあけては醉ふ〔臥〕さり　(一六)然

室の八島に尋ねあひ(一七)つゝ　(一八)來

みちのくは花より月のさま／＼に　(一九)翁

啞の眞似するこちの鶯　(二〇)通

二
餅好の友をほしがる春の雨　草

衣(二一)小刀にしむる卷稿　(二二)然

物申は誰(二三)ぞと窓に顏出して　(二四)來

瘧(二五)してとるあとのやすさよ　(二六)翁

片足づゝ拾ひ次第の古草履　(二七)通

あす作らふと雪になく鳥　草

供多く連しも駕の靜也(二八)　(二九)然

畑の中に落(三〇)るいなづま　(三一)來

崩れ井に熊追落(三二)す夕月夜　(三三)翁

松(三四)割鑿(三五)の見えぬ露けさ　(三六)通

やさしげに手打かぶりを教そめ　草

御簾の外面に並ぶ侍(三七)　(三八)然

二ウ
ほとゝぎす聲／＼鳴て通りけり　(三七)來

烟の中に下すはや桶　(三八)翁

此島も片側ばかり立そろ〔揃〕へ(三九)　(四〇)通

食莚(四一)ほどく菅笠の上　草

佛にはかた見の花を奉る　(四二)然

菜をつむ髮の白き曙　(四三)來

〔一〕『あみだ坊』に「初秋の朝日かな」

〔二〕『一葉集』に作者名「野童」

〔三〕『あみだ坊』に「葛のうら吹」

〔四〕同「小燈をよはらぬ萩に拭捨て」

〔五〕『一葉集』に作者名「史邦」

〔六〕同「丈草」

〔七〕 同「通」
〔八〕 同「翁」
〔九〕 同「童」
〔一〇〕 同「邦」
〔一一〕 同「草」
〔一二〕 『芭蕉翁草紙』に「きせる落して立もどり」
〔一三〕 『一葉集』に作者名「通」
〔一四〕 同「童」
〔一五〕 同「邦」
〔一六〕 同「通」
〔一七〕 『あみだ坊』に「芋ほり逢けり」
〔一八〕 同「翁」
〔一九〕 『一葉集』に「童」
〔二〇〕 同「邦」
〔二一〕 『芭蕉翁草紙』に「我小力に」
〔二二〕 『一葉集』に作者名「通」
〔二三〕 『あみだ坊』に「誰かさ窓に」
〔二四〕 『一葉集』に「翁」
〔二五〕 『あみだ坊』に「艱修してゐる」
〔二六〕 『一葉集』に「童」
〔二七〕 同「邦」
〔二八〕 『あみだ坊』に「鶯の静にて」
〔二九〕 『一葉集』に「通」
〔三〇〕 『あみだ坊』に「うつるいなづま」
〔三一〕 『一葉集』に「翁」
〔三二〕 『芭蕉俳諧集』に「熊おひ入れし」
〔三三〕 『一葉集』に「童」
〔三四〕 『あみだ坊』に「総に鑿の」
〔三五〕 『一葉集』に「邦」
〔三六〕 同「通」
〔三七〕 同「翁」
〔三八〕 同「童」
〔三九〕 『芭蕉翁草紙』に「片側斗り立そろひ」
〔四〇〕 『一葉集』に「邦」
〔四一〕 同「御莅ひらく」
〔四二〕 同「通」
〔四三〕 同「執筆」

芭蕉翁誹諧集

元禄四年作

近江膳所の作者が中心の八吟歌仙である。『芭蕉翁俳諧集』以前の単行本に出たるを見ない。仍って同書を本文とし、『真の枝折』・『芭蕉翁草紙』『金蘭集』及び『一葉集』を以て校合した。

御明(みあか)しの消て夜寒や轡むし　探志
月さしかゝる庭のこね土　正秀

旅の空國は菜をまく頃ならん　呂房
手拭帯(一)のしめぢからなき　盤子
廣敷の草履を人に直させて　翁
又こがしたる魚の焼やう　及肩
ウ
窮屈に(二)顋鬚ばかりはやし置　楚江
轡をすかす赤金の鍔　志
山づたひ伊賀の上野(三)の年ふりて　秀
狂哥の集をあみかゝりけり　翁
出來合のもの(四)ふるまはん初しぐれ　子
小鳥とび立(五)そば垣のうへ　房
名月にかりそこなひし戻り馬　秀
新酒の隣のほき〳〵として　江
語る事なれけば君(六)にさし向ひ　翁
手のふるふとて書なぐる文　志
咲花のはれに疊の表がへ　肩
傘ほせる宵の春雨　房
名
かへる鴈おのが一くみ打つれて　秀
日高にとまる足よわの旅　子

見るばかり細工過たるもみ佛　江
潤水を呑て胸にさはらず　翁
隱家はもの靜なる勢田の奥　房
鹿のおどしのつゞく松明　秀
むさくさと太鼓喵しに月更て　志
名残を惜む庭のらん(七)菊　吟松
みちのくや勅の草紙を書仕舞　子
心にたらぬかろき膳立　秀
相組に男世帯のき(八)れいずき　房
・
たはるゝことに法華あらそふ　翁
・
ウ
一振の關より西は能登の國　秀
淨瑠璃やめて説經にする　子
風筋に片はら町を吹まくり　肩
馬にのりても鑓をかたげる　江
誰が藏ぞ白土付るはなの春　房
海から見へてのどかなる松(九)　翁

〔一〕『奥の枝折』に「手拭帯に」

（二）同「煩悶斗はやし置」
（三）『芭蕉袖草紙』に「上野。年ふりて」
（四）『奥の枝折』に「もの振賣ん」
（五）同「袖垣のうへ」
（六）同「君さざし向ひ」
（七）同「庭の蘭菊」、『芭蕉袖草紙』に「庭の亂菊」
（八）『奥の枝折』に「男世帯の氣の安さ」
（九）『芭蕉袖草紙』に「長閑成石」

星合集　元祿四年作

美作の俳人杉山輪雪は「此一卷は先拙の壯裏に（本ノマヽ）ひめおけるなり、いまだ世の梓行に見ざるによりし」寶永六年其の著『星合集』に載せて板行した。朱拙は別に『ばせを盥』の撰者有隣にも此の卷を與へたので、同書に「成田氏の家臣前島臨岐の主に撰集を勧められて、丈草子よりおくり置れける」ものである事を記して收錄して居る。

牛部屋に蚊の聲よはし秋の風　芭蕉
下樋の上に蒲萄棚(一)重る　路(二)通
酒しぼる雫ながらに月暮て　史邦
扇四五本書なぐりけり　丈草
呉竹に置直したる凉み脉　去來
蓮の卷葉のとけかゝる比　野童
ウ
笈摺もまたあたらしく懸連て　正秀
遊行の輿をおがむ尊さ　芭蕉
休み日も瘧ふるひの顏よはく　路通
滯くむ嗅の隣いぶせき　史邦
生乾なる裏打紙をすかしみる　丈草
いつも露もつ萩の下枝(三)　去來
秋立て又一しきり茄子汁　野童
薄縁たゝく僧堂の月　正秀
分別の外を書る筆のわれ　芭蕉
瘤につられて浮世さりけり(四)　路通
散時にならねばちらぬ花の色　史邦
畑(五)をふまるゝ春ぞくるしき　丈草

二オ
人情常陸の國は寒かへり　　来
　産月までも輕きおも影　　童
うき事を辻井に語る隙もなし　　秀
　紺買客のかえる衣〴〵　　蕉
硝子に減際見(六)する薬酒　　通
　橘咲ばむかし泣るゝ　　邦
草むらに寝所かゆる行脚僧　　草
　明石の城の太鼓打出す　　来
大方はおなじやうなる船印　　童
　力に似せぬ礫かひなき　　秀
ゆるされて女の中の音頭取　　蕉
　藪潜られぬ忍路の月　　通
二ウ
匂ひ水しだるく成(七)て初嵐　　邦
　又も鼬の小鼠おひ出す　　草
手に持し物見失ふいそがしさ　　来
　油揚せぬ庵は痩たり　　童
うぐひすの花には寐じと高ぶりて　　秀
　柳は風のたすけてぞふく　　執筆

〔一〕『芭蕉袖草紙』に「蒲萄たなつる」
〔二〕『ばせを盥』に作者名「洒堂」、以下同書に本文の作者名路通は「洒堂」となり居れり。
〔三〕『ばせを盥』に「萩の下露」、『桃の白實』に「萩の下陰」
〔四〕同「うき世さり行」
〔五〕『桃の白實』に「畠踏るゝ」
〔六〕『ばせを盥』に「へり際見ゆる」、『桃の白實』に「へる際見ゆる」
〔七〕『桃の白實』に「したるくなりし」

堅田集

元祿四年作

此の卷は芭蕉の既望賦が元祿三年か或は四年の作かを決定する有力な材料であるが、寛政十年近江堅田の俳人が路通筆草稿より再錄し『堅田集』に收めた卷末に「元祿四年辛未仲秋」とあるので四年說の正しい事が分る。讃岐の俳人吟墨は『既望集』に「堅田既望」として載せ寶永六年板行してゐる。爰には『堅田集』を本文として

揭ぐ。

やすくと出ていざよふ月の雲　はせを
舟をならべて置渡す露　成秀
ひらめきて咲(さき)も揃はぬ萩の葉に　路通
鍋こそげたる音のせはしき　丈艸
とろくと眠ればおこる駕籠の酔(一)　惟然
城とりまはす夕立の影(二)　猪睡
ウ
我ものに手馴るゝ鋤(すき)(三)の心能(よし)　正則
石の鳥井の書付(かきつけ)をよむ　楚江
鴻(三)鶴の森を見かけてきほひ行(ゆく)　勝重
衾つゞり(四)し日はしぐれけり　葦香
拍子木に物くふ僧のうちつれて　兎茶
瀧をへだ(五)つる谷の大竹　成秀(六)
月かげにこなし置たる臼の上　正幸(七)
只ちらくときりぐす啼　重吉(八)
襟(つり)こはき袴に秋をうちうらみ　重氏(九)
鬢の白髮を今朝見付たり　翁

としぐに花にならびし友の數　丈艸
きしる車もせかぬ春の日　正則
二オ
鳶の巣の下はあくた(芥)(一〇)も吹落し　猪睡
さゝやくことのもろ(一一)聞えなり　正幸
藪(たかき)ツ、文書くうちは戸をさして　楚江
いくらの山にそふて來る水　兎茶
汗くさき人は必(かなら)ず遠慮なき　葦香
せめてしばしもきせる(煙管)はなさず　盤子(一二)
風やみてながるゝ儘の渡し船　成秀
只一しほとたのむ染もの　路通
はしぐは古き都の荒殘り　紫菜
月見をあてにやがて旅だつ　丈艸
秋風に網の岩やく石の竈(くど)　兎茶
粟ひるぬかの夕淋しき　猪睡
二ウ
片輪なる子は哀れさに捨殘し　路通
身細き太刀の反る事を見よ(一三)　重成
長椽に銀(土器)かはらけをうちくだき　柳流
郭公鳴て夜は明にけり　成秀

職人のしなあらはせる花の陰　絃五
南面にめぐむわか艸　葦香

〔一〕『既望集』に「睡れば直る」
〔二〕同「手馴る鍬の」
〔三〕同「鶺鴒の森ゐ見かけて競ひ行」
〔四〕同「衾つくりし」
〔五〕同「瀧をへだてる」
〔六〕同、作者名「正秀」
〔七〕同「則」
〔八〕同「重氏」
〔九〕同「重古」
〔一〇〕同「下は芥を」
〔一一〕同「もろき聲なり」
〔一二〕同「然」
〔一三〕同「太刀のそる方を見よ」

菊の露　元祿四年作

花屋庵奇淵、校訂本『芭蕉袑草紙』は既に再三引用したが、文化八年の板本で杉風舊藏書に基いたといふ事で、此の卷の出所として『菊の露』を擧げて居る。『芭蕉翁俳諧集』と對校して同書に引用せるものを本文とした。大節の『俳諧犬古今』は文化五年板で、本卷の半歌仙を收めてあるのでそれも參照した。

うるはしき稻の穗なみの朝日かな　路通
鳫もはなれず溜池の水　昌房
白壁の内より碪打そめて　芭蕉
蠟燭の火をもろふ夕月　正秀
たのまれて銀杏の廣葉〔一〕うち落す　野徑
すがりて乳をしほるゑのころ【狗】　乙州
ウ
關守にはやなじみたる噺數寄　畫好
身は沓賣と成りて悟りし　珍碩
あたま【天窓】つき春と秋とは定まらず　盤子
金堀に入る洞のとぼし〔二〕火　里東
田の中にいくつも鶴の打並び　探志
芝居の札の米集めける〔三〕　游刀

御嶽(みたけ)より駕籠〔四〕も不自由に旅の道　秀
　夜寒にしむる帶の綻(ほころ)び　通
月影に二階の軒をつき上(あげ)て　好
　蕎麥の匂〔五〕ひのむせる下積　東
かげろふや海手の花の盛(さか)り也　刀
　東(こ)風(ち)吹しぼる〔六〕菊水の簇　子

二オ
ひよ鳥の囀ながら狂ふらむ　秀
　豆(と)腐(ふ)上手にあげて客待　碩
うらみある義理を語りて泪ぐむ　州
　曇れと捨しもとの姿見　通
うすやうに書てもふるふ筆の跡　翁
　汐〔七〕ひさしくる月の廻(くわい)廊　秀
暮の露岩屋の坊主打のぞき　子
　みなおのが音を鳴からす虫　州
弓と矢もまだいたいけに蹲(ひざま)づき　碩
　しらが(白髪)さし出す御雛(ひな)の合目(あはせめ)　翁
ほとゝぎす奇麗に膳を組立て　好
　夜の間にのびる筍(たけのこ)の篠　徑

二ウ
書(ふみ)はまづ三史文選〔八〕くづし出し　通
　座禄おゝやる晝のうたゝ寐　刀
おさへたる鼠を終(つひ)に取はづし　房
　草履踏こむ居風呂の漏　子
内裡たつほどは在家を花の宿　碩
　乙鳥の出入賑やかな聲　徑

〔一〕『大古今』に「銀杏の落葉」
〔二〕同「洞のともし火」
〔三〕同「米あつめけり」
〔四〕同「駕不自由に」
〔五〕『芭蕉翁俳諧集』に「匂ひにむせて」
〔六〕同「東風吹しなる」
〔七〕同「潮さし來る」
〔八〕同「文選うつし書」

茶草子　元祿四年作

支考の『笈日記』に三河新城の太田白雪亭でその子二人に、桃先・桃後の號を與へたとある。

元祿四年の冬、近江の幻住庵より江戸に歸る途中で支考・桃隣の二門人を隨行さして居た。その時の白雪亭に於ける歌仙である。白雪の長子桃先と白雪の甥雪丸が元祿十二年『茶草子』にこれを掲げて出板した。本文は同書から直接再錄して『芭蕉翁俳諧集』その他を參照校合した。

元祿辛未冬

共にほひ桃より白し水仙花　翁
土屋藁屋のならぶ薄雪　白雪
朝から嘴ならす鳥の來て　桃隣
はやう野分の吹てとる也　芦鴈
洗濯のいとまをもらふ宵の月　支考
野郎にわたすきりぎりす籠　以之

ウ

寢所はもらひ集た繪を押て　扇車
なにうたひやら鼻聲でやる　淡水
わかれ途の出ばつた石に腰かくる　桃先
藪いたちめが仰山に出た　桃後
水汲に日こすりながら戸を明て　桃鯉
みやこの方もさだまらぬ秋　雪丸
華すゝきわかき坊主の物ぐるひ　白雪
額やぶれたる白雲の月　翁
猪の追れてかへる哀なり　淡水
茶ばかりのむでけふも旅立　支考
散華にうすき化粧のところはげ　以之
二月の雛もとつけもなひ　桃先

二オ

おもしろき霞のなかのこけら屋ね　芦鴈
小鯛も鮨もとれるいせうら　桃隣
黑崎の濱はからすの鳴つれて　桃後
雨にならふか西のつかへし　雪丸
かご作るそばにあぶなく目をふさぎ　桃鯉
松葉の埃の煮る鍋蓋　翁
雉子笛を首に懸たる狩の供　同
雪ふりこむでけふも鳴瀧　桃隣
にこにこと生死涅槃の夢覺て　支考
院もしらがを侘たまひけり　桃後

やはらかに鶴鳴ふかす夜の月　雪丸
須磨のきぬたは下手でもつたぞ　翁
ニウ
あの家ははやう新酒をしぼらるゝ　以之
馬つなひだる門の竹垣　芦鴈
干物の莚かゝゆる一しぐれ　桃先 〔五〕
顔のしかんで黒キ小世悴　白雪 〔六〕
咲花に獅子のさゝらを摺ならし　扇車
むらをはさんで肥る若松　淡水

〔一〕『一葉集』に「別れ路の出張た石に腰かける」
〔二〕『芭蕉袖草紙』に「みやこのさたも」
〔三〕『芭蕉翁俳諧集』に「雛のさつゝけもない」
〔四〕『芭蕉袖草紙』に「小鯛と鰆の」
〔五〕同「莚かゝえる」
〔六〕『芭蕉翁俳諧集』に「顔もしかみて」

誹諧曾我　元禄四年作

前巻と同じく元禄四年冬三河新城で興行した巻で白雪の著『誹諧曾我』の第一巻にあり、元禄十二年京の井筒屋から出板になつて居る。作者も前巻と同じ顔触で十二吟の歌仙である。本文は『誹諧曾我』から轉錄し校合には『桃の白實』その他を参考に用ひた。

此里は山を四面や冬籠り　支考
青うて細くけぶる炭竈　淡水 〔一〕
いぶせさは衞一種の旅をして　白雪
波に飛込船の遠浅　雪丸
降〳〵て今日は無疵に出ル月　芦鴈
残る暑さの門の行水　桃隣
ウ
小地頭の前に並居ル荻薄　扇車
終リのしれぬ下手の舞〳〵　以之
鈴馬の拍子に乗つて口を取ル　桃先 〔二〕
代織を祈ル九世の觀音　桃後
侘人に明ケてほどこす小袖櫃　芭蕉 〔三〕
あられはらめく谷の笹原　考 〔四〕

熊の子の親を尋ねて鳴て居ル　隣
　切ッて附たる庇の三ヶ月　鴈
寒初る圍爐裏普請に取かゝり　丸
　鶉の籠は形がきはまる　車
花散りて籾は二葉に萠上り(五)　之
　春ともいはぬ火屋の白幕　桃鯉
ニオ
やう〳〵と峠(六)にかゝる雲霞　水
　複子のしめる味噌の曲物　蕉
手を書と童に筆をとらせける　同
　(七)明松(アカシノマツ)を廻す夜仕事　雪
海少へだゝる水のしは(八)ゝゆき　後
　秋風すごし義朝の墓　先
そば切(九)のあれ行儘に道附て　鯉
　小づらのにくき衣〳〵の月　丸
さま〳〵の戀は馬刀貝忘レ貝　考
　乞食と成て夫婦かたらふ　蕉
さしむくる脊中の雪を打はらひ　鴈
　きれたる弦(一〇)を押なほす弓　之
ニウ
素湯一ッ御寺見かけて呼りけり　車
　荷を負ながら牛は寐ころぶ　後
めた〳〵と日向タの方の花盛リ　雪
　柳の糸(一一)がひたる石鉢　水
念佛にすゝめこみたる蝶の夢(一二)　先
　又幾度の彌生目出度　隣

(一)『桃の白實』に「青みて細く」
(二) 同「鈴音の拍子に乗馬口を取」
(三) 同「明ては取らす」
(四) 同「宮の笹原」
(五) 同「二葉の萠上る」
(六)『一葉集』に「漸さ塔下に」
(七)『桃の白實』に「松明を割夜の仕事に」
(八) 同「隔つる水のしほはゆき」
(九) 同「蕎麥畑あれ行」
(一〇) 同「絃を引直す弓」
(一一) 同「柳の糸ゝ」
(一二)『一葉集』に「蝶の夫」

百囀　　元祿五年作

あれ程澤山の撰集をなしたる考は此の兩吟歌仙を發表せず、延享三年に至り半楊庵竹が「我友羽沼何がしの閑居にあそび侍る折からあるじの云、我家に芭蕉翁・東花坊の兩吟を持來れりとてほのめかし見せられける。まことに五十餘年の舊稿をまのあたり吟詠する事」は風雅の冥加であるといつて、其の著『百囀』に板行してより流布されたのである。

鶯や餅に糞する縁の先　翁
日は眞すぐに晝のあたゝか　支考
藪入は只やぶ入と見せかけて　同
慰みながら箒もつ也　翁
村がらす月夜〳〵に啼て居る　同
かぜも吹ぬに笹の葉の露（一）　考

ウ
歌の會すみかゝるとき肌寒き　同
臺子の間にも居る侍　翁
くはら〳〵と音する物を聞にける（二）　同
瓦がよれば諸願成就　同
二三年たつのは夢の其ごとく　考
髪をはやして見違る顔　同
坐敷には行燈つける暮の月　翁
機織るきぬは角力取の帶　同
何所の田へゆくやら鴈の鳴連て　考
夜明の星のまだひとつ有　同
御供に常陸之介もはな心　翁
白いつゝじに紅のとび入　同

ニオ
陽炎の傘ほす側に燃にけり（三）　考
手紙をもつて人の名を問ふ　同
本膳が出ればおの〳〵かしこまり　翁
金を崩して錢をつみ置　同
松風のずん〳〵と吹く夜半過　考
捨子があると告る門番　翁

湯は水のやうに成たる手水桶(三)　孝
　馬一疋に留主を預ける　同
小調市(こでつち)の時から居たる奉公人　翁
　瘤がなければ女房取もつ　同
むだ口に涼しい月の入かゝり　孝
　あの榎から蚊柱がたつ　同
二ウ
二の丸の光かゞやく金屏風　翁
　雨もあがつて(四)本の朔日　同
さら〳〵と茶漬の食(めし)を喰じまひ　孝
　口上いふてかへす若黨　同
氏神の花も盛に咲そろひ　翁
　鳥居(五)を越してのびる青柳　同

〔一〕『芭蕉翁俳諧集』に「物を闇にやる」
〔二〕『一葉集』に「側にもえあがり」
〔三〕同「成たる手水鉢」
〔四〕同「雨もあがりて」
〔五〕『芭蕉翁俳諧集』に「鳥居にこして」

未來記　元祿五年作

雲中庵大島蓼太が安永三年『未來記』を板行して世に弘めた三吟歌仙である。周竹の序に貴家の文庫にありしを懇望して蓼太の寫せる事を述べ「其書は未來記と題し、序は仙化、文と哥仙は其角の自筆也」と記してある。此の三吟は蓼太の僞作といふ事を古くから言ひ傳へられるが、僞作と決定すべき資料は何等ないので、たゞ口碑のみを信じて抹殺するに忍びない。『未來記』から直接再錄した。

草庵に桃櫻あり門人に其角・嵐雪をもてり

兩の手に桃とさくらや艸の餅　芭蕉翁
　翁に馴し蝶鳥の兒(ちご)　嵐雪
野屋敷の火繩もゆるすかけあふに　其角

山のあなたの鐘聞ゆ也　翁
のり下に月毛の駒の有明て　雪
風ひやゝかにきれ〴〵の雲　角
ウ　傍輩に相撲の打身いたはられ　翁
帯ほころばす金のたしなみ　雪
綾言さへ初瀬籠の南無大慈〔一〕　角
まめ蒔しまふ〔二〕宵過の東風　翁
酒さます杖にかほそき禿ども　雪
剝やともらふ老の紅裏　角
負軍功者に引てかへる也　翁
ふたゝび暮るゝ霧の明方　雪
見盡して蚊屋へ這入月の友　角
菴の雜水をすゝる小男鹿　翁
一通彼岸の華の咲ちりて　雪
日永にめぐる嵯峨や太秦　角
名オ　あたゝかに綿子とらせん弱法師　雪
御醫者まじりに伽衆立るゝ　翁
鰭を波よ〳〵と追もどし　角
てうちん見ゆる町の入口　雪
女房よぶ米屋の亭主若やぎて　翁
高田の喧咄はやむかしなり　角
夏寒き闇の孫六ぬきはなし　雪
たしなき風の石菖へ來る　翁
牛の子の牛にせかるゝ市の中　角
江湖披露の田舍六尺　雪
どつぶりと夜に入月の鳥羽繩手　翁
いづくとまりと鳴の行らん　雪
ナウ　糊たちに四手うつ葛の裏表　角
ずんずとのびる男兒弟　翁
一度は江戸を見たがる小あきなひ　雪
みたらし波て神の門前　翁
榮よと未來を植し花の蔭　角
三人笑ふ春の日ぐらし　雪

〔一〕「一葉集」に「籠りの南無大悲。」
〔二〕「補珍鈔」に「見晴らさず」

誹諧哥仙七部拾遺

元祿五年作

作者の顔觸から見ると江戸深川の芭蕉庵興行の歌仙である。『一葉集』の前書にも「芭蕉庵會」とある。發句の作者涼葉は美濃の人で『稿珍鈔』引用の『鄙懷紙』には「餞別」といふ前文が附いてゐる。車蓋の『七部拾遺』より本文を採り『一葉集』その他を以て校合した。

風流のまことを啼やほとゝぎす　涼葉
旅の草鞋に卯の花の雪　芭蕉
砂川にひたす刄釜の傾きて　青山
門違する醫者の麁相さ　曾良
月の夜は見しらぬ犬もしづか也　濁子
しろき西瓜も今は涼しき　嵐蘭
ウ
庫裏姥の手を束ねたる盆の中　岱水
ぬるみひとつとのぞむ六尺　曲翠
三ツ目より人もしたしむ契にて　嵐雪
心も有か假名に名を書　涼葉
行燈をへだてゝ顔を隱し合　蕉
木賃泊りは不馳走にする（一）　山
入影も細き高野の朝の月　良
鹽を荷ふて漸寒き人　山
蛬に隣は臼を挽出しぬ　曲水
小觸の文を送る村繼（二）　子
此花に判官殿やとゞめけん　蘭
寺の榑木を流す雪水　岱
ニオ
入物も田螺に似せて竹笊　葉
語るを聞ば乞食を君（三）　雪
長からぬ髭人參の賣所　山
又年くれて隱居くるしき　蕉
火桶すら寢ぬ夜の夢に消殘り　子
蕎麥の粉ふるふ明日の振舞　蘭
返事せぬ手紙は揃て捨ぬらん　雪
おどけた顔は名のおぼえよき　葉
落付に風呂云付る伊勢の御師　岱

先日和よき秋のタぐれ　良
梢見世の富貴に見ゆる后の月　翁
稲刈連て小舟乗込む　山
ニウ
狗の尾房さげたる（雄）をの童　雪
碓氷の岩に殘る足跡　蘭
曳渡す弓に中を望れて　葉
機嫌直しに酒もられけり　岱
やよやまて宿迭送る花の暮　子
巣を喰ふ鳥の人に怖ざる　良

〔一〕『一葉集』に作者名「奴謡」
〔二〕同「送る村」
〔三〕『袖珍鈔』に「乞食の君」

小文庫　元祿五年作

五雨亭史邦が江戸の芭蕉庵を敲いて三吟を試みた歌仙である。元祿九年に出板したその著『小文庫』の下卷秋の部に出てゐる。後、闌更は『續七部集』に同書を收めて寛政七年に飜刻した。本文は『小文庫』の古板本から再錄し、『續七部集』その他を參照校合した。

三吟

帷子は日々にすさまじ鵙の聲　史邦
籾壹升（一）を稲のこ（投）ぎ賃　はせを
蓼の穗に醬（二）のかびをかき分て　岱水
夜市に人のたかる夕月　邦
木刀の音きこへたる居あひ拔　蕉
二階はし（階子）ごのうすき裏板　水
ウ
寒さうに藥の下をふき立てゝ　邦
石町なれば無緣寺の鐘　蕉
手細工に雜箸ふときかんな（鉋）くづ（屑）　水
よびかへせどもまけぬ小が（間）つを　邦
肌さむき隣の朝茶のみ合て　蕉

秋入どきの筋氣いたがる　水
鹽濱にふりつゞきたる宵の月　邦
無住になりし寺のいさかひ　蕉
持なしの新剃刀もさびくさり　水
土たく家のくさききるもの　邦
花に寢む一疊あをき表がへ　蕉
小娃の口の遠き三月　水
二
竹橋の内よりかすむ鼠穴　邦
馬の糞かく役もいそがし　蕉
夕ぐれに洗濯賃をなげ込て　水
とはぬもわろしば〻の吊　邦
椀かりに來れど〔三〕折ふしえびす講　蕉
此あた〻かさ明日はしぐれむ　水
夜あそびのふけて床とる坊子共　邦
百里そのまゝ船のきぬ〴〵　蕉
引割し土佐材木のかたおもひ　水
よりもそはれぬ中は生かべ　邦
言たほど跡に金なき月のくれ　蕉

ニウ
もらふをまちて鴫のつぺい　水
擂鉢にうへて色付唐がらし　邦
障子かさぬる宿がえの船　蕉
北南雪降雲のゆきわたり　水
二夜三日の終るあかつき　邦
考てよし野参のはなざかり　水
百姓やすむ苗代の隙　蕉

〔一〕『袖珍鈔』に「粄壹斗を」
〔二〕『一葉集』に「醬油の䑕を」
〔三〕同「椀かりに來れば」

猿舞師　元祿五年作

前巻と同じく史邦が江戸に下つて芭蕉の捌きを受けた歌仙で、作者は五人、史邦の門人種文の『猿舞師』に入れて元祿十一年板行された。車蓋の『七部拾遺』に再錄されてゐる。『袖珍鈔』の

引用書に『十六夜集』を擧げてあるが編者の見た同書には載つて居ない。本文は『猿舞師』より採つて前記の數書と對校した。

五吟歌仙

初茸やまだ日數經ぬ穐の露　古翁
　青き薄に濁る（二）谷川　岱水
野分より居むらの替地定りて　史邦
　さし込月に藍瓶のふた　亡人半落
鹽付て餅くふ程の草枕　亡人嵐蘭
　なでゝこはゞる革の引はだ　翁

ウ
年寄は土持ゆるす夕間暮　水
　諏訪の落湯に洗ふ馬の背　邦
辨當の茶を只置く石の上　落
　やさしき色に咲るなでしこ　蘭
四ッ折の蒲團に君が丸く寐て　翁
　物書く内につらき足音　水
月暮て雨の降やむ星明り　邦
　早稲の俵にほめくかり（三）大豆　蘭
胸虫に又起さるゝ穐の風　水
　脊に赤子をゆする小坊主　邦
花守の家と見えたる土手の下　落
　細き井溝をのぼる若鮎　翁

名
春風に太鼓きこゆる旅芝居　蘭
　のみ口ならす伊丹もろはく　水
琉球に野良疊の表がへ　翁
　是非此際は上ッものやく　邦
見知られて近付成し木曾の馬士　落
　嫁入するよりはや鳴子引　翁
袖ぬらす染帷子の盆過て　蘭
　月も佗しき醬油の粕　水
草赤き百石取の門がまへ（三）　落
　公事に負たる奈良の坊方　翁
傘をひろげもあへず俄雨　邦
　見る目もあつし牛の日覆　蘭

ウ
出店へと又も隱居の出られて　落

干物つきやる精進の朝　　水
手拭のまぎれて夫を云つのり　　翁
駄荷をかき込板鋪の上　　蘭
人つゞく毛利細川の花盛り　　邦
聟も賢なり雉子の勢ひ　　落

〔一〕『袖珍鈔』、「イニ濁す谷川」。
〔二〕『七部拾遺』に「ほめく刈大豆」。
〔三〕『一葉集』に「百石取の門がまひ」

深川集　其の一　　元祿五年作

『深川集』は『ひさご』の撰者珍碩が洒堂と改めて、元祿五年九月近江膳所より江戸に來り、深川の芭蕉庵寄寓中の連句を翌五年京都にて板行したのである。元祿本以外に元文元年九月西村養魚が「右深川集は累年予が持來るところの書にして、徒に書棗に朽ん事を梓にのこし侍るのみ」と奥書再刻したもの、及び採荼庵梅人が再刻本の板木の燒失せる爲め「杉風叟自筆の書をもて校合してもゝとせのむかふをしたふ」て寛政二年秋三刻したものとある。別に『七部集拾遺』にも採錄されてゐる。

深川夜遊

青くても有べき物を唐辛子　　芭蕉
提ておもたき秋の新鍬　　洒堂
暮の月槻のこつばかたよせて　　嵐蘭
坊主がしらの先にたゝるゝ　　岱水
松山の腰は躑躅の咲わたり　　洒堂
焙爐の炭をくだす川舟　　芭蕉
ウ　祝ひ日の冴かへりたる小豆粥　　水
ふすま摑むで洗ふ油手　　蘭
掛乞に戀のこゝろを持せばや　　蕉
翠簾にみぞるゝ下加茂の社家　　堂
寒徹す山雀籠の中返り　　蘭

正氣散のむ風のかるさよ　水
目の張に先千石はしてやりて　堂
きゆる斗に燈おさゆる　蕉
踏まよふ落花の雪の朝月夜　水
那智の御山の春遲き空　蘭
弓はじめすぐり立たる子息ども　蕉
荷とりに馬士の海へとび込　堂
ニオ 町中の鳥居は赤くきよんとして　蘭
吹もしこらず野分靜まる　水
革足袋に地雪踏重き秋の霜　堂
伏見あたりの古手やの月　蕉
玉水の早苗ときけば懷しや　水
我が跡からも鉦鼓うち來る　蘭
山伏を切ッてかけたる關の前　蕉
鐙もたねばならぬよの中　堂
付合は皆上戸にて呑あかし　蘭
さらり／＼と霰降也　水
乘物で和尚は禮にあるかるゝ　堂
たてこめてある道の大日　蕉
ニウ 撲揚て水田も暮る人の聲　水
蓮片荷に錬さけ行　蘭
不斷立ッ池鯉鮒の宿の木綿市　蕉
ごをかゝえ込土間のへつゝる　堂
米五舛人がくれたら花見せん　蘭
雉子のほろゝにきほふ若艸　水

深川集　其の二　元祿五年作

此の卷は元祿五年芭蕉に入門した許六亭に招かれた時の四吟歌仙である。宗鑑の狂歌に「上は來ず中は來て居ず下は一夜一夜とまるは下々の下の客」といふ其の意を汲んで、酒堂は前文に「一日泊りし宗鑑が客」と卑下したのであ。

二日泊りし宗鑑が客、煎茶一斗・米
五升、下戸は亭主の仕合なるべし

洗足に客と名のつく寒さかな　　酒堂
　綿館ならぶ冬むきの里　　許六
鷦鷯階子の鎰をつたひ來て　　芭蕉
　春は其まゝ七草もたつ　　嵐蘭
月の色氷も殘る小鮒うり　　六
　築地閑に典薬の駕　　堂
ウ
相國寺牡丹の花のさかりにて　　蘭
　槐の蓋とふ蕗に竹の子　　蕉
西樂の若黨つるゝ草まくら　　堂
　むかし咄に野良泣する　　六
きぬぎぬは宵の踊の箔を着て　　翁
　東追手の月ぞ澄きる　　蘭
青鷺の榎に宿す露の音　　六
　ふたりの拄杖あと先につく　　堂
乘掛の挑灯しめす朝下風　　蘭
　汐さしかゝる星川の橋　　蕉

村は花田面の畑の青みたち　　六
　塚のわらびの萠る石原　　堂
名
萬僧の飾に廻りあふ春の末　　蕉
　今は敗れし今川の家　　蘭
うつり行後撰の風を讀興し　　六
　又まねかるゝ四國ゆかしき　　堂
朝露に濡わたりたる藍の花　　蘭
　よごれし胸にかゝる麥の粉　　蕉
馬方を待戀つらき井戸の端　　堂
　月夜に髮をあらふ揉出し　　六
火とぼして砧あてがふ子共達　　蕉
　先積かくるとしの物成　　蘭
薄りと門の瓦に雪降りて　　六
　高觀音にから崎を見る　　堂
ウ
今はやる單羽織を着つれ立　　蘭
　奉行の鑓に誰もかくるゝ　　蕉
段垣に木やり聞ゆる塀の内　　堂
　日にあかう出る二月朔日　　六

初花に伊勢の蚫のとれそめて　蕉

釣樟若やぐ宮川の上　蘭

〔一〕元文板に「蹄に箔を着て」、「袖珍鈔」に「箔置て」

〔二〕「一葉集」に「東大手の」

〔三〕同「虚無僧の歸に」

〔四〕「袖珍鈔」に「藪垣に木やり」、「一葉集」に「聞ゆる堺の内」

深川集　其の三　元祿五年作

深川・支梁亭の口切茶の會席に呼れて、作った連句であるのは前書で知られる。口切茶は十月である。

支梁亭口切

口切に堺の庭ぞなつかしき　芭蕉

筍見たる〔一〕藪のはつ霜　支梁

山雀の笠に縫べき草もなし　嵐蘭

秋の野馬の様々の聲　利合

旅人の咄しに月の明わたり　酒堂

大戸をあけに出る裸身　岱水

ウ

鷄のたま子の數を虚そふへ　桐奚

あらたに橋をふみそむる也　也竹

綠さす六田の柳ほり植て　梁

排菜漆ふく打大豆の汁　蕉

細なる雨にもしほる蝶のはね　合

鐙かたぐる客坊の様ゝ　堂

ばら〳〵と錢落したる石のうへ　水

酒で乞食に成やすき月　蘭

行雲の長門の國を旅立て　堂

露に朽けむ一腰の鍔　梁

西日入花の庄の間牛床　竹

昔の二葉のもえてほのめく　奚

名

みやこをば去年の行脚に思れて　合

兒にまたるゝ釋迦堂のくれ　堂

咲初て忍ぶたよりも猿すべり　蕉
鳥のなみだか枇杷のうすいろ　蘭
凡卑して鎖ともなき旅の宿　徯
清げに注連をはゆる社家町　竹
日盛に鰯賣ル聲を夢ごゝろ　堂
みよしの房の双ぶ川口　梁
水つきの稻のしづくに肩重し　合
(二)はえ黄みたる門前の坂　蘭
皮剝の物煮て喰ふ宵の月　蕉
上毛吹るゝ(三)しろほろの鷺　徯
ウ
谷づたひ流しかけたる竹筏　竹
太刀持ばかりふたごゝろなき　堂
物音も簾静におろしこめ　蘭
盃に算ゆる(四)丸藥の數　梁
花盛御室の(五)路の人通り　徯
麥と菜種の野は錦也　(六)合

〔一〕元文板に「筍見たき」

〔二〕『一葉集』に「はん黄ばみ」、『袖珍鈔』に「榛」
〔三〕『一葉集』に「しらほろの鷺」
〔四〕同「盃にかぞへる」
〔五〕同「御室の町の」
〔六〕同「執筆」

深川集　其の四　元祿五年作

表から裏の第四句まで芭蕉が出坐したので、それ以下は洒堂が京に赴き、舊知と共に卷さつゞけて一歌仙としたのである。『深川集』此の卷のはじめに「九月廿日あまり翁に供せられて、淺草の末嵐竹亭を訪ひて卒に十句を吟ず。與のたえん事をおしみて洛の舊友をもよほし、そのさなつぐ」と斷つてゐるので判明する。

苅株かぶや水田の上の秋の雲　洒堂
暮かゝる日に(一)城かゆる雁　嵐竹

衣うつ麓は馬の寒がりて　芭蕉
糞草けぶる道の霧雨　北鯤
古戰場月も靜に澄わたり　嵐蘭
しばし見送る我客の笠　堂
ウ
さし汐の門の柱に打寄て　竹
窓を明れば壁に入る虹　蕉
卷藁に肩休まするはづし弓　鯤
水仙得たる房州の傳手　蘭
餅つきの釜まはし出ス雪の上　膳所 昌房
場にかさなる鰤の桶漬　正秀
小作りな内義かしこき初あらし　臥高
鷄も啼なき月待の戀　探志
懷にこぼす泪のやゝ寒き　游刀
さつていたゞく三方の熨斗　野徑
花の影射來す鏑防ぐらん　京 去來
鎧にはれのあがる春雨　同
名
𣇃に遊ぶ狐の耳かきて　野童
池の小隅に芹の水音　同

燒付る蛤茶屋の朝の月　史邦
風に實のいる暖が破れ戸　同
老僧の帽子のぬれたる秋の昏　景桃
太鼓聞こゆる源太夫の宮　同
六月は綿の二葉に麥刈て　素牛
たばこ飲子の北座淋しき　同
操なりの腰にさげたる操の總　大坂 之道
時雨に馬を下りる冬の日　同
枝作る松に階子をさしかけて　車庸
二軒並で家のあたらし　同
ウ
聞へよき加賀の藏本ゆるさるゝ　探志
女夫かたぶく木庵の禪　游刀
鎌入れぬ山は公事なき花の春　正秀
長芋の芽のもゆる赤土　臥高
里裏のすゞみ起せば去年の雪　野徑
かすむ夕部の鼠さる犬　昌房

〔一〕『一葉集』に「代替る雁」

韵塞　元禄五年作

許六は近江彦根藩の人で元禄五年江戸勤番中、桃隣の紹介で芭蕉に面接したのである。此の巻の前文の許六亭は糀町喰違御門内の井伊家中屋敷であると『風俗文選犬註解』に出てゐる。『韵塞』の出板は元禄九年でその下巻に本文の歌仙を載せてある。

元禄壬申冬十月三日許六亭興行

けふばかり人も年よれ初時雨　はせを
野は仕付たる麦のあら土　許六
油實を賣む小粒の吟味して　酒堂
汁の煮たつ秋の風はな　岱水
宿の月奥へ入ほど古畳　嵐蘭

ウ

先工夫する蚊屋の釣やう　筆
才はりの傍輩中に悋まれて　水
焼焦したる小妻もみ消　翁
粽つむ篠の葉色に明わたり　六
轆轤をのぼるならの入口　堂
半分は鎧はぬ人もうち交り　蘭
船追のけて蜷の喰飽　水
宵闇はあらぶる神の宮遷し　翁
北より荻の風そよぎたつ　六
八月は旅面白き小服綿　堂
焼山こへの雲の赤はげ　蘭
打起す畠も花の木陰にて　水
つらも長閑に鶴の卵わる　翁

名

春ふかく隠者の富貴なつかしや　六
當摩の辨を酒に酔する　堂
さつぱりと鱈一本に年暮て　蘭
夜着たゝみ置長持の上　水
灯の影めづらしき甲待　翁
山ほとゝぎす山を出る聲　六
兒達は鮎のしら焼ゆるされて　堂
尻日にかよふ翠簾の女房　蘭

いかやうな戀もしつべきうす霙　水
琵琶をかゝえて出る駕物　翁
有明は毘舎門堂の小方丈　六
香のまはらぬ狐やゝ寒　堂
ウ
一すじも青き葉のなき薄原　蘭
篠ふみ下る箱根路の坂　水
宗長のうき寸白も筆の跡　翁
茶磨たしなむ百姓の家　六
花の春まつ〔一〕へて廻る神樂米　堂
七十の賀の若菜薹立　蘭

〔一〕『一葉集』に「當麻亞を」。
〔二〕同「まつえて廻る」

桃實集　元祿五年作

備前岡山藩の櫻井兀峰は、江戸勤番中に芭蕉庵の扉をたゝき、元祿五年此の五吟歌仙を行つたが、翌六年『桃實集』を撰し、京都の井筒屋から出板したもの。卷軸として本卷が收めてある。『桃實集』は『七部集拾遺』に再刻されてゐるが、本文は其の古板本から直接轉載した。

水鳥よ汝は誰を恐るゝぞ　兀峰
白頭更に蘆荻也　翁
中波の醉も尺に棒提て　酒堂
月の徑に吝拾ふらし　峰
鳩吹ば榎の實こぼるゝさら〳〵と　翁
板の埃に圓坐かさぬる　堂
ウ
簾戸に袖口赤き日の移り　里東
君はみな〳〵燕子の時　翁
泣出して土器ふるふ身のまはり　峰
御念比にて鎌倉をたつ　東
門〳〵に明日の錺りをくばりおき　堂
蓮踏なとうつす鹽鯛　峰

山陰をまれに出たる牛の尿　翁
梨地露けき兒のさげ鞘　堂
名月に雲井の橋を一またげ　東
今年の米を脊負ふ嬉しさ　翁
花に來て我名は佛徳右衞門　堂
春はかはらぬ三輪の人宿　東
（二）陽炎の庭に機へる株打て　峰
たゝむ衣に菖蒲折置　堂
（一）きんといふ娘は後のものおもひ　翁
戀のあはれを見よや朧脇　峰
城代の園はしまらず田は餒て　堂
美濃は伊吹で寒き秋風　翁
名月に荷鞍をおろす鈴の音　峰
聟なじまする質の出し入　堂
麥飯に交らぬ飯をとなわけて　翁
徳利引摺川船の舳　峰
帷子に風もすゞしき中小性　堂
明日御返事を黄昏の文　其角
ウ
うつくしき聲の句ひを似せてみる　峰
人めにたつとひきならべる數珠　堂
一息に地主權現の花盛　角
膳に日のさす春ぞきらめく　峰
鶯は此頃の間にいとひ啼　堂
歳旦帳を鼻紙の間　角

（一）『一葉集』に「きんさいふ娘は」

句兄弟

元祿五年作

其角の『句兄弟』中卷に出てゐる。前書に壬申十二月さあるやうに元祿五年歲晩の作で、同七年『句兄弟』出板の際收錄したのである。元祿十年其角は復『錦繡緞』を板行の際再び此の歌仙を採つて載せた。本文は『句兄弟』所載の卷により『錦繡緞』を參照校合した。

壬申十二月廿日即興

打よりて花入さぐれんめつばき　芭蕉
降こむまゝの初雪の宿　彫棠
目にたゝぬつまり肴を引かへて　晋子
羽織のよさに行を繕ふ　黄山
夕月の道ふさけ也かんな屑　桃隣
出代過て秋ぞせはしき　銀杏
网に成きぬはひかゆる槌の音　棠
肩でやしなふ駕篭かきが親　晋
足もとに菜種は臥て芥の花　杏
茶を煮て廻す泊瀬の學寮　蕉
下張の反古見へすくまくらして　山
つめたい猫の身をひそめ來ん　隣
むつかしや襟にさし込娵の臾　棠
硯法度とこひやせかるゝ　晋
夜の雨窓のかたにてなぐさまん　蕉
三寸の殘をしたむ唇　隣
ま一ッと嚏をはやす朝の月　晋
らんときくとに還疫　棠
愚なる和尚も友を秋の庵　杏
高みに水を揚る箱戸樋　山
山鳥のわかるゝ比はしづか也　蕉
ねぶりかゝる歟合歡の下闇　晋
かけむかひ機へる床のいとまなし　山
思はぬ舟に晝の汐待　杏
氣色まで曹洞宗の寒かりに　隣
焦す畳にいたく手を焼　棠
見ぬふりの主人に戀をしられけり　晋
すがた半分かくす傘　蕉
珍らしき星に晙けてよるの月　棠
渡はじめの聲ひくき雁　山
松茸を近江路からは澤山に　晋
そくさいな子は下〳〵に有　杏
老たるは御簾より外にかしこまり　蕉
花の名にくしどこが楊貴妃　棠
付ざしを中ではほるゝ桃の色　山

こてふの影の踏ぐ三弦　隣

鄙懐紙　元祿六年作

美濃大垣の人涼葉の江戸寓居にて興行せる歌仙である。本文は『芭蕉袖草紙』所引の『鄙懐紙』によつた。『金蘭集』には「涼葉會」といふ詞書が附いてゐる。校合には『桃の白實』その他を對照した。

野は雪に河豚の非をしるわかれ哉(一)　涼葉
まだ鶯の鳴きらぬころ　千川
門番の寐顔にかすむ月を見て　芭蕉
今朝むき初る前栽の柿　宗波
秋風に莚をたるゝ裏座鋪　此筋
むしも雨夜は目覺勝なる　濁子
ウ
肌寒く痞のかたを下になし　川
手本に墨を付て悔めり　葉
(二)瘦寺の老尼はひとり髮剃て　子
奈良は律の内にこそあれ　蕉
掛わたす小袖のかび(三)をもみ落し　筋
金の團扇を闇のなぐさみ　川
見る(四)度に源氏一部の忍ばしく　葉
捨てうき世をやすき僭正　波
出來合も伊せの料理は麁相にて　蕉
裸足でありく内庭の砂　筋
朝月に花の乘り物せつきたて　川
日影の藤の牢つめたき　葉
二オ
石疊む華表の奥は(五)春霞　筋
地取りの(六)株に見ゆる名苗字　蕉
爰まではとゞかぬ鹿の音をしたひ　葉
寺のひかへは四五反の秋　川
ゆふ月に植木つり出す塀の(七)破　左柳
見よ水籠を懸られし軒　葉
先端は土俵颣の一縄手　蕉

着て居る内に帷子の干かん　筋
うつぶきて糸さす簇の暮かゝり　川
あはれ氣もなき講の題目　柳
三條の橋より西は時雨けり　葉
茶屋の二階は酒の樓閣　蕉
ニウ
美しき顔も犬より年ふけて　筋
悋の文をつぐる琴の手　川
はな咲ば又来てのぼる塚の上　蕉
高荷にはさむ蓬たんぽゝ　葉
諸雲雀ゆふ口をしげに囀りて　柳
唯よきほどにはるかぜぞ吹　筆

〔一〕『桃の白實』に「非なしる若菜哉」
〔二〕同「尼寺の老尼は」
〔三〕同「微」と誤る
〔四〕同「見るうちに源氏」
〔五〕同「鳥井の奥の」
〔六〕『一葉集』に「地取の杭に」
〔七〕『袖珍鈔』に「つり出す塀の內」
〔八〕同「簇に暮かゝり」
〔九〕『桃の白實』に「橋から西は」
〔一〇〕『袖珍鈔』に「ふみなつくす」
〔一一〕『桃の白實』に「馬荷にはさむ」

炭俵　元祿六年作

此の兩吟は『炭俵』の輕みな稱さるゝ代表歌仙で、師弟の氣分がしつくり合つて一卷の運び流るゝ如くである。『炭俵』は元祿七年に京の井筒屋と江戸の本屋藤助の兩板元から出たいで、「建順」の二册に分れてゐる。本文はその「建」即ち上卷にあるので原本から直接採錄した。

むめが香にのつと日の出る山路かな　芭蕉
處々に雉子の啼たつ　野坡
家普請を春のてすきにとり付て　同
上のたよりにあがる米の直　芭蕉
宵の内はらはらとせし月の雲　同
藪越はなす秋のさびしき　野坡

ウ
御頭へ菊もらはるゝめいわくさ　野坡
　娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉
奈良がよひおなじつらなる細基手　野坡
　ことしは雨のふらぬ六月　芭蕉
預けたるみそとりにやる向河岸　野坡
　ひたといひ出すお袋の事　芭蕉
終宵尼の持病を押へける　野坡
　こんにやくばかりのこる名月　芭蕉
はづ雁に乗懸下地敷て見る　野坡
　露を相手に居合ひとぬき　芭蕉
〔一〕町衆のづらりと酔て花の陰　野坡
　門で押るゝ壬生の念仏　芭蕉
名
東風々に糞のいきれを吹まはし　同
　たゞ居るまゝに肱わづらふ　野坡
江戸の左右むかひの亭主登られて　芭蕉
　こちにもいれどから臼をかす　野坡
方〱に十夜の内のかねの音　芭蕉
　桐の木高く月さゆる也　野坡

門しめてだまつてねたる面白さ　芭蕉
　ひらふた金で表がへする　野坡
はつ午に女房のおやこ振舞て　芭蕉
　又この春も済ぬ牢人　野坡
法印の湯治を送る花ざかり　芭蕉
　縄手を下りて青麦の出来　野坡
ウ
どの家も東の方に窓をあけ　野坡
　魚に喰あく濱の雑水　芭蕉
千どり啼一夜〱に寒うなり　野坡
　未進の高のはてぬ算用　芭蕉
隣へも知らせず嫁をつれて来て　野坡
　屏風の陰に見ゆるくはし盆　芭蕉

〔一〕原本「町衆」の「町」の右傍に音にて讀む略符ーを附す。

鄙懐紙　　元禄六年作

深川の庵中で興行の歌仙と思はれる。『芭蕉袖草紙』には『鄙懐紙』から引用してゐる。同書を本文として『谷蘭集』及び『一葉集』を以て校合した。

雨中

傘におし分見たる柳かな　芭蕉
　わか草青む塀の築さし　濁子
おぼろ月いまだ巨燵にすくみゐて　涼葉
　使の者に禮いふてやる　野坡
せんたくをしてより裄のつまりけり　利牛
　譽られてまた出す吸もの　宗波
ウ
湯入り衆の入り草臥て峯の堂　曾良
　黒部の杉のおし合て立　芭蕉
はびこりし廣葉の茶園二度摘て　子
　けふも暑に家を出て行　牛
伊勢のつれ又變替をしておこす　野
　おこしかねたる道心の沙汰　波
金拂ひ名月までは延られず　葉
　のぼり日和の浦の初雁　良
秋もはや升ではかりし唐がらし　蕉
　清涕たらす子の髮結てやる　波
在所から牛道出れば花咲て　牛
　瓢の煤をはらふ麻種　子
二オ
春の空十方くれのとき〴〵に　野
　汐干に出もをしむ精進日　翁
駕舁のひとりは酒を嗅もせず　牛
　先手揃ゆる宿のとりつき　葉
むつかしき苗字に長き名を呼て　蕉
ロ
　まるくちすゆる鯖のやき物　野
祝言も母か見て來て究けり　牛
　木綿ふきたつ高安の里　蕉
足場よき月の細道一筋に　子

鹿追ふ聲の睡たさうなる　良
念佛に小さき鉦は殊勝にて　牛
四五十日に居あく太秦　野
ニウ
藪陰は妻も延たる霜柱　沓水
荷ふたものをとへば鹽賣　葉
男子ども遊び仕事を葺の辻　野
寐入もはやし年の寄ほど　牛
切り株も若木は花のうきやかに　子
・かげろふ落る岩の細瀧　良

續寒菊

元祿六年作

野坡が『炭俵』の撰に着手して居たころの両吟であらうが、同集には入らず、野坡の門人大阪の杏廬が『續寒菊』の中に入れて安永九年出板した。本文は同書により『芭蕉翁俳諧集』その他と對校した。

五人ぶち取てしだるゝ柳かな　野坡
日より／＼に雪解の音　芭蕉
猿曳の月を力に山越て　同
そこらをかける雉子の勢ひ　坡
暖うなりてもあけぬ北の窓　同
徳利匂うて酢を買にゆく　蕉
ウ
丸（一）三とせ旅から旅へ旅をして　同
境の公事の今に埒せぬ　坡
眞白ふ松も樫（二）も鳥の糞　同
うき世の望絶えて鐘聞　蕉
痩腕に粟を一臼搗（三）仕舞ひ　同
藪入せよとなぶられて泣　坡
け（四）いとうも頬かぶりする夜更て　同
はね打ちかはす雁（五）に月影　蕉
口ゝに今年の酒を試る　同
近い佛（六）へ朝のともし火　坡
咲花に十府の菅菰あみならべ　同
はや茶畑も摘しほが来る　蕉

二オ

さら〳〵と淀まぬ水に秋の風　同
鍵の印に夕日ちら〳〵　坡
行義能ふせよと子供をいゝめ廻し　同
やき味噌の灰吹はらひつゝ　蕉
一握り縛りあつめし届状(五)　同
けふも粉雪のどつかりと降(六)　坡
おはぐろを貰ひに中戸さし覗き　同
昔の榮耀今は苦にやむ　蕉
市原にそこはかとなく行々子　同
神拝むには夜が尊とい　坡
月影に小舞仲間の誘つれ　同
蕎麥うつ音を厭る肌寒　蕉

二ウ

はら〳〵と桐の葉落る手水鉢　同
書付てある鎌の稽古日(七)　坡
漸とかきおこされて髪けづり　蕉
猫可愛がる人ぞ戀しき　坡
あの花の散らぬ工風が有ならば　蕉
(八)掃目のうへに色〳〵の蝶　坡(九)

〔一〕『袖珍鈔』に「丸二年旅から」
〔二〕同「松も柏も」
〔三〕『一葉集』に「鷹の月影」
〔四〕『袖珍鈔』に「近い佛は」
〔五〕『一葉集』に「くゝり集めし」
〔六〕同「けふも小雪の」
〔七〕『芭蕉翁俳諧集』に「釜の稽古日」
〔八〕『袖珍鈔』に「箒目のうへに」
〔九〕『芭蕉翁草紙』に「筆」

炭俵　元禄六年作

『炭俵』の撰者の一人小泉孤屋が芭蕉庵をたゝき此の發句を詠じたので、同じく撰者の池田利牛及び同庵の岱水と共に、四吟歌仙を巻いて『炭俵』の上巻に收めたのである。

ふか川にまかりて

空豆の花さきにけり麥の縁　孤屋
晝の水鷄のはしる溝川　芭蕉

上張を通さぬほどの雨降て　岱水
そつとのぞけば酒の最中　利牛
寢處に誰もねて居ぬ宵の月　芭蕉
どたりと塀のころぶあきかぜ　孤屋
ウ
きり〳〵す薪の下より鳴出して　利牛
晩の仕事の工夫するなり　岱水
娣をよい處からもらはるゝ　孤屋
僧都のもとへまづ文をやる　芭蕉
風細う夜明がらすの啼わたり　岱水
家のながれたあとを見に行　利牛
鮟汁わかい者よりよくなりて　芭蕉
茶の買置をさげて賣出す　孤屋
この春はどうやら花の靜なる　利牛
かれし柳を今におしみて　岱水
雪の跡吹はがしたる朧月　孤屋
ふとん丸げてものおもひ居る　芭蕉
名
不屆な隣と中のわるうなり　岱水
はつち坊主を上へあがらす　利牛

泣事のひそかに出來し淺ぢふに　芭蕉
置わすれたるかねを尋ぬる　孤屋
着のまゝにすくんでねれば汗をかき　利牛
客を送りて提る燭臺　岱水
今のまに雪の厚さを指てみる　孤屋
年貢すんだとほめられにけり　芭蕉
息災に祖父のしらがのめでたさよ　岱水
堪忍ならぬ七夕の照り　利牛
名月のまに合せ度芋畑　芭蕉
すた〳〵いふて荷ふ落鮎　孤屋
ウ
このごろは宿の通りもうすらぎし　利牛
山の根際の鉦かすか也　岱水
よこ雲にそよ〳〵風の吹出す　孤屋
晒の上にひばり囀る　利牛
花見にと女子ばかりがつれ立て　芭蕉
餘のくさなしに菫たんぽゝ　水

芭蕉　孤屋　岱水　利牛　各九句

〔一二〕流布本「深さ」に誤る。

翁艸　元禄六年作

桐松軒里圃は元禄六年より芭蕉に入門した。が翌七年は師に別れる事になつたので、元禄九年『翁艸』朝夕二卷を撰して師恩に報じた。此の連句はその中にあるので『一葉集』は元禄五年の部に配してあるが從ひ難い。本文は「翁艸」により『芭蕉翁俳諧集』その他を參考校合した。

朝顔や夜は明きりし空の色　史邦
をのれ〳〵と蚓なきやむ　沾圃
升落またぬに月は出にけり　翁
廊下口までゆるす〔一〕板の間　魯可
はやらかす酒にむす子の智恵〔二〕賣て　沾
栗丸太きる川上の山　史

ウ
ころ〳〵と形のおかしき石拾ふ　可
寺にかへればすはる麥食　翁
雨すぎて白く咲たる茨の花　史
祖父のふぐり柴にとり付く　沾
子ども皆貧乏神と名をよびて　〔三〕邦
繪馬をかくる年越の宮　可
ぎし〳〵と雪ふむ道の薄明り　沾
見世をたゝきて〔四〕めばる出する　史
鐵棒を戸塚の宿の傳馬觸　可
腹疫病のはやりしづまる　翁
ずんずりと苗代めぐむ花の色　沾
光かすまぬ伊勢の有明　可

二
春風に吹しほらかすけさ衣　史
質にながるゝ百兩の家　〔五〕翁
〔六〕色あしく痩たる顏に化粧して　可
薫じわたりし白無垢の夜着　沾
穢土厭離打さそはるゝ鐘の聲　翁
辨當ほとくもとの居屋鋪　可

うき事の佐渡〔七〕十番を書立て　沾
名古曾越行〔こえゆく〕兼載〔けんさい〕の弟子　翁
かじ（悴）けたる紅葉は松の間〔あい〕〳〵に　可
袂をぬらす宵の月蝕　沾
御しとねの上さへ風は身に入〔しみ〕て　史
愛らしげにも這まはる兒〔ちご〕　可
ニウ
すゝめとて直〔ぢき〕に院家の〔八〕廻らるゝ　里圃
夏も小野には鶯がなく　乙州
雨ふればめつたに土の匂ひ出〔だし〕　沾
縄でからげし家ゆがみけり　里
鹽物に咽〔のど〕かは（乾）かする花ざかり　乙
奈良はやつぱり八重櫻かな　沾

〔一〕『芭蕉袖草紙』に「ゆする板の間」
〔二〕同「むすこの智惠かりて」
〔三〕同、作者名「蕉」
〔四〕同「叩てさばり出さする」
〔五〕同「沾」
〔六〕同「色わるく痩たる」
〔七〕同「佐渡一番に」
〔八〕同「院家の歩行るゝ」

鄙懐紙　元祿六年作

濁子は中川氏、美濃大垣の藩士であるが、江戸に勤番して居たので、此の歌仙も芭蕉庵に於て興行したのであらう。本文は『芭蕉袖草紙』所引の『鄙懐紙』により『桃の白實』その他と對校した。

十三夜あかつき（曉）闇のはじめかな　濁子
小袖の糊〔のり〕のこはき薄霧〔うすぎり〕〔一〕　曾良
燒飯に瓜の〔二〕粕漬〔かすづけ〕口あけて　芭蕉
荏胡麻〔えごま〕のからに四十雀つく　史邦
雨氣〔三〕から笠の干反〔ひぞり〕のしめり合〔あい〕　杉風
埃〔ごみ〕かき流す風呂の水遣〔やり〕　岱水
ウ
きり麥をはや朝が〔四〕けにうち立て　涼葉
幸手〔さって〕を行ば栗橋の關　蕉

松杉をは(五)さみ揃ゆる寺の門　良
　ひとり娘の冬のこしらへ　子
梟の身をもかくさぬ戀をして　水
　なみだくらべん椽落る也　蕉
うす月夜庵の衣の影ぼうし　邦
　客まつ暮に薪割秋　風
末廣を(六)釘にかけたる禰宜の家　子
　竈うち拂ふ片器の食つみ　葉
(七)先ッ汁と筆をはじむる初花に　蕉
　鶯啼て旅になすそら　邦

ニオ

寐覺にも指を動かすひとよ切　水
　中能ちなむ兄が膝元　蕉
具足着に雇はるゝ程場の有て　葉
　顔には似せぬ饅頭の好　邦
さかりなる隠居の牡丹見て歸る　風
　襷はづして出るを(八)ほな子　水
笠借らむ歌の返事(九)に雙もなし　邦
　足はむくみて河原行けり　良
よごれたる衣に輪袈裟打しほれ　蕉
　伯母の泣るゝ酌人の良　子
けふの月實植の梨の穂かけ(一〇)して　良
　枝もぐ菊の(一一)括りちひさき　葉

ニウ

露霜に土こそげたる脊のうら　子
　くゞり細目に明る肴屋　良
初産はおもひの外に安かりて　水
　借りし屛風を返す夕暮　風
華に又はなをかざりし弓空穂　葉
　はや鎌倉の道の若艸　邦

(一)『桃の白實』に「こはき薄緣」
(二)同「爪の粉漬の口明て」
(三)同「雨氣つく笠の干菜の」
(四)同「はや朝良に」
(五)同「刻み揃へる」
(六)同「鈴に懸たる」
(七)同「此先さ筆を」
(八)同「出るなうな子」
(九)同「哥の返哥に」
(一〇)同「梨の穂かほして」

〔一一〕同「朽て小さき」

鄙懷紙

元祿六年作

芭蕉庵の十六夜の會で、前夜濁子の發句をあやなして當夜即興の發句となし、六吟歌仙を詠じたのである。『芭蕉袖草紙』の『鄙懷紙』より引用せるを本文として『桃の白實』その他と對校した。

〔一〕いざよひはとり分闇のはじめかな　芭蕉
　鵜船の垢をかゆる澁鮎　濁子
近道に雛頭畠をふみ付て　岱水
　肩のそろひし米の持次　依〔二〕々
見かへ〔三〕せば家根に日の照る村しぐれ　濁子
　青菜煮る香の田舍めきけり　芭蕉
ウ寄りつきのなき女房の良重き　岱水
　夜すがら濡らす山伏の髪　芭蕉

若皇子にはじめて草鞋奉り　子
　渡しの舟で草の名を聞〔四〕　依
鷸の巣に赤き頭の重りて　蕉
　ばけ物曲輪掃のこす城　子
梅の枝下しかねたる暮の月　水
　娵まち請る後のやぶ入　馬莧
ひとり住ふるき砧をしらけけり　子
　うらみ果てや琴箱のから　蕉
都より十日も遲き花ざかり　曾良
　爪をたてたる獨活の茹物　水
年禮を御師の下人に言葉して　莧
　烏帽子かぶれば兀も隱るゝ　蕉
持つけぬ御太刀を右にかしこまり　子
　よれば跛〔五〕たる馬のふり髪　良
夏川やはや宵の瀨を踏ちがへ　凉葉
　道祖のやしろ月を見かくす　子
我戀は千束の茅を積み重ね　蕉
　雁も大事にとゞけ〔六〕行文　葉

眉作るすがた似よかし水鏡　子
大原の紺屋里に久しき　蕉
數多く繋げば牛も富貴也　葉
冬のみなとにこのしろ(鮗)を釣　子
二ウ　初時雨六里の松を傳ひ來て　蕉
老がわらぢのいつ脫だやら　蕉(七)
朝すき(八)を水鷄の起す寐覺也　子
筍あらす猪の道　蕉
雪ならば雪車(そり)に乘るべき花の山　葉
はる風さらす谷の細布　子

(一)『桃の白實』に「十六夜さり分」
(二)同、作者名「依之」に誤る
(三)同「見かへれば屋根に」
(四)同「草の名を問ふ」
(五)同「よれば劍たる」
(六)同「さゞき行文」
(七)同、作者名「葉」
(八)同「朝妻を水鷄の」

炭俵　元祿六年作

芭蕉庵にて『炭俵』の三撰者が寄合つて芭蕉の捌きを受けた一卷である。『炭俵』の「順」即ち下卷に出てゐる。

神無月(かみなづき)廿日　ふか川にて即興

振賣の鴈あはれ也ゑびす講　芭蕉
降てはやすみ時雨する軒　野坡
番匠(ばんじやう)が椴(一)(もみ)の小節を引かねて　孤屋
片はげ山に月をみるかな　利牛
好物(かうぶつ)の餅を絶(たや)さぬあきの風　野坡
割木(わりき)の安き國の露霜　芭蕉
ウ　網の者近づき舟に聲かけて　利牛
星さへ見えず二十八日　孤屋
ひだるきは殊(ことに)軍の大事也　芭蕉
淡氣(ちやうけ)の雪に雜談もせぬ　野坡

明しらぬ籠挑灯を吹消して　孤屋
　肩癖にはる湯屋の膏藥　利牛
上をきの干菜刻むもうはの空　野坡
　馬に出ぬ日は內で戀する　芭蕉
絈賣の七ッさがりを音づれて　利牛
　塀に門ある五十石取　孤屋
此島の餓鬼も手を摺月と花　芭蕉
　砂に暖のうつる青草　野坡
ニオ〔二〕新畠の糞もおちつく雪の上　孤屋
　吹とられたる笠とりに行　利牛
川越の帶しの水をあぶながり　野坡
　平地の寺のうすき藪垣　芭蕉
干物を日向の方へいざらせて　利牛
　塩出す鴨の苞ほどくなり　孤屋
算用にうき世を立る京ずまひ　芭蕉
　又沙汰なしに娘産　野坡
どたくたと大晦日も四ッのかね　孤屋
　無筆のたのむ狀の跡さき　利牛
中よくて傍輩合の借りいらひ　野坡
　壁をたゝきて寐せぬ夕月　芭蕉
ウ風やみて秋の鷗の尻さがり　利牛
　鯉の鳴子の綱をひかゆる　孤屋
ちらほらと米の揚場の行戻り　芭蕉
　目黑まいりのつれのねちみやく　野坡
どこもかも花の三月中時分　孤屋
　輪炭のちりをはらふ春風　利牛

芭蕉　野坡　孤屋　利牛　各九句

〔一〕流布本「椏」又は「樫」に誤る。
〔二〕原本「新畠」の「新」に音にて讀む略符—を附し、畠に「ハタ」と假名あり。

炭俵　元祿六年作

杉風の發企で興行されたのであらう。作者十二人、卷面の賑かさと芭蕉の捌きのあざやかさを

知るべく、『炭俵』の「順」卽ち下卷に出てゐる。

雪の松おれ口みれば尙寒し　杉風
日の出るまへの赤き冬空　孤屋
下肴を一舟濱に打明て　芭蕉
あいだとぎるゝ大名の供　子珊
身にあたる風もふは〳〵薄月夜　桃隣
粟をかられてひろき畠地　利牛
熊谷の堤きれたる秋の水　岱水
箱こしらえて鰹節賣る　野坡
二三疊寐所もらふ門の脇　子珊
馬の荷物のさはる干もの　沾圃
竹の皮雪踏に替へる夏の來て　石菊
稻に子のさす雨のはら〳〵　杉風
手前者の一人も見えぬ浦の秋　野坡
めつたに風邪のはやる盆過　利合
宵〳〵の月をかこちて旅大工　依々
背中へのほる兒をかはゆがる　桃隣
茶むしろのきはつく上に花ちりて　子珊
川からすぐに小鮎いらする　石菊
朝曇はれて氣味よき雉子の聲　杉風
脊戸へ廻れば山へ行みち　岱水
物思ひたゞ鬱〳〵と親がゝり　孤屋
取集めてはおほき精進日　曾良
餅米を搗て俵へはかりこみ　桃隣
わざ〳〵わせて藥代の禮　依々
雪舟でなくばと自慢こきちらし　沾圃
となりへ行て火をとりて來る　子珊
又けさも佛の食で埒を明　利牛
損ばかりして賢こがほ也　杉風
大坂の人にすれたる冬の月　利合
酒をとまれば祖母の氣に入　野坡
すゝけぬる御前の箔のはげかゝり　子珊
次の小部屋でつにむせる聲　利牛
約束にかゞみて居れば蚊に喰れ　曾良
七ツのかねに駕籠呼に來る　杉風

花の雨あらそふ内に降出して　桃隣
男まじりに蓬そろゆる　岱水

杉風五　野坡三　孤屋二　沾圃二　芭蕉一
石菊二　子珊五　利合二　桃隣四　依々二
利牛三　曾良二　岱水三

〔一〕原本「手前者」の「者」に音にて讀む略符―を附しあり

續深川　元祿六年作

採茶庵平山梅人が杉風の孫女より讓られた杉風舊稿中にある歌仙で、寛政二年『續深川』と題して出板した中に入れてある。『續猿蓑』には「霰」が「あらし」となつてゐるだけで發句の作者は里圃である。此の歌仙の運びの意にみたないものがあつたので、草稿のまゝ杉風の手許に取殘されたのであらう。

いさみたつ鷹引居る霰哉　翁
ながれの形に枯るゝ水草　沾圃
宿はづれ明店多く戸をさして　馬莧
三味線さげる旅の乞食　翁
夕月夜そら豆喰ふて更しける　圃
衾こそぐる秋寒きなり　莧
ウ
露霜にたれか問るゝ下駄の音　翁
大黄の葉のいく重かさなる　圃
力なく肱ほそりしうきおもひ　莧
繕ふかひもなき木綿もの　翁
自佛堂六疊半に出はるらむ　圃
暑きをほめてかゆる雜餱汁　莧
釣の錢十二匁の相場なり　翁
伏見の橋も京の名殘ぞ　圃
ふところえ疊んで入る夏羽織　莧
親父〔二〕〳〵と皆かはゆがる　翁
月花の宵から仕込よせとうふ　圃
陽炎たちて餅はわれけり　莧

ニオ
灑水のとく／＼落るはるの風　翁
　門ッの左は見ざるいは猿　圃
時の間に一むら雨の降り通り　莧
　菰より琵琶を出す蟬丸　翁
烏てふおほ(二)よそ鳥はしれがたみ　圃
　雪の細江の山をとり巻　莧
入口は松さま／＼の竹扉　翁
　佛御前を神は請ずも　圃
黑紅の小袖は襟のあからみて　莧
　ゴスの茶碗を賣に出さるゝ　翁
なま禪の二階を居間にとぢこもり　圃
　月を隣にテンカンをきく　莧
ニウ
ねり物の一番みゆる皡(三)すゝき　圃
　蛸に酢かゝる柚の切形　同
秋の空年／＼くだる旅功者　莧
　奉加帳にはつかぬ也けり　圃
不公儀に花咲山の(四)あら三位　翁
　田舍の谷になまる鶯　莧

(一)『一葉集』に「親仁／＼さ」
(二) 同「おほおそ鳥は」
(三) 同「見ゆる花すゝき」
(四) 同「新三位」

續猿蓑　元祿六年作

『續猿蓑』の上卷に出てゐる。芭蕉は第三句を附けて後の附句に加はつてゐないので、『一葉集』には表六句のみを掲ぐるに過ぎない。『續猿蓑』の原本により全卷を收錄して卷中の變化を知る參考さした。

いさみ立鷹引すゆる嵐かな　里圃
　冬のまさきの霜ながら飛　沾圃
大根のそだゝぬ土にふしくれて　芭蕉
　上下ともに朝茶のむ秋　馬莧

町切に月見の頭の集め錢　沾
荷がちら〱と通る馬次　里
ウ 智恩院の替りの噂極りて　苴
さくらの後は楓わかやぐ　沾
俎の鱸に水をかけながし　里
目利で家はよい暮しなり　苴
狀箱を駿河の飛脚請とりて　沾
まだ七ツにはならぬ日の影　里
草の葉にくぼみの水の澄ちぎり　苴
伊駒氣づかふ綿とりの雨　沾
うき旅は貯とつれ立渡り鳥　里
有明高う明はつるそら　苴
柴舟の花の中よりつつと出て　沾
柳の傍へ門をたてけり　里
二オ 百姓になりて世間も長閑さよ　苴
ごまめを膳にあらめ片菜　沾
賣物の澁紙つゝみおろし置　里
けふのあつさはそよりともせぬ　苴
砂を這ふ蕁の中の絡緯の聲　沾
別を人がいひ出せば泣　里
火燵の火いけて勝手をしづまらせ　苴
一石ふみし碓の米　沾
折〱は突目の起る天氣相　里
仰に加減のちがふ夜寒さ　苴
月影にことしたばこを吸てみる　沾
おもひの侭に早稲で屋根ふく　里
二ウ 手拂に娘をやつて湯の沙汰　苴
參宮の衆をこちで仕立る　沾
花のあと躑躅のかたがおもしろい　里
寺のひけたる山際の春　苴
冬よりはすくなうなりし池の鴨　沾
一雨降てあたゝかな風　里

鄙懐紙　元祿六年作

興行の年代は『金蘭集』に「酉霜月」といふ前書が附いてゐる。『芭蕉袖草紙』所引の『鄙懐紙』

から本文を再録した。文化八年板の宜麥の『續綸歌仙』にも出てゐる。

芹焼やすそ輪の田井の初氷　芭蕉
　巣りて寒し卵産む鶏　濁子
織下す絍をむしろに尋取りて　凉葉
　折々すゞむうらの柿の木　蕉
うす月夜干鰯俵のなまぐさき　子
　汐くむ牛も見えぬあさ霧　葉

ウ

露霜の小村に鉦をたゝき入　蕉
　榎のすへにのこる注連縄　子
求食飛塊鳩の賑はしく　葉
　掘ばひらちにならぬ石原　蕉
日ざかりは孫に吸筒提させて　子
　和田秩父とも獨若黨　葉
懸乞の來ては言葉を荒ける　蕉
　余所よりくらき月の枝折戸　子
虫とりと知らで蟬の雁はれて　葉
　松もすゝきも念佛の種　蕉
富ばなほ命也けり花の陰　子
　破籠はさめぬ鶯のこゑ　葉

ニオ

雪國は春まで馬の繋がれて　蕉
　日記つまりし一帖の紙　葉
旅瘡やながき五月の船どまり　子
　名殘りをかせぐ安藝の廣嶋　蕉
音信は見しらぬ伯母もなつかしく　葉
　元米斗る酒の奥殿　子
焼たてゝ庭に鱧するくれの月　蕉
　まき藁まくも肌寒きかぜ　葉
寄り聟は假り諸太夫に粧ふて　子
　うき名は辰の市で戀する　蕉
よひ縞ともやうを褒て詠やり　葉
　葉茶壺直す床の片隅　子

ニウ

ほとゝぎすすはやと蚊帳鈎かけて　蕉
　湖水もしらむ浦田の朝鴫　葉
うす雪のうへに霰のころ〳〵と　子

俵の䕓(かり)をたゝく着る物　蕉
折る花に子共のすがる袋町　葉
若松うゆる天神の宮　子

木曾谷　元祿六年作

岱水の『木曾谷』によると、芭蕉一日岱水に向ひ「硯やある、發句せしに是が腋、第三をすべきよし筆して、書付給ひしより四句め五句めとうつり行、漸一折にも不滿かい置給へる」をその歿後、杉風と共に裏の第七句より繼き起して一巻としたのである。『木曾谷』の板行は寶永元年である。杏廬の『續寒菊』に再錄され、『一葉集』は二の表より以下を省略して一の折のみ載せてゐる。

生(いき)ながらひとつにこほ(氷)る生海鼠(なまこ)哉　芭蕉
ほどけば匂ふ寒菊のこ(菰)も　岱水
代官の假屋(かりや)に冬の月を見て　蕉
水風呂桶の輪を入にけり　同
酢の粕を捨れば汐の引て行　水
けふもあそんでくらす相談　同
ウ　親の時はやりし醫者の若手共　蕉
座敷しづまる能のはじまり　水
香箸のからりとしたる夜明前　蕉
旅から物のあたるしらかゆ(白粥)　水
麻衣を馬にも着する木曾の谷　蕉
中稲(なかて)のあれを悔る風年　水
どこもかもまばらにもりて月すごく　杉風
つくれて置きし綱の露けさ　水
造られて村を呼(よば)るゝ寺の酒　風
わけてをさなにつよき疱瘡　水
初花の沙汰なき春は寒越て　風
伊賀路長閑に山の裏見る　水
二　美(うつくし)き中に主人に隙をやり　同
小き銀で鮑買はする　風

塀越に屋敷を覗く糀町　水
　弓矢に扇付て押立　風
われるほど此六月は照つめて　水
　しばらく乞食止られし僧　風
覺へある家の道具もさびくさり　水
　若生に生ル柚スのおほきさ　風
山下のたばこも揃ふ宵の月　水
　夏過てから鹽に事かく　風
脊戸門へ出るなさ年を耻(はぢ)しめて　水
　掃寄せて來る盆の初雪　風
ウ
一枚に吹まくつたる星の空　同
　日堅き者が聟の氣に入　水
五六度も隣へわせしお侍　風
　取かへて置(おく)煉藥の代　水
よいなりを袴で見せぬ花盛　同
　結び殘りの句を慕ふ春　風

續猿蓑　元祿七年作

『續猿蓑』は江戸の沾圃撰、芭蕉その稿本を一閲せるまゝ伊賀の松尾家に殘されたるを後支考が手を入れて、元祿十一年五月井筒屋から出板になつたのである。此の卷は作者の顔觸から見て江戸で作つた歌仙のやうに思はれる。

八九間空で雨降る柳かな　芭蕉
　春のからす(烏)の畠ほる聲　沾圃
初荷とる馬子もこのみ(好)の羽織きて　馬莧
　内はどさつく晩のふるまひ　里圃
きのふから日和(ひより)かたまる月の色　沾圃
　狗脊(ぜんまい)かれて肌寒うなる　芭蕉
澁柿もことしは風に吹れたり　里圃
　孫が跡とる祖父(ぢぢ)の借錢　馬莧
脇指に替てほしがる旅刀　芭蕉

煤をしまへばはや餅の段　沾
約束の小鳥一さげ賣にきて　莧
十里ばかりの余所へ出かゝり　里
笹の葉に小路埋ておもしろき　沾
あたまうつなと門の書つけ〔一〕　蕉
いづくへか後は沙汰なき甥坊主　里
やつと聞出す京の道づれ　莧
有明におくるゝ花のたてあひて　蕉
見事にそろふ籾のはへ口　沾
春無盡まづ落札が作太夫　莧
伊勢の下向にべつたりと逢　里
長持に小擧の仲間そはくと　沾
くはらりと空の晴る青雲　蕉
禪寺に一日あそぶ砂の上　里
槻の角のはてぬ貫穴　莧
濱出しの牛に俵をはこぶ也　蕉
なれぬ娵にはかくす内證　沾
月待に傍輩衆のうちそろひ　莧
籬の菊の名乘さまぐ　里
むれて來て栗も榎もむくの聲　沾
伴僧はしる駕のわき　蕉
削やうに長刀坂の冬の風　里
まぶたに星のこぼれかゝれる　莧
引立て無理に舞するたをやかさ　蕉
そつと火入におとす薫　沾
花ははや殘らぬ春のたゞくれて　莧
瀬がしらのぼるかげろふの水　里

〔一〕『續猿蓑』の本文に「門の書つき」の「き」を消し「け」に書き直しあり。

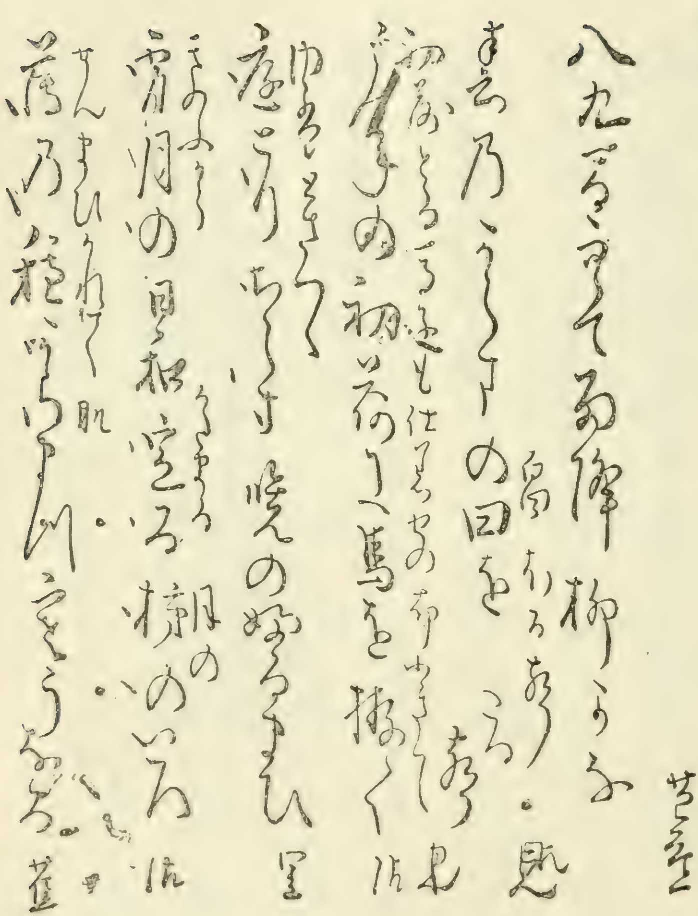
八九間雨柳

元祿六年作

伊勢四日市の小草亭鈴木李東の家に『續猿蓑』の「八九間」の卷の草稿を傳來した。芭蕉の筆にて一々添削の蹟を存するものである。其の師朱樹

叟士朗さはかつて、眞蹟のまゝ摸刻し『八九間雨柳』と題して板行した。初案丼に添削の體裁を傳へる爲め殊に凸版にして挿入する事にした。

その原物は李東より四代目の現鈴木重平氏の許に襲藏されて居る。



ウ

さをも搗く猿の天窓の菜　　足

みちしぬ孫に祖父の後見　　凡

脇指をつくつて刀乃さし　　里

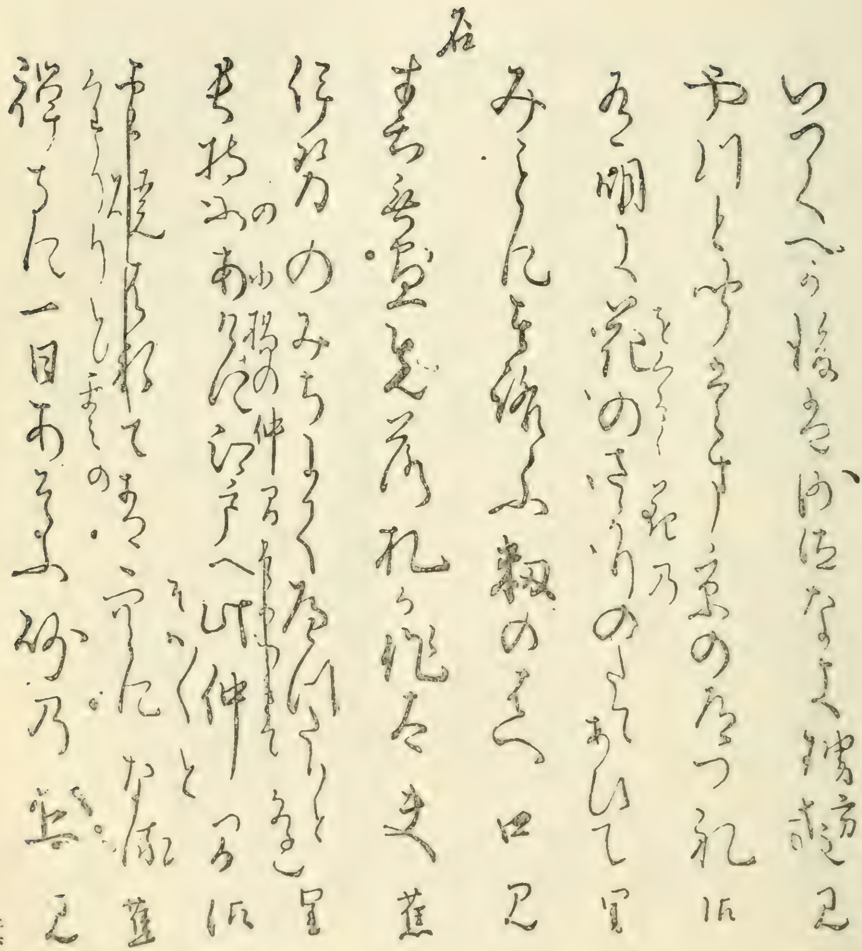
棟を掃く衣桁心細し　　乙

初来乃小哥一さし寄て　　蕉

十里ぶね余所の猿のいきよの　　里

怪通りの枳殻の花を嫁して　　凡

あるよすがたまの門の手の　　付　蕉



鶯の音のゆるさぬ夢。起。　沾

源氏の儒をもとにてよそや　里

ゆきかへりかくれ嫁しけりかくす仰侘て　之

月待て侍やまれのおもひ　蕉

鳥の子の霧の名まうし　里

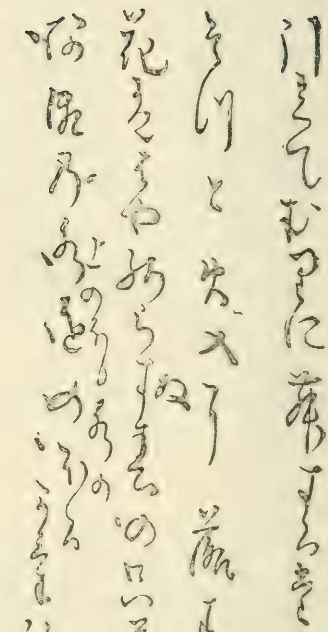
むまて来て雲も桜もゆわくの露

うそ出てきし中よりさとき深き　沾

小僧をいたはりなさひと　台

るこやれど力鼓乃　几　色の風。又

ゆすめゝて　星乃こほされろ　沾嵐



芭蕉翁真蹟

別坐鋪　元祿七年作

江戸の蕉門子珊が師芭蕉の上方行脚に出立前、その家に招いて興行した一卷である。その時芭蕉の俳談に「今思ふ體は淺き砂川を見るごとく句の形・付心ともに輕きなり。其所に至りて意味あり」と語つた事が子珊の自序に見える。『別坐鋪』には元祿十年の江戸板と寶暦二年の京板と二本ある。

紫陽花や藪を小庭の別座鋪　芭蕉
よき雨あひに作る茶俵　子珊
朔日(たち)に鯛の子賣の聲聞て　杉風
出駕籠の相手(一)誘ふ起〳〵　桃鄰
かん〳〵と有明寒き霜ばしら　八桑
榾堀かけてけふも亦來る　蕉

ウ
住憂(うく)て住持こたへぬ破れ寺　珊
どう〳〵と鳴濱風の音　風
若黨に羽織(二)ぬがせて假枕　鄰
ちいさき顏の身嗜(たしなみ)よき　桑
商もゆるりと内の納りて　蕉
山のかぶさる下市の里　珊
草臥のつゐては旅の氣むづかし　風
四日の月もまだ細き影　鄰
穐來ても畠の土のひゞわれて　桑
雲雀の羽のはえ揃ふ聲　蕉
べら〳〵と足の(三)よだるき花盛　珊
ひらたひ山に霞立なり　風

名
正月の末より鍛冶の人雇(やとひ)　鄰
濡たる俵(へう)をこかす分ケ取　桑
昔の酒寐てから醉のほかつきて　蕉
五ツがなれば歸る女房　珊
此際(四)を利上ゲばかりに云延し　風
まんまと今朝は鞆(とも)を乘出す　鄰
結搆な肴を汁に切入レて　桑
見せより奥に家はひつ込　蕉
取分て今年は晴ル盆の月　珊
まだ花もなき蕎麥の遲蒔　風
柴栗の葉もうつすりと染なして　鄰
國から來る人に物いふ　桑

ウ
閙(いそが)しう一日搗て供支度　蕉
糞汲にほひ隣さうなり　珊
今の間にしるう成程降時雨　風
日川の五器を籠に取込ム　桑
扈從衆御茶屋の花にさゝめきて　鄰
小舟を廻す池の山吹　筆

〔一〕寶曆板に「相手揃ふ」
〔二〕『袖珍鈔』に「羽折持せて」
〔三〕芭蕉袖草紙に「足のまだるき」
〔四〕同「此際も利上ヶ」

小文庫　　元祿七年作

前巻と同じく上方行脚の時、芭蕉に對する送別吟を立句とした兩吟歌仙である。山店は石川氏江戸の人である。史邦の『小文庫』に此の巻を載せてゐる。

餞別

新麥はわざとすゝめぬ首途かな　　山店
　まだ相蚊屋の空はるか也　　ばせを
馬時の過て淋しき牧の野に　　同
　四五千石のまつのたて山　　店
方々へ醫者を引する暮の月　　同
　躍の作法たれもおぼえず　　蕉
ウ
盆過の比から寺へ普請して　　同
　ほしがるものに菊をやらるゝ　　店
蓬生に戀をやめたる男ぶり　　蕉
　濕のふきでゝかゆき南氣　　店
丹波から使もなくて啼鳥　　蕉
　節季が來れど利あげにもせぬ　　店
雫に出て土器賣を追ちらし　　蕉
　たゞ原中に月ぞさえける　　店
神鳴のひつかりとして沙汰もなき　　蕉
　しやくりがやんで氣がかるうなる　　店
奧の院をづくづく花をさしのぞき　　蕉
　けさからひとつ鶯のなく　　店
名
春の日に産屋の伽のつゞくりと　　同
　かはるがはるの湯漬くふらん　　蕉
いそがしくみ　股立を取並び〔二〕　　店
　日つらもあかず霰ふるなり　　蕉

からびたる櫟(クヌギ)林に日が(二)くれて　店
佛の木地を包む糸だて　蕉
ごろ／＼と臼挽出せばほとゝぎす　店
そゞろに草のはゆる(三)竹椽　蕉
羽二重の赤ばるまでに物おもひ　店
わかい時から神せゝりする　蕉
雛をまたぬすまれしけさの月　店
畠はあれて山くずのはな　蕉
ウ
日光へたん(丹)がら(殻)下す穐のころ　店
くれ／＼たのむ弟の事　蕉
ゆふかぜに蒲生の家も敗れ行　同
物にせばやとさする(四)天目　店
花のあるうちは野山をぶらつきて　同
藤くれかゝる黒谷のみち　蕉

〔一〕『袖珍鈔』に「イ二取習ひ」
〔二〕『一葉集』に「日の暮て」
〔三〕同「草のはえる」
〔四〕『袖珍鈔』に「イ二なでる」

鄙懐紙

元祿七年作

美濃大垣の藩士岡田氏千川の爲めに寄せた發句によつて、同藩中の人々と共に卷いた歌仙である。本文は『芭蕉袖草紙』引用の『鄙懐紙』により天明七年板の『歌仙七部拾遺』その他を以て校合した。

城主君、日光御代參勤させ給ふに扈從す岡田氏にまうす。(一)

篠の露袴にかけし茂(しげ)りかな　芭蕉
牡丹のはなを拜む廣場(ひろには)　千川
みじか夜も月は急がぬ(二)形(かたち)して　涼葉
壁にたて置琵琶を轉(ころ)ばす　左柳
雪よりは藁(わら)ふむ馬の冬ごもり　川
出口とゞまる金山の砂　蕉

ウ
吹たふす(四)杉も起さずこの社(やしろ)　柳
いつも茶のみに寄る端の家　葉
犬の子の歩(あゆみ)またぬほど能(よく)肥て　青山
稲する臼を借りにこそやれ　川
露深き曹洞寺の夕づとめ　蕉
瀬のひゞきよりのぼる月代(つきしろ)　山
生(なま)ながら鮒は鱠(なます)に作られて　葉
簀子(すのこ)出來(でか)せばまづ疊しく　柳
順禮の歸りて旅の物がたり　川
兄より兄に傳ふ脇ざし　蕉
花見んとなをる圓座(ゑんざ)の暖(あたゝか)まり　山
狂へば梅にさはる前髪　葉
名
霞ふる踏歌(たふか)の宵を戀渡り　蕉
もりならべたる片器(へぎ)(四)の蛤　此筋
湯上りの浴衣(ゆかた)干る間(ま)を待兼て　葉
窓の破れに入るゝ北風　柳
さびしさにすゞみ(五)崩せば鳥も來ず　筋
霧のまがきは何時のやま　遊糸
萩島年貢の柴に刈そへ(六)て　川
酒屋の門をたゝく月の夜　葉
人足の貫目引あふござ(蓙)づゝみ(包)　大舟
園をとはれて笠を見せけり　蕉
叢(クサムラ)と日ごろおもひし死所　糸
降り出す雨にさわぐ蟬の音　筋
ウ
隨身のかざす矢並を繕(つくろ)ひて　柳
火にかゞやきし門の金物　舟
院内に宇治川ちかき浪の聲　葉
囃(はや)しとぎれて休む筆取　川
此春はいつより(七)寒き花の陰　蕉
蛙の丈の見ゆる苗代(なはしろ)　糸

〔一〕『哥仙七部拾遺』に「岡田氏に寄す」
〔二〕『金蘭集』に「いそがぬ形なして」
〔三〕同「イニ松」
〔四〕同「片木の蛤」
〔五〕『一葉集』に「涼くづせば」
〔六〕『桃の白實』に「柴に刈そめて」
〔七〕同「いつより早き」

笈日記

元祿七年作

尾張から伊勢の桑名に廻る佐屋で、見送りの露川・素覽と三吟を試みた連句である。支考の『笈日記』に收めてある。二の表からは後に追加したので芭蕉は加はつて居らぬ。杜旭の『ゆすりもの』は元祿八年の稿本であるが、此の卷の二の表以後は『笈日記』と相違した箇所が多い。

隱士山田氏の亭にとゞめられて

水鷄鳴と人のいへばや佐屋泊　はせを
苗の雫を舟になげ込　露川
朝風にむかふ合羽を吹たてゝ　素覽
追手のうちへ走る生もの　翁
さかやきも暖簾せりあふ月の秋　川
崩(くづれ)てわたる椋鳥の聲　覽

ウ

耕作の事をよくしる初あらし　翁
豆腐あぢなき信濃海(マヽ)道　川
尻敷の緣(へり)とりござ(莚)も敷(しき)やぶり　覽
雨の降日をかきつけにけり　翁
炮烙のもち(黐)にくるしむ蠅の足　川
藺を刈あげて門にひろぐる　覽
切麥であちらこちらへ呼れあふ　翁
お旅の宮のあさき宵月　川
うそ寒き言葉の釘に待ほうけ　覽
袖にかなぐる前髮の露　翁
咲花に二腰はさむ無足人　川
打ひらいたるげんげしま畑　覽

二オ

山霞鉢の脚場を見おろして　支考
船の自由は半日に行　左次
月夜にて物事しよき盆の際　巴丈
かりもつ時の瓜を漬込　川
三鉦の念佛にうつる稲の風　覽
使をよせて門にたゝずむ　考
我戀は逢て笠さる山もなし　次
年越の夜の殊にうたゝ寐　丈

扨は下戸いちこのやうに成にけり　川
達者自慢の先に立れた　覽
金剛が一世の時の花盛　考
つゝじに木瓜の照わたる影　次
二ウ
春の野のつたらに廣き白河原　丈
三俵つけて馬の鈴音　川
それ〳〵に男女も罷そろへ　覽
よめらぬ先に娘參宮　考
あり明に百度もかはる秋の空　次
疊もにほふ栁の松葺（マヽ）　丈

杜旭の『ゆすり物』には一の折は『笈日記』と同じく、二の表より圏點の如く改作されてゐる。但し句の花と擧句は空白のまゝ記してない。參考の爲め附記して置く。

二
一夏は暮して見たき山かすみ　支考
ふねの自由は半日にゆく　左次
月夜にて物事しよき盆の前　巴丈
かりもり時の瓜を漬込　川
三鉦の念佛にうつる秋の風　覽
小者なやりて門にたゝずむ　考
我戀は逢うて笠取山もなし　次
貧はつらさよ　假寐
酒盛に醉ふた心も面白や　川
壹りや貳里の路は朝の間　覽
二ウ
伊勢に居て芝居なしらぬ花盛　考
つゝじの時はなを長閑也　次
春の野のやたらに廣き白河原　丈
から身で馬にしやん〳〵と行　川
板茸のゆたかに見ゆるお藏入　覽
山ちかふして薪澤山　考

ゆすり物
元祿七年作

尾張名古屋の荷兮亭で行つた連句で、荷兮・越

人に對して勘當の弟子呼はりする説の根據なきは此の歌仙が見ても知れやう。名古屋の蕉門杜旭が元祿八年の稿本「ゆすり物」にある以外『一葉集』その他に全く所見ない。本文は右杜旭の自筆稿本より採つて、こゝに初めて飜刻するものである。

いぬの夏　荷兮亭

世は旅に代かく小田の行戻り　翁
水雞の道にわたすこは板　荷兮
草むしろ煙草を廻す斗にて　巴丈
誰聲か能哥うたひ出せ　越人
とき／＼と明はなれたる月の色　長江
ひしこきりなくあがる大網　桃里
秋の風ようも外る此戸かな　傘下
苫にもならぬか日の上の瘤　桃首
一門の廣きは事のあき間なし　大椿
藏をかられて雜穀積るゝ　翁
櫓も櫂もふねに作れる黄楊の形　兮
雪みる寺にならふかい餅　丈
中／＼に風流き初瀨山　人
久しきかゝぬ髮のかたまり　下
硯の身のいもを仕立てうれしさよ　江
おほへながらに落る精進　釣雪
此神に珠數も持せず月に花　首
土地も長閑に所千石　雪
鶯の夜の明きるを待かねて　里
ひねりひねれば蚤で有けり　人
此君に問つめられて名乘なり　江
なみたの品に喰破るそで　下
能癖をとろしと火燵取のけて　翁
あれて狸のかへる穐風　雪
朝月やすほりとぬける桶の底　首
すいきに首を落されて伏　兮
近付に具足はがれて丸裸　人
明日はからりと替ル分別　里

立入て神樂の鈴に泣けり　丈
　扨は無筆のしるゝ正直　江
江戸の子か影で酒おも下さるゝ　翁
　四五疊まげてあたまぬらさず　兮
一冊も繪の有本はなかりけり　下
　從弟はとこも並ぶ茄喰　首
はつ花に日和はなぎてなきすべて　里
　足もとよりもひばりあげたり　丈

となみ山　其の一　元祿七年作

越中井波の浪化上人が元祿八年板行した『浪化集』の下卷『さなみ山』に載する三吟歌仙である。『一葉集』は「二月廿三日」といふ前書を置き元祿七年の部に入れてある。芭蕉は二月江戸に居た。浪化に逢ふ筈がない。多分去來と兩吟を試みて未完の卷に、元祿七年夏芭蕉の落柿舍に來れる時、一吟として其の殘れるを繼いで滿尾したものであらう。

鶯に朝日さす也竹閣子　浪化
　禮者うすらぐ春の靜さ　去來
やぶ入の見やげ似合に拵へて　同
　又時の間にわるうなる空　化
炬燵切寒もちかしくれの月　同
　ひろい處を丸口にかる　來
ウ
旅人に錢をかはるゝ田舍道　同
　かひこの臭き六月の末　化
雫たる網を一ぱい引ちらし　同
　小屋敷並ぶ城の裏町　來
謂分のちよつ／＼と起る築道事　同
　梅咲そめて立花はやらす　化
年中を松の内より料理くひ　同
　いせの狀日のいそがしき春　來
上紺の木綿合羽に傘さして　同

湯屋の手透は八ッさがり也　化
名月のもやう互にかくしあひ　同
一部でもなき梨子の切物　芭蕉
二オ 玉味噌の信濃にかゝる秋の風　同
不足な寺を無理に持する　來
右の手の捩ひしだひに強ふなり　同
點かけてやる相役の文　化
此の宿をわめいて通る鮎の鮓　同
青田うねりて夕立のかぜ　蕉
平めなる石を敷たる行水場　同
給仕をさせて馬夫が食喰ふ　來
月くらき夜の鹽梅を星で見る　同
聖靈棚はよほど窮屈　化
しのぶ間を踊に出るとおもはせて　同
來てうからかす去年の傍輩　來
二ウ 參宮といへば盜もゆるしけり　化
につと朝日に迎ふよこ雲　蕉
蒼みたる松より花の咲こぼれ　來
四五人とほる僧長閑なり　化
薪過町の子供の稽古能　蕉
いづくも春にしたきよの中　來

浪化十五　去來十五　芭蕉六

となみ山　其の二　元祿七年作

浪化は『となみ山』に此の連句に就いて「蕉翁の落柿舍に寓居し給ひけるころ、たづねまいりて主客三句の情をむすび立かへりぬるを、その後人〳〵まいりける序、終に一卷にみち侍ること去來がもとより送られける」と前文を書いてゐる。それに依つて第三までゝ卷き殘したものを人々次韻して、歌仙滿尾を告げた事がよく明瞭する。重厚の『落柿舍日記』にも出てゐる。

葉がくれをこけ出て瓜の暑さ哉　去來
野松に蟬のなき立る聲　浪化

歩荷持手振の人と咄しして　芭蕉
かごと御供の間ひとぎるゝ　之道
半時ほど夜のかゝりたる月の入　丈草
火のぼちへと燃えてやゝ寒　支考
ウ
軒口は蔦這のぼるふしん前　惟然
兄弟どもが兄をあがむる　野童
切立てゝ畠見渡す丹波やま　野明
そろへ出す冬のうり物　来
寄合は鯨のとれぬさたばかり　道
あかうすゝけしあんどうのさや　草
ちくとした風呂敷さげて戸をたゝき　考
ごそりへとそよぐ黍の葉　然
砂川の淺くながるゝ夕月夜　童
露しとれども輕荷ふらつく　明
百遣ふ花の木陰の店屋もの　道
菜種朧に西を見はらす　来
二オ
此寺に楞厳よめしこぞの春　草
獵場の公事のむづかしうなる　考
朝の内むす子に馬をおはせやり　然
餅つきあげて汁粉も出す　童
はご板の寄て一間にあまるほど　明
借上いふてめかけたづぬる　道
茶小紋にあの十徳のすんきりと　来
手船きつさと秋は来にけり　草
此夕月を野にとり山にとり　考
しぎが畠のなるこがらつく　然
雨気づく鉢の戻りのはらへと　童
早う出来たる市の小屋懸　明
二ウ
此ごろの化物ばなししづまりて　道
なこと舅のなをる挨拶　考
御局の里下りしては涙ぐみ　草
ぬつたはこよら物のだし入　蕉
花の香の暫くやまぬ宮うつし　然
日がな一日鳥のさえづり　明

去来四　浪化一　之道五　芭蕉二
支考五　丈草五　野童四、惟然五

野明五

砂川集

元祿七年作

浪化の『續有磯海』に「元祿七年後の五月に去來が許にて故翁に向對の折、此比難波の之道がまいりて、人々打より申捨てたるとて見せ給ひし歌仙一卷、今續集の冠となし給ふ」とあつて此の卷を掲げ、別に諷竹(之道)の『砂川集』にも載せてある。兩書とも元祿十一年の出板であるが、爰には『砂川集』所載の卷を本文として『續有磯海』の卷と對校し、兩者の異同を註記した。

元祿七後五月下旬洛參會時

落柿舍即興

牛流す村のさはぎや五月雨　(一)諷竹
ヽあを葉ふき切栴檀の花　去來
一枚の莚に晝ねをし合て　芭蕉
つかもこじりもふるきわきざし　惟然
いき影に苞と海鼠の下る也　丈草
堤おりては田の中のみち　支考

ウ

家〱はなよ竹はらの間にて　來
お斎は刀に十五はいあり　(二)竹
秋もやゝ今朝からさむき袷がけ　然
雁より鴨のはやう來て居る　野明
抱込て松山ひろき有明に　考
あふ人ごとの魚くさきなり　(三)蕉
雨乞のしぶりながらに降出して　草
紡苧をひたす櫛箱のふた　然
極樂でよき居所をたのみやり　竹
しはうきたなゝうき世經にけり　來
道もなき畠の畦の花ざかり　草
半夏を雉子のむしる明ぼの　考

二オ

川船のにごりにくだすうす霞　(四)明
塔にのぼりて消るしら雲　然

賣に出す竹の子堀ておしむらん〔五〕　考
　茶どきの雨のめいわくな隙　竹
このごろの上下の衆のもどらるゝ〔六〕　來
　腰に杖さす宿の氣ちがひ〔七〕　蕉
わらぶきにゆふこの形のおもたくて　然
　ちら〳〵鳥のわたり初けり　明
朝の月起〳〵たばこ五六ぷく　竹
　分別なしに戀をしかゝる〔八〕　來
逢坐におもしろげつく伏見脇　蕉
　かけんをせゝる淺漬の桶　然

二ウ

出來て來る靑の下染氣に入て　明
　何をけら〳〵わらふかみゆひ　竹
吸物で座敷の客を立せたる〔九〕　來
　肥後の相場を又聞てこい　蕉
幾口が花見の道にさそはれて　然
　ひぐせになりしはるのあめかぜ　明

〔一〕『續有磯海』に作者名「之道」とあり、諷竹の別名にして以下本文「竹」とあるに同集に「道」とあれど煩はしければ一々註せず。
〔二〕同「十五盃有り」
〔三〕同「逢ふにごふ人」
〔四〕同「猿船の出にくだるうす霞」
〔五〕同「賣にやる」
〔六〕同「上戸の衆のもどらまし」
〔七〕同「宿の氣違」
〔八〕同「戀に仕かゝる」
〔九〕同「客をたゝせけり」

市の庵　元祿七年作

此の卷は去來の落柿舍に假寓中の作である。酒堂は『市の庵』に入れて元祿七年出板した。安永三年に至り井上重厚は『落柿舍日記』に再刻して以來諸集に編入されてゐる。本文は『市の庵』により『落柿舍日記』と對校した。

柳小折〔一〕片荷は涼し初眞瓜　芭蕉

　間引捨たる道中の稗　酒堂
村雀里より岡に出ありきて　去來
　堀かけ渡す手前右がき　支考
月殘る河水ふくむ船の端　丈草
　小鰯かれて砂に照り付　素牛

ウ
上を着てそこらを誘ふ墓參　堂
　手桶を入ゝお通のあと　蕉
癨にも食はいつものごとくにて　來
　大工の邪魔に鋸をかる　考
竹樋の水汲かくる庫裏の先　牛
　便をまちて酢德利をやる　堂
降出しも(三)忘るゝ雨のしたくと　草
　惣くやめにしたる洗足　來
打鮑を燒と鱠と兩方に　堂
　黑みて高き樫の木の森　牛
月花に小き門を出ッ入ッ　蕉
　巢おろす兒の登る腰板　堂

二
陽炎に眠氣付たる醫者の供　草
　新茶のかざのほつとして來る　蕉
片口の溜をそつと指し出して　堂
　迎をたのむ明日の別端　來
薄雪の一遍庭に降渡り　考
　御前はしんと次の田樂　蕉
追込の綱を鼠のならす音　堂
　隣の明屋あらし吹也　牛
葬禮のあとで經よむ道心坊　來
　手拭脫でおろす牛の荷　考
川ひとつ渡て寒き有明に　蕉
　岩にのせたる畑上の庵　草

ウ
正月もいにやれば淋し晦日過　堂
　稲漬に來るとゝの名代　來
咲花の片へら殘しほ鰹　牛
　彼岸をかけてお隙さゝやく　草
白粉をぬれども下地くろい顏　考
　役者もやうの衣の薰　來

芭蕉六　酒堂八　去來七　支考五

丈草五　素牛五

〔一〕『落柿舍日記』に「柳骨折」
〔二〕同「ふり出してわするゝ」

ゆすり物　元祿七年作

杜旭の稿本『ゆすり物』にある一卷である。『一葉集』は何から引用したのであるか、作者素牛は惟然、鳳仭は野明となつてゐる。孰れも改號後の名である。本文は『ゆすり物』により『一葉集』その他を以て校合した。

夕皃や蔓に場をとる夏座敷　爲有
　西日をふせぐ藪の下刈　翁
ひら〳〵と淺瀨に鮴の連立て　素牛
　馬の廻りはみな手人なり　鳳仭
一貫の錢で酒かふ暮の月　翁
　稗に穗蓼に庭の埒なき　牛
ウ
松茸も小僧もたねば守られず　仭
　ほたゆる牛を人に借るゝ　翁
臺所の續に部屋の口明て　牛
　旅のちそうに尿瓶指出す　仭
物一ツいふては念佛唱へられ　翁
　今のあいだに何度時雨るゝ　牛
めき〳〵と川かさむき鳥の聲　仭
　米の味なき此里の稻　翁
月影に馴染の〔一〕多宿かりて　牛
　霧の奥なる〔二〕長谷の晩鐘　仭
花の香に啼ぬ〔三〕鳥の幾群か　翁
　土〔四〕ほりかへす芋種の穴　牛
二
陽炎に田夫役者の荷の通り　仭
　いせの噺に料理先だつ　翁
椙の木をすうすと風の吹渡　牛
　尻もむすばぬ戀ぞほぐるゝ　仭

うと／＼と夜すがら君を負(おひ)行(ありク)　翁
豆腐仕かける(五)窓間の月　牛
うつくしきお堀廻りの薄紅葉　去來
(六)紙羽ひろぐる芝原の露　之道
(七)跪ふて湯づけかき込釜の前　似
師走の役に(八)立る雨がへ　來
たふ／＼と水汲入ていさぎ能(キ)　牛
松のみどりの(九)すい／＼として　似
ウ
節(ふし)經のなぐさみに成二人庵　來
心きいたる雲の赤さか　牛
くたびれしきのふの軍物語　似
髪おしたばね(一〇)羽織廣袖　來
難浪なる花の新町まれに來て　牛
文に書るゝ柳山ぶき　似

〔一一〕『ゆすり物』に「多キ」のふり假名「多(フカ)キ」とあり、『一葉集』は「深き」
〔一二〕『一葉集』に「泊瀬の」
〔一三〕同「啼ぬ小鳥の」

〔四〕同「土はれかへす」
〔五〕同「豆腐しかゝる」
〔六〕同「合羽ひろぐる」
〔七〕同「蹲ふて」
〔八〕同「役にたゝぬ」
〔九〕同「さえ／＼として」
〔一〇〕同「おしたばれ羽折る」

哥仙七部拾遺　元祿七年作

前巻とは二の表第四句までは同一の巻で、第五句から附句も作者も相違してゐる。『哥仙七部拾遺』と『一葉集』とに載するものを對校してこゝに掲ぐ。前半圏點を附せる文字は前巻と異つてゐる。

夕顔や蔓に場をとる夏坐敷　爲有
西日をふせぐ藪の下苅　翁
ちら／＼と淺瀬に鯵のつれ立て　惟然
馬のまはりはみな手入也　野明

一貫の錢で酒買ふ昏の月　翁
　秤に穗蓼に庭の埒なき　然
ウ
松茸も小僧もたれば守られず　明
　ほだゆる牛も人にかゝるゝ　翁
臺所のつゞきに部屋の口明て　然
　旅の馳走に尿瓶さし出す　明
物ひさついうても〔一〕念佛唱られ　翁
　いまの間に何〔二〕度しぐるゝ　然
めき〳〵さ川より寒き鳥の聲　明
　米の味なき此里の稻　翁
月影に馴染のふかき宿かりて　然
　霧のおくなる初瀨の曉鐘　明
花の香に啼ぬ鴉の幾むれか　翁
　土ほりかへす芋種の穴　然
二
陽炎に田舍役者の荷の通り　明
　伊勢のはなしに料理先だつ　翁
椙の木をすうすさ風の鳴わたり　然
　尻も結ばぬ虚言ぞほぐるゝ　明
膳取〔三〕を最期に眠る宵の月　露川
　きり〳〵す飛さや棚の中　如行
秋もはや圍爐裏戀しく成にけり　松星
　合點のゆかぬ雲の出て來る　夾始
脇差をかるふ受とるうき藏主　行
　木に抱付てのぞく谷底　川
仰山になり音立て家根普請　始
　日やけ畠も上田の出來　星
ウ
夏の夜も明がた冴る篠の露　川
　笊かぶりて替とりに行　行
隱家はみのゝ中でも高須也　星
　此月末にをはる楞嚴　始
むかしから花に日が照雨が降　行
　たらはぬ聲もまじる鶯　筆

〔一〕『一葉集』に「いひても念佛」
〔二〕同「いく度しぐるゝ」
〔三〕同「膳とるを」

續猿蓑

元禄七年作

支考の「今宵賦」が前 の如き體裁で『續猿蓑』の上卷に出てゐる。近江膳所藩の曲翠亭で興行である。杜旭の『ゆすり物』にも此の卷がある。『續猿蓑』の板行より四年前の稿本なので、本文としては此の方による可きだが『續猿蓑』は板本故これを本文とし、『ゆすり物』を以て校合した。

夏の夜や崩て明し冷し物　芭蕉
露ははらりと蓮の椽先　曲翠
鶯はいつその程に音を入て　臥高
古き革籠に反故おし込　惟然
月影の雪もちかよる雲の色　支考
しまふて錢を分る駕かき　芭蕉
ウ
猪を狩場の外へ追にがし　翠
山から石に名を書て出す　高
飯櫃なる面桶にはさむ火打鎌〔一〕　然
鳶で工夫をしたる照降　考
〔二〕おれが事哥に讀るゝ橋の番　蕉
持佛のかほに夕日さし込　翠
平畦に菜を蒔立したばこ跡　考
秋風わたる門の居風呂〔三〕　然
馬引て賑ひ初る月の影　高
尾張でつきしもとの名になる〔四〕　蕉
餅好のことしの花にあらはれて　翠
正月ものゝ襟もよごさず　高
二
春風に普請のつもりいたす也　然
藪から村へぬけるうら道　考
喰かねぬ聟も舅も口きいて　蕉
何ぞの時は山伏になる　翠
笹つとを棒に付たるはさみ箱　高
蕨こはばる卯月野ゝ末　蕉
相宿と跡先に立つ矢木の町　考
際の日和に雪の氣遣　然

呑ごゝろ手をせぬ酒の引はなし　翠
着かえの分を舟へあづくる　高
封付し文箱(五)來たる月の暮　蕉
ぞろ／＼ありく盆の上臈衆　考
ウ
虫籠つる四條の角の河原町　然
高瀬をあぐる表(六)一固　翠
今の間に鑓を見かくす橋の上　高
大キな鐘のどんに聞ゆる　然
盛なる花にも扉おしよせて　考
腰かけつみし藤棚の下　(七)高

（一）『ゆすり物』に「火打鎰」
（二）同「我が事」と「我」にテレとふり假名あり、
（三）同「門の水風呂」
（四）『續猿蓑』原本に「もの」とあり。
（五）『ゆすり物』に「文箱持來ル」
（六）同「表一こり」
（七）同、作者名「筆」

芭蕉翁俳諧集　元祿七年？

近江円の宮の能太夫本間主馬事丹野亭に於て、「太夫の家名を」稱せる發句で元祿四年の作とされ、此の連句も亦『芭蕉翁俳諧集』及び『芭蕉袖草紙』は元祿四年の作とし、『金蘭集』にも「元祿四ひつちの卯月連衆八人」とあるので、『幽蘭集』及び『一葉集』が本卷を元祿七年の作と鑑別した點に就いて疑問を生じて來る。或は發句が元祿四年の作であるかも知れない。さうすれば『一葉集』の部立が正しくなる。尚後の考證を期してこゝには年代の疑問のまゝとして置かう。

ひら／＼と揚る扇や雲の峰　翁
青葉ほちつく夕立の(一)朝　安世
瀬を落す舟を名殘に見送りて　支考
はなれて家を造る原中　空芽

月の影砧の拍子乘て來る　士 龍
大かた虫の手を揃へなく　丹 野
ウ
傘をすぼめて戻る秋の暮　芽
窓から呼(よぶ)る人の言傳(ことづて)　翁
さつぱりと物を着かへて連(つれ)を待　世
夜が明るやらしらむ海際　考
いふ事に心を付る別して　野
眞向の風に顔を吹るゝ　芽
よう肥るむす子の居(すわ)る膝のうへ　翁
そろ〳〵江戸の草臥の來る　路 通
手一ッでひたひらなか(中)の恩もきす　、
ちつとの事に枝ふしがつく　〔三〕龍
月花を紀(ただす)の宮にかしこまり　考
あゝらけうとや猫さかりゆく　野
名
石塔を見にとてけさはとう(疾)出る　芽
背丈(たけ)仲たる悴きづかう　世
こくめんな仲間が寄て不了簡　考
豆踏出して高い駕籠かる　野

絹帶に錢をはさみて穴があく　龍
名馴の町の近付もへる　翁
明月の餅にあてたる關東早稻　葉 文
ことしはいかうわたるあちむら　通
萱葺はしつぽりと降る秋の雨　世
いつ作りても詩は上手なり　考
女房にたゞ笑れぬ覺悟して　野
尻はれ武士の二番はへとも　龍
ウ
土手筋の紫竹は秋に切たがり　野
田の草時にはやる富士垢離(ごり)　文
蚊の居ずば有ものでない夏の月　翁
酒しほと名を付(つけ)て呑るゝ　世
病ぬいて結句(けつく)まめなる花ざかり　通
どちらへむくも空はどんより　龍

〔一〕『芭蕉翁草紙』に「夕立の跡●」
〔二〕『芭蕉翁俳諧集』に作者名〇となり居り、以下〇のまゝ作者名を記さゞるところ多けれど、『一葉集』によつてこれを補へり。

烏の道

元祿七年作

近江大津の醫師木節亭にての四吟歌仙である。前文によつて興行の月日は明瞭である。奈良の玄梅の『烏の道』に全卷を載せて元祿十年板行された。杜旭の『ゆすり物』にも收めてある。本文は『烏の道』により『ゆすり物』及び眠郎の『雪の薄』を以て校合其の異同を檢した。

元祿七年六月廿一日　大津木節菴にて

秋ちかき心の寄(よる)や四疊半　翁
しどろにふ(一)伏せる撫子の露　木節
月殘る夜ぶ(二)振りの火影打消(けし)て　惟然
起ると澤に下る(三)しら白さぎ鷺　支考
降(ふり)まじる丸雪(あられ)みぞれの一しきり　節
手のひらふいて糊さいく細工する　翁

ウ
夕食(めし)をくはで隣の膳を待(まつ)　考
なにの箱ともし(四)れぬ大きさ　然
宿〳〵で咄(はなし)のかはる喧嘩沙汰　翁
(五)うが〳〵蚤のせゝるひとりね　節
佛壇の障子に月のさしかゝり(六)　然
(七)棕から弓のおつる秋かぜ　考
八朔(はつさく)の禮はそこ〳〵仕廻けり　節
舟荷の鯖(さば)の時分はづるゝ　翁
西美濃は地卑(八)に水の出る所　考
持寄(もちより)にする醫者の草菴　然
結かけて細縄たらぬ花の垣　節
足袋ぬいで干す晝のかげろふ　考

ナ
年頭(九)にちいさきやつら供させて　翁
隱すたよりを立ながらきく聞　節
(一〇)行燈の上より白き額(一一)つき　然
疊に琵琶をどつかりと置　翁
半蔀(はじとみ)は四面(一二)に雨を見るやうに　考
竹の根をゆく水のさら〳〵(一三)　然

したしたと京への枇杷を荷(にな)つれ　　節
　嫁とむすめにわる口をこく(一三)　　考
(一四)客は皆さむくてこそる火燵の間　　翁
　置わすれたるものさがすなり　　節
髪結て番に出る日の朝月夜　　然
　木に十ばかり柿をたしなむ　　翁
ウ
滿作に中稲(なかて)仕あげて喰祭(一五)　　考
　桶もたらい(盥)もあたらしき竹輪(たが)　　然
投うちをはづれて猫の逃(一六)あるき　　節
　首(つぶり)にものをかぶる掃除日　　考
花咲て茶摘(一七)初まる裏の山　　翁
　つゝじの(一八)肥る赤土の岸　　然

〔一〕『ゆすり物』に「しさろに寢たる」、『雪の薄』に「しさろにふける」
〔二〕同、作者名「柔牛」。素牛は惟然の一號なり、以下本文惟然とあるは同書は素牛となり居れり。
〔三〕同「おるゝしら鷺」
〔四〕同「箱ともみえぬ」
〔五〕同「蚤の血のつく蚊屋のみじかき」

〔六〕『雪の薄』に「月のさしかゝる」
〔七〕『ゆすり物』に「樑(ムネ)」とふり假名あり。
〔八〕同「地低に水の」
〔九〕『一葉集』に「年禮に」
〔一〇〕『ゆすり物』に「灯火の上より」
〔一一〕同「四方に雨を」
〔一二〕同「水のきらきら」
〔一三〕同「わる口をいふ」
〔一四〕同「旅籠屋の勝手火灯鉦の音」、『一葉集』は本文のまゝにて「寒くてこそる」
〔一五〕『雪の薄』に「喰う祭」
〔一六〕『ゆすり物』に「猫の欠行キ」
〔一七〕同「茶つみそむる」
〔一八〕同「つゝじ肥たる赤土の嶺」

芭蕉翁俳諧集

元祿七年作

元祿七年九月三日伊賀上野にて支考の伊勢より來るを迎へて興行した卷である。支考の「笈日記」に「この松茸をその夜の卷頭に乞うけて一哥仙侍り、爰に記さず」として發句のみを揭ぐ。

松茸やしらぬ木の葉のへばりつき　翁
秋の日和は霜でかたまる　文(一)代
宵の月河原の道を中程に　支考
ことしは(二)きけて里の賣家　雪芝
四五人で万事をしまふ能太夫　猿雖
いきりし駒に鞍を置かね　望翠
ウ
けさの雪この頃よりもたつぷりと　惟然
屛風疊で膝すゆるなり　卓袋
段〻に上州米の取さばき　代
わか手の衆はそりのあはざる　考
鼠ゆく蒲團のうへの氣味わるく　芝
風になりたる八専の雨　雖
いそがしき躰にも見えず木薬屋　翠
三年立ど嫁が子のなき　翁
鶏の白きは人にとらせけり　袋
彫みもはてぬ佛あか[垢]つく　荻子
はつ花の垣に古竹結わたし　然
道はかどらぬ月の朧さ　代
ナ
はら〱と雉子に小鳥のおどされて　袋
鹿が谷へも豆腐屋は(三)行　考
年切の小さい顔に角を入　雖
水風呂の湯のうめ加減よき　子
二三本竹切たればかんがりと　考
愛宕の燈籠ならぶ番小屋　翁
酔ほれて枕にしたる駕籠の椽(四)　雖
花ぎつしりと付し水仙　芝
味噌賣の宵聞〱に音信て　代
木綿を藍につきこみにけり　袋
有明に本家の籾を磨(五)しまひ　然
茄子畠にみゆる露しも　子
ウ
此秋は蝮のはれ[腫]を煩ひて　翁
僧と俗との坐のわか[分]るなり　翠
呵るほどよふ焚付ぬ竈の下　芝
芝切入て馬屋葺ける　考
花寒き片岨山の(六)いたみ咲　雖
春の日南に蜚のしたゝめ　代

〔一〕『一葉集』に作者名「元代」
〔二〕同「こゝしはきけば」、『芭蕉袖草紙』に「こゝしはわけて」
〔三〕『一葉集』に「豆腐屋の行」
〔四〕同「鶴の絲」
〔五〕同「籾か搗仕舞」
〔六〕同「いかで咲」

今日の昔

元祿七年作

豐後日田の四方郎朱拙は芭蕉の連句の伊賀に殘れるを求めた處、大方は散佚して此の一卷のみ送り越したので元祿十二年『今日の昔』を板行して附載した。『七部集拾遺』の『今日の昔』は『初便』の題名を改めたのであるが、本文脫漏多くして杜撰甚だしい。但し此の歌仙は『初便』にも一卷滿尾して居る。

戊七月廿八日猿雖亭夜席

あれ〳〵て末は海行野分哉　猿雖
鶴の頭(かしら)をあぐる粟の穗　芭蕉
朝月夜駕(カゴ)に漸(やうやう)追付て　配刀
茶の煙たつ唆雁の鐵　望翠
かつたりと拐(あふこ)をおろす雜水取　土芳
窮屈さうに袴きるなり　卓袋
ウ
燭臺の小キ家にかゞやきて　翁
名ぬしと地下と立分る判　猿雖
燒食(やきめし)をわりても中のつめたくて　望翠
おもひくづさず出(いで)ぬくら(暗)かり　土芳
口(コノ)來(コロ)は扇の要(カナメ)仕習し　卓袋
湖水の面(おもて)月を見晴す　苔蘇
脇差の小尻の露をぬぐふ也　配刀
相撲にまけて云事もなし　猿雖
山陰は山伏村の一かまへ　翁
崩かゝりて軒の蜂の巣　卓袋
燒(たき)さして柴取りに行庭の花　土芳
土かきさがす春の風筋　翁

名
坪割の川除の石積あげて　望翠
日なた〳〵に虱とり合　苔蘇
大名の供の長さの果もなき　配刀
むかひのかゝのおこる血の道　猿雖
一升〔一〕は代を持て来ぬ酒の粕　翁
盥のそこに霰かたまる　望翠
〔二〕燈(ともしび)に革屋細工の夜は更て　土芳
鼬(イタチ)の聲の棚(たな)本(もと)の先　配刀
箒木はまかぬにはえて(生)茂る也　翁
〔三〕干帷子のしめる三日月　猿雖
神主は御供を持てあがるゝ　望翠
しばらく岸に休む筏士(イカダシ)　卓袋
ウ
衣きて旅する心しづかなり　翁
〔四〕加太へはいる關の別れど(所)　土芳
〔五〕耳(ミヽ)髄(スネ)をそがるゝやうに横しぶき　猿雖
行義の〔六〕わるき侍(やと)ひ六尺　望翠
大ぶりな蛸引あぐる花の陰　配刀
米の調子のたるむ二月　苔蘇

猿雖　六句　芭蕉翁七句　配刀五句　望翠六句
土芳　五句　卓袋　四句　苔蘇三句

〔一〕『芭蕉翁俳諧集』に「一升の」
〔二〕同「燈の」
〔三〕同「うす帷子」
〔四〕同「兜へはいる」
〔五〕同「耳たぶを」
〔六〕同「行義のわろき」

芭蕉門古人眞蹟　元祿七年作

前巻『今日の昔』所載の歌仙草稿である。伊賀上野の蕉門猿雖が芭蕉の旨を受けて執筆を勤めたその草稿であるらしい。猿雖の曾孫桐雨が天明二年義仲寺に奉納したものである。參考の爲め採錄するに際して、朱中の墨消しは活字を以て表示し難いので〔　〕の中に入れ、再案の文字はその傍に七號活字を以て組み、短句は長句より

下げて讀みやすくして、草稿の俤を傳へる事を旨とした。

荒〳〵て末は海行野〔本虫喰〕哉　猿雖
鶴の頭を上る粟の穂　翁
朝月夜駕籠にやう〳〵追付て　配力
ちやの煙立のふれんのしわ　望翠
（荷ふたひ）〔かったりと〕おふこをおろす雜水取　土芳
きうくつそうに袴鳴なり　卓袋
ウ
燭臺の小き家にかゞやきて　翁
（庄や）名主と地下と立分るなり　雖
燒めしをわりても中のつめ度て　翠
おもひ（初より）〔有口隠こ〕〔くつして〕出ぬくらがり　芳
頃日は扇子のかなめ仕習ひて　袋
湖の表月を見わたす　木白
脇指のこし（ろ）〔り〕の露をぬぐふ也　力
相撲にまけて云事もなし　雖
山かげは山伏村の一かまへ　翁
崩れかゝりし軒の蜂の巣　袋
（花盛眞）〔櫻さして〕柴（なはこふ花）〔取に行〕庭花　芳
（マヽ）（柳につなぐ馬の川口）　白
二
こへかきまわす春風筋　翁
坪わりの川よけの石積上げて　翠
日なた〳〵に風とり合　白
二
大名の供の長さのはてもなき　力
向のかゝのおこる血の道　雖
一升は代を（置）〔持〕て（來ぬ）〔来ぬ〕酒の粕　翁
たらいの底に霰かたよる　翠
燈に革や細工の夜は更て　芳
鴫の聲の棚元の先　力
ほうき木はまかぬにはへて茂る也　翁
干かたびらのしめる三ケ月　雖
神主の御供を持て上らるゝ　翠
暫く岸に休む筏士　袋
二ウ
衣着て旅する心靜也　翁
（伊賀路に）〔加太へ〕はいる關の別所〔ト〕　芳

耳すねをそかるゝやうに横しぶき　雖
行儀のゆるき(内の)六尺　翠
(花盛湯の呑度なこらへかね)　力
大ふりな蛤引あくる花の陰
(戸を押明けて(はいる)朧夜の暮)　白
米の調子のたるむ二月

壬生山家　元祿七年作

松露庵「鳥醉」の「壬生山家」に載する連句中の一巻である。作者の顔觸れよりして伊賀上野にて興行せる事を推定し得る。「芭蕉翁俳諧集」その他と對校して掲ぐ。

つふ／＼と掃木をもるゝ榎實哉　望翠
竹のはづれを初あらし吹　惟然
朝月に鵯さきへ尾をふりて　土芳
すればするほど豆賣賣レ切　雪芝
大八の通りかねたる猿小路　猿雖
師走の顔に編笠も着ず　翁
ウ 痩ながら水仙ひらく川おもて　卓袋
野中へ牛を(一)綱ほどきやる　九節
嫁入の來て賑かな門まはり　芝
杖と草履を預りて置　翠
一くらい氣色立たる月夜影　然
鱸釣なり鎌倉の浦　雖
大鳥のわたりて田にも畑にも　翁
蕎麥粉を震ふ帷子の裾(二)　袋
立ながら文書て置く見せの端　雖
錢持手にて祖母の泣るゝ　翁
まん丸に花の木陰の一かまへ　芳
どこやら寒き北の(三)春風　雖
二オ 旅籠屋に雲雀が啼ば出立焚　芝
ならひのわるき子を(四)譽る僧　袋
冬枯の九年母おしむ霜覆ひ　翁
たま／＼すれば居風呂の漏　芝

持鑓の一間所〔五〕にはいりかね　翠
あほうつかへば皆つかはれる〔六〕　芳
宵の口入みだれたる道具市　節
茶の呑ごろのぬるき小藥鑵　然
〔七〕間あれば又見たくなる繪のもやう　雖
ともに年寄逢坂の杉　翁
有明にしばしへだてゝ馬と駕　袋
露時雨より頭痛やみたり〔八〕　節

二ウ

引たてゝ留主にして置く萩の門　芳
ひとりたまかにはこぶふる竹　芝
ふら〳〵ときせる〔九〕付る貝のから　雖
いくつくさめのつゞく朝風　然
さは〳〵と花の〔一〇〕……大手に　翠
柳にまじる土手の若松　袋

〔一〕『芭蕉翁俳諧集』に「牛の綱ほどき」『一葉集』に「牛を縄ほどき」
〔二〕『芭蕉袖草紙』に「帷子の汗」
〔三〕『芭蕉翁俳諧集』に「春の北風」

〔四〕「習ひのわるい」『一葉集』に「わろき」
〔五〕『一葉集』に「一間床に」
〔六〕『芭蕉翁俳諧集』に「皆つかはるゝ」
〔七〕同「間かあれば」
〔八〕同「頭痛やみけり」
〔九〕同「煙管に付る」
〔一〇〕『一葉集』に「花の涙よる大手先」

續猿蓑　元祿七年作

伊賀上野の無名庵で卷いた四吟歌仙である。沾圃は江戸から芭蕉を慕つて來て支考・惟然と同坐したのであらう。『續猿蓑』の題名は此の沾圃の發句から附けたといふ説がある。

猿蓑にもれたる霜の松露哉　沾圃
日は寒けれど靜なる岡　芭蕉
水かるゝ池の中より道ありて　支考
篠竹まじる柴をいたゞく　惟然

鶏があかるとやがて暮の月　蕉
通りのなさに見世たつる秋　考
ウ
盆じまひ一荷で直ぎる鮨の魚　然
晝寐の鼾をなをしかねけり　蕉
聟が來てにつともせずに物語　考
中國よりの狀の吉左右　然
朔日の日はどこへやら振舞れ　蕉
一重羽織が失てたづぬる　考
きさんじな青葉の比の椴楓　然
山に門ある有明の月　蕉
初あらし畑〔一〕の人のかけまはり　考
水際光る濱の小鰯　然
見て通る紀三井は花の咲かゝり　蕉
荷持ひとりにいとゞ永き日　考
二オ
こち風の又西に成北になり　然
わが〔二〕手に脉を大事がらるゝ　蕉
後呼の內儀は今度屋敷から　考
喧嘩のさたもむざとせられぬ　然
大せつな日が二日有暮の鐘　蕉
雪かき分し中のどろ道　考
來る程の乘掛は皆出家衆　然
奥の世並は近年の作　蕉
酒よりも肴のやすき月見して　考
赤鶏頭を庭の正面　然
定らぬ娘のこゝろ取しづめ　蕉
寐汗のとまる今朝がたの夢　考
二ウ
鳥籠をづらりとおこす松の風　然
大工づかひの奥に聞ゆる　蕉
米搗もけふはよしとて歸る也　考
から身で市の中を押あふ　蕉
此あたり彌生は花のけもなくて　然
鴨の油のまだぬけぬ春　考

〔一〕原本「畑」の左傍に「畠」と小書あり
〔二〕原本「わが手」と「手」に濁點を附す

さいつころ

元祿七年作

奇淵は『芭蕉袖草紙』に「松島獨唫・立圃兩吟これも草稿のまゝ奥にあらはす、後人考べし」として『さいつころ』から再錄してゐる。『一葉集』はこれを除外してゐる。先人は此の立圃を初代の雛屋立圃と見て、芭蕉と兩吟を試みるには時代に錯誤があるといふ意味で否定してゐるのである。が、此の立圃は三代目で『續猿蓑』の作者沾圃の改號である。元祿八年板の『翁草』に「野々口立圃は我母方にゆかりたる人也。ある夜夢に見えて此句を予にあたへければ幸に芭蕉翁に願ひて、誹號を改メ古德をしたふもの也」として「雛ならで名乘を名乘ル人もがな」の夢想の發句に脇を附け、芭蕉その第三を與へてゐるので疑ふ可くもない。殊に沾圃は元祿七年「猿蓑に」（一）連句を伊賀にて四吟せる一人なので、此の歌仙も同年秋の兩吟と見て置くが、調子の上から疑問も起り得る。『さいつころ』の原本に接しないので確言はし難いが、暫らく芭蕉の兩吟として『芭蕉袖草紙』より再錄した。但し發句は十丈の『射水川』には「名月の夜やおも〳〵と茶臼山」となつてゐる。

重〳〵と名月の夜や茶臼山　桃青
肌寒しとてかり着初（はじむ）る　立圃
秋の葉のその匂ひより麝香草　、
ほうろく買にたれ賴ばや　青
かくばかり足の入たる高瀨舟　圃
けふも一日蟬のなく椎　青
宿ありと五里程出る家童子　圃
老はみな〳〵十念をまつ　青
水仙のさかりを見する神無月　圃
松純（二）（マヽ）また常盤なりけり　青
登られぬ大内山の后（きさき）がね　圃
雨はら〳〵と郭公聞（きく）　青

かりそめに尻をまくるも川渡り　圃
　煩ふてさへ西行は哥　青
秋までは畑に作るしろ茄子　圃
　花火とぼして星祭也　青
傾城と禱(ねぎ)の中から袖の月　圃
　狐の歩行く足音も屋根　、
魚籃(ぎよらん)寺と云へば其名も腥き　青
　附木賣まで濡る白雨(ゆふだち)　圃
お袋の部屋に植たるわすれ草　青
　沙石を讀で聞(きか)す不可思議　圃
精進もけふは延さず煤はらひ　青
　都鳥まで見る江戸の舟　圃
三ツ輪ぐむ老の姿も志賀之助　青
　またげ〳〵と戸を扣(たゝ)く風呂　圃
布袋とは彌勒菩薩(みろくぼさつ)の化身也　青
　鯉のうろこは三十六員　圃
仙人に成る事もがな秋の月　青
　その原〳〵はみな木賊刈　圃
むらさきのみのりてみする朝ぼらけ　、
　此川ごゑ(越)はうき人に逢ふ　青
みちのくの千引の石もこゝろあれ　圃
　かく捨し世を誰ひらふ戀　青
花も名になるてふ加藤壹歩殿　圃
　能(のう)はじめより高砂の松　筆

〔一〕『芭蕉袖草紙』に「純」の字「本文ノマヽ」と註あり。

一葉集　元祿七年作

九月十三日住吉の升市を見ての發句である。『笈日記』によると此の歌仙は翌十四日の興行である。『芭蕉袖草紙』は裏の第二句まで擧げ、『一葉集』に全卷を收めてある。それ以前の諸集に所見ない。

住よしの市に立て、其戻り長谷川
畦止亭、おの／＼月を見侍るに

升かふて分別替る月見かな　翁
秋のあらしに魚荷連立　畦止
家のある野は苅跡に花咲て　惟然
いつものくせにこのむ中眼　酒堂
此ごろと成て土用を暮しかね　支考
榎の枝をおろし過たり　之道
ウ
溝川につけ置笊を引て見る　青流
火のとほつたる亭のつきあげ　翁
蓋とれば椀のうどんの冷かへり　止
坂下てから一里ほど來る　然
照付て草もしほるゝ牛の糞　堂
村の出見世に集て寢る　考
嫁とりは女ばかりで埒をあけ　翁
大事がる子の秋の霜やけ　流
汁の實を又呼かへす朝の月　道
すゝきの中へ蟾がはひこむ　止
籾ふせてそれから遊ぶ花のかけ　考
折／＼たへぬ春の旅人　堂
ニウ
あたゝかに濱の藥師も明ひろげ　然
しるし見わけてかへす茶筵　翁
めつきりと油の相場あがりけり　流
又何所へやら羽折着て行　道
名號をよう見せたとて樽肴　堂
竹橋かくる山川の末　考
大根も細根になりて秋寒し　翁
若狹戀しう月のさやけさ　然
ゆるされて寢れば目かすむ夜永さよ　止
半造作でまづ障子はる　堂
氣みじかに針立ふいと歸らるゝ　道
地のしめるほど時雨ふり出す　流
ニウ
雌の此中うせて一羽雛　翁
ふりあきなひに棒さげて行　道
船入をあぢに住なす三井の鐘　流
枯た薪を澤山にたく　考

人〳〵の尻も居らぬ花盛　堂
蛆のはづれを雉子うつり行　然

蕾兄弟　元禄七年作

大阪の其柳亭にて興行の歌仙で、『笈日記』によると九月廿日前後の會である。蓮池水蛙方の『蕾兄弟』にある以外諸集に所見ない。子參の前文によると、伊賀の半殘の家に此の懐紙あり、半殘の甥恒川から子參が得て蛙方の『蕾兄弟』に寄せ、和享元年板行されたものである。

穐もはやはらつく雨に月の形　翁
下葉色づく菊の結ひ添　其柳
こつそりと獨りの當に蕎麥操て　支考
手間隙いれし屏風出來たり　酒堂
朝寐する内に使のつどひ居る　游刀

ウ
繩切ほどく炭の俵口　惟然
此際は鰤にてあへる市のもの　車庸
逢坂暮し夜の人音　翁
美しき尼のなまりの伊勢らしく　堂
住るに過る湯どの雪隠　庸
木の下で直に木綿を撰まはれ　柳
早稲も晩稲も(一)よい米の猶惟(二)な米になる)(三)米になりけり　刀
月影はおもひちがへて夜が更る　然
奉行のひきの甲斐を求し　考
高うなり低うなりたる酒の辭義　翁
財布切らるゝ柴賣の連　堂
さく花に内裏の浦の大へいさ　之道
馬を引出す軒のかげろふ　然
雇人の名を忘れたる節の客　考
手ばやく埒を明る緣組　庸
藪先の窓の障子のあたらしく　柳
(一[illegible]てたしなむ魚串の祭禮)(祖父の聖も登られし秋)　堂
此錢の有うち雪のふれかしと　翁

宵の口よりねたたやしけり　考

相撲取の宿は夕飯居へならべ　刀

疇を打越すはつ汐の浪　然

日は入てやがて月さす松の間　庸

（泣かお伽になりし）（笑ふ事より泣か）なぐさみ　翁

洗濯のおそきを文でせつかるゝ　堂

十夜の明に寒い雨降る　柳

逗留は茶で馳走する山家楽　考

あつらへて置臼のかすがい　刀

一二町つけ出す馬を呼かへし　翁

鶏おりる長塀の外　然

花ざかり何ぞといへば立て舞　庸

上髭あつてあたゝかなかほ　堂

〔一〕原本のまゝ、「湯ごの雪隠」の再案なるべし。

〔二〕本文「みな米になる」を墨消し、細字の方再案なるべし。

〔三〕本文「祖の聖も登られし秋」を墨消し、細字の方再案なるべし。

菊の塵　元祿二年作

大坂の園女亭で興行の卷で『菊の塵』の序に「芭蕉の翁、たづねきまして、白菊の目にたてゝみる塵もなし　さ吟じ出されしによりて六々の卷をなしぬ」さあり、「笈日記」に「此日の一會を生前の名殘さおもへば、その時の面影も見るやうにおもはるゝ也」さある。元祿七年九月廿七日である。朱拙は元祿十一年板の『後れ馳』に此の卷を擧げ「是ははせをの翁門人を捐（ステ）たまふ年の穐、難波にての卷なりさて或人の許より我が手に入りぬ」さ附記してある。桃鏡の『秋さ秋』及び素丸の『得々庵記』にも再錄されてゐるが、『菊の塵』から轉載した。

白菊の目に立て見る塵もなし　芭蕉

紅葉に水をながす朝月　園女

冷〳〵と鯛の片身を折まげて　(一)諷竹
何にもせずに年は暮行　(二)滑川
小袴に左右の銘は煤びたり　支考
みやこを(三)落ちつて國〳〵の旅　惟然
ウ
あらたまる杯に銀(四)をためてみる　洒堂
袖ふさぐより親の名代　舍羅
垣越にちよつと盥の禮いふて　(五)何中
普請のうちは小屋で火を燒　はせを
歸らぬにきはまる娵のさめすまし　その女
酒買てのむ早稻のすり初　諷竹
はれ〳〵と月の出かゝる杉の森　滑川
夜詰ひけたる町宿の秋　支考
とれたやら濱から通る肴籠　惟然
彼岸のぬくさ是でかたまる　洒堂
青芝はことにもえたつ奈良の花　はせを
出がはり時の一歩たしなむ　何中
名
通ひ路も横にならねばはいられず　諷竹
しどろになをす奥の(六)空櫃　滑川
あさ〳〵と色うつくしき重の蓋　洒堂
雪のかへしの北になる風　その女
柴賣の隣の小ども連だゝせ　支考
清藏口に夜のしらむ也　惟然
上下の橋の落たる川の音　何中
うへ田の中を鴻ののさつく　はせを
小がまへに不斷をかるう打なぐり　その女
嶋の仕出しのはやる帯機　洒堂
月かげも寒く師走の夜の長さ　諷竹
杖一本を道のわきざし　何中
ウ
野鴉のそれにも袖のぬらされて　はせを
老のちからに娘ほしがる　滑川
餅ちぎる鍋のあかり(七)の賑かさ　支考
敷かぬ疊の積でかさなる　その女
田の水の注連(八)に流るゝ花盛　洒堂
柳のさし木みどりのび行　惟然

〔一〕『後れ馳』に作者名「之道」、以下同じ。

〔二〕同「一有」、以下同じ。
〔三〕同「散ッて國〳〵の」
〔四〕『芭蕉翁草紙』に「小鍋ためて見る」
〔五〕同「荷中」、以下同じ。
〔六〕同『奥の唐櫃』
〔七〕同「鍋のあたり」
〔八〕『後れ馳』に「注連に流れし」

百韻未満の部

續虚栗　貞享四年作

此の連句は「世吉」である。表八句・裏十四句・名殘の表十四句・名殘の裏八句を以て成立するので「四十四」とも書く。『笈の小文』に「神無月(貞享四年)の初空定めなきけしき、身は風雲の行末なき心地して、旅人とわが名よばれん初しぐれ。また山茶花を宿〳〵にして。岩城の住長太郎と云もの、此脇を付て其角亭において關送りせんともてなす」とある送別の連句で其角の『續虚栗』に收めて貞享四年十一月、京都の書林西村市郎右衛門方から板行されてゐる。

十月十一日餞別會

旅人と我名よばれん初霽　芭蕉
亦さゞん花を宿〳〵にして　由之
鶊鵠の心ほど世のたのしきに　其角
粮を分たる山陰の鶴　枳風
かけありく芝生の露の淺緑　文鱗
新舞臺月にまはばや　仙化
中の秋畫工一つれかへるなり　魚兒
鱸てうじておくる漢船　觀水
ウ
神垣や次第にひくき波のひま　全峰
齡とをしれ君が若松　嵐雪
酒のみにさをとめ連の並居て　執筆
卯月の雪を握るつくばね　翁
繰つる袖つくばかり早瀬川　由之

羅一面にのこる橋杭　其角
道しらぬ里に砧をかりに行　枳風
月にや啼ん泊瀬の籠人　文鱗
葛籠とく匂ひも都なつかしく　仙化
おもはぬ事を諷ふ傀儡　全峰
途中にたてる車の簾を巻て　翁
沖こぐ舟にめされしは誰　山之
花ゆへに名の付波ぞめづらしき　嵐雪
別るゝ雁をかへす琴の手　學白
順の峰しばしうき世の外に入　觀水
萱のぬけめの雪を焼家　仙化
老の身の縄なふ程にほそりける　山之
君流されし跡の關守　翁
明暮は干潟の松をかぞへつゝ　學白
命をおもへ船に這蟹　其角
起出て手水つかはん海のはた　嵐雪
しらぬ御寺をたのむ有明　觀水
蕣や石ふむ坂の日にしほれ　全峰
小畑さびしき案山子作らん　枳風
草の戸の馬を酒價におさへられ　翁
つねみる星を嫁におしふる　學白
薫のしめり面白き夕涼み　仙化
幟かざして氏の天王　其角
御牧野の笛吹ならふ童聲　全峰
倚くるはしく腰にさす杖　枳風
見ぐるしと文字の子昂を嘲て　其角
堺の錦蜀をあらへる　嵐雪
隠家や寄居虫の友に交りなん　觀水
筏に出て海苔すくふ比　翁
谷深き日うらは花の木口のみ　學白
聲しだれたる春の山鳥　山之

〔一〕『芭蕉袖草紙』及び『袖珍鈔』に「鈍さ世なしれ」に誤る。
〔二〕『一葉集』に「月にや泣ん」
〔三〕同「子昂な嘲へ」
〔四〕同「花の木の芽のみ」

つばさ

元禄元年作

百韻の形式をふんで其の前半五十韻で了つてゐる。貞享五年（九月元禄ト改元）六月美濃岐阜の芦文亭の興行である。『笈の小文』の旅を了つて杜國と別れ、荷兮・越人を伴つて岐阜に遊んだ時の事である。芦文の『つばさ』に載つてゐるが、出板の年月は奥書にないので知れない。

貞享五戊辰歳林鐘十九日　於岐阜興行

蓮池の中に藻の花まじりけり　芦文
水おもしろく見ゆるかるの子　荷兮
さゞ波やけふぞ火ともす暮待て　芭蕉
肝のつぶるゝ月の大きさ　越人
苅萱に道つけ人の通るほど　惟然
鹿うつ小家の晝はさびしき　炊玉
眞鐵ふく烟は空に細〳〵と　落梧
かし立皿の風のよめふり　蕉笠

ウ
古寺の瓦葺たる軒あれし　己百
夜る〳〵ちぎる盜人のつま　梅餌
なみだより雨にしめりて簑おもく　露盃
馬の乘たる舟のせばさよ　鷗歩
須磨明石見殘すほどに暑くなり　拾景
筆ゆひかぬる茄子ちひさし　用呂
蓬生の垣根に機を巻かけて　東巡
歯ぬけの祖父の念佛おかしき　蕉
あし跡に米のこぼれていま〳〵し　人
つなげる舟に有明の月　文
秋の風橋杭つくる手斧屑　兮
はかまをかけて薄からする　然
花盛節供を山にくらしけり　玉
僧のめしくふ鐘かすむ空　梧
二
高欄にかぶりならびて長閑也　餌
蹴あげし鞠に夕日まばゆき　盃
みどりなる朴の木末の蟬の聲　笠(二)
辨當あらふ清水なりけり　百(三)

徴蘆ばかりかたよせ通る風の跡　呂
　荷を待かけて馬士のいさかひ　景
手杵つく賤がかしらのとけながら　歩
　もえしざる火にいとゞせはしき　巡
雪の日は内迄鳥の餌をはみて　文
　琴ならひ居る梅の静さ　笠
朝霞生捕れたるものおもひ　然
　衣着かへねばわるき春雨　人
時鳥初音待夜はけはひして　蕉
　籠の月にくるま忍ばせ　玉
ニウ
この里は籾する音のさら〳〵と　百
　孝子蜜柑を折もちて行　呂
しらぬ川人のわたるを詠居て　景
　餘所は降らん神のとゞろき　巡
土とりに此片山を堀くづし　笠
　牛のくびする松うごきけり　文
覆なき佛に鳥のとまりたる　然
　はしりあがりてわたるそり橋　歩
土産にとひろふ鹽干の空貝　梧
　風ひき給ふ聲のうつくし　人
何國から別るゝ人ぞ衣かけて　蕉
　御隔子あぐる月の寒けき　梧
木枯に花ちる庭の笛つゞみ　兮
　懐紙をつゝむ玉垂の霜　餌

〔一〕『一葉集』に作者名「百」
〔二〕同「翁」

草のあるじ　元祿二年作

「世吉」の連句で一巻四十四句で成立してゐる。元祿二年七月加賀の小松で興行した巻で芭蕉・曾良及び金澤の北枝の外は小松の連衆である。此の巻は闌更の門人眉山が小松の青錢の所持せるを求めて、寛政四年六月『草のあるじ』に入れて板行したのである。但し『草のあるじ』は二の

裏折立で了つてゐる。それより以下は『一葉集』によつた。

しほらしき名や小松ふく萩芒　翁
露を見しりて影うつす月　鼓蟾
踊の(一)音淋しき秋の數ならん　北枝
葭のあみ戸をとはぬ夕ぐれ　斧卜
しら雪やあしだながらもまだ深き　塵生
あらしに乘し鳥一むれ　志格
浪あらき磯にあけたる矢を拾ひ　夕市
雨に洲崎の(二)甼をうしなふ　致益

ウ

鳥居立松よりおくに火は遠く(三)　觀生
乞食おこして物くはせける　曾良
蟬の行ては笠に落かへり　枝
茶をもむ頃やいとゞ夏の日　蕉
ゆふ雨のすゞ懸(四)乾に含りけり　卜
子をほめつゝも難すこしいふ　枝
侍のおもふべきこそ命なれ　蟾
そろ盤ならふ末の世となる　觀
洞にさす月まで豊の光して　格
皮(五)むく栗をたいて味ふ　市
朝露も狸の床やかわくらん　益
帶解かけてはしる馬追　生
麓より花に庵をむすびかへ　良
ぬるむ清水に洗ふ黒米　格
春霞鑓捨橋に人たちて　枝
かたちばかりに蛙聲なき　市

二

一棒に打れて拜む三日の月　蕉
秋の霜をく我眉の色　蟾
富ながら(六)くつはる袖の良寒き　生
戀によせたる虫くらべ見む　卜
わすれ草しのぶのみだれうへまぜに　觀
疊かさねし御所の板敷　蕉
頭陀よりも哥とり出し奉る　枝
最後のさまのしかたゆゝしき　良
やみ明て五の顔はしれにけり　蟾

聲さま〳〵のほどのせはしき(七)　観
大かたは持たる金につかわるゝ　蕉
　庵より見ゆる町の白壁　益
二ウ
風送る皷きこへて涼しやな　蕉
　若衆ともいふ女ともいふ　卜
古き文筆のたてども愛らしき　市
　なげの情に罰やあたらむ　蟾
しどろにもかたしく琴を搔鳴し　益
　花に暮して盃を友　観
鶯の聲も筋よき處あり　良
　うらゝ〳〵や近き江の山　枝

〔一〕『金闌集』に「踊る音淋しき」
〔二〕『一葉集』に「岩なうしなふ」
〔三〕同「火は遠し」
〔四〕『草のあるじ』に「乾」として「本書ノマヽ」とあり『金闌集』同じ。『一葉集』に「乾」とし「袖珍鈔」これに從ふ。『玉葉集』に「虹」とあり、「乾」と見て然るべきか。
〔五〕『金闌集』に「皮はた栗を」
〔六〕『金闌集』に「富ながらくつわか」、『一葉集』に「亡八が袖のやゝ寒く」
〔七〕『金闌集』に「せはしも」

印の竿　元祿二年作

これも百韵の形式で二の裏第十四句で了つてゐる。加賀の歡生亭の興行である。青雲齋淋町は寶永二年その著『印の竿』に裏の十四句まで收めて板行した。『芭蕉翁俳諧集』及び『芭蕉袖草紙』亦同樣であるが、『一葉集』は其の後半をも採錄してゐる上、兩者の作者名は全然相違するので『印の竿』所載の卷は參考として前に揭げ、本文は『一葉集』によつて全卷を擧ぐ。圏點は右兩者の異同を示したのである。

ぬれて行や人もをかしき雨の萩　芭蕉
　すゝきがくれに薄葺家　亨子
月見さて猶にも出ず船あげて　曾良

　干ぬかたびらを待かぬるなり　北枝
松の風晝寢の夢のかいさめぬ　コ蟾
　轡ならべてむまの一連　志格
日を經たる湯本の峰も幽なる　斧卜
　下戸にもたせておもき酒樽　塵生
ウ
むらさめの古き鎧もちぎれたり　季邑
　道の地藏に枕からばや　硯三
入相の鴉の聲もなきまじり　夕市
　歌なすゝむる牢輿のふれ　翁
肌の衣女のかほりさまりける　格
　ふみ盗まれて我うつゝなき　蟾
より懸る木よりふり出す蟬の聲　枝
　雷あがる塔のふすぼり　良
世に住ば竹のはしらも只四本　子
　朝露きゆる鉢のあさがほ　邑
夜もすがら虫には聲のかれめなき　市
　むかしを戀る月のみさゝぎ　卜
ちりかゝる花に米搗里ちかき　生
　雛うる翁道たづれけり　三

七月二十六日觀生亭にて(一葉集)

ぬれてゆく人もおかしや雨の萩　翁
　芒がくれにすゝきふく家　觀生
月見とて漁(れふ)にも出ず船あげて　曾良
　干(ノ)ぬか(雌)たび(子)らをまちかねる也　北枝
松風に晝寢の夢のかい覺ぬ　生
　轡ならべて馬の一つれ　翁
日を經たる湯本の峰の幽(かすか)なる　枝
　下(ひ)戸(こ)に持せておもき酒樽　良
ウ
むら雨の古き鎧(よろひ)もちぎれたり　翁
　道の地藏に枕からばや　生
晩鐘に鴉の聲も啼(なき)まじり　良
　哥をすゝむる牢(らう)輿(こし)の船　枝
肌のきぬ女のか(こ)ほりとまりけり　生
　文ぬすまれて我うつ(現)ゝなき　翁
よりかゝる木より鳴出す蟬の聲　枝
　かみなり上る塔のふすほり　良
世に住ば竹の柱も只四本　翁

朝露きゆる鉢のあさがほ　生
夜もすがら虫には聲の啞めなき　良
むかしを戀る月の御陵　枝
散かゝる花に米搗里ちかき　生
雛賣翁道たづねけり　翁

二

蝶の羽や赤き袂に狂ふらん　枝
はし(橋)の上より投るさかづき(盃)　良
ひゞき來る木魚に心角折て　翁
目鏡して見てすみ渡る月　生
道の名とぬす人の名は殘る露　良
しか(鹿)ふみくづす石の唐櫃　枝
野社は樫の實生のいくかゝえ(抱)　生
病ひの愈てありく初雪　翁
一たびはむくひ(酬)かへさむ扶持の禮　枝
あなかま鼠夜の戸障子　良
侘しさに心も狭き蚊帳釣て　翁
かみ(髪)きる所を夫はおさゆる(二)　生
入山のいばら(茨)に落しうき涙　良

二ウ

霜にさびしき猿の足跡　枝
岩にたゞ粥たき捨し鍋ひとつ　生
甲は笹の中にかくれて　翁
追剣の砧をならす秋のくれ　枝
月に起臥乞食の樂　良
長き夜に恭をつゞり居るなつかしき　翁
翠簾に二人がかはるものごし(腰)　生
祈られてあら怖しと打倒れ　良
汗は手透に殘る朝風　枝
問丸の門より不二のうつくしく　生
鰤呼ころも都しづけき　翁
長生は殊更君の恩深き　枝
賤が袴はやれ(破)るともなき　良
初花は萬歳歸る時なれや　翁
酒にいさめる宿の山ぶき　生

〔一〕『玉葉集』に「女のかたり」
〔二〕同「夫はおさへる」

芭蕉翁俳諧集

元祿二年作

表八句で起つて二の裏十四句で了つてゐるから、これも百韻の前半五十韻の連句である。元祿二年冬伊賀上野の園風亭で興行したのである。蝶夢の『芭蕉翁俳諧集』に採錄されてゐる。『奥の枝折』の卷末には「元祿三むまのはつ冬園風亭におゐて興行 連中九人」とあるが、『一葉集』の推定によつて元祿二年の作とする。

曉や雪をすきぬく藪の月　園風
けぶりを作る榾のけだもの　梅額
暦よむ人なき里も安く居て　半殘
かはり牡丹の名をひろめけり(一)　土芳
獻〱に聞(二)することの上手なる　良品
扇の角をつぶす舞まひ　風麥
春にあふ蒔繪の鞘をさげ帶に　芭蕉
はつ神鳴に將監が簑　木白

ウ
馬の鞍ふまへて手折るさくら花　額
おこせを出す注連縄のかげ　配力
伊勢の海よごれ素襖を打すゝぎ(三)　麥
敵の首を送る古郷　風
村人は鬮の筵にこゝなりて　芳
鯖江門徒を尊かりけり(四)　品
造り出すことしの酒も甘口に　殘
月も名殘のやゝ寒きあし　力
妹がりや溝に穗蓼の生茂り　風
ふみ書ちらす庭のばせを葉　麥
それ〴〵の葉の衣裝を脫捨て　蕉
出しかけたる饅頭の汁(五)　芳
この花に瀧を登るも今はじめ　白
肩に持ぬる供(六)のさわらび　額

二
殘る雪男に見せん里がくれ　風
放て犬の跡(七)を追來る　麥
葬禮にしほるゝ馬の哀也　品
女咳(八)たる竹の戸のうち　蕉

後朝の亥の子の餅を配るとて　蕉
　脊中は寒く頭うちける　白
しぐれたる旅の巾着たよりなき　額
　手をひかえみる猿澤の魚　力
哥よめと(九)皆〳〵烏帽子かたぶけて　白
　なみだもろしや賤が黛　残
七夕にうきをかしたる染ふくさ　風
　家賣て世はあじきなき月　蕉
柿の木の枝もたわゝに實を持て　麦
　飛ですさまじ名や紅葉鳥　芳
ウ
修行者の踏迷ひたる峰づたひ　額
　北斗の星をつゝむ村雲　白
鷹の爪あかゞり寒く啼ぬらん(一〇)　残
　松は一本山の神〳〵　風
乞食して花に卷する薦すだれ　蕉
　雉子〳〵逆(一一)そこはいことなき　芳
春雨に(一二)よろ〳〵醉のをかしくて　力
　思はぬかたの款冬をつむ　麦
このごろは火を焚習ふひとりすみ　品
　家ぬしの來て琵琶の名をとふ　白
引かつぐ菖蒲の階子おもたげに　芳
　日の塵拭て貰ふ夕ぐれ　風
月の前しがみし顏(一三)もうつくしき　蕉
　礎うち〳〵戀のいさかひ　力

〔一〕『奥の枝折』に「名も弘めけり」
〔二〕同「燭するこども」
〔三〕同「打そゝぎ」
〔四〕『幽蘭集』に「たふさがりける」
〔五〕同「まんぢうの重」
〔六〕同「供のさばらび」
〔七〕『奥の枝折』に「跡に追來る」
〔八〕同「咳する」
〔九〕同「歌詠めば」
〔一〇〕同「寒く鳴つらん」
〔一一〕同「こないゐなき」に誤る。
〔一二〕『一葉集』に「ほろ〳〵醉の」
〔一三〕『奥の枝折』に「しかみし顔の」

蜜柑の色　　元祿七年作

伊賀上野の猿雖亭で元祿七年九月興行の五十韻である。蝶夢は『蜜柑の色』の序に明和五年猿雖の曾孫桐雨方にて其の懷紙を見せられ、「これなん年ごろ世に論ある蜜柑の色の句（芭蕉俳句不審其の二參照）ある」條であるのを喜び、桐雨にすゝめて板行させた。桐雨の序に「杉原紙の竪懷帋を紅白の水引にてとぢ、初の一折は雪芝の執筆、二の一折は支考が執筆なり、傍に祖翁の添削ありし筆の跡あり」といふてゐる。本文は右『蜜柑の色』により『芭蕉翁俳諧集』と對校した。

戌九月四日　會猿雖亭

松風に新酒をすます夜寒哉　　支考
　月もかたぶく石垣の上　　猿雖
町の門追はるゝ鹿のとび越えて　　翁
　きてはゆかたの裾を引ずる　　雪芝
二十日とも覺えずに行うつかりと　　惟然
　此山かりて時鳥まつ　　卓袋
麁相なる草履の尻はきれかゝり　　望翠
　床であたまをごそ〱とそる　　考
夷講〔二〕島の袴を手にさげて　　雖
　喧嘩の中をむりに引のけ　　芝
仕合と矢橋の舟をのらなんだ　　翁
　あふげど餅のあぶれかねつる　　翠
〔三〕せか〱と泣子を纏につきすへて　　袋
　大工屋根やの歸る暮（とき）　　翁
用の有時はかけ込藪どなり　　考
　雨のふる日の節句ゆるやか　　芝
きわ墨を置直しても同じ（事）　　袋
　親といふ字をしらで幾秋　　考
月影に又（せ）りかへすせめ念佛　　翠
　かりたふとんのあとのひやゝか　　雖
咲花に毎（の）咄すつれ斗　　然
　陽氣をうけてつよき椽けた　　袋

二

幸と獵の始の雉うちて　芝
内儀の(四)留主に子共あばるゝ　考
道場の門のさし入だゞくさに　雖
一里の(渡し)腹のすきたる　翠
山はみな蜜柑の色の黄になりて　翁
口なれてかゝる畑の(朝)霜　考
母方にはなれて月の物淋し　芝
鼠の籠るまき藁のうち　袋
傍輩の髪を結あふ(五)黴の雨　雖
肴出す程(六)さけはじみなり　芝
小倉とは向ひ合の下の關　然
(己の日)の風に人死がある　考
水くさき千日寺の粥喰て　翁
歯かけ足駄の雪に埋(七)まれ　雖

ウ

漸に今はすみよるかはせ銀　翠
加減の藥しつぱりとのむ　翁
渋紙をまく(八)つて取れば青疊　考
こぼれて生る軒の花けし　袋
朝夕の茶湯ばかりを尼の業　雖
飼ば次第に牛の艶つく　芝
枯もせずふとるともなき楠の枝　袋
月見にいつも造作せらるゝ　考
駕もゆう／＼とする秋のかぜ　翠
濱の小家を過る霧雨　然
懐に取出して置くとゞけ狀　袋
いそぎの(九)齋に白豆腐にる　考
雪隱の窓よりのぞく花の枝　雖
根笹づたひに鶯の啼　芝

(一)『一葉集』に「縞の袴」
(二)同「せか／＼さ」
(三)『芭蕉翁俳諧集』に「きは墨な」
(四)『蜜柑の色』本文「留主」の右傍に「本ノマヽ」とあり
(五)『芭蕉翁俳諧集』に「梅雨のうち」
(六)同「酒はじむなり」
(七)同「埋もれ」
(八)同「まくりて」
(九)同「いそきの菜に」

歌仙未満の部

幽蘭集　貞享二年作

『皺筥物語』によると、貞享二年秋尾張の熱田にて「翁これより木曾路に趣、深川にかへり給ふとて」此の發句を詠み、東藤脇句を附けたのである。『熱田三歌仙』は桂楫の第三を添へてある。『幽蘭集』は更に裏の第三句までを附加してあるが『一葉集』も同様である。

おもひ立(一)木曾や四月のさくら狩　はせを
京の杖つく岨の夏麥(二)　東藤
牛の子の乳をのむ日かげ閑にて　桂楫
かげろふとまる竹の編棚　叩端
佗つゝも栗の毬たく細けぶり　桐葉
ひとりうけたる有明のまつ　ユ山

うす雪は淀の天主を降かねて　藤
狂哥の僧に駕籠をたゞかす　翁
はなかみになみだをつゝむ女あり　閑水
なさけの市に上の袍うる　楫
砧うつ夜半の黒戸の宴盡て　葉
よせる車のきしるなりけり　水

（一）『皺筥物語』に「思ひ出す」
（二）同「岨の青麥」

其袋　貞享三年作

内藤露沾子の江戸藩邸で興行された半歌仙である。歌仙の前半表六句・裏十二句で一巻十八句となる連句の一形式である。嵐雪の『其袋』は元祿三年の板行で、その中に「夕照」といふ前書附で載つてゐる。作の年代は『芭蕉翁俳諧集』及

び『一葉集』には貞享三年の部に入れてある。

夕照

蜻蛉の壁を抱ゆる夕日かな　沾荷
潮落かゝる芦の穂のうへ　芭蕉
霧の外の鐘を隔る松こみて　露沾
沓にはさまる石原の露　荷
入月(一)の薄粧たる武者ひとり　蕉
柴の筧に笙をあやどる　露
山寺は苔も狐のさまかへて　荷
花(二)とひ來やと酒造るらし　蕉
夕霞口々に重なる鞠の音　露
しろき胡蝶の垣を飛越す　荷
絹はりを欄の柱にすぢかひて　蕉
亂れし髪をなをすかんざし　露
調なき形見の鼓音も出ず　荷
何も燒火に皆盡しけり　蕉
棒の月一の窓に僧痩て　露
澁つき染めし裏の藪かげ　荷
みゝづくの己が砧や鳴ぬらん　蕉
四十雀こそ風も身にしめ　嵐雪

(一)『芭蕉俳諧集』に「入月に薄化粧する」
(二)同「花問きやる」、『芭蕉翁草紙』に「花飛來やる」

幽蘭集　貞享四年作

『笈の小文』旅行前大垣藩士中川濁子の江戸邸に於ける興行であらう。曉臺の『幽蘭集』以後の諸集に收めてあるが、歌仙として見るには名殘の裏が二句不足してゐる。或は轉々書寫されてる中に書落されたのでもあらうか。

冬景や人寒からぬ市の梅　濁子
となりを迷ふ入逢(一)の雪　共角

年の貧たはら負行詠して　はせを
　火をたく舟の星くらき空　仙化
鷺うごく松おもしろき磯の月　枳風
　〔二〕甲にをらんすゝき一むら　コ斎
ウ
太刀持る童のぬれて露時雨　化
　車のみすにつゝむすゞむし　子
尋來る友引地藏茅朽て　角
　うれしと飢にいちご拾はん　風
櫛かゞみ枕に添て殘しけり　化
　御歌合明日とちぎる夜　角
加茂川の流れを胸の火にほさむ　斎
　萩ちりかゝる市原のほね　翁
鵙の啼方に杖つく夕まぐれ　文鱗
　牛を彩なす月のそめきぬ　子
花の口を亡八の長とかしづかれ　李下
　桃になみたか一國の醉　風
ニ
朝がすみ賢者を流す舟みえて　翁
　詞のうみと繪に讃を乞　角
松しまや雲居の庵に酒をのみ　下
　心は媚ずいくとせのたび　斎
四ツの時冬はあられのさら／＼と　鱗
　水仙ひらけ納豆きる音　翁
片里の庄屋のむすこ角入て　子
　伊勢おもひ立わらぢ菅笠　斎
美濃なるや蛤ぶねの朝よはひ　化
　ながれに破る切籠折かけ　下
月入て電殘る浦すごく　子
　ことしの勞を荷ふやき米　翁
ニウ
塚の下母寒からむ秋の風　角
　邦を軍にとられ行みち　斎
はなのおく鳥うつ音に鐘つきて　化
　すり餅をゆるす目白鶯　下

〔一〕『金蘭集』に「入相の」
〔二〕同「挿にならん」、『一葉集』に「かざしに折ん」

句餞別　貞享四年作

芭蕉の草稿と稱する寛保四年板の『句餞別』に收むる半歌仙で、本間家の『夏しぐれ』にも出てゐる。貞享四年十月中川濁子の發企で芭蕉の旅立を餞別せる會の作である。

十八句

江戸櫻心かよはんいくしぐれ　濁子
薩埵の霜にかへりみる月　芭蕉
貝ひろひ〳〵ゆく磯馴て　嵐雪
醉ては人の肩にとりつく　共角
けふの賀のいでおもしろや祖父が舞　蕉
根松苗杉蟬の鳴聲　子

ウ

池の橋渡し始ぬ垣結て　角
みなと入帆のみゆるやね越　雪
世の中を（一）書にのがれたる茶の烟　子
妹のかしらのから（唐）わ（輪）やさしき　蕉
かたみてふ袋の切のはつ〳〵に（二）　雪
夢を（三）占きく閨の朝風　子
津の國のなには〳〵と物うりて　蕉
一夜どまりのつくし侍　雪
一巻の連歌をとゞむ此寺に　子
苗代もえる雨こまか也　雪
鷺の巣のいくつか花に見えすきて　蕉
禰宜下りかはる春の夕月　子

（一）『芭蕉翁俳諧集』に「世の中は」
（二）同「はろ〳〵に」
（三）同「夢の占きく」

句餞別　貞享四年作

常陸潮來の醫師本間松江が江戸に來つて興行し

た連句で、發句の前に「十句」とある通り裏の第四句で了つてゐる。『夏しぐれ』に出てゐる。

十句

しろがねに蛤をめせ霜夜の鐘　松江
一羽別るゝ千鳥一群れ　翁
枯草〔一〕にいよ〳〵松のみどりして　曾良
田中の道のとをりくれ行く　依々
月ほそくをのが家しるはな（れ）〔二〕馬　泥芹
秋風〔三〕廻る門のはしとみ　水萍
ウ
露の糸錦をとをす梭の音　風泉
雨には見せし蘭のきせ綿　夕菊
旅枕女あるじの情得て　苔翠
傾城かげをかくす明ぼの　執筆

〔一〕『幽蘭集』に「枯る葉に」
〔二〕本文「はなれ」とある「れ」を消して「し」とす。
〔三〕同「秋風のぼる」

句餞別　貞享四年作

前卷と同じく『句餞別』にある連句でこれも裏の第四句までゝ十句よりない。此の發句で見ると芭蕉庵の留主は、作者の擧白その人が預つて居たらしい。

十句

時雨〳〵に鎰かり置かん草の庵　擧白
火燵の柴に侘を次人　芭蕉
松風にそれたる鵙を見のがして　溪石
朝氣はくらき湯の山の月　コ齋
鐘ひとつ三郷にかよふ秋の聲　其角
葛の繩面をゆるされし文　ト千
ウ
繼子をもいたはる嫁の名をとげて　嵐雪
餅二かさねえにしそふ帶　白
よし原の土手に子日の松ひかん　蕉

誰がぬし有て錺する宮　石

如行子　貞享四年作

美濃大垣の如行が、貞享四年十月一日、尾張熱田の林桐葉亭で、芭蕉と初對面の時此の發句を詠じた三吟である。『如行子』にその事が漢文で出てゐる。此の巻は半歌仙で別に本文の如く前書がある。『桃の白實』その他によつて校合した。

芭蕉老人、京までのぼらんとして、熱田にしばしとゞまり侍るを訪ひて、我名よばれんといゝけん旅人の句をゝ、歌仙一折

旅人と我見はやさん笠の雪　如行
盃寒(一)し諷ひゆへ　はせを
有明の鉢の木賊を苅初て　桐葉
露になりけり庭の砂原　行
小御門に駒引むかふ頭ども　翁
椎の古枝を腰に折添　葉
ウ
覆盆子ふむ山より村の雨晴て　行
老聲くるし夏の鶯　翁
物喰で晝寢がちなる物(二)襟　葉
又ふみ書て車返しつ　行
(三)榼籠に見よと摘たる山の草　翁
(四)叩くづれし柴人のみち　葉
橇作る家も淋しき春の風　行
三ケ月細く節句しりけり　翁
鵜を入る初川いそぐ花の陰　葉
美濃侍のしたり顔なる　行
御卽位によき白髪と撰出され　翁
植て常盤の百木の竹　葉

芭蕉翁不快にして止ぬ

〔一〕『桃の白實』に「盞寒く諷ひしなり」、『金蘭集』

に「諷飲なり」
〔二〕『一葉集』に「物思ひ」
〔三〕『桃の白實』に「檣籠に」とふり假名あり。
〔四〕同「印くづれし」、『一葉集』に「しるし」

如行子　貞享四年作

尾張熱田の荷兮亭に滯杖中、美濃の落梧が來て同國に行脚をこふた時の連句で、『如行子』の前書で同年十一月二十七日の興行である事が知れる。『一葉集』は表六句のみを揭ぐ。

凩の寒さ重ねよ稻葉山　落梧
よき家續く雪の見どころ　芭蕉
鵙の居る里の垣根に餌をさして　荷兮
黍の折レ合道ほそき也　越人
有明の夜中は人の影もなし　羽笠
湊に舟の入かゝる聲　舟泉

ウ 住居するあたり見立に歩行らん　野水
芥子など有て竹痩せし村　梧
被とる顔色白くおとろへて　翁
あの髮そりて來るかいたはし　兮
精出して金持心はづかしく　人
紅葉をのみに薪伐ル山　笠
雨降りの蜩聲のあはれなり　泉
硯もなくて居る(一)か秋の野　水
糸はづれ琴掻なら(二)す月の下　人
まだ目の覺ぬ眉のうつくし　梧
しのび來て鐘撞堂の花盛　水
追行蝶の高(三)くなりけり　泉
ナ 青〻と動かぬ石の長閑にて　笠
醉てまたぬる此橋のうへ　翁
夕暮は(四)諷もきかぬ蓮池に　兮
行水したるさまの兒ども　水
追歸る木幡の馬をかざりつれ　翁
半(五)よごれし蔀おろしつ　梧

寐たければ繪を書さして寐入けり〔六〕　人
女師走の月とちぎるか　兮
雪の日の礎に泪落したる〔七〕　水
柴燒壁の破れてほろ〳〵　笠
砂原〔八〕の川をこちらに家有て　泉
終に牛をば捨ずつり行　水

〔一〕『金蘭集』に「居る秋の野」
〔二〕同「琴かきさがす」
〔三〕『桃の白實』に「蝶の薄ざかり行」
〔四〕『金蘭集』に「唄なも聞ぬ」
〔五〕『桃の白實』に「牛こはれし」
〔六〕同「疑入也」
〔七〕同「泪落しけり」
〔八〕同「水なこちらに」

熱田三歌仙　貞享四年作

尾張熱田から伊賀に赴く前、貞享四年十二月一井亭の興行で、これも半歌仙よりない。曉臺の『熱田三歌仙』に「附錄」として載せてある。

十二月九日　一井亭興行

たび寢よし宿は師走の夕月夜　芭蕉
庭さへせばくつもるうす雪　一井
どや〳〵と筧をあふる藁燒て　越人
紙漉を見に御幸あるころ　昌碧
琴持の〔一〕莚の上をつたひ行　荷兮
障子明ればきゆるとも火　楚竹

ウ

起もせでき〻知る匂ひ怖しき　東睡
亂れし鬢の汗ぬぐひ居る　蕉
なげられて又取付るをかしさよ　井
乳を飲〔三〕子の我に似るらし　人
麻布を煠びる程に織かねて　碧
繭をとりこめばねこだせはしき　兮
夕立の先に聞ゆる雷の聲　竹
馬もありかぬ山際の霧　睡

小男鹿のそれ矢を袖にいつけさせ　蕉
　飛あがるほどあはれなる月　人
凩にかじけて花のふたつ三ッ　兮
　畠につゞく野は遥なり　碧

〔一〕『芭蕉袖草紙』に「琴持て」
〔二〕同「乳が飲めるの」

一幅半　元祿元年作

『一幅半』は伊勢の路草庵乙孝が元祿十三年出板したもので、「今はむかし、はせをの翁、一幅半の袖をひろがへし杖をひきづりて、路草亭にとゞまり、やゝ雨の花を興じ給ふ」と涼菟の序文にある如く、元祿元年伊勢山田にて興行の此の連句を収めてゐるが、惜しいかな表六句の外は芭蕉の附句とその前句を擧げたのみで、歌仙としての體裁を備へて居ない。

哥仙

紙衣のぬるとも折む雨の花　芭蕉
　すみてまづ汲水のなまぬる　乙孝
酒賣が船さす棹に蝶飛て　一有
　板屋〳〵のまじる山本　杜國
夕暮の月まで傘を干て置　應宇
　馬に西瓜をつけて行なり　葛森

このすゑおきなの句をあげて餘はのぞく

稲妻の光て來れば筆投て
　野中の別れ片袖をもぐ　芭蕉
　夕に駕籠を借みやこ人
命ぞとけふの連哥を懷に　同
汐は干て砂に文書須磨の浦

日毎にかはる家を荷ひて　同
乞食年とる檜の木の中
聖(ひじり)して兎ながらの月もみつ　同
目前(もくぜん)のけしき其まゝ詩に作(つくり)
八ッになる子の顔清げなり　同

一葉集　元祿元年作

前巻と同一の巻であるが『一葉集』には裏の折立から第十一句までを附加し、『幽蘭集』を引いて別に『一幅半』と同じく芭蕉の附作のみを擧げてゐる。

紙ぎぬのぬるさも折ん雨の花　翁
澄てまづ汲水のなまぬる　路草亘　乙孝
酒うりが船さす棹に蝶鳴て　一有
板屋〳〵のまじろ山もさ　杜國
夕暮の月まで傘を干て置　應宇
馬に西瓜を付てゆくなり　葛森
ウ
秋寒く米一升に雇れて　翁
臑(じゆ)牛の棚のたちてさびしき　國
吹付て雨はぬけたる未申(ひつじさる)　森
夕に鶉をかる都人　國
命ぞとけふの連歌を懐に　翁
寺に祭りし業平の宮　宇
世の中を鶺鴒の尾にたとへたり　森
露にとばしる萩の下末　孝
いなづまの光り來れば筆投て　有
野中のわかれ片袖をもぐ　翁
君が琴翌の風雅をしたひつゝ　宇

千鳥掛　元祿元年作

芭蕉は「笈の小文」の旅行を遂げて貞享元年五月尾張に戻つて來た。此の連句はその時鳴海の知足亭で行はれたのであらう。名殘の表第六句までゝ二十四句よりない。連句の樣式に「箙」と稱して二十四句より成るものがあるけれど、此の卷中景物の配置は「箙」と相違してゐる。

燕子花(かきつばた)われに發句のおもひあり　芭蕉
麥穗なみよるうるほひの末　知足
二ッして笠する烏夕ぐれて　桐葉
かへさに袖をもれし名所記　叩端
住馴れて月まつほどのうら（浦）傳ひ　業言
それとばかりの秋の風音　自笑
ウ
捨かねて妻呼(よぶ)鹿に耳ふさぎ　如風
念力(ねんりき)岩をはこぶした（滴）ゝり　安信

道野邊の松に一喝(かつ)示し置　重辰
長者の輿に沓をなげ込ム　蕉
から樽を荷ふ下部のうつゝなや　足
岸にかぞふる八百の鷺　葉
森透に燈籠三ッ四ッ幽(かすか)なる　端
子をおもふ親の月さがしけり　辰
それの秋すなる手打(てうち)の悔しくも　足
猫ならば猫霧晴てから　風
烏邊野に葛とる女花わけて　葉
ねためる筋を春惜まるゝ　言
名
乙鳥に短冊つけて放チ〔一〕けり　端
龜盞(さかづき)を脊負ふさゞなみ　蕉
天氣さへ勅に應じて雲なびく　信
五日の風のみや雨の宮　風
菓子賣も木がくれてのみ住はつる　笑
長屋の外面たつ名恥(は)ぢらひ　足

〔一〕『幽蘭集』に「はなしけり」

かしま紀行

元祿元年作

採茶庵梅人は寛政二年芭蕉の眞蹟『かしま紀行』を石刷として板行した。その卷末に此の連句を附錄に添へてある。『一葉集』の推定によつて元祿元年の作として置く。形式は半歌仙である。

しら菊に高き雞頭おそろしや　杉風
泥かぶりたる稲を干す屋根　越人
月〔一〕幾日海なき國に旅寐して　翁
笠に玉子をぬすむ也けり　苔翠
ほつきりと折ておかしき雪の竹　友五
はかま着ながらはうきたばぬる〔二〕　夕菊
御内にて念佛申と名をいはれ　依々
茶子すてゝ行濱の苔賣　泥芹
さぎてうの火におどさるゝ在郷馬　人
瓦びさしに朧なる月　風
盃を片手に人を引ずりて　翠
くらべ負〔三〕たる名所の貝　五
香のかに物の調子やくるふらん　依
小袖もれ出る雁の重ねめ　風
談義の場泣くはふじゆ上る人そうな　人
美しい子の膝にねぶりて　翁
里遠き花の木陰にとうふ燒　五
狂〔四〕ふ小蝶のあみ笠に入る　菊

〔一〕『一葉集』に「月何日」
〔二〕『袖珍鈔』に「箒たばねる」
〔三〕『一葉集』に「くらべまけたる」、『袖珍鈔』に「くらべあふたる」
〔四〕『袖珍鈔』に「たはるゝ蝶の」

柱暦

元祿元年作

江戸の苔翠亭で芭蕉の更科紀行に随行した越人

等と共に興行した連句である。岡崎の鶴聲の著『杜暦』下巻に收めて元祿十年板行された。越人から鶴聲に書き送つたのであらう。

東武苔翠にて

月出は行燈消サン座敷かな　越人
朝夕かゝる柴墻（かき）のひよん　苔翠
此君（このきみ）と名をいふ竹の露落て　芭蕉
まづかたかな（片假名）のイロハ習ひに　反古
南から聲に雨もつ郭公　夕菊
よもぎをのぞく山の草苅　泥芹
打くだく燧（ひうち）のかけの淋しくて　依々
女房戻れば留主渡す也　人
聟と物がたりする戀の友　古
痞おさへてあかつきを泣　蕉
まだやまぬ雪の戸明ケて〔一〕怕（おそれ）たる　翠
さしの殘（こ）したる曲舞の章　菊
秋風や子をもたぬ身の哀より　人
谷の庵のあたらしき月　依
行雁におくれて一羽殘けり　菊
沖に舟見るあつもり（敦盛）の塚　芹
〔二〕唐（もろこし）の頭巾に花のちりかゝり　菊
醉て牛より落る春風　はせを

〔一〕『一葉集』に「怕さよ」
〔二〕『芭蕉袖草紙』に「唐人の」

幽蘭集　元祿元年作

江戸の深川で作つた連句らしいが、名殘の裏六句を缺き一巻三十句で了つてゐる。『幽蘭集』の以前に所見がない。興行の年代は『一葉集』によつた。

皆拜め二見の七五三（しめ）をとしの暮　はせを
篠竹は〔一〕こぶ煤掃の風　岱水

鰯賣俵の小ぐちとき(解)そめて　曾良
むら(一)の地取におこす鍬形　嵐竹
珍(めづら)敷(しき)湯水(二)わき出る峰の月　宗波
葉をかく(三)松の霧に横たふ　路通
霜置ぬ常盤(ときは)の里の菊かひ(買)に　友五
立ならびたる屋根の縄あみ　泥芹
三絃(四)を曉ごとにほつ〳〵と　夕菊
まくりて歸る榻(しぢ)のねむしろ　翁
茶ひとつの情を思ふ衞士が妻　通
稲荷參りに掾かりし庇　良
朝月の柱にかゝる作の面　水
たふとや僧のせがき(施餓鬼)よむころ　波
侍の身をかへよとや秋の蟬　翁
おひ(笈)のうちにも夢はみえけり　通
羊腸の道ちりうづむはなの坂　五
しみづ(清水)ほり出す如月(きさらぎ)の雪　菊
蛙なく窓のあかりに舟寄て　竹
硯をほどく顔のけだかき　翁
髪それば國なつかしき須磨の寺　波
花はさかりになすび(茄子)ちいさき　菊
男なき姉がすだれを守(もり)かねて　通
なみだ火桶にはなかみを干(ほす)　翁
老ぬれば針の耳すの背(そむけ)たる　五
子ながら僧の恥かしきぞや　水
賤の屋に茶碗ふたつは手を置ず　通
ぬすみするさへ捉(おさへ)さだめし　良
甲斐信濃月を爭ふ濁り酒　波
つき(突)はづされてのぼる初鮭　五

〔一〕『一葉集』に「篠竹うたふ」
〔二〕同、「湯の涌出る」
〔三〕同「葉たか巻松の」
〔四〕同「三味線を」

奥細道拾遺　　元祿二年作

曾良の遺稿「雪丸げ」にあるが善本を得ないの

で、蓼太の『奥細道拾遺』所載の巻を本文とした。越後直江津で行つた歌仙未満の巻で、名残の表第二句で了つてゐる。

直江の津にて

文月や六日も常の夜には似ず　翁
露を載たる桐の一葉　左栗
朝霧に飯焚煙立分て　曾良
蜑の小舟をはせ上る磯　眠鷗
烏啼く向ふに山を見ざりけり（一）　此竹
松の木間より續く供やり　布嚢

ウ
夕嵐庭吹拂ふ石の塵　石雪
盥とりまく賤が行水　執筆
思ひがけぬ筧を傳ふ烏ひとつ　栗
きぬ〴〵の場に起も直らず（二）　良
數〳〵の恨の品の指つきて（三）　義年
鏡にうつる我わらひ顔　翁
（四）吹はなれ朝氣は月の色薄き　栗
鹿引こくる犬のにくさよ（五）　雪
砧うつすべさへ知らぬ墨衣　鷗
たつた二人の山本の庵　栗
花の後其まゝ暮て星かぞふ（六）　年
蝶の羽をしむ蠟燭の影　雪

名
春雨は髮剃兒が泪にて　釜
香は色〳〵に人ゝの文　良

（一）『新七部集』に「山を見せにけり」
（二）同「きぬ〳〵の場にも」
（三）同「恨の品に」
（四）同「あけはづれ朝氣は月の色薄く」
（五）同「鹿引て來る」
（六）同「花の咲」『芭蕉袖草紙』に「花の吟」

金蘭集　　元祿二年作

此の巻は歌仙として完成された筈であるが、表三句より附句紛失して不備のものとなつた。『雪

丸げ』は第三の次に「此間十三句なし」とあり、『金蘭集』は「此間十句なし」として『雪丸げ』になき長短三句を收めてゐる。同書には「懷紙杉原紙也、曾良筆、倉□斗管所持」とあるのを信じて本文は『金蘭集』によつた。

星今宵師に駒牽て留たし　　石雪
　色香ばしき初刈の稲　　曾良
(一)さらし水踊に急ぐ布つきて　　芭蕉
　(此間十句なし)
　秋風送る父が旅立　　蕉
かの巻を錦に包拾ふべし　　雪
　絕て繼たる國の古堂　　石
種植て小枝に花の名を印　　更也
　雨のあがりの日は長閑也　　良
糞を引雪車もおかしき雪の上　　蕉
　一むらからす人馴て飛ぶ　　雪
金山や侘(二)テ小砂を拾ふらん　　有
　科のむかしを島陰の庵　　也
憂事の百首に魚の名を讀(三)て　　蕉
　人鬧しきとしのくれかな　　良
松柏荒て嵐の音すなり　　雪
　子を射させたる猪の床　　蕉
修行者の袂をぬらす硯水　　有
　往古(四)の月山に問たし　　也
檜皮むく老の頭の秋寒く　　蕉
　しぐれて露の深き牛部屋　　雪
鹽濱の孤村の烟雲結ぶ　　也
　清水(五)に波の半淡しき　　有
かたむきし地藏の膝に石かひて　　良
　鎌磨ならふ里の草刈　　雪
俳諧を尋て花の窓(六)に入り　　蕉
　身木を取まく梅のひこ生　　良

〔一〕『新七部集』に「瀑の水桶にいそ〳〵布つきて」
〔二〕同「侘干す」
〔三〕同「名と書て」

〔四〕同「往昔の」
〔五〕同「淸水の流」
〔六〕『一葉集』に「花の實に入」

花の故事　元祿二年作

加賀金澤の少幻菴の興行である。闌更の『花の故事』に「右歌仙一折翁の直筆にて小春が末葉洪水所持す」とある。

少幻菴にて

殘暑しばし手毎にれうれ〔一〕瓜茄子　芭蕉
みじかさまたで秋の日の影　一泉
月よりも行野の末に馬〔二〕次て　左化
透間〔三〕きびしき村の生垣　ノ松
鍬鍛冶の門をならべて槌の音　竹意
小桶の淸水結ぶ明くれ　語子

ウ

七ツより〔四〕生長せしも姉の恩　雲口
とり〔五〕放やるにしの栗原　乙州
讀習ふ哥に道ある心地して　如柳
ともし消れば雲に出る月　北枝
肌寒〔六〕咳したる渡し守　曾良
をのが立木にほし殘る稲　流志
ふたつやはわりなき中と緣組て　泉
さゞめ聞ゆる國の境目　蕉
糸かりて寐間に我ぬふ戀ごろも　枝
あしだ〔七〕ふむべき遠山の雲　口
草の戸の花にもうつす〔八〕野老にて　浪生
畑うつことも知らで幾はる　良

〔一〕『芭蕉翁俳諧集』に「爪茄子」に誤る。
〔二〕同「馬冷て」
〔三〕同「透間さびしき」
〔四〕『一葉集』に「七ツよりひとゝなりしも姨の恩」
〔五〕『幽蘭集』に「鳥を放せる」
〔六〕『芭蕉袖草紙』に「肌寒き」
〔七〕『幽蘭集』に「あしたふむべき」
〔八〕『芭蕉翁俳諧集』に「花にもうつす所にて」

桃の白實　元祿二年作

『奥細道』の行脚を遂げて九月三日、大垣の如行亭に入った其の夜の連句で、『一葉集』に「九月三日落着の夜」と前書がある。『桃の白實』には前書がないが刋行が古いので同書を本文とした。

野あらしに鳩吹立る行脚哉　不知
　山に別るゝ日を萩の露　荊口
初月や先西窓をはがすらん〔一〕　芭蕉
　波の音すく人もありけり　如行
木を〔二〕引て枕の種と心ざし　左柳
　酒の肴に出す干瓜　残香
おのづから隣の松をながむらん　斜嶺
　過なきあせ〔三〕にしづむものゝふ　恕風
いとおしき人の文さへ引さきて　知
　般若の面をおもかげに泣　翁
待宵の鐘を〔四〕よそにや忍ぶらん　行
　薬たづぬる月の小蓮　柳
薄着して砧聞こそくるしけれ　翁
　網代の鮭を市に〔五〕むさぼる　香
舟の形所によりてかはりけり　嶺
　上﨟たちも旅のさがなき　知
〔六〕花ふゞき宮の長橋ひとりづゝ　行
　欲に見て置岨の山吹　風

〔一〕『幽蘭集』に「はゞすらむ」
〔二〕同「木を挽て」
〔三〕同「渋なきあやに」
〔四〕同「鐘をやゝよそに忍ふらし」
〔五〕同「市のむさぼり」
〔六〕同「花のふゞき」

冬扇一路　元祿二年作

江戸の百明編の『冬扇一路』は寶暦八年の板行

で、その附錄の伊賀實錄の中に此の連句を揭げてある。玄虎は藤堂氏、伊賀上野の城代の親近者であらう。二の表第六句で了つて二十四句よりない。作の年代は『一葉集』によつた。

うしろ風鳶の身振ひ猶寒し　玄虎
虎落の氷柱長く短き　舟竹
十露盤を片手に米の印して　芭蕉
心あてなき旅のいとなみ　虎
けふの月所のものは山の猿　竹
能岩組に秋の水おと　蕉

ウ

一株の薄はものに似ざるかな〔一〕　虎
人見ねばこそ闇の臆病　竹
片道はしるき足駄をぶらさげて　蕉
右も左も欠〔二〕つくりなり　虎
涌出る雲より下のほとゝぎす　竹
尾上にかゝる鐘の撞初　蕉
東國の荒き男も口嗽ギ　虎
鳴戸の月を待て乘船　竹
秋風に〔三〕毛綿肌着も吹しめり　翁
ならぶ在所を霧の隔てる　虎
花盛志賀の田の畝切立て　翁
何をくれけむ蝶になる虫　竹

二

春の日に長柄の傘の繪の模樣　虎
熨斗を附たる駕舁の紋　蕉
白粉に千代をや鬪の姥が顏　竹
錢よむわざを專にする　虎
風はなに油へる火のちらつきて　翁
時を曳ずる棒の片そぎ　竹

〔一〕『一葉集』に「似たるかな」
〔二〕同「蜓造り也」
〔三〕同「木綿」

江鮭子　元祿三年作

之道（後諷竹）の『江鮭子』は元祿三年の板行で、それに此の半歌仙を載せてゐる。多分之道が大阪から近江に來て芭蕉に面接した時の三吟であらう。作の年代は『芭蕉翁俳諧集』及び『一葉集』さも元祿三年に一致するので同年作として掲ぐ。

三吟

白髪ぬく枕の下やきり〴〵す　芭蕉
　入日をすぐに西窓の月　之道
甘鹽の鰯かぞふる秋のきて　珍碩
　苅そろへたるかしらこの柴(一)　蕉
河風に竹の筏のから〳〵と　道
　麥の小うねをたゝく冬空　碩
ウ
齋過て一むれ歸る繩手道　蕉
　顱ほそや(二)戀聟の顏　道
どし織の帶美しく(三)脇とめて　碩
　久しき(四)銀の出る御屋しき　蕉
山公事の埒の明たる初嵐　道
　加太谷より踊り觸けり　碩
月かげに關の芦毛を追かけて　蕉
　鯛も鯖もふみ(五)すべりつゝ　道
ものぐさも(六)布子の重き春風に　碩
　又も彌生の家賃たゝまる　蕉
(七)時〳〵に花も得咲ぬ新畠　道
　晝茶わかして雲雀かたむく　碩

〔一〕『芭蕉翁俳諧集』に「か羅（本ノマヽ）この柴」、『幽蘭集』に「かつらみの柴」
〔二〕『幽蘭集』に「おさかひ細る」
〔三〕同「帶美しう」
〔四〕同「かれの出る」
〔五〕『袖珍鈔』に「踏つぶしつゝ」に誤る
〔六〕『幽蘭集』に「はおりの重き」
〔七〕『一葉集』に「時〳〵に花も咲えぬ」。『袖珍鈔』に「年〳〵に」

後の旅　元祿四年作

美濃大垣の斜嶺亭の三吟で、朱摑の『今日の昔』に芭蕉の第三までを擧げ「まことや此第三を十餘句ほどせられて、後座しめりたりとて、此句に決せられたり」とあるが、芭蕉が一卷の運びに苦心して遂に半歌仙で切上げたのであらう。近藤如行の『後の旅』に本文の通り掲げ、元祿八年板行されてゐる。

元祿四年の初冬斜嶺が屋に芭蕉翁をまねきて

もらぬほどけふは時雨よ草の屋根　斜嶺
火をうつ聲に冬の黄鳥(一)　如行
一年の仕事は麥におさまりて　芭蕉
垣ゆふ舟をさし廻すなり　荊口
打連て弓射に出る有明に　文鳥
山雀籠を提る小坊主　此筋

ウ
秋かぜに鍋かけわたす長ゐろり　左柳
疊のうへを草鞋でふむ　如風
蝙蝠の喰破たる御簾の縁　如行
念佛の聲の細うきこゆる　殘香
わかれんと冷たき小袖あたゝめて　千川
おさなきどちの戀のあどなき(二)　蕉
奥住居留主の表は戸をしきり(三)　口
米舂さして物買ひに行(四)　嶺
鞍おろす馬は霙を打はらひ　筋
峠に月のさえて出かゝる　鳥
初花の京にも庵を作らせて　蕉
目利で春をおくるなりけり　柳

〔一〕『初便』に「火をうつ音に冬のほたる火」
〔二〕『幽蘭集』に「戀ぞあさなき」
〔三〕同「戸のしまり」
〔四〕同「米ふみさして」

皺筥物語　元祿四年作

幻住庵より江戸へ歸庵の道すがら尾張熱田に立寄り、梅人亭にて九衢齋の號を與へて此の連句を催したのである。『皺筥物語』は裏第三句までよりないが、『幽蘭集』には猶三句あるので補つたけれど、なほ十二句に過ぎない。連句の樣式でこれを首尾行と稱してゐる。

幻住庵を見捨、武陵に趣たまふ折、支考・桃林の二法師ともなひて、梅人子が許におはして、

水仙やしろき障子のとも移り　はせを
　炭の火ばかり冬の饗應　梅人
宵の月船を淺みに引揚て　支考
　またはら〳〵と竈馬の鳴　湖水
初あらし膝に羅うち覆ひ　辨三
　頰髭剃て見違へにけり　桃林
旅の空暇乞する雨晴て　馬啼
　又一しきり瀧の鳴音　野幽
物ぐさき夜は折々に日を覺し　利雨
　わすれぬやうに其疊ふがみ　越人
蒼天をながめ渡せる三笠山　臨高（桐葉改）
　時宜して次へ廻すさかづき　執筆

芭蕉翁俳諧集　元祿五年作

江戸の芭蕉庵に閑居してゐた頃の半歌仙で『芭蕉翁俳諧集』以前のものに所見ない。作の年代は同書に元祿　年の部にあるが、『一葉集』によつて同五年の作として揭ぐ。

水音や小鮎のいさむ二俣瀨　湖風
　柳（一）もすざる岸の刈株　翁
見しりたる乙切草の萠出て　沾蓬

刀の柄(一)にくゝる状箱　利牛
食傷(しよくしやう)の腹をほしけり朝の月　風
晝寢て遊ぶ盆の友達　翁
ウ
小構(こがま)へに家は木樺の取廻し　桃隣
錢一文に下駄をかる道　牛
蒟蒻の色の黑きもめづらしく　蓬
祭のすゑは殿の數鑓　曾良
見るほどの子供にことし疱瘡(いも)の跡　翁
古き籬にころ鮫(ざめ)をつる　風
(二)小(ちひ)さうて砂場をありく原の馬　牛
蝨(いたご)を燒て誰が喰そめ　隣
月影の臼も佛の臺座也　翁
盗人かへる蔦の(三)朝しも　蓬
沓掛の峠ほのかに花の雲　良
けふも(四)野あひに燕うつ網　風

〔一〕『幽蘭集』に「柳のひさる」
〔二〕同「ちさうても」
〔三〕『芭蕉翁草紙』に「イニ細道」
〔四〕『幽蘭集』に「けふは」

鄙懷紙　元祿五年作

此の連句は大垣藩の江戸やしきで、勤番の人々が催したのであるらしい。『桃の白實』にも出てゐるが、『芭蕉翁草紙』所引の『鄙懷紙』を本文に採錄した。

仲秋雨懷二故人一

名月やさゝふく雨のはれを待(まて)　濁子
客に枕のたらぬ虫の音　芭蕉
秋(一)を經て庭に定まる石の色　千川
まだ生(なま)なれの酒のこゝろみ　凉葉
端たゝぬ鼻紙おもき懷に　此筋
曲れば坂の下に見る瀧　子

ウ
獵人の矢先のけよと手を振て　蕉
蒼き空より雪のちらめく(二)　川
入口の鎰(かぎ)預れとたのむなり　筋
きり飼鷹の鈴板をとく　子
舟こぞり狭くば下りて夕凉　葉
輕う着こなす洗ひ帷子　川
伏見まで行にも足袋の底抜(三)て　蕉
飯の強きもくひなるゝ秋　筋
月影(四)に夢かとぞ思ふ烏帽子髪　子
殿(五)の疊の古びたる露　川
花咲ば木馬の車曳ずりて　蕉
ほこりもたゝぬ春の波(六)風　筋

〔一〕『桃の白實』に「行秋な庭に定むる」
〔二〕同「雪のちらつく」
〔三〕同「底ぬきて」
〔四〕同「月影は」
〔五〕同「雨の疊の」
〔六〕同「春い南風」

鄙懐紙　元禄五年作

これも江戸で興行した半歌仙で、『芭蕉袖草紙』引用の『鄙懐紙』を本文とし、『桃の白實』及び『幽蘭集』を以て校合した。

木枯しにうめる間(ま)おそき入湯哉　荆口
毛を引く鴨をのする俎板(まないた)　酒堂
懸乞の中脇ざしに袴着て　芭蕉
ところ〴〵は木履はく道　此筋
梨の枝おもりを解(とけ)ば暮の月　左柳
桶に色こき芋売のあく(灰汁)　大舟
秋風に架(ほこ)こしらゆる鷹の宿　千川
鼠のわたる梁(うつばり)の弓　蕉
六月の日も照りじまふ杵(きね)の木　堂
手數の入し荷繩ゆるまる　柳
袈裟斗(ばかり)かけて供する淨土宗　筋

箕面の瀧のくもる山降　川
籠ぶせの駒鳥おとす篠の陰　舟
俵に豆の葉をしごく秋　堂
月代も小ぐらき里のはなれ際　川
手綱ひかへて馬の順くる　筋
盃は今朝よりとれぬ花盛り　柳
疊の上にのぼる陽炎　蕉

桃の白實

元祿五年作

『芭蕉袖草紙』に「深川庵」といふ前書があり、『鄙懐紙』から引用してゐるが、裏の第十句で終り、『金蘭集』は「半歌仙二句不足」といふ註を附してゐる。『桃の白實』はその二句を添へて半歌仙となつてゐるから本文に用ひた。

月代を急ぐやう也村時雨　千川

小松のかしらならぶ(一)冬山　芭蕉
男鹿飛嶽(二)の延間の木がくれて　此筋
水眞白に海に出る川　左柳
酒(三)機嫌宿の板屋も一里程　酒堂
襟に押込おとがひの髭　海動
物書に(四)慰む口あり五月雨　岱(五)水
散際ひ(六)さし南天の花　川
笠とれば前髮ゆがむ草鞋掛　蕉
泪も戀(七)にいさむ寺住　嵐蘭
高館は年せんさくに成にけり　柳
水風呂たてる雪の降出し　筋
ふくさ藻取亂したるす(八)けと鱈　動
傷寒病の天窓かゝえる　水
伊豆の海御崎(九)の船をかき入て　川
一ト夜の法に宗旨定(一〇)めて　蕉
とし／＼の花にならひし友の枝　丈草
きしる車もせかぬ春の日　川

〔一〕『幽蘭集』に「かしらそろふ」
〔二〕同「巖の透間の草枯て」
〔三〕同「酒きげん旅の酒屋も」、『芭蕉翁草紙』に「泊るべき旅の酒屋も」
〔四〕『幽蘭集』に「物書て」
〔五〕本文「此水」に誤る。
〔六〕『幽蘭集』に「ちりきはかろし」
〔七〕同「たみだも急にいさむ大酒」
〔八〕『芭蕉翁草紙』に「菅さ鱈」
〔九〕『幽蘭集』に「岬に船を漕入て」
〔一〇〕同「定る」

初便　　元祿六年作

野坡は此の兩吟に就き「有俳諧歌仙者翁在世（元祿六癸酉冬）於芭蕉庵興行也（前後二巻）先師不レ適レ意句多、故不満韻終止畢。」と奥書をして草稿を門人梨里に授與した。『七部集拾遺』は失拙の『今日の昔』を本文として『初便』と改題して、その卷末に此の連句を附錄してゐる。歌仙に四句不足である。

ばせを庵にて

寒菊や小糠のかゝる臼の傍　　芭蕉
　提て賣行はした大根〔一〕　　野坡
夏冬は取置橋を懸初て　　同
　門に額出す月のたそがれ　　蕉
雲行も秋の日癖のざんざ降　　同
　此一谷は栗の御年貢　　坡
ウ
七十に成をよろこぶ助扶持　　蕉
　三尺通り裏のさし掛　　坡
涼しさは堅田の出崎よく見えて　　蕉
　蛭取牛の方杷〔二〕休むる　　坡
墨染に寺の男のこゝろ入　　蕉
　共日に戻る旅の草臥　　坡
押詰る師走の口を喰かねて　　蕉
　緒に緒をつけて咄す主筋　　坡
田の中に堀せぬ石の年經し　　蕉
　芝に道つく月おぼろなる　　坡
花の時祖父は目出度なられけり　　蕉

俵で米かす春の藏もと　坡
二
廣庭に青の駄染を引ちらし　同
這廻る子のよごす居どころ　蕉
裏合せ根瘦のくゞる藪の岸　坡
蝮のあとの〔三〕いたむ霜さき　蕉
とし寄て身は足輕の追からし　坡
泣て酒のむ乘物のまへ　蕉
どう／＼と榎に風の當る音　坡
稻盗人の繩を解やる　蕉
月見れば親に不足の出來心　坡
こぼれて露は何所へ行やら　蕉
假に剃おたまばかりは殊勝にて　坡
仕付てもどす聟方の客　蕉
田を植る向近江の稻の出來　同
天氣に成し宵のかみなり　坡

〔一〕『芭蕉袖草紙』に「はたな大根」
〔二〕『幽蘭集』に「方耙」とふり假名あり
〔三〕同「跡の」の右傍に「なイ」とあり。

繼はし　元祿六年作

江戸深川で興行した卷で、杉風の遺稿中に取殘されたのを寛政四年、梅人が『繼はし』に入れて板行した。附言に「此一卷は舊庵反古より取出し侍る」といふてゐる。これも半歌仙である。

雪や散る笠の下なる頭巾迄　杉風
刀の柄にこほる手拭　翁
唐がらし木ながら軒に打かけて　岱水
秋來てよはる鍋蓋の蠅　依々
朝／＼は布子をはをる暮の月　曾良
研で捨たる腰の印判〔一〕　翁
ウ
島守に言葉の禮を染／＼と　水
あからむ麥は鳥のなみだか　野坡

白かし(樫)の梢は寺の林にて　風
　髪を切ても身を作りけり　水
焼かほる物見の莚押まくり　翁
　もらひ寄(よせ)しも茶にあはぬ水　良
藪こはす跡にうきたつ霜柱　風
　出家に物をやり上る也　坡
お局の暇がちなる里の月　良
　取草の湯の醒てゆく空　依
はつ花は蓬搗よりいそがれて　坡
　塀の釣木に鶯の鳴　執筆

〔一〕『袖珍鈔』に「腰の印形」

壬生山家　元禄七年作

伊賀の上野で巻き残した連句で、鳥酔が摂津の壬生山淨春寺で発見した中の一巻である。『一葉集』に二の表第七句に「ニウ」とあるが、かやうな作例は全くない。『壬生山家』に作者名を欠くもの六句あるが『一葉集』によつて補つて置いた。

歌仙　未満三十句

残る蚊に袷きて寄る夜寒哉　雪芝〔一〕
　餌畚(ふご)ながらに見するさび鮎　翁
夕月の〔二〕ひ(光)かる椿の實になりて　土芳
　薄かき(柿)色に咲ける雞頭　風麦
身をそばめ二人つれ〔三〕行在郷道　玄虎
　こふちかけ置霜のあけぼの　苔蘇
ウ
柴萱(かや)を目利のうちにかたづけて　翁
　つりて貴き門の鍔口(わにぐち)　雪芝
大木の梢は枝のちゞむなり　風麦
　野に麥をして〔四〕こかす倭物　土芳
山臥(やまぶし)につゐなつて来て札賦る　苔蘇
　一里行ても宿をとる旅　玄虎

掛物の布袋の顔に月指(さし)て　芝
　百のやいと(灸)にきりぐす啼　翁
秋風の雨ほろ〳〵と川の上　芳
　かち荷は船を先あがる也　（麥）
美濃山はのこらず花の咲揃ひ　虎
　とてもするなら春の順禮　蘇
永き日の西に成たるきりめ(切日)椽　翁
　あはれにぬるゝ雨の白鷺　芝
のがれぬやよそからは來ぬ冬の來て　麥
　柴たくかげに遊ぶ夜すがら　芳
寒竹の杖のふしよむ老のわざ　蘇
　しらぬ山路を馬にまかせて　（虎）
暮るより寺を見かへる高燈籠　（芝）
　すゝきのかげにすてるはきもの　（翁）
むげなれや月に訪るゝ人も哉　（芳）
　琵琶のいはれを語る竹椽　（麥）
思ひきる跡よりなみだつきかけて　虎
　にほひするかみ(髮)しよほくれて越(五)　蘇

〔一〕本文作者名「定」に誤る。
〔二〕『芭蕉袖草紙』に「夕月に」
〔三〕同「二人つれ立」
〔四〕『幽蘭集』に「麥ほして」
〔五〕『芭蕉袖草紙』に「しよほくれておく」
本文（　）の中の作者名なし、『一葉集』による。

一葉集　　元祿七年作

伊賀上野で隨行の惟然の發句によつて試みた四吟連句で、初裏十句で終る不備な卷である。『一葉集』以前の諸集に所見ないので、本文は同書により『袖珍鈔』及び『玉葉集』を以て校合した。

松茸や都にちかき山の形(なり)　惟然
　雨に繩手のしるき秋風　土芳
おもしろく噺す間(あひだ)に月暮て　猿雖
　まだ入(いり)て人なき次の居風呂　翁

はこばする道具そこ〳〵置直し　芳
日のさしこみに雀來て啼　然
ウ
冬はじめ熟柿を包むすくり稿　翁
置て廻りし伊勢の御祓　雖
庇さへなくて古風の家造り　然
內義出て來る酒のとれ際　芳
ちりつきて又も痛める頭はげ　雖
今宵は冷る淺茅生の番　翁
有明〔二〕より國よりはれて一かへし　芳
見するほどなき沙魚籠の內　然
弓はてゝばら〳〵歸る丸の外　翁
繩を引ばり壁の上ぬり　雖

〔一〕『玉葉集』に「有明に北より」

芭蕉翁俳諧集　元祿七年作

大阪の潮江車庸亭で行つた七吟の連句で、『一葉集』に「菊月廿一日」の會としてある。『笈日記』に「廿一日・廿二日の夜は雨もそぼ降りて靜なれば、秋の夜を打崩したる咄かな」とあるのと一致する。

秋の夜をうち崩したる噺かな　芭蕉
月まつほどは蒲團身にまく　車庸
西の山二〔一〕はな三はな鳫啼て　酒堂
ひかゆる〔二〕牛のよくうごくなり　游刀
舅の名まんまと囉ふ眞性者　諷竹
小袖を出して寐たる大とし　惟然
ウ
使やる所をはたと打わすれ　支考
かへても醫者の見廻れにけり　翁
拭ひ立惣〳〵の柱きら〳〵と　車庸
寄て揃〔三〕る辨當の椀　酒堂
糺より黑谷かけて暮かゝり　游刀
薄がなくば野は見られまい　支考
鹿の來ぬ夜は宿賃が百の損　惟然

雨氣の月に細き川すぢ　庸
火燈して藥師を下る誰が噂　蕉
七種まではよろづひまなき　刀
見せ馬の荷鞍のあかね花やかに　堂
小屋かたならぶ金杉の春　然

〔一〕『芭蕉袖草紙』に「二はな三端」
〔二〕『金蘭集』に「ひかへる」
〔三〕『芭蕉袖草紙』に「寄て揃ゆる」、『金蘭集』に「寄て揃へる」

其便　元祿七年作

泥足の『其便』に「此集を鏤んとする比、芭蕉の翁久しく難波に抖擻し給へると聞て、直にかのあたりを訪ふに」とあつて此の半歌仙を得た事を述べてゐる。『笈日記』に「廿六日は清水の茶店に遊吟して泥定が集の俳諧あり、連衆十二人」とあるが、實際の作者は十人である。『其便』の板行は元祿七年である。

所思

此道や行人なしに秋の暮　芭蕉
岨の畠の木にかゝる蔦　泥足
月しらむ蕎麥のこぼれに鳥の寐て　支考
小さき家を出て水汲む　游刀
天氣相羽織を入て荷拵らへ　之道
酒で痛のとまる腹癖　車庸
ウ 片づかぬ節句の座敷立かはり　酒堂
塀の覆にあかき梅ちる　畦止
線香も春の寒さの伽になる　惟然
惠比須の餅の殘る二月　亀柳
兵の宿する我はねぶられず　泥足
かぐさき茸に交る松風　蕉
はら／＼と山田の稻は立枯て　庸
地藏の埋る秋は悲しき　考

仕事なき身は茶にかゝる朝の月　竹
鹽ノ飽(アク)の船のとつと入り込　然
散花に幕の芝引吹立て　止
お傍(そば)日永き醫者の見事さ　堂

表・第三・附句の部

芭蕉翁全傳　寛文五年作

寛文五年、貞徳十三回忌追善の爲め蟬吟の發句・季吟の脇にて百韻を興行した。其の百韻の中に芭蕉の宗房時代の附句十八句中、竹人の『芭蕉翁全傳』に左の五句を掲げてある。

○
月暮(くるゝ)まで汲むもゝの酒

○
ならで通ふはむしやうやみの夜

○
有明の影法師のみ友として

○
竹弓もいまは卒都婆に引替て

○
なにの風情も茶飯ばかりぞ

續山井　寛文七年作

北村湖春が父季吟の意を受けて、寛文七年五月『增山井』につゞく『續山井』七卷を板行した。其の一・二の兩卷は附句の部である。伊賀松尾宗房として其の中に三句入集してゐる。

○
肩に着物かゝるものかはうき難所
　今をたうげとあつき日の岡　宗房

○
後生ねがひとみさぶらひがた
しやかの鎗あみだやすりのつば刀　宗房

○
暁が寝ざまの寒さつらしな
おだ巻のへそかねて酒をかはん　宗房

一葉集　寛文十年作

伊賀在國中の「三ッ物」であらう。『一葉集』に「寛文十戌年」として次の二作が載つてゐる。前巻は夏・後巻は秋である。

寛文十戌年
君も臣もさぞな三肌をあはせ衣　助勝
　夏しりがほにゆるり國民　正朝
かり作り河原おもてに見渡して　宗房

同
抜ば露の玉散太刀か一葉切　長忠
　はなつ矢の根につよき秋風　定就
冷じき石はさながら虎に似て　宗房

續連珠　延寶四年作

北村季吟撰の『續連珠』の附句に左の四句入集してゐる。『續連珠』は延寶四年の板でその作者名寄に「松尾氏　住伊賀　號宗房　桃青」となつてゐる。

○
　松のこずゑにうつる日の入
飾竹のよは夢よつゐ年の果　松尾氏 桃青

○

川かぜ寒き夜半の雪隱
都出てけふみかのはら痛ゝらし　松尾氏 桃青

○

たまのちぎりに玉ぞとらるゝ
さりとてはあうて別のうかりひよん　伊州松尾氏 桃青

○

むつくりとしてどこやらはかどあらせ
寐てねごころもよいはりまくら　桃青

誹諧當世男　延寶四年作

江戸の蝶々子貞宣は延寶四年『誹諧當世男』を板行した。その中に桃青の發句三・附句三が入集してゐる。此の附句は『一葉集』その他に全く所見ないものである。

○

草の庵夏を一種のたのしみに
茄子の煮物やまほとゝぎす　桃青

○

燒亡はきのふと過て葛城や
あな藏のふたあくる侘しさ　桃青

○

月の中の桂は凡そ何程ぞ
かねにてかはん寒の一むら　桃青

江戸通り町　延寶六年作

十二歳の少年二葉子の撰集『江戸通り町』の下巻「付句」の部に桃青の作として、春一・夏一・釋教二・雜一、合せて五句入集してゐる。附錄の哥仙は前に掲げて置いた。

○
寶いくつあつらへ(誂)の夢あけの春
　簑笠小槌あら玉の空　桃青
○
手盥に五日の雨と流す也
　菖蒲のかつら剃刀をとぐ　桃青
○
　經によう似た鶯のこゑ
是も又うばそく優婆夷あま蛙　桃青
○
　寐覺侘しき澤庵の耳
菩提もと木枕一ツかどありて　桃青
○
　御息所の店がへなりけり
ながむれば松浦と中五郎兵衛町　晩秋
　はや舟にのりのぼる京ばし　桃青

江戸廣小路

延寶六年作

一柳軒不卜の『江戸廣小路』は延寶六年の板本である。桃青の發句十六・付句二十を入集してゐるが、『一葉集』及び『稿珍鈔』とも十九句よりない。本文は『江戸廣小路』の原本から採つたので、二十句揃つてゐる。

○
大鋸屑の煙りもともに不二の嶽
　蚊にさゝれ行(一)田子の浦舟　桃青

［一］『一葉集』に「蚊にさゝれ舟」

○
虫の髭白髪とこそは成にけれ
　瓜の中ごの實盛が首　桃青

○
孔子は鯉魚のさしみにあてられ
夜起する糞土の垣に月更て　桃青

○
說經芝居うづら啼也
萩薄さあ刈萱じや〳〵　桃青

○
捨る身も鬼の餌食の生肴
南無や酒樽醬油來迎　桃青

○
鐵橋に大焦熱の苦を受る
仁藏菩薩に槌をうたせて　桃青

○
膳棚の少こぶかき山見えて
大宮の御在所箸箱と叡覽は　桃青

○
碓の哥も集にや入ぬらん
大津奈良屋も奈良の御時　桃青

○
武者ぶりを引つくろひてよは〳〵と(一)
敵に後を見せる尻つき　桃青

［一］『一葉集』に「よい〳〵と」

○
桶一つ物の哀をとゞめたり
それ人間はぬか味噌の虫　桃青

○
馬の沓かゝる所の秋也けり
唐網うてば須磨の浦浪　桃青

○
裳を見ればかゝ(一)るひ裝束
中返利歸る(二)所をしらんとて　桃青

［一］『一葉集』に「駕は裝束」
［二］同「かへす」

○

うなり〔一〕聲既に平家と聞時は
きやふ(脚布)をきせたる鎌倉の山　桃青

〔一〕『一葉集』に「うなる聲」

○

あつたら眞桑(まくは)泥水の末
此界をひつくりかへす大砂鉢　桃青

○

相場に立しよざの浦浪
紗綾りんずちやう(茶)島の子が玉手箱　桃青

○

上は脇ざし中は竹へら(篦)
爰元に紙子おどしの鎧着て　桃青

○

心にかなふ長(なが)持(もち)の蓋(ふた)
送り膳道少(すこし)だにへだてねば　桃青

○

魚の膓共まゝ海に沈(しづ)められ
女院たれかれ二位の尼御　桃青

○

大屋の退(たい)屈(くつ)薄紅葉する
味噌燒の七日つゞきし稻荷山　桃青

○

ひかる語石の枕の秋の暮
長嘯の筆きり〳〵す啼　桃青

『一葉集』に此の附句を脫す。

新附合千句二葉集　延寶六年作

伊勢の杉村西治撰『新附合千句二葉集』は延寶七年の板本で、桃青の附句二を揭けてゐる。其一は『江戸廣小路』にあると同一であるが、參考の爲め二句ともに記して置く。

○

くさり鎌もれて出たる三ヶの月

　雲井に落る雁の細首　　桃青

○

もすそを見ればかるい裝束

　中返り歸る所をしらんさて　　桃青

新附合物種集　延寶六年作

延寶七年板の『新附合物種集』に桃青の附句が一句ある。『江戸廣小路』に既出のものであるが左に再記する。

○

孔子は鯉魚の指身にあてられ

　夜起する糞土の垣に月更て　　江戸桃青

一葉集　延寶七年作

夢中に句を得れば「夢想びらき」の俳諧を行ふのが、元祿以前の恒例であつた。此の表八句も「夢想びらき」の延喜に行つたので『一葉集』に延寶七年春の作とあるに從つた。

夢想

さゝげたり二月中旬初茄子　　桃青

　天下のおがけ我等まで春　　杉風

雨霞古藏(ふるぐら)ひろくおさまりて　　仙風

　しろき鼠に雪ぞ舞ゆく　　繩

雲間より赤い烏のほの〴〵と　　惣代

　谷の戸口にかゝる看板(かんばん)　　杉風

上々吉有明の空吹(ふく)あらし　　而已

　千里の羽も金箱(かねばこ)の秋　　執筆

伊賀御集物　天和年中作

『一葉集』に「伊賀御集物」さしてあるが、其の出典は明瞭しない。

栗野老山歯朶尉か秋こそあれ　青府
自禮飾るか炭がまの松　一品
御幸へだつ霞は坂をゆかむらん　桃青

春と秋　貞享元年作

『甲子吟行』の出立門日、李下の送別吟に脇句を附けたので、桃鏡の『春と秋』に出てゐる。『奥の枝折』に「奥州行脚　江戸を立れけるに」とある前文は誤であらう。

江戸を立日
芭蕉野分その句に草鞋かへよかし　李下
月ともみぢを酒の乞食　芭蕉

冬のうちわ　貞享元年作

尾張鳴海の蝶羅が『千鳥掛』に洩れたものを『冬のうちわ』に拾遺した其の一つである。

枯枝に烏のとまりけり秋のくれ　はせを
鍬かたげ行ん霧の遠里　素堂

『一葉集』に「かたげゆく」

冬の日　貞享元年作

『冬の日』の追加に掲げた表六句である。これを

「表合せ」と稱して連句の樣式の一となつてゐる。

いかに見よと難面うしをうつ霰　羽笠
　樽火にあぶるかれはらの松　荷兮
とくさ苅下着に髪をちやせんして　重五
　檜笠に宮をやつす朝露　杜國
銀に蛤かはん月は海　芭蕉
　ひだりに橋をすかす岐阜山　野水

熱田三歌仙　貞享元年作

貞享元年の『甲子吟行』に桑名より熱田に入つて、林桐葉亭に客となつた時の連句で『熱田三歌仙』は第三までよりない。第四・五・六の三句は『幽蘭集』によつて補つた。

旅亭桐葉の主、心ざし淺からざりければ、暫しとゞまらんとせし程に

此海に草鞋捨ん笠しぐれ　芭蕉
　むくも佗しき波のから蠣　桐葉
凩に〔一〕冬瓜ふらりとふら付て　東藤
　まばらに垣のいつゆふたやら　叩端
細うてもかげはさうから月の空　如行
　暮ては露にしめるわき道　工山

〔一〕『幽蘭集』に「木からしに殘す冬瓜の」

熱田三歌仙　貞享元年作

『皺筥物語』には芭蕉の發句のみで、桐葉の脇句はない。

熱田神前の茶店にて

しのぶさへ枯て餅買ふ舍り哉　芭蕉
　しわびふしたる根深大根　桐葉

熱田三歌仙　貞享元年作

『熱田三歌仙』は第三まで〻、第四句は『幽蘭集』によつて補つたのである。

　其あした

馬をさへ詠る雪のあした哉　芭蕉
　木の葉に炭を吹をこす鉢　閑水
はた〳〵と機織音の名乘來て　東藤
　さしのよるほど伯母の世話しき　桐葉

笈日記　貞享元年作

尾張名古屋の抱月亭の雪見である。『笈日記』に杜國の第三に就いての批評が出てゐる。『一葉集』には貞享四年の部にある。

　抱月亭

市人にいで是うらん笠〔一〕の雪　翁
　酒の戸たゝく鞭の枯梅　抱月
朝がほに先だつ母衣を引〔二〕つりて　杜國

〔一〕『一集集』に「雪の笠」
〔二〕同「引はりて」

皺筥物語　貞享元年作

桐葉の送別吟に對する挨拶の附句で、これを脇句附と稱してゐる。『熱田三歌仙』にも出てゐる。

翁、是より美濃路へうち越さ聞えけれは

檜笠雪を命の舍り哉　桐葉

稿(わら)一つかね足つゝみ行　芭蕉

幽蘭集　貞享元年作

美濃大垣の谷木因亭にての附合である。

能(よう)程に積(つもり)かはれよみのゝ雪　木因
冬のつれとて風も跡から　はせを

後の旅　貞享元年作

美濃大垣の近藤如行亭の附合で、如行撰の『後の旅』に本文の通り出てゐる。『笈日記』には「貞享元年の冬、如行が舊宅に旅寢せし時」といふ前文が附いてゐる。

霜寒き(一)旅寐に蚊屋を着せ申し　如行

翁をはじめてやどしける夜、
ふと申出ければ
古人かやうの夜の木がらし　芭蕉
かく有て興じ給ひぬ

〔一〕『春と秋』に「霜の宿」

春と秋　貞享元年作

「笈日記」によると美濃大垣で此の脇句を附けたので、一方芭蕉の年を考證する有力な手掛りともなつてゐる。（歌仙の部參照）

師の櫻むかし拾はん木葉かな　塔山
すゝきに霜の髭四十一　翁

幽蘭集　貞享元年作

『甲子吟行』に「いもあらふ女西行ならば哥よまむ」とある其の發句に唱和した雷枝の發句で、芭蕉は又これに挨拶の脇を附けたのである。

伊勢山田にて芋洗ふといふ句を和す

宿まいらせん西行ならば秋のくれ　雷枝
はせをと答ふ風の破笠　翁

春と秋　貞享元年作

これも『甲子吟行』の折、伊勢山田に於ける附合である。

華の咲身ながら草の翁かな　伊勢山田 勝延
秋にしぼるゝ蝶のくづをれ　翁

春と秋　貞享元年作

北村湖春の江戸に招聘される以前、その京都の家で第三まで詠んだのであらう。『熱田三歌仙』にも載つてゐる。

梅絶えて日永しさくらいま何日　湖春
ひがしの窓の蚕〔一〕桑につく　翁
巣の中に燕の顔の並び居て　同

〔一〕『熱田三歌仙』に「蠶桑つく」

春と秋　貞享元年作

桃鏡の『春と秋』の緒言に「附句の二十句は同じ吟行の折から發〳〵の拔萃なり」とある「同じ吟行」とは貞享元年の甲子吟行の事であるが、

「宮司が妻に惚られてわぶ」は『曠野』の員外「一里の」卷裏第二句の「宮司が妻にほれられてうき　胡及」と同案で、たゞ前句が相違してゐるのみである。その他不審の句も尠くないが、本文のまゝ掲げて置く。

○

美人を拜むかげろふの奥

穴の聲なき蝶と身を泣て　翁

○

一輪咲る窓の芍藥

碁の工夫二日とぢたる目を明て　翁

○

打かつぐ前垂の香のなつかしく

君にもたれて酒買にゆく　翁

○

木の間〱に星見ゆるかげ

宮守が油さげ行華のおく　翁

○

ひとり書(一)を見る草の戸の中

二町ほど西に碪のきこゆ也　翁

○

榎木の風の豆がらを吹

寒き爐に住持はひとり柿むきて　翁

○

小僧ふたりぞ(二)かしこまり居る

朝鮮の繪書に奈良の(三)酒をくみ　翁

○

我戀は色紙を持るわらひより

宮司が妻に惚られてわぶ　翁

○

すゝきを切て笘にふきけり

琴おふて鹿聞に入篠の隈　翁

○

佗おもしろく橡のかゆ煮(四)

更科の里の椹を聞に行　翁

〔一〕『一葉集』に「ひとり書をよむ草庵の内」
〔二〕同「小僧ふたりは」
〔三〕同「酒酌て」
〔四〕同「粥たく」

熱田三歌仙　貞享二年作

三井秋風の鳴瀧山莊で三吟の表三句で、「春と秋」には脇句までよりない。

我櫻鮎割く枇杷の廣葉哉　秋風
筧にうごく山藤の華〔一〕　芭蕉
日の霞夜銅の氣をしりて　湖春

〔一〕『奥の枝折』に「山彦」

熱田三歌仙　貞享二年作

『甲子吟行』に「京にのぼりて三井秋風が鳴瀧の山家をとふ」として發句のみ記してある。

みやこにあそびて題ス秋風子之梅林ニ
梅白しきのふや鶴を盗れし　芭蕉
杉菜に身する牛二ッ馬一つ　秋風

春と秋　貞享二年作

此の發句も『甲子吟行』にある。『熱田三歌仙』には「山家」と題して本文と同じく載せてあるが、板行の年代を考へて桃鏡の『春と秋』によつた。

樫の木の花に構はぬすがたかな　芭蕉
家する土をはこぶつばくら〔一〕　秋風

〔一〕『熱田三歌仙』に「もろつば」

鎌倉海道　貞享二年作

方竟千梅の『鎌倉海道』は享保十年の板行で、「からさきの」發句は千那亭の作なる事を此の脇句から引いて力説してゐる。『幻住庵有也無也關』にもある。

からさきの松は花より朧にて　芭蕉
山はさくらを絞る春雨　千那

千鳥掛　貞享二年作

『春と秋』には「鳴海に立よりければ」と前文があつて發句の作者「若照」となつてゐる。知足の法號は「寂照」である。本文は『千鳥掛』によつた。

芭蕉行脚のころ

夏草よあづまぢ（東路）まとへ五三日　知足
笠もてはやす宿の卯の雪[一]　桃青

〔一〕『袖珍鈔』に「卯の花」

幽蘭集　貞享三年作

發句は『蛙合』及び『春の日』にあつて有名ながら、此の脇句は古い時代のものに見受けない。

古池やかはづ飛こむ水の音　はせを
芦のわか葉にかゝる蜘の巣　其角

丙寅紀行　貞享三年作

松葉屋風瀑の江戸より伊勢に歸る餞別の卷で、

貞享三年板の風瀑著『丙寅紀行』に表五句を収めてある。

さらば首途も近かめ間にむさし野の月見むとて芭蕉庵の廬に伴ひ

深川は菫さく野も野分かな　風瀑
春のはたけに鴻のあしあと　芭蕉
初雷のはじめの市の日和得て　一晶
朝とき月の都をがみに　琴蔵
牛車われらが霧の道やすき　虚洞

續虚栗　貞享四年作

其角の母妙務尼の三十五日の追善表三句で、『續虚栗』の上卷夏の部に載つてゐる。

五七の日追善會

卯花も母なき宿ぞ冷じき　芭蕉
香消のこるみじか夜の夢　其角
色々の雲を見にけり月澄て　嵐雪

鹿嶋詣　貞享四年作

貞享四年秋、鹿島根本寺にて月見の歸路、潮来の本間松江亭に立寄つた時の表三句である。『鹿島詣』及び『鹿島紀行』の兩書に出てゐる。

塒せよわらほす宿の友すゞめ　〔一〕松江
あきをこめたるみねの指杉　〔二〕桃青
月みむとしほひき登るふねとめて　ソラ

〔一〕『鹿島紀行』に作者名「あるじ」
〔二〕同「かく」、かくは「客」

合歡のいびき　貞享四年作

『合歡のいびき』の下卷に「二人旅寢」として芭蕉の眞蹟の摸刻された中に、此の表三句が出てゐる。『如行子』には貞享四年十一月十三日といふ日附が擧げてある。

麥〔一〕はえて能隱家や畑村　はせを
冬をさかりに椿咲也〔二〕　越人
晝の空のみかむ犬のねがへりて　〔三〕野仁

〔一〕『如行子』に「麥まきて」
〔二〕同「椿咲けり」、『一葉集』に「山茶咲也」
〔三〕『一葉集』に「杜國更野人」

千鳥掛　貞享四年作

三河の保美に謫居中の杜國を訪へる芭蕉・越人の師弟を、知足亭に迎へた時の連句である。『如行子』には「同年十一月十六日」として前文はすこしく相違するが、兩書とも表五句で了つてゐる。

芭蕉翁、もと見し人を訪ひ三河國に越へ、序おもしろければ伊良古崎見んと、白浪よする渚なつたひ、からうじて歸給ひし旅の哀を聞て

燒飯や伊良古の雪にくづれけん　知足
砂さむかりし我あしの跡　芭蕉
松をぬく力に君が子日して　越人
いつか烏帽子の脱る春風　知足
眠るやら〔一〕馬のありかぬ暖さ　芭蕉
曇をかくす朧夜の月　越人

〔一〕『如行子』に「野馬うごかぬ暖さ」

千鳥掛　貞享四年作

前卷と同じく知足亭に於ける越人の發句で表六句を試みたのである。これも『如行子』に出てゐる。

寂照庵に旅ねして

置炭や更に旅ともおもはれず　越人
　雪をもてなす夜すがらの松　知足
海士の子が鯨(くぢら)を告る貝吹て〔一〕　芭蕉
　舂戸より直に踏(ふみ)こはす垣　人
歌よません〔二〕此名月をたどにはや　足
　蕎麥のみつぎを通す關守　蕉

〔一〕『如行子』に「鯨をしらす」
〔二〕同「歌よまん」

千鳥掛　貞享四年作

知足の日記に「十一月十六日天晴　荷兮・岡田野水、桃靑翁爲見廻に御こし、そば切打てはいかい有」（合歡のいびき）とある其の日の表四句である。『如行子』にには十七日の事としてゐる。

寂照庵知足子の許へはせを翁を尋來て

幾落葉それほど袖もほころびず　荷兮
　旅ねの霜を見するあかゞり　芭蕉
今朝〔一〕の月替る小荷駄に鞭當て　知足
　里の踊りに野菊折ける　野水

〔一〕『如行子』に「今宵の霜がゆる小駄荷を付遣りて」

千鳥掛　貞享四年作

『如行子』に同年十一月二十日の會として掲げ、『千鳥掛』と同じく表六句である。

鳴海出羽守氏雲宅にて

面白し雪にやならん冬の雨　芭蕉
氷をたゝく田井の大鷺　自笑
船繋ぐ岸の三股荻かれて　知足
夜の更るまで竹さゆる音　夕道
舟當て櫂もきらるゝ磯際に　荷兮
汐のはやきを越る洲走魚　野水
海なりて山より曇る暮の月　はせを
鐘つく秋の階子ほく〳〵　執筆

如行子　貞享四年作

鳴海から名古屋に出で十二月三日、風月堂夕道亭で此の表合を行つたのである。

その夜風月亭にまかりて

あられかとまたほどかれし笠舍り（一）　如行

〔一〕『一葉集』に「霰かと開ほどうれし」

幽蘭集　貞享四年作

古集に所見ないが『幽蘭集』を本文として、作の年代は『一葉集』によつて掲ぐ。

いざさらば雪見にころぶ所まで　はせを
硯の水のこほる朝おき　左見
同じ茶の焙じたらぬは氣香もなし　恕風
三十餘年もとのかほなり　野人（杜國改）

あの山のあかりは月の御出やら　支考
かやつる世話もやめて此比(ごろ)　故江

如行子　貞享四年作

起倒子に薬を乞たる發句に、脇句を附けて來たのであらう。

翁、心ちあしく欄木起倒子へ薬の事いひつかはすとて

薬のむさらでも霜の枕かな　はせを
むかし忘れぬ草枯の宿　起倒

三冊子　貞享四年作

土芳の『赤双紙』に此の句と脇に對する評語がある。發句は『笈の小文』に出てゐる。

歩行(かち)ならば杖つき坂を落馬哉　芭蕉
角のとがらぬ牛もあるもの　土芳

春と秋　元祿元年作

伊賀の上野に歸省中の附合であらう。作の年代は『一葉集』によつた。

われもさ(寂)びよ梅よりおくの藪椿　(イガ)雅良
茶の湯に殘る雪のひよどり　翁

冬扇一路　元祿元年作

鳥醉は「歌仙滿尾、翁執筆、則其一卷今に殘れ

り」と『冬扇一路』に書いて發句・脇の二句を擧げ、蝶夢の『故郷塚百回忌』も同じく二句を揭げるのみで、歌仙全部を出せるものは所見ない。

さまざまの事おもひ出す櫻かな　芭蕉
春の日はやう筆にくれ行　探丸子

一葉集　元祿元年作

江戸の闇指・其角との表三句なので、年代に多少の疑ひもあるが、暫らく『一葉集』によつて置く。

笠寺や乘敷さます一すゞみ　闇指
二人していざ大なる瓜　其角
裁物の麻のきれ端悦びて　翁

笈日記　元祿元年作

『笈日記』によると貞享五年夏の作で、九月改元して元祿となつたのである。

畫讃

ところ〱見めぐりて、洛に暫く旅寢せしほど、みのゝ國よりたび〱消息有て、桑門己百のぬし、みちしるべせむとて、とぶらひ來侍りて

しるべして見せばやみのの田植哥　己百
笠あらためむ不破のさみだれ　はせを

笈日記　元祿元年作

美濃大垣の落梧亭にて名古屋の荷兮と同席し、

此の表三句を試みたのである。

落梧亭

藏のかげかたばみの花めづらしや　荷兮
折てやはかん庭の箒木(はゝき)　落梧
たなばた(七夕)の八日は物のさびしくて　翁

水月一雙　元祿元年作

支考は寶永二年板の『國の花』に表三句を掲げ、美濃三俣の寸木が岐阜にて芭蕉と面談して此の發句を詠じたので「深川の古郷を思ひ出」して此の脇を附けたのだらうといつてゐる。士朗は寛政六年その三俣に寸木の家を訪ひ「こゝに此翁の荷兮・越人等を具せられたる消日の俳諧有面六句也貞享五年林鐘日荷兮筆われうつし持ぬ」と序して『水月一雙』の巻初に表六句を擧げてゐる。

どこまでも武藏野の月影涼し　寸木
水相にたり三またの夏　芭蕉
海老喰ひにむれ(一)ゐる鳥の名を問て　荷兮
ふぼし着ぬ日のさらに樂(らく)也　越人
懷を明てうけたる山ざくら　落梧
蝶狂ひ落(二)欄干のまへ　秋芳

〔一〕『一葉集』に「群たる鳥の」
〔二〕同「くるひゆく」

笈日記　元祿元年作

『笈日記』に「是は惟然みのに有し時の事なるべし」とある。

茄子繪

見せばやな茄子をちぎる軒の畑　惟然
その葉をかさねをらん(折)夕顔　翁

千鳥掛　元祿元年作

鳴海の千代倉知足亭の新宅祝ひの連句で、『千鳥掛』に表六句を收めてゐる。

賀二新宅一。

よき家や雀よろこぶ脊戸の粟　芭蕉
　蒔にみゆる野菊苅萱　知足
投渡す岨の編橋霧こめて　安信
　風呂焼に行月の明ぼの　翁
杉垣のあなたに凄き鳩の聲　足
　初霜をりて紙子椚つゝ　信

記念題　元祿元年作

露川の『記念題』に發句・脇は前卷と同じく、第三を露川の附けた表三句を載せてゐる。前卷と同時の作でなく、別に露川が一座したか、又は露川に第三を詠み直させたものかであらう。

鳴海知足亭

よき家や雀よろこぶ背戸の秋。　翁
　馬草にまじろきゝやう苅萱　知足
河むかひこさしたばこを吸に來て　露川

幽蘭集　元祿元年作

此の發句は『更科紀行』の首途の吟であるが、芭蕉みづから脇句を附けたまゝ、第三以下をつぐ者がなかつたと見える。

ひよろ／＼と猶露けしや女郎花　はせを
　こんにやくかひに行朝の月

いつを昔　元祿二年作

『奥細道』行脚に就き内藤露沾子からの餞別吟と、それに對する挨拶の脇句である。其角の『いつを昔』交題百句の中に入つてゐる。

月花を雨の袂の色香哉　露沾
蛙のからに身を入る聲　翁

茂々代草　元祿二年作

下野高久にての附合で『雪まろげ』及び『雪の薄』と前文こそ違へ句は同一である。寛政九年板の此の『茂々代草』には高久青楓所藏の芭蕉筆蹟が出てゐる。

みちのく一見の桑門同行二人、なすの篠原をたづねて、猶殺生石みむと急ぎ侍る程にあめ降出ければ、先此ところにとゞまりけり。

落くるや高久の宿の郭公　風羅坊
木の間をのぞく短夜の雨　曾良

信夫摺　元祿二年作

元祿二年四月十二日須賀川の等躬亭に着いた日の三吟で『信夫摺』に表三句を載せてゐる。

此日や田植の日なりと目馴ぬことぶきなどありて、まうけせられ侍りければ

旅衣早苗に包食乞はん　曾良
いたかの皷あやめ折すな　芭蕉

夏引の手ひきの青苧(あをう)くり懸て　等躬

信夫摺　元祿二年作

これも須賀川の等躬亭にての表三句である。

此二子(芭蕉、曾良)を草屋に延しきしばらく物し給ふに、馴し武藏のむかし〳〵より今の心の奥のゆくりなき事語るまゝに、安積郡淺香山あさか沼は爰よりいづくの渡りにかなど尋れ給ふめる。淺香山は日和田といふ驛を越えて、一里塚あなるみぎりにて作る。あさかの沼はあやしげなる田の溝などを今は申めるにぞ、いにしへ藤中將の傳へられし花かつみの草のゆかりも、いづれのなにさしる人侍らずと答ながら

茨(ふき)やうをまた習ひけりかつみ草　等躬

市の子どもの着たる細布(ほそぬの)　曾良

日面に笠を並ぶる涼みして　芭蕉

信夫摺　元祿二年作

下野黑羽の桃雪から送り越した發句におの〳〵一句づゝ附け、表四句となつたのである。

芭蕉翁みちのくに下らんとして我茅屋を音信(おとづれ)て、猶しら河のあなた、須か川といふ所にとゞまり侍ると聞て申つかはしける

雨はれて栗の花咲跡見かな　桃雪

いづれの草に啼落る蟬　等躬

夕食(ゆふめし)くふ賤が外面に月出て　芭蕉

秋來にけりと布たぐる也　曾良

雪丸げ　元祿二年作

出羽の新庄にて、此の表三句を殘したので『雪丸げ』に收めてある。

盛信亭にて

風の香も南にちかし最上川　芭蕉
　小家の軒を洗ふ白雨　柳風
物もなく麓は霧に埋れて　木端

奥細道拾遺　元祿二年作

出羽の酒田で興行した連句で、裏の折立までゝ『雪丸げ』には「末略之」となつてゐる。

六月十五日寺島彦介亭にて

涼しさや海に入たる最上川　翁

　月をゆりなす浪の浮海松　令道
黒鴨の飛行庵の窓明て　不玉
　麓は雨にならん雲きれ　定連
皮(一)とぢの折敷作て市を待　曾良
　影にまかする宵の油火　任曉
不機嫌のこゝろに重き戀衣　扇風

〔一〕『雪丸げ』に「樺とぢの」

雪丸げ　元祿二年作

越後高田の醫師細川昌庵亭に於ける表第四句で『奥の枝折』に「まづ一順にしてさきをいそぐ」とある通り、滿尾に至らず出立したのである。

細川春庵(一)亭にて

藥園(二)に何れの花を草枕　翁

荻のすだれをあげかける月[一]　棟雪[三]
爐(ろ)煙の夕を秋のいぶせくて　更也
馬乘ぬけし高藪の下　曾良

〔一〕『新七部集』に「青誦」、『金蘭集』に「升菴」に誤る。
〔二〕『金蘭集』に「藥欄に」、『新七部集』に「菜園に」
〔三〕『新七部集』に作者名「棟芝」に誤る。

ゆめのあと　元禄二年作

加賀金澤の藥屋宮竹屋小春亭に殘した表四句で、車盖の『ゆめのあと』に載つてゐる。

翁を一夜とゞめて

寢る迄の名殘也けり秋の蚊屋　小春
あたら月夜の庇さし切(ぎり)　芭蕉
初嵐山あるかたの烈しくて　曾良
江ぶちのり越ス水のさゝ魚　北枝

卯辰集　元禄二年作

加賀金澤の北枝が同國松岡まで慕ふて送り來り、分袂の際に名殘を惜んでの附句である。

松岡にて翁に別れ侍りし時あふぎに書て給る

もの書(かき)て扇引さく名[二]殘かな　翁
笑[三]ふて出る朝ぎりの中　北枝
さなく〳〵申侍る

〔一〕『一葉集』に「わかれかな」
〔二〕同「咲ふて霧にきほひ出ばや」

笈日記　元禄二年作

大垣の木因亭にて「かくれ家や月と菊とに田三

反」と詠んだ其の「おなじ比舟にて迯るとて」といふ前文附きで『笈日記』に出てゐる。

秋の暮行先〴〵の苫屋かな　木因
　荻にねやうか萩に寐うか　翁

一葉集　元祿二年作

『奥細道』にある發句ながら此の脇句は古集に所見ない。『一葉集』によつて擧ぐ。

あか〴〵と日はつれなくも秋の風　翁
　晩稻の筧ほそう聞ゆる　光清

笈日記　元祿三年作

園女亭にて「暖簾の奥ものゆかし北の梅」と與へた其の「かへし」に園女が詠んだ發句で、これに又脇句を附けたのである。

(二)時雨てや花迄殘すひの木笠　その女
　宿なき蝶をとむる若草　翁

〔一〕『一葉集』に「花までは時雨て殘れひの木笠」

江鮭子　元祿三年作

大坂の之道（後諷竹）が近江に來た時の三吟で、『江鮭子』に第三で了つてゐる。

第三まで

棒柿や鞠のかゝりの見ゆる家　珍碩
　秋めく風に疊干門　之道
有明に湯入仲間の荷を付て　翁

幽蘭集　元祿三年作

これは發句と脇ではない。連句中の或る一齣である。『幽蘭集』以前のものに所見がない。

畫賛　雜

赤人も今一入の酒きけむ　珍碩
土器くさき公家の振舞　翁

落柿舎日記　元祿四年作

元祿四年夏、芭蕉の閑居した嵯峨落柿舎に偶作で、『嵯峨日記』及び重厚の『落柿舎日記』に出てゐる。

題ニ落柿舎一

芽出しより二葉に茂る柿の實〔一〕　丈草
はたけの蘆にかゝる卯の花　翁
蝸牛たのもしげなき角ふりて　去来
人の汲うち釣瓶まつなり　凡兆
有明に三度飛脚の行やらん　乙州

〔一〕『一葉集』に「柿の核」

幽蘭集　元祿四年作

此の發句は不審抄に入れて置いたが、しばらく『一葉集』の推定年代によつて掲ぐ。

湖水より光り出しけり比良の雪　はせを
浪にまぶれていさゝとる人　丈艸
歌よめと友がこしたる文ときて　許六

笈日記　元祿四年作

乙州の幻住庵を訪れた時の附句で、『笈日記』に「おなじ年九月九日、乙州が一樽をたづさへ來りけるに」とある。おなじ年は元祿四年である。

草の戸や日暮てくれし菊の酒　翁
蜘手にのする水桶の月　乙州

笈日記　元祿四年作

近江膳所の水田正秀亭に招れた時の作で、『笈日記』に本文の如く前書が附いてゐる。

正秀亭初會興行の時
月しろや膝に手を置宵の宿　翁
萩しらけたるひじり行燈（あんどう）　正秀

みつのかほ　元祿四年作

名古屋の野水に對する送別吟である。風扇の『みつのかほ』は享保十一年板で、作の年代を知り難いが、元祿四年の秋と推定して掲ぐ。

野水が旅行を送りて
見送りのうしろや寂し秋の風　翁
來る春までと柳ちる陰　野水

笈日記　元祿四年作

『笈日記』には明瞭に「元祿五年」とあるが、同年冬は江戸に歸庵してゐるから、『一葉集』によ

つて同四年の作と推定した。

元祿五年神無月のはじめつかたならん、近江の月の澤ときこえ侍る明照寺に羇旅の心を澄して

たふとがる涙や染て散紅葉　翁
一夜靜るはり笠の霜　李由

國の花　元祿四年作

美濃垂井の規外亭にての附句で、規外は「芭蕉翁行脚の時、予が草戸を扣きて作りなす時雨を吟じ、洗ひ揚たる冬葱の寒さを見侍る折からに」と『國の花』に前文を附けて載せてゐる。

木嵐に手をあてゝ見む一重壁　規外
四日五日の時雨霜月　翁

後の旅　元祿四年作

大垣如行亭の發句で、『後の旅』にその句を聞いて脇句を附けた事が出てゐる。

胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉　翁

かくからびたる吟聲ありて、

我下の句を次

たねはさびしき茄子一もと　如行

笈日記　元祿四年作

『笈日記』に「おなじ冬の行脚なるべし。はじめて此叟に逢へるとて」とあるが、此のおなじ年は『笈日記』だと元祿三年になるが從ひ難い。同四年の誤であらう。

奥庭もなくて冬木の梢かな　露川
小春に首の動くみのむし　翁

翁艸　元祿五年作

露沾子の邸に招れて三吟を試みたのであらう。里圃の『翁艸』に出てゐる。

共不二や五月晦日二里の旅　素堂
なすび小角豆も已が色なる　露沾
鷹の子の雲雀に爪のかたまりて　翁

笈日記　元祿五年作

許六入門の時の連句で『笈日記』に「是は嵐蘭が身まかりしあとのなつかしさに此三句を出し侍る」と第三まで掲げてゐる。

寒菊の隣もありやいけ大根　許六
冬さし籠る北窓の煤　翁
月もなき宵から馬をつれて來て　嵐蘭

深川集　元祿五年作

素堂亭の年忘れの餘興に表三句を詠じたので、酒堂の『深川集』に載つてゐる。

餘興

としわすれ盃に桃の花書ン　酒堂
膝にのせたる琵琶のこがらし　素堂
宵の月よく寢る客に宿かして　芭蕉

小春笠　元祿五年作

机墨庵富鈴の『小春笠』に「新古の集彼是の中に古人落柿舍除元の一枚摺を見出しぬ」として卷末に附錄してある。

壬申歳暮之唫

世中たいさふまでこそかたからめ

小傾城ゆきてなぶらん年の暮　其角
　頭巾ばかりに假の薫(たきもの)　溪石
吹さする袴のひだ(襞)の赤らみて　はせを
　かゆるこゝろになりし盃　普船
算盤をひそかに彈(はじ)く市の中　盤子
　いつも自由に出湯(でゆ)の行水　史邦
竹鑓の葉ごしに並ぶ月の空　去來
　胸すかしたる早稻の朝風　丈草

一葉集　元祿六年作

其角と兩卷の卷であるが第三までよりない。

春うれし野は蝶鳥に懷(なつか)しき　其角
　水際もゆる陽炎の石　〔一〕
出代(でがはり)の荷物去年よりかさ高に　翁

〔一〕本文作者名を缺く。

一葉集　元祿六年作

古集に所見ないが作の年代は『一葉集』の推定によつて擧ぐ。

梅が香や通り過(すぐ)れば弓の音　毛紈

土取鍬に雲雀囀る　許六
陽炎に野飼の牛の枕ぬけて　翁

奥の枝折　元祿元年作

近江彦根の木導の發句を賞美し、此の脇句を附けて與へたので、土芳の『三冊子』にも出てゐる。

春風や麥の中行水の音　木導
かげろふいさむ花の糸口　翁

一葉集　元祿六年作

深川の芭蕉庵で卽興の作で、第三句で打きつたのであらう。

長閑さや寒の殘りも三ヶ一　利牛
打かへしやく雉子の胴から　岱水
臺の立冬菜のつぼみきり捨て　翁

翁艸　元祿六年作

素堂亭の殘菊の會に試みたのであらう。『翁艸』に第三までより擧げてない。

漆せぬ琴や作らぬ菊の友　素堂
葱の笛ふく秋風の薗　翁
鮎よはく籠の目潜る水落て　沾圃

一葉集　元祿六年作？

無季の發句である。脇も亦無季であしらつてゐ

る。『一葉集』は年歴不明の部に置く。

何となく柴吹風もあはれ也　杉風
雨の夕に牛捨に行　翁

金蘭集　元祿六年作

藤堂玄虎子の江戸の旅寓に於ける表合せである。

菜根を喫して、終日丈夫と談話す

武士(もののふ)の大根〔一〕からきはなしかな　芭蕉
一とほり(通)行木がらしのおと　玄虎
哥まくら揃はぬ紙を閉〔二〕そへて　舟竹
火たきにはいる古旦那のうち　翁
物の葉のすき間かぞへて月の色　虎
後(うしろ)を見せて歸る小男鹿(さをしか)　竹

〔一〕『一蕉集』に「大根苦き」
〔二〕同「綴そへて」

翁艸　元祿六年作

沾圃は能太夫なので、藝道の古實を語りつゝ此の表三句が出來たのであらう。

古將監の古實をかたりて

月やその鉢木(はちのき)の日のひた面　翁
旅人なればおりからの冬　沾圃
水鳥に廻文のむらに來て　其角

甲戌歲旦帳　元祿七年作

其角の歲旦帳にある表八句で、百韵の初表の形式を取つて表合せさしたのである。安永二年板

の『萩の露』に覆刻されてゐる。

年たつや家中の禮は星月夜　其角
　筆紅梅をたゝむ國紙　介我
春も雪茶道の手前ゆたかにて　岩翁
　山より見たる夕ぐれの町　枳風
ひとりたゞ身を遊ばせて鳴子引ヶ　彫棠
　蚊やり草干す秋になりけり　横几
有明もすくなき鯖のきざみ物　芭蕉
　帆を八合に船頭の聲　仙化

翁艸　元祿七年作

夢想びらきの恒例によつた「三ツ物」である。沾圃が三世立圃を名乘つた事がこの前文で知れやう。

野々口立圃はわが母方にゆかりたる人也。ある夜夢に見えて此句を予にあたへければ、幸を芭蕉翁に願ひて俳號を改メ、古德をしたふもの也。

雛ならで名乘をなのる人も哉
　實植の櫻ことしより咲　沾圃
黄鳥の宿は東に戸を付て　翁

芭蕉翁眞蹟集　元祿七年作

千梅の『自娛文艸』は寶曆九年板で、此の附句を掲げてあるが、桃鏡の『芭蕉翁眞蹟集』に塚本家所藏の眞蹟が摸刻されてゐる。島田の如舟亭の附合である。

やはらかにたけよことしの手作麥　如舟

田植とともにたびの朝起　はせを

元祿七五月雨に降こめられて、あろじのもてなしに心うごきて、聊筆さる事になん。

笈日記　元祿七年作

近江膳所の曲翠亭の附合である。『笈日記』の上巻湖南の部に出てゐる。

菜種ほすむしろの端や夕涼み　曲翠
螢逃行あぢさゐの花　翁

幽蘭集　元祿七年作

嵯峨の落柿舍で第三まで一順したまゝ、巻き殘されたのであらう。

百景や杉の木間にいろみ草　翁
篠を杖にわらふ山公家　浪花
隣からいはひと雛の餅くれて　去來

一葉集　元祿七年作

伊賀上野の簑虫庵で行つた表六句である。

いなづまに額かゝえる戸口かな　土芳
はたけ境にのびる唐黍　猿雖
清水出る溝の小草に秋立て　翁
わすれごろなる醉ほのか也　芳
又おきて有明ほそき家の霜　雖
松風こもる山の中だん　翁

一葉集　元祿七年作

これも伊賀上野の雪芝亭　附合で、『續猿蓑』に發句だけ出てゐる。

折〳〵や雨戸にさわる荻の聲　雪芝
放す所にをらぬ松虫　翁

柴橋　元祿七年作

正興の『柴橋』は元祿十五年板で、此の表三句を掲げてあるが、大阪で詠んだのであらう。

秋風に吹れて赤し鳥(一)の足　酒堂
臥(ふし)てしらけし稲の穂の泥　諷竹
駕籠かきも新酒の里を過兼て　はせを

（一）『一葉集』に「鷺のあし」

幻住庵有也無也關　元祿年中作

千那の傳書と稱する『幻住庵有也無也關』に「本式表十句之章」といふ題で、此の百韻の表十句を擧げてあるが、疑はしいのは　中の作者の同時に芭蕉に接した年代である。併し僞作とも斷じられないのでこゝに擧げて置く。

松杉にすくひあげたるみぞれかな　去來
鐘面白う冴るたそがれ　許六
ひたすらにねはる誓の丁子風呂　芭蕉
長い羽折も四五年の内　曾良
吹晴てあとは踊の月まろく　千那
橋まで押してのぼる初汐　來
鰯網干場を鳶の離れかね　六

編笠組に入は何故　翁
神明の花に願をひらかせて　良
天高かれど地にも鼓草(たんぽぽ)　那

一葉集　貞享・元禄年中

曉臺の『幽蘭集』・卄　の『金蘭集』・默池の『袖珍鈔』に芭蕉の附句として擧ぐるものを『一葉集』によつて、こゝに一括して揭ぐる事とした。但し『春と秋』所載の分は別に「貞享元年作」として揭載したから『一葉集』にあるものと雖これを除いた。

みづから前句をなして付給ひし分

○

ころころとなるは鈍栗落し也
その鬼見たしみの虫の父　翁

○

かれ果てみじかき髮の口をしき
琵琶つき立て其かげに泣　翁

○

亀山やあらしの山や此山や
馬上に醉てかゝへられつゝ　翁

○

宵の間はかさなる山の月くらく
芋ほりかへす小男鹿の角　翁

○

笠敷てうれしく今朝となしけるよ
笈かゝえたる小僧わづらふ　翁

○

冬のきぬたの涙きはつく
世のうらみいまだ六位の名に呼れ　翁

○

うき戀に文つきかへし咲(わらは)れて
尻もつたてるうらみ寐の襟　翁

○
庭のかゞり火たてるたそがれ
うね召玉のお膝の打くづれ　翁
○
端居がちなるあざみ石竹
夏ながらえりぶる〳〵と物思ひ
祈るしるしのかひなくもあれ　翁
○
綿ふきありく猫の眞白
人しらぬ中を火燵にもたれ合
師走の日數折指もなし　翁
○
椽に草履の打しめる春
石ぶしに細き小鮎をより分て　翁
○
煤掃の道具大かた取出し
向ひの人と中直りけり　翁
○
鐘つく人もたえし此寺
朝日さす小松に雪の降かゝり　翁
○
櫻をこぼす市のあざけり
大和路へ入日はけふも花曇　翁
○
やしきの客はかはる献立
きのふけふ庭は櫻の惣あかり　翁

考證の部

談林誹諧　延寶三年作？

神戸川西和露氏所持の「談林誹諧」と題する寫本中にあるさうで、潁原退藏氏が「潮音」に發表された百韵である。其の解説から察すると、宗因

の「鎌倉三吟」の寫本らしいが、同書は舊雀志文庫本に一本を藏する筈である。川西氏の寫本或は舊雀志文庫本か見ない限り、孰れとも鑑別し難いので、暫らく考證の部に入れて置きたいと思ふ。

延寶三卯五月東武にて

いと涼しき大德也けり法の水　宗因
　軒を宗と因む蓮池　磯畫
反橋のけしきに扇ひらき來て　幽山
　石壇よりも夕日こぼるゝ　桃青
領境松に殘して一時雨　信章
　雲路をわけし跡の山公事　木也
或は曰月は海から出るとも　吟市
　よみくせいかに渡る鴈がね　少才
四季もはや漸く早田刈ほして　似春
　あの間此間に秋風ぞふく　筆
夕暮は袖引次第局かた　畫
　座頭もまよふ戀路なるらし　因
そびへたりおもひ積て加茂の山　青
　室のとまりの其遊びもの　山
草枕おきつ汐風立わかれ　也
　一生はたゞ萍におなじ　章
わびぬればとなん云しもきのふ今日　才
　それ初秋の金のなし口　市
十年を爰に勤て袖の露　因
　おほん賀あふぐ山のはの月　春
春は花梔の比は西の丸　山
　參内過て既に在江戸　畫
時を得たり法印法橋其外も　章
　新筆なれどあたひいくばく　青
哥のこと世上に眼高ふして　春
　明石の浦は蟹もしる覽　因
蛸にも其入道の名は有ぞかし　畫
　八日〳〵は見えし堂守　也
今もがも例をたがへぬ佛生會　市

夏花やつゝじ咲句ふらん　春
あの山の風をもがなと窓明て　才
月の前なる雲無心なり　山
露時雨ふる借錢の其上に　因
見し太夫さま色替ぬ松　市
空起請烟となるも理りや　山
夜討むなしき野邊の夕暮　因
あてのみの酒氣を風や盜むらん　春
雨一とをり願ふ川ごし　又吟
名號の本尊をかけよ鳥の聲　也
それ西方に別路の雲　章
口舌事手をさら〳〵とおしもんで　市
しら紙ひたす涙也けり　青
高面をのぞく障子の穴床し　才
ゆびのさきなる中川の宿　因
蒔繪さへ寺町物と成にけり　山
數寄は茶湯に化野の露　春
石灯籠月常住の影見へて　青

雪隱につゞく築山の色　晝
ますき垣南山井に花の枝　因
うり家淋し春の黄昏　市
欠落の跡は霞の立替り　春
雪崩れする其岩のはた　山
松明の灶につゞく白湯かな　章
果しあふよに出あへや出あへ　因
聲高のみなもと聞ば樂道也　晝
よりて芝居の垣間見をせん　市
おもほえず古巾着の錢をさぐり　吟
めくら腰ぬけ夢の世中　春
慮外者さはらばなどゝ肱を張　山
上樣風の吹旅の空　才
御荷物に唐船一艘つくられたり　因
蜘てふ虫も糸のわけ口　春
鬟を撫て來べき宵也月の下　晝
伽羅の油に露ぞこぼるゝ　也
戀草の色は朴郞氣付にて　春

はながみ袋形見なりけり　才
さる間三年はこゝにさし枕　青
親の細工をあらためずして　因
何物か人のかたちと成やらん　市
しばし樂屋の内ぞ床しき　山
來て見れば有し昔しにかはら町　也
小石をひろひ塔となしけり　章
ない物ぞ眞の舍利は求ても　畵
誰かしつつる天竺の秋　春
牢人を尋出たる空の月　因
霧にこもりし城の遠近　山
花おる事附り堀の魚取事　章
すり餌によする梅のうぐひす　市
やよ見たか祇園あたりのはるの空　才
うしろ帶して塗笠編笠　春
屋敷者跡にたつたは年こはい　市
順の舞には小々性が先　吟
常紋の袴のそばをかいとりて　春
雨にも風にもかよはふよなふ　因
夢うつゝ女姿のちみどろに　山
胸にたくのを別火とやいふ　也
しゝくふた酬ひを戀にしられたり　章
たか參宮の伊勢ものがたり　市
見たい事しや松坂こえてかけ踊　因
遠く遊ばぬ盆の夕暮　春
仕つけば殘る暑さも苦にならず　畵
月はことゝふうら店の奥　山
秋の風棒にかけたる干菜賣　青
賤がこゝろも明樽にあり　因
網手をもくり返しぬる網のうけ　山
あこぎが浦や牛のかけ聲　市
みづらいふわつぱも清き渚にて　章
馴てもつかへたてまつる院　畵
そも是は大師以來の法の華　春
工の氣にも道や云ふらん　才

宗因十五　吟市十二　礎畵十　少才八

幽山十三　似春十三　桃青九　執筆一
信章九　又吟三　木也七

はつ雪獨吟　貞享三年？

沼波瓊音氏編『芭蕉全集』の連句集貞享三年の部に「伊藤松宇氏所見芭蕉眞蹟」と註して所載する獨吟百韵である。此の獨吟に對する疑問は兩氏が芭蕉の作とされた理由を直接聞かない中は解決し難い。これも考證の部に入れて問題を留保して置いた方が、研究者の爲めに却つて親切であらう。

はつ雪や幸庵にまかりある
　火桶一つを一日の友
なよ竹にとまり雀の聲立て
　ほそうもならず水の流るゝ
はるぐ\と來ていつ迄も捨筏
　かはるぐ\に窓覗くなり
此年も同じ人なる月の客
　風に新酒のよい香ふんぐ\
羽遣ひも流石かよわき秋の蝶
　名もなき草の伸びしあれ畑
うき戀の都うつしに遠ざかり
　仇になさじの記念ほろぐ\
さみだれのけふも一間に肘枕
　また若竹の中の勘助
敷皮にすべき毛皮を干して置き
　どちらも遠き山のふところ
格別に月の出遲き梭檜
　きりぐ\す鳴く伏勢の袖
いかにして是は咽まで秋がわき
　孝行とゞく母の長生
だんぐ\に茂る實植の花の枝
　草にからまる糸遊のいと
信心は先づ次にして壬生詣

ひとりうなづく髪の出來栄
定めなき身を傾城と合點して
更けて聞ゆる古鄕の鐘
風に馴れ千鳥に馴れて水驛
湯もなみ〳〵と陣の大釜
詠人は知らず狂歌の札立てゝ
可愛がられぬ風の一體
何事の爲に年とる今朝の春
面瘦ながら梅のさきがけ
會席の後も連歌と日の永く
三保行く船の雲かくるゝ
いづれとも眞蓋の月の有所
秋海棠の永き色つや
小原女の雨にやすめば綿を繰り
いつ結うた儘髮のあやなき
一廻りだけ妙藥のきはだちて
桐の花咲くつゆ晴の寺
何食うてどこに宿るかほとゝぎす
寢覺の里を蕎麥に忘れぬ
引肌に田舍めきたる箭をして
角力が宿の高き天井
升市の土產にくだをまきにけり
月のひかりの滿つるうみ山
開基から今に拂子のうら枯れず
五百體また鉢の子の中
祭り日のめでたき時の花盛
夜の雉子の稀になく聲
空蟬にして出代の古葛籠
卷にまかれぬ文のなか〳〵
影膳に埃り侘しき雨の宿
神の御留守をまもる澁柿
駒どりの子供遊びに日を追うて
いばらこゆれば足のかき裂
伽羅の香に闇をさぐりてしのぶ戀
方違して狆もとも〳〵
洛外は洛外だけの風が吹き

雷に地震に座頭戸につく
倒れたる琴柱に我も驚かれ
添乳にむすぶ夢のきれ〴〵
降りつゞく夜舟を月や恨むらむ
臺に立たる芝の初茸
禪林のもみぢに秋も暮遲き
覃つれて口の酢うなる
馬に牛此海道の砂ほこり
傀儡がちから袖を放たず
主の名も假名に和らぐ奈良團扇
水であしらふ夏の献立
金屛に其蠟燭の輝て
立は少なき降參の式
しん〳〵と下駄に音なき雪のみち
我影凄き帶の空解
後の世の事とは遠きいひかはせ
有か無かに花のちらほら
曇りては一入月の朧にて
おもひきつては夜歸る雁
短册に筆とり直し〳〵
亭主の機嫌酒は頼まず
しん宅のあげ屋に冬はなかりけり
占もはたして吉丁子なり
讀癖に都の匂ふ赦免狀
ひらく扇に夕榮の富士
朔日のまづ產神へぬかづきて
翌日初陣の前髮を取る
一さしと烏帽子すゝむる白拍子
底までしみる土器のさけ
折々に風吹通す翠簾の隙
日よりかたまる節のかはりめ
天文者胸に配りし月と星
肌のさはりも秋のかたびら
床あげてけふは見直す白芙蓉
二とは下らぬ二のおもひ人
よの船はみな陰にして吉野丸

隅田と眞土に虹のかけはし
形より遠く木魚の聞えけり
あちこちとして子を遊ばせる
頼もしき四五分咲立花の振
山もろともに笑ふ春色

芭蕉翁松嶋獨吟　元祿二年作

笑月洞晋流の序に「この一巻大石田の住仲菜より等躬へ送る。等躬卒去三四とせを經て、子息乍跡文庫の底より見出しけるよしにて予に與ふ。同伴曾良手跡なり」とあつて、晋流が安永二年九月江戸淺草に寓居中、京都の西村市郎右衛門・江戸の西村源六の二書林をして板行させたものである。これに對し「松島五歌僊考」は其の芭蕉の獨吟ならざるを斷じ、「金蘭集」は凡例に「松島獨吟は心得がたき風調に侍る。近年梓行の書にかくのごときこと多し」と歎聲をさへ洩らしてゐる。「一葉集」の如きは全く此の巻を否定し去つて採錄して居ない。晋流が爲めにするところあつて流布したのではなく、等躬の獨吟を曾良が筆寫し、それが再び等躬の家に入り、歿後其の家人及び晋流をして芭蕉の獨吟なるかの如く誤信せしめたのであるまいか。晋流は藤井氏等躬と同じく須賀川の人である。

我松島の松といふめるを苫屋がしたる案内の海人に習ひて　　はせを

松の華苫屋見に來る序哉
汐干の跡を知てゆく蝶
鳳巾(いかのぼり)日のちら〱に移ろひて
月片破れは鐘にへだゝり
礎は唯あらましの艸紅葉
世とて案山子を居へし關守

ウ

頃しもや陸の湯ぬるく成り増り

霜に欠出の笈おろすなり
一備へまたいなの目の森の中
との取〳〵に消る螢そ
色〳〵に氣のつく神の時花やう
石なき川を木萱流れて
連立て旅せば寐なと雁の聲
月に黑むをいとふ面ふり
斯迄の妬ミは君が御あやまり
心の水にそゝく筆垢
花あれは狹きを常の住ミ所ロ
蝶まへとてかとり殘す芝
ナ
陽炎の移るも細き雛の友
几帳にもたれいまそかりけり
得云ぬは位にふるへたる懷にて
文ミを宿世に結ぶ色なし
憂き身とて討手の勢に交られず
なく〳〵山を追下ロす兒
寢覺やら何やら淋し窻の月

記念の袖につゝむ稻虫
馬場殿の木槿哀に咲つゞき
檜皮を積に通ふ船頭
朝もよひ紀の貫之に三寸ミキもりて
額一行ッ朽殘るなり
ナウ
步行すに此儘見ばや峰の花
晝の前後はねぶきかほ鳥
春の駒おのれが影に振かへり
吹雪の袖をふるふ兒弟
松竹の冥加を買んけふの市
居まきたる曉の霜

芭蕉句合・評語集

貝おほひ　寛文十二年序

『貝おほひ』の板本は現存しない。寫本の奥附に中野半兵衛・同庄次郎の開板とあるので江戸板の存在した事はたしかである。柳亭種彦が判詞中の小唄に就いて考證したものも、どの點まで板本に忠實であるか疑ひなきを得ない。『一葉集』の「句合評之部」の『貝おほひ』が、むしろ信用してよいやうに思はれるので、本文は同書により一二の寫本を以て校合した。

（一）貝おほひ　三十番俳諧合

松尾宗房撰

小六ついたる竹の杖、ふしぶし多き小哥にすがり、あるは、はやりこと葉のひとくせあるを種として、いひ捨られし句どもをあつめ、右と左にわかちて、つれぶしにうたはしめ、其かたはらに、みづからがみじかき筆のしんきばらしに、清濁高下を記して、三十番の發句合せを思ひ太刀折紙の、式作法も有べけれど、我まゝ氣まゝに書ちらしたれば、世に披露せんとにはあらず。名を貝おほひといふめるは、合せて勝負を見るものなれば也。又神樂の發句を卷軸に置ぬるは、歌にやはらぐ神心といへば、小うたにも予がこゝろざす所の、誠をてらし見玉ふらん事をあふぎて、當所あまみつおほん神の、みやしろのたぶけぐさとなしぬ。

寛文十二年正月廿五日　伊賀上野松尾氏宗房

釣月軒にしてみづから序す

一番

左勝

にほひある色や伽羅ぶしうたひ初（三）　三木

右

春の歌やふとく出申すうたひそめ　義正

左の句は匂ひも高き伽羅ふしの、うどんげよりも、めづらかに覺侍る。

右も又、春の哥はふとく大きにと云より、まことに大音のほどもしられ侍れども、一聲二ふしともいへば、猶匂ひある聲に心ときめき侍りて、仍左を爲ㇾ勝。

二番

左 勝

紅梅のつぼみやあかいこんぶくろ　此男子

右

兒分に梅をたのむや兒ざくら　蚫足

左の赤いこんぶくろは、大阪にはやる丸の菅笠とうたふ小歌なればなるべし。

右、梅を兒分にたのむ兒櫻は尤たのもしき氣ざしにて侍れども、打まかせては、梅の發句と聞えず、兒櫻の發句と聞え侍るは、今こそあれ。われも昔は衆道ずきのひが耳にや。とかく左のこん袋は、趣向もよき分別袋と見えたれば、右の衆道のうはき沙汰は先思ひとまりて、左を以爲ㇾ勝。

三番

左

なく聲やけに伽羅のはし匂ひ鳥　露節

右 勝

藪にすむうぐひすのうたやお竹ぶし　哉也

左、伽羅の橋をかきょいのとあるを、匂ひ鳥のはしに取なされたるは、げに、よくさえづられたる口ばしなれども、

右のおたけぶし、藪にすむといふより、言葉の茂りも深く、いくふしも籠て、是も百姓の納米のくだけたる所もなく、上々出いらずとかや申侍らん。

四番

左

さかる猫は氣の毒たんとまたゝびや　信乘母

右 勝

妻戀のおもひや猫もらうさいけ　和正

猫にまたゝびを取つけられたる左の句、珍

らしきふしを(四)み出られたるは、言葉の花がつをともいふべけれとも、きのどくと云言葉、きゝみいらぬ事なれば、少し難これ有て、きのどくに侍る。

右また、猫のらうさいと云ふ歌を、つま戀に取合されたるは、よい作にきさんにやうに、かの柏木のいにしへ、ねうねうとなきしわすれがたみ、又、源氏の宮を木丁のすきがけに見しも、いづれも猫の引綱の思ひ捨がたけれど、右の句、さしたる難もなければ爲勝。

五番

左 持

牛馬の糞ふみわける雪間かな　貞好

右

消殘る雪間や諸あしふんごんだ　一友

左の句、雪間をふみわけしつめたさは、うきうきどつこい、うき世に住ば、うさこそまされとうたふは、しかあるべし。太山のがけ道へ引出されたる牛馬の(五)ふんこつ、げに珍重に覺侍る。

右の句、雪にもろあしまで、ふみ込たるは、草履のうらもたまるまじく、足もとしらずの麁相ものと見へ侍れども、一足ふんだる作意もをかしく、また雪に立しためしもなきにあらねば、持とさだめぬ。

六番

左 勝

きやん伽羅の香ににほへかし犬櫻　正之

右

見にゆかん(六)とつと山家のやまざくら　意見

左の句、伽羅の香に匂へとは、一句もやさしく、手ざはりもむくむくとむく犬の、尾もしほき作意なるに、

右の句、きのみ言葉のたくみもみえず、とつと山家のいよ古狸とうたふ小哥なれば、秀逸物の犬櫻に、狸は喰ふせられ侍ん。

七番

左持

たぐりよせんから糸ならばいと櫻　應尼

右

春風になれそならるれそ江戸櫻　信乘母

唐糸の句は、長太郎ぶしと聞えよく、いひかなへられて、此世のものとも覺えぬは、から糸なれはなるべし。

右、またこむろぶしの、江戸衆になれそといふを、春風になれそと作り立られしは、花を惜む心ふかく、いづれも捨がたく持に定侍き。

八番

左勝

うたへるや晩鐘寺ぶしの暮の花　鋤道

右

種ならばまかせておけろ花ばたけ　指盞子

左は山寺の春の夕暮も思ひ出られ、晩鐘寺の花の作意、げにおよびなき所なり。

右の句、花の種をまかせたる定なら、といて口說て、かたりて聞せ侍らん、種をまかるゝ花ずきの心も、優に聞ゆれど、浮世五十年、一寸もまだのびぬ花の枝、咲までのあい遠なれば、先日の前の晩鐘寺の、けふの花見こそたふとけれ。仍左を爲レ勝。

九番

左勝

鎌できる音やちよい〳〵花のえだ　露節

右

きても見よ甚べが羽折花ごろも　宗房

左、花の枝をちよい〳〵とほめたる作意は、誠に俳諧の親〳〵とも、いはまほしきに、

右の甚兵衛が羽折は、きて見て我おりや―と云心なれど、一句の仕立もわろく、染出すこと葉の色も、よろしからずみゆるは、愚意の手づゝとも申べし。其上、左の鎌のはがねも堅

さうなれば、茜べがあたまもあぶなくて、まけに定侍りき。

十　番

左　持

啼さわけにほんづゝみの無常鳥　　政定

右

ゆかしきや山の尾常はなきやるもの　　和久

左は、日本堤の無常の烟も、立のびたる句の姿は、子規のとりなりも、よく見え侍るに、右の句は、容なきさうなおつねの顔も、ずんといやな氣なれども、左にひつぴけ、うんのめとうたふ小哥なれば、お常のしやくも捨がたくて、いづれのかちまけをも、えさだめ侍らぬは、こゝろきたなき判者なめり。

十一番

左　勝

時鳥谷から峰からこんゑをせい　　吉之

右

鳥黄の玉子じやとおしやるほとゝぎす　　一意

左はきやりの音頭と聞えてくどく、こと葉の中のつな、扨も見事によう揃ふた。

右の句、鶯のかひこの中の時鳥と云心をふくみ、聲のふしをあらせて、醫者に見すれば、玉子じやとおしやるといふ小哥をかり加られ侍る。伊勢のおたまが事に出れば、玉の句といはんに難なかるべけれど、左の谷から峰から、こゝはちつくりこざかしくいひ出されし大持に、心はひかれ侍りき。

十二番

左　勝

小六方の木さしや菖蒲かたなの身　　養子

右

菖蒲刀中や檜の木のあらけづり　　雫軒

これさ、爰許へ小六方とほざけ、だいたるでつちは、うるしいこんでは、あるではあるぞ。

右の刀は、源五兵衞おとゝの長脇差の、さやは三文、下緒は二文、しめて五文の錢うしなひの、やすものと見え侍る。

左の六方は、いかさま口舌を菖蒲刀のよき出來ものにて侍れば、檜の木のあら削り、太刀打にも及べからず。

十三番

左

蚊やり火にわれも木賣が娘かな　適意

右 勝

ふすべられたはん半夜の蚊遣哉　義正

左の句、木賣がむすめとは、ふすべられたよと云を殘したるてにをは、一句の立すがたもしほらしく、山家のものとも見えねど、右の句、たはんはと云ふしを、こと葉にことわられたるは、かやの木どくに思ひよられたり。其上木賣のむすめにふすべられて、われもむかひ火つくらんもむづかしければ、ただ右の半夜のけぶり立まさり侍らんかし。

十四番

左 持

かゝばやな小舞あふぎの織との繪　勝書

右

扇もや折ふし風が吹て來た　甘入

左は、かの孫三郎が織手をこめし織きぬの、いとしほらしき舞振也。

右の句、折節かぜが吹てきたと云ふ小哥、扇にいひ叶られたれば、あなたのかたへはからころひやう、こなたの方へはからころひよつと、勝まけを定めかねしは、模陵の手をはなさぬ扇のかなめも、むくの葉、木賊のみがき骨とも云べければ、扇角力のかちまけなく、持に物さだめし侍る。

十五番

左 持

すだれごしの月やいよ此おもしろい　貞好

右

半夜させやあ此宵の月のかげ　指盞子

左は、いふこのとうたふを伊豫にとりなされたるに、すだれのあみ目をおどろかし、何よりもつておもしろい。

右もまた、いやひ踊の拍子と見えて、やあ、此さいた長刀をぬきんでたる作意は、さやロのきいたる處侍るまゝ、よき持と定めまゐらせたり。

十六番

左勝

月の舟や今宵はどこがおとまりじや　信乘母

右

月の雲間よひ／＼なんど出つ入つ　三竿

左の句、はりまの國の書寫むしや寺がおとまりなれば、御法のふねにうたがひなく、月の光をはなつこと、光明遍照十方世界のまん中とは、此發句をや申べき。

右もまた、よひ／＼なんどゝ、をどるうちこそ佛なれとうたふ故にや、何作り殊勝に侍りて、右がたき作意なれど、地ごく踊の小哥なれば、精靈のおばゞを祭る盆の折から、かりにも鬼のさたをきらひて、にくさげなるつらつき、抹香くさく、鐵面つくり批判して、以左爲勝

十七番

左

ちよいと乘たがるやたれも駒むかへ　吉之

右勝

おかふ駒の足をはねるやひんこひん　重軒

左、伊勢のお玉はあぶみかぐらかといへる小哥なれば、たれも乘たがるは、ことわりなるべし。

右、ひんこひんとはね廻るは、まことにあら馬と見え侍れども、人くらひ馬にも、あひ口とかやにて、右の馬に思ひ付侍る。左のた

れも乗たがる馬は、ちとかんよわのうち氣ものとしられ侍れば、ふみ馬御免のあしもとをば早く引て、のがれゆかし。

十八番

左

ほの上も大たばに出よ稲の束　適意

右

かぶけるは稲のほのじぞ京女﨟　城次

左の句、大たばと云を稲の束にゆひまはされし事、かなたこなたをかり集めて、鎌のえならぬ句作りには、わらの出べきやうもなし。

又、右の京女郎にほのじは、たれもすきくわのかね〴〵望む事なれど、稲のとのを持たれば、我妻ならぬつまなりと、先此戀はさしおくて田の、ひつぢばへは其まゝにて、左りを勝とさだめ田。

十九番

左 持

はな息もむせてくんのむ新酒哉　此男子

右

温のめとあたゝめかゆる新酒哉　哉也

左右の新酒、味ひいづれかときいてみるに、鼻息もむせてくんのむ新酒は、から口とみえて、誠にあまけのさりたる句作り也。

右の句、温のめと云ことばを、下にてあためかゆるとことわられし事、風味のよきはさらにて、實あすをもしらぬ身なれば、よき亭主ぶりもうれしくて、いづれの勝まけをもえさだめ侍らぬは、判者もひとつなる口にや。

二十番

左 勝

鹿をしもうたばや小野が手鐵炮　政輝

右

女夫鹿や毛に毛が揃ふて毛むづかし　宗房

左の發句、小野と云より鹿とつゞけられ侍るは、かの紫のしなもの、ひかるお源の物語

にも、小野に鹿のけしきを書つらね侍りしより、尤よくとり合されたるなるべし、其上おのがてつぽうと云を取なされたる鐵炮の寸、口かしこく打出されたる玉の句とも云べければ、火繩のひごんを打べきやうもなし。

右の女夫鹿、委しく論をせんも、毛むづかしければ、あぶなき筒先、あしはやに逃のき侍りぬ。

二十一番

左

佐男鹿の妻の名もいとし萩の花　鼻毛

左勝

みそ萩やほそけれど長いほんのもの　石口

左、萩を鹿の妻といへるを、おかしくうたひなされ侍れ共、みそ萩のほそけれど長いと云處を能考て、心のおくをついて見るに、ほそ長き故にや。一句もすらりと立のびて、なれ合たり。左の發句には、はるかにこえたやつさ、大いかい物とや申さん。

二十二番

左勝

取やげばゝが右の手ならの紅葉哉　三木

右

もみぢぬと來て見よかしの枝の露　蚊足

左の句、紅葉のきめうの作意也。

右の句、よくいひ叶られ侍れども、もみぢぬかしを好るゝは、異風なる物ずきにて、色にふけらぬ人なるべし。左の婆々が右の手の赤くなるは、いかさま戀をすきものゝ、こと葉の品も大むすこも、雲泥萬里のたがひあれば、かゝるめでたき折節を、來てみよかしの木刀ならば、一本かたげてのがれゆへ。

二十三番

左勝

しつぽとやぬれかけ道者北時雨　餘氷

右

しぐるおとやさつさやりたし簑と笠　政當
　左のぬれかけ道者は。ほつとりものゝしなものゝ、袖にしぐれの通りもいとや申さん。
　右の句、さつさやりたし、なんしゆんさまとうたへば、あつたものじやないは、さていはまほしけれど、とてもぬれよなら、なまなかしぐれはいやよ。君がなみだの雨に、しつぽとぬれかけ道者を例のかちとや定めん。

二十四番
　左持
酒の醉やすおりもおりの千鳥足　餘淋
　右
から臼の代のちんどり足をふめ　三笑
　左の酒の醉は、まことに一盃過たると見えて、足もとはよろ〳〵と弱く侍れども、一句たしかにいひ立られて、下戸ならぬこそ男はよけれともいへば、おもしろく侍るに、
　右のちんどり足、ごほ〳〵とふみならすから臼は、天の原をふみとゞろかす神鳴の、挟箱もちの器量にもすぐれて、骨ぐみつよく、足の筋骨もたくましければ、作者のちからも強さうにて、いづれも千鳥のあしき所はなければ爲レ持

二十五番
　左
しやうことがたまらぬものはみぞれ哉　鼎毛
　右勝
見ぞれ酒元來水じやとおぼしめせ　一入
　左の句、しやらことが、たまらぬといはれしは、みぞれのふる句とも見えず、われもおもしろくてたまらぬに、
　右は元來水じやと云小哥を、みぞれ酒に作られたるは、桶の底意深くいひ立られ、樽のかゞみともなるべき句なれば、かん鍋のふためとも見ず、かちのかちとさだめぬ。されど判者もひとつ過て、耳熱し、目もちろ〳〵り

のみぞれ酒の、みこみ違ひもありやせん。かやうにはほむるとも、さのみに勿体付さすな。

二十六番

左 持

わる音はかんからめける氷かな　　勝 云

右

そこでさせ氷のしたの月のかげ　　城 次

左の句、こがねのはしはかんからめくにと云小哥を、わつゝくどいつ云立られたれば、氷のはり臂にて、自慢せらるゝもことわりなるべし。

右又、居合踊のそこでさせと云を、氷にとぢあはされたるは、げによく思ひ月影の、ひかつた句作とも申べければ、勝まけのわいだめをさだめん事、おろかなるごへのおぼつかなく、深き淵に臨むがごとく、うすき氷をふんでとりて、持ときはめ、世の人のそしりを、けふよりしてのち、われまぬかれん事をしんぬるかな。

二十七番

左

越後布か松の葉はんの雪のいろ　　正 之

右 勝

降つもる雪やしら藤こふじ山　　義 正

雪の色を越後布に見立られたる左の句は、げにも手きゝのしはざにて、あさいとのよりも、よくかゝりたるにや、わらはれぬ作意なれども、松のはゝんと云事、小哥のふしは尤ながら、一句のはたらき見え侍らず。

右は、しら藤こふじを富士に取なされけるも、まことに名高き不二には、いかでか肩をならべ侍らんと、左の越後布を安うりにまけさせたるは、さぞもとねになりかねや侍らん。

二十八番

左 持

炭の荷や付てうるしいこんだ鳥　　吉 勝

右

炭がしらけぶるやずんといやな木じや　善　勝

左、炭をうんと云かけられたるは、けにうるしい、こんだ馬のあしき處なく、一句もよくいひ立がみの、けをされぬ作者也。

右の句、ずんといやなきとはあれど、氣のどくたんといひ叶られたれば、今更けし炭となさんともおほえず。勝負に世話をやく炭がまの、口々いづれも捨がたくて、持と定侍き。

二十九番

左勝

掃除して瓢箪たゝきや炭ほこり　不　屈

右

炭燒やおのが先祖はよくしつた　一　入

左、炭とりへうたんをたゝきて、掃除したるは、手もまめなる處あらはれて、奇麗なる發句也。

右は、野郎ざぶとく出申な、おのが先祖はよく知たと云を、小野炭に取なされたる事、尤炭頭をかたぶけて、感じ入侍れども、先祖をよくしられん事、わきまへがたく、只左のへうたんの輕口にまかせて、勝と定たるは、をかしき判とゆふがほの、ひよんな事にやあらんかし。

三十番

左勝

犬の鈴やいきくびしやだんの神ゝ樂　此男子

右

舞衣やをかみの出立神樂神子　一　友

左の犬の鈴の句、まことに人作の及ぶ所にあらね共、いきくび社檀もうごき、御社のおやぢさまも、御感心淺からず。末社のほこらのこや〱までも、いきくび、ごたいをかたぶけられん事、うたがひなくおぼえられ侍る。

右のをかみの舞衣、ひとへに聞えて、手う

すき作意なれば、まけの上のまけたるべし。

とかく息災延命の神樂哥を舞のきに、のき給へとぞ。

〔二〕松尾氏宗房雅伯爲リ余斷金之友ハ、其性嗜ミ滑稽ヲ、潜ム心ヲ誹諧ニ者幾換ニ伏臘ヲ矣。今茲春正月閑暇之日、以テ童謠俚近之語ヲ作ル狂句ヲ者總若干、采而輯レ之分三是於左右ニ以判ニ斷ス其可否ヲ。誠ニ錦心繡口撃レ節嘆賞焉。瑤編既ニ成リ請フ予爲ニ後序ヲ。輙生素以テ切偲之情ヲ不レ忍ビ袖手旁觀ニ、文雖レ慚ト辛ニ約借シ一言ヲ以續ニ于後ニ云

寛文壬子孟春日　伊陽城下　横月漫跋

〔三〕芝三田二丁目

中野半兵衛

同　庄次郎　開板

〔五〕本文「ふんこつ」の右傍に粉骨の漢字を充つ。

〔六〕『貝おほひ』寫本に「こつこし」と濁點あり。

〔七〕同「晩鐘寺のぶしの」

〔八〕同「てゝつはうさ」

〔九〕同「しぐるゝおさや」

〔一〇〕同「あられば」

〔一一〕『一葉集』に此の漢文の跋なし。『貝おほひ』寫本より補ひたり。

〔一二〕『一葉集』に出板書肆の名なし、『貝おほひ』寫本によりて附加へたり。

〔一〕『一葉集』に標題序文の後に置く。

〔二〕『貝おほひ』寫本に「にほひける聲や」

〔三〕種彥校註本に「取なされたるげに」につゞく。

〔四〕同「いひ出られ」

十八番發句合　延寶六年跋

此の發句合は六番句合及び十二番句合の二篇から成立し、寫本のまゝ傳はつて來たので、板本のある事を聞かないのみか、『一葉集』その他にも收錄されて居ない。舊酒竹文庫にも一寫本の存するを見たが、本文と大體に於て一致して居たと思ふ。

六番句合題

初春　花　子規　立秋
夕顔　月
菊　雪
秋暮　炭

一番　初春

左

のり弓やゆかけの三指禮なんめり

右

くる春や夜明のあした又おかし

左、賭弓のゆがみにて、三指つきたる禮儀正敷見え侍る。

右の夜明の朝、彼兼法師が筆のすさびもなつかしく、曙ちかき程まで足を空にしてをどろ〳〵敷、物さはがしき有樣、誠に、野分・山颪は物かは、明わたる空のけしき、さもあるべしと感心此句にとゞまりながら、左の賭弓もむづかしき題を、一作こなし侍るも又おかしければ、勝負は定ぬ事にぞなりぬ。

二番　花

左

散花や横手の内に山おろし

右

花の香や心もこと葉も吉野山

散花に山颪、作意なき心地せらるゝが、咲たか花など、五文字有度。但し予が愚意のい

たらざる所か。

右も又、めづらしからず、洛の貞室、是は〳〵と計花の吉野山　といへる秀句に、猶此付けをされ侍らんかし。

三　番　郭公　夕良

左

きかぬとぞどこでもきいた時鳥

右

夕がほやあばら屋のむかし古雪隠

左、郭公ふるし。

右の句は雉の音にきこえたる五條あたり。古き雪隠のかほりも、つまいたうこがせる扇の匂ひにけされて、風流にやさしくことばの花の光、露そふ夕顔なるべし。

四　番　立秋　月

左

今朝の秋かご屋が軒にしられけり

右

ほんのくぼに月が入けり今日の月

籠屋の印に秋風知りたるさま、誠にわり竹のこまかなる所迄、さがし求侍れども、等類のがれがたし。

右、大空をあふぎて、ほんのくぼに月をかくしたる様、俳諧躰、誠にかくあるべきにこそ。

五　番　菊　秋暮

左

酒ぞ春松かはじめて今日の菊

右

さびしさやつまる所は秋の暮

左、花の春は門松に千代契りて、屠蘇・白散を波初、桃・菖蒲など云より、菊酒の時節に、春をおもひ出られたる作意、松菊の便彼の淵が文勢も引て入べし。

右も又、秋の暮の淋しさにて、寂滅の心を悟侍るも哀ふかけれど、生數一花の菊には

しかじ。

六番　雪炭

左

松風やひとかたまりに枝の雪

右

つまはづれ炭の梢に花もなし

松の雪を風の一かたまりと、見立られたる作、尤手だれのしはざ、

右の句とは雪と炭とのたがひ有にや。しかし炭の梢の花、本意きこえず。日來の愚盲短才つみゆるし給へかし。

十二番句合題

水祝　殘雪　待花　花　暮春　郭公

五月雨　七夕　名月　雨　木實　秋暮

時雨　同　火燵　霜　霰　歳暮

一番　水祝　殘雪

左

水いはひ軒端の松や一時雨

右

菜めしより雪間やみせて夕煙

左、水祝を軒端の松によせ侍るは、門餝の松なるべし。時雨て色の常盤なるを、夫婦の中によせて、待松の情、聟殿とり成し給にやと感心不レ少。

右も又、雪の隙より草のはつかに見え初たるけしき、菜飯に見立侍る。尤賞翫すべき義ながら、聊等類の難有之まゝ、以レ左爲レ勝。

二番　待花

左

まつ内やかはき上戸の枕の花

右

待花やれとおもへば峰の色

左のかはき上戸は、老黄坊、樽次などが子

孫にや。さもしき心にも花を愛するの躰、猶不ㇾ淺侍れども、耳馴たるやうに覺ゆ。

右も又、花待侘て、四方の峯に驚心する有樣深切なれば、峯の色と云所にて、少ぬかりて聞へ侍るまゝ、雪と有度句の樣を、抄こそ山の端をくゞるしら雪　と西上人もながめ給ふとかや。兩句さのみ勝負付がたし。

三番　花 暮春

左

花盛四方の芝居や秋の暮

右

上野以來青葉ぞかほる暮春の宿

上野・谷中にうちむれて、花の盛、芝居、物さびたる太夫・坐木の花も紅葉もなき風情、誠に秋の夕暮は理りと覺えて、珍重不ㇾ斜といへども、予が門葉杉風、花つらし花場時　と云句を作り、爰かしこの短尺にも書散し侍れば、等類にひかれ殘念ゝ。

右は、花の跡とふ春の嵐に匂ひ殘て、華の面影わすれぬも捨がたく、やさしき所ゝ侍るまゝ勝とす。されども左の作には少をとりゆにや。

四番　郭公

左

深山木やこゑのともじめ杜鵑

右

損也夢又の聲なき子規

深山木のもとじめは、いかなる金持のするわざにやと頼母敷、これぞ初音の山郭公ともいふべきか。

右方大分損したる郭公、暫、云義なるまじきか。

五番　五月雨

左

須磨の浦庭前にあり五月雨

右

編笠にかびがうきけりさ月雨

　五月雨を須磨の浦に見立たる作意、中にも彼浦は淋しき故の名也けりと先珍重。光る君も五月雨のつれ〴〵侘給ふ事、彼物語にも見えたり。

　右のかび編笠猶たどらず、心より言葉にいたりて能俳諧と申べし。熊谷はすの葉等のたてあみ笠、誠當風のすがた是にとゞまり侍る。左右けぢめわかちがたく、能持と定畢。

六番　七夕

左

さぞふき出こよひはらはむ星の水

右

二人ねの袖やなみよけ銀河

　左は年にまれなる星の契なれば、瘧の血は紅葉の橋にも染るにやと、興有ておかし。

　右、二人寐の星も袖つく水など、よめるためしもおもひ出られながら、ふきでのしたる果、實正に見えて、一句の病なしとや申さん。

七番　月雨

左

燭臺や雨がよび出すこよひの月

右

氣力なき楊枝の先や雨の月

　銀燭秋光、月の影にもをさ〳〵をとるまじき、百目がけの蠟燭にや。

　右も又、楺先動の唐哥を楊枝によせ侍るは、妙觀が刀をもつて、猿屋が手ぎはに削みかける玉柳波の紋、楊柳とや申べき。されどもあかさ闇さを論ずる時、燭臺の光まし侍らむ。

八番　木實　秋暮

左

栗かきや猿がやどりの蘯壺の谷

右

かし馬の隙なかりけり秋の暮

壓壺の谷とは、壓壺を谷に見立たるときこえ、句がら何とやら名所を作意していふやうにきこえ侍る。若つぼの谷などゝいふ所も有之にや。未さある所は見ざる、きかざるの智惠うすき判者なめり。

又かし馬の隙なきは、お伽咄の哀の送りむかひと見えて、心ふかくいひ殘したる有樣、天晴お馬ゆ。

九番　時雨

左

なんにも山殘る松さへ大時雨

右

しぐれけり衣手の森洗濯屋

左、山もあらはに　とよめる新古今の詞は、尤ながらさせる作意なし。殊大時雨と云事聞よからず。

右、衣手の森を、時雨に染させたる洗濯屋のはたらき、針の先程も難なく、誠手きゝの仕わざなるべし。織し千秋の唐錦、裁重たる衣手の森とよめるも、彼かゝが夜なべの事をいふにやとおかしく、さかりの大時雨大まけならんとぞ。

十番　時雨

左

しぐれに色童子は松より弱かりけり

右

日ゝ記や筆にかはかぬ村時雨

此童子は大江山の酒ずきにや。誠珍作、神便奇特歌、鬼をも取ひしぐべき一句の姿、つよき所見え侍るは綱・金時もはだし。

右、又日ゝ記の筆かはき兼たるぬれ色も、つや〳〵としほらしく、手まめに書付たる筆の跡、反古になさむは無下の事なれば、兩句しばらく持にて、指置物也。

十一番　霜　火燵

左

うたゝねや謟(あつらへ)の夢置ごたつ

右

かねぞ嵐梢をくゝる霜の色

左、謟の夢珍重ながら、仙風三ヶ物發句を先年出し侍れば、是も先作にひかれけり。

右の句、鐘の聲を嵐に迯らせ、嵐の色を霜に見たる風景、興なきにもあらず。仍爲レ勝。

十二番　　歳暮

左

しのもみや袖に音有玉霰

右

としぞ暮郭公夢いやよ夢

しのもみやといふより、袖に音有(あり)とつゞけられたる作意、椋の葉みがきの玉霰、馬瑙(めのう)・珊瑚(さんご)も光を失ふべし。

右、年暮の郭公も、昨日こそ早苗取しかとよめる哥の心も籠りて珍しけれ。〔五〕郭公に縁語もとめ度か、其上(うへ)、下(しも)の五文字もぬるくきこえ侍れば、愈以レ左爲レ勝。

前後十八番の句合、やつがれ馬頭(うまのかみ)になりて、物定(ものさだめ)の博士にさゝれ侍る。十面顔(じふめん)に分別たゞく比(この)とちぎりたるさまか。我ながらかたはらいた(痛)けれど、そのかたはらに筆をけがして、かみ・中(なか)・下(しも)の品をわかち侍るを、たま〳〵にも、うなづく人あれかしとこそ。

坐興庵　桃青

延寶六初冬日　　〔素宣〕

〔一〕本文明瞭ならず、暫く判讀に從へり。
〔二〕本文「彼の」と見ゆれど草體判明しがたし。
〔三〕本文「花つらし花揚時」と讀みたれど「花盛時」かとも覺ゆ。
〔四〕本文「猶たさらず」とあれど誤あるべし。
〔五〕本文「　郭公」郭公の上二文字あれど、判讀しかねたり。

田舎の句合

延寶八年板

阿誰軒の『誹諧書籍目錄』で見ると、延寶八年板の『江戸誹諧合』が古い標題である。その外題に『江戸俳諧合 田舎 其角』とある延寶板も現存してゐる。安永四年闌更の『田舎の句合』が覆刻されて以來、其成の『新七部集』・『一葉集』・『袖珍鈔』に採錄され、延寶板と對照して大した異同もない。

田舎の句合

桃翁、栩々齋にいまして、爲に俳諧無盡經をとく。東坡が風情、杜子がしやれ（西落）、山谷が氣色より初て、其躰幽になどらか也。ねりま（練馬）の山の花のもと、渭北の春の霞を思ひ、葛西の浦の月の前、再江東の雲を見ると。螺子此語にはさんで、農夫と野人とを左右にわかち、詩の躰五十句をつゞる。章のふつゝか（不束）に、語路の巷のまがり曲れるをもつて、田舎とは名付たるべし。仍以是に翁の判を獲たり。判詞、莊周が腹中を呑で、希逸が辯も口にふるす。遠くきく、大江の千里は、百首の詠を詩の題にならひ、近所の其角は俳諧に詩をのべたり。あゝ千さと同腹中なる事を知る。しるといへば、我これをしるに似たり。しらずして爰に筆をとる、又是しらざるなり。

延寶八歳次　庚申仲秋日

嵐亭治助謹序

第一番

左 持

霞消て富士をはだか（裸）に雪肥たり　農夫

右

菜摘近し白魚を吉野川に放いて見う　野人

先、左の句は、卷頭の一句と見えて、豐にして長高し。未だ初春の体、霞もやらで、ありありと見えたる不二のけしき、雪肥たりと云所奇也。古人春雪瘦などゝ作れる便多きにや。

右の句、菜摘と云より吉野川に白魚をわがひたる一興、尤妙なり。山の姿・川の流見所多し。

第二番

左 勝

春の水やかろく能書の手を走らす　農夫

右

引かへつ蕪をはたのに春の駒　野人

岩間をとぢし苔の下水、さら〳〵と流出る波の文、義之か石ずり。懐素が自叙帖の筆のわしれるがごとし。

右の句論ずるにたらず。

第三番

左 持

宿の梅椴いかばかり青かつし　農夫

右

青柳に蝙蝠つたふ夕ばへ也　野人

左右の姿詞、此句に止り侍る。かの山谷が烟雨ニ青カツシカ已ニ黄ニナンヌト、作れる梅の詩に似たり。其躰つよくして優有。又、柳につたふかはほり、鶯よりも猶興あり。よは〳〵と見えて又つよし。

左は唐絵、右は大和絵、墨絵にしやれて色絵にうるはし。法印も筆を捨、予も又筆をなげうつ。

第四番

左

帰雁米つきも古里やおもふ　農夫

右 勝

今案ズルニ寒食の家には自身番　野人

越路にかへる雁がねに、米つき古郷をしたふ。哀深からぬにはあらざれども、寒食の自身番珍し。この日は火のさたを忌といへば、批言の批をも忌べき也。

第五番

左 持

徳利狂人いたはしや花ゆへに社　農夫

右

櫻狩けふは目黒のしるべせよ　野人

徳利をいだいて、花にたはぶるゝ狂人深切也。又、目黒が原の遠のさくら尤やさし。上野・谷中のさくらを見つくしたる躰、言葉の外にあらはれたり。兩句、幽玄差別なし。

第六番

左

俗にいふうぶめ成べしよぶこ鳥　農夫

右 勝

鶯に乗て春を送るに白雲や　野人

喚子鳥、予先年、吟先生にま見えて、此事を尋侍れば、傳受の事、誹諧にせん事無用の由。又、うぶめ、李時珍が說に姑獲鳥とかけり。鳥と云字によせて、おもひ出られけるにや。猶批判なりがたし。且、右の句の鶯にのつて無窮の空々たるに逍遥せん事、樂、猶きはまりなかるべしや。

第七番

左

今日にかはる淨瑠璃殿の青簾　農夫

右 勝

何と夏羽織綸子は重し紗は輕し　野人

青簾よく云叶侍れども、夏羽織重からず、輕からず、中庸の中を用ひて然るべきよし。兼て才寺の入道前の關白とやらんの、せりふにもかゝれたり。仍以、夏羽をり勝と定侍る。

第八番

左 勝

鉦カン／＼鷲破郭公帥の戸に　農夫

右

ほとゝぎす家隆のうそや菫　野人

草の庵の夜の念佛先殊勝、家隆のうそとは、ほとゝぎす聲も絶にし垣根よりしのびねに鳴きり／＼す哉　と讀る心にや。誰まことより此うそを用ひんか。されどもかねの音のはる

かに聞ゆるを、時鳥に心付たるありさま、猶可ナランや。

第九番

左 持

壁の麦葎千年をわらふとかや　農夫

右

摺鉢の早苗穂に出る秋社あらめ　野人

壁に生る麦は、朝菌の晦朔をしらず、冥霊大椿を論ずるに似たり。又摺鉢の早苗に秋おもふ事、かの二葉ふくだに荻の上風　とよみ給ふ心もをのづから也。左は虚也。右は實、花實いづれをかとらん。

第十番

左

藻の花や海老こす袖にさゞれ浪　農夫

右 勝

何を音にすほん鳴らん五月雨闇　野人

藻の花のいさぎよきに、小ゐびの飛ちがふけしき、涼しくしほらし。右の句は　川越の遠の田中の夕闇に何ぞときけば龜ぞ鳴なる　と聞え侍る。小ゐびも捨べきにはあらねど、予は龜に乘てあそばむ。

第十一番

左 持

むかし匂ふ花さへ實さへ陳皮さへ　農夫

右

蚊遣り火に夕顔白しだい〳〵　野人

枝に霜をけと、よまれたる常盤木の緑青〳〵と、うるはしく仕立られたるに、右、又かやりの烟の中に朗ゝ見つるゆふがほの白く咲て、軒に干れし橙の色をあらそふも、又おかしくこそ侍らめ。

第十二番

左

石の枕に鮨屋ありける今の茶屋　農夫

右　勝

芝物の涼しき常夏の巻を見て思ふ　野人

石の枕古歌明也。並木の茶屋の繁栄も、そのひとつやの名残とや。且、芝肴のとりまぜ、彼巻の鮎・石ぶし、御前にて調じさせ給ふ折ふし、思ひやるさへ涼し。

第十三番

左　勝

袖の露も羽二重氣にはるぬもの也　農夫

右

夢となりし骸骨踊る荻の聲　野人

羽二重の袖の露は、貴人の心に秋至らずと、作れる詩の心を思ひよせられたるにや。

右、また骸骨の荻のこゑをかりたる、さもあるべき事ながら、左の感淺からず覺へ侍る。

第十四番

左　持

月のさそふ詩の舟か山市か川武か　農夫

右

さゝで柴の戸泥坊にとがはなし月　野人

公任卿、哥の舟に乘て、秀歌よみ給ふよし。これは是、山一丸、川武の舟ばたを敲て、いかなる秀歌うたふにや。

右はまた眞木の板戸もさゝずねにけり　などゝよめる、月に忘れたる柴の戸のしりさし、咎なし難なし。

第十五番

左　持

眺送る函谷やけふ驢馬迎　農夫

右

霧汐烟行德かけて須磨の浦　野人

函谷關の驢馬、行德の汐燒、眺望いづれも珍重なるべし。

第十六番

左　勝

分限者に成たくば秋の夕暮をも捨よ　農夫

右

秋の心法師は俗の寐覺かな　野人

先、左の句珍重。法師のねざめ俗にかへらん事、尤さもあるべきや。兩句辯じがたきに仍て、大福山金德寺の和尙にまみ見えて、問答。假にも無常を觀ずることなかれ。一錢を得たらんときは、神のごとく如レ君せよと、仍て右の句閉口す。

第十七番

左

砧の町妻叱る犬あはれなり　農夫

右　勝

芋をうへて雨を聞風のやどり哉　野人

左の句、里の砧といはんはふるしとて、砧の町と云、つま戀る鹿は不レ珍とて、妻叱る犬と云しは、猶作の中に作有て、聊、作過たるにや。

又、芋の葉に雨を聞んは、誠に冷しく淋しき躰、尤、感心多し。これ孟叔異が雨の題にて、檜聲和レ月落二芭蕉一と作れる氣色に似たり。右勝たるべし。

第十八番

左　勝

月口の栗鼠葡萄かつらの甘露有　農夫

右

紀路行山はみかんの吉野かな　野人

鼠をりすと作意して、ふだう葛の甘露とつづけり。

右の句は信章子が句に　茶の花や利休が目にはよしの山　と作れるに、聊、俤の似かよふにや。強て心を別たん時は、等類の難とも云がたく侍れど、甘露の一滴には、我も前後を忘れたる成べし。

第十九番

左

時雨痩松私の物干にと書り　農夫

右　持

凩となりぬ蝸牛の空せ貝　野人

和歌三躰に、秋冬の哥は細くからびてと云り。痩松の霽もさびしく、蝸牛のうつせ貝もさびたり。されどもかれが角の上にあらそはんときは、右いさゝかまさりなんや。

第二十番

左　持

金藏のをのれとうなる也霜の聲　農夫

右

啼千鳥幾夜あしかの夢おどろく　野人

鐘山のかねぐら、己とうなり、かよふ鵆の鳴聲に、海鹿の夢もおどろくべしとや。兩句口ざむる心地して蘧々然たり。

第廿一番

左　持

侘に絶て一爐の散茶氣味深し　農夫

右

火燵のうたゝねや夢に眞桑を枕にす　野人

口切の一句、手づから鑵子を鳴し、茶袋を洗ふ。麁茶淡飯の樂は、いかなる侘助にや。

又、火燵のうたゝねの夢は、列子曰陽氣壯則夢渉大火燔焫、又藉帶寐則夢蛇云々。是を以てこれを思ふに、爐邊のあたゝか成に、瓜を夢見ん事さもありつべし。

第廿二番

左　持

雪おもしろ軒の掛菜にみそさゞい　農夫

右

雪にとへばかれも蘇鐵の女なり　野人

左の句は、おかしき所に風情を求めて風情あり。適山家のけしきを見るに、此鳥必軒近く啼て、雪の折ふしなどは、一入人家をはなれず。山里の淋しさ、誠におもひ合せたり。

右も又、雪中のそてつの詠、餘情かぎりなく、雪と雪とのあらそひ、いづれも白し。

第廿三番

左 勝

詩人ゆるせ松江の河豚といはんに　農夫

右

鯖にこりず鰹にこりず雪の鰒　野人

金澤のあそび、たのしいかな。けふの薄々暮に網をあげて、壯松江のかとんを得たり。むかしは鱸、今はふぐ、古風は鱸魚を愛して河豚を知らず。

又、右の鰒ずき、さばにあてられ、鰹にえひての上誓ヶ用捨有べし。

第廿四番

左 勝

題二山家之糠味噌一

閑居の糠みそ浮世にくばる納豆はなど　農夫

右

寄二貧家之冬夜一

夢猶さむし隣家に蛤を炊ぐ音　野人

葉しやうがの森の木がらし吹あれて、枯ゝなる蓼の林にかくれ、ぬかみそ壺に入て、乾坤を忘れたる隱士の世間寺無用房ヮ笑ふなるべし。

右の句、貧家にして冬夜をわぶるの躰、寒苦をふせぐにたらず。尤、哀深きといへども、隣家の蛤よい、當前のぬかみそを愛せんにはしかじ。

第廿五番

左

町神樂店前の日かげをかつらとし　農夫

右 勝

流るゝ年の哀世につくも髮さへ漱捨つ　野人

店前の日蔭を葛とせん事一句云がたし。流るゝ年のあはれ、誠に是を歎美すべし。

栩々齋主桃青漫採ㇾ毫判

常盤屋の句合　延寶八年跋

前掲『田舍の句合』の姉妹卷である。延寶板と共に、闌更の覆刻した安永板も現存してゐる『新七部集』・『一葉集』・『袖珍鈔』に所載せること『田舍の句合』と同樣である。延寶板は兩書とも小菊本で、内容は『一葉集』と大差ないが、本文は延寶板から採錄した。

常盤屋の句合

鯛のなる木の櫻咲て、鮒は紅葉をあらそふといへども青物の青々と、四時全き常盤の陰に、ひとり其味の淺く水くさきを愛す。

杉　風　子

第一番

左勝

草すでに八百屋の軒に芳し

右

今朝も小松がはらのはたな蕾

左の芳草、八百屋の軒に梅をあらそひ、鶯菜にも初音きゝたる心地するに、はた野の原の若菜にすがりて、子の日の松を引添たるもめでたく侍れども、先八百屋の草のかうばしきに、心とゞまり侍る。仍以左爲勝。

第二番

左

はやなりぬ干物の木目もはるに

右勝

花よりも猶目うどの春の紅は

左、干物の木目も、春に若歸りたるけしき尤ながら、目うどの色のくれなゐなる處に、心付たる一作、まことに花よりも匂ひかうばし。

第三番

左持

芹とる翁碧潭に望んでこはいかに

右

防風ゆるく吹て、青酢漸く垂り

碧潭にのぞんで芹とる翁、薄氷をふむかとあやうきに、防風ゆるく吹て青酢の氷、とけ初たるものどけしや。左右のけぢめ、いづれかと筆をかざして、遙成むかふの畑道を見れば、髭むさ〳〵と生たる老人、早わらびの杖にすがゐ、忽然と来たり、芹をあなどるべからず。ばうふうをすつべからず。我は是、此山にかくれ住野老先生と云もの也と云て、即うせぬ。

第四番

左 持

しほらしき物づくしちよろ木かいわりな

右

澤茸やくされ草鞋のちぎれより

左の句、しほらしき物の類を集たるは、もし是、新清少納言などが、筆のすさみにやとやさしく、

右も又、澤ちさの蘆芥の中より生出たるけしきも、猶むつかしげならず。両句共にしほらしくおぼえ侍る。

第五番

左 勝

青わさび蟹が爪木の斧の音

右

茗荷たけは生姜の上にたゝん事を

予、日外かた田舎の老夫の語りしを聞に、わさびうへ置かしこに、必蟹の来てこれを喰ふと。此作者は此事をしるや。しかも其作工にしてかにが爪木の丁々たるひゞき、山更幽也。

右又、茗荷・薬生姜の似たるを以、あらそふといへども、左のわさび感情多し。

第六番

左

櫻蒟蒻いかなる人の何を以櫻

右 勝

干大根よめ菜を戀るおとろへは

櫻にあらぬさくらごんにやく、予たはぶれに曰、かれは紅葉豆腐に增れるといはんか。且、一樽の霞の間より、顯れそむるのけしきかとおかしく侍れども、干大根のうき戀にやせほそりて、たとへ其身は一分刻に成とても、此よめ菜の君を社と戀つらめ。哀也。深切也。

第七番

左

蜈のり榮螺の洞に潜てけり

右 勝

獨活の千年能なし山の柚木かな

むかで苔の住所、さゞいの洞に求たるも珍らし。

右はまた、能なし山のうどの大木、千とせを經たるも奇也。此山いづれの所にや、山海經にも見えず。もし无何有之鄕・廣莫の野につづきたる名所か。彼大樗を捨ざるのためしもおもひ出られて、うどの大木、又愛すべし。

第八番

左

柚の花は香故に花と社いへれ花

右 勝

都人山桝を藤の若葉とて

花柚のかほり盞に落て、いかなる上戸の袖の匂ひぞと、なつかしけれども、都人のみなれぬ木目、藤の若葉に見ちがへたる風流、優にやさし。

第九番

左

夕べかな雨杜鵑坐禪豆

右 勝

麥飯やさらば雀の宿ならで

左の句、雨の夕べの淋しさをいはんとて、

坐禅豆といひ、郭公に慰たるさま、興有てきこえ侍れども、雀の宿ならぬ麦飯こそ猶珍らしけれ。

第十番

左（持）

きり蓼の切れて己が命かな

右

夕影や色落すしその露おもみ

前栽國の傍にして蓼・紫蘇の二もと色をあらそふあり。先、左蓼の曰、我はこれ、色翠に位いやしきといへ共、人をして利根になさしむるの徳あり。其上露命不レ貪、切れて己が命といふ所こそ命なれ。紫蘇云、我には天徳をゆるして紫衣をなす。多くの権法師の中に紫衣上人とあがめられ、又五臓に入て病を治し、庭に有ては色落すしその露おもげなる風情、青蓼の青キにまさらんやと云論、しばらくにしてやまず。

第十一番

左（持）

女とや茄子。はがくれに打かたぶける姿

右

山賤の垣ほのさゝげともよめるや

己が葉がくれに、打かたぶける茄子の君、むらさき式部が娘にや。わかむらさきのゆかりにや。いか成ものゝ妻となり、いづれの人のよめとやならん。なつかし。

右の句も又、山賤の垣ほにはへる青さゝげ人は来れども言傳もなし　とよめるは、古今集寵どのゝ下女のよみたるうた成べし。いづれかおかしく、いづれか哀ふかゝらん。

第十二番

左（勝）

五月雨のよそに。蕗のはながら蓮の池

右

天蓼の枝折。老たる猫にはあらね共

たえまなき五月雨のそら、庭上忽池邊の思ひをなすに、彼遍昭が　何かは露を蓮とあざむく　とよめる心もおかし。又齊の管仲またたび山〻に道をうしなひ、老たる猫を放て道しるべしたるも珍らしけれ共、只遍照の詠に心ひかるゝ也けり。

第十三番

左　勝

あへて此箒木のほろ〱と成て只

右

影うらむや毛虫のかりきかうれの溜水

左、箒木のほろ〱あへ、淡してやすし。右の句はかりきかうれのたまり水に、いぶせき毛虫の影をはぢんも、興ありながら、あまりに趣向を求め、たくみ過たるやうに覺え侍るは僻耳にや。只箒木のやすらかなる方こそやすらかなれ。

第十四番

左

古そばやあかでも人に夏大根

右　勝

朝顔の夏日陰待間のとうふ哉

雫に濁るしぼり汁あかでも人に　とよめる古そば、めづらしからぬにはあらず。しかれ共松樹千年亘歟一日の榮と作れる、朝良の詠、尤興あり。

第十五番

左

里芋の長也。畠中の庄司とやらんは

右　勝

薯は山をうばつて金輪際に自然生

里芋、興有て實なし。右の山の薯、自然薯、蕷生の字用ひんこと、いかゞあるべきや。但シ自然石・自然木等の類にて、くるしるかるまじきか。其上、五文字力ありて、一句もつよくきこえ侍るまゝ、右勝たるべし。

第十六番

左 勝

茶僧月を見るに。梅干の影のごとくに來リ

右

亂酒の僧見よやゆべしの責を受ル

左の五文字、先珍重なるに、現に見えし梅ぼしの情、誠にかすか也。かの土大根を食したる昔も、此類成べしや。

右の句、破戒の僧をいましめて、未來柚べしのせめをうけ、焦熱の苦しみには、柚味噌の釜うけにも成べしやとおそろしく、唯茶數奇の僧こそ殊勝におぼえ侍れ。

第十七番

左 勝

暮山の雨松茸のすご〳〵と獨リ

右

岩もる水木くらげの耳に空シク

しよぼ〳〵と降暮山の雨にぬれて、松茸のすご〳〵とたてるけしき、言葉の外に意味ふかし。

右の句も一体なきにはあらざれ共、木くらげの耳にむなしく、岩もる水の雫さへ、聞もらし侍るにぞ。

第十八番

左 勝

だい〳〵を蜜柑と金柑の笑て曰

右

水又栗。ゝを淸しといはんとすれば

橙を蜜柑・金かんの論は、作のうちに作有て、虚の中に實をふくめり。數句の中の秀逸、此句に於て莊周が心あらむ。尤玩味すべし。水復栗の句は、栗また水を淸しと打返シたる心、よく云殘し侍れ共、こゝろ餘りて言葉たらずなど〵、難ずる方も有べきや。只左の句ヲ以、類ひなき勝と定畢ぬ。

第十九番

左

賤が契は干瓢のむすびもとめず

右　勝

かれ〳〵ナルやのべに冬瓜の獨ぬる

ひさごがもとの賤が情、干瓢の結びもとめぬ仇なる契こそはかなけれ。されどもかんぴやうむくと云時は、六月の季に出たるを、秋の句に合せん事いかゞ。

右は又、うら枯わたる秋の野に、冬瓜ばかりとり殘されて、ひとりねに打こけて、あじきなきさましたる見立、新敷感多し。

第二十番

左　持

霖浪の音っ昆布の苫屋の夜すがらやな

右

山寺の冬納豆に四手うつやあらし

左の句、蝦夷松前のあたりに、昆布を以、苫屋を覆ふとかや、咄に聞傳たるを、時雨浪の音のさびしきまゝに、遙成さかひ迄、おもひ出たる哀ふかし。

右の句は納豆に四手うつ山寺の嵐、まことにさむき景氣をよく云のべたれば、兩句持にてさしおきぬ。

第二十一番

左　勝

凩の風干葉は窓をうがつて去ん

右

霰やは芥子に牛房は埋木の

しづが軒端のほし葉さへ、凩の吹來て、おとするにやと茅屋の閑窓、おもひやるさへさぶし。

牛房の埋木、花さくべしともおぼえず。

第二十二番

左　勝

はづかしっ根深の。老の黛も白根がちに

右

あけぼのや霜にかぶなの哀なる

　あさつきのみどりうるはしく、韮の若葉のたをやかなるも、いつしかねぶかの白根がちなる白髪の、老女に見立たるも新し。

　又霜下にしぼむかぶなの姿、けしきなきにはあらざれ共、根深の前のいにしへこそ猶なまめかしけれ。

第二十三番

　左　勝

麩といふもの有。性水を好で氷に遊ぶ

　右

氷筋のごとしかんてんのかんは寒とよむ

　麩ハ性ヲ註シ、カンテンハ文字ヲトク。増補献立抄ニ曰ク、麩ハ風味ノ切、以レ酒煮、以レ油煎、則味愈厚シト云リ。此方賞翫タルベシ。

第二十四番

　左　持

大根生る逆成がおかしいとや人〴〵

　右

雪の冬菜男鍬ついて立りける

　左の句、賤がわら屋の軒に、生たる大根にや、面白し〳〵。

　雪の中の田園三徑うしなひたる体、又珍重。

第二十五番

　左　持

雪の竹子。今は塩したが有ものを

　右

臘月の青物。我常盤屋也とよばふ

　晋の孟宗、雪の中の須田町は、尋ざるやとおかし。

　右はまた、臘月の青物に、四時不變の圀をおもひよせたるも奇特。左右わかちなし。

詩は漢より魏にいたるまで四百餘年、詩人・才子・文體三たびかはるといへり。倭歌の風流、代々にあらたま

り、俳諧年々に變じ、月々に新也。今こゝに青物の種々をあつめ、二十五番の句合となして、予に判をこふ。誠に何々たをやかに、作新敷、見るに幽也。思ふに玄也。是を今の風體といはんか。且是に名付て、常盤屋といふは、時を祝し代をほめての名なるべし。倩、神田須田町のけしきを思ふに、千里の外の青草は、麒麟につけて、これをはこばせ、鳳の卵は鞍にうづみ、雪の中の茗荷、二月の西瓜、朝鮮の葉人參、絲もふかく、唐のからしの紅なるも、今、此江戸にもてつどひ、風、たうきびの粢をならさず。雨、土生姜をうごかさねば、青物の作意時を得て、かいわり菜の二葉に、松茸の千とせを祈り、芋の葉の露ちりうせずして、さゝげのかづら長くつたはれらば、そらまめをあふぎて、今此時をこひざらめかも冬瓜

于レ時延寶八庚申季秋日　　華桃園

〔一〕風德の『芭蕉文集』に「淡く」

〔二〕同「勝」に誤る。

續の原

貞享四年作

『續の原』は不卜・一丸・其角を撰者とし、判者は春を素堂、夏を調和、秋を湖春、冬を桃青として、撰者の一人一柳軒不卜が貞享四年板行した。加賀の半化坊闌更は其の著『落葉考』に桃青判の部のみを收めて明和八年出板した。その後文政二年九月江戸の橋梁雀巢が出羽米澤の山崎屋岑所持の貞享本によつて覆刻を企て、『續[illegible]の原』二冊を添へ、三冊本として再刊したが、同七年火災にて板木を灰燼としたので、文政十一年再度覆刻して一冊本としたものが世に行はれてゐる。別に『芭蕉翁俳諧四部錄』・『芭蕉翁七書』・『新七部集』・『一葉集』・『稿珍鈔』にも採錄されてゐる。『續の原』中桃青判なる冬の部を左に掲げる。

續の原　四季之句合

一番　落葉

左持

落つかぬ木葉にあたる雫かな　風水

右

落葉とて富士のつゞきに塔ひとつ　松濤

左の句、景氣微細に心を付たり。

右、又山もあらはなる不二の詠め、一句のたけもゆたかに聞え侍る。されども句中目に見えたる切字なし。五文字にて云殘したれば、きれ字を加へて見るべきにや。猶、分明ならざるを難じて、持に定侍るべきか。

二番　霜

左勝

親と子の霜夜をかこふ野馬かな　(一)溪石

右

霜深し扇をかざすよるのふね　勇招

ものいはぬよものけだものすらさへもあはれなるかなや親の子をおもふ　とよみ給ひしこのうたに便して、野馬の子をいとふさませつ也。

右の句、さもあるべきながら、左の句、秀逸なればまけ侍らんかし。

三番　夜興

左持

我笠に月夜わするゝ夜興かな　コ齋

右

いづれ狸得失覺て犬もなし　文鱗

ひだりの句、茂み深く分入狩人の形容、いぶかしき處あり。

右の句も、すがたつよく、言葉もたくみに聞え侍れども、其得失、(二)我もわきがたし。仍以持トス。

四番　枯野

左勝

〔三〕松苗も枯野に日だつあらしかな　枳風

右

〔四〕大橋を枯野にわたす入日哉　全峰

左の句、木枯の吹盡して、苗松のそよ〳〵とうごきたる風のやどり、めにたつべきもの也。寸松紅梁のすがたをふくみて、一句たけ高し。

右も又、枯野の風景見捨がたく〔五〕侍れども、苗松の方や日に立侍らん。

五番　網代

左　持

子を連て夜のあじろに簑〔六〕せはし　心水

右

あじろ木のゆるぎやみ〔七〕ぬる氷かな　不角

あじろの床に、子を連たる作意めづらかにしてやさし。

右又、あじろの杭の氷にとぢて、寒さいやましたるけしき、左右、感心わきがたし。

六番　石蕗

左　勝

破れ葉のツハに顏出す鼬かな　調柳

右

つば咲や誰が引すてし雪車の跡　立些

左の句、いたちとかいふもの〻、わが方を見おこせたると云けん、をの〻薄もおもひよ〔八〕せられて、おかしく侍るに、引捨し雪車の句意、しかときゝえず。仍以レ左爲レ勝。

七番　鴨

左　勝

鈴鴨の聲ふりわたる月寒し　嵐雪

右

鴨くはで菜を干枯す鹽屋かな　魚兒

すゞかもの聲ふり立る〔九〕秀句かぎりなし。一句安らかにして、嚴寒のけしき盡たり。かの妹がりの哥を吟ずれば、六月廿四日の日も寒し〔一〇〕と書けん、さることにや。

右の句も蠶を飼ものゝ、きぬ着ぬためしも、あはれに侍れども、鈴(一二)がものすゞの聲、句調たかしとやいはん。

八番　氷柱

左

風に來て氷柱にさがる楓かな　一(一三)排

右勝

門閉て閑居をしゆる氷柱哉　琴風

氷柱にさがる楓、ほのかなるけしき、ほそくからびて哀なるに、

右はなほ烟り絶〴〵にして、雪の後は氷柱に門を閉たる閑居の扉、感情まさりたるやうに覺侍る。

九番　あられ

左持

あかつきの霰(一三)は冬の信かな　李下

右

森深く野馬飛こむあられかな　仲風

烈風寒威、曉の寢覺、冬のまことゝいへるぞ、かくてはよにもあられ降哉と吟聲さびしきに、

右は又、野馬のあられにおどろきたるさま、能云(一四)叶られたり。聞所、見る處、師曠が耳をそばだて、離婁が目のさやをはづすといふとも、左右の是非、辨ずることあたはじ。

十番　神樂

左勝

御神樂や火を燒衛士におやからん　去來

右

鉢たゝきまじりて狂ふ神樂かな　孤屋

左りの句、させる難もなく、秀たる所も見えず。

右は鉢たゝき、神樂に交るべき方(一五)いかゞ。

右に難あるをもて、左がた勝たるべし。

十一番　頭巾

左勝

山里や頭巾とるべき人もなし　京 観水

右

頭巾きぬ出家見らるゝ野中かな　鹿言

　めにふれぬ山中の客、そゞろに愛せらるゝ楓林もあるか。

　右は目に立て猶すごき冬野の法師、人にはいかゞおもはるゝ心ばえもありなん。左まさるべし。

十二番　煤掃

左

何方に行てあそばん煤はらひ　擧白

右 勝

煤とりて寺はめでたき佛かな　不卜

　(一六)すゝはきの日の遊び(一七)處を佗たるも、優にして艶也。

　右は、寺の(一八)煤掃と思ひよりたる、先珍重にや。兩句、滑稽のまことをうしなはず。感心わきがたく侍れども、めでたき佛哉　といひし句のいきほひ、猶まさりて聞え侍れば爲レ勝。(二一)

一柳軒不卜のぬしは、身を塵境にしたがひせまりて、志は雲ゐる山の岩根をたどり、あるはよし野の花に遊を忍び、湖水の月に琵琶をうかべて、風雅の奴となること年有。是より先も集あらはすこと、ふたゝびにおよぶといへども、春秋遠く、雲ゆき雨ほどこして、東籬の菊も名をさまぐに、唐朝の牡丹も花しべをことにす。梅のわび、さくらの興も、折にふれ時にしたがへば、句も又人をおどろかしむ。なほ其しげき林に入て、花の香の清きにつき、色こき木葉をひろひて、左右にわかちて積て四節となす。判士よたりに乞て、我も其一にしたがふ。まことや樂にえらるゝものゝ、笛をぬすむに似たりといはん。されども青鷺の目をぬひ、鷗の口を戸ざゝんことあたはず。貞享卯のとし、筆を江上の潮にそゝぎて、終に、蕉庵雪夜の燈火に對す。

〔二一〕『續の原』文政再板本に「淡々」

〔二二〕同「われも」なし。

（三）同「杉苗」
（四）同「石橋を」
（五）同「見捨かたく待らん」以下なし。
（六）同「簑狹し」
（七）同「やみたる」
（八）同「思ひ出られてなかしく侍るかし」
（九）同「渡る」
（一〇）同「言けん」
（一一）同「飾」なし。
（一二）同「一桃」
（一三）同「霞に」
（一四）同「叶たり」
（一五）同「交るへきを」
（一六）同「すゝ拂」
（一七）同「遊ぶ」
（一八）同「すゝ拂」
（一九）同「爲」なし。

初懐紙評註

貞享三年註

『初懐紙』百韻の前半五十韻に對する芭蕉の評語は闌更の『花の故事』中に、寶暦十三年はじめて板行された。後、闌更は明和八年『落葉考』に再錄し、「右五十韻はさきに撰せる花の故事に出すといへども、書寫の誤少からねば、今これをあらたむ」と申譯をしてゐる。編者は別に出羽米澤の雨十齋が享和十四年三月筆寫したものを一本所藏する。『一葉集』及び『袖珍鈔』にも採錄されてゐるが、本文は雨十齋の享保本により『花の故事』その他を以て校合した。

日の春をさすがに鶴の歩み哉　　其角

元朝の日の花やかにさし出て、長閑に幽玄なる氣色を、鶴の歩にかけて云つらね侍る。しかも（一）祝言言外に顯る。流石にといふ手（二）には

尤感多し。

〔一〕『花の故事』に「祝言外にあらはず」

〔二〕同「手爾葉感おほし」

砌に高き去年の桐の實　文鱗

貞德老人云、(一)脇体四道有と立られ侍れども、當時古く成て、(二)只發句に云殘したるけいきを云添たるをよろしとす。梧桐遠く立て、しかも木がらしのまゝにして、枯たる實の梢に殘たる氣色、(三)准て言葉細(四)やか也。桐の實といふは桐の木といふも同じ事ながら、元朝、梢は猶、冬めきて、木枯の其儘なれども、ほのかに霞、朝日匂ひ出て、うるはしく見え侍る躰なるべし。桐の實を(五)見付たる、新數誹諧のか(六)ゝる處に侍るなり。

〔一〕『花の故事』に「老人の云」

〔二〕同「古く成て」より「けいきを」につゞく。

〔三〕同「準へ」なし。

〔四〕同「こまやかに」、『一葉集』に「こまやかにして」

〔五〕『一葉集』に「桐の實さ附たる新しみ」

〔六〕『花の故事』に「俳諧の本意かゝる所に侍る」

雪村が柳見に行く棹さして　枳風

第三、長高く風流に句を作り侍る。發句の景と少替めあり。柳見に行んとあれば、末景に不レ對也。雪村は畫の名筆也。柳を書べき時節そこ(一)の柳を見てかゝんと、(二)円、舟に棹さして出たる狂者の躰、尤珍重也。(三)桐の木立たるより畫師を思ひ出たる趣向、詠やうに寄侍る、付様大切なり。

〔一〕『花の故事』に「その柳を」

〔二〕同「桐の木立」以下「詠やう寄特に侍る」さつゞく。『一葉集』に「桐の立木」

酒(一)の幌に入逢の月

四句目なればかろし。其道の(二)程の躰也。酒屋と云物よく出し侍る。幌は暖簾抔といふため也。尤、夕の景色(三)も有べし。

〔一〕『花の故事』に「酒屋」

〔二〕同「其道の様躰酒屋さいふもの」さつゞく。

〔三〕同「景色も」の字なし。

秋の山手束の弓の鳥賣ン　　芳（一）重

（二）狩人鳥を射て、市に持て賣躰さらるべし。酒屋に便たる珍重の付やう也。手束の弓短き弓也。（三）秋の季持鳥の（四）多きを云ずして、秋の山と大様に（五）置たる大切の所也。看人心を付て翫味すべし。

〔一〕『一葉集』に作者「芳里」
〔二〕『花の故事』に「狩の鳥を得て市に持出て賣躰」
〔三〕同「秋季を持たる鳥の」
〔四〕『一葉集』に「多くあれども」
〔五〕同「置たる五文字大切の」

炭竈こねて冬のこしらへ　　杉風

前句共に山家の躰に見なして付侍る。獵師は鳥を狩り、山賤は炭竈こしらへて冬を待、別條なき句といへども、炭がまの句作、終に人のせぬ所を見付たる（一）新敷句也。

〔一〕雨十齋本に「見付て作也」とあれど『花の故事』『落葉考』によろ。

里〳〵の麥ほのかなる村緑　　仙化

付やう別條なし。炭竈の句を初冬の末、霜月頃などの躰に請て、々畑の有様、能云述べ侍る。（一）惣而句段々の作やうにて、深く付き淺く付大切也。淺く付べき所にて重く付んは、名句たりといへども專なし。

〔一〕『花の故事』に「能云述侍るそい場也」とありて「惣而云々」なし。『落葉考』及び『一葉集』亦同じ。

我のる駒に雨おほひせよ　　李下

是等奇意也。何を付たるともなく、いづれを詠たるともなく、里〳〵の麥（一）といふより旅躰云出し、村緑などのうるはしきより、雨を催し侍る景氣、辯口筆頭に不（二）レ盡。

〔一〕『一葉集』に「麥といひたるより旅体をおもひ出し」
〔二〕『花の故事』に「筆頭に不レ掛ラ」

朝まだき三嶋を拜む道なれば　　擧白

これ、さしたる事なくて、作者の心はふかく（一）おもひを籠たるべし。尤旅躰也。箱根前にせまりて、雨を佗たる心、深切に侍る。

〔一〕『花の故事』に「心に深く思ひこめたるなるへし」

念佛に狂ふ僧いづくより　(一)朱絃

此句、僅に興をあらはしたる迄也。神社には佛者を忌物也。(三)參詣の僧も神前には狂僧也。三嶋は町中に社あれば、道(二)通りの僧もよるべき儀也。

〔一〕『一葉集』に作者名「朱弦」
〔二〕雨十齋本に「忌ものなるに」より「狂僧布而神前にて狂體」までつゞけあれど文脈通ぜず、此の一項『花の故事』による。
〔三〕『一葉集』に「道通る里の僧もよるべき也」

あさましく連歌の興をさますらん　蚊足

連歌の興をさます、(一)尤付やう珍し。かゝること度ゝ家人の上にてもある事にて、一人珍重に侍る。

〔一〕『花の故事』に「さます」より「付樣珍し度ゝ」までつゞく。

敵よせ來るむら松の聲　千里

聞えたる通別儀(一)なし。連歌に軍場(二)思ひ寄るなり。

〔一〕『花の故事』に「別意」
〔二〕同「連歌に軍場を思ひ寄せたる也」

有明の梨子打烏帽子着たりける　芭蕉

付樣別義なし。前句に軍の噂にして、又一句さらに云立(一)たり。軍に梨子打烏ぼしとあしらいたる付やう輕くてよし。(二)一句の姿、道具、眼を付て見るべし。

〔一〕『花の故事』に「軍に梨打烏ぼしにて」、『落葉考』に「軍に」なし。
〔二〕雨十齋本に「一句の」なし、『花の故事』による。

うき世の露を宴の見おさめ　筆

前句を禁中にして付たる也。烏ぼしを着るといふにて、(一)却て世を捨(二)たるといふ心を思ひ儲たり。

〔一〕雨十齋本に「却る」、『花の故事』による。
〔二〕『花の故事』に「捨るさ云心を」より「儲たり」までつゞき次に「觀相なり」とあり。『一葉集』に「觀想也」

にくまれし宿の木槿のちる度に　文鱗

宴は只酒もりといふ心なれば、(一)うき世のあぢ

きなきより、戀の句をおもひ備たる也。木槿[三]のはかなくしほるゝごとく、我が身のおもひしほどをいふより、にくまれしと五文字置たる、戀の句作尤感情ふかし。

〔一〕『花の故事』に「云心なれば」より「世の」につゞく。『一葉集』に「世の無爲より」

〔二〕『一葉集』に「木槿の花のはかなくしほみ」、『花の故事』に「しほりめく」

後(のち)住(すむ)女(をんな)きぬたうち〳〵　其角

後住女[一]後添の妻といはん爲也。にくまれしといふにて後添の物と和せぬ意味[二]籠(こもり)たり。碪打〳〵と重たるにて、千萬の物思ひするやうに聞え侍る。愁思ある心にて、前句をのせたる也。翫味淺からず。

〔一〕『花の故事』に「女は」

〔二〕同「和せざる味ひをこめたり」

山ふかみ(深)乳をのむ猿の聲悲し　コ齋

碪、里・水邊・濱・浦等にも[一]多くよみ侍る。尤姨捨・更級・吉野など山類にも讀侍れ[二]ば、碪を山類にてあしらひたる也。[三]乳を呑猿と云にて、女といふ字をあしらひたる也。幽なかる意味、しかもよく通じたり。

〔一〕『花の故事』に「等に」より「多く」につゞく。

〔二〕同「讀侍る」

〔三〕「乳を呑」より「あしらひたる也」まで『花の故事』による。

命(いのち)を甲斐の筏(いかだ)とも見よ　枳風

猿の聲悲しきより、山川のはげしく冷敷躰形容[一]したる也。付やう尤山類[二]をあしらひたる也。

〔一〕『花の故事』に「したる」より「付やう」につゞく。

〔二〕雨十齋本に「あしらい」とありて「たる」なし『花の故事』による。

法(のり)の土我剃髪を埋み置む　杉風

筏[一]のあやうく物冷じきを見て、身の無常を觀じたる也。甲斐と云は、古人佛者の古跡[二]たり。自然に無常も思ひより[三]たれば也。剃髪埋み可置作意、新敷哀をこめ侍る。

〔一〕雨十齋本に「筏おやうく物冷數しみて」、『花の故事』による。
〔二〕『花の故事』に「古跡等多く自然に」
〔三〕『一葉集』に「おもへ寄たる也」

はづかしの記(一)を閉る帋の戸　芳重

別儀(二)なし。草庵隱者の躰也。さもあるべき風流なり。

〔一〕『花の故事』に「跡か」とあり、作者名「芳里」
〔二〕同「別意なし」

咲日より車かぞゆる花の陰　李下(一)

前句、隱者の躰を斷たる也。(三)尤官祿を辭して、かくれ住人の(二)いかめしき花見車を、日々にかぞへて居る躰也。只句毎に句作のやわらかにめづらしきに目を留むべし。

〔一〕『花の故事』に作者名「杉風」
〔二〕雨十齋本に「感辭官捨詠て」とあれど、文意通ぜず、『花の故事』による。
〔三〕同「いそがしき花見車」とあり、此の一句『花の故事』による。

橋は小雨をもゆる陽炎　仙化

春(一)の景氣也。季の遣ひ樣、かろくてやすらか成所を見るべし。(二)花の閉目抔は、易々と輕く付るもの也。

〔一〕雨十齋本「春の景也」、とあれど『花の故事』による。
〔二〕『花の故事』に「やすらかにしたる所な」
〔三〕『一葉集』に「懷紙の綴目」

殘雪殘る案山子の珍しく　朱絃

是又春の氣色也。付やうさせる事なし。野邊・(一)田畑のあたり、殘雪にあふれたる案山子立たる姿哀也。景氣を見付たる也。(二)秋のもの冬こめて春迄殘たるに、薄雪のかゝりたる躰、尤感情なるべし。

〔一〕『花の故事』に「田畑の句本ノマ、殘りたる破たる案山子」、『一葉集』に「田畑に雪の殘たるに」
〔二〕『花の故事』に「秋の冬こめて」、『一葉集』に「秋冬こめて」

しづかに醉て蝶を取うた　擧白

句作の工なるを興じて出せる句也。蝶をとる(一)々歌て醉に興じたる躰、誠に面白し。

〔一〕『花の故事』に「蝶をさりぐ哥は酔てさ」、『一葉集』に「蝶を取たる哥は」

殿守がねぶたがりつる朝ぼらけ　千り

此句、附所少シ骨を折たる句也。前句に蝶を現在にしたる句にあらず。蝶をとる（一）〳〵哥といふを、諷物にして付たる也。殿守は禁中の下（二）官の者也。蝶取哥と云（三）ふ風流より、禁裏に思ひなして、夜すがら夜明し興ありて、殿守等があけ（四）、猶ねぶたげに見ゆる躰也。

〔一〕『花の故事』に「蝶さる哥」
〔二〕同「禁裏の」
〔三〕同「云に風流なる」
〔四〕同「明て猶珍敷長ゝに」、『一葉集』に「夜明て眠る有様珍らし、一句長高く見ゆる也」

はげたる眉をかくすきぬぐ　芭蕉

朝ぼらけといふより、きぬ〳〵常の事なり。眉はげたるといふは、寐ずして（一）、しどけなき躰也。伊勢物語に夙て殿守づかさの見るになどいへる（二）も、此句の餘情ならん。

〔一〕『花の故事』に「寐過して」
〔二〕同「などゝ云べきもこの句の餘情ならむか」

罌子咲て情に見ゆる宿なれや　枳風

はげたる眉といへば（一）老長たる人のおとろへて賤の屋杯に、ひそかに住る躰也。罌子は哀なるものにて、上ッ方の庭には稀（二）なる物を。よ（三）く取出して句を飾侍る。是等の句にて植物・草花のあしらひ所、句に分別有べきなり（四）。

〔一〕『花の故事』に「眉と云に」
〔二〕同「稀也」
〔三〕同「爰にさり出て」
〔四〕同「所々に分別あるべし」

葉わけの風よ矢篦切に入る　コ齋

矢篦切（一）といふ言葉先新し。前句民家（二）にして、武士の若者共、與風珍敷物かけゝど見付たる躰也。大形は物語などの躰をあしらひ（三）たる句也。或は中将なる人の鷹すへて小野に入、うき身を見付たるなどのためし成ん。されども共古事といふにはあらず。共餘情こもり侍るをいふ（四）外の意味と可ㇾ申也。

〔一〕『花の故事』に「風に」
〔二〕雨十齋本に「只武家にして」とあれど、『花の故事』による。
〔三〕『花の故事』に「やつしたる句也」
〔四〕同「餘情のこもり侍るを意味申べきか」、『落葉考』に「意味と」

かゝれとて下手の掛たる狐わな　其角

藪かげの有樣ありくと見え侍る。しかも句作風情をぬきて、只ありのまゝに云捨たる句（一）の續やう、心を付て見るべし。

〔一〕『花の故事』に「句續き心を付べし」

あられ月夜の曇る傘　文鱗

冬の夜の（一）寒さ深き躰云のべ侍る。傘に霰丸ふる音いと興あるに、（二）然も月さへ（三）くと見ゆる尤面白し。狐わなといふに、細に付侍るはわろし。

〔一〕『一葉集』に「冬の夜の感深き」
〔二〕『花の故事』に「興り」
〔三〕雨十齋本に「月もびくて尤面白し」とあれど、『花の故事』による。

石の戸樋鞍馬の坊に住（一）わびて　學白

霰は雪霜といふより、（三）少し寒風冷じく聞ゆる（二）によりて、鞍馬と云所を思ひよせたり。昔は名所の出し樣礒に須磨の浦・十市の里・吉野の里・玉川など付て（四）證歌に便て付。霰は那須の篠原・雪に不二・月に更級と付侍るを當時は句の形容によりて、名所を思ひよする尤心得ある事也。

〔一〕『落葉考』に「音すみて」
〔二〕雨十齋本に「物少」とあれど『花の故事』による。
〔三〕『花の故事』に「聞ゆる物なるに」
〔四〕同「證か寄に便りて」

我三代の刀打つ鍛冶　李下

此句（一）詠樣奇特也。鞍馬尤人々の云傳て、僧正が谷抔云る、（二）打ものに便りてある事也。石の戸樋などいふに、鍛冶近頃遠く（三）思ひめぐらしたり。淨き地、淸き水を（四）詠、銘劍を打べきとおもひより一句、感情不レ少。三代といふて猶粉（五）骨鍛冶名人と（六）いふべき爲なり。

〔一〕『花の故事』に「詠中の」
〔二〕同「など打物に便る事也」
〔三〕同「おもひ寄たる珍重也」
〔四〕同「水をふらみ名劔」
〔五〕『一葉集』に「粉骨の」
〔六〕『花の故事』に「名人と言はんためなり」

永禄は金乏しく松の風　仙化

永禄は其時代を云はんため也。鍛冶名人多貧(一)なるもの多し。仍て金乏しといへる也。前句(二)の噂のやうにて、一句しかも明らかに聞え侍る。是等よく心を付て翫味すべし。

〔一〕『花の故事』に「名人多くは貧成る物也」
〔二〕同「前句」より「しかも明らかに」につゞく。

近江の田植美濃に恥らん　朱絃

只上代の躰の句也。金乏しきといふより、昔(一)をいふ句也。昔は物毎簡略にて、金も乏しき事人々云傳へ侍る。美濃・近江は都近き所に(二)て、田植などの風流も、遠き夷とはちがふ成(三)べし。

〔一〕『一葉集』に「古代の躰也」
〔二〕『花の故事』に「近江は近き所にて」
〔三〕同「遠き田舎とはちがふべし」

とく起て聞勝にせんほとゝぎす　芳重(一)

時節を云合せたる句也。美濃・近江と二所い(二)ふにて、郭公をあらそふ心持にて、さるによ(三)(四)つて、とく起て聞勝にせんとは申侍る也。

〔一〕『花の故事』に作者名「芳里」
〔二〕同「一所を」
〔三〕『一葉集』に「あらそひなどする」
〔四〕『花の故事』に「心持有て聞勝にせんとく起てと句作れり」

船に茶の湯の浦あはれなり　其角

時鳥、水邊・川・浦などにいふ事勿論也。船中(一)にて茶の湯催したる風流奇特也。思ひがけぬ(二)所にて茶の湯出す。茶道の好士也。思ひよらぬ前句に思ひ寄たる、又俳諧の逸士也。(三)

〔一〕『花の故事』に「津」
〔二〕同「茶の湯などしたる」
〔三〕同「思ひよらぬ物を前句に」

筑紫迄人の娘を召連て　李下

此句趣向・句作・付所各其足せり。舟中に風流人の娘など盗入て、茶の湯などさせたる作意誠に新し。(一)味ふかく聞べし。裕浦が御息女をうばひ、或は飛鳥井のたなどを盗取たる心ばへ(二)おのづからつくし人の粧ひに便りて、餘情かぎりなし。

〔一〕『花の故事』に「感味すべし」

〔二〕同「心ばへもおのづから」

彌勒の堂におもひ打ふし　枳風

此句、尤やり句にて侍れども、邊土の哀をよ(一)く云捨たり。句々段々其理つまりたる時を見て、(三)一句宜しく付捨たる逸句不ㇾ勞。

〔一〕雨十齋本に「哀を云捨たり」さあれど『花の故事』によい「よく」を補ふ。

〔二〕同「一句よろし」にて終る。以下『花の故事』による。

待かひの鐘は墮たる草の中　はせを

彌勒堂といふ時は、觀音堂・釋迦堂など云様に、參詣繁昌にも聞えず。物淋しき躰を心に(二)請て、鐘の地に落て萍の中に埋れ、龍頭鐘に見えたる躰、見る心地せらる。又五文字にて一句味付たり。注釋に及ばず。(三)よく〳〵味ひ聞べし。

〔一〕『花の故事』に「心に懸て」

友呼ぶ蟾のものうきの聲　仙化

友呼蟾、ちか頃(一)珍重に侍る。草むらの躰、物すごき有様、前句に云殘したる所を能詣たり。うき聲といふにて、待便りなき戀をあしらひ(一)たり。

〔一〕『二葉集』に「珍らしく侍る」

〔二〕『花の故事』に「あひしらひたり」

雨さへぞいやしかりける鄙ぐもり　コ齋

蟾の聲といふより田舍の躰を云のべたる(一)也。雨と付る事珍しからずといへども、ひなぐもり珍し。しかも秋に云言葉にあらず。古き哥によみ侍る。惣じて句々折〳〵古哥・古詩等の言葉、所々にありといへども、しゐて名句(三)

にすがりたるにもあらず侍れば、さのみこと(三)〳〵に申さず。

〔一〕『花の故事』に「言のべたり」
〔二〕雨十齋本に「しゐて文句に」されど『花の故事』による。
〔三〕『花の故事』に「こま〳〵しく不ㇾ記」

門は魚干す磯際の寺　舉白

鄙の躰あらは也。濱寺など(一)の門前に、魚干網など打かけたる躰多し。(二)疊と云に干ㇲと附たる都て、作者の器量おもひよるべし。

〔一〕雨十齋本「濱寺などの魚干網」されど『花の故事』による。
〔二〕『花の故事』に「疊り空に干す付たる却て」、『一葉集』に「疊中に」

理不盡に物喰ふ武者等六七騎　芳重(一)

此句秀逸也。海邊、(二)軍など亂たる躰。民屋・寺中へ押込て狼藉したる有様、亂國のさま誠に(三)可ㇾ有ㇾ之、かゝる事に付ても、世の中おだやかに、安樂の心ばへ難有、思ひ合せて句を見るべし。

〔一〕『花の故事』に「芳里」
〔二〕『花の故事』に「海邊の軍亂れたる躰也」
〔三〕同「誠にかく有べし」より「世の中」につゞく。

あら野の牧の御召撰(一)に　其角

前句の勢(二)よく替りたり。野馬とりに出立たる武士の躰、尤面白し。三句のはなれ、句の替り様、句の新(三)しき事、よく眼を止むべし。

〔一〕雨十齋本に「撰しに」
〔二〕『一葉集』に「勢ひ」
〔三〕『花の故事』に「新らしきなよく〳〵」、『一葉集』に「新しみな能く」

鴫の一聲夕日を月にあらためて　文鱗

段々附(一)やう文句きびしく續きたる故に、よく云ひなし侍る(二)。かやうの所功者の心可ㇾ附義(三)也。夕日さびしき鴫の一聲と長嘯のよめるに、西行の柴の戸に入日の影を改めてとよめる月をとり合せ(四)て、一句を仕立たる也。長嘯のうたを、本哥に用ゆるにはあらず侍れども、俳諧は

童子の語をもよろしきは、借用侍れば、何にても當るを幸に、句の餘情に用る事先矩也。

〔一〕『一葉集』に「附様きびしく」
〔二〕『花の故事』に「言流し」
〔三〕『一葉集』に「付べき事也」
〔四〕雨十齋本に「さり合せ一句したる也」とあれど『花の故事』による。

紈の餡屋秋寒きなり　李下

（一）洛外の景氣、尤やり（二）句ながら、月・夕日等（三）其作を思ひはかりて見るべし。

〔一〕『花の故事』に「洛下の」
〔二〕同「やり句也」
〔三〕同「月夕日に其地思ひはかりて見ゆ」

稲妻の木の間を花の心ばせ　擧白

（一）秋といふ字を不レ捨に付侍る。巧者の働言語にのべがたし。紈あたりの道すがら森の木の間勿論也。木の間に稲妻尤面白し、眞に秋の夜の花ともいふべし。

〔一〕『花の故事』に「働き言語に」とありて其の前なし。『落葉考』・『一葉集』亦同じ。

つれなき聖野に笈をとく　枳風

此句の付やう一句又秀逸也。物（一）すさまじき闇の夜、稲妻光ひか〳〵とする時節（二）、聖、野に伏侘（三）る躰、ちか頃新し。俳諧の限是等にとゞまり侍らん。

〔一〕『花の故事』に「物すごき」
〔二〕『一葉集』に「時分」
〔三〕『花の故事』に「野に臥侘る近頃」、『一葉集』に「臥たる作近頃」

人あまた年取物をかつぎ行　楊水

此句又秀逸也。聖の宿かりかねたる夜を大晦日の夜におもひつけたる（一）、先珍重也。聖は野に（二）佗伏たるに、世にある人は年取物かつぎ行はこぶ躰、近頃分（三）骨也。前句の心を替る所、猶（四）々翫味すべし。

〔一〕『花の故事』に「おもひ付也先珍重」
〔二〕同「臥佗たるに」
〔三〕同「骨折也」
〔四〕雨十齋本に「猶止志而もてあそぶべし」とあれど文意通ぜず、『花の故事』による。

酒盛りいさむ〔一〕金山が洞　朱紘

金山は我朝の大盗也。前句よく請たり。註に不及、附やう明也。

〔一〕『花の故事』に「酒もり遊ふ」とあれど、『落葉考』に本文と同じく「酒もりいさむ」に改む。

〔二〕貴氏、芭蕉翁に請て、〔三〕當流の俳道の意味心得がたし、願は句解したまはらんやと侍れば、〔四〕則興加筆し侍る。終日の席、〔五〕はせを持病心よからず、五十韻にして筆をたつ〔六〕。

〔一〕『一葉集』に「右芭蕉翁の註也」

〔二〕『花の故事』に「當時の誹道」、『一葉集』に「當時の俳諧」

〔三〕『花の故事』に「侍りければ」

〔四〕同「即興に加筆し」

〔五〕同「はせを翁持病快からず」、『一葉集』に「翁」

〔六〕『花の故事』に「筆をたち給ふ」、『花の故事』・『落葉考』及び『一葉集』に巻末「貞享三丙寅年正月」と執筆の年月を記す。

山中三吟評語

元祿二年秋、『奥細道』の行脚に、北越を通りて加賀に入り、山中温泉に於て曾良及び北枝と三吟歌仙を試み、その意にみたざる附句を改刪しつゝ、嚴正な批評を下したもので、天保十年八月、金澤の俳人可大が北枝の筆記の傳來せるを『山中集』と題して板行した。『一葉集』その他に所見なき評語で、『初懐紙評註』と共に芭蕉の連句を理解するに重要な文獻である。

曾良餞

翁直しの一巻

馬かりて燕追行別れかな　北枝

花野に高き岩のまがりめ　曾良

「みだるゝ山」と直し給ふ。

月はるゝ角力に袴踏ぬぎて　翁

「月よしと」案事かへ給ふ。

鞘ばしりしを友のとめけり　枝

「さも」の字おもしとて「やがて」と直る。

青淵に獺の飛こむ水の音　良

「二三疋」と直し玉ひ、暫ありて、もとの「青淵」しかるべしと有し。

柴かりこかす峰のさゝ道　翁

「たどる」とも、「かよふ」とも案事給ひしが、「こかす」にきはまる。

松ふかきひだりの山は菅の寺　枝

「柴かりこかす」のうつり上五文字「霞降る」と有べしと仰られき。

役者四五人田舎わたらひ　良

「遊女」と直し。

こしはりに戀しき君が名もありて　翁

「落書に」と直し給ふ。

髪はそらねど魚くはぬなり　枝

前句に心ありて感心なりと稱し玉ふ。

蓮のいとゝるもなか〳〵罪ふかき　良

さもあるべし、曾良はかゝの處を得たりと稱し玉ふ。

四五代貧をつたへたる門　翁

「先祖の」と直し玉ふ。

宵月に祭りの上代かたくなし　枝

「有明」と直。

露まづはらふ獵の弓竹　良

秋風はものいはぬ子もなみだにて　翁

我、此句は秀一なりと申ければ、各にも劣らぬ句有と挨拶し玉ふ。

しろきたもとのつゞく葬禮　枝

花の香に奈良の都の町作り　良

「はふるき」と直し給ふ。

春をのこせる玄仍の箱　翁

長閑さやしらゝ難波の貝多し　枝

「貝づくし」と直る。

銀の小鍋にいだす芹燒　良

手枕に[おもふ事なき身なりけり　翁

手まくらに軒の玉水詠め侘　仝

てまくら移りよし。汝も案ずべしと有けるゆへ

手枕もよだれづたふてめざめぬる　枝

てまくらに竹吹わたる夕間暮　仝

手まくらにしとねのほこり打拂ひ　翁

ときはまりはべる。

うつくしかれと覗く覆面　枝

つき小袖薫うりの古風也　翁

此句に次四五句つきて、しされに小袖氣味よからずながら直しがたしとて、其儘におき玉ふ。

非藏人なるひとのきく畠　仝

我、此句は三句のわたりゆへ、向へて附玉ふにやと申ければ、うなづき玉ふ。

鳴ふたつ臺にのせてもさびしさよ　枝

はこびよろしと稱し給ふ。

あはれに作る三日月の脇　仝

かくなる句もあるべしとぞ。

初發心草のまくらに旅寢して　翁

かゝる句は、巻ごとにあるものなりと笑ひ玉ふ。

小畑もちかし伊勢の神風　仝

疱瘡は桑名日永もはやり過　枝

對などはかくありたしと稱したまふ。

ひいと雨ごいとに枇杷つはる也　仝

「雨はれくもる」と直る。

細ながき仙女の姿たをやかに　翁

我感心しければ、翁も微笑し給ふ。

あかねをしほる水のしら波　仝

仲綱が宇治の網代とうち詠め　枝

此句も、一巻のかざりなりと笑ひたまふ。

寺に使をたてる口上　仝

鐘ついてあそばん花の散かゝる　翁

「ちらばちれ」と案事侍れど風流なしさぞ。

醉狂人と彌生くれ行　仝

其人の風情をのべたるなり。されど擧句は心得あるべしとしめし玉ふ。

秋の夜評語　元祿六年評

出羽酒田の醫師淵庵不玉の懇望により、元祿六年不玉の獨吟歌仙を批評せるもので、不玉の後裔樂水軒は「此俳本は吾祖不玉叟の卷にして、はせを翁の評せるものなり。過し頃回祿の災侍りて家本うせけるを二木何がしのひめ置しを乞侍りてうつしぬ」と、江戶の雪中庵蓼太に送り越し、蓼太の門人完來が『秋の夜』と題して此の卷を板行したのである。樂水軒の文章に延享四年とあるから出板もその前後であらう。

潛淵庵　不玉

坊主子や天窓うたるゝ初霰

近年の作、心情專に用る故、句躰重ゝし。左いへば愚句躰、多くは景氣斗を用ゆ。これも愚意相應に致二感美一ゆ。

犬守り居る木の葉散也
　犬守る言葉、小坊主のさはり急になり候。唯、
　木の葉散と斗うちなぐり有べきにや。
箕を作る庇は月のさし入て
　寄所感心、一句躰疎ならず。風景俳意尤に候。
藁の丸太のさび鮎の串
　よろし
博労の泊定めぬ秌の風
　句躰幽玄、俳意寄妙に覚候。
柿の羽織の暮の稲妻
ウ
祭文の拍子にかゝる虫の聲
　拍子にかゝると、むしの聲にとりたる所、聊
　いやしきにや。
瓦落たる淺茅生の中
　寄意の風景、大感不レ斜候。
本丸のから松ひとり緑にて
　本丸となくて、瓦あしらひたき歟。
富士は世界の雪の大將
　富士は軒端に續けん道灌勇士の好る事にや。
　然る時は大將の字感。
幽なる筋より戀の發り初
　心はかよひ候て哀に侍れども、句面いさゝか
　とり寄うときにや。
小町が像のおがまるゝ哉
　珍重ゝゝ
緣とりに雀の遊ぶ朝日影
船のむしやく水の水上
三越路や乙の寺の花ざかり
　乙寺は御教へにまかせ、貴境下向之節子も立
　寄拜み候。
牢人の子が膳すゆる春
　唯事の一躰、新此一味、珍重。
夕月の朧の眉のうつくしく
小柴垣より鏡とぎ呼
　うつり所よく侍る。
二
古井戸に咲かゝりたる桐の花

感心

脚半もとらで拜む灌佛

　俳諧上達、此句にてあらはれ候。猶御工夫、老後の御樂尤に候。

懐の餅をおとしてころ〳〵と

酒通る間は一座皺面

若武者の障子を蹴込月の影

泣〳〵露にぬるゝ御輿

隱逸に水無瀬の菊の花咲て

　一句ふさからず。餘情かぎりなしとやいはん。

悟り初たる山本の雲

　夕は秋と何おもひけんとや。三句のうつり、うるさき歟。

折〳〵は三社を捻り馬藥煉

　一躰むづかしきにや。

そら彈のつくり氣違

　左も有べき事にや。

世の中は師走の末の灼おもひ

　あしらひ、くるしからず。

喰ふてありく女房の扶持

　大感、新意狂意在。

ニウ　道邊の色はこと〴〵し茶屋立て

　一句幽玄。

履をうづむる御廟淋敷

　とりのきやう神妙。

肩衣に雨とはなしに降かゝり

　一句奇特。

鮫は雲井に金の鯱

　よろし。

黑坊が帆綱をたぐる花の春

　おなじ。

音はいろ〳〵の嶋の鶯

　一巻熟覽感吟不斜候。近年武府之風雅、分々散々、適々邪路の輩も相見え候處、微軀方寸相傳て邊國鄙のかたはらより、かゝる風雅を見せしめ侍る。誠に殊勝の

事にゆ。予曾以テ䩄削之斷ツヲ筆ヲといへども、遠國の志といひ、先年行脚の情、難レ忘によりて、聊、評詞脇書加くはふるのみ也。

元祿六年春中

芭蕉庵　桃　靑

芭蕉紀行・日記集

甲子吟行

貞享二年作

此の紀行は種々の書名を以て傳へられ甚だ紛はしいが、內容は孰れも同一である。風國の『泊船集』卷之一には『芭蕉翁道の紀』とあつて、元祿十一年井筒屋庄兵衞が板元になつてゐる。明和五年月下所持の稿本により『野ざらし紀行』と題して文臺七兵衞方から出板された。芭蕉の眞蹟本は門人曾良から木曾の寶川某に傳來し、寄山といふ俳人これを摸寫し、安永九年、永嘉亭波靜の手にて『甲子吟行』の題名を以て覆刻された。眞蹟本には「凡て四十五吟句の間〳〵に薄彩色の畫あり、摸寫するに暇あらず、其所に記置ぬ」と卷末に記してある。その他『蓬萊嶋』には『野晒紀行』として收められ、蝶夢の『芭蕉翁文集』及び『一葉集』・『補珍鈔』は『甲子吟行』として採錄して居る。本文は安永板の『甲子吟行』により『泊船集』その他と對校した。

我友ばせを老人ふるさとのふるきをたづねむつゐでに、行脚の心つきて、それの秋江上の庵を出、またの年のさ月待ころに歸りぬ。見れば先頭陀のふくろをたゝく。たゝけばひとつのたま物を得たり。そも野ざらしの風は、出たつあしもとに千里のおもひをいだくや、きくひとさへそゞろ寒げ也。次に不二を見ぬ日ぞ面白きと詠じけるは、見るに猶風興まされるものをや。富士川の捨子は惻隱の心を見えける。かゝるはやき瀨を枕として、すて置けん。さすがに流よとはおもはざらまし。身にかふる物ぞなかりきみどり子はやらむかたなくかなしけれども と、むかしの人のすて心までおもひよせてあはれならずや。又さよの中山の馬上の吟、茶の烟の朝げしき、麓に夢をおひて、葉の落る時驚きけん詩人の心をうつせるや。桑名の海邊にて白魚白きの吟は、水を切て梨花となすいさぎよきに似たり。天然二寸の魚といひけんも此魚にやあらむ。ゆき〳〵て山田が原の神杉をいだき、また上もなきおもひをのべ、何事のおはしますとはしらぬ身すらもなみだ下りぬ。同じく西行谷のほとりにていも洗ふ女にことよせけるに、江口の君ならねば宿もあらぬぞ口をしき。

それより古郷に至りて、はらからの守袋より、たらちねの白髪を出して拜ませけるは、まことにあはれさは其身にせまりて、他にいはゞあさかるべし。しばらく故園にとゞまりて、大和廻りすとて、わたゆみを琵琶になぐさみ、竹四五本の嵐かなと隱家によせける。此兩句をとりわけ世人もてはやしけるとなり。しかれ共山路きてのすみれ、道ばたのむくげこそ、此吟行の秀逸なるべけれ。それよりみよしのゝよしのゝおくにわけいり、南帝の御廟にしのぶ草の生たるに、そのよの花やかなるを忍び、またとく〳〵の水にのぞみて、洗にちりもなからましを、こゝろ見にすゝぎけん。此翁年ごろ山家集をしたひて、をのづから粉骨のさも似たるをもつて、とりわき心とまりぬ。おもふに伯牙の琴の音、こゝろざし高山にあれば峨々ときこへ、こゝろざし流水にあるときは流るゝごとしとかや。我に鍾子期がみゝなしといへども、翁のとく〳〵の句をきけば、眼前岩間を傳ふしたゝりを見るがごとし。同じくふもとの坊にやどりて坊が妻に砧をこのみけん。むかし潯陽の江のほとりにて樂天をなかしむるは、あき人の妻のしらべならずや。坊が妻の砧は、いかに打て翁をなぐさめしぞや。ともにきかまほしけれ。それは江のほとり、これはふもとの坊、地をかふるとも又しからん。いづれの浦にてか笠着てぞうりはきながらの歳暮のことぐさ、これなん皆人うきよの旅なることをしりがほにしてしらざるを諷したるにや。洛陽に至り三井氏秋風子の梅林をたづね、きのふや鶴をぬすまれしと、西湖にすむ人の鶴を子とし梅を妻とせしことをおもひよせしこそ、すみれむくげの句のしもにたゝんことかたかるべし。美濃や尾張や大津のやから崎の松・ふし見の桃、狂句こがらしの竹齋よく疏うつて人のこゝろをまなばしむ。こと葉芝蘭とかうばしく、やまぶきと淸し。靜かなるおもひ、ふきは秋しへの花に似たり。その牡丹ならざるは、隱子の句なれば也。風のばせを、霜の荷葉、やぶれに近し。しばらくもあとにとゞまるものゝ、形見草にもよしなし草にも、ならばなるべきのみのみにして書ぬ。

かつしかの隱子

素　堂　印印

『泊船集』に「後へに處々酬和の句、素堂の跋あり、今略レ之」とある。此の序文は『甲子吟行』より採つたのである。

(二)千里に旅立て路粮をつゝまず、三更月下無何に入と云けむ、むかしの人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月江上の破屋をいづる程、風の聲そゞろ寒げ也。

野ざらしを心に風のしむ身哉

秋十とせ却て江戸を指古郷

本文さし繪を省略し、「城森墨隠 小家兩類十四五軒 川」とあり。

關こゆる日は雨降て、山皆雲にかくれたり。(三)

霧しぐれ富士をみぬ日ぞ面白き

何某ちりと云けるは、此たびみちのたすけとなりて、萬いたはり心を盡し侍る。常に莫逆の交ふかく、朋友信有哉此人。

深川や芭蕉を富士に預行　ちり

本文に「墨隠富士 山六ツ 間々ニ薄墨ニテ松」

富士川のほとりを行に、三ツ計なる捨子の哀氣に泣有。この川の早瀬にかけて、うき世の波をしのぐにたへず、露計の命待まと捨置けむ、小萩がもとの(四)秋の風、こよひやちるらん、あすやしほれんと、袂より喰物なげてとをるに

猿を聞人捨子に秋の風いかに

いかにぞや、汝(五)ちゝに悪まれたる歟、母にうとまれたるか。ちゝは汝を悪にあらじ、母は汝をうとむにあらじ、唯これ天にして汝が性のつたなきをなけ。

本文に「遠山四ツ 河原 川 川向ニ旅人鑓ヲ持 川手前ニ捨子背物有」

大井川越る日は終日雨降ければ、

秋の日の雨(七)江戸に指おらん大井川　ちり

(八)馬上吟

道のべの木槿は馬にくはれけり

本文に「遠山堂山山坂 河原墨隠 流川川ノ内ニ小キ洲墨クマ」

廿日餘の月かすかに見えて、山の根際いとくらきに、馬上に鞭をたれて數里いまだ鷄鳴ならず、杜牧が早行の殘夢、小夜の中山に至りて忽驚。

馬に寢て殘夢月遠し茶のけぶり

松葉屋風瀑が伊勢に有けるを尋音信て、十日計足をとゞむ。(九)腰間に(一〇)寸鐵をおびず、襟に一嚢をかけて手に十八の

珠を携ふ。僧に似て塵有、俗にゝて髪なし。我僧にあらずといへども浮屠の属にたぐへて、神前に入事をゆるさず。暮て外宮に詣侍りけるに、一ノ華表の陰ほのくらく、御燈(一一)處〻に見えて、また上もなき峰の松風、身にしむ計(一二)ふかき心を起して、

みそか月なし千とせの杉を抱あらし

西行谷の麓に流あり。をんなどもの芋あらふを見るに、

芋洗ふ女西行ならば哥よまむ

其日の(一三)かへさ、ある茶店に立寄けるに、てふと云けるをんな、あが名に發句せよと云て、白ききぬ出しけるに書付侍る。

蘭の香やてふの翅にたき物す

閑人の茅舍をとひて、

蔦植て竹四五本のあらし哉

本文に「宮宮　鳥居　流ニ橋」

長月の初古郷に歸りて、北堂の萱草も霜枯果て今は跡だになし。何事も昔に替りて、はらからの鬢白く眉皺寄て只命有てとのみ云て言葉はなきに、このかみの守袋をほどきて、母の白髪おがめよ。(一四)浦島の子が玉手箱、汝がまゆもやゝ老たりとしばらくなきて、

眉

手にとらば消んなみだぞあつき秋の霜(一五)

本文に「林家 畑 一家菽 林 家」

大和の國に行脚して葛下の郡竹の内と云處(一六)は、(一七)彼ちりが舊里なれば日ごろとゞまりて足を休む。(一八)

わた弓や琵琶になぐさむ竹のおく

二上山當麻寺に詣で、庭上の松をみるに、凡千とせもへたるならむ、大イサ牛をかくす共云べけむ。かれ非常といへども佛縁にひかれて、斧斤の罪をまぬかれたるぞ幸にしてたつとし。

僧朝顏幾死かへる法の松

本文に「家二ツ 林松 家二ツ 林」

獨よし野ゝおくにたどりけるに、(一九)まことに山ふかく白雲峰に重り、煙雨谷を埋ンで、山賤の家處〻にちいさく、西に木を伐音、東にひゞき、院〻の鐘の聲は心の底にこたふ。むかしよりこの山に入て世を忘たる人のおほくは詩にのがれ哥にかくる。いでや唐土の廬山といはむもま

たむべならずや。ある坊に一夜をかりて、

　礁打て我にきかせよや坊が妻

　　本文に「紅葉宮山鳥居　紅葉　流川」

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二丁計わけ入ほど、柴人のかよふ道のみわづかに有て、さかしき谷をへだてたるいとたふとし。彼とく〳〵の清水は昔にかはらずとみえて、今もとく〳〵と雫落ける。

　露とく〳〵心みに浮世すゝがばや

若これ扶桑に伯夷あらば必口をすゝがん。もし是許由（二〇）に告ば耳をあらはむ。山を昇り坂を下るに秋の日既斜になれば名ある所〳〵み殘して、先、後醍醐帝の御廟を拜む。

　御廟年（二一）經て忍は何をしのぶ草

　　本文に「塚松　山家四ツ　小家三ツ」

やまとより山城を經て、近江路に入て美濃に至る。います山中を過て、いにしへ常盤の塚有。伊勢の守武が云ける　よし朝殿に似たる秋風　とはいづれの所か似たりけん。我も又、

　義朝の心に似たり秋の風

　　不破

　秋風や藪も畠も不破の關

大垣に泊りける夜は、木因が家をあるじとす。武藏野を出る時、野ざらしを心におもひて旅立ければ、

　しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮

　　本文に「城森　小家四ツ小家四ツ　小家四ツ流川　小家三ツ　小家三ツ
　　何々皆藁クマ也」

　桑名本當寺にて

　冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす

草の枕に寢あきて、まだほのくらきうちに濱のかたに出て

　明ぼのやしら魚しろきこと一寸

　　本文に「旭日　海邊」

　熱田に詣

社頭大イニ破れ、築地はたふれて草村にかへる。かしこに繩をはりて小社の跡をしるし、爰に石をすえて其神と名のる。よもぎ・しのぶこゝろのまゝに生たるぞ、中〳〵にめでたきよりも心とゞまりける。

しのぶさへ枯て餅かふやどり哉

本文に「宮森　鳥居森」

名護屋に入、道の程風吟ス。

狂句木枯の身は竹齋に似たる哉

草枕犬も時雨るゝかよるのこゑ

雪見にありきて、

市人よ此笠うらふ雪の傘

旅人を見る。

馬をさへながむる雪の朝哉

海邊に日暮して、

海くれて鴨のこゑほのかに白し

本文に「遠城　小松原雪」

爰に草鞋をとき、かしこに杖を捨て、旅寢ながらに年の暮ければ、

年暮ぬ笠きて草鞋はきながら

といひ〳〵も、山家に年を越て、

誰が聟ぞ齒朶に餅おふうしの年

本文に「雪山　家二ツ　牛などひき行所」

奈良に出る道のほど、

春なれや名もなき山の(二二)薄霞

二月堂に籠りて、

水とりや氷の僧の沓の音

本文に「遠山　林　堂」

京にのぼりて、三井秋風が鳴瀧の山家をとふ。

梅林

梅白し昨日ふや鶴を盜れし

本文に「山家梅　門　家二ツ」

樫の木の花にかまはぬ姿かな

本文に「塔」

伏見西岸寺任口上人に逢て、

我がきぬにふしみの桃の雫せよ

大津に(二三)至る道、山路を(二四)こえて、

山路來て何やらゆかしすみれ草

本文に「山ニ松　山の裾ニすみれ」

湖水の眺望

辛崎の松は花より朧にて

本文に「一ッ松　遠山　宮鳥居　村家八ッ　海邊砂原之景也」

晝の休らひとて、旅店に腰を懸て、

つゝじいけて其陰に干鱈さく女

吟行

菜ばたけに花見貝なる雀哉

此の二句前書きとも『甲子吟行』になし、『泊船集』によりて補ふ。

水口にて二十年を經て故人に逢ふ。

命二ッの中に生たる櫻哉

伊豆の國蛭が小嶋の桑門(二五)、これも去年の秋より行脚(二六)しけるに、我が名を聞て草の枕の道づれにもと、尾張の國まで跡をしたひ來りければ、

いざともに穗麥喰はん草枕

本文に「墨クマ　山五ツ　松　山の間馬をひき行所」

此僧予に告ていはく、圓覺寺の大顚和尚今年睦月の初、迁化し給ふよし。まことや夢の心地せらるゝに、先道より其角が許へ申遣しける。

梅こひて卯花拝むなみだ哉

杜國におくる

白けしにはねもぐ蝶の形見哉

二たび桐葉子がもとに有て、今や東に下らんとするに、

牡丹蘂ふかく分出る蜂の名殘哉

本文に「小家六ツ　木く　柳一本」

甲斐の山中に立よりて、

行駒の麥に慰むやどり哉

卯月の末、庵に旅のつかれをはらすほどに、

夏衣いまだ虱をとりつくさず

本文に「山塔　宮林　宮山門　流川　橋」

甲子吟行異同表

【一】「野ざらし紀行」に「千里に」より「寒げ也」までなし。

【二】『泊船集』に「無何入」とありて「に」なし。

【三】同「かくれけり」

【四】『野ざらし紀行』に「小萩が本の」より「しほれんさ」につゞく。

〔五〕 同「汝は一」
〔六〕 同「つたなきなり」
〔七〕 同「秋の日の江戸に」
〔八〕 『泊船集』に「眼前」
〔九〕 同「足をさゝむ」より「暮て外宮」につゞき、「みそか月なし」の句の次に「腰間に」の一項を記す。
〔一〇〕 『野ざらし紀行』に「鍼をおひす」
〔一一〕 同「御燈ほのかに」
〔一二〕 同「古きこゝろを」
〔一三〕 同「歸ろさ」
〔一四〕 同「おがめや」
〔一五〕 同「消ん涙ぞ秋の霜」
〔一六〕 『甲子吟行』に「云處にし」二字墨消し「處は」に直しあり。
〔一七〕 『泊船集』に「れいのちりが」
〔一八〕 同「足を休む藪よりおくに家有」
〔一九〕 『甲子吟行』に「たさりて」墨消して「けるに」と直す。
〔二〇〕 『甲子吟行』及び『泊船集』に「杵由」に誤る。
〔二一〕 『泊船集』に「御廟年を」
〔二二〕 同「朝霞」
〔二三〕 同「大津に出る」
〔二四〕 『甲子吟行』に「こへて」を墨消して「こえて」と直す。
〔二五〕 同「蛭が小嶋の僧」を墨消して「桑門」と直す。
〔二六〕 同「行脚して」を墨消して「しけるに」とす。

『甲子吟行』の板本奥附左の如し。

安永九庚子年
東叡山下竹町　星運堂
書肆　花屋久治郎

鹿嶋詣

貞享四年作

芭蕉の眞蹟の一は常陸潮來の本間家に、一は杉風の鯉屋に所藏されて居た。寶暦二年八月江戸の松籟庵秋瓜は、本間家に懇望して其の眞蹟のまゝ摸刻し『鹿嶋詣』と題して出板した。寛政二年秋、採茶庵梅人は杉風の遺物を繼承した中の眞蹟を石摺とし、『鹿嶋紀行』の題名で板行した。文化十年潮來の本間家五代の自準は、さきに秋瓜の出板したものとは別に家藏の眞蹟を再び摸刻し、同じく『鹿嶋詣』の外題を附して板行した。本文は右三本の中の寶暦板により他の二書を以て對照校合した。

らくのていしつ、すまのうらの月みにゆきて、まつかげや月は三五夜中なごむ　といひけむ、狂夫のむかしもなつかしきまゝに、このあき、かしまの山の月みむとおもひたつことあり。ともなふ人ふたり、浪客の士獨、ひとりは水雲のそう、そうは、からすのごとくなる墨のころもに三衣の袋をえりに打かけ、（一）出山の尊像をづしにあがめ入テ、うしろに背負、杖杖ひきならして無門の關もさはるものなく、あめつちに獨歩していでぬ。いま獨はそうにもあらず、ぞくにもあらず、鳥鼠の間に名をかうぶりのとりなきしまにもわたりぬべく、門よりふねに乘て、行徳（二）といふところにいたる。舟をあがればむまにものらず、ほそはぎのちからをためさんと、かちよりぞゆく。甲斐のくにより、あるひとの得させたるひの木もてつくれるかさを、をの〳〵いたゞきよそひて、やはたといふさとをすぐれば、かまかいのはらといふひろき野有。秦甸の一千里とかや。めもはるかに見わたさるゝ。つくばやまむかふにたかく、二峰ならびたてり。かのもろこしに双劒のみねありときこへしは、ろさんの一隅なり。

雪は申さず先（三）紫のつくば哉

とながめしはわが門人嵐雪が句なり。すべてこのやまはやまとたけのみことのことばを傳て、連哥するひとのは

じめにも名づけたり。わかなくばあるべからず、句なくばすぐべからず。まことに愛すべきやまのすがたなりけらし。はぎはにしきを地にしけらんやうにて、ためなか(三)の長びつにおり入て、みやこのつとにもたせたるも風流にくからず、きちかう・をみなへし・かるかや・おばな・みだれあひて、さおしかのつまこひわたる、いとあはれなり。野ゝ駒ところ得がほにむれありく、またあはれなり。日すでにくれかゝるほどに、とねがはのほとり、ふさといふところにつく。このかはにてさけのあじろといふものをたくみて、武江のいちにひさぐものあり。よひのほどはその漁家に入てやすらふ。よるのやどなまくさし。月くまなくはれけるまゝに、夜舟さしくだしてかしまにいたる。晝よりあめしきりにふりて、月見るべくもあらず。(五)ふもとに根本寺のさきの和尚いまはよをのがれて、このところにおはしけるといふをきゝて、たづね入てふしぬ。すこぶる人をして深省をはつせしむとぎんじけむ。しばらく清淨(六)のこゝろをうるにゝたり。あかつきの空いさゝかはれ間ありけるを和尚おこし驚し侍れば、ひと〳〵おきいでぬ。月の光・あめのおと、たゞあはれなるけしきのみむねにみちて、いふべきこと(七)のはもなし。はる〳〵と月見にきたるかひなきこそ本意なきわざなれ。かの何がしの女すら、ほとゝぎすのうたえよまでかへりわづらひしも、我がためにはよき荷擔の人ならむかし。

おり〳〵にかはらぬ空の月かげもちゞ　和尚
のながめはくものまに〳〵

月はやしこずゑはあめを持ながら　桃青
てらにねてまこと顔なる月見哉　同
あめにねて竹起かへる月みかな　ソラ
つきさびし堂の軒端の雨雫　宗波

神前

この松のみばへせし代や神の秋　桃青
ぬくはゞや石のおましの苔の露　宗波
ひざおるやかしこまり啼鹿のこゑ　ソラ

田家

かりかけしたづらのつるやさとの秋　桃青
よたかりに我やとはれむ里の月　宗波

賤のこ(子)やいね摺かけて月をみる　桃青

い(芋)ものはや月待さとの焼はたけ　〻

〔八〕野

もゝひきや一花摺のはぎ衣　ソラ

〔九〕はなの秋草に喰あく野馬哉　〻

はぎはらやひとよはやどせ山の犬　桃青

歸路自準に宿す

塒せよわらほす宿の友すゞめ　主人〔一〇〕

あきをこめたるくねの指杉　客〔一一〕

月みむとし(汐)ほひき登るふね(舟)とめて　ソラ

貞享丁卯仲秋末五日〔一二〕

〔一〕寛政板に「出山の尊像なつしにおかめ入テうしろに背負」の一章なし。

〔二〕同「といふさころ」の六字を脱す。

〔三〕同「雪は申さず山は」

〔四〕同「ためなかさや覽の」

〔五〕同「このふもさ」

〔六〕同「の」なし、「清淨こゝろを」

〔七〕同「いふべきこさはも」

〔八〕同、此の二句「田家」の四句の前にあり。

〔九〕同「はなの秋」の曾良の句を脱す。

〔一〇〕文化板に「松江」寛政板に「あるし」

〔一一〕文化板に「桃青」寛政板に「かく」

〔一二〕寛政板に「末五日」なし。

笈の小文

元祿元年作

砂石子の序に「門葉多しといへども唯乙州にのみ授見せしむ」とある『笈の小文』中の紀行で、乙州は寶永六年京都の井筒屋に托して出板した。支考の『本朝文鑑』に收むる「庚午紀行」は大體同一の內容であるが省略された個所が多い。『蓬萊嶋』の「大和紀行」はそれから再錄したのである。蝶夢の『芭蕉翁文集』には「卯辰紀行」として掲げ、『一葉集』・『袖珍鈔』亦「卯辰紀行」と稱してゐる。本文は寶永板の『笈の小文』によつた。諧仙堂藏板の再刷本もある。

笈之小文

風羅坊芭蕉

百骸九竅の中に物有、かりに名付て風羅坊といふ。誠にうすものゝかぜに破れやすからん事をいふにやあら

む。かれ狂句を好こと久し。終に生涯のはかりごとゝなす。或時は倦て放擲せん事をおもひ、ある時はすゝむで人にかたむ事をほこり、是非胸中にたゝかふて、是が爲に身安からず。しばらく身を立むことをねがへども、これが爲にさへられ、暫ク學で愚を曉ン事をおもへども、是が爲に破られ、つゐに無能無藝にして只此一筋に繋る。西行の和哥における、宗祇の連哥における、雪舟の繪における、利休が茶における、其貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類ス。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化にかへれとなり。

神無月の初空、定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、

旅人と我名よばれん初しぐれ

又山茶花を宿〳〵にして

岩城の住、長太郎と云もの、此脇を付て其角亭におゐて

關送りせんともてなす。

　時は冬よし野をこめん旅のつと

此句は露沾公より下し給はらせ侍りけるを、はなむけのはじめとして舊友・親疎・門人等、あるは詩哥文章をもて訪ひ、或は草鞋の料を包で志を見す。かの三月の糧を集に力を入ず。紙布・綿小などいふもの、帽子・したうづやうのもの、心〳〵に送りつどひて、霜雪の寒苦をいとふに心なし。あるは小船をうかべ、別墅にまうけし、草庵に酒肴携來りて行衛を祝し、名殘をおしみなどするこそ、ゆへある人の首途するにも似たりと、いと物めかしく覺えられけれ。

抑、道の日記といふものは紀氏・長明・阿佛の尼の文をふるひ、情を盡してより餘は皆俤似かよひて、其糟粕を改る事あたはず、まして淺智短才の筆に及べくもあらず。其日は雨降晝より晴て、そこに松有、かしこに何と云川流れたりなどいふ事、たれ〳〵もいふべく覺侍れども、黄哥・蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ。されども其所〳〵の風景心に殘り、山館・野亭のくるしき愁も、且ははなしの種となり、風雲の便りともおもひなして、わすれぬ所〳〵跡や先やと書集侍るぞ、猶醉る者の猛語にひとしく、いねる人の譫言するたぐひに見なして、人又亡聽せよ。

　　鳴海にとまりて

　星崎の闇を見よとや啼千鳥

飛鳥井雅章公の此宿にとまらせ給ひて、都も遠くなるみがたはるけき海を中にへだてゝと詠じ給ひけるを自かゝせたまひて、たまはりけるよしをかたるに、

　京まではまだ半空や雪の雲

三川の國保美といふ處に、杜國がしのびて有けるをとぶらはむと、まづ越人に消息して、鳴海より跡ざまに二十五里尋かへりて、其夜吉田に泊る。

　寒けれど二人寐る夜ぞ頼もしき

あまつ縄手、田の中に細道ありて、海より吹上る風いと寒き所也。

　冬の日や馬上に氷る影法師

保美村より伊良古崎へ壹里斗も有べし。三河の國の地つ

どきにて、伊勢とは海へだてたる所なれども、いかなる故にか、万葉集には伊勢の名所の内に撰入られたり。此洲崎にて碁石を拾ふ。世にいらご白といふとかや。骨山と云は鷹を打處なり。南の海のはてにて、鷹のはじめて渡る所といへり。いらこ鷹など哥にもよめりけりとおもへば、猶あはれなる折ふし、

鷹一ッ見付てうれしいらこ崎

熱田御修覆

磨なをす鏡も清し雪の花

蓬左の人々にむかひとられて、しばらく休息する程、

箱根こす人も有らし今朝の雪

或有人の會

ためつけて雪見にまかるかみこ哉

いざ行む雪見にころぶ所まで

ある人興行

香を探る梅に藏見る軒端哉

此間美濃大垣・岐阜のすきものとぶらひ來りて、哥仙、あるは一折など度々に及。

師走十日餘、名ごやを出て舊里に入んとす。

旅寐してみしやうき世の煤はらひ

桑名よりくはで來ぬればと云、日永の里より馬かりて杖つき坂上るほど、荷鞍うちかへりて馬より落ぬ。

歩行ならば杖つき坂を落馬哉

と物うさのあまり云出侍れ共、終に季のことばいらず。

舊里や臍の緒に泣としの暮

宵のとし空の名殘おしまむと酒のみ夜ふかして、元日寐わすれたれば

二日にもぬかりはせじな花の春

初春

春立てまだ九日の野山哉

枯芝ややゝかげろふの一二寸

伊賀の國阿波の庄といふ所に俊乘上人の舊跡有。護峰山新大佛寺とかや云名ばかりは、千歳の形見となりて、伽藍は破れて礎を殘し、坊舎は絶て田畑と名の替り、丈六の尊像は苔の緑に埋て、御ぐしのみ現前とおがまれさせ給ふに、聖人の御影はいまだ全おはしまし侍るぞ、其代

の名残うたがふ所なく泪こぼるゝ計也。石の蓮臺・獅子の座などは蓬・葎の上に堆く、双林の枯たる跡もまのあたりにこそ覺へられけれ。

丈六にかげろふ高し石の上

(二)さまぐ〵の事おもひ出す櫻哉

伊勢山田

何の木の花とはしらず匂哉

裸にはまだ衣更着の嵐哉

菩提山

此山のかなしさ告よ野老堀

龍尚舍

物の名を先とふ芦のわか葉哉

網代民部雪堂に會

梅の木に猶やどり木や梅の花

草庵會

いも植て門は葎のわか葉哉

神垣のうちに梅一木もなし。いかに故有事にやと神司などに尋侍れば、只何とはなしをのづから、梅一もともなくて、子良の舘の後に、一もと侍るよしをかたりつたふ。

御子良子の一もとゆかし梅の花

神垣やおもひもかけずねはんぞう

彌生半過る程、そゞろにうき立心の花の我を道引枝折となりて、よしのゝ花におもひ立んとするに、かのいらこ崎にてちぎり置し人のいせにて出むかひ、ともに旅寐のあはれをも見、且は我爲に童子となりて、道の便りにもならんと、自万菊丸と名をいふ。まことにわらべらしき名のさま、いと興有。いでや門出のたはぶれ事せんと笠のうちに落書ス。

乾坤無住同行二人

よし野にて櫻見せふぞ檜の木笠

よし野にて我も見せふぞ檜の木笠　　万菊丸

旅の具多きは道ざはりなりと物皆拂捨たれども、夜の料にとかみこ壹ツ、合羽やうの物・硯・筆・かみ・藥等、晝笥なんど物に包て、後に背負たれば、いとゞすねよはく力なき身の跡ざまにひかふるやうにて、道猶すゝまず、

たゞ物うき事のみ多し。

草臥て宿かる比や藤の花

初瀬

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

足駄はく僧も見えたり花の雨　万菊

葛城山

猶みたし花に明行神の顔

三輪　多武峰　臍峠多武峰ヨリ竜門へ越道也

雲雀より空にやすらふ峠哉

瀧門

龍門の花や上戸の土産にせん

酒のみに語らんかゝる瀧の花

西河

ほろ／＼と山吹ちるか瀧の音

蜻蛉が瀧

布留の瀧は布留宮より二十五丁山の奥也。

津國幾田の川上に有（三）布引の瀧　大和箕面の瀧　勝尾寺へ越る道に有。

櫻

櫻がりきとくや日ゝに五里六里

日は花に暮てさびしやあすならふ

扇にて酒くむかげやちる櫻

苔清水

春雨のこしたにつたふ清水哉

よしのゝ花に三日とゞまりて、曙・黄昏のけしきにむかひ、有明の月の哀なるさまなど、心にせまり胸にみちて、あるは攝政公のながめにうばゝれ、西行の技折にまよひ、かの貞室が是は／＼と打なぐりたるに、われいはん言葉もなくて、いたづらに口をとぢたるいと口をし。おもひ立たる風流いかめしく侍れども、爰に至りて無興の事なり。

高野

ちゝはゝのしきりにこひし雉の聲

ちる花にたぶさはづかし奥の院　万菊

和哥

行春にわかの浦にて追付たり

紀三井寺

蹄はやぶれて西行にひとしく、天龍の渡しをおもひ、馬をかる時はいきまきし聖の事心にうかぶ。山野・海濱の美景に造化の功を見、あるは無依の道者の跡をしたひ、風情の人の實をうかがふ。猶、栖をさりて器物のねがひなし。空手なれば途中の愁もなし。寛歩駕にかへ、晩食肉よりも甘し。とまるべき道にかぎりなく、立べき朝に時なし。只一日のねがひ二ツのみ。こよひ能宿からん、草鞋のわが足によろしきを求んと斗は、いさゝかのおもひなり。時〻氣を轉じ、日〻に情をあらたむ。もしわづかに風雅ある人に出合たる悦かぎりなし。日比は古めかしく、かたくなゝりと悪み捨たる程の人も、邊土の道づれにかたりあひ、はにふ・むぐらのうちにて見出したるなど、瓦石のうちに玉を拾ひ、泥中に金を得たる心地して、物にも書付、人にもかたらんとおもふぞ又是旅のひとつなりかし。

衣更

一ツぬひで後に負ぬ衣がへ

吉野出て布子賣たし衣がへ　万菊

灌佛の日は奈良にて爰かしこ詣侍るに、鹿の子を産を見て、此日におゐておかしければ、

灌佛の日に生れあふ鹿の子哉

招提寺鑑眞和尚來朝の時、船中七十餘度の難をしのぎたまひ、御目のうち塩風吹入て、終に御目盲させ給ふ尊像を拜して、

若葉して御めの雫ぬぐはゞや

舊友に奈良にてわかる。

鹿の角先一節のわかれかな

大坂にてある人のもとにて、

杜若語るも旅のひとつ哉

須磨

月はあれど留主のやう也須磨の夏

月見ても物たらはずや須磨の夏

卯月中比の空も朧に殘りて、はかなきみじか夜の月もいとゞ艶なるに、山はわか葉にくろみかゝりて、ほとゝぎす鳴出づべきしのゝめも、海のかたよりしらみそめたるに、上野とおぼしき所は麥の穂浪あからみあひて、漁人

の軒ちかき芥子の花のたえ〴〵に見渡さる。

　海士の顔先見らるゝやけしの花

東須磨・西須磨・濱須磨と三所にわかれて、あながちに何わざするとも見えず。藻塩たれつゝなど哥にもきこへ侍るも、いまはかゝるわざするなども見えず。きすごといふうをゝ網して、眞砂の上にほしちらしけるを、からすの飛來りてつかみ去ル、是をにくみて弓をもてをとすぞ海士のわざとも見えず。若、古戰場の名殘をとゞめてかゝる事をなすにやといとゞ罪ふかく、猶むかしの戀しきまゝに、てつかひが峰にのぼらんとする、導きする子のくるしがりて、とかくいひまぎらはすをさま〴〵にすかして、麓の茶店にて物くらはすべきなど云て、わりなき躰に見えたり。かれは十六と云けん、里の童子よりは四ツばかりも、をと〴〵なるべきを數百丈の先達として、羊腸險岨の岩根をはひのぼれば、すべり落ぬべき事あまたゝびなりけるを、つゝじ根ざゝにとりつき、息をきらし、汗をひたして、漸雲門に入こそ心もとなき導師のちからなりけらし。

須磨のあまの矢先に鳴か郭公

ほとゝぎす消行方や島一ツ

須磨寺やふかぬ笛きく木下やみ

　明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

かゝる所の穐なりけりとかや。此浦の實は秋をむねとするなるべし。かなしさ、さびしさ、いはむかたなく、秋なりせばいさゝか心のはしをもいひ出べき物をと思ふぞ、我心匠の拙なきをしらぬに似たり。淡路嶋手にとるやうに見えて、すま・あかしの海左右にわかる。呉楚東南の詠もかゝる所にや。物しれる人の見侍らば、さま〴〵の境にもおもひなぞらふるべし。又後の方に山を隔てゝ、田井の畑といふ所、松風村雨ふるさとゝいへり。尾上つゞき丹波路へかよふ道あり。鉢伏のぞき、逆落などおそろしき名のみ殘て、鐘懸松より見下に、一ノ谷内裏やしきめの下に見ゆ。其代のみだれ其時のさはぎ、さながら心にうかび俤につどひて、二位のあま君、皇子を抱奉り、女院の御裳に御足もたれ、船やかたにまろび入らせ給ふ

御行さま、内侍・局・女嬬・曹子のたぐひ、さま〴〵の御調度もてあつかひ、琵琶・琴なんど、しとね・ふとんにくるみて船中に投入、供御はこぼれて、うろくづの餌となり、櫛笥はみだれてあまの捨草となりつゝ、千歳のかなしび此浦にとゞまり、素波の音にさへ愁多く侍るぞや。(五)

〔一〕『芭蕉翁文集』所引の『卯辰紀行』に「さま〴〵」の句の詞書に「故主蟬吟公の庭にて」とあれど、『笈の小文』になし。

〔二〕同「布引の瀧　津の國幾田の川上にあり」とつゞけて書きあり。

〔三〕『笈の小文』に「攝孝公」とありて『庚午紀行』によれば「攝章公」なる如けれど『卯辰紀行』の「攝政公」とあるによる。

〔四〕『笈の小文』に「造化の功」とあれど『卯辰紀行』に「造化の工」とあり、仍って「巧」にあらためたり。

〔五〕『笈の小文』再刷本に「侍るや」とありて「ぞ」を脱す。

庚午紀行（本朝文鑑）

『笈の小文』の本文とは諸所に異同があり、殊に省略されたところが多い。支考の『本朝文鑑』第九「日記ノ類」の中に載って居るので、或は原本の抄錄でないかとも思はれる。參考の爲めこゝに附載する。

風羅坊

百骸九竅の中に物あり、かりになづけて風羅坊といふ。誠にうすものゝ風に破れやすき、榮辱のさかひないふにやあらん。彼は狂句をこのめる事ひさし。終に生涯のはかり事となして、ある時は倦んで放擲せむ事を思ひ、ある時はすゝむで人にかたん事を思ふ。その是非や胸中にたゝかひて、是が爲に身やすからず。しばらく身を立ん事をねがへども、是が爲にさへられ、學んでその愚をさとさん事を思へども是が爲にたゞよふ。されば西行の和哥における、宗祇の連哥における、雪舟の繪における

利休の茶における、その貫道する物は一なり。しかも風雅におけるものは、造化にしたがひて四時を友とす。見る所花にあらずといふ事なく、思ふ所月にあらずといふ事なし。その像（カタチ）の花にあらざる時は夷狄にひとしく、その心の花にあらざる時は鳥獣にも類すと。夷狄を出て鳥獣をはなれ、造化にしたがひて造化にかへれとなり。さて比は神無月のそらのけしきも、さだめなき身に風葉の行衛なき心地して、

旅人と我名よばれん初しぐれ

ある人は詩哥文章にはなむけし、ある人は草鞋の料をつゝみてかの三月の糧をあつむるに、一芥のちからをいれず。紙衣・綿小（ワタコ）などいふもの、帽子・したうづやうの物まで、心〳〵におくりつどひて、雪霜の寒苦をいとふ。あるは小船に棹さして別墅にまうけし草庵に酒を携へ来りて、行衛を祝し名殘をおしむ。さるは故ある人の首途するに似て、いと物めかしく覺え侍る。そも〳〵道ノ記といふ物は、貫之・長明など、阿佛の尼の筆をふるひ情をつくしてより、餘はみなこゝ俤に似かよひて、その糟粕をあらたむる事あたはず。まして淺智短才の筆には盡すべくもあらず。その日は雨ふり晝より晴てそこに松あり、かしこに川ありなど、誰も〳〵いふべくおぼえ侍れど、黄哥・蘇新のたぐひにあらずば、さらにいふ事なかれとぞ。されどもその所〳〵の風景はその時の心に殘り、山館・野亭のくるしさも、かつははなしの種となり、風雲のたよりとも思ひなして、忘れぬ所〳〵は書あつめ侍るに、猶よへる者の猛語にひとしく、いねる人の讝言（セン）にたぐへて、人もまた亡聽せよ。かくてむさし野の冬枯に箱根・足柄は雪もふりつゝ、さて遠江より三川をわたり、いらこ崎といふ所に杜國が幽棲をとぶらひて、ことしも美濃・尾張の間に暮なんとす。

旅ねして見しや浮世の煤はらひ

みのより十里の川ふねに乗りて、むかしも桑名よりくはでとよめる日永の里に馬かりて、杖つき坂のぼるほど、荷鞍うちかへりて馬より落ぬ。

歩行ならば杖つき坂を落馬かな

物うさのあまり、かくいひ侍れど、終に季の詞いらず。今より名所は雜の句もしからんか。それより伊賀の古里に草鞋をときて、

舊里や臍の緒に泣くとしの暮

爰にきさらぎも半過る程は、そゞろにうきたつ心の花の我をみちびく枝折となりて、芳野の花に思ひ立んとするに、かのいら

こ崎にてちぎり置し人のともに旅寐のあはれをも見つゝ、かつは我ための童子となりて道のたよりともなりなんと、みづから岩菊丸(カンキク)と名をいふ。誠にわらべらしき名のいと興あり。いでや首途のたはふれ事せんと笠のうらに狂筆す。

乾坤無住同行二人

よし野にて櫻見せふぞ檜木笠　風羅坊

芳野にてをれも見せふぞ檜木笠　岩菊丸

世にいふ發頭の格とやらん、岩菊が句法はさにやあらん。是も樂書のたはぶれなればならし。さして旅　具のおほからんは道のほどのさはりなればと、物みなはらひ捨たれど、夜の料にと紙衣ひとつ、硯・筆・藥など晝笥(ヒルゲ)やうの物もあるにまかせて、後にせおひ出たるに、いとゞすねよはく力なき身の跡ざまにひかるゝやうにて、道さらにすゝみえず、たゞ物うき事のみおほし。

くたびれて宿かる比やふじの花

葛城山

尚見たし花に明行神の顔

臍峠

雲雀よりそらにやすらふ峠かな

芳野の花には三日とゞまりて、明ぼの誰かれのけしきにむかひ、有明の月のあはれなるさまなど、心にせまり胸にみちて、あるは攝章公のながめにうばはれ、あるは西行の枝折にまよひ、かの貞室が是は〳〵となぐり捨たるに、今はたいはむ言葉もなくて、いたづらに口をとぢたるいと口おし。思ひたてる風流、かめしく侍れど、爰にいたりては無興の事なり。

高野山

ちゝはゝのしきりに戀し雉子の聲

和哥浦

行春を和哥の浦にて追付たり

それよりは和哥の浦づたひに津の國をも行過て、須磨・明石の間にたゞよふ。卯月中比の空もおぼろに、はかなきみじか夜の月もいとゞ艶なるに、山は若葉に黒みかゝりて、時鳥も啼いづべきしのゝめの色は、海のかたよりしらみ、上野とおぼしき所には麥の穂あからみあひて、漁人の軒ちかきけしの花もたえ〳〵に見わたさる。かの平川を出つくしたる人も、かゝる名所のゆかしさにやあらん。

蜑の顔先見らるゝやけしの花

されば東須磨・西須磨など濱須磨とかいひて、此さかひ三所にわかれて、あながちに何わざするとも見えず、藻汐たれつゝな

ど哥にはよめれど、今はかゝるわざするなども見えず、濱にきすごといふ魚をあみして、眞砂のうへにほしちらしけるを鴉の飛ちりてつかみさる。是をにくみて弓をもておどすぞ蜑のしわざとも覺えず。もしや古戰場の名殘をとゞめて、かゝる事をもなすにやと、いとゞつみふかく、むかしぞ思はるゝ。誠に須磨あかしのそのさかひは、はひわたるほどゝいへりける源氏のありさまも思ひやるにぞ、今はまぼろしの中に夢をかされて、人の世の榮花もはかなしや。

かたつぶり角ふりわけよ須磨あかし

更科紀行

元祿元年作

岱水の『木曾の谿』に「翁一とせ、さらしなの月、木曾路をかけて歸庵あり。うき事のみかたりもつくさぬそゞろごとゞも書捨給へるを、予が文庫に殘して今爰に出し侍る」と記して寶永元年板行された。『笈の小文』には「翁名古屋ニ滯留乃時有ニ更科紀行一幸而爰ニ次」として附錄され、寛政十一年採茶庵梅人は杉風所傳の『はせをさらしな紀行』を出板した。猶又『蓬萊嶋』・『芭蕉翁文集』『一葉集』・『袖珍鈔』ともに採錄してゐる。板本とは別に『蕉翁さらしな日記』と題する寫本あり、それには

右さらしなの紀行一軸芭蕉翁眞筆無レ紛候
尤下書に而一入おもしろく候
庚子の春二月　　木翁尚白誌□□

といふ尚白の鑑定奥書が附いてゐる。

本文は『笈の小文』所載のものによつて、その他の諸書を參照校合した。

さらしなの里おばすて山の月見ん事、しきりにすゝむる秋風〔一〕の心に吹さはぎて、ともに風雲の情をくるはすもの又ひとり越人と云。木曾路は山深く道さかしく旅寐〔二〕の力も心もとなしと、荷兮子〔三〕が奴僕をしておくらす。をの〳〵心ざし盡すといへども、驛旅〔四〕の事心得ぬさまにて共におぼつかなく、ものゝしどろに、あとさきなるも中〳〵におかしき事のみ多し。

〔一〕『蕉翁さらしな日記』に「秋風の身にしみんに」とありて墨消し。『木曾の谿』に「秋風の友風雲の」
〔二〕『木曾の谿』に「旅寐も心もとなしと」
〔三〕『はせをさらしな紀行』に「荷兮が」
〔四〕同「羈旅の」

何〳〵といふ所にて、六十斗の道心の僧、おもしろげもおかしげもあらず、たゞむつ〳〵としたるが腰たはむまで物おひ、息はせはしく足はきざむやうにあゆみ來れるを、ともなひける人のあはれがりて、をの〳〵肩にかけたるもの共、かの僧のおひねものとひとつにからみて、馬に付て我をその上にのす。高山奇峰頭〔一〕の上におほひ重りて、左り〔二〕は大河ながれ、岸下の千尋のおもひをなし、〔三〕尺地もたいらかならざれば、鞍のうへ靜かならず、只あやうき煩のみやむ時なし〔四〕。

〔一〕『はせをさらしな紀行』に「額の上に」
〔二〕『木曾の谿』に「重りて谷は」
〔三〕『はせをさらしな紀行』に「尺地平かならざれば」
〔四〕同「止時なくており立僕なのせける」

桟はし・寐覺など過て、猿がばゝ・たち峠などは四十八曲りとかや。九折重りて雲路にたどる心地せらる。歩行より行ものさへ、眼くるめき、たましゐしぼみて、足さだまらざりけるに、かのつれたる奴僕いともおそるゝけしき見えず。馬のうへにて只ねぶりにねぶりて、落ぬべき事あまたゝびなりけるをあとより見あげて、あやうき事かぎりなし。佛の御心に衆生〔一〕のうき世を見給ふもかゝる事にやと、無常迅速のいそがはしさも、我身にかへり見られて、あはの鳴戸は波風もなかりけり。夜は草の枕を求て、晝のうち思ひまうけたるけしき、むすび捨たる發句

など矢立取出て、灯の下にめをとぢ、頭たゝきてうめき伏せば、かの道心の坊、旅懐の心うくて物おもひするにやと推量し、〔三〕我をなぐさめんとす。わかき時おがみめぐりたる地、あみだのたふとき數をつくし、をのがあやしとおもひし事共はなしつゞくるぞ風情のさはりとなりて、何を云出る事もせず。とてもまぎれたる月影のかべの破れより木の間がくれにさし入て、引板の音・しかおふ聲所〳〵にきこへける。まとにかなしき秋の心、爰に盡せり。

〔一〕『はせをさらしな紀行』に「衆生憂世を」
〔二〕同「こゝろうく物おもひ」
〔三〕同「推量して。」

いでや月のあるじに酒振まはんといへば、さかづき持出たり。よのつねに一〔一〕めぐりもおほきに見えて、ふつゝかなる蒔繪をしたり。都の人はかゝるものは〔二〕風情なしとて手にもふれざりけるに、おもひもかけぬ興に入て、〔三〕清碗玉巵の心ちせらるゝも所がらなり。

〔四〕あの中に蒔繪書たし宿の月

〔五〕棧やいのちをからむつたかつら

棧や先おもひいづ馬むかへ　越人

霧晴て棧はめもふさがれず　越人

〔六〕姨捨山

〔七〕俤や姨ひとりなく月の友

〔八〕いざよひもまださらしなの郡哉

さらしなや三よさの月見雲もなし　越人

ひよろ〳〵と猶露けしやをみなへし

身にしみて大根からし秋の風

木曾のとち浮世の人のみやげ哉

送られつ別ッ果は木曾の秋

善光寺

月影や四門四宗も只一ッ

吹とばす石はあさまの野分哉

〔一〕『はせをさらしな紀行』に「一めぐり大きくて」
〔二〕同「かゝるもの風情なし」
〔三〕同「猜碗玉巵」、『木曾の谿』に「青碗玉巵」
〔四〕同、作者名「翁」・『蓬萊嶋』に此の句まで掲ぐ。
〔五〕同、「同」

［六］『芭蕉翁文集』に左の如くある。

姨捨山は八幡といふ里より一里ばかり南に、西南に横をれて冷じく高くもあらず。かど〳〵しき岩なども見えず。あはれふかき山のすがたなり。なぐさめかねしといひけんも、ことはりにしられて、そゞろ悲しきに、何故にか老たる人を捨たらんと思ふに、いとゞ涙も落そひければ、

俤や姨ひとりなく月の友

［七］『はせをさらしな紀行』に「俤や」の句なし。

［八］同、「更科」と前書ありて此の句の次に

歸庵に十三夜

木曾の痩もまだ直らぬに十三夜　翁

其年越し歳旦

元日は田毎の日こそ戀しけれ　仝

右にて紀行の文を終り「舊庵後の月見」の句稿を掲ぐ。

『芭蕉さらしな日記』に『笈の小文』所載の發句の順序と異りて、左の如く配列しあり。

さらしなや三よさの月見雲もなし

姨捨山

俤や姨ひとり泣月の友

いざよひもまたさらしなの郡哉

ひよろ〳〵とこけて露けしをみなへし

［一］よにありし人にとらせん木曾のとち

木曾のとちうき世の人のみやげ哉

身にしみて大根からし秋の風

［二］秋風や石吹颪すあさま山

吹颪［舊］あさまは石の野分哉

吹落す石を［は］、あさまの野分哉

［一］墨消し。

［二］同

奥の細道

元祿二年作

現存の『奥の細道』はその形の類似から升形本とよばれて居る。本文は素龍の筆蹟、題簽の『おくのほそ道』は芭蕉の自書である。元祿十五年素龍の跋を省いて井筒屋庄兵衛方から板行された。明和七年蝶夢は伊賀の上野で素龍の跋ある原本を發見して再び出板した。それには素龍の跋の外に去來の傳來の記が附いてゐる。寛政元年その再板が出た。板下は同一である。半紙に刷つたものも再板以後にできた。尙摺本もある。これは「此一書芭蕉翁眞蹟は武陵古き俳家の珍藏なるを風友鶴峰堂のあるじ、公務のいとま募して予に送らる」といふ櫻壽軒の跋があつて流布稀であるが、明和本そのまゝの書體といつて好い。文化十二年板の『百家交筆奥細道』・文政五年板の『繪入おくの奥道』・天保十四年板の『おくの細道』・明治十八年永機の出板した其角筆と稱する『おくのほそ道』及び註釋書として梨一の『奥細道菅菰抄』・鶯宿の『一莖頭奥之細道』などが板行された。『芭蕉翁七書』や『一葉集』・『袖珍鈔』には勿論採錄されてゐる。信州上諏訪町河西五郎氏所持の稿本『おくのほそ道』は芭蕉の眞蹟本又はそれに近いものを臨書したのであらう。本文及び挿入句の異同中に初稿本らしき俤を殘してゐるので、特に本文の傍に其の異同を七號活字を以て記して置いた。

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ（浮）、馬の口とらえて老をむかふる物は、日ゝに旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘の古巣をはらひて、やゝ年も暮、春立る霞の空に白川の關こえんとそゞろ神の物につき（憑）て心をくるはせ、道祖

神のまねきにあひて、取もの手につかず。もゝ引の破をつゞり、笠の緒付かへて、三里に灸すゆるより松島の月、先心にかゝりて、住る方は人に譲り杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞひなの家(一)

(二)河西本(面八句を書て)面八句を庵の柱に懸置、彌生も末の七日、(三)河西本(末の七日(元禄二とせにや))明ぼのゝ空朧〳〵として、月は在明にて(四)光おさまれる物から、不二の峯幽にみえて、上野・谷中の花の梢又いつかはと心ぼそし。むつまじきかぎりは、宵よりつどひて舟に乗て送る。千じゆと云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ、胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝぐ。

行春や鳥啼魚の目は泪(五)

是を矢立の初として、(六)行道なほすゝまず。人々は途中に立ならびて、後かげのみゆる迄はと見送なるべし。

(七)河西本(此たび奥羽長途の)ことし元禄二とせにや。奥羽長途の行脚、只かりそめに思ひたちて、呉天に白髪の恨を重ぬといへ共、耳にふれていまだめに見ぬさかひ、(八)若生て帰らばと定なき頼の末をかけ、其日漸早加と云宿にたどり着にけり。痩骨の肩にかゝれる物先くるしむ。只身すがらにと出立侍るを帋子一衣は(九)夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨・筆のたぐひ、あるは、さりがたき餞などしたるは、さすがに打捨がたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

室の八島に詣す。同行曾良が曰、此神は木の花さくや姫の神と申て、富士一躰也。無戸室に入て焼給ふちかひのみ中に、火々出見のみこと生れ給ひしより室の八島と申。又煙を読習し侍もこの謂也。将このしろといふ魚を禁ず。縁記の旨世に傳ふ事も侍し。

卅日日光山の梺に泊る。あるじの云けるやう、我名を佛五左衛門と云、萬正直を旨とする故に、人かくは申侍まゝ、一夜の草の枕も打解て休み給へと云。いかなる佛の濁世塵土に示現して、かゝる桑門の乞食順礼ごときの人をたすけ給ふにやと、あるじのなす事に心をとゞめて(一〇)みるに、只無智無分別にして正直偏固の者也。剛毅木訥の仁に近きたぐひ、氣稟の清質尤尊ぶべし。

卯月朔日、御山に詣拝す。往昔此御山を二荒山と書しを空海大師開基の時、日光と改給ふ。千歳未来をさとり給ふにや。今此御光一天にかゞやきて、恩澤八荒にあふ

れ、四民安堵の栖穩なり。猶憚多くて筆をさし置ぬ。

あらたうと青葉若葉の日の光

黑髮山は霞かゝりて、雪いまだ白し。

剃捨て黑髮山に衣更　曾良

(一二)曾良は河合氏にして惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の勞をたすく。このたび松しま・象潟の眺、共にせん事を悅び、且は羈旅の難をいたはらんと、旅立曉、髮を剃て墨染にさまをかえ、惣五を改て宗悟とす。仍て黑髮山の句有。衣更の二字力ありてきこゆ。廿餘丁山を登つて瀧有。岩洞の頂より飛流して百尺、千岩の碧潭に落たり。岩窟に身をひそめ(一三)入て、瀧の裏よりみれば、うらみの瀧と申傳え侍る也。

暫時は瀧に籠るや夏の初

那須の黑ばねと云所に、知人あれば、是より野越にかゝりて(一四)直道をゆかんとす。遙に一村を見かけて行に雨降日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明れば又野中を行。そこに野飼の馬あり。草刈おのこになげきよれば、野夫といへども、さすがに情しらぬには非ず。いかゞすべきや。されども此野は縱横にわかれて、うゐ〳〵敷旅人の道ふみたがえん、あやしう侍れば、此馬のとゞまる所にて馬を返し給へと、かし侍ぬ。ちいさき者ふたり馬の(一五)跡したひてはしる。獨は小姬にて名をかさねと云。聞なれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名成べし　(一六)曾良

頓て人里に至れば、あたひを鞍つぼに結付て馬を返しぬ。黑羽の館代淨坊寺何がしの方に音信る。思ひがけぬあるじの悅び、日夜語つゞけて、其弟桃翠など云が朝夕勤とぶらひ、自の家にも伴ひて、親屬の方にもまねかれ、日をふるまゝに、ひとひ郊外に逍遙して犬追物の跡を一見し、那須の篠原をわけて、玉藻の前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣。與市、扇の的を射し時、別しては我國(一七)氏神正八まんとちかひしも、此神社にて侍と聞ば、感應(一八)殊しきりに覺えらる。暮れば桃翠(一九)宅に歸る。

修驗光明寺と云有。そこにまねかれて行者堂を拜す。

夏山に足駄を拜む首途哉

當國雲岸寺のおくに佛頂和尚山居跡あり。

竪横の五尺にたらぬ草の庵

むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して岩に書付侍りと、(三〇)いつぞや聞え給ふ。其跡みんと雲岸寺に杖を曳ば、人々すゝんで共にいざなひ、若き人おほく道のほど、(三一)打さはぎておほえず、彼梺に至る。山はおくあるけしきにて、谷道遙に松杉黒く、苔したゝりて卯月の天今猶寒し。(三二)十景盡る所、橋をわたつて山門に入。さてかの跡はいづくのほどにやと、後の山によぢのぼれば、石上の小庵岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室をみるがごとし。

木啄も庵はやぶらず夏木立　(三三)河西本(くらはず)

と、とりあへぬ一句を柱に殘侍し。是より殺生石に行。館代より馬にて送らる。此口付のおのこ(三四)短册得させよと乞。やさしき事を望侍るものかなと、

野を横に馬牽むけよほとゝぎす

殺生石は温泉の出る山陰にあり。石の毒氣いまだほろびず。蜂・蝶のたぐひ、眞砂の色の見えぬほどかさなり死す。

又、清水ながるゝの柳は蘆野の里にありて、田の畔に殘(三五)る。此所の郡守戸部某の此柳みせばやなど、折々にの給ひ聞え給ふを、いづくのほどにやと思ひしを今日、此柳のかげにこそ立より侍つれ。

田一枚植て立去る柳かな

心許なき日かず重るまゝに、白川の關にかゝりて、旅心定りぬ。いかで都へと便求しも斷也。中にも此關は三關の一にして(三六)風騷の人、心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に茨の花咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裝を改し事など、清輔の筆にもとゞめ置れしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着かな　曾良

とかくして越行まゝに、あぶくま川を渡る。左に會津根高く、右に岩城・相馬・三春の庄・常陸・下野の地をさかひて山つらなる。かげ沼と云所を行に、今日は空曇て物(三七)影うつらず。すか川の驛に等窮(三八)といふものを尋て、四五日とゞめらる。先白河の關いかにこえつるやと問。(三九)長途のくるしみ身心つかれ、且は風景に魂うばゝれ、懷旧に腸を斷て、はか〴〵しう思ひめぐらさず。

風流の初やおくの田植うた

無下にこえんも、さすがにと語れば脇・第三とつゞけて三巻となしぬ。此宿の傍に大きなる栗の木陰をたのみて、世をいとふ僧有。橡ひろふ太山もかくやと閒に覺られて、ものに書付侍る其詞。

栗といふ文字は西の木と書て、西方淨土に便ありと、行基菩薩の一生杖にも、柱にも、此木を用ひ給ふとかや。

世の人の見付ぬ花や軒の栗

(三〇)等躬が宅を出て五里斗、檜皮の宿を離れて、あさか山有。(淺香)路より近し。此あたり沼多し。かつみ刈比もやゝ近うなれば、いづれの草を花かつみとは云ぞと、人々に尋侍れども更知人なし。沼を尋、人にとひ、かつみ／＼と尋ありきて日は山の端にかゝりぬ。二本松より右にきれて黒塚の岩屋一見し、福島に宿る。あくればしのぶもぢ摺の石を尋て忍ぶの里に行。遙山陰の小里に石半土に埋てあり。里の童部の來りて教ける。昔は此山の上に侍しを往來の人の麥草をあらして、此石を試み(三一)侍をにくみて、此谷につき落せば、石の面下ざまにふしたりと云。(三二)さもあるべきことにや。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

月の輪のわたしを越て、瀨の上と云宿に出づ。佐藤庄司が舊跡は左の山際一里半斗に有。飯塚の里鯖野と聞て尋／＼行に、(三三)丸山と云に尋あたる。是庄司が舊館也。梺に大手の跡など、人の教ゆるにまかせて泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を殘す。中にも二人の嫁がしるし先哀也。女なれどもかひ／＼しき名の(三四)世に聞えつる物かなと袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず。寺に入て茶を乞へば、爰に義經の太刀、辨慶が笈をとゞめて什物とす。

笈も太刀も五月にかざれ紙幟　(三五)河西本(辨慶の笈をもかざれ紙幟)

五月(三六)朔日の事也(三七)其夜飯塚(三八)に泊る。温泉(三九)河西本(出湯あれば)あれば湯に入て宿をかるに、土坐に莚を敷てあやしき貧家也。灯もなければ、ゐろり(囲爐裏)の火かげに寐所をまうけて臥す。夜に入て雷鳴、雨しきりに降て臥る上よりもり、(四〇)河西本(ふしたる上に雨もりて)蚤・蚊にせゝられて眠らず。持病さへおこりて消入斗になん。短夜の空も

やう／＼明れば又旅立ぬ。猶夜の餘波心すゝまず。馬かりて桑折の驛に出る。遙なる行末をかゝえて斯る病覺束なしといへど、羇旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路にしなん是天の命なりと、氣力聊とり直し、路縱横に踏で伊達の大木戸をこす。鐙摺・白石の城を過、笠島の郡に入ば、藤中將實方の塚は、いづくのほどならんと人にとへば、是より遙右に見ゆる山際の里をみのわ・笠島と云。道祖神の社・かたみの薄、(四一)河西本（侍り）今にありと教ゆ。此比の五月雨に道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながら眺やりて過るに、簑輪・笠島も五月雨の折にふれたりと、

　笠しまはいづこ五月のぬかり道

岩沼に宿る。

武隈の松にこそめ覺る心地はすれ。根は土際より二木にわかれて昔の姿うしなはずとしらる。先能因法師思ひ出。往昔むつのかみにて下りし人、此木を伐て名取川の橋杭にせられたる事などあればにや。松は此たび跡もなしとは詠たり。代ゝあるは伐、あるひは(四二)河西本（植次）植繼などせしと聞に、今將千歳のかたちとゝのほひて、(四三)めでたき松のけしきになん侍し。

武隈の松見せ申せ遲櫻　と擧白と云(四四)ものゝ餞別したりければ、

　櫻より松は二木を三月越

名取川を渡て仙臺に入。あやめふく日也。旅宿をもとめて四五日逗留す。こゝに畫工加右衛門と云ものあり。聊心ある者と聞て知る人になる。この者年比さだかならぬ名どころを考置侍ればとて一日案内す。宮城野の萩茂りあひて秋の氣色思ひやらるゝ。玉田・よこ野・(四五)つゝじが岡はあせび(四六)咲ころ也。日影ももらぬ(四七)松の林に入て、爰を木の下と云とぞ。昔もかく露ふかければこそ、みさぶらひみかさとはよみたれ。薬師堂・天神の御社など拜て其日はくれぬ。猶、松島・塩がまの所ゝ畫に書て送る。且、紺の染緒つけたる草鞋二足(四八)餞す。さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其實を顯す。

　あやめ艸足に結ん草鞋の緒

かの畫圖にまかせて、たどり行ばおくの細道の山際に十苻の菅有。今も年ゝ十苻の菅菰を調て、國守に獻ずと云

り。

壺碑。市川村多賀城に有。つぼの石ぶみは、高サ六尺餘、横三尺斗歟。苔を穿て文字幽也。四維國界之數里を(四九)しるす。此城神龜元年按察使鎭守府將軍大野朝臣東人之所レ里也。天平寶字六年、參議東海東山節度使同惠美朝臣朝獦修造也而十二月朔日 と有。聖武皇帝の御時に當れり。むかしよりよみ置る哥枕、おほく語傳ふといへども、山崩、川落て道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り代變じて、其跡たしかならぬ事のみを爰に至りて、疑なき千歳の紀念、今眼前に古人の心を閱す。行脚の一徳、存命の悅び、羇旅の勞をわすれて泪も落るばかり也。

それより野田の玉川・沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造(五〇)りて末松山といふ。松のあひ〳〵皆墓はらにて、はねをかはし枝をつらぬる契の末も、終はかくのごとき(五一)と悲しさも增りて、塩がまの浦に入相のかねを聞。五月雨の空、聊はれて夕月夜幽に、籬が島もほど近し。蜑の小舟こぎつれて、肴わかつ聲〳〵につなでかなしもと、よみけん、心もしられていとゞ哀也。

其夜目盲法師の琵琶をならして、奧上るりと云ものをかたる。平家にもあらず。舞にもあらず。ひなびたる調子うち上て、枕ちかう、かしがましけれど、さすかに邊土の遺風忘れざるものから殊勝に覺らる。早朝塩がまの明神に詣。國守再興せられて宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに石の階、(五二)河西本(九尋)九仭に重り、朝日あけの玉がきをかゞやかす。かゝる道の果塵土のさかひまで、神靈あらたにましますこそ、吾國の風俗なれといと貴けれ。神前に古き寶燈有。(五四)かねの戸びらの面に、文治三年和泉三郎寄進と有。五百年來の俤、(五五)今目の前にうかびて、そゞろに珍し。かれは勇義忠孝の士也。佳命今に至りて(五六)したはずといふ事なし。誠、(五七)河西本(道を勤めて佳命をおもふべし)人能道を勤義を守べし。名もまた是にしたがふと云り。日既午にちかし。船をかりて松島にわたる。其間二里餘、雄島の礒につく。

抑ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡洞庭・西湖を恥ず。東南より海を入て江の中三里、浙江の潮をたゝふ。嶋〳〵の數を盡して欹ものは天を指、ふ

すものは波に匍匐。あるは二重にかさなり三重に疊みて、左にわかれ右につらなる。負るあり、抱るあり、兒孫愛す(五八)がごとし。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹たはめて屈曲をのづから、ためたるがごとし。其氣色窅然として美人の顔を粧ふ。ちはや振神のむかし大山ずみのなせるわざにや。造化の天工いづれの人か筆をふるひ、詞を盡さむ。雄島が磯は地つゞきて海に出たる島也。雲居禪師(五九)の別室の跡、座禪石など有。將松の木陰に世をいとふ人も、稀〳〵見え侍りて落穂・松笠など、打けぶりたる草の菴閑に住なし、いかなる人とはしられずながら、先なつかしく立寄ほどに、月、海にうつりて晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求れば、窓をひらき二階を作て、風雲の中に旅寐する(六〇)こそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

予は口をとぢて眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゝ時、素堂松島の詩あり。原安適松がうらしまの和哥を贈らる。袋を解てこよひの友とす。且、杉風・濁子が發句あり。

十一日瑞岩寺に詣。當寺三十二世の昔眞壁の平四郎出家して入唐、歸朝の後開山す。(六一)其後に雲居禪師の徳化に依て、七堂甍改りて金壁莊嚴光を輝、佛土成就の大伽藍とはなれりける。彼見物聖の寺はいづくにやとしたはる。

十二日平和泉と心ざし、あねはの松・緒だえの橋など聞傳て、人跡稀に雉兎・蒭蕘の往かふ道そこともわかず。終に路ふみたがえて石の巻といふ湊に出。こがね花咲とよみて奉たる金花山、海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立つゞけたり。思ひがけず、斯る所にも來れる哉と、宿からんとすれど更に宿かす人なし。漸まどしき小家に一夜をあかして、明れば又しらぬ道(六四)まよひ行。袖のわたり・尾ぶちの牧・まのゝ萱はらなど、よそめにみて遙なる堤を行。心細き長沼にそふて、戸伊摩と云所に一宿して平泉に至る。其間廿餘里ほどゝおぼゆ。三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金雞山のみ形を殘す。先、高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下に

て大河に落入。康衡等が舊跡は衣が關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふぐとみえたり。偖も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て時のうつるまで、泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな　曾良

かねて耳驚したる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め三尊の佛を安置す。七寶散うせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱、霜雪に朽て既頽廢空虚の叢となるべきを、四面新に圍て、甍を覆て風雨を凌、暫時千歲の記念とはなれり。

(六五)河西本(五月雨や年〱降て五百たび)(螢火の晝は消つゝ柱かな)

五月雨の降のこしてや光堂

南部道遙に見やりて、岩手の里に泊る。小黑崎・みつの小島を過て、なるこの湯より尿前の關にかゝりて、出羽の國に越んとす。此路旅人稀なる所なれば、關守にあやしめられて漸として關をこす。大山をのぼつて日既暮ければ、封人の家を見かけて舍を求む。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

あるじの云(六六)、是より出羽の國に大山を隔て、道さだかならざれば、道しるべの人を頼て越べきよしを申。さらばと云て人を頼侍れば、究竟の若者、反脇指をよこたえ樫の杖を携て、我〱が先に立て行。けふこそ必あやうきめにもあふべき日なれと、辛き思ひをなして、後に付て行。あるじの云にたがはず。高山森々として一鳥聲きかず。木の下闇茂りあひて、夜る行がごとし。雲端につちふる心地して、篠の中踏分〱水をわたり岩に蹶て、肌につめたき汗を流して最上の庄に出づ。かの案内せしおのこの云やう、此みち必不用の事有。恙なうをくりまいらせて、仕合したりとよろこびてわかれぬ。跡に聞てさへ胸とゞろくのみ也。

尾花澤にて淸風と云者を尋ぬ。かれは富るものなれども志いやしからず。都にも折〱かよひて、さすがに旅の情をも知たれば、日比とゞめて長途のいたはり、さま〱にもてなし侍る。

涼しさを我宿にしてねまる也

這出よかひやが下のひきの聲

まゆはきを俤にして紅粉の花

蠶飼する人は古代のすがた哉　曾良

山形領に立石寺と云山寺あり。慈覺大師の開基にて殊清閑の地也。一見すべきよし人々のすゝむるに依て、尾花澤よりとつて返し其間七里ばかり也。日いまだ暮ず。梺の坊に宿かり置て、山上の堂にのぼる。岩に巖を重て山とし、松柏年舊、土石老て(六九)、苔滑に岩上の院々扉を閉て物の音きこえず。岸をめぐり岩を這て佛閣を拜し、佳景寂寞として心(七〇)すみ行のみおぼゆ。

閑さや岩にしみ入(七一)蟬の聲

最上川のらんと大石田と云所に日和を待。爰に古き誹諧の種こぼれて、忘れぬ花のむかしをしたひ、蘆角一聲の心をやはらげ、此道にさぐりあしゝて、新古ふた道にふみまよふといへども、道しるべする人しなければと、わりなき一卷殘しぬ。此たびの風流爰に至れり。

最上川はみちのくより出て山形を水上とす。ごてん・はやぶさなど云おそろしき難所有。板敷山の北を流て、果は酒田の海に入。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。是に稻つみたるをや、いな船といふならし。白糸の瀧は青葉の隙〳〵に落て、仙人堂岸に臨て立。水みなぎつて舟あやふし。

五月雨をあつめて早し最上川

六月三日羽黑山に登る。圖司左吉と云者を尋て、別當代會覺阿闍梨に謁す。南谷の別院に舍して、憐愍の情こまやかにあるじせらる。

(七二)四日本坊にをゐて誹諧興行。

有難や雪をかほらす南谷

五日權現に詣。當山開闢能除大師はいづれの代の人と云事をしらず。延喜式に羽州里山の神社と有。書寫、黑の字(七三)河西本を(黑の字を誤て)里山となせるにや。羽州黑山を中略して羽黑山と云にや。出羽といへるも鳥の毛羽を此國の貢に獻ると風土記に侍とやらん。月山・湯殿を合て三山とす。當寺武江東叡に屬して、天台止觀の月明らかに、圓頓融通の法の灯かゝげそひて、僧坊棟をならべ修驗行法を勵し、靈山靈地

の驗効。人貴且恐る。繁榮長にして、めで度御山と謂つべし。

八日月山に登る。木綿しめ身に引かけ、寶冠に頭を包、強力と云ものに道びかれて、雲霧山氣の中に氷雪を踏てのほる事八里。更に日月行道の雲關に入かとあやしまれ、息絶身こゞえて頂上に臻れば、日没て月顯る。笹を鋪、篠を枕として臥て明るを待。日出て雲消れば湯殿に下る。(七四)谷の傍に鍛冶小屋と云有。此國の鍛冶靈水を撰て、(七五)爰に潔齋して劒を打、終月山と銘を切て世に賞せらる。かの龍泉に剣を淬とかや。干將・莫耶のむかしをしたふ。道に堪能の執あさからぬ事しられたり。岩に腰かけて、しばしやすらふほど、三尺ばかりなる櫻のつぼみ半ばひらけるあり。ふり積雪の下に埋て、春を忘れぬ遲ざくらの花の心わりなし。炎天の梅花爰にかほるがごとし。行尊僧正の(七六、河西本、哥の哀も增ノ)哥の哀も爰に思ひ出て猶まさりて覺ゆ。惣而此山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず。仍て筆をとゞめて記さず。

坊に歸れば阿闍梨の需に依て、三山順禮の句〻短冊に書。

涼しさやほの三日月の羽黒山

雲の峰幾つ崩て月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山錢ふむ道の泪かな　曾良

羽黒を立て鶴が岡の城下、長山氏重行と云物のふの家にむかへられて誹諧一卷有。左吉も共に送りぬ。川舟に乗て酒田の湊に下る。淵菴不玉と云醫師の許を宿とす。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ　(七七)

暑き日を海にいれたり最上川

江山水陸の風光數を盡して、今象潟に方寸を責。酒田の湊より東北の方、山を越、磯を傳ひいさごをふみて其際十里、日影やゝかたぶく比、汐風眞砂を吹上、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫作して雨も又奇也とせば、雨後の晴色また賴母敷と、蜑の苫屋に膝をいれて、雨の晴を待。其朝天能霽て、朝日花やかにさし出る程に、象(七八)潟に舟をうかぶ。先能因島に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、むかふの岸に舟をあがれは、花の上こぐとよまれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。江上に御陵

あり。神功后宮の御墓と云。寺を干滿珠寺と云。此所に行幸ありし事いまだ聞ず。いかなる事にや。此寺の方丈に座して簾を捲ば、風景一眼の中に盡て、南に鳥海天をさゝえ、其陰うつりて江にあり。西はむや〳〵の關路をかぎり、東に堤を築て、秋田にかよふ道遥に、海北にかまえて浪打入る所を汐ごしと云。江の縱横一里ばかり、俤松島にかよひて又異なり。松嶋は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはえて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

祭禮

象潟や料理何くふ神祭　曾良

蜑の家や戸板を敷て夕涼　みのゝ國商人　低耳

岩上に雎鳩の巣を見る

波こえぬ契ありてやみさごの巣　曾良

酒田の余波日を重て、北陸道の雲に望、遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百卅里と聞。鼠の關をこゆれば越後の地に歩行を改て、越中の國一ぶりの關に到る。此間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天河

今日は親しらず・子しらず・犬もどり・駒かへしなど云、北國一の難所を越てつかれ侍れば、枕引よせて寐たるに、一間隔て面の方に、若き女の聲二人計ときこゆ。年老たるおのこの聲も交て、物語するをきけば、越後の國新潟と云所の遊女成し。伊勢參宮するとて、此關までおのこの送りて、あすは古郷にかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやる也。白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさましう下りて、さだめなき契、日々の業因いかにつたなしと物云をきく〳〵寐入て、あした旅立に我〳〵にむかひて、行衛しらぬ旅路のうさ、あまり覺束なう悲しく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍ん。衣の上の御情に大慈のめぐみをたれて、結緣せさせ給へと泪を落す。不便の事には侍れども、我〳〵

は所〻にてとゞまる方おほし。只人の行にまかせて行べし。神明の加護かならず、つゝがなるべしと云捨て出つゝ、哀さしばらくやまざりけらし。

一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば書とゞめ侍る。くろべ四十八か瀬とかや。數しらぬ川をわたりて那古と云浦に出。擔籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀とふべきものをと人に尋れば、これより五里(八二)いそづたひして、むかふの山陰にいり蜑の苫ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじといひをどされて、かゞの國に入。

わせの香や分入右(八三)は有磯海

卯の花山・くりからが谷をこえて、金澤は七月中の五日也。爰に大坂よりかよふ商人何處(八四)と云者有。それが旅宿をともにす。一笑と云ものは、此道にすける名のほの〴〵聞えて、世に知人も侍しに、去年の冬、早世したりとて、其兄追善を催すに、

塚も動け我泣聲は秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中唫

あか〳〵と日は難面も秋の風

小松と云所にて

しほらしき名や小松吹萩すゝき

此所太田(八五)の神社に詣。眞盛が甲、錦の切あり。往昔源氏に屬せし時、義朝公より給はらせ給とかや。げにも平士(八六)のものにあらず。目庇より吹返しまで、菊から草のほりもの金をちりばめ、龍頭に鍬形打たり。眞盛討死の後、木曾義仲願狀にそへて、此社にこめられ侍よし。樋口の次郎が使せし事共、まのあたり縁記にみえたり。

むざんやな甲の下のきり〴〵す

山中の温泉に行ほど、白根が嶽跡にみなしてあゆむ。左の山際に觀音堂あり。花山法皇三十三所の順禮とげさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名付給ふとかや。那智・谷組の二字をわかち侍しとぞ。奇石さま〴〵に古松植ならべて、萱ぶきの小堂、岩の上に造りかけて殊勝の土地也。

石山の石より白し秋の風

温泉に浴す。其功有明(八七)に次と云。

山中や菊はたをらぬ湯の匂　（手折）

あるじとする物は久米之助とて、いまだ小童也。かれが父誹諧を好み、洛の貞室、若輩(八八)のむかし爰に来りし比風雅に辱しめられて、洛に帰て貞徳の門人となつて世にしらる。功名の後、此一村判詞の料を請ずと云。今更むかし語とはなりぬ。

曾良は腹を病て、伊勢の國長島と云所(八九)にゆかりあれば(九〇)河西本（先立て旅立行に）先立て行に

行〳〵てたふれ伏とも萩の原　曾良

と書置たり(九一)。行ものゝ悲しみ、残ものゝうらみ、隻鳧のわかれて、雲にまよふがごとし。予もまた

今日よりや書付消さん笠の露

大聖寺(九二)の城外全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地也。曾良も前の夜此寺に泊て、

終宵秋風聞やうらの山

と残す。一夜の隔千里に同じ。吾も秋風を聞つゝ衆寮に臥ば、明ぼのゝ空近う讀經聲すむまゝに、鐘板鳴て食堂に入。けふは越前の國へと心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙・硯をかゝえ、階のもとまで追来る。折節庭中の柳散れば、

庭掃て出るや寺に散柳

とりあへぬさまして、草鞋(九三)ながら書捨つ。越前の境吉崎の入江(九四)を舟に棹して、汐越の松を尋ぬ。

終宵嵐に波をはこばせて
月をたれたる汐越の松　西行

此一首にて數景盡たり。もし一辯を加るもの(九五)は、無用の指を立るがごとし。

丸岡天龍寺の長老、古き因あれば尋ぬ。又、金澤の北枝といふもの、かりそめに見送りて此處までしたひ来る。所〳〵の風景過さず、思ひつゞけて、折節あはれなる作意など聞ゆ。今既別に望みて

物書て扇引さく余波哉

五十丁山に入て永平寺を禮す。道元禪師の御寺也。邦機千里を避て、かゝる山陰に跡をのこし給ふも貴きゆへ有

とかや。

福井は三里計なれば夕飯したゝめて出るに、たそがれの路たど〳〵し。爰に等栽と云古き隱士有。いづれの年にか、江戸に來りて予を尋(九五)。遙十とせ餘り也。いかに老さらぼひて有にや。將死けるにやと人に尋侍れば、いまだ存命してそこ〳〵と敎ゆ。市中ひそかに引入て、あやしの小家に夕貌・へちまのは這かゝりて雞頭・はゝきゞに戶ぼそをかくす。さては此うちにこそと門を扣ば、侘しげなる女の出て、いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや。あるじは此あたり何がし(九六)と云ものゝ方に行ぬ。もし用あらば尋給へといふ。かれが妻なるべしとしらる。むかし物がたりにこそ、かゝる風情は侍れと、やがて尋あひてその家に二夜とまりて、名月はつるがのみなとにたび立。等栽も共に送らんと裾おかしうからげて、路の枝折とうかれ立。漸白根が嶽かくれて、比那が嶋あらはる。あさむつの橋をわたりて、玉江の蘆は穗に出にけり。鶯の關を過て(九七)、湯尾峠を越れば燧が城・かへるやまに初鴈を聞て

十四日の夕ぐれ、つるがの津に宿をもとむ。その夜月殊晴たり。あすの夜もかくあるべきにやといへば、越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すゝめられて、けいの明神に夜參す。仲哀天皇の御廟也。社頭神さびて松の木の間に月のもり入たる。おまへの白砂霜を敷るがごとし。往昔遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈土石を荷ひ、泥渟をかはかせて、參詣往來の煩なし。古例今にたえず。神前に眞砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申侍ると、(九八)亭主の語りける。

月淸し遊行のもてる砂の上

十五日亭主の詞にたがはず、雨降。

名月や北國日和定なき

十六日空霽たれば、ますほの小貝ひろはんと、種の濱に舟を走す。海上七里あり。天屋何某と云もの破籠・小竹筒などこまやかにしたゝめさせ、僕あまた舟に取のせて追風時の間に吹着ぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、侘しき法花寺あり。爰に茶を飮、酒をあたゝめて、夕ぐれのさびしさ感に堪たり。

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

波の間や小貝にまじる萩の塵

其日のあらまし（九九）河西本（其日ノ日記）、等裁に筆をとらせて寺に殘す。露通も此みなとまで出むかひて、みのゝ國へと伴ふ。駒にたすけられて（一〇〇）河西本（駒をはやめて）大垣の庄に入ば、曾良も伊勢より來り合（一〇一）河西本（來り合）、越人も馬をとばせて如行が家に入集る。前川子・荊口父子其外したしき人ゝ日夜とぶらひて、蘇生のものにあふ（一〇二）河西本（ふたゝび）がごとく、且悦び且いたはる。旅の物うさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の迁宮おがまんと又舟にのりて

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

跋

からびたるも、艶なるも、たくましきも、はかなげなるも、おくの細道みもて行に、おぼへずたちて手たゝき、伏て村肝を刻む。一般は蓑をきる〳〵かゝる旅せましと思ひ立、一たびは座してまのあたり、奇景をあまんず。かくて百般の情に鮫人の玉を翰にしめしたり。旅なる哉。器なるかな。只なげかはしきは、かうやうの人のいとかよはげにて、眉の霜の置そふこそ、

元禄七年初夏　　素龍書

此卷は古師芭蕉翁の紀行にして素龍清書す。卷の長五寸五分、はゞ四寸七分、紙の重五十三、初終に白帋あり。行成の表帋、紫の糸を以てとぢ、外題は金の眞砂ちらしたる白地に、みづから奥の細道と書。年月頭陀の内にかくして、行先〳〵に隨身し給ふ。元禄七年水無月予が方に偶居まし〳〵て、かつ〳〵ほのめかし給ふを、書寫の事深く乞奉りけるに、同じ年の神無月、難波のあしのかりねに心地なやみ給ひぬと聞えぬれば、急ぎとぶらひまかりけるに、枕近う呼給ひて、けふ我やまひ類なり。汝日ごろ此集の求ふかし。今將に足下に讓りなん。不思議にもながらふるためしもあらば寫しとゞめて、本の書を返すべし。書は兄の慰にとて古郷に殘し置ぬれば、つと〳〵（ホノマヽ）借遣るなるべしと聞え給ふ。かたじけなくも悲しくもかしこまり、やがて寫しとゞめて、めで度此卷は捧侍りなんと涙を落しぬ。かくて遷化の後、兄の許へ文して乞奉りけるに、今はかうやうのものをこそ、しばしとゞまるべき老のかたみともなぐさみ侍れば、いさゝか手をはなち侍んも淺間しう覺られぬれど、遺言なれば送

りやりぬ。且は奥羽の旅寐の夢の跡もなつかしく、且は門葉の人々の手跡もめづらしと見まほしければ、予に書寫して送り侍るべしと也。然ばふたゝび能書をゑらぶによしなく、やゝその製をたがへずといへども、なを誤字落字の多からん事を恐れ侍るのみ。

濡つ干つ旅やつもりて袖の露

元祿八乙亥年九月十二日

於嵯峨落柿舍書寫焉　門人　去來拜

奥の細道異同表

〔一〕永機本「世は」
〔二〕河西本再案「書て」を消す。
〔三〕同再案「元祿二とせにや」を消す。
〔四〕永機本「月（アリ）明」鶯宿本「有明」
〔五〕永機本「鳥は啼」
〔六〕鶯宿本「矢立の筆はじめ」
〔七〕河西本再案「此たび」を消して「今年元祿二とせにや」をこゝに入る。
〔八〕永機本「耳にふれては」
〔九〕同「帋衣一重は」
〔一〇〕同「心をとめて」
〔一一〕同「改給ふを」
〔一二〕同「曾良河合氏」とありて「は」を缺く。
〔一三〕同「入て」なし
〔一四〕同「直路を」
〔一五〕同「馬の跡を」
〔一六〕同　作者名「曾良」を脱す。
〔一七〕鶯宿本「氏神」を脱す。
〔一八〕同「感應誠に」
〔一九〕永機本「桃翠か家に」
〔二〇〕同「いつぞや」を脱す。
〔二一〕同「程」を消して「道のうち」とす。
〔二二〕鶯宿本「卯月の天卽今猶寒し」
〔二三〕河西本再案「くらはず」を消し「やぶらず」とす。
〔二四〕永機本「口付のおとこ」
〔二五〕同「畔に殘す」
〔二六〕鶯宿本「風採の」
〔二七〕永機本「物」なし
〔二八〕本文「等窮」に誤る。
〔二九〕永機本「長途の勞身心くるしく」
〔三〇〕本文「等窮」に誤る。
〔三一〕同「こゝろみけるを」
〔三二〕永機本「と云」を脱す
〔三三〕同「丸山といふに」より「大手の跡など」につゞく。
〔三四〕鶯宿本「世に」を脱す
〔三五〕河西本再案「辨慶の笈なども」を消して「笈も大刀も

五月にかざれ」さす。

〔三六〕永機本「五日」に誤る。

〔三七〕河西本再案「也」を「にや」さす。

〔三八〕永機本「飯塚にやさる」鶯宿本「飯坂に」

〔三九〕河西本再案「出湯」を消して「温泉」さす

〔四〇〕同再案「ふしたる上に雨もりて」を消して「ふせる上よりもり」さす。永機本「臥る上よりは雨もり蚤蚊にさゝれて」

〔四一〕河西本再案「待り」を消して「あり」さす。

〔四二〕同「次」を消して「繼」さす

〔四三〕鶯宿本「さゝなひて」

〔四四〕永機本「云もの〻」を脱す。

〔四五〕同「横野の」

〔四六〕同「あけひ」

〔四七〕鶯宿本「松の」を脱す。

〔四八〕永機本「わらつ一足」

〔四九〕鶯宿本「里數」

〔五〇〕永機本「寺を造てすゑの松山さいふ（松の）あひ〳〵」此の文中「松の」を脱す。

〔五一〕永機本「かくのみさ」

〔五二〕同「ふさしき」の傍に「く」を添ふ

〔五三〕河西本再案「尋」を消して「俠」さす

〔五四〕永機本「古き」なし

〔五五〕鶯宿本「佛は眼前に」

〔五六〕同「佳名今に」

〔五七〕河西本再案「て佳命をおもふ」を消して「義を守べし」さす

〔五八〕永機本「兒孫ヲ愛するかとし」

〔五九〕鶯宿本「禪師別室の跡座禪石」、永機本に「座禪の石」

〔六〇〕鶯宿本「旅寐するさは」

〔六一〕永機本「其後に」を脱す

〔六二〕同「光かゝやき」

〔六三〕同「平泉」

〔六四〕同「道まさひ」

〔六五〕河西本再案「五月雨や年〳〵降て五百たび」を消して「五月雨の降殘してや光堂」さし「螢火の晝は消つゝ柱かな」を消す。

〔六六〕鶯宿本「あるしの云やう」永機本に「主の云く」

〔六七〕永機本「あとに聞て申さへ」

〔六八〕同「殊勝閑の地なり」

〔六九〕鶯宿本「土石覆て」に誤る。

〔七〇〕鶯宿本「そゝろすみ行」

〔七一〕永機本「しみ込」

〔七二〕同「四日本坊にをゐて誹諧興行」此の一項を脱す。

〔七三〕同「羽州里山を」河西本再案「誤て」を消す。

〔七四〕永機本「谷の坊に」

〔七五〕鶯宿本「爰に」を脱す。

〔七六〕河西本再案「親王の哥の哀も増り」を消して「僧正の哥も爰に思出て猶」さす。鶯宿本「哀れ」を脱す。

〔七七〕永機本「あつみ山吹浦かけて」

〔七八〕同「象潟の浴に」さありて二字墨消し。

〔七九〕一宿本「その陰江にうつりて西は」

〔八〇〕永機本「年よりたる」

〔八一〕同「予の世を」に誤る。

〔八二〕同「五里ばかり」

〔八三〕同「分入道は」

〔八四〕鶯宿本「なにがし」に誤る。何處（かしよ）は人名也。

〔八五〕河西本再案「齋藤別當」を消す。

〔八六〕永機本「平氏」

〔八七〕鶯宿本「有馬」

〔八八〕永機本「貞室若かりしむかし」

〔八九〕同「ゆかりあれば」を脱す。

〔九〇〕河西本再案「旅立」を消す。

〔九一〕鶯宿本「書置して」

〔九二〕本文「大聖持」とあれど鶯宿本「寺」とあるによる。

〔九三〕永機本「草鞋ながら書捨つ」を脱す。

〔九四〕同「舟に」を脱す。

〔九五〕同「予を尋は」

〔九六〕同「何かしのもとに行ぬ」

〔九七〕同「關をこ」

〔九八〕同「亭にて」

〔九九〕河西本再案「日記」を消して「あらまし」とす。

〔一〇〇〕同「駒をはめて」を消して「駒にたすけられて」とす。

〔一〇一〕同「かけ」を消して「來り」とす。

〔一〇二〕同「ふたゝひ」を消す。

嵯峨日記

元祿四年作

史邦の『小文庫』に引用されてゐるが、元祿年中には『嵯峨日記』の板本はなかつた。寶曆三年大和郡山の人眘玉が京都の永田調治・菊舍太兵衞の二書肆に托して始めて出板した。『芭蕉翁四部錄』はその板木を再び利用したのである。『蓬萊嶋』には「落柿舍日記」といふ題名で收めてある。『芭蕉翁七書』・『一葉集』・『袖珍鈔』以外、明治四十五年城田倒止氏の模刻板がある。『一葉集』所載のものが寶曆板より信據すべき點があるので、本文はそれによつて其の他の諸書と對校した。

嵯峨日記

元祿四辛未卯月十八日、嵯峨に遊びて去來が落柿舍に至る。凡兆ともに來て暮におよびて京に歸る。予は猶しば

らくとゞむべきよしにて障子つゞくり、葎引かなぐり、舍中の片隅一間なる所伏處とさだむ。机一、硯、文庫、白氏文集、本朝一人一首、世継物語、源氏物語、土佐日記、松葉集を置。唐の蒔絵書たる五重の器に、さま〱の菓子をもり、名酒一壺盃をそへたり。夜のふすま、調菜の物ども京より持来てまづしからず。我貧賤をわすれて清閑をたのしむ。

十九日午半、臨川寺に詣づ。大井川前にながれて嵐山右に高く、松の尾の里につゞけり。虚空蔵に詣る人ゆきかひおほし。松の尾の竹林の中に小督屋しきといふあり。すべて上下の嵯峨に三所あり。いづれかたしかならん。かの仲国が駒をとめたる処とて、駒とめの橋と云、此あたりに侍れば、しばらくこれによるべきにや。墓は三軒屋の隣藪の中にあり。しるしに桜を植たり。かしこくも錦繍綾羅の上に起ふして、終に藪中の塵芥となれり。昭君村の柳、巫女廟の花のむかしもおもひやらる。

うきふしや竹の子となる人の果

嵐山藪のしげりや風の筋

斜日に及て落柿舎に帰る。凡兆京より来たる。去来京に帰る。宵より臥。

廿日　北嵯峨の祭見んと羽紅尼来る。去来途中の吟とて語る。

つかみあふ子供のたけや麦ばたけ

落柿舎は、むかしのあるじの作れるまゝにして、処々頽破す。なか〱に作りみがゝれたる昔のさまよりも、今のあはれなるさまこそ心とゞまれ。彫せし梁、画る壁も風に破れ、雨にぬれて、奇石・怪松も葎の下にかくれたる竹椽の前に、柚の木一もと花かうばしければ、

柚の花やむかししのばん料理の間

ほとゝぎす大竹藪をもる月夜

またやこんいちご赤らめ嵯峨の山　羽紅

去来兄の方より菓子・調菜のものなど贈て、今宵は羽紅夫婦をとゞめて、蚊屋一張に上下五人こぞり臥たれば、夜もいねがたくて、夜半過る頃よりもおの〱起出て、昼の菓子盆など取出て暁ちかきまで話明す。去年の夏凡兆が宅に臥たるに、二畳の蚊屋に四国の人ふしたり。おもふこ

と四にして夢も又四くさと、書捨たる事（一一）など云出して咲ひぬ。明れば羽紅・凡兆京に歸る。去來猶とゞまる。

廿一日　昨夜は寢ざりければ心むつかしく、空のけしきも昨日に似ず、朝より打くもり、雨折〳〵おとづれて終日眠り臥たり。暮に及て去來京に歸る。今夜（一二）は人もなく晝臥たれば夜もねられぬまゝに、幻住庵にて書捨たる反故を尋出してなぐさみに清書す。

廿二日　朝の間雨降。今日は人もなくさびしきまゝに、むだ書して遊ぶ。其詞

喪に居るものは悲しみをあるじとし
酒を飲ものはたのしみを主とし
愁に住するものは愁をあるじとし
徒然に住するものはつれ〴〵を主とす

さびしさなくばうからまし　と、西上人のよみ侍るは、さびしさを主なるべし。又よめる、

山里にこはまた誰をよぶこ鳥
　ひとりすまんと思ひしものを

獨すむほどおもしろきはなし。長嘯隱士の曰、客は半日の閑を得れば、主は半日の閑をうしなふと。素堂此こと葉を常にあはれむ。予も又、

うき我をさびしがらせよかんこ鳥

とは、ある寺に獨居（一三）していひし句也。暮方去來より消息す。乙州が武江より歸り侍るとて、朋友・門人の消息どもあまたとゞく。其中曲水が狀に、予が住捨し芭蕉（一四）の舊跡を尋て宗波に逢よし。

むかし誰小鍋あらひしすみれ草

又云

我住ところ、弓杖二丈ばかりにして楓（一五）一本、外は青き色を見ずと書て、

わか楓茶色になるも一さかり

嵐雪が文に

狗脊の塵にえらるゝわらび哉
出代やおさな心に物あはれ

廿三日

（一六）手を打ば木魂に明る夏の月
夏の夜や木魂に明る下駄の音

笋やおさなき時の繪のすさみ

麥の穂や涙にそめて啼雲雀

能なしの眠たし我をぎやう〳〵し

廿四日　題㆓落柿舍㆒(二五)

豆植る畑も木部屋も名處かな　凡兆

暮に及び去來京より來る。膳所昌房より消息、大津の尚白より消息あり。凡兆來る。堅田本福寺(二六)訪ふ。春伯・凡兆京に歸る。

廿五日　千那大津に歸る。史邦・丈草見レ訪。

(二八)題㆓落柿舍㆒

(二九)深對峨峰伴鳥魚　就荒喜似野人居

枝頭今欠赤虯卵　(三〇)青葉々頭堪學書

尋㆓小督墳㆒

強攪怨情出深宮　(三一)一輪秋月野村風

昔季僅得求琴詢　何處孤墳竹樹中

芽出しより二葉に茂る柿の實　(三二)丈草

途中の吟

ほとゝぎすなくや榎も梅さくら　(三三)史邦

黄山谷之感句

(三四)杜門覓句陳無己　對客揮毫秦少游(三五)

乙州來りて武江の噺、並燭五分の俳諧一卷、其中に、

半俗の膏薬入はふところに

臼井峠を馬にかしこき(三六)　其角

腰の簑に狂はする月

野分より流人にわたす小屋ひとつ

宇都の山女に夜着をかりてねる

いつはりせめてゆるす甚忍

申の(三七)刻ばかりより雷霆(三八)雹降、雲龍空を過る時雹降。大なるはから桃のごとし。ちひさきは柴栗のごとし。

廿六日

芽出しより二葉にしげる柿の實　(三九)丈草

はたけの塵にかゝるうの花　芭蕉

蝸牛たのもしげなき角ふりて　去來

人のくむうち釣瓶まつなり　丈草

有明に三度飛脚の行やらん　乙州

廿七日　人來らず終日得レ閑。

廿八日　夢に杜國が事をいひ出して涕泣して覺る。心氣相まじはる時は夢をなす。陰盡て火をゆめみ、陽おとろへて水を夢みる。飛鳥髮をふくむ時は飛鳥をゆめみ、帶を敷寢する時は蛇を夢みるといへり。睡枕記に、槐安國、莊周が蝶夢みな其理有て妙をつくさず。我夢は聖人君子の夢にあらず、終日妄想・散飛の氣夜陰に夢又しかり。まことに此(三〇)ことを夢みるこそいはゆる念夢なれ、我に志深く、伊陽舊里までしたひ來りて、夜ゝ床を同じく起ふし、行脚の勞を(三一)たすけて百日がほど影のごとく伴ふ。片時もはなれず。或時はたはぶれ或時は悲しみ、其志わが心裏に染てわするゝことなければなるべし。覺てまた袂をしほる。

廿九日　(三二)日暮て奧州高舘の詩を見る。

高館聳天星似冑　衣川通海月如弓

其他の風景聊以不レ叶。古人不レ至ニ其地一時、以不レ叶ニ其景一

卅日　朔日

江州平田明照寺(三三)李由訪る。尙白・千那有ニ消息一。

竹の子やくひ殘されしのちの露　李由

此ごろの肌着身につく卯月哉　尙白

遣岐

またれつる五月もちかし聟粽　、

二日

曾良來りて、芳野の花を尋ね熊野に詣侍るよし。武江、舊友門人の噺かれこれ取まぜて談ず。

熊野路やわけつゝ入ば夏の海

大峰やよしのゝおくを花の果

夕陽にかゝりて大井川に舟をうかべて、嵐山にそふて戸難瀬をのぼる。雨降出て暮に及て歸る。

三日　昨夜の雨降つゞくこと(三四)終日終夜止ず。尙其武江の事ども問語。既に夜明る。

四日　宵に寢ざりける草臥に終日臥。晝より雨降止。明日は落柿舍を出んに名殘をしかりければ、奧口の一間〳〵を見めぐりて、

さみだれや色紙へぎたる壁の跡

嵯峨日記異同表

〔一〕『芭蕉翁七書』に「白氏集」
〔二〕城田本「井居の蒔繪」
〔三〕『芭蕉翁七書』に「隅〳〵の」と誤る。
〔四〕城田本「盃一を添へたり」
〔五〕寶暦本「清閑に」
〔六〕城田本「竹の中に」
〔七〕同「駒ひきめたる」
〔八〕同「去來京より來る、途中の」
〔九〕寶暦本「家々頽破す」
〔一〇〕城田本「上下五人」
〔一一〕寶暦本「事共など」
〔一二〕城田本「今宵」
〔一三〕寶暦本「獨居て」
〔一四〕城田本「芭蕉庵の舊き跡」
〔一五〕同「一本より」
〔一六〕寶暦本、此のところ「夏の夜や」を墨消して「手を打ば」を細字にて書添へ、「麥の穗や」の傍に「一日〳〵」を細字にて記しあり。

廿三日

手を打ば木魂に明る夏の月
(夏の夜や木魂に明る下駄の音)
竹の子や幼き時の繪のすさみ
麥の穗や涙にそめて啼雲雀
一日〳〵麥あからみて啼
能なしの眠たし我をぎやう〳〵し。

細字にて示せる句は推案なるべし。

〔一七〕寶暦本「堅田本福寺訪于春伯ニ」、城田本「本福寺訪ニ于其泊ニ」
〔一八〕城田本作者名「丈草」
〔一九〕寶暦本「對深」、城田本「深入峨峰」の「入」を消し、「深」の上に「對」を加へたり。
〔二〇〕寶暦本「青葉分頭」、城田本「青葉分題」
〔二一〕寶暦本「一盞飲月」
〔二二〕城田本作者名「史邦」
〔二三〕同「丈艸」
〔二四〕寶暦本「杜門　句陳無己」とありて一字讀み難し。
〔二五〕同「秦」に誤る。
〔二六〕寶暦本「馬そ」
〔二七〕同「申の時」
〔二八〕城田本「風雨雷霆雹降ル雹ノ大イサ三匁有」
〔二九〕同、作者名「史邦」
〔三〇〕寶暦本、此言葉をゆめみること」、城田本「此ものを夢みること」
〔三一〕城田本「こともに助けて」
〔三二〕寶暦本「久音奥抄奥州高館の」、城田本「一人一首奥州高館ノ詩ヲ見ル」

〔三三〕城田本「明昌寺」に誤る。

〔三四〕同「降つゞきて」

芭蕉文集

芭蕉文集

幻住庵の記　其の一　元祿三年作

『猿蓑集』卷之六に「幻住菴記　芭蕉稿」として向井震軒の後記を添へ、元祿四年板行されてゐる。許六の『本朝文選』・蝶夢の『芭蕉翁文集』・風德の『芭蕉文集』及び『一葉集』・『袖珍鈔』所載のものは、その『猿蓑集』に據つたのである。芭蕉眞蹟の「幻住庵記」は雲裡坊より數傳して董逸の有に歸し、弘化二年『夏木立集』と題し石摺を以て出板された。現に近江大津市の村田利兵衛氏の所藏する眞蹟はその原本である。本文は『夏木立集』により『猿蓑集』その他を以て校合した。

いしやまのおく岩間の後に山有。國分山といふ。そのかみ國分寺の名をつたふなるべし。ふもとに細き流をわたりて、翠微に昇ると、三曲二百歩にして八幡宮立せ給ふ。神躰はみだの尊像とかや。惟一の家には、はなはだいむなる事を兩部光をやはらげ、利益のちりを同したまふも、またたふとし。日比は人の詣ざりければ、いとゞかみさび、もの靜なる傍に住捨し草の戸あり。蓬・根篠軒をかこみ、やねもり壁落て、狐狸ふしどを得たり。幻住庵といふ。あるじの僧何がしは、勇士菅沼氏曲翠氏の伯父になん侍しを、いまは八とせばかりむかしになりて、まさに幻住老人の名をのみ殘せり。予又、市中をさること十とせばかりにして、いそぢやゝちかき身は、みのむしの蓑をうしなひ、かたつぶり、いゑを離て、奥羽きさかたの暑き日も(一)おもてをこがし、高すなごあゆみくるしき北海の荒磯にきすびを破りて、ことし湖水の波にたゞよふ。鳰のうき巣のながれとゞまるべき蘆の一もとの陰たのもしく、軒端茨あらため、垣ね(二)ゆひそへなむどして、卯月の初、いとかりそめに入し山のやがていでじとさへ

おもひそみぬ。さすがに春の名殘も遠からず、つゝじ咲のこり、山藤松にかゝりて、ほとゝぎすしば／＼過るほど、宿かし鳥の便りさへあるを、木つゝきのつゝくともいと(三)はじなんどそゞろに興じては、魂、吳楚東南に走り、身は瀟湘・洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人家能ほどにへだゝり、南薫峯よりおろし、北風海をひたして涼し。日枝の山・ひらの高根より辛崎の松は霞こめて、城あり、橋有、釣たるゝふねあり、笠とりにかよふ木樵の聲、麓の小田に早苗とるうた、ほたる飛かふ夕闇の空に、水鷄のたゝく音、美景物としてたらずといふ事なし。中にも三上山は士峯のおもかげにかよひて、武藏野ゝふるきすみかもおもひいでられ、田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽・千丈が峯・袴こしといふ山あり。黑津の里はいとくろう茂りて、網代守にぞとよみけむ　萬葉集のすがたなりけり。猶眺望くまなからんと、後の峯にはひのぼり、松の棚作り、わらの圓坐を敷て、猿の腰掛と名付。彼海棠に巣をいと(四)なみ、主簿峯に庵をむすべる王翁・(五)除佺が徒にはあらず。唯、睡辟山民となつて、孱顏に足を投出し、空山に虱を捫て座ス。たま／＼心まめなる時は、谷の淸水を汲てみづから炊。とく／＼の雫を侘て、一炉の備へいとかろし。はたむかし住けむ人のことに心高く住なし侍りて、たくみ置る物ずきもなし。持佛一間を隔て、(六)夜る物納べき處など、いさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが厳子にて、このたび洛にのぼ(七)りいまそかりけるを、ある人をして額をこふ。いとやす／＼と筆を染て、幻住庵の三字を送らる。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ旅寢といひ、さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠・越の菅蓑(八)計枕の上の柱(九)に掛たり。晝は稀／＼とぶらふ人々に心を動シ、あるは宮守の翁、里のおのこども入來りて、いのしゝの稻くひあらし、兎のまめはたけにかよふなど、我聞しらぬ農談、日既山の端にかゝれば、夜坐靜に月を待ては影をともなひ、燈をとつてはもうりやうに是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂をこのみ、山野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ病身人に倦で、世をいとひし人に似たり。つら／＼年月の移りこし、つたなき身のとがを

おもふに、〔一〇〕一たびは仕官懸命の地をうらやみ、〔一一〕ある時は佛籬祖室のとぼそにいらむとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫、生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。樂天は五臟の神を破り、老杜は瘦たり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻のすみかならずやとおもひ捨てふしぬ。

先たのむ椎の木も有夏こたち

元祿三仲秋日　　芭蕉　白書　[桃]

〔一〕『猿蓑集』に「暑き日に」
〔二〕同「結添なとして」
〔三〕同「いさはしなき」
〔四〕同「能ないとなび」
〔五〕同「王翁徐佺」『本朝文選』に同じく「徐佺」とあり、風德の『芭蕉文集』に「陳佺」と誤る。
〔六〕『猿蓑集』に「夜の物」
〔七〕同「いまそかりけるを」
〔八〕同「菅蓑斗」
〔九〕同「椎に懸たり」
〔一〇〕同「ある時は仕官懸命」
〔一一〕同「一たびは佛籬祖室」

幻住庵の記　其の二　　元祿三年作

支考の『和漢文操』に「幻住庵の文」に三通あり、始の一通は落柿舍にあり　とある初稿で、池永大蟲の寫本『芭蕉眞蹟拾遺』に收めてある。本文は沼波瓊音氏の『芭蕉文集』から再錄した。

五十年やゝちかきみは、にがもゝの老木となりて、かたつぶり家をうしなひ、みのむしの蓑を離れて、かの宗鑑がはたごの料とぼしく、能因が頭陀の袋を門〱にひろげて、松島しら川につらをこがす、猶うとふ啼くそとの濱邊より、えぞが千しまをみやらんまでと、しきりにおもひ立ち侍るを、同行曾良何某といふもの、多病心もとなしなど袖をひかゆるに心よわりて、ことし湖水のほとりにたゞよふ、鳰のうきすのながれとゞまるあしのひともとの、かげたのむべき幻住庵といふかくれがをもとむ。山を國分山といふ、古き御社のたゝせ給へば六根きようしておのづからちりなき心地せらる。さすがに山深からず、人家よきほどに立り、南薰峰よりおろし、北風海をひたして涼し。

折しも卯月のはじめ、つゝじ咲殘り山藤松にかゝりて、ほとゝぎすしば／＼過るほど、宿かし鳥の便さへ有るを木つゝきのつゝくともいでじ。かつこ鳥われをさびしがらせよなど、そゞろに興じて、呉楚東南のながめに恥ず、五湖三江もうたがはしきや。ひえの山ひらの高根より辛崎の松は粟津の松原につゞきて夕日の光をのこす。三上山は士峰の俤にかよひてむさしのゝ古き栖もおもひいでられ、田上山に古人をしたふ。さゝ保が嶽・千丈ヶ峰・袴腰といふ山あり、かさとり山に笠はなくて黒津の里人の色や黑かりけんとたかし。猶眺望くまなからんと後の峰に這のぼり松の棚作り、わらの圓座を敷て猿の腰かけと名付く。傳へ聞く、除老が海棠巣上の飲樂は市にありてかまびすく、王道人が主簿峯の庵もうらやむべからず。虚無に眼をひらき、孱顏に虱を捫て座す たま／＼心すこやかなる時は、薪をひろひ淸水をむすぶに、しだ一葉のみどりをつたふさく／＼の栗を佗びて一爐のそなへいさかろし。さきに住みける人もさすがに心高くや住みなしけむ、工みおける物すきもなし。さるを此たび高良山蓮臺院の僧正浴にのぼり侍りしを、ある人をして額をこふ。いとやすらかに筆を取て幻住庵の三字を送らる。其裏に予が名を書て後住人の紀念ともなれと也。山居といひ、旅寐といひさせるうつはものたくはふべくもあらず。木曾の檜笠・越の菅みのばかり枕の上の柱に掛たり。晝は宮守の翁・里の老人など入來りて、ゐのしゝの稲くひあらし、兎のまめばたにかよふなど我聞しらぬはなしに日を暮し、かつはまれ／＼とぶらふ人々も侍りしに、夜座靜にして影を伴ひ、罔兩に是非をこらす。かくいへばとてひたぶるに閑寂を好み山野に跡をかくさむとにはあらず、たゞ病身人に倦て世をいとひし人に似たり。などや法をも修せず俗をもつとめず、いとわかき時よりよこさまにすけることゝ侍りて、しばらくしやうがいのはかりごとゝさへなれば、終に此一筋につながれて、無能無才を恥するのみ、勞して功もなし、たましひつかれまゆをしかめて、初秋半に、過行く風景朝暮の變化もまた幻のすみかなるべしとやがて立いでゝさりぬ。

幻住庵の記　其の三

元祿三年作

此の文章は、『和漢文操』卷之一の「賦ノ類」の中に收めてある。支考は幻住庵の文三通の一として享和十二年板の同書に發表したので卷末に支

考の註が附いてゐる。

幻住庵ノ賦

風羅坊

五十年やゝちかき身は、苦桃の老木となりて、蝸牛のからをうしなひ、蓑虫のみのをはなれて、行衛なき風雲にさまよふ。かの宗鑑がはたごを朝夕になし、能因が頭陀の袋をさぐりて、松島・しら川に面をこがし、湯殿の御山に袂をぬらす。猶うたふ鳴そとの濱邊よりゑぞがちしまを見やらんまでと、しきりに思ひ立侍るを、同行曾良なにがしといふもの、多病いぶかしなど袖をひかゆるに心たゆみて、象潟といふ所より越路のかたにおもむく。さるは高砂子のあゆみくるしき北海のあら磯に、きびすを破りて、こゝに湖水のほとりにたゞよふ。鳰の浮巣の流とゞまるべき芦の一葉のやどりをもとむるに、その名を幻住庵といひ、その山を國分山といへり。古き御社の立せたまへば、六根をのづから清ふして、塵なき心地をなむせらる。かの住捨し草の戸は勇士菅沼氏曲水子の伯父なる人の此世をいとひし跡とかや。ぬしは八とせばかりのむかしになりて、棲はまぼろしのちまたに殘せり。誠に知覺迷倒も皆たゞ幻の一字に皈して、無常迅速のことはりいさゝかも忘るべき道にあらず。山はさすがに深からず、人家よき程にへだたり、石山を前にあてゝ岩間山のしりへにたてり。南薫高く峯よりおろし、北風はるかに海をひたして涼し。おりしも卯月のはじめなれば、つゝじ咲殘り、山ふじ松にかゝりて、時鳥しば〳〵過るほど、宿かし鳥の便さへあるに木つゝきのつゝくともいでし。かつこ鳥我をさびしがらせよなどひとりよろこび、そゞろにたのしみて、呉楚東南のながめにはぢず、五湖三江もこゝに疑しきや。日枝の山ひらの高ねより辛崎の松は霞こめて、膳所の城は木ノ間にかゞやき、勢田のはしに雨晴ては、粟津の松ばらに夕日を殘す。三上山はふじの俤にかよひて、むさし野の古きすみかも思ひ出られ、田上山に古人をしたふ。さゝほが嶽・千丈ヶ峰・はかまごしといふ山あり。笠とり山に笠はなくて、黒津の里人の色や黒かりけむ。猶はた眺望くまなからんと、後の峯にはひのぼり、松の棚つくり、藁の圓座をしきて、是を猿の腰かけと名づく。いたへ開ぬ。除老が海棠巣の飲樂も、市にありてかまびすしく、王道人が主簿峯の住ゐも愛れ捨てうらやむべからず。虚無に眼をひらいて嘯き、孱顔にしらみを捫て座す。たま〳〵心すこやかなる時は、薪を拾ひ清水をむすぶに、齒朶・ひとつ葉のみどりをつたふ。とく〳〵

の雫をわびては一爐のそなへいと輕し。前に住ける人も、さすがに心高くたくみをける內數寄もなし。持佛一間をへだてゝ、よるの物かくらふべき所など、いさゝかしつらへり。さるを高良山の僧正洛にのぼり居給ひしを、ある人をして額をこふ。いとやすらかに筆をとりて幻住庵の三字をおくらる。其裏には予が名を書て後見ん人の紀念ともなれと也。山居といひ旅寐といひ、さるうつは物たくはふべきにもあらず。木曾の檜笠・越の菅簑ばかり、枕の上の柱にかけたり。晝は宮守の翁・麓の里人など入きたりて、ゐのしゝの稲くひあらし、兎のまめ畑にかよふなど、我聞しらぬ咄に日を暮し、かつはまれ〳〵とぶらふ人も夜座しづかにして影をともなひ、罔兩に對しては是非をしらす。かくいへばとてひたぶるに閑寂をこのみ、山野に跡をかくさむとにもあらず。病身やゝ人にうみて、世をいとひし人に似たり。何ぞや、法をも修せず、俗をもつとめず、いと若き時よりよこさまにすける事侍りて、しばらく生涯のはかり事とさへなれば、終に此一筋につながれて無能無才を恥るのみ。勞して功むなしく魂つかれ眉をしはめて、秋も半に過行まゝ、風雲朝暮の變化とても、又たゞまぼろしの住ゐならずやと、此文をとどめて立去りぬ。

十八樓の記

元祿元年作

支考の『笈日記』中卷の岐阜部に掲げてある。朱拙の『けふの昔』及び『本朝文選』に載つてゐる。本文は『笈日記』によつた。

みのゝ國ながら川に(一)望て水樓あり。あるじを(二)賀島氏といふ。いなば山後に高く、亂山(三)西にかさなりて、ちかゝらず遠からず、たなかの寺は杉の一村にかくれ、きしにそふ民家は竹のかこみのみどりも深し。さらし布所々に引はえて、右にわたし舟うかぶ。里人のゆきかひしげく、漁村軒をならべて、網をひき釣をたるゝ。をのがさま〲もたゞ此樓を(四)もてなすに似たり。暮がたき夏の日もわするゝ斗、入日の影も月にかはりて、波にむすぼるゝか(五)ゞり火もやゝちかく、高欄のもとに鵜飼するなど、まことにめざましき見もの也けらし。かの瀟湘の八のながめ、西湖の十のさかひも、涼風一味のうちに思ひためたり。

若此樓に名をいはんとならば、十八樓ともいはまほしき也。

此あたり目に見ゆるものは皆涼し　はせを

〔一〕『けふの昔』に「臨て」

〔二〕同「加嶋氏」

〔三〕同「西に」、『芭蕉翁文集』に「左右に」

〔四〕『けふの昔』に「賞に」

〔五〕同「かゝり火の影も」

酒落堂の記

元祿三年作

酒堂・正秀共撰の『白馬集』に載つてゐる。『白馬集』は元祿十五年板行されてゐるが、編者の所持せるは寫本故、蝶夢の『芭蕉翁文集』所載の記によい風德の『芭蕉文集』その他を以て校合した。

山は靜にして性をやしなひ、水は動て情をなぐさむ。靜動二ッの間にして棲を得るものあり。濱田氏珍夕といへり。目に佳境を盡し、(一)口に風雅を唱へて濁りをすまし、塵をあらふが故に酒落堂といふ。門に戒幡を懸て、分別の門内に入ことをゆるさずとかけり。彼宗鑑が客におしゆるざれうたに一等くはへておかし。且それ簡にして方丈なるもの二間、休・紹二子の侘を次て、しかもそののりをみず。木を植、石をならべてかりのたはぶれとなす。抑おものゝ浦は勢田・辛崎を左右の袖のごとくして、海を抱て三上山にむかふ。海は琵琶のかたちに似たれば、(二)松の響波をしらぶ。比叡の山・比良の高根を斜に見て、音羽・石山を肩のあたりになん置り。長柄の花を髪にかざして、鏡山は月をよそふ。淡粧濃抹の日々にかはれるがごとし。心匠の風雲もまたこれにならふなるべし。(四)

四方より花吹入て鳰のうみ(五)

〔一〕風德の『芭蕉文集』に「佳境を豐にし」とあれど『一葉集』による。

〔二〕同「かたちに似たれ」より「松の」につゞき「ば」

を脱すれど『一葉集』による。

〔三〕『一葉集』「濃沫」

〔四〕『芭蕉文集』に「ならふべし」とあれど『一葉集』による。

〔五〕同「鴫の波」

月見の賦　元祿四年作？

芭蕉の遺稿であるか、支考が師の名に假托した作であるか、やゝ疑はしい文章で『和漢文操』七之一に收載されてゐる。風德の『芭蕉文集』にはあるが、蝶夢の『芭蕉翁文集』にはない。その爲めか『一葉集』は眞僞不審の部に入れてある。此の疑問は今無造作に解決し難いところもあるので、爰にともかく『和漢文操』から採つて置いた。

ことし琵琶湖の月見むとて、しばらく木曾寺にたび寐して、膳所・松本の人〳〵を催すに、乙州は酒をたづさえて、泉川に三日の名をつたへ、正秀は茶をつゝみて、信樂に一夜の夢をさます。今宵は茶といひ酒といひかゝふの人も二派にわかれて、酒堂は灯にかたぶきて、其茶に玉川が歌を詠じ、丈艸は月にうそぶきて、其酒に樂天が詩を吟ず。支考は若く、木節は老ひぬ。智月は物のおぼつかなふ、かつぎのあまのなま浮びならず。それが中にも惟然法師は酒におごろき茶に感じ、ほむるもそしるもそらに風吹て、爰に三子者の志をためざらんや。まして其外の友とする人も、峨々洋々の心ざしをしれれば、すべては飲中八仙のあそびならん。誠や、つれ〴〵の法師だに、心をつくろはぬ友えらびは、かゝる月見の佗なるやと、思ひしまゝの草の庵に浮世の外の風狂をつくせり。

米くるゝ友をこよひの月の客

かくて三盃の興に乘じて、湖水の月に船を浮べんと、物このむ人の風情をそへたるに、杖に瓢簞の唐土はなけれども、扇に茶瓶の若男あれば、赤壁の船のさほしさにはあらざめり。さゞ波や、打出の濱の名にしあふ、鏡の山もこなたにさしむかひ、日枝は横川の杉につらなりて、比良の高ねは雁をもかぞへつべし。うしろに音羽の峰高く、石山の鐘はあはづの嵐にさえて、そこに楓橋の霜も置ぬらん。矢橋の歸帆は、今宵をもてなすに似たるべし。

名月や湖水に浮ぶ七小町

されば、我朝の紫式部に、石山に源氏のおもかげを寫し、唐國の蘇居士は、西湖に越女のよそほひをたゝふ。いづれも風雅の名にのこりて、今のまぼろしに浮ざらんや。實そも和漢の名蹤なりけらし。さて松本に舟をさしよせて、茶店の欄干に心をはてば、月はよし蓬萊の水をへだてず。身はたゞ芙蓉の露にうろほふ。竹の林の酒も時ならで、松が江の鱸はこよひなるをや。猶はたかたぶく月の名殘には、辛崎の松もひさりや立る。古き都の名もゆかしければ、尾花川の明ぼのをこそさ、千那・尙白をおごろかしぬれば、夜ははや五更に過ぬべし。

三井寺の門たゝかばやけふの月

(一)誠よ、推敲のむかしながら、船にこよひの遊をおもへば、此坐に韓愈が文章をもあざむき、賈島が詩賦をももどきぬべき詩人文客にさぼしからねば、たとへ赤壁前後といふとも、その地に此人をはづべきやさ見ぬもろこしを相手にとりて、今宵の風流をあらそふほどに月は長等山の木の間に入りぬ。

〔一〕『芭蕉文集』に「誠也」

既望の賦

元祿四年作

支考の『本朝文鑑』第二の「賦ノ類」に揭げてある。前の月見の賦と疑へばこれも怪しくない事もない。寬政十年板の『墅田集』に「いざよひ　芭蕉」さ題して載するものは文鑑さは別稿で却つて原文の筆緻の近いやうなので、全文を附載する事とした。

其の一（本朝文鑑）

望月の殘興なをやます。今宵は二三子にいさめられて、船をかた田の浦にはす。其日もたそがれのほどならん、なにがし成秀さいふ人の家の後に漕入れて、醉翁・狂客の月にうかれて來れるありさ船の中より聲〳〵によばふ。あるじは思ひがけず、おごろきよろこびて、簾をまきちりをはらふに、その後園に芋めりさゝげありて、鯉・鮒の切目たゞさぬにしもあらず。やがて岸上に(二)榭をならべ筵をのべて、をの〳〵いざ宵の宴を催す。月はまつほどもなくさし出て、湖上はなやかに照わたれり。爺て

きゝぬ。仲秋望の日は月の浮見堂(うきみだう)にさしむかふを鏡山(かゞみやま)といふなるよし。今宵なをそのあたり遠からじと、かの堂上の欄干によれば、三上(みかみ)・水莖(みつくき)は左右にわかれて、その間に十二峰の影をひたす。とかくいふほど月も三竿にして、黒雲(くろくも)のうちにかくれたれば、いづれか鏡山(かゞみやま)といふ事をわかず。されどあるじの興をそへて、おり／＼雲のかゝるこそと、客をもてなせる心ざし、いと切なり。やがてその月の雲をはなるゝほど、水面に玉塔の影をくだきて、あらたに千體佛の光をそふ。誠やいざよひのそらを世の中にかけて、かたぶく月のおしきのみかは　とは京極黄門の歎息の詞なるを、我はこよひしも此堂にあそびて、二たび惠心僧都の衣をうるほす。無常觀相の便ならずやといふに、あるじは興に乘じて來れる客を、などとは興つきて歸さむやと、もとの岸上に盃をあぐれば、月は横川(よかは)にかたぶきて、姑蘇城の鐘も聞ゆなるべし。

〔一〕本文「摺」に誤る。

其の二（堅田集）

望月の殘興猶やまず。二三子いさめて船を堅田の浦に馳す。其日申の時ばかりに、何がし茂兵衞成秀(なりひで)といふ人の家の後に至る。醉翁・狂客月にうかれて來れりと、舟中より聲／＼によばふ。あるじ思ひがけず、驚よろこびて、簾をまき塵を拂ふ。園中に芋あり、さゝげあり、鯉・鮒の切目たゞさぬこそいと興なけれと岸上に榻をならべ、莚をのべて宴を催す。月は待ほどもなくさし出、湖上花やかにてらす。兼て聞、仲秋望の日、月(つき)、浮見堂にさしむかふを鏡山といふとかや。今宵しもなをそのあたり遠からじと、彼堂上の欄干によつて、三上・水莖の岡南北にわかれ、其間にして崩引(本ノマゝ)はへ、小山頭をまじゆ。兎角いふ程に月三竿にして、黒雲のうちにかくる。いづれか鏡山といふ事をわかず。あるじの曰、おり／＼雲のかゝる社(こそ)と、客をもてなす心いと切なり。やがて月雲外にはなれ出て、金風・銀波千體佛の光に映ず。かのかたぶく月のおしきのみかは　と京極黄門の歎息のことばをとり、いざよひの空を世の中にかけて、無常の觀のたよりとなす。此堂にあそびてこそ、ふたゝび惠心の僧都の衣をうるほすなれといへば、あるじ又云、興に乘じて來れる客を、など興さめて歸さむやと、もとの岸上に盃を揚て、月は横川にいたらんとす。

鎖あけて月さし入ようき御堂

成秀庭上松を誉ることば

元禄四年作

『堅田集』所載の文で、「既望賦」に「何がし茂兵衛成秀」とある其の人に書き與へたのであらう。堅田の既調が所持せる芭蕉の眞蹟によつて同集に揭げたのである。

松あり。高さ九尺ばかり、下枝さし出るもの一丈、餘枝上段を重、其葉森々とこまやかなり。風琴をあやどり、雨をよび波を起す。箏に似、笛に似、鼓に似て、波天籟をとく。當時牡丹を愛する人、奇出を集めて他にほこり、菊を作れる人は小輪を笑て人にあらそふ。柿木・柑類は其實を見て枝葉のかたちをいはず。唯、松獨霜後に秀、四時常盤にしてしかも其けしきをわかつ。樂天曰、松能舊氣を吐、故に千歳を經と、主人月をよろこばしめ、心を慰するのみにあらず。長生保養の氣を知て、齢をまつ

に契るなるべし。

元禄四年仲秋日　はせを

伊賀新大佛之記

元禄元年作

史邦の『小文庫』上卷にみだしの如くあるが、『一葉集』には「伊賀大佛記」となつてゐる。

伊賀の國阿波の庄に新大佛といふあり。此ところはならの都東大寺のひじり俊乘上人の舊跡なり。ことし舊里に年をこえて、舊友宗七・宗無ひとり・ふたりさそひ合して、かの地に至る。仁王門・撞樓のあとは枯たる草のそこにかくれて、(一)松のいはゞ事とはむ石居ばかりすみれのみして　と云けんも、かゝるけしきに似たらむ。なを分いりて蓮華臺・獅子の座なんどは、いまだ苔のあとをのこせり。御佛はしりへなる岩窟にたゝまれて、霜に朽苔に埋れてわづかに見えさせ玉ふに、御ぐし斗はいまだつゝ

がもなく、上人の御影をあがめ置たる草堂のかたはらに安置したり。誠にこゝらの人の力をついやし、上人の貴願いたづらになり侍る事もかなしく、涙もおちて談[二]もなく、むなしき石臺にぬかづきて[一]、

　丈六に陽炎たかし石の上

〔一〕『一葉集』「松ものいはゞと問ん礎ばかり」
〔二〕同「語もなく」
〔三〕同「ぬかづき侍て」

更科姨捨月之辨

元祿元年作

蝶夢の『芭蕉翁文集』の「更科紀行」の最後に此の文章の大半を取つて附添へてある。本文は『小文庫』の下卷にあるので、『更科紀行』とは全く別に起稿したのであらう。

[一]あるひはしらゝ・吹上ときくに、うちさそはれて、ことし姨捨の月みんとしきり(頻)なりければ、八月十一日みのゝ國をたち、道とほく日數すくなければ、夜に出て暮に草枕す。思ふにたがはず、その夜さらしなの里にいたる。山[二]は八幡(やはた)といふさとより一里ばかり南に、西南によこ(横)をりふして、冷(すさま)じう高くもあらず、かどかどしき岩なども見えず、只哀ふかき山のすがた(姿)なり。なぐさめかねしと云けむも理(ことわ)りしられて、そゞろにかなしきに、なにゆへにか老たる人をすてたらんとおもふに、いとゞ涙も落そひければ、

　おもかげや姨ひとり泣月の友
　いざよひもまた更科の郡かな

〔一〕『一葉集』に「あるひはしらゝ・吹上ときくに、うちさそはれ」」を脫す。
〔二〕『芭蕉翁文集』の更科紀行に「山は」を「姨捨山」として以下全文を附添へたり。

文字摺石

元祿二年作

『奥細道』の起稿後にいく度か書き直したらしく、元祿時代の板本にすくなくも三通り傳へられてゐる。楚常の『卯辰集』・史邦の『小文庫』・千山の『花の雲』にそれ〴〵違つた書き振りであるが、問題の『翁反故』所載の分は『卯辰集』から抄出したらしい。風德の『芭蕉文集』は『小文庫』から再錄してゐる。

其の一（卯辰集）

しのぶもじずりの石は、みちのくふくしまの驛にありて、往來の人の麥くさを取りて、このいしをこゝろみけるを、里びとども心うくおもひて、此谷にまろばし落しぬ。石の面はしたざまにふしたれば、今はさるわざする事もなく、風雅の昔にかはれるをなげきて、

早苗つかむ手もとや昔しのぶ摺　翁

其の二（花の雲）

もぢ摺石はふくしまの驛東一里斗に、山口と云所に有。里人のいひ傳へ侍るは、往來の人の此石試むと、麥草をあらし侍るをにくみて、此谷に落し入侍るよし。今はちがやのなかに埋れて、石の面は下ざまになり侍るとかや。試に風流のむかしにおとり侍るぞ、いとほしくおぼえ侍。

早苗つかむ手もとやむかし忍ぶ摺

其の三（小文庫）

忍ぶの郡しのぶの里とかや。文字ずりの名殘とて、方二間ばかりなる石あり。此石はむかし女のおもひに石になりて、其面に文字ありとかや。山藍摺みだるゝゆへに、戀によせておほくよめり。いまは谷合に埋れて、石の面は下ざまになりたれば、させる風情もみえずはべれども、さすがにむかしおぼへてなつかしければ、

早苗とる手もとや昔忍ずり　芭蕉

銀河序

元祿二年作

許六の『本朝文選』後改題して『風俗文選』の巻之五「序ノ類」に入れてある。『芭蕉翁文集』にも再録されてゐる。

北陸道に行脚して。越後ノ國出雲崎といふ所に泊る。彼佐渡がしまは。海の西十八里。滄波を隔て。東西三十五里に。よこをりふしたり。みねの嶮難・谷の隈々まで。さすがに手にとるばかり。あざやかに見わたさる。むべ此島は。こがねおほく出て。あまねく世の寶となれば。限りなき目出度島にて侍るを。大罪朝敵のたぐひ。遠流せらるゝによりて。たゞおそろしき名の聞えあるも。本意なき事におもひて。窓押開きて。暫時の旅愁をいたはらんとするほど。日既に海に沈で。月ほのくらく。銀河半天にかゝりて。星きら／＼と冴たるに。沖の方より。波の音しば／＼はこびて。たましゐけづるがごとく。腸ちぎれて。そゞろにかなしびきたれば。草の枕も定らず。墨の袂なにゆへとはなくて。しぼるばかりになむ侍る。

あら海や佐渡に横たふあまの川

山中の湯

太蟲の『芭蕉翁眞蹟拾遺』にある文で、沼波氏の全集に引いてゐる。

北海の磯づたひして、加州山中の涌湯に浴す。里人のいはく、此處は扶桑三の名湯の其一なりと。誠に浴することしば／＼なれば、皮肉うるほひ筋骨に通りて神心ゆるく、ひとへに顔色をとゞむる心地す。かの桃源も船をうしなひ、慈童の菊の枝折もしらず。

やまなかや菊は手折らじ湯のにほひ

元祿三年仲秋

閉關說　　元祿五年作

深川の芭蕉庵に閉居した時代の文章である。史邦の『小文庫』・朱拙の『今日の昔』及び『本朝文選』にも卷之四「說ノ類」に收めてある。孰れも格別の異同はないが『小文庫』を本文とした。

色は君子の惡む所にして、佛も五戒のはじめに置り(おけ)といへども、さすがに捨がたき情のあやにくに、哀なるかた〳〵もおほかるべし。人しれぬくらぶの山の梅の下ぶしに、おもひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人目の關ももる(守)人なくば、いかなるあやまちをか仕出(しいで)てむ。あまの子の浪の枕に袖しほれて、家をうり身をうしなふためしもおほかれ(多)ど、老の身の行末をむさぼり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、はるかにまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀(まれ)なりとして、身の盛(さかり)なる事は、わづかに二十餘年也。はじめの老の來れる事一夜の夢のごとし。五十年・六十年のよはひ(齡)かたぶくより、あさましうくづをれて、宵寢がちに朝起したるね覺の分別、なにごとをかむさぼる。おろか(愚)なる者は思ふことおほし。煩惱增長して一藝すぐるゝものは、是非の勝(すぐ)る物なり。是をもて世のいとなみに當(あて)て、貪慾の魔界にこゝろを怒(いから)し、溝洫(こうきよく)におぼれて生すことあたはずと、南華(なんくわ)老仙の唯利害を破却し、老若をわすれて閑にならんこそ老のたのしみとは云べけれ。人來れば無用の辯有。出ては他の家業をさまたぐるもうし。尊敬が戸を閉て、杜五郎が門を鎖むには、友なきを友とし、貧を富りとして五十年の頑夫(ぐわんぷ)自書、自禁戒となす。

　あさがほや晝は鎖おろす門の垣　　はせを

紙衾記　　元祿二年作

『奥細道』の戻り美濃大垣の如行亭で、貧しい鍛冶の竹戸に對し、行脚中携へた紙衾を與へた時

の文章である。『和漢文操』巻之六の「記ノ類」に出てゐる。

古きまくら、古きふすまは、昔妃がかたみより傳へて戀といひ哀傷とす。錦床の夜のしとねの上には、鴛鴦をぬひ物にして、ふたつのつばさに後の世をかこつ。彼はその膚にちかく、共にほひ殘りとゞまれらんをや戀の一物とせん。むべなりけらし。いでや此紙のふすまは戀にもあらず、無常にもあらず、蜑の苫屋の蚤をいとひ、驛のはにふのいぶせきを思ひて、出羽國最上といふ所にて、ある人のつくり得させたる也。越路の浦々、山館・野亭の枕のうへには、二千里の外の月をやどし、蓬・むぐらのしきねの下には、霜にさむしろのきりぎりすを聞て、晝はたゝみて脊中に負ひ、三百余里の嶮難をわたり、終に頭をしろくしてみのゝ國大垣の府にいたる。なをも心のわびをつぎて、貧者の情をやぶることなかれと、我をしたふ者にうちくれぬ。

烏の賦　元祿三年作

加生後の凡兆宛の手紙によると、これは加生の「憎烏之文」を増補して芭蕉の作としたので、明和元年板の『折つゝじ集』に「湖南の六素亭に眞蹟を拜して」謄寫したとあり、同二年板の『蕉門昔語』にも「大津文素所持」と見えてゐる。

一、烏大小有て名を異にす。小を烏鵲といひ、大を鴉太といふ。此鳥反哺の孝を讃して鳥中の曾子に比す。或は人家に行人を告、天の川に翅をならべて、二星の媒となれり。あるひは大年のやどりをしりて春風をさとり、巣を改むといへり。雪の曙の聲寒げに夕に寢所へ行なんど、詩歌の才士も情あるに云なし、繪にも書れてかたちを愛す。只貪猶の中にいふ時は其德大いなり。又汝が罪をかぞふるときは、其德小にして害又大也。就中彼鴉太は性佞強惡にして鷲の翅をあなどり、鷹の爪の利事を恐れず。肉

は鴻雁の味もなく、聲は黄鳥の吟にも似ず。啼く時は人不正の氣を抱て、かならず凶事をひいて愁を問ふ。里にありては栗柿の梢をあらし、田野に有ては田畑を費す粮に辛苦の勞をしらずや。或は雀のかひこをつかみ、池の蛙を喰ふ、人のしかばねを待、牛馬の腸をむさぼりて、終にいかの爲に命をあやまり、鵜の眞似をしてあやまりを傳ふ。これみな汝むさぶること大にして、其智を責ざる誤なり。汝が如き心貪欲にして、かたちを墨に染たる人に有て賣僧といふ。釋氏もこれをにくみ、俗士も甚うとむ。嗚呼汝よくつゝしめ。羿が矢先にかゝつて、三足の金烏に罪せられんことを。

煤掃之説

元禄六年作

史邦の『小文庫』に此の説に添へた發句によつて山店等の歌仙があり、芭蕉の文章に疑ひないにも關らず、『一葉集』はこれを眞僞不審之部に置いてある。蝶夢は何等怪しまず、『芭蕉翁文集』に採録してゐる。

明ぼのゝ空より物のはた〳〵ときこゆるは、疊をたゝく音なるべし。けふは師走十三日、煤はきのことぶきなり。げにや雲井の儀式、九重の町の作法は嘉例ある事にして、唯なみ〳〵の人のすゝはく躰こそいと面白けれ。をの〳〵門さしこめて、奥のひと間を屏風にかこひなし、火鉢に茶釜をかけて、嫗が帷子の上張、爪さき見えたる足袋もいとさむく、冬の日かげのはやく昔になりゆき、庭の隅、調度どもとりちらしたる中に、持佛のうしろむきたるご目には立なれ。家の童の椽のやぶれ、簀子の下を覗きまはるは、なにをひろふにやとあやし。味噌とよばる大男の袋かぶり、裳きたるもめづらかに、米價のサンうちつけ、粗しらけ行燈はりかえて、田作り鱠、あさづけのかほり花やかに、かみしもの膳すえならべたるに、ほどなく暮て高いびきとはなりぬ。

すゝはきや暮ゆく宿の高鼾

澁笠銘　幷序

支考の評に「元祿甲戌の夏、伊賀の西麓庵にいまして文稿十二篇の再校ありしが、此銘もその一篇也」とあつて『和漢文操』に出てゐる。蝶夢の『芭蕉翁文集』には「笠張の說」と題してある。

其の一　元祿七年作

草の扉にひとりわびて、秋風さびしきおり〳〵竹取のたくみにならひ、妙観が刀をかりて、みづから竹をわり竹をけづりて、笠つくりの翁となる。心しづかならざれば、日をふるに物うく、巧つたなければ夜をつくしてならず。あしたに紙をかさね、ゆふべにほして、又かさね〳〵澁といふ物をもて色をさはし、ます〳〵堅からん事をおもふ。廿日すぐる程にこそやゝいできにけれ。其たかちうらの方にまき入、外ざまに吹かへりなど、荷葉の半ひらくるに似て、中〳〵おかしき姿也。さらばすみがねのいみじからんより、ゆがみながらに愛しつべし。西行法師のふじ見笠か、東坡居士が雪見笠か、宮城野の露に供づれねば、呉天の雪に杖をやひかむ。霰にさそひ時雨にかたふけ、そゞろにめでゝ殊に興ず。興のうちにして俄に感ずる事あり。ふたゝび宗祇の時雨ならでも、かりのやどりに袂をうるほして、みづから笠のうちに書つけ侍る。

世にふるはさらに宗祇のやどり哉

其の二　元祿二年作？

曾良の遺稿『雪丸げ』にあるからは、元祿二年前後の作と見なければならぬ。支考の『和漢文操』にある「澁笠の銘」は此の舊稿に筆を入れたのであらう。兩者を比較すると、それが明瞭になるので、初稿の分さして附載する。

草の扉に獨〔一〕わびて、秋風の淋しき折〳〵、妙觀が刀を借、竹取の巧みを得て、竹をさき竹を削て、自笠作の翁と名乘。巧拙けれは日を盡して不ㇾ成、こゝろ安からざれば日を分つに懶し。朝紙をもて張り、夕部にほして又はる。澁といふ物にていろを染、いさゝか漆を施して堅からんことを要す。廿日過るほどにこそやゝいできにけり。笠のはしの斜に裏に卷入、外に吹かへして、ひさへに荷葉の半開けるに似たり。規矩の正しきよりも中〳〵おかしき姿也。彼西行の侘笠か、坡翁、雪天の笠か。いでや宮城野の露見に行ん。呉天の雪に杖を曳ん。霰にいそぎ時雨を待て、そゞろにめでたし。殊にふれて〔二〕自ら筆をさりて、笠のうちに書付侍りけらし。

世にふるも更に宗祇のやどり哉　桃青書

〔一〕『新七部集』に「待わひ」に誤る。
〔二〕同「殊にぬれて」に誤る。

權七にしめす　元祿元年作

尾張熱田にて荷兮の僕權七に與へた文章である。

巴靜の『刷毛序』に收めて寶永三年板行されてゐる。

舊里を去てしばらく田野に身をさすらふ人あり。家僕何がし水火のため身をくるしめ、心をいたましめ、其猿奴阿段が功をあらそひ、陶侃が胡奴をしたふ。まことや道は其人を取べからず。物はそのかたちにあらず。下位に有ても上智の人ありといへり。猶行心織肝たゆむ事なかれ。主も其善をわするべからず。

先いわへ梅をこゝろの冬籠

里長に寄す　貞享元年作

青長の『國名盡集』に、大和國當麻寺より六十丁先、竹の内といふ宿長の末葉、今油屋喜右衛門所持芭蕉翁眞跡の一軸」を寫し來つて載する旨を附記してある。同書は文政二年の板行である。

大和國竹の内といふ處に日頃とゞまりけるに、里の長なりける人、朝夕間來りて、旅の愁を慰けらし。誠その人は尋常にあらず。こゝろ高きに遊んで、身は芻蕘・雉兎の交をなし、自鋤を荷て、淵明が園にわけ入、牛を牽て箕山の隱士を伴ふ。且、その職を勤て職に倦ず。家は貧しきを悅てまどしきに似たり。唯是市に閑を偸で、閑を得たらん人は此長ならん。

綿弓や琵琶に慰む竹のおく

蕉散人　桃青

與二或人一文　元祿元年作

『一葉集』に收めた以前の古板本に所見ない。元祿元年『笈の小文』の紀行の時に作ったのであらう。

大和國長尾の里といふ處は、さすがに都遠きにあらず。山里にして山ざとにあらず。あるじ心あるさまにて老たる母のおはしけるを、其家のかたへにしつらひ、庭前に木草のおかしげなるを栽置て、岩尾めづらかにすゑなし、手づから枝をため石を撫では、蓬萊の島ともなりぬ。いく藥とりてんよと老母につかへ、なぐさめなどせし實ありけり。家まづしくして、孝をあらはすとこそ聞なれ。まづしからずして孝を盡す。古人もかたきことになんいひける。

冬しらぬ宿や籾する音あられ

許六離別詞　元祿六年作

彦根に歸藩する許六に送った文章である。許六は『勻塞』坤の巻に收めて元祿九年板行した。その後寶永三年板の『本朝文選』に再錄し、「柴門ノ辭」と題を改め「送ル歸ニ許六ガ之故鄕ニ餞別辭也」と小みだしを添へてある。

去年の秋かりそめに面をあはせ、ことし五月の初深切に別をおしむ。其わかれにのぞみて、ひとひ草扉をたゝいて、終日閑談をなす。其器、畫を好、風雅を愛す。予こゝろみにとふ事あり。畫は何の爲に好や。風雅の爲好といへり。風雅は何の爲愛すや。畫の爲愛といへり。其まなぶ事二にして、用をなす事一なり。まことや君子は多能を恥と云れば、品ふたつにして、用一なる事可レ感にや。畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が畫は精神徹に入、筆端妙をふるふ。其幽遠なる所、予が見る處にあらず。予が風雅は夏爐冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし。たゞ釋阿西行のことばのみ、かりそめに云ちらされしあだなるたはぶれごとも、あはれなる所多し。後鳥羽上皇のかゝせ給ひしものにも、これらは歌に實ありて、しかも悲しびをそふるとのたまひ侍しとかや。さればこの御ことばを力として、其細き一筋をたどり、うしなふ事なかれ。猶古人の跡をもとめず。古人の求たる所をもとめよと、南山大師の筆の道にも見えたり。風雅も又これに同じと云て、燈をかゝけて、柴門の外に送りてわかるゝのみ。

元祿六孟夏末　風羅坊芭蕉述

送許六辭　元祿六年作

同年五月六日出立の知らせに接し、芭蕉は次郎兵衛を使として、更に一篇の文章と發句とを許六の許に屆けさせた。『勻塞』の「許六離別詞」の次に「其詞」として掲けてある。

木曾路を經て舊里にかへる人は、森川氏許六と云ふ。古しへより風雅に情ある人々は、後に笈をかけ草鞋に足をいため、破笠に霜露をいとふて、をのれが心をせめて、物の實をしる事をよろこべり。今仕官おほやけの爲には長劍を腰にはさみ、乘かけの後に鑓をもたせ、歩行若黨の黒き羽織のもすそは風にひるがへしたるありさま、此

人の本意にはあるべからず。

椎の花のこゝろにも似よ木曾の旅　はせを

うき人の旅にも習へ木曾の蠅　同

僧專吟餞別之詞　元祿六年作

江戸の蕉門作者で、後其角に屬した專吟の熊野詣を送る文章である。寛治の『芭蕉句選拾遺』に載つてゐる。

杖頭(ぢやうとう)に草鞋をかけて、笠の內に名をあらはす。元祿六とせ彌生の初、僧專吟、武江の東深川の艸扉を開て既一歩をはじむと書く。〔一〕此僧常に風情を好み、〔二〕市を避て年〳〵斗藪行脚の身となる。ことし又伊勢熊野に詣むとす。身は雲外の鶴にひとしく、流に觜をすゝぎ、千尋の岡に翅をふるふて、野に伏(ふし)雲に泊らん、胸中の塵いさぎよし。予、葎の交りをなす事久し。今此別にのぞみて、ともに岸上に立て箱根山はるかに見やる。彼白雲のたはめる處こそ、旅愁の嶮難さかしきちまたなるべけれ。君かならず首をめぐらして見よ。われ又岸上に立んといひて袂をわかちぬ。

鶴の毛の黑き衣や花の雲　はせを

〔一〕『芭蕉翁文集』に「書ぬ」
〔二〕『一葉集』に「風雅をこのみ」

曾良に寄す　貞享三年作

曾良の遺稿『雪丸げ』にあるが、『花膾』に信濃諏訪の久保島氏所持とて、眞蹟を石摺りさして揭げてあるのを本文とした。眠郎の『雪の薄』・梅人の『續深川』にもある。

曾良何某(なにがし)は此あたりちかく、かりに居をしめて、朝な夕なにとひつとはる。我くひ物いとなむ時は、柴折くぶる

たすけとなり、ちやを煮夜はきたりて〔一〕氷をたゝく。性隠閑をこのむ人にて、交金をたつ。あるよ、雪〔二〕をとはれて、

きみ火をたけよき物みせむ雪まろげ

〔一〕『雪丸げ』に「軒をたゝく」
〔二〕同「雪に訪れて」

寒夜辭　天和元年作

備前岡山の森々庵松後所持の眞蹟で、松後の追善集『ゆめみさせ』に掲げ寛政十二年板行された。

深川三またの邊りに艸庵を侘て、遠くは士峰の雪をのぞみ、ちかくは萬里の船をうかぶ。あさぼらけ漕行船のあとしら浪に、芦の枯葉の夢とふく風もやゝ暮過るほど、月に坐しては空き樽をかこち、枕によりては薄きふすまを愁ふ。

艪の聲波を打て腸氷る夜や涙

白髪吟 并序　貞享元年作

『和漢文操』巻之二の「歌類」の中に收め、其の評に「故翁嘗テ官ヲ辭シ玉ヒ故郷ヲ隔ルコト廿餘年ニシテ或ル年此懐舊アリ」とある。

便も文月の玉まつる比、武陵より古里に歸るに、廿とせの月日も夢なれや。北堂の萱艸も霜がれて、今はその俤だになかりしが、何事もむかしに立かはりて、はらからの鬢〔一〕しろく眉しはみて、つれなき命ありとのみ、いひ出る言ノ葉もなきに、このかみの守袋をほどきて、母の白髪おがめよ。浦嶋が子の玉手箱〔二〕に、汝が眉もやゝ老たりと、年月のおこたりはかたみに泣つゝ。

〔三〕一家みな杖にしら髪の墓まいり
まいるこゝろのかたみながらに

〔一〕『一葉集』に「はらからの發句」
〔二〕同「玉手箱汝が」
〔三〕同「手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜」

初雪の吟　貞享三年作

梅人の『續深川集』に出てゐる。文化九年板の『栞集』には芭蕉の右の如き眞蹟を掲ぐ。

我くさの戸(と)の初(はつ)雪(ゆき)見むと。よそに有ても空だにくもり侍れば、いそぎかへること、あまたゝびなりけるに、師〔一〕走中の八日はじめて雪降けるよろこび、

はつ雪や幸庵にまかりある

〔一〕『續深川』に「師走八日初て」

閑居箴　貞享三年作

支考の『本朝文鑑』第三卷の「箴ノ類」にある。

蝶夢の『芭蕉翁文集』にも出てゐる。

あら物ぐさの翁や。日比(ごろ)は人のとひ來るもうるさく、人にもまみえじ、人をもまねかじと、あまたゝび心にちかふなれど、月の夜、雪のあしたのみ、友のしたはるゝもわりなしや。物をもいはず、ひとり酒のみて心にとひ心にかたる。庵の戸おしあけて雪をながめ、又は盃をとりて筆をそめ筆をすつ。あら物ぐるおしの翁や。

酒のめばいとゞ寐られね夜の雪

歳暮　貞享四年作

知足の遺稿『千鳥掛』の上卷に「歳暮」と題して載つてゐる。

代々の賢(かしこ)き人々も、古里はわすれがたきものにおぼへ侍るよし。我今ははじめの老も四とせ過て、何事につけて

も昔のなつかしきまゝに、はらからのあまたよはひかたぶきて侍るも見捨がたくて、初冬の空のうちしぐるゝ比より、雪をかさね霜を經て師走、の末伊陽の山中に至る。猶父母のいまそかりせばと、慈愛のむかしも悲しく、思ふ事のみあまたありて、

古郷や臍の緒に泣としのくれ

伊勢廟前の吟　元祿元年作

「笈の小文」の旅に伊勢に廻つた時、廟前に於ける感慨の文章で、士朗の「枇杷園隨筆」に「鶯亭夜話」として出てゐる。

貞享五とせ如月の末伊勢に詣づ。此御前の土を踏事、今度五度におよび侍りぬ。さらに年のひとつも老行まゝに、かしこきおほむひかりも、たふとさも猶思ますされる心地して、かつ西行のかたじけなさにとよみけん、涙の跡もなつかしければ、扇うちしき砂にかしらかたぶけながら、

何の木の花とはしらず匂ひかな

高野の吟　元祿元年作

士朗の「枇杷園隨筆」に「秋畢夜話」として揭ぐ。同書は文化七年の板本である。

高野のおくにのぼれば、靈場さかんにして、法の燈消る時なく、坊舍地をしめて、佛閣甍をならべ、一印頓成の春の花は、寂寞の霞の空に匂ひておぼえ、猿の聲・鳥の啼にも腸を破るばかりにて、御廟をしづかに拜み、骨堂のあたりに佇て、倩おもふやうあり。此處はおほくの人のかたみの集れる所にして、わが先祖の鬢髪をはじめ、したしきなつかしきかぎりの白骨も、此内にこそおもひこめつれと、袂もせきあへず、そゞろにこぼるゝ涙をとゞめて、

父母のしきりに戀し雉の聲

栖去之辨　　元祿五年作?・

史邦の『小文庫』に「年號いづれの年にやしらず」とある通り作の年代は定めがたいが、一說の元祿五年說によつて置く。

こゝかしこうかれありきて、橘町といふ所に冬ごもりして睦月・きさらぎになりぬ。風雅もよしや是までにして、口をとぢんとすれば、風情胸中をさそひて、物のちらめくや風雅の魔心なるべし。なを放下して栖を去、腰にたゞ百錢をたくはえて、柱杖一鉢に命を結ぶ。なし得たり風情終に菰をかぶらんとは。

芭蕉を移ス詞　　元祿五年作

圖司呂丸が芭蕉から附與された『三日月日記』の稿本に、此の文章が入つてゐる。蝶夢の『芭蕉翁文集』に對照すると、ところどころ文字の異同が發見される。又何丸の『芭蕉翁句解參考』には「はせを葉をはしらにかけむ庵の月」の發句を終に添へてある。

菊は東籬にさかへ、竹は北窓の君となる。牡丹は紅白の是非に(一)ありて世塵にけがさる。荷葉は平地にたゝず、水清からざれば花さかず。いづれの年にや、栖を此境に移す時、芭蕉一もとを植ふ。(二)風土芭蕉の心にやかなひけん、數株の(三)莖を備へ、其葉茂りかさなりて庭を狹め、萓が軒端もかくる(四)ばかりなり。人呼で草庵の名とす。舊友・門人ともに愛して、芽をかき根をわかちて、處々に送ること年々になんなりぬ。一とせみちのくの行脚思ひ立

て、芭蕉庵すでに破れんとすれば、かれは籬の隣に地を替て、あたりちかき人〳〵に霜の覆ひ風のかこひなど、かへす〴〵たのみ置て、はかなき筆のすさびにもかき殘し、松はひとりになりぬべきにやと、遠き旅寐の胸にたゝまり、人〳〵のわかれ、ばせをの名殘、ひとかたならぬ佗しさも終に五とせの春秋を過して、ふたゝび芭蕉になみだをそゝぐ。今年五月の半、花たちばなのにほひも、さすがに遠からざれば、人〳〵の契りも昔にかはらず、猶此あたり得立さらで、舊き庵もやゝちかふ三間の茅屋つきぐ〳〵しう、杉の柱いと淸げに削なし、竹の枝折戸安らかに、葭垣厚くしわたして、南にむかひ池にのぞみて水樓となす。地は富士に對して、柴門景を追てなゝめなり。浙江の潮、三ツまたの淀にたゝへて、月を見る便よろしければ、初月の夕より雲をいとひ雨をくるしむ。名月のよそほひにとて、先ッ芭蕉を移す。其葉廣ふして琴をおほふにたれり。或は半吹おれて鳳鳥の尾をいたましめ、靑扇破て風を悲しむ。適〳〵花咲どもはなやかならず。莖太けれども斧にあたらず。かの山中不材の類木にたぐへて、其性たふよし。僧懷素は是に筆をはしらしめ、張横渠は新葉を見て、修學の力とせしとなり。予、其二ツをとらず。唯此陰にあそびて、風雨に破れやすきを愛するのみ。

〔一〕『芭蕉翁文集』に「是非ありて世塵に」
〔二〕同「一もとを植ゆ」
〔三〕同「雪構甍を」
〔四〕同「かへす〴〵」を脱す。
〔五〕同「三とせの」
〔六〕同「よし垣あつう」。
〔七〕同「水楼」に誤る。
〔八〕同「景をすゝめて」
〔九〕同「花咲も一」
〔一〇〕同「その性よし」

弔二初秋七日雨星一文　元祿六年作

風國の『泊船集』及び史邦の『小文庫』に出てゐる。元祿時代の二板本に見える程なので、後世のものには大概採錄されてゐる。

元祿六、文月七日の夜、風雲天にみち白浪銀河の岸をひたして、烏鵲も橋杭をながし、一葉梶をふき折けしき、二星も屋形をうしなふべし。今宵猶たゞに過さんも殘多しと、一燈をかゝげ添る折ふし遍昭・小町が哥を吟ずる人あり。是によつて此二首を探て、雨星の心をなぐさめむとす。

　小町が哥

高水に星も旅寢や岩の上　〔一〕はせを

　遍昭が哥

七夕にかさねばうとし絹合羽　杉風

〔一〕『泊船集』に作者名なし、『小文庫』にある。

蓑虫跋　貞享四年作

山口素堂が「蓑むしのねを聞にこよ草の庵」といふ句を芭蕉から送られたので、「まねきに應じてむしのねをたづねしころ」「蓑虫の説」と題する文章を書き、これに對して「跋」の意味で作つた一篇である。素堂の説は『本朝文選』卷(四)に載つてゐる。信濃中野町の田中万次郎氏の許に眞蹟の卷物が所藏されてゐる。それには一蝶が翠蓑翁朝湖として、枯枝より下れる蓑虫を描き、素堂の文章・芭蕉の跋、孰れも眞蹟疑ひなきものである。素堂の「又男文字に古風をいふ」四言の詩に「貞享丁卯歳誌焉」とある。標題は『一葉集』によつたので眞蹟にはない。

草の戸さしこめてもの佗しき折しも、偶蓑虫の一句を云。我友素翁、甚哀がりて、詩を題し文をつらぬ。其詩や錦をぬひ物にし、其文や玉をまろばすがごとし。つら〳〵見れば離騷のたくみあるに似たり。又蘇新・黄奇有。初に虞・舜・曾參の孝をいへるは人におしへをとれとや。其無能を感る事は、ふたゝび南花の心を見よとや。終に玉蟲のたはれは色をいさめむとならし。翁にあらずば、誰

かこの蟲の心をしらむ。靜にみれば物皆自得すと云り。この人によりて此句をしる。むかしより筆をもてあそぶ人おほくは、花にふけりて實ヲそこなひ、實を好て風流を忘る。此文やはた其花を愛すべし。其實猶くらひつべし。爰に何がし朝湖と云有。この事を傳えきゝて、これを畫く。まことに丹青あはくして情濃なり。心をとゞむれば蟲うごくがごとく、黃葉落るかとうたがふ。耳をたれて是を聽ケば、其蟲聲をなして秋の風そよ〳〵と寒し。猶閑窓に閑を得て、兩士の幸に預る事、蓑蟲のめいぼくあるに似たり。

芭蕉庵桃青 [桃] [芭蕉]

みなし栗集跋

天和三年作

其角の著『みなし栗』二巻の爲め、その跋に書き與へたのである。『みなし栗』は天和三年の板行である。

栗とよぶ一書、其味四あり。李杜が心酒を甞て、寒山が法粥を啜る。これに仍而其句、見るに遙にして聞に遠し。侘と風雅のその生にあらぬは、西行の山家をたづねて、人の拾はぬ蝕栗也。戀の情つくし得たり。昔は西施がふり袖の顏、黃金鑄ル小紫ツ。上陽人の閨の中には、衣桁に蔦のかゝるまで也。下の品には眉ごもり親ぞひの娘、娶・姑のたけき爭ひをあつかふ。寺の兒、歌舞の若衆の情をも捨ず。白氏が歌を假名にやつして、初心を救ふたよりならんとす。其ノ如震動虛實をわかたず。寶の鼎に句を煉て、龍の泉に文字を冶ふ。是必他のたからにあらず。汝が寶にして後の盜人ヲ侍。

天和三亥年仲夏日

芭蕉洞桃青鼓舞書

伊勢紀行跋　貞享四年作

去來・千子の兄妹が貞享四年伊勢に旅をした。その紀行の跋に書いた文章である。『伊勢紀行』は嘉永三年出板された。寛政三年板の『あか冠』にも此の跋文は採錄されてゐる。

根なし草の花もなく、實(み)もみのらず。たゞいやしき口にいひのゝしれるたはぶれごとあり。(一)さるを其角ひとゝせ都の空に旅寐せし頃、向井氏去來のぬし、むつまじき契有て、酒のみ茶にかたる折ゝ、甘き・辛き・しぶき・淡き心の水の淺きより深きをつたへて爲に(二)一擲(いつてき)して百川の味をしれるなるべし。今年の秋いもうと(妹)をゐて(率)伊勢に詣づ。白川の秋風より、かの濱荻(三)折しきて、とまり〳〵のあはれなることども、かたみに(四)書顯(かきあらは)して、我草の戸の案下に贈る。ひとたび唫じて感を起し、二たび誦して感をわする。三たびよみて其無事なることを覺ゆ。此人や此道に至れり盡せり。

(五)東西のあはれさひとつ秋の風　芭蕉庵桃青

〔一〕『芭蕉翁文集』に「たはぶれごとの世なるを其角一とせ」、『あか冠』に「たはぶれなりけるを其角一とせ」
〔二〕『芭蕉翁文集』に「終に」
〔三〕同「かの濱荻の聲を聞て」
〔四〕同「かたはし書あらはして」
〔五〕同「東にしあはれさ」、『一葉集』に「西ひがし」

曠野集序　元祿二年作

尾張熱田の檔木堂荷兮は元祿二年『曠野集』の撰を了つた。その序として書いた文章で、江戸から送つて荷兮の許に屆いたころは、曾良と共に奧の細道の行脚中であつた。

尾陽蓬左(ほうさ)、檔木堂(きやうぼくだう)主人荷兮(かけい)子、集を編て、名をあらのと

いふ。何故に此名有事をしらず。予はるかにおもひやるに、ひとゝせ此郷に旅寐せしおり〳〵の云捨、あつめて冬の日といふ。其日かげ相續て春の日、また世にかゞやかす。げにや衣更着・やよひの空のけしき、柳・櫻の錦を爭ひ、てふ鳥のをのがさま〴〵なる風情につきて、いさゝか實をそこなふものもあればにや。いといふのいとかすかなる心のはしの有か、なきかにたどりて、姫ゆりのなにゝもつかず、雲雀の大空にはなれて、無景のきはまりなき道芝のみちしるべせむと、此野の原の野守とはなれるべし。

元祿二年彌生　　芭蕉桃青

瓢の銘　　貞享元年作

芭蕉庵六物の一に大瓢號二四山一とある其の銘で、成美の『隨齋諧話』に眞蹟のまゝ掲ぐ。

瓢之銘　　山素堂

一瓢重二黛山一　自咲稱二箕山一
莫レ慣二首陽餓一　這中飯顆山

顏公の垣穗におへるかたみにもあらず。惠子がつたふ種にしもあらで、我にひとつのひさごあり。是をたくみにつけて、花入るゝ器にせむとすれば、大にしてのりにあたらず。さゝえに作りて、さけをもらんとすれば、かたちみる所なし。あるひとのいはく、草庵のいみじき糧入つべきものなりと。まことによもぎのこゝろあるかな。やがてもちゐて隱士素翁にこふて、これが名を得さしむ。そのことばは右にしるす。其句みなやまをもておくらるゝが故に、四山とよぶ。中にも飯顆山は老杜のすめる地にして、李白がたはぶれの句あり。素翁りはくにかはりて、我貧をきよくせむとす。かつむなしきときは、ちりの器となれ。得る時は、一壺も千金をいだきて、黛山もかろしとせむことしかり。

ものひとつ瓢はかろき我よかな

芭蕉桃青書　〔印：芭蕉〕

座右ノ銘　　元祿四年作

許六の『本朝文選』にある。支考の『和漢文操』には此の發句のみ「開口ノ聯」として掲ぐ。

人の短をいふ事なかれ　　芭蕉
己が長をとくことなかれ

銘に云ク

〽ものいへばくちびるさむしあきのかぜ

机ノ銘　　元祿四年作

許六の『本朝文選』卷之六「銘ノ類」のはじめに

出てゐる。『一葉集』には「應ニ蘭子求一　元祿仲冬芭蕉書」とある。

閒なる時は臂をかけて。嗒焉吹噓の氣をやしなふ。しづかなる時は書を紐とひて。聖意賢才の精神をさぐり。靜なる時は筆をとりて。義素の方寸に入。たくみなすおしまづき。一物三用をたすく。高さ八寸。面二尺。兩脚にあめつちふたつの卦を彫にして。潜龍牝馬の貞に習ふ。是をあげて一用とせむや。また二用とせむや。

歌仙の賛　　天和年中作

風德の『芭蕉文集』天の卷にあるが、それ以前の板本に所見ない。『一葉集』には「これは　雪しやれて翁閑けん芭蕉洞　井海　と云句にて一卷を送りし時の嘆美なり」とある。

伊豫國松山の嵐、はせをの洞の枯葉を吹て、其聲歌僊を

吟ず。嘹喨々刁々たる風の音、玉をならし、金石のひゞく。或はつよく或はやはらかに吹て、且人をしてなかしめ、人に心をつく。萬竅怒號繹替て、句毎の意味各別なり。只是天籟自然の作者、芭蕉は破れて風飄ゝ。

〔一〕『一葉集』に「寥々刁々」
〔二〕同「金鐵のひゞき」
〔三〕同「冬ゝ別也」

畫讃　貞享二年作

正秀の追善集『水の友』に所載され、享保九年板行になつてゐる。それに「此句泊船集に冬野哉とあやまれるゆへこゝにしるす」とある。

かさ着て馬に乗たる坊主は、いづれの境より出て、何をむさぼりありくにや。このぬしのいへる、是は予が旅のすがたを寫せりとかや。さればこそ三界流浪のもゝ尻、おちてあやまちすることなかれ。

馬ぼく／＼我を畫に見る夏野哉　芭蕉翁

士峰の賛　貞享年中作？

寛治の『芭蕉句選拾遺』にある。それ以前のものに所見ない。

崑崙は遠く聞、蓬萊・方丈は仙の地也。まのあたり士峰地を抜て蒼天をさゝえ、日月の爲に雲門をひらくかとむかふところ、皆表にして美景千變。詩人も句をつくさず、才士・文人も言をたち、畫工も筆捨てわしる。若藐姑射の神人有て、其詩を能せんや、其繪をよくせん歟。

雲霧の暫時百景をつくしけり

須磨　元祿元年作

桃鏡の『芭蕉翁眞蹟集』に横物東都久保田氏柏

予所持さして、眞蹟のまゝ模刻してある。

卯月の中比、須磨の浦一見す。うしろの山は青ばにうるはしく、月はいまだおぼろにて、はるの名殘もあはれながら、たゞ此浦のまことは秋をむねとすることにや。心にものゝたらぬけしきあれば、

夏はあれど留守のやう也須磨の月　はせを

杵折の賛　元禄元年作

寛治の『芭蕉句選拾遺』の附録にある。蝶夢の『芭蕉翁文集』にも載つてゐる。

此杵の折と名付るものは、〔一〕上ッがたにめでさせたまひ、目出度き扶桑の奇物となれり。汝いづれの山より生出〔二〕て、何國の里の賤が礎のかたみ成ぞや。むかしは横槌たり。今は花入と呼で、貴人頭上の具に名を改といへり。人またかくのごとし。高に居て驕るべからず。ひきゝに有てうらむべからず。唯世の中は横槌なるべし。

此槌のむかし椿か梅の木か　はせを

〔一〕『芭蕉翁文集「上つがたにて」

〔二〕同「山より出て」

氣比の宮　元禄二年作

東恕の『四幅對』に「桂下園家の花拔書に」として、享保四年板行されてゐる。

八月十四日敦賀の津に宿をもとめて、氣比の宮に夜參す。むかし二世の遊行上人、この道の泥土をきよめんとて、みづから砂をはこび給ふより、砂持の神事とて、今の代にもつたへ侍るとかや。社頭神さびたるありさま、松の木の間に月の影もりて、信心やゝ骨に入べし。

月清し遊行のもてる砂の上

沈鐘　元禄二年作

この文章もまた東恕の『四幅對』にある。「おなじ夜」は元禄二年八月十五日である。

おなじ夜あるじの物語に、此海に釣鐘のしづみて侍るを、國ノ守の海士を入て、たづねさせ給へど、龍頭のさかさまに落入て、引あぐべき便もなしと聞て、

月いづこ鐘はしづめる海の底

雲竹の讃　元禄三年作

雲竹は北向氏。越人の附句に「大師ののちの細字雲竹」とある程、能書家として知られ、芭蕉筆道の師といはれてゐる。此の讃は蝶夢の『芭蕉翁文集』にある。

洛の桑門雲竹自の像にやあらん。あなたの方に顔ふりむけたる法師を畫て、これに讃せよと申されければ、君は六十年あまり、予は既に五十にちかし。ともに夢中にして夢の形をあらはす。是にくはふるに寐言を以す

こちらむけ我もさびしき秋のくれ

少將の尼　元禄三年作

寛治の『芭蕉句選拾遺』に載するのを本文とし、蝶夢の『芭蕉翁發句集』にある分を參考の爲め前に添へた。

おのが音の誰人となむ。世にさたせられて、老の後志賀の里にかくれ侍りしとなり。いま大津松本あたり智月といふ老尼のもとに尋れて、かゝる事など語りけるついで、おもしろさに

少將の尼のはなしや志賀の雪　（芭蕉翁發句集）

大津にて智月といふ尼のすみかを尋て、おのが音の少將

とかや。老の後此あたりちかく、かくれ侍しといふをおもひ出て、

少將の尼のはなしや志賀の雪

（芭蕉句選遺拾）

鉢たゝきの贊　元祿三年作

伊勢の久保田秋雨氏所持の眞蹟である。（口繪參照）

鉢たゝきのうた　はせを　[桃青]　[芭蕉]

霜の夕にねをそへてうかれ友鳥行さきは
たのしき國のつれ〲にかをる茶の花目ざまし
夢にひとつまいれいざひとつ南無あみだ〲
此あかつきのひとこゑにふゆの夜さへもなく千鳥
いざきかむ南無阿彌陀〲

からさけも空也の痩も寒の内

〔一〕卒兒波小町贊　元祿四年作

支考の「本朝文鑑」の「贊ノ類」にあり、評云さして「此贊ハ湖南ノ才陀亭ニ在リテ其繪ハ三井ノ定光坊ニ在リ」と傳へ、『芭蕉翁文集』にも採錄してある。

あなたふと〲、蓑もたふとし。笠もたふとし。いづれの人かかたりつたへ（傳）、いかなる人か寫しとゞめて、〔二〕千歲（せんざい）のまぼろし、今こゝに現ず。其かたちある時はたましゐも、また爰にあらん。蓑もたふとし。笠もたふとし。

たふとさや雪ふらぬ日もみのと笠

〔一〕『芭蕉翁文集』に「卒都波小町の贊」
〔二〕同「千載」

三聖人の圖　　元禄六年作

秋屋の『花はさくら』に許六筆の宗祇・宗鑑・守武の畫像を摸寫して、此の文章と共に掲げてある。『枇杷園隨筆』には「卓池夜話」として擧ぐ。

夫風流に心をとめて、其四季にともなふもの、濱の眞砂の盡せぬ詠ならめ。其情を述て其ものをあはれむ人は、ことの葉の聖也。されば文明のころ、其道さかんなりし聖たちの言葉、今の掟となりて、其實なる事、今の人のすさむ事かたかるべし。されども風雅の流行は天地とゝもにうつりて、只つきぬを尊ぶべき也。されば彼の宗祇・宗鑑・守武の壽像を求めて、此道の好士許六の筆勞をかり、我拙き一句をつゞりて、道のたゞ萬古にさかんならんことをいのる而已。

芭蕉拜

月花のこれや實のあるじ達

西行像讃　　元禄年中作

史邦の『小文庫』及び許六の『本朝文選』に載つてゐる。

すてはてゝ身はなき物とおもへども
ゆきのふる日はさむく〔一〕こそあれ　　はせを
花の降日はうかれこそすれ

〔一〕『本朝文選』に「さぶくこそあれ」

悼天宥法印　　元禄二年作

天宥は羽黒山五十世の別當である。寶永七年板の『三山雅集』に此の文章が出てゐる。松童庵文二の『南谷集』には「元禄二年季夏」として眞蹟を掲ぐ。

羽黒山別當執行、不分叟天宥法印は、行法いみじききこえ有て、止觀圓學の法智才用人に施して、あるは山を穿ち

石を割て、巨靈の力、女蝸がたくみを盡して、坊舍を築き階を作れる青雲の滴をうけて、筧の水とをくめぐらせ、石の器、木の工、(一)四山の奇物となれる物多し。一山擧て其名を慕ひ、その德をあふぐ。まことにふたゝび羽山開基に等し。されどもいかなる天災のなせるにやあらむ。伊豆の國八重の汐風に身をたゞよひて、波の露はかなきたよりをなん告侍るとかや。この度下官三山順禮の序、追悼一句奉るべきよし、門徒(三)等しきりに勸めらるゝによりて、をろ〱戯言一句をつらねて、香の後に手向侍る。憚多き事になん侍る。

(四)そのたまや羽黑にかへす法の月

〔一〕『南谷集』に「圓覺の佛智」

〔二〕同「此山」

〔三〕同「門生」を消して「門徒」とす。

〔四〕同「無玉や」を消して「其玉や」とす。

悼嵐蘭詞

元祿六年作

嵐蘭は松倉氏、『延寶二十歌仙』以來の蕉門作者である。本文は其角の『うら若葉』によつたが支考の『笈日記』には「悼松倉嵐蘭」、許六の『本朝文選』には「嵐蘭誄」となつて載つてゐる。

金革を(一)しきねにして、あへてたゆまざるは士の志也。文(二)質片ならざるをもて、君子のいさをしとす。松倉嵐蘭は義を骨にし、(三)實を膓にし、老莊を魂にかけて、風雅を肺肝の間にあそばしむ。予、(四)因む事十とせ餘九とせにや。此三とせばかり官を辭して、岩洞に先賢の跡をしたふといへども、老母を荷ひ稚子をほだしとして、いまだ世波を(五)出ず。されども榮辱の境に居らず。日〱風雲に座して、ことし仲秋(六)中の三日、由井・金澤の波の枕に月をそふとて鎌倉に杖を引、そのかへるさより心ちなやましうして終息たえぬ。(七)廿七日の夜の事にや。七十年の母に先立、七才の稚子に思をのこす。いまだをしむべきよはひの五十年に(八)たらず。おほやけのためには腹押切ても悔まじき器のはかなき秋風に吹しほれて、(九)草の袂のいかに露けくも口惜(一〇)うあるべきと、今はの時の心さへしられて悲しき

に、〔一一〕母の恨み、はらからの歎き、したしきかぎりは〔一二〕傳へ聞て、ひとへに親屬の別れに同じ。過つことし、〔一三〕む月の末ばかりに稚子が手を取、予が草庵に來りて、かれに號得さすべきよしを乞ふ。王戎五才の眼ざしうるはし〔一四〕ければ、戎の一字を欠て嵐戎と名づく。その悦べる色、今目のあたりをさらず。生ゝる時むつまじからぬをだに、なくてぞ人は、としのばるゝ習ひ、増て父のごとく、子のごとく、手のごとく、足のごとく、年比〔一五〕なれむつびたる俤の愁の袂にむすほゝれて、枕もうきぬべき斗也。筆を取ておもひを述んとすれば才つたなく、いはむとすれば胸ふさが〔一六〕りて、只おしまづきにかゝりて、ゆふべの空にむかふのみ。

秋風に折てかなしき桑の杖　芭蕉

〔一〕『本朝文選』に「褥にして」
〔二〕同「氣質偏ならざる」
〔三〕同「義を骨にして實を膓にし」
〔四〕同「予さちなむ事」
〔五〕同「世波にたゞよふされども榮辱の間に」
〔六〕同「仲の秌中の三日」
〔七〕同「おなじき廿七日」
〔八〕同「五十年にだに」
〔九〕同「吹しほれたる草の袂」
〔一〇〕同「口なしくもあるべき今はの時の」
〔一一〕同「老母の」
〔一二〕同「聞傳へて偏に親族の別にひさし」
〔一三〕同「過つる睦月ばかりに」
〔一四〕同「眼ざしうるはしき戎の一字を摘て」
〔一五〕同「年比いひなれ」
〔一六〕同「胸ふたがりて」

東順傳　元祿六年作

東順は其角の父である。此の傳は其角の『句兄弟』及び『錦繡緞』にあり、許六の『本朝文選』にも採錄してゐる。

芭蕉稿

老人東順は榎氏にして、その祖父江州堅田の農夫竹氏と稱す。榎氏といふものは、晋氏が母かたによるものなら〔一〕し。ことし七十歳ふたとせの秋の月を病る枕のうへに詠

めて、花鳥の情、露を悲しめる思ひ、限りの床のほとりまで神(たまひ)みだかず。終にさらしなの句をかたみとして、大乘妙典のうてなに隱る。若かりし時醫を學んで常の產とし、本多何某の(二)かうより俸錢を得て、釜魚甑塵(ふぎょそうぢん)の愁すくなし。されども世路をいとひて、名聞の衣をやぶり、杖を折(クダイ)て業を捨ツ。既に六十年のはじめなり。市店を山居にかへて、樂むところ筆をはなたず(三)。机をさらぬ事十とせあまり、其筆のすさみ事にこぼるゝがごとし。湖上に生れて東野に終りをとる。是必大隱朝市の人なるべし。

入月の跡は机の四隅哉　(兄弟)

〔一〕『本朝文選』に「よれるものならじ」。
〔二〕同「何某の公(キミ)」。
〔三〕同「筆をはなさず」

鬼子良才の事　年代不明

士朗の『枇杷園隨筆』に「右芭蕉翁眞跡徐英にあり」とあるが、何かの文章の一斷片らしい。

鬼子が良才、是華原神童子か。且予が附句禁止之事、申分尤あさきにあらず。されども生涯五十にちかく、天命私にはかりて今より十年、日數三百日間の愁に一日を損し、一夜の樂は一夜のよろこび、身に行ずることはなければも、六塵おのづからちか付く。さればおのづからけがれすくなし。しらず、只一念動ずる風雅の情のみをしれども、いまだ宗因ごときの興作なし。宗因ごときの惡句なし。只善惡の兩意をいはむ。病魔仙狐の障をうかゞふて、死するまで止事あらじ。

贈二風絃子號一　年代不明

耳得の『芙蓉文集』にある。

風絃は琴にあらず。瑟にあらず。彈に爪をもちひず。柱をたてず。天籟(てんらい)の禮をよく調へて、(一)角徴宮商の音におちず。

〔一〕『一葉集』に「宮商角徴羽」

旅人　　貞享四年作

これは『千鳥掛』にある詞書で、それに謠の節付を施したところに、芭蕉のつれ〳〵の戯れなる事が思はせる。

（下同）はやこなたへといふ露のむぐら（ヘル）の宿はうれたくとも
袖をかたしきて御とまりあれやたび人

たび人と我名よばれむはつしぐれ　　芭蕉

御曹子　　元祿二年作

奥州へ落延びた義經が詞書の中に詠み入れたので、洒堂の『白馬集』に載つてゐる。

さてもそのゝち御さうしは、十五と申はるの比、鞍馬の寺を忍ひ出、あづまくだりの旅衣、はるけき四國西國と、此高館の土となりて、中ばかりはなみだなりけり。

夏草や兵共が夢の跡　　はせを

色と義の道　　元祿年中作

許六の『篇突』に「吾翁色と義の道をしめし給へる詞に云」として、左の如く出てゐるが、『一葉集』は一は芭蕉、一は去來の作としてある。

○

色をおもふ事うどんを見るがごとく
義を守ものは唐がらしの辛きに類せよ（篇突）

○

義を守ることゝ唐からしにならへ　　芭蕉
色をおもふことゝ温飩のごとくせよ　　去來
（一葉集）

歌

芭蕉の歌として傳へらるゝものを『一葉集』によつて、一括して掲ぐ。

田中一閑身まかりて後、妻の加賀國へ引こし侍りて、いまはとふ人もなければ、かの墓所谷中の新ぼりへはじめてまかり侍て、

とふ人もいまはなつ野の草のはら
　露はかりこそ友とおくらめ

見れはかつむかしの夢のことくさを
　思ひしられて袖そ露けき

人の身のいまのならひをありし世に
　しらで過にし人ぞはかなき

のり姫の若身まかりしのち、ほどなく鈴木主水身まかりければ

見し夢にゆめをかさねてかた糸の
　心ほそくもおもほゆるかな

見るまゝにあなうつゝなやあたし野の
　露ときえゆく夢のよの中

五月十八日は、れいの講習にてかの處へまかり、なき人を思ひ出て

かよひにし人は夏野の草のつゆ
　その名ばかりはきえ残りぬる

いつしかにむかしの人としのばれて
　ことの葉草に露かゝるらん

のがれすむみのゝを山のあはれさを
　松のあらしに吹もつたへよ

題しらす

捨ぬまにすてらるゝ身の思ひ出を
　しらでや人のまことゝはいふ

はいかい歌

としの夜のふけゆくまゝにことしげき
　都の市の音しづかなり

よるとしのめにはさやかに見えねども
　まめの音にぞおどろかれぬる

前句附

筑前飯塚の菊田有隣撰『芭蕉盥集』に「右の附句は南部蔵任子のもとにやどりし給ふ時、みづから前句をなして附給ふ自筆を朱拙におくられし也」といふ註が附いてゐる。『芭蕉連句集成』の附句の部に既出したが、前句も芭蕉の作である事が判明したので再録する。

芭蕉先生前句附

ころ／＼となるは鈍栗落し也
　其鬼見たし蓑虫がちゝ　翁
枯はてゝみじかき髪の口惜き
　琵琶つき立て其陰に泣　仝
亀山やあらしの山や此山や
　馬上に酔てかゝえられつゝ　仝
雲の間は重なる山の月闇く
　芋掘かえす小男鹿の角　仝
笠敷て嬉しく今朝となしけるよ
　笈かゝえたる小僧煩ふ　翁
冬の砧の涙きはつく
　世の恨みいまだ六位の名でよばれ　仝

祖翁口訣

芭蕉以後伊勢派を開いた乙由の子麥浪の所持せる芭蕉の遺稿である。麥浪の門人眠郎これを懇望して、安永六年その著『雪の薄』にかゝげ出板してより世に知られたのである。『一葉集』によつて掲ぐ。

一格に入て、格を出ざる時は狭く、又格に入ざる時は邪路にはしる。格に入、格を出て、はじめて自在を得べし。詩歌文章を味ひ、心を向上の一路に遊び、作を四海にめぐらすべし。

一千歳不易。一時流行。

一他門の句は彩色のごとし。我門の句は墨繪のごとくすべし。折にふれては、彩色のなきにしもあらず。心、他門にかはりて、さびしをりを第一とす。

一名人は地をよく調べし。折にふれては、あやうき處に妙有。上手はつよき所におもしろみあり。

一等類・作例、第一に吟味すべし。

一古書・撰集にまなこをさらすべし。

一我門の風流を學ぶ輩は、先、鶴のあゆみの百韻・冬の日・春の日・猿みの・ひさご・あら野・炭俵等熟覽すべし。發句は時代〳〵を考べし。

一初心のうちは句數をもとむべし。それより姿情をわかち、大山をこえて、向の麓へ下だる所を案ずべし。六尺をこえんと欲するものは、まさに七尺を望むべし。されば心高き時は、邪路に入やすからん。心卑き時は、古人の胸中を知るとあたはず。

一俳諧は中人以下のものとあやまれるは、俗談平話とのみ覺たる故也。俗談平話をたゞさんが爲なり。拙きことばかり云を俳諧と覺たるは淺ましき事也。俳諧は萬葉集の心也。されば貴となく賤となく味ふべき道也。唐・明すべて中華の豪傑にも愧る事なし。只心のいやしきを恥とす。

一手にをは專要也。我國も手には第一の國なれば、先哲の作を味ひ、一字も麁末なることなかるべし。句の姿は青柳の小雨にたれたるがごとくにして、折〳〵微風にあやなすもあしからず。情は、心裏に花をながめ、眞如の月を觀ずべし。附心は、薄月夜に梅のにほへるがごとくあるべし。

行脚掟

この掟書は芭蕉みづからを誡むる爲めのものでなく、門人の行脚に對して其の心得をさとしたので、乙由の子麥浪の許に遺墨を傳來したのである。或は乙由に附與したものかも知れない。

一一宿なすとも、故なきに再宿すべからず。樹下石上に臥とも、あたゝめたるむしろと思ふべし。

一腰に寸鐵たりとも帯すべからず。惣て物の命をとることなかれ。

一君父の讐ある處には、門外にも遊ぶべからず。倶に天をいたゞかざる、忍びざる情あれば也。

一衣類・器財相應にすべし。過たるはよからず、足ざるもしからず。程あるべし。

一魚鳥獸の肉を好で喰ふべからず。美食・珍味にふける人は他事にふれ安きもの也。菜根を咬で、百事をなすべき語をおもふべし。

一人のもとめなきに、己が句を出すべからず。望を背くも然らず。問ざるに說は說にあらず。問に答ざるはよろしからず。

一たとへ險岨の境たりとも、所勞の念をおこすべからず。發らば中途より歸るべし。

一馬・駕籠に乘ことなかれ。一枝の枯杖を己が瘠脚と思ふべし。

一好で酒を飲べからず。饗應により固辭しがたくとも、微醺にして止べし。亂におよぼすの禁有。祀儀の戒祭に醅を用るも醉をにくめば也。酒に遠ざかるの訓有。愼むべき事也。

一船錢・茶代をわするべからず。

一他の短を擧て、己が長を顯すことなかれ。人を誹て、おのれにほこるは甚いやし。

一俳諧の外雜話すべからず。雜話出なば、居眠りして勞を養ふべし。

一女性の俳友にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬことなり。此道に親灸せば人をもて傳ふべし。惣て男女の道は嗣を立る而已なり。流蕩すれば心敦一ならず。此道は主一無適にしてなす。能おのれを省るべし。

一主ある物は一枝一草たりとも取べからず。山川・江澤にも主あり。つとめよや。

一山川・舊跡したしく尋入べし。新たに私の名を付ることなかれ。

一一字の師恩たりともわするゝことなかれ。一句の理をだ

に解せず。人の師となることなかれ。人に教るは、己をなして後の事也。

一一宿一飯の主もおろそかにおもふべからず。さりやとて又媚諂ふことなかれ。斯のごとき人は世の奴也。此道に入ものは、此道の人に交るべし。

一夕を思ひ旦をおもふべし。旦暮の行脚と云ことは好まざる事なり。人に勞を懸ることなかれ。しば／＼すれば疎ぜらるゝ言を思べし。麁食たりとも好むべからず。

右の條々、我門の行脚は愼むべき也。當時を見るに、如此の掟を守て行脚する俳客一人もなし。不相應に美を飾り、利欲の爲に僞を云て世をわたる、淺ましからずや。或は古人の名を賣、自己の勝手のよきやうにいひちらすは、誠に羊頭をかけて、狗肉を賣の徒にして、切賣の功者と云べし。

俳席の掟

嵯峨の落柿舍にて俳席の掟を定めたのであらう。元祿三・四年と見て好い。本文は『一葉集』によつた。

一今年、貞享の古式をあらため、嵯峨の時雨に硯をならすことは、あるじ落柿舍の物ずきにて、丈草・千那・凡兆等をそゝのかし、文臺・月花の坐を定るもの也。

掟五ヶ條

一月花　一句
一出合　遠近
一短冊　持參
一當番　添删
一諸禮　停止

芭蕉庵桃青判

○

一諸禮停止

一出合遠近　但學先

一一句一直　雪月花一句

右三ヶ條舊式也

芭蕉庵桃青書之

祖翁壁書

これ亦俳席の掟の一つであるが、その中に多分の洒落味をふくんでゐる。本文『一葉集』による。

一席にして壁によりかゝり眠るべからず。

一人のたばこ吞べからず。

一我門の人は茶漬三石六斗喰ざるうちは俳諧上手になるべからず。

一無分別の場に句作あることをおもふべし。

松嶋の賦

此の賦は許六の『本朝文選』にあり『奥の細道』の一部を改案したもので、『一葉集』に眞僞不審之部に入れてある。

そも〳〵事ふりにたれど。松島は扶桑第一の好風にして。凡洞庭西湖を恥ず。東南より海を入て。江の中三里。浙江の潮をたゝふ。七十二峰。數百の嶋々。欹つものは天を指。ふすものは波に匍匐。あるは二重にかさなり。三重にたゝみて。左にわかれ。右につらなる。負るあり抱るあり。兒孫愛するがごとし。内ふたご。外ふた子。鎧島。かぶと嶋。牛嶋。蛙じま。内裏島。屏風じま。笠が嶋は。あまの小舟漕つれて。肴わかつ聲〳〵に。つなでかなしもとよみけむ俤を殘し。末の松山は寺となりて。松のおき〳〵墓を築く。羽をかはし。枝をならぶる契の末も。終には皆かくのごとしと悲し。野田の玉川。沖の石。宮城の萩。武隈の松。猶此境に名をならべたり。しほがまの浦には。塩がまの明神あり。神前のかな灯籠。文治三年。泉三郎寄進と

記す。雄島が磯は地つゞきにて。雲居禪師の別室のあとに。坐禪石。瑞岩寺は。相摸守時頼入道の建立。當寺三十二世のむかし。眞壁平四郎出家して。入唐歸朝の後開山す。其後伊達政宗再興して。七堂伽藍となれりける。法蓮寺は。海岸に峙。老杉影をひたし。花鯨波にひゞく。松の綠こまやかに。枝葉汐風に吹たはめて。屈曲をのづからためたるがごとし。其氣色窅然として。美人の顏を粧ふ。ちはや振神のむかし。大山すみのなせるわざにや。造花の天工。いづれの人か筆をふるひ。詞を盡さむ

雪見ノ賦

支考の『本朝文鑑』に作者「獵乙子」とあり、風德の『芭蕉文集』に採錄してある。評に「獵乙子は先師の隱號にして」といふ先師は支考自身の事である。芭蕉の文章でない。

十月のしぐれ、霜月のしも、師走の雪のふる月とて、ひとり法師は火燵の小藥鑵に、物くるゝ友達をもてなし、金箱のもりする

おやぢは、袖口より脊中をかゝせて、茶飯にふけ行鐘の聲をかぞふ。それより、ふし世をはなれたる男は、夜着の袖より庭を見やりて、あゝ降たる雪かなと、身の上に謠ひ捨たるは、花も紅葉もあそび過して、今さら物の淋しけれど、おりおり父母をこらしたるひとりむす子の身の果ならん。世はかくさまざまの相手あれど、是とあそばむと思ふ人はまれ也。たとへ香爐峰に簾を捲たるをんなも、智惠すぎてすさまじく、かの山陰の夜の雪に小船の模樣をつけたるおのこも、興すぎて後さむからん。いざや無分別界に平白漫地の雪見せむと、此三國川に舟を浮たるに、錦城の哥吹はさらにしらず。中に置火燵の柴ふさんは、雪の夕日にかゞやきて、繻子のひむくも、純子のそら色も、なこその關の名こそさがめれ。しかは人目もしのばずやあらん。むかし陶朱公か船に乘せて、五湖のあなたにあそびし人は、我もの顏にてにくからんに、越女の紅裙も燕姬の翠黛も、こゝにさぼしからぬあそびならん。さて經が岡の松の雪は佛くさいといやがりて、上戸は長くらべ山に頭をめぐらせば、日野が嶽には反椀の名ありて、我とおもはむ者あらば、此盃まいらさふと、舳先に立て相手をまつに、我は小盃の陰にかくれて、月窓寺の入相に、此夕暮をおしむばかり也。

石臼之讃

史邦の『小文庫』に「はせを」の作としてあるが、越人の『不猫蛇』によると、これは越人が芭蕉に添削を乞ふた越人自作の文章なのである。

はせを

市中に有て俗塵によごれぬ物、げにその始をよくするよりも、その終をさぐる事はかたし。商山竹林の猛士も、なを出てつかへ、寛平華山の上皇も終にたしかならず。たまたま是を見るに、唯石臼のひとつのみ、聖一國師は是をもつて肉身をやしなひ法身をしる。民家にはまた麥刈そむるころよりも、籾こき落す冬に至るまで、片時もよ所にする事なし。其たかきことを論ずれば、役の優婆塞の庵の中にかくれて彼たぐひを道引功は上に立べし。上と下とふたつなるは、力たらざる者のために專なればなり。不斷土間に有て莚より外を見ねば、謙に居る事の調へるにあらずや、かりにも黄姉の手にとられざることの、有がたきことをふかくさぐりしるべし。目なだらかなる時は、かますを荷ふ老翁のいで来りてこつ〳〵とする音すみて、のちは李札が劔を塚にかくることをはづべし。名をぬすむ盗人はあれども、石うすをぬすむ盗人はなし。またひとの心をみださゞるの至りならずや。月さしのぼるゆふがほのかげに、獨はおごろの髮をまぐれ、ひとりは佛のまねをする、あたまなりにてくろしきことを覺えず。挽まはす力に其飢をたすくるは、文王の始に仕たまへるに事たがはず、やゝいま様のむづかしき歌のふしにかまはず、聲も唱歌も古代のまゝにして、枝もさかゆる葉もしげると、しはぶきがちにわなゝかれたるぞおかしきや。

芭蕉書翰集

芭蕉書翰集

延寶七年？

桃青時代の書翰である。石井清秀氏所藏による。

嬉しからぬ月日身にちつもりて、といふ事を題にして、

ヒナヤ立甫の句

はなりし身をば何とて捨坊主

いづれにもおもしろき句に候。我も此心とりて、

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

いかゞあるべく候哉。此句風情おもく、立甫句かるくおもしろく候。とかく上手下手の違はづかしき物に候。

十五日　　はせを

三千丈

天和元年

『武藝曲』にある詞書と句とで、『芭蕉翁消息集』による。

月をわび、身を侘、つたなきをわびて、わぶとこたへんとすれど、問ふ人もなし。猶わび〳〵て、

　わびてすめ月侘齋がなら茶哥　　はせを

と申候以上。

九月十九日

去來様

天和元年

士朗の『枇杷園隨筆』にある書翰である。その終りに「右芭蕉翁書翰眞蹟松兄にあり」といふ士朗の註記がある。松兄は名古屋の人、士朗の門人である。

早春佛頂和尚へ御狀被遣候を、則愚庵へ寫持御越致細熟覧仕候處、木兎の角あるけしき先感心仕候うへ、病床に病と組て勝負な御あらそひ、終に大眼悟哲の勢ひ驚入奉存候。和尚の肝腸いまだしかと探られず候間東西評判可申進候。和尚にも舊臘は寒ぬるく候故、御持病もこゝろよく、愚庵まで手をひかれて一夕御入、大道の咄し止て俳諧にて到半夜候。

梅櫻みしも悔しや雪の花

と御申し候、感心致事に候。且又、正秀三物、さて〳〵おどろき入、定て御ちから加り候ものと甘心仕候。褒美之旨、正秀へ申遣候間除筆候。

天和二年

雪中庵蓼太のあつめて置いた諸家の文章を、門人耳得が寶暦十三年『芙蓉文集』と題して板行した中に、「飯酒一枚起請」として此の書翰を收めてゐる。天明七年闌更の出した『芭蕉消息集』及び『一葉集』・『袖珍鈔』の消息の部に採錄されてゐる。本文は『芙蓉文集』によつた。

飲酒一枚起請

もろこし・我朝に、もろ〳〵の上戸たちの沙汰し申さるゝさかもりにもあらず。又かちんをくひ茶をのみて、のめる酒にもあらず。只往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申て、うたがひなく往生するぞと思ひとりて、一杯のむより外別の子細は候はず。但三献四種の肴など申事の候は、酒宴も決定して珍しき酒肴求めたると思ふうちにこもり候也。此外におくふかき大盃は、二尊の御あはれみにはづれ、本性を失ひ候はんを愛せん人は、たとへ一代の法を學ずとも、一文不知愚鈍の身になして、下戸にも常にふるまはせて、唯一向に酒をのむべし。

右飲酒一枚起請は

尊朝親王御作のよし承候。尤さる人の許には御直筆にてかけ物にして床にかゝり有之候。あまり〳〵面白御作ゆゑ、ちよと寫し來候。貴丈つね〴〵大酒をせられ候故、此御文句を寫して大酒御無用存候。仍一句

朝顔に我は飯くふ男かな

いかゞ、くはしき事は頓て御めにかゝり萬々可申述候以上。

十七日　はせを

其角丈

天和二年

重厚の『もとの水』による。

傘下駄御もたせ被下御世話忝存候。蚊帳鼠に喰れ申候。おまきに御縫せ可被下候。燒跡蚤蚊多殊之外朝寢仕候。

七日　はせを

三碩様

天和三年？

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

御俳諧被遊候や。御發句など被遊候はゞ便に可被遣候。春は其角集あみ申候間入集可仕候。私は宿は橘町彦右衛門と申もの店にて桃青と御書付可被成候。書音も廣ク八六ヶしく御座候故、所付なも外へは不申遣候之間、左様に御意得被成可被下候御前可然奉頼存候。恐惶頓首

霜月十八日　芭蕉 桃青

中尾源左衛門様

濱 市右衛門様

貞享元年

伊勢桑名鈴木氏所藏による。

先比は愚庵へ御尋候處、折ふしあはづへ参候て不レ得二御意一殘念に存候。さて我等雪見の發句御尋被レ成候。さのみなる發句にても無レ之候へ共、吳々御申置候故無二是非一書付進申候。此間加州の門弟上京候て菴に尋被レ申候に付、御報及二延引一候。さて／＼何かといそがしき事ども御察可レ被レ下候。何様近々の内上京万々可二申承一候條、早々及二御報一候。

一、いざゝらば雪見にころぶ所まで　如レ斯候。

二月十一日　はせを

□水丈

貞享元年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

追而申入候。內々の事は如何被成候哉、是もすてはおかれまじくやうに存候貴丈にも萬事氣のつく人に候へば定而ぬかりはあるまじく存候ひよと我等も口な添候故心もとなく存候。ひきやく便に様子等こま／＼御申越可被下候。夫に付此ほくいかゞ

花にうき世我酒白く食黑し

此發句のこゝろに身持可被成と存候青水など共御出合之節はよく／＼御賴可然候頓而之內に上京候で可申承候。

廿二日　はせを

任口丈

貞享元年？

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

實やくれなゐは園生にうゑてもかくれなし。名のらぬ先により政さも見ゆるほどの德あり、何な味ふ時はいづれの句にてもその相應にとりなして其德をあらはし、政公にもおさゝるまじやさひとり自慢たら／＼申もいさはづかしく候

雪の朝ひとり干鱈をかみ得たり

海くれて鴨の聲ほのかに白し

此二句申入候、追々せいぼの句も貴樣方に出來可申候御聞可被成候。何事も跡よりに候以上。

十二日　桃青

落水丈

貞享元年?

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

追而申入候。此中はふじに長々逗留其上何角御世話に成候□□(不明)別而御内方樣御世話に候。いそがはしき中にうかうかいたし居候而きのごくに候。長雨にふりこめられ候。事さかうに及がたく候。

行駒の麥に慰むやどり哉

いづれへもよろしく御まうし可被給候。くはしきは□□□(不明)

十三日　桃青

空水丈

貞享元年?

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

昨日は御出の處坂本へ參候而不得御意殘念に候。貴丈にも近々長崎へ御下りい由御太儀存候。隨分御支度可成候、又々大分御金まうけにて追付御歸り待入候。然ば此書狀秋へ御寄候はゞ文子方へ御とゞけ可給候。御逢候はゞ口上にも集物の儀御噂可被下候。出來次第下し可申候。又々貴丈へ引當て

鶴の巣も見らるゝ花の葉越哉

右い句致候。猶重而可申承候以上。

廿二日　はせを

三志丈

貞享二年

宛名の東藤・桐葉は『熱田三歌仙』の作者である。

『芭蕉翁消息集』に「江州辻村梅仙所持」とあるによる。

一御俳諧よくぞやおもひ切て、長々敷物を點被仰越候。乍去餘感心見るも面白く、判詞不覺手の舞足の踏事をしらず候。ケ程上達存もよらず。凡天下の俳諧にて御座候間、隨分御敬候て御はげみ可被成候。秋登り候はゞ一板行とすゝみ申候。處々根深き句ども見え申候而、天晴御作愚毫僻耳投筆計に御座候。句評の事、點は相違有物

にて御座候。其段當の事ながら其元にて俤ある事、爰元にては新敷、其地にて珍らしき句、此地にては類作有様の事も御座候、物に御座候へば、句評は心にたがふ事も可レ有二御座一候。和哥の三神前後の點數かぞへ見不レ申、いづれの勝負しらず候。此處におゐて指南一言も無二御座一候。只白レ是行先大切に御座候間、能々御心をめぐらし御工案御尤存候。句作に作をこしらへ句毎に景をのみ好候はゞ、頓而古く成べし。〔一〕珍らし過候はゞ飽心出可レ申、〔二〕こしやくに成候はゞ、後句有で手をつめたる様になるべし。俳諧地をよく御つゞけ被レ成、處々風景句作ほのか成やうにあれかしと、此後の事を被レ存のみに御座候。此外申事無二御座一候へば不具頓首。

三月十四日　芭蕉庵桃靑

東藤子雅丈
桐葉子雅丈

〔一〕『一葉集』に「古く成べく候」
〔二〕同「こしくに成候はゞ」

貞享二年

『甲子吟行』に伊豆の行脚僧から大顚和尚の訃を聞き「先、道より其角が許へ申つかはしける」と此の句を記し、其角は貞享二年板の『新山家』に此の書翰を揭げてゐる。

草枕月をかさねて露命恙もなく、今ほど歸庵に趣き尾陽熱田に足を休むる間、ある人我に告て圓覺寺大顚和尚ことし睦月のはじめ、月まだほのぐらきほど、梅の匂ひに和して遷化し給ふよし、こまやかにきこえ侍る。旅といひ無常といひ、かなしさいふかぎりなく、折節のたよりにまかせ先一翰投二机右一而已。

梅戀て卯の花拜むなみだかな　はせを

四月五日

其角雅生

貞享二年

近江の曲水後に曲翠宛のもので、天保七年の寫本『芭蕉消息集』にある。

逐而申參らせ候。二三日前任口に逢而一句

我衣に伏見の桃の雫せよ

此句申出候。其邊一兩輩へ御參會の刻御心得可レ被レ下候。

與々本書賴入ㇷ。數々早々御調被ㇾ下可ㇾ給ㇷ。取込早々以上。

十一日　曲水丈

貞享二年

江戸より近江の千那に送つた手紙で、本文は『芙蓉文集』及び『芭蕉翁書翰集』による。

貴翰辱拜見御無事之由、珍重に奉ㇾ存ㇷ。其元滯留之内得ニ閑談一ㇷ而珍希申ㇷ。

一愚其元にての句

から崎の松は花より朧にて

と覺可ㇾ被ㇾ下ㇷ。

山路來て何やらゆかし菫草

其外五三句もㇷへども重而書付可ㇾ申ㇷ。

一此秋此萩のあらそひ、尤此道是非をあらそふも道のひとつにて御座ㇷへども、あながちに句論を好事愚意好しからずㇷ間、兼て能程に御あらそひ御尤にㇷ。

一其角へ御狀重而返狀可ㇾ仕ㇷ。嵐雪他國へ罷ㇷ間不ㇾ及ニ貴報一ㇷ。何やらかやらいまだ取込、舊友久々咄共指つもり、手透無ニ御座一ㇷ。貴報賴存ㇷ。

一澁谷與茂作殿堅固に相見え御手跡見覺ㇷ以上。

五月十二日　芭蕉桃青

千那貴僧

貞享二年

江戸より近江の千那・尚白・青鴉宛に送つた書翰である。『枇杷園隨筆』による。

坂本にて一宿、早苗に鹿を追ふ聲なつかしく覺え申ㇷ。坂本の鹿いづれの秋にかと存る斗に御坐ㇷ。罷歸ㇷ得ば又いつ上り可ㇾ申樣にも無ニ御坐一、一しほ〳〵御ゆかしさのみにㇷ。

下向の頃、桑名本當寺御會に

芒をきつて笘に葺けり

琵琶負て鹿聞にいる篠の隈

坂本を心の底に置ㇷか。

熱田會に

ひとり書を見る艸庵の内

二町ほど西に砧の聞ゆなり
重て委細に書付可ㇾ進候。
七月十八日　　　芭　蕉

貞享二年

文面から察するに近江に寓居した時代のものらしいが、「園もて」の句作年代から貞享二年と推定して置く。本文『一葉集』による。

笹岡五郎右どの御上京候付、ちよと申入候。愈御家内御かはりも有まじくと押はかり申候。だん／＼暑に罷成候而、愚老などしのぎかね申候。貴様には精分つよく、さほどにもあるまじくとうらやましく存候。何ぞ宜句出候哉。うけ給り度候。然ば盤斎背向像に一句

　園もてあふがん人のうしろつき

此句致し遣候。寺町の秋田屋方へ表具を頼みに人遣申くれ候。貴様にも秋田屋事御近付に候間、今日之内ニ御出候而、御尋可ㇾ被ㇾ下候。とかく様子はやく見申度候。さて又貴様方いつぞやの十二枚一まくりの繪にて、其まゝにて御指置候哉。もし中様御勝手に入不ㇾ申候はゞ、所望の人有ㇾ之候間、御下し可ㇾ被ㇾ成候。せたの人ほしがり申候。両用共様子御申越可ㇾ被ㇾ下候。取込早々以上。

十三日　　　　桃　青

和休丈

貞享二年

駝岳の「蟋蟀の巻」所載による。寛政五年の板本である。

定に／＼此世の極樂といふは外にあらず、御所のことになん。此四五日以前上京にありて御所の中を通りければ、おりふし雨ふりて心静にいとありがたく、殿々の紅葉今をさかりと見へ申候。音樂さて／＼面白くそゞろに涙をながして通り侍りければ、

　紅葉や見ぬ戀つくる玉すだれ

いかゞ有べくや。其許は毎日御仕方へ御出入被ㇾ成候人に御座候へば申はくだながら如ㇾ斯候。能々過去にてありがたき縁を結ばれし御しるしなりと随分影拜し奉るべく候。先々右一句御しらせ如ㇾ斯に候。くはしきことはあとより／＼。

二日　　はせを

松風丈

貞享三年

『芭蕉翁消息集』に「辻村梅仙所持」とあるによる。

一石清水瀧本坊法印の許へ、ある在家かなた大豆壹籠おくりければ、其返事に、

辨慶が七道具のなた豆は

日本一のかうのものかな

さて〳〵おもしろき狂哥中〳〵及がたき事に思ひ侍る。しかし我も一句をせんとて狂哥の心をもちて、

辨慶は衣もかみこの羽織哉

これら精一ぱいにて候。むかしの〔一〕人の口心には叶ひがたく候。かしこ

はせを

〔一〕『一葉集』に「むかしの名ある人の」

貞享三年

『甲子吟行』の旅を了つて江戸に歸庵後の書庵であらう。植村俊平氏所持の眞蹟による。

御文被レ下殊に何寄の一種送り被レ下御厚志之所察入候。拙庵も近頃は他行も不レ致御無音に罷過候。其角子も四五日以前に被レ歸申候。美濃路抔の咄も御座候。我等は守武の侍りしを又くりかへし、

義朝の心に似たる秋の風

是等申殘し候。何事も近々而上可ニ申上一右御禮斗り早々以上。

十月廿一日　　はせを

和柳御坊え

貞享三年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

追而申入候日外其許にて御めにかゝり申候、長州の西光寺御坊より書狀參候。尤六條より相屆申候。是は御便之由申來候。右返事其許より長州へ御下し可給候。往來のかゝりしものは此方へ御申こし可給候。さて相撲のほ句は如此に候。

鶴の巣も見らるゝ花の葉越哉

以上

十七日　　はせを

三志丈

貞享三年

『芭蕉全集』に「五十嵐竹涙氏藏」とあるによる。

夏化集豚筆書拔に御仰候へ共名前次第之跡書直し可申と存候へ共其儘と有之いづれにも近日書添へ可仕候まゝまづ〳〵御まち可被下候。

一泰堂主に別書申上候まゝ是もきぬせつ下され書寫之事被仰越候へばちかき内□□又々□□此通に御坐候。

朝 顔 は 酒 盛 知 ら ぬ さ か り 哉　　は せ を

羅 月 様

貞享年中

美濃大垣の谷木因の家に今以て傳來されてゐる。本文は『芙蓉文集』により『芭蕉翁消息集』・『俳諧寄跡錄』・『一葉集』と對校した、谷家所藏のものは大分異同があるやうに聞いてゐる。

當地ある人附句あり。此句江戸中聞人無二御座一候。予に(一)極評望來候得共、(二)愚も此附味難レ辨、依レ之御内意頼進候。貴丈御閲定の旨趣ひそかに御しらせ可レ被レ下候。東武にひろめて愚の手柄に仕度候。

其附句

蒜 の 籬 に 鳶 を な が め て

といへる前句に

鳶の居る花の賤屋とよめりけり　　はせを

二月上院

木 因 様

其返書

華牒拜見、或人の付句貴丈御閲定無レ之、依レ之愚評之儀被二仰越一候。予猶考に落不レ申、乍殘念及二返進一候。隨而下(三)官去比在京之節、古筆一枚相求候。此切れ京中定る人無二御座一候。依レ之貴丈へ御内意頼進候。何の御宇の御撰集・筆者等貴丈御見定の旨趣ひそかに御しらせ可レ被レ下候。花洛にひろめて愚の手柄に仕度候。

其古筆　菜園集卷の七　春　俳諧歌

蒜のまかきに鳶のゐるをなかめ侍りて

鳶の居る花の賤屋の朝もよひ

木をわる斧の音ぞ聞ふる　　木因

二月下院

芭蕉様

稱美の詞

杭瀨川の翁こそ予がおもふ所にたがはず。蔦の句の評感（四）言寄候。江戸衆聞人なしと申は聊いつはり、彼翁の心を謀む爲に候。爰元にも（五）同物附たる人、二方の道をないがしろにして、（六）六ヶ敷ことゝいはるゝなど嘲る野輩もたまく有レ之、予が志を了察の士も一兩人は有レ之候を、千里を隔て自慢（七）書散したるを、（八）還て愚盲此道知たる人と定置候へば、聊か了簡引見んため、書付遣し候處、愚案一毫の違無二御座一候。定不レ淺候。

自讃の詞

古往達人、花に櫻を付るに同意去を本意と（九）せり。増て蔦に蔦を附て一物別意を附分け、當時未來の作者に此句を似せさす。古往今來未來一句の格、何れの時か秋風來て芭蕉の露もろく破れんとの一句一生、是のみに存ばかりに候と書うち、鼻たかくをごめき、肩のあたり羽たゝきするやうに覺候。

〔一〕『一葉集』に「聽評」
〔二〕同「予も此付味」
〔三〕『芭蕉翁消息集』に「下官十一日比在京之節」
〔四〕同「蔦の句の評感」とありて「言寄に候」なし。
〔五〕『一葉集』に「爰元にも珍しきのみ云人三分同物に同物付たる古今類なきと云捨たる人三分」
〔六〕同「いひたきといはるゝ」
〔七〕同「自慢云ちらし」
〔八〕同「却て愚盲の至に御座候へども日來彼翁此道知たる人と」
〔九〕同「本意といへり」

貞享年中

『茨日記』の中巻大垣部に「文通」として此の書翰を掲ぐ。『一葉集』には發句の詞書を除いてある。

何某新八は去年の春みかりけるを、ちゝ梅丸子もとへ申つかはし侍る。

梅か香に昔の一字あはれ也　武陵芭蕉

一歳夢のごとくにして、猶俤立さらぬ歎のほど、おもひやる斗に候。

二月十三日

梅丸老人

貞享年中

書翰中の發句は『江戸蛇の鮨』にある舊作ながら、書翰その者は貞享以後と推定する。本文は『一葉集』によつた。

追而申入まゐらせゆ。其許に逗留中に清草御歸りに御約束申ゆ短册、此度遣し申度存ゆへつれども、二三度ばかり認め申ゆ處、さんぐ\不出來見苦しくゆ故、其許え御出若御尋ゆはゞ此段御申達可レ被レ下ゆ。何方へもたんざく御免し被レ下ゆ樣申事にゆ。我等手跡にては及びがたくゆ。發句は書入進申ゆ。

わすれ草菜飯に摘ん年のくれ

如レ此に御坐ゆ。態々御申可レ被レ下ゆ。又重而宜しく出來ゆはゞ其節進じ可レ申ゆ以上。

廿二日　　はせを

夅月丈

貞享年中

井眉の『華鳥文庫』にある發句と同一で、內容は相違する。

先ほどは御手紙の處、となりへ時々參ゆ而御次不二申入一ゆ。然ば今日在所中寄合ゆて、ふぐ汁被レ成ゆ。夫に付參りゆ樣仰レ被下ゆ。忝は存ゆ得共愚老は其相伴には成がたく、併何心なくよびに被レ下ゆ故、ふぐ汁何もしたゝかに喰ゆを見物に可レ參ゆ。我等は雜煮が可レ然ゆ間、其御心得可レ給ゆ。あまりぐ\おかしくて文もしたゝめかね申ゆ。ちよと一句

ふぐ汁やあほうに成りとならばなれ

右之心にて能時分に可レ參ゆ。必ゝ御きづかひに不レ及ゆ以上。

五日　　はせを

きし田重右衛門樣

貞享年中

五春莊井眉の『華鳥文庫』所載による。

庄屋殿へ出ゆ而承ゆ。今席は貴樣方にふぐ汁之會有之よし、めつらしき風雅にて御座ゆ。我等見物に可レ參ゆ。依レ之、

鰒汁やあほうになりとならばなれ

おかしやぐ\とかく出ほうだい火中。

十一日　　はせを

太郎兵衛殿

貞享年中

伊賀上野田中善助氏所持の眞蹟による。

われらが事までは着物などとんぢやくいたすはずに而も無二御座一候へ共、一はあねの御恩難有、二は大慈大悲の御心わすれがたく、色々心を砕候へども、身不相應の事難調候。其身四十年餘寢てくらしたる段、各々様能御存じに而御座候へば、兎に角も片付様々相談ならでは調不申、さて〳〵慮外計申上候。御免可被成候。

八日　　桃青

半左衛門様

貞享年中

重厚の『もとの水』による。『一葉集』に「運暮き四谷過けり紙草履」の句を添へたるは誤りならん。

口上

此頃之俳諧殊の外不出來に候得共、任二御望一寫進上いたし候。尤其角が無分別なる所中〳〵及べからずと、みな

〳〵驚申事に候。

廿二　　はせを

仁兵衛様

元祿元年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

其元御無事と見え候而歲旦伊勢にて一覽珍重に存候拙者無事に越年いたし今程山田に居申候二月四日參宮いたし當月十八日親年忌御座候付伊賀へかへり候て暖氣に成次第吉野へ花を見に出立んと心がけ支度いたし候。尾張の杜國もよし野へ行脚せんと伊勢迄來候而只今一所に居候卯月末五月初に歸庵可致候木曾路と心がけ候深川大屋吉御逢候はゞ可然奉願候よく御傳被成可被下候いまだ爰元にても發句も不致候

參宮

何の木の花とはしらず匂ひ哉

追啓二見淺熊へ參候爰元方々へ馳走殘る所もなく候間萬御氣遣ひ被成ましく候

一濁子丈御子達御奥方御堅固に被成御座候哉拙者無事之旨御告可被下候其元別條無御座候はゞ御文不及候若急に御しらせ事御座候はゞ關の地藏にて笠屋彌兵衛と申者迄飛脚便御狀可被遣候

二月十八日より三月十四五日までは伊賀に居申候以上

はせを

杉風様

元祿元年

吉野行脚後の書翰である。天保七年の寫本『芭蕉消息集』による。

今日加茂迄人遣し候故、道序に申入候。其後は御不音いかゞ御暮候や。此許不二相替一居申候。扨は内々御噂承被レ成候北國の客來も今に見へ不レ申候。是は學文の方に留被レ居候哉と存候。猶又貴樣方へ入來候はゞ可レ然頼入候。且又御約束の一句書進申候。

山吹のほろ〳〵ちるか瀧の音

是はよし野にて致し候句にて御ざ候。さして面白も無レ之候得ども申進候。委は重而可二申入一候以上。

三月五日　はせを

（本ノマヽ）山子丈

元祿元年

猪來の『蓑虫庵小集』に「杜國書杉原二ツ折半面ナリ余ノ半面ニハ翁筆新ノ圖アリ」とあつて此の書簡をかゝげ、土朗の『枇杷園隨筆』に「右眞蹟伊賀上野猪來にあり」と附記してある。

三月十九日伊賀上野を出て三十四日。道のほど百三十里。此内船十三里、駕籠四十里、歩行路七十七里、雨に逢ふ事十四日。

瀧の數七ツ　瀧門　西河　蜻蛉　蟬　布留　布引　箕面

古塚十三　業平塚　哥塚　乙女塚　忠度塚　淸盛石塔　敦盛塚　人麿塚　松風村雨塚　通盛塚　越中前司盛俊塚　河原太郎兄弟塚　良將楠塚　能因法師塚

峠六ツ　琴引　臍峠(一)　小佛峠　樫尾峠　くらがり峠　（當麻）岩や峠

坂七ツ　雜坂　（西河上）ちいか坂　うばか坂(二)　宇野坂　かぶろ坂　不動坂　（生田）小野坂

山峰六ツ　國見山　安禪嶽　高野山　てつかいが峯　勝尾寺山(三)　金龍寺山

此外橋の數・川の數・名もしらぬ山〳〵は(四)書もらし候。

卯月廿五日　万菊

桃青

惣七様

〔一〕『枇杷園隨筆』に「膳峠　野路」
〔二〕同「うにかり坂」
〔三〕同「勝尾寺の山」
〔四〕同「書付に」

元祿元年

『更科紀行』の前後のもので『落葉考』による。

〔一〕名月前態ゝ御隙に被レ成御待可レ被レ成義、御用候はゞ御勝手に可レ被レ成候。拙者下り候事いつとも難レ定候間、名月過にも成事可レ有二御座一候。越人も如レ斯發句いたし候。

稗の穗の馬にがしたる氣色哉

愚句又

猪もともに吹るゝ野分かな

いかゞ候半や。能と申にては無二御座一候。先懸二御目一候。
さて加生・越人へ挨拶、

男ぶり水呑顏や秋の月

八月四日　はせを

〔一〕『芭蕉翁消息集』に「名月も」
〔二〕同「御越可被成由下りはまたいつとも」

元祿元年

其角の近江に旅したのは元祿元年叔母宗隆尼に面談の爲めである。書翰の本文は『一葉集』によった。

前日は寛ゝ閑對不レ淺存候。然ば其角も一兩日中には東武へ歸國申候。左候はゞ今夕餞別一會いたし遣し度候條、丈草など被二仰合一暮前ゟ御來駕まち入申候以上。

長月十一日　はせを

落柿舍主人

尙々今朝の吟御目にかけ申候。

しら露もこぼさぬ萩のうねり哉

古庵や寐さず起さず萩の花　其角

元祿元年

伊藤松宇氏方所見の眞蹟による。

返し青のり二袋進上申候。誠に御印迄に御さ候。和及丈歸京候ニ付一書申入候。其後は御物遠に罷過候。次第に冷氣に趣候へども、御家内御無爲御暮の由珍重の事に存候。此元我等も二三日以前に伊賀ゟ歸宅申候。彼方

にても其元噂のみ暮申候。近き所にして度々談合申度者斗、其上彼方も茶の湯抔はやり申候。扨は櫻の發句此度書入懸二御目一申候。

芳野にてさくらを見せぬ檜笠

右の句にて御ざ候。猶近日上京候て可二承申一候以上。

霜月十五日　　　はせを

元祿元年

『笈の小文』の旅中、尾張鳴海の千代倉知足宛に送つた手紙で、知足の孫藏六園鐵叟の『いらご』に眞蹟のまゝ寳暦三年板行されてゐる。

尙々今日は御入來可レ被レ成と相待候處、近比〱御殘多奉レ存候。かへす〲此度萬事御懇意忝難レ盡候。

爲二御見舞一三郎左衞門殿被レ遣誠辱奉レ存候。今日は若御出可レ被レ成かと御亭主共に相待居申候處、御殘多儀に御坐候。先以此度は緩々滯留、さま〲御懇情御馳走御禮難二申盡一候。はいかい急に風俗改候樣にと心せかれ、御耳にさはるべき事のみ御免被レ成可レ被レ下候。されども風俗そろ〱改り候はゞ猶露命しばらくの形見とも思召可レ被レ下候。なごやゟも日々に便り被レ致候間、明日荷分迄參可レ申候はんと存候。持病心氣さし候處、咳氣いたし藥給申候。なごやにても養生可レ成事に御坐候間、明日比なごやへと存候。

一先日は笠寺まで御連中御送被レ成、御厚志のこと可レ然御禮御意得奉レ賴候。如意寺樣猶又よろしくたのみ奉レ存候。追付發足、山中ゟ以二書狀一其可二申上一候。

二三日此かた兩吟致、大かた出かし候。出來候はゞ被レ懸二御目一候樣に早々以上。

霜月廿四日　　　芭蕉翁

寂照居士 御許

元祿元年

桃鏡の『芭蕉翁眞跡集』に「東都村田氏枝直」所持の消息として、其の眞蹟から摸刻してある。

今日長次郎どの京へ被レ參候に付、ちよと斗申入候。其後は御遠々敷存候。彌無二障一御入候哉と押斗存候。愚身も無事に暮申候。さては内〱御賴置候物共もはや此節出來可レ申哉と存候。急々ニ御下したのみ入存候。先方ニも

見たがり被レ申候。何分はやく被レ遣可レ被レ下候。祭もだん〳〵近く候故せくも尤に候。在邊の事故度〳〵言傳ニ申參候。かしこ。又此間

網代民部の子息に逢て、

梅の木に猶やどり木のむめの花

此句相扑に致候故貴樣迄申入候。さて客來多取込早々以上。

廿一日　　桃　靑

左　柳　文

元祿元年？

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

痛入たる御音信忝奉存候一兩日御物遠罷過候昨日より嵐朝へ參一宿仕候先以先夜民部殿へ被召寄候而御厚志之御馳走貴樣御內通よろしき故と御亭主振感心忝奉存候明日二見への心ざし御座候へ共天氣如此御座候得ば先延引可仕候旨今晩罷歸明日可得御意候其內民部殿へ御逢候はゞ可然奉賴候猶貴面以上

二月十一日　　芭　蕉

平　庵　樣

尙々御音信忝賞翫仕候。乍去御牢人の御心遣却而痛入申候。亭主且野人へ御傳申通候以上

元祿元年？

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

口上

其後はひさしく御目にかゝらず御遠々しく罷過候爾御替も無之哉うけ給たく存候此方故無事に居申候。彌生の頃は誘引有候而よし野へ花見ニ參候發句はいたし不申候いろ〳〵あんじ候而も貞室の句には及不申故句はいはぬ方がましと存候其かはりにさくら川にて一句いたし候

人の氣や花に乘行さくら川

漸々此句にて芳野をすまし申候少御下り可被成候。寄合一會申度候爲指事も無之候得共あまり〳〵無音故如此候以上

廿一日　　はせを

不せ三之丞樣

元祿元年

『芭蕉翁消息集』による。

一近日芳野行脚存立候間、金子二分御かし可レ給候。おしつけもらひため返濟可レ申候。されど我等事に候へば得

なす間鋪候以上。

はせを

去來様

元祿元年

『芭蕉翁消息集』に「能登七尾寸行所持」とある。

明星やさくらさだめぬ山かづら　と云し句、山中の美景にけをされ、古き歌どもの信を感ぜし叙、明星の山かづらに明残るけしき此句のうらやましく覺候。(一)

はせを

共角様

〔一〕『一葉集』に「うらやましくさふらふ也」

元祿二年

梅人の『若菜籠』所載の眞蹟摸刻による。出板は安永四年である。

先刻は爲ニ御慶一御出被レ下候處、近所え參候而早々御出之儀忝候。此方儀は隱士故五ケ日も過候而可レ參候。仍而一句口すさび申候故如レ此候。

こんにやくにけふはうり勝若菜哉

いかゞあるべく候哉。唯風情斗之內に而候。何事も存永ニ可ニ申承一候かしこ。

正二日　はせを

杉風丈

元祿二年

風流は出羽新庄の人で『奥細道』の旅中その家で連句を行つた關係があるので、此の手紙は元祿二年か三年であらう。本文は『一葉集』による。

追而申進候。日外御尋被レ成候松しま行脚の春發句之事失念、風斗存出し候故乍ニ延引一申進候。

草の家も住替る世はひなの家

ゆく春や鳥啼魚の目は涙

此兩句にて御ざ候。偖々延引之段如在之儀ニ存候。御免可レ被レ下候。猶委は頓而々參候而萬々可ニ申入一候以上。

卯月廿二日　はせを

風流丈

元祿二年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

先日は立寄さま〴〵御馳走殊にわらじまでもらひ忝存候。翌日倶利伽羅を越、金澤へ着申候。因縁も候はゞ再御目にかゝり可申候以上

七月二十三日　　　はせを

宮永治兵衛様

元祿二年

支考の『國の花』にある木因編「かたはし」の中に此の書翰を挿入してある。

御手紙忝致二拜見一候。昨日終日御草臥可レ被レ成候。されども玉句殊外出來候て於二拙者一大慶存候。就其香箸の五文字いかにも御尤被レ存候間、かれ枝と御直し可レ被レ成候。愚句も馬の句猿の句皆しそこなひ殘念に存候。寐に行蠅の馬つな□らむといふ句にて、可レ有二御座一を急なる席故、矢ごろをはやくはなち面目もなき仕合にて御座候。且又今日の義天氣此分に御座候はゞ御同道申度候。天氣能過候へば亭主も宿に居ぬ事可レ有二御座一候。幸に御座候間大かたの天氣に御座候て御同道可レ申、天氣あしく御座候はゞ私宅にて語可レ申候間晝前より御入來奉レ待候。されども拙者夜前は大ニ持病指發り、咋晝の氣のつかれ夜申ふせり不レ申候間、晝前迄氣を安メ可レ申候間かならず晝前ゟ御出可レ被レ成候。いづれの道にも御逗留もすくなく候へば、しばし得下成二御座一御意上度候以上。

七月廿五日　　　はせを

木因様

元祿二年

此の書翰は伊勢より大垣の木因宛に送つたので、木因は寶永二年板の『國の花』所載「かたはし」に掲げてゐる。今は名古屋澤市郎右衛門氏の所藏に歸し、兩者を比較して見れば全くそれに相違ない事が判明する。

此度さま〴〵御馳走誠以忝奉レ存候。爰元御參詣被成候にやと心待存候所、いかゞ被レ成候哉、御沙汰も無二御座一御殘多拙者も寬ヽ迂宮奉レ拜大悦に存候。此状御届被レ成可レ被レ下候。方〴〵かけまはり申候はゝ又ゝ美濃路へ出申候間、其節万ゝ可レ得二御意一候。此地へ江戸才丸・京信徳ヽ拙者門人共十人斗參詣おびたゝしき連衆出合ながら、さはがしき折節には會もしまり不レ申、神樂拜に一日

寄合、さのみ笑ひてちり／＼になり申候以上。

九月十五日　　はせを

木因様

元祿二年

四日市鈴木廉平氏所藏の眞蹟による。

木因舟に而送り如行其外連衆舟に乘りて三里ばかりしたひ候。

秋の暮行先々は苫屋哉　木因

萩にねようか荻にねようか　はせを

霧晴ぬ暫く岸に立給へ　如行

蛤のふたみへ別行秋ぞ　愚句

二見

硯かと拾ふやくぼき石の露

先如ㇾ此に候以上。

九月廿二日　　はせを

元祿二年

金澤の北枝宛の書翰である。「芭蕉翁消息集」に「加賀鄕吹所持」とある。

一松岡茶店にての句、物書て扇引さくわかれ哉　と直し申候。脇手には留にて候。手には留は脇にては革にて神祇・追善・祝儀・本式俳諧・貴人の挨拶、すべて我より上たる人の發句にはせぬ事に候。我も只今にては其許の師に候間、挨拶の脇に手には留はよろしからず候。外より彼是申もの御坐候而は、兩人ともに不束に見へ申候。山中問答にも三ツ物の事御尋なく我も心付不ㇾ申候。此度委しく三ツ物傳、別紙にて申入候。是にて第三文字留革の事も能わかり申候。山中問答へ御書加へ可ㇾ被ㇾ成候。去來・丈草・凡兆・正秀なども問答見たがり申候。脇付替いは候はゞ第三四句め付て可ㇾ進候。御望みの兩吟はじめ可ㇾ申候。春は西國望み御坐候間、冬中調べ申度候。されども伊賀へ用事も御坐候間、伊賀を先に可ㇾ致も難ㇾ斗候。ちと親類内用にて捨がたき事に御坐候。伊賀便り次第に心得可ㇾ申候。西國へは何卒同行に致度候間、御心得賴入候。左様に候へば兩吟いそぎ申事もなく候。二十六七年以前太宰府へ參詣いたし候。外連二人我と三人にて歩行候へども、知音もなく候而見物斗にかけ歸候。宗房時分の事に

候へば、處々發句留候へどもおかしからず、とゝのはぬ事のみにて一句も晰事なく候間、此度は吟じ直し度存念に候。其許同行においては十人にもまさり力を得候事に候間、決定の御返事まち入候。又々問答可レ致候。万子・牧童・秋の坊・句空・小春などの英雄へも能々御達したのみ存候。不具。

十月十三日　　はせを

北枝様

元祿二年

攝津池田稻束猛氏所持の眞蹟による。

追而申上参せ候。内々御約束のほ句さて〳〵每事忘申候。今日はゆびをくゝり居候處、先書にはつたり忘申候。追書に成候。最上にては、

行すゑは誰肌ふれん紅のはな

右之句にて可レ有レ之候。外々は是はと申程の句も無レ之候。依而不二申入一候。おもひ出し候はゞあとより急便に可二申述一候。加水丈よろしく句も可レ給候。何角役にもたゝぬ事に隙無之さて申兼候へ共、早つきの麥一袋急に御のぼし可レ給候。四五日中に谷僧一兩輩來いたし候へば間に合せたく□□申上候以上。

九日　　はせを

吟水丈

元祿二年

天保七年の寫本『芭蕉消息集』による。

口上

一　昨日は御手紙致二拜見一候。然者此間御歸京之由先々御無事ニて不レ過レ之候。暑氣の節御苦勞に存候。併御仕合よろしく可レ有レ之存候。然者

とんぼうの取つきかぬる艸の上

貴樣之御祝義に申入候。此句は半分はんじ物にて御座候。近日參候て可二申承一候以上。

十一日　　はせを

太郎兵衞様

元祿二年

伊賀より京都に送つた書翰で、天保七年寫本『芭蕉消息集』による。

其後は久しく便も無之いかゞ御暮候哉。愚老此間奥より歸り申候。所々に逗留候て一句づゝ致候。併大暑の時分故長途こまり入候。貴樣抔とも道中せば面白事にて可有と存候。京へ用事も有之に付登り申度存候得共、今に草臥やみ不申候。一日〳〵と延引に成候。今日者雲竹老る人參候故次手ながら申入候。何事も近々懸御目可申承候以上。

十一日　　はせを

共善丈

元祿二年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

追而申入候貴丈御國本へ御下りの時分ちよと爲御知可被下候書狀一通賴申度候はや〳〵認候而は日取の間違いかゞに候夫故認置不申候二三日の間違などはくるしからずさ賴入候さて發句は

さみだれにふり殘してやひかり堂

鰐口の銘には和泉の三郎忠衡と彫付經也

いかゞ候哉隨分御仕合よく御歸京待入候　以上

十三日　　はせを

落水丈

元祿二年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

以手紙申入候久々御物遠に打過候へ共いよ〳〵御さゝはりもなくめでたく存候さて又なか〳〵の旅路色々さま〳〵御噂申度事ども山々御ざ候爰元に着いたし候ては何の別條もなく不相替そく才に居申候ニ見の句御目にかけ申候

蛤のふたみに別れ行秋ぞ

尙々委細は先達曾良に御聞き存候ゝ得御意可申承候以上

十三日　　はせを

淸右衞門樣

元祿二年

本文『一葉集』による。

自尾州廿二日御歸り之由被御越候。先〳〵そく才にてめで度候。道の記御認御遣し一覽候。いづれも出來申候。信濃路にて二三句は別而よろしく候。

雪ちるや穗屋のすゝきの刈殘し

此句類なく候べし。愚老何より貴樣の句上になり候。委は面談とあなかしこ

廿日　　はせを

信分丈

元禄二年

成美・道彦校の「誹諧奇跡鈔」にある。板行は文化八年である。

追而申入候。此度三度飛脚に申遣候事は、京の勝手能存候故指圖せられ候。からす丸通りにて、いづれにても御誂被下可レ給候。文庫並革にて覆ともに頼入候。料は書付御下し可レ被レ成候。又々飛脚に上可レ申候。さて俳諧もはやり申候。何を申てもげはしき處故、しみ〴〵とは出來不レ申、此ほど愛宕の下へ參候。二三會も興行有レ之江戸衆も參り上手になられ悅び申候。

　はまぐりにけふは賣かつわか菜哉

右の句を元にして百韻いたし、其節其角なども參りおもしろく慰み申候。貴丈事噂申候。猶追々可二申入一候。

廿三日　　はせを

秋風丈

鄙歌自得

おもふことふたつのけたる其あとは
　花のみやこもゐなかなりけり

以上　　はせを

元禄二年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

北向雲竹老へ内々御たのみ申候屛風のおし繪、何とぞ今月中頃迄に出來候樣貴樣より御たのみ可被下候。彼方法事も三月の末にはつとめ申さるゝやうに申來候。左候へば夫迄に屛風共に出來上り不申候ては間合不申、自是も度々申越候へ共とかく紺屋の挨拶にてとむと將明不申、さては若州客來御たのみに付たんざくの儀御申被下候、とかく短册は御免可被下候、其代りに句書付遣申候

　金屛に松のふるびや冬ごもり

とかく何方へも御理り申入候間、先樣へ宜敷樣に御傳置可被下候、取込早々以上

二十八日　　桃青

　蔦崎屋十右衞門樣

元禄二年

『落葉考』に「翁文通のはしに」とあるので、書翰

の断片らしく思はれる。

信濃路は雪深き所にて、野山も白たへとうつりかわり候へども、着物にはいまだつもり不レ申候。

雪ちるやほ屋の薄のかりのこし

元禄三年

北枝宛の返翰であらう。『芭蕉翁消息集』に「加賀にあり」とあるによる。

乙州上津之節御細翰忝存候。其元大雪の由、一尺斗は此方へ申遣度存候。弥御無事に御勤被レ成候哉。拙者持病〳〵とのみ顔しかめたる斗に御座候。歳旦等いかなる風流にて御座候や。此方年〳〵のこと故、當春は非番にいたしたれど、せつく者も無二御座一候。是まで色々の骨折さへくやしき事に覺候。貴様集の事不埒成様に御おもひ候半と氣の毒に奉レ存候。心緒句空僧まで申達候間、御内談可レ被レ成候。何とぞ暮春の初は上京と存候。頃日寒氣故持病散々神以氣分重く御座候而早々如レ此御座候。牧童へ可レ然御心得なされ可レ被レ下候以上。

正月三日　芭蕉

追而書

其元にて書申候物は御焼不レ被レ成候よし、米櫃はやけ可レ申候と存候。此度一二枚は書進申候。急々書候而例の通見ぐるしく候。以上

元禄三年

『芭蕉翁消息集』に「加賀金澤布流所持」とあるによる。

此君舍より白米五斗、發句一句

一に俵ふまへて越せよとしの坂

かくめぐみ給ふに、只四壁なるかりのすまひには過たるとしだまながら、靡覚こゝろよくて、

元日や壘の上に米俵　北枝

さて〳〵感心不レ斜、神代のこともおもはるゝといひける句の下にたゝん事かたく候。神代の句は守武神主、身分相應に情の毒なるところ御座候。俵は其元相應に姿の妙なるところ有レ之候。別て歳旦・歳暮不相應なるは名句にても無慨なきものに候。今年天下第一の歳旦可成と、京・大津の作者も致二稱美一候不備。

正月廿四日　　芭　蕉

北枝様

誰人か菰着ています花の春

何人かともいかゞ、御評待入申候。

菰を着て誰人いますとも。

元禄三年

此筋・千川は共に大垣の人。『芭蕉翁消息集』に「大津宰陀にあり」とある。

一愚句被レ成ニ御覧一候由、させる事も無ニ御座一候へ共出申し候ば、無事の有所をしらせん爲に板木に顯し候。又一ッは京の門人去來などいふものにそゝなかされ可ニ申出一候。五百年來のむかし西行の撰集抄に多くの乞食をあげられ候に、愚眼故能人見付ざる悲しさに二度西上人と思ひかへしたる迄に御座候。京の者どもは、こもかぶりを引付の卷頭に何事にやと申出あさましく候。

卯月十日　　はせを

此筋丈

千川丈

たれ人か菰着ています花の春

元禄三年

去來を宇治の螢見に語ふた書翰である。『芭蕉翁消息集』に「加賀吉艮所持」とある。

今日宇治へ參候。貴丈にも御出被レ成まじく候哉。此元仙水にも被レ參候筈約束申候。大坂ゟうぢへ直に杉風抔も被レ參候様々申來候。貴丈に御出候へば、件の方勝手よく御存故一入に存候。愚老は此中上林三入老所にて一句申候。

ほたる見や船頭醉てをぼつかな

右の句にて御座候。野坡丈へは貴丈より御申越可レ被レ下候。此中は手しびれ候ゆへ、筆跡も麁末に認め候段御免候以上。

卯月廿一日　　はせを

去來丈

元禄三年

『芭蕉翁消息集』に「加賀金澤如　所持」とあるによる。

池魚の災承り我も甲斐の山里に引うつりさまざま苦勞い

たしゆへば、御難儀のほど察し申候。され共焼にけりの御透作、斯る時に望み大丈夫感心。去來・丈草も御作驚き申ばかりに候。名歌を命にかへたる古人もゆへば、かゝる名句に御替被レ成候へば、さのみをしかるまじくと存候。知音たれ〲此度の難にまぬかれずや。連中たしかなること不レ承候間、短紙も不レ遺候。能御傳達可レ被レ下候以上。

四月廿四日　　　　はせを

北枝様

元祿三年

金澤の北枝に附合十七躰を教示した際の添狀で『芭蕉翁消息集』に「加賀左衛家珍一」とある。

附合十七体別紙に記進候。初心には見せ被レ申まじく候。術の叶ぬうちに此味を付んといたし、却て一句も調ず、附意もしれぬ事に成ものに候。又むづかしきものなり。斯る味はとても叶まじくと退く人もあるものにて候。術叶ひ候後に扱ひ候へば、一巻のはこび甚むづかしき處にて、人の付なづみたるを或は響、あるひは情などにて發して付て、變化おもしろく成申候。さもなき人は打越三句をおそれて、つまる處はいつも〲逃句のみ致し候は、初心に見へ功者おこして二三句も附たる上に、無理に付るも炎天に難道をたどるごとくなるものに候。能々御考御扱被レ成候ほど鬼に鐵棒にて可レ有候。門人の中にも五七人ならで沙汰致し不レ申候。名高くても付合の術さほどになき人、却て迷ひ可レ申と存候故に候。かくし申にては無レ御坐レ候。十七体を得たる上が千變萬化の術を得る事に候。只付と付ぬといふ事ばかり知て、付合は千變萬化と口にて云人御坐候。をかしく候。十七体の法もしらずして、何とて千變萬化の働が出來可レ申哉。百韻・千句に及ても附心一二体を出不レ申候。知たるものは笑ひ候。小器ははやくみつる輩おほく、後には人々あけて通し相手にならず、只四五人同心の連中にて互に他をそしり高慢に成かけ候ては、俳諧氣違などと名を付られ候もあさましく候。御連中萬御しめし可レ被レ成候。

六月廿七日　　　　はせを

結ぶよりまづ歯にひゞく清水哉

北枝様

元祿三年

近江の幻住庵より金澤の牧童に送つたので、『芭蕉翁消息集』に「加賀にあり」とある。

隱士秋の坊閑居御訪、珍らしく得二芳意一大慶仕候。先以御細翰忝候。御無事に候旨珍重不レ過レ之候。去年頃日はさかりと其元に罷在候。一とせの變化夢のごとくにて、一入御なつかしく被レ存候。大火の跡いまだ萬々御心も靜なるまじく候。されども頃日は乙州參り候而、又々會なども少々御坐候由、愈御はげみ可レ被レ成候。世間ともに古び候により、少々思案も工夫有レ之候而心を盡し申候。其段粗乙州も心得候申間、御噺可レ被レ成候。拙者儀も出庵秋至候而は、雲霧に痛候而病氣に障り候故、近日出庵いたし、名月過には何方へなりとも風にまかせ可レ申と存候。去ながら去年遠路につかれ候而、下血など度々はしり迷惑いたし候而、遠境羈旅不レ叶候間、東の方近くへそろ〳〵とたどり可レ申存候。無常迅速の妙も御坐候はゞ重而得二御意一候事も可レ有二御坐一候。隨分御無事に御勤可レ被レ成候。諸善諸惡皆生涯の事のみ、何事も〳〵御たのしび可レ被レ成候。少々にてもおなつかしく候而早々及二貴報一候

七月十七日　　　　　　　　　　はせを

牧童様

元祿三年

加生後に凡兆に對する返翰である。既白の蕉門物語に「鳥の文ともに大津文素所持」とある。

板行は明和二年である。

一惜レ鳥之文見せ感吟いたし候。乍レ去文章くた〳〵しき所御座候而しまりかね候樣に相見へ候間、先ゝ他見被レ成まじく候。ことのほかよろしき趣向に而御座候間、拙者に可レ被レ掛二御意一候。御文章增補いたし拙者文に致候。もし又是非と思召候はゞ、拙者文御覽被レ成候而其上にて又御改可レ被レ成候。文の落付所何を底意に書たると申事無二御ざ一候而はおとりくどき草物語のたぐひに御ざ候。古人の文章に御心可レ被レ付候。此文に而は鳥の傳記に成申候間御工夫御尤に存候以上。

九月十三日　　　　　　　　　　はせを

加生様

元祿三年

幻住庵か木曾寺かに寓居中の手紙らしい。『もさの水』による。

覺

一もち米　一升

一黒　豆　一升

一あられ　見合

右今夕會の夜食に成申候間、御いらせ傳吉にもたせ御こし可レ被レ下候。茶は一森・三井寺より澤山もらひ申候。貴樣にも早々御出まち入候以上。

十八日　はせを

喜八樣

元祿三年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

以手紙申入候其後は久々不申通候所頭面御狀被下候御あさに成迷惑に候彌御無爲目出度候事に候此方御同前に居申候然は何

夕べにも朝にもつかず瓜の花

花さ實さ一度に瓜のさかり哉

右両句申入候猶追々可申入候以上

二十三　はせな

□（不明）子丈

元祿三年

路通の『勸進帳』に「一日閑寂を訪ひ、やゝにたゝぬ事共云あかりて心細く成行しに、膳所の文さてもてきたり。さり〳〵開き見る」さありて、此の書翰を載せてゐる。『一葉集』は「三日口を閉て」より以下を掲げ、その前を脱してゐる。

いね〳〵と人にいはれても、猶喰あらす旅のやどり、どこやら寒き居心を佗て、

住つかぬ旅のこゝろや置火燵

また埋火の消やらず、膳所去京都を罷出て、乙州か新宅に春を待て、

人に家をかはせて我はとし忘れ

三日口を閉て題正月四日」

大津繪の筆のはじめは何佛

金平が分別のごとく、ことしは休に致候而、歳旦おもひもよらず候へば如ㇾ此御坐候以上。

はせを

曲水様

元祿三年

句空宛の手紙で半化坊闌更の『花の故事』に「前後略」として出てゐる。板行は寶暦十三年である。

一　撰集御大望の由、遠國の發句取あつめて遣候。殘生長途のつかれにや。冬中一日として心よからず。しかし暖氣になり候へば柳陰庵のかり寐に、北枝・秋の坊風流のあらそひなどおもひ出し、しきりに御ゆかしく、一山の花も最はやひらき候らんとさつして、

うら山し浮世の北のやま櫻　はせを

雪消殘る細根大根　句空

人足の天窓かぞゆる春風に　去來

元祿三年

幻住庵に山居する前に曲翠の厚意を喜んで、此の書翰を送つたのでなからうか。通説は幻住庵を去つた後の手紙となつてゐる。『芭蕉翁消息集』による。

芳翰辱徐々拜見いたし候。御老母様・御内室・むすめ子、御無事之由めで度奉ㇾ存候。拙老持病も暖氣にしたがひ少し宛快氣に候間可ㇾ安心候。

一　乙州江戸へ立候付、跡の事御精に可ㇾ被ㇾ入と乙州方よりも申越、鐵のたてをつき並て拙者も安堵悦び難ㇾ盡候。

一　歌仙さて〳〵感心仕申候。かほどまで獨はたらき大功の風雅驚入申候。付墨いたし候。乍ㇾ去こゝもとにても人々取付候て、此返事の内も同名が茅屋埃りの中へ大勢入込候間、御報も批判もしみ〴〵ならず候。疎なる處は御免被ㇾ成可く候。

一　同名方へ被ㇾ掛二御意一候而、淸茶一袋・さかな一種被ㇾ遣さて〳〵御厚志忝難ㇾ盡候。茶は拙者賞翫いたし候。

一　粟津草庵の事、先は御深切之至忝存候。兎角拙者浮雲無住之境界大望故、如ㇾ此漂泊いたし候間、其心に叶ひ候樣に御取持奉ㇾ願候。必これにつながれ心をうつし過ざる

様の事ならば、如何様とも御指圖可レ忝候。しばらく足のとゞまる處は、蜘蛛のあみの風の間に〱と存候へば、足駄の藏も藏ならず候。さすがの御人々中もくどく候へば打まかせ候。

元祿三年

幻住庵の記に就いて推敲をかさね、去來に對し其の意見を求めた書翰である　近江坂本豎濤氏の現に所藏するもので、芭蕉の書翰の樣式を示す爲め口繪に揭げて置いた

發端行脚の事を云て、幻住庵のうとき山難至極。陳而曰、蝸牛蓑虫の栖を離と云て、行衛なき方流方無住終に一庵を得る心なれば、前段行脚共に皆居所にかゝり候。長明方丈の記を讀に方丈の事いはむとて、新都の躁動・火事・地震の亂皆是栖の上をいはむとなり。愚作卿のがるゝ處有といへども、幻住庵にかゝる所はきく〱となくて御一覽の所尤と同ず。則前後の文章まぜ合如レ此につゞり候。猶御遠慮なく御評判可レ被レ成候。され共少々草臥付申候間、前後の文先是迄にとゞめられ、所々は御加筆くるしからず候間、能々御覽被レ成候而、他のそしりをまぬかれ候樣に可レ被レ成候。

岺山房顏心相違いかゞ可レ有ニ御座一候や。但し胸中の岺山たかへてくるしかるまじくや。このかみの御ぬしへ御尋可レ被レ下候。誹文御存知なきと被レ仰候へ共、實文にたがひ候事は無念の事に候間、こむつかしながら御加筆被レ下候へと御申可レ被レ下候。

除老王翁が事は山谷の口の方に有之かと覺申候。一連の詩に二人の名をとる事無念に候。王翁が替り入替度候へども、手前一冊の書なし。尤無才にしてはかすべき便無ニ御座一候間、是等の方御力を可レ被レ加候。

我が聞しらぬ咄に目をくらす朱文公の農談、日西と云句の心にて書申候へ共、直に農談のゝ二字を書改候。いかゞにや。

頓て立出でさいぬ難至極。仍筆の一字を書そへ候。

國分山に取付處いまかよわしく風流あるべく候。此處御工夫可レ被レ忝候。此度之文章少落付たる樣に愚意にも被レ存候。加生へも御見せ可レ被レ下候はゞ、何とはなしに

此度惣躰不出來の由被レ申候由御氣の毒に存候。此人申狀も難レ捨候間又ゝ御よみきけ可レ被レ下候。曲水位署書一旦加生の指圖にもまかせ候へ共、又々貴樣よりも被二御下一此段古人の掟に候間、不レ用にはあらず候へ共、文のつよみ無二御座一故又々事くどく書申候。其段御傳可レ被レ添候。

去來雅丈　　はせを

元祿四年

桃鏡の『芭蕉翁眞跡集』に「東都大平氏雁奴」所持として、其の眞蹟の通り載せてある。

幸便啓上。いかゞ被レ成候哉と御懷敷而已に候。御老母樣・御內・御子達、御息災に御入被レ成候哉承度奉レ存候。拙者舊冬甚寒殊之外痛候へ共、頃日は又ゝ常之通に居申候間、定而當年中には懸二御目一而可レ有二御座一候。何とぞ〱御堅固成樣に被レ成、今一度再會御待可レ被レ下候。拙者も隨分保養致候而懸二御目一度存候。加右衞門殿無レ恙御勤被レ成候哉、北鯤子御兄弟無事に候哉、承度存候。定世事御くるしみ可レ被レ成と是又心をいたましめ候。御心得度可レ被レ下候。

一、膳所御親類中へも被二御遣一候由、御知人に御成可レ被レ成よし被レ入レ念候へ共、去秋の比ゟ膳所へもしか〴〵不レ參、大津・京邊に遊び居申候處、いまだ不レ得二御意一、尤爲レ指用事も無二御座一候故其通に致候。若御袋樣などへの咄にも成可レ申候はゞ、重て御めにかゝり下り可レ申候以上。

二月十三日　　芭蕉

嵐蘭雅丈

元祿四年

闌更の『芭蕉翁消息集』による。

ふるさとのこのかみが園中に、三草の種をもりて、

春雨やふた葉にもゆる茄子種
此たねとおもひこなさしとうがらし
芋種や花の盛りを賣ありく

口にへるまゝに申つゞけ遣候。御秀作御ゆかしく存候以上。

三月廿三日　　はせを

嵐雪丈

元禄四年

『蓑虫庵小集』に「翁書翰半切紙ニアリ嵯峨日記全本是ニ添ソ今井上氏ニ藏ス」とあり、『一葉集』所載のものはなほ〳〵書きを脱してゐる。

其元拙者立候時、宗七殿度々御見舞

處々御一覽御歸宿被成候哉。もはや頃日はと推察申候。かみ殿よりも念頃添存候。

道中の風流、虱の佗投〳〵御物語承度候。宗五も折節上京留守に而、手筈ちがひ候半と存候。先〳〵大義御願珍重〳〵御手柄に御座候。拙者相替候事無御座候、頃日は嵯峨去來下やしきニ居申候。養閑竹の子を給申候。大井川の舟あそび、俗客にはあゆを振舞、嵐山朝暮の詠に而御座候。富士いかゞ〳〵以上。

五月十日　　桃青

〔一〕意専様

〔一〕『一葉集』に「惡守」に誤る。

元禄四年

桃鏡の『芭蕉翁眞蹟集』に「駿府比良氏帯雁」所持として掲ぐ。

此中は御待被下候處、近在へ參候而、御めにかゝらず殘念不少候。さては貴様ニも近々田舍へ御下向之由、段々寒氣ニ趣候而、御苦身千万存候。隨分御達者ニ而御上京まち參せ候。然ば發句之事御申越候。彼方へ御見やげニ成候様よろしき句も無之候へ共御申越故此句申進候。

馬方はしらじ時雨の大井川

如此ニ御座候。いかゞ候哉。猶あとより追々可申承候かしこ。

十月廿二日　　はせを

洞水丈

元禄四年

近江義仲寺より堅田千那宛のものである。本稿寺所藏眞蹟による。

〔一〕九日十日も在庵しれ不申候。

長逗留御草臥のけしきもなく御厚志不ㇾ淺辱奉ㇾ存候。先〳〵御俳諧筋目よろしく候間、深切之義被ㇾ存候。繪澤山に御書成被ㇾ下珍舖慰に覺申候。愚筆御ほめ被ㇾ成候に力を得申候。何か四色五色程覺ゝ直申度候。此方御出被ㇾ成候はゞ十四日十五日十六十一ニは御除可ㇾ被ㇾ成候。他出之義知不ㇾ申候。十八日十三日は慥に在宿可ㇾ仕候。□□中遣候ゆゑ相違し候處、嵐子方へ三ッ物相屆可ㇾ申候。委細得ニ貴意ー候。

且又同吟の俳諧もよほどおもしろく候。前夕嵐蘭珍夕吟じ見申候。

八　日

元祿四年

大喬の『筆の跡』に摸刻し、明治六年板行されてゐる。

是等類字の切シ格の有り候。兎角俳諧は萬事作り過たるは道に叶はず、其形のまゝ又は我心の儘を作りたるを能きと存候。かく御含にて可ㇾ然候。取極メたる事も無ㇾ之**候はゞ是等いかゞに候哉**

大津繪の筆のはじめは何佛

右に發てかくる意なり。書外又ちかき内可ㇾ參候。早々

以上

十六日　はせを

元祿四年

義仲寺の無名菴から京都の加生卽ち凡兆に送つた手紙である。本文は『一葉集』によつた。

度ゝ預ニ貴墨ー候へ共、持病あまり氣むづかしく不ㇾ能ニ御報ー候。昨夜も出候名月散々草臥、發句もしか〴〵案じ不ㇾ申候。湖へもえ出不ㇾ申候。木曾塚にてふせりながら人ゝに對面いたし候。各發句有ㇾ之候。

月見する坐に美しき顏もなし

なき同前の仕合ニて候。當河原凉の句其元にて出かゝり候を終に物にならず打捨候を又取出し候。御覽可ㇾ被ㇾ成候。

川風やうすかき着たる夕すゞみ

職人のでしこ感心仕候。落書もとの外御出かし被ㇾ成候。

少し氣むづかしく候故、早ゝ申上候。

十八日　はせを

加生様

去來子より御左右無二御坐一候。御病見いかゞやと無二心許一被レ存候。

元祿四年

『芭蕉翁眞跡集』に「加賀城下宮竹屋伊右衛門所持」とありて文中の「芹賣の十錢」の句「十錢を得て芹うりの戻りけり　小春」をかゝぐ。

何處持參之芹翰落手、御無事之旨珍重存候。類火雖御のがれ候よし、是又御仕合難二申盡一候。殘生いまだ漂泊やまず。湖水のほとりに夏をいとひ候。猶〔一〕こち風に身をまかすべきやと秋立比を待かけ候。且兩御句珍重、中にもせりうりの十錢、生涯かろき程我が世間に似たれば感慨不レ少候。口質他に越候而、いよ〳〵風情可レ被レ懸二御心一〔二〕愚句

京にても京なつかしやほとゝぎす

暑氣に痛候而及二早筆一候。

季夏廿日　はせを

小春雅丈

十錢を得て芹うりの戻りけり　小春

〔一〕『一葉集』「うら風に」
〔二〕同「可レ被レ懸二御心一候」

元祿四年

下村春坡百年忌出品の藤井培屋氏所藏による。

先月十一日の御狀廿日過に相達拜見いたし候。其許御替りも無レ之候や。めで度存候。愚老もぶじに不レ替くらし申候。ひさ〴〵無音心外に存候。併幾年無音にても遂々心にかわる事はいさゝか無レ之候。貴樣誹諧あがり申候由影にて承候。此方めづらしき句も出不レ申候。此中去方にて、

柚の花にむかしを忍ぶ料理の間

取あへず相抄迄に申捨候。いかゞにて候哉。又〻重便の刻よろしきも出候はゞ可二申入一候。此中御狀之御報如レ此候以上。

廿五日　はせを

松風丈

元祿四年

『芭蕉翁消息集』に「越中ニアリ」とある。

御手翰辱拜見、夜前は得二閑談一珍重不レ少候。明日御立可レ

被レ成の旨後刻貴面御相談可レ仕候。追付御入來、是にて御ねころび可レ被レ成候。像讃之儀發句珍しからず難仕儀候。ケ様の事にても書付可レ申や。

（庵の秋か）秋の色ぬかみそつぼもなかりけり

しづかさやゑかゝる壁のきりぎりす

御用捨なく可レ被二仰下一候。おなじくば御免外に白紙に思ふ事書進上申度候以上。

即　時　　　はせを

＊句空社兄　參る

元祿四年

闇更の『落葉考』による。

おとめ殿　參る　　　はせを

していどの無事に御そだてなさるべく、御よしにもはるか申上候。

此ほどは加生老、去來御みまひ御たいぎながら、ゆるゆると名殘をおしみ、よろこびかぎりなくぞんじ參せ候。尙ゆのうちは山ふかき方へかくれまいらせ候。春になり候てまたまた御めにかゝり申べく候。ながながの御なさけとも、わすれがたきのみ申つくしがたく候。さるものどもよろしく御こしらへ、さむくも御ざあるまじく候。御きづかい被レ成まじく候。御ぶじに春を御まちなさるべく候。

よひよひはかまたきるらんね所の
三つの枕もこひしかりけり

元祿四年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

其角も一兩日中には東武へ歸申候、左候はば今夕催一會たく丈艸御同伴御入來待存候、御知せのため如此御座候以上

八月廿八日

尙々今朝御日かけ申候、

白露もこぼさぬ萩のうねり哉　　せはを

古庭や寢もせず起ず萩の花　　其角

元祿四年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

御手紙被下候昨日は知人にさそはれて四條の芝居見物にまゐり一日遊び申候、又々氣も晴候而おもしろく御座候。俳諧などゝはちがひ是にてはいかいもやめにして遊興斗がよく候。

口切に境の庭ぞなつかしき

茶のは句は是より外に覺不申候　如此に候以上

十二　　　はせを

木予丈

元祿四年

「芭蕉眞蹟拾遺」による。

申進たき事に山ゝにて候得共、此間者風氣にて候故ふせり罷在候。ほ句の事もそこ〳〵にして置候。近所の衆も寄集何角咄等も被致去にて風の神もなぐさみ居申候。ほ句

むかし聞秩父殿さへ角力取

是も風氣故この風□□□(不明)句御笑ひ草迄以上

十九　　　はせを

意水丈

元祿四年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

一林甫子兩吟さて〳〵甘心仕候。世上の俗諧みな〳〵ふるひ果候處かゝる新智珍らしく段々さりわき評に不及一卷一體病旨愚案の情見たがふ事無御座候。愈御はげみ被遊膀所な花の湖水さ可被成候。珍夕方まけじさ情を出し候。

百させの氣色な底の落葉哉　　はせを

元祿五年

江戸の芭蕉庵から大垣の木因に對する返翰である。天保七年寫本「芭蕉消息集」による。

御芳翰拜見仕候。小紙一束被ㇾ懸二御意一遠方の所忝奉ㇾ存候。御發句共御書付令ㇾ感申候。貴御無事ニ皆珍重此事に存候。愚庵無二別條一罷在候。三ッ物例年之通可ㇾ被ㇾ成候由珍重存候。相替事無由候間早々以上。

正月廿日

春もはやけしきとゝのふ月と梅　はせを

木因様

元祿五年

桃鏡の「芭蕉翁眞蹟集」に「東都翁川村氏懐中」所持として摸刻してある。

杉風様　　はせを

二月七日

昨日は御見舞候而、御痛之事共、直ニ御物語承先案(マヽ)堵致候

一此書状加州金澤へ不ㇾ叶用事申遣し候。何とぞ被ㇾ入二御

念一上包昔樣御名を御書被レ成候而、御懇意の方へ御頼被
レ遣、返事參候樣に奉レ頼候。御家中之風俗尚其不レ宜候よ
し兼而承候間、昔樣上包ニ被レ成候而、底理憚奉レ頼候。少
ゝ急候間、能樣ニ被ニ御遣ニ可レ被レ下候。
發句も延引可レ致と存候へ共、與風所望ニ逢候而如レ此申
候。

鶯や餅に糞する縁の先

日比工夫之處ニ而御座候。

元祿五年

江戸の芭蕉庵より出羽羽黑の岸本八郎兵衞公羽に、圖司呂丸の客死を報じたもので、安藤和風氏所見による。

貴翰辱委細拜見仕候。當春よりの御待儲の御國茶等苔此方へ被レ遣被レ下候。誠御厚情不レ淺辱賞翫、草扉の樂みに可レ仕、小手前靜に成候はゞ御志にて御座候間、いたづらには飲食仕間敷候。且又鳥のむだ書御所持被レ下候旨辱奉レ存候。兒童の筆をとりたるやうに相成申候。暫時記念と思召可レ被レ下候。去年結構成御挨拶に被ニ仰下一痛入奉レ存候。

一返すゞも左吉事難レ忘打寄ゞ申出候。昨夜京去來より又申越候。是正月晦日の狀にて呂丸生前の事にて御座候間切拔候て懸ニ御目一申上候。御緣類の方へ御語可レ被レ成候。死後の狀未だ去來より不レ參候。定めて此上別條御座有まじく候。私合院樣隨分ほと候(以上九字不明)

一御發句五句被レ遣候。扨々感心仕候。兼而呂丸・重行すゝめの由いかにも他の手筋にて毛頭無ニ御座一候。其築眼般の處、申して大感仕候。就中礎の五句秀作と覺え申候。重て御うゝの・御出印可ニ申上一候。其庵几右のかたがきの内へ書込置申度奉レ存候。尤御暇も御座有間敷候得共、御國にては重行などゝ言捨被レ成候て可レ然奉レ存候。かゝる事に付ても呂丸殘念に存候。重行嘸力落され可レ申候。

一手前病人一兩夜少し心持かろき體に見え申候へ共、大病の儀故樂しみ氣薄く守り暮し候。誠隙閑猶の中まで世の有樣のがれ難く、是非なき事と胸をいため罷在候。元順重行此度の便、呂丸歸國の節細書可レ遣候。兼て油斷仕置候處、病人故あらましの事共午ニ慮外一宜敷奉レ頼候。事閑

になり候はゞ戸澤甚右衛門迄頼み候て、委細可レ得ニ貴意一候。御子様(のこ)可ニ思召一、此方も事外看病草臥罷在候間此度御音信御延引被レ遊可ニ申上一候。幸露命恙なく候はゞ再顔眉を開可レ申候。頓首。

二月十二日　　芭蕉桃青

岸本八郎兵衛様

尙膳所より申來候一段切拔候間懸ニ御目一申候。呂丸儀御驚可レ被レ成と奉レ存候。京衆追善すゝめ被申候。

雁　一　羽　斷　く　顔　の　上　の　下

か様に仕候。随分不出來の様猶追て可ニ申述一候　恐惶謹言。

二月廿一日

元祿五年

宛名の一笑は金澤の小杉一笑ではあるまい。併し『芭蕉翁消息集』に「加賀金澤茶屋三右衛門宛賓」とあるので、全然否定もできない。

然ば御約束之水鶏笛送給、忝珍重存候。此さとの人々聞馴ず、女子ともも集り我を藝者の様に申おかしく候。行脚さき國ところにより一向音をしらぬ人御坐候間、吹てきかせ可レ申と悦び申候。鹿笛も木曾よりもらひ申候。ほとゝぎす笛も御ざ候はゞほしきものに候。水鶏笛つくる人はつくるべくと存候。乍ニ御面倒一是ら御きゝ可レ被レ下候。出來候はゞ御頼可レ被レ下候。頼入申候。何にても相應望のもの、細工人へ謝禮いたすべく候。殺生の道具ながら水鶏笛・しか笛も只ふくはおかしく候。はつかりの聲・水鶏たゝくなど歌にも發句にもつくる人のさし竿にてとい、あみにかけなどいたし候は、口とこゝろと相違にて名句吐候ともうそつきといふものに候へば、まことの風人からみればあはれなる事にて、たとへころさずとても、雲に飛地にはしり候鳥をちひさき籠に入れ、たのしびとなすは牢番も同じ事にて候を心づかず。籠をならべこれは二兩の駒鳥也、これは五兩の黄鳥なりといひて、摺餌に小袖の肌おしぬぎ、高祿の人にもあさましきさまする人、武林連中には有ものに候。かの開ニ籠放ニ白鷴一の詩意など教訓可レ被レ成候。伊賀の家中の人々にも御座候間土芳にも此事度ゝ申遣候。

うぐひすや餅に糞する緣の先

二月十六日　芭蕉庵

一笑樣

又武士は殺生するものなりといふ人御坐候得共、魚鳥をとり候が腕がためにもなり申ま敷、只こゝろのいやしき故に候。それ〲の獵師御座候間、これより買もとめ料理候事はつみにあるまじく候。

元祿五年

本文は『一葉集』による。

尙々御老母樣可レ爲二御堅固一奉レ存候。とやかく申內冊水丈春を打越、嘸御悅可レ被レ成候。幻住庵再興之時節も過候間、誠まぼろしの日數頓而入庵之節ニ成可レ申候。

貴翰忝拜見并半紙一束被レ懸二賢慮一、每々御厚情不レ淺難二筆端盡一奉レ存候。御目まひ度々ニ及申候由氣之毒奉レ存候。陽性上る時候故と存候間、養生主要用ニ存候。御公用被二仰付一候由、珍重ながら御持病の御爲如何と無二心元一存候。包丁が半御手ニ可レ被レ入候。南經齋物過半に至候由、連衆ゟ申來大儀之處はかゝを御やり被レ成候而、御手柄奉レ存候。隨分淸眼微細に御開可レ被レ成候。且拙者持病も折〲氣指候へ共、大痛も不レ仕舊友風情之筆せつき申候而、よほどやかましく御坐候間、來月出京可レ致と心掛申候へども、いろ〲のがれぬ事ども仕出かし、夏秋までも可レ留たくみいたし候。隨分拔出京邊貴境にて卯月末頃までは足を可レ留存候。後之事を思案致すまじきよし、洒落が棒を送候へば、吹風に可レ任候。返翰數多及ニ早筆候頓首。

二月廿二日　芭蕉

奴誰雅伯

元祿五年

書翰の本文は逸したらしい。『一葉集』による。

別紙

一神矢の夜蟻蟻は少分ながら御用に立滿足候。有之感心關の足輕能頃合之奇作ニ候。過れば手帳の部へ落候。世になるものゝ失や。惣而地句等皆々手帳の外は三歳兒童の作意、これのみ打寄候而は其御噂申計ニ御坐候以上

二月廿五日　はせを

許六雅丈

元禄五年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

昨日は御はや〳〵と御慶に御出被下候、俄につれ御座候てせた馬風方へ同道にて参り候故不懸御目殘念ニ存候。さては歳旦之句御たゞれ置候御書中拜見申候如此に候

年々や猿に着せたる猿の面

なかしき句にて御座候又ゝ永日懸御目萬々可承候以上

五日　はせを

松風丈

元禄五年

本文『一葉集』による。

尾之露川方より宮重もらひ申候。今夕御出候而御料理なされべく候。此旨丈草へも御つたへ可レ被レ下候。

六日　はせを

三十里尾張大根のはなしかな

又

落葉してぬかみそ桶もなかりけり

味噌は御持参可レ被レ成候以上。

元禄五年

『芭蕉翁眞跡集』に「東都倉林氏具中」所持として眞蹟のまゝ掲ぐ。

寶壽院と申僧今日上京候ニ付申上候。彌御別條無レ之候哉承度候。さては先頃たのみ申上候額字出來候はゞ、此僧ニ御渡し被レ下度候。委細は御咄可レ被ニ申上ニ候。借ゝ御世話ニ奉レ存候。さて又内ゝ御たのみ申上候千字文、來月中ニ御出來被レ下候樣内ゝ御心がけ奉レ頼候。先樣ゟ使候度毎にせがみ遣候。此中口すさび申候一句、

ほとゝぎす鳴音やふるき硯箱

いかゞ思召候哉。おかしく被レ存候。近々參候而可レ得ニ御意ニ候以上。

十一日　はせを

北向雲竹樣

元禄五年

烏明の『ふたつのふみ』に眞蹟通り摸刻した其の一通である。板行は明和八年である。

追て申入候。いつぞやはまいり長〻逗留候而内室御世話共難二申謝一候。何分にもよろしく御心得可ㇾ給候。然は共齋御やく束いたし候はまぐりかい、随分大キ成ルたのみ遣候。此うへは無ㇾ之よし宮〻申越候。少づゝの大小は有之候へ共、五つ一袋に入ひきやくに遣候。いろ〳〵ノ切ゞでさいくは候はゞ見事に成可ㇾ申候。くわしきは追而御めにかゝりし時申述候。あら〳〵申入候以上。

十八日　　　はせを

用和丈

御もと参せ候

はまぐりのいける甲斐あれ年のくれ

元祿五年

深川の芭蕉庵から葛飾の素堂に宛てたのであらう。「一兩日中に」文字からさう推察される。本文は『もとの水』による。

口上

此間御話申置候通、勸學院古瓦硯之銘、足下・其角・愚老三人との一軸に認ほしき由、一兩日中に御書可ㇾ被ㇾ下候。且又京都上御靈神主小栗栖大炊頭七十之賀、是は御詩作賴來候。兼而御存のごとく醍醐内大臣様御門弟に而、和哥も出來申候。委は期二拜顔一候。

廿四日　　　芭蕉庵

素堂先生

元祿五年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

一月ごろいづ方やらの便りに御狀到來愈御無事に御入被成候哉卓袋が赤味噌のさろゝ汁もなつかしく罷成候京屋如き味噌くはるゝ時節に罷成候御客人御息災に御座候哉御噂たのみ候

一東坂屋山の方に草菴御結被成候に付號可申よし則存寄候間書付申候

東の方藪際の古家　　東麓庵

新菴定而西の方に付可申ト是　　西麓庵

そくたる樣に覺申候土芳に物ずき御究させ可被下候御氣に不入候はゞ又改可申候俳諧いかゞ被成候哉土芳無油斷被勤候殊に御噂可承候

聲かれて猿の齒白し峰の月　　キ角

只今愚庵に承り候

鶏や榾焚く夜の火のあかり　珍碩
頭巾の歯ぐきも寒し魚の棚　愚句

取紛候間早筆卓袋参り候はゞ御かたり可被下候さてもさても人にま
ぎらされ、ことの外隙無御座候　以上

極月三日　はせを

意専様

元禄六年

桃鏡の『芭蕉翁眞跡集』は明和元年の蓼太の序があり、目録に駿府力石氏耳得の所持として、眞蹟のまゝ摸刻してある。道彦・成美共校の『俳諧眞跡鈔』は此の書翰を収めてある。本文に眞跡集によつた。

(一)保生佐大夫三吟に

老の名の有共しらで四十から

少將の尼の哥の餘情に候。(二)

素堂が菊園に遊びて

菊の香や庭にきれたる沓の底

(三)野馬と云もの四吟に

金屏の松の古さよ冬籠り

猶廣く他見被レ成まじく候。追而(四)俳諧など可レ懸二御目一候。
乍去當冬は相手ニ可レ爲物無二御座一候へば、俳諧も成申まじく候。廣き江戸ニ相手のなきも(五)氣の毒ニ存候。當方無レ恙五句付・點取牌の職捫破たらん後、初而俳諧はやり可レ申候。いづ方へも久々絶ニ書音(六)一善膳へ連狀一通、此狀のみニ候。大がき・大坂へもいまだ初夏ゟ返簡不レ致候。落字文章の前後はゆづり候而御披覽(七)可レ被レ下候。當年めきと草臥増り候。
上方邊繪色紙いまだ調不レ申候由、重而可ニ申遣一候。將又此度石摺大色紙四枚被レ懸ニ御意一忝折ふし屏風入用ニ而、別而よろこび申候。五老井のあつきも日やけにあひ可レ申候。煎茶可レ被レ下候由、遲くともくるしからず候。能便宜少々可レ被レ懸ニ御意一候。頃日あへ茶も絶あき申候以上。

十月九日　はせを

許六雅丈

〔一〕『眞跡鈔』に「寶生左大夫三吟に」の詞書なし。

〔二〕同「餘情にて」
〔三〕同「野馬さまもの四吟に」の詞書なし、『一葉集』に「野坡さ」
〔四〕『奇跡錄』に「追而誹諧」
〔五〕同「江戸に相手なきも又」
〔六〕同「絕書信善膳へ」、『一葉集』に「膳所」
〔七〕『一葉集』に「御披見」

元祿六年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

此中は御文被下ながめまゐらせ候彌御無爲御入よしめで度候此許にても不替くらし居候併過し頃より兩足いたみ遠方へは出不申候唯近き在廻りばかりに暮居候次第〳〵寒はつよく成候故わらぶきの軒にて丸雪の音を聞、

雜水に琵琶きく軒のあられ哉

此一句申進候其表の御連中へ其元より御傳可給候さて〳〵手もふるひ見ぐるしき書面御免　以上

霜月廿二日　　　　はせを

䛗子丈

元祿六年

水戸千葉市郞氏所持の眞蹟による。

深川於草庵ニ何と申極り無之會催候、間其御含にて、

扨て貴下様に萬事御取斗頼入候まゝ、早席之程願候。大体は不参も無之由、ゆゝしき公用之人無是非候。廿八日は許六木曾路に趣由。

旅人のこゝろにも似よ椎の花

かく斗申出候。何も當日又可申上候、右御知らせ申上候。用事のみ早々以上。

十七日　　　　はせを

雪江庵丈

元祿六年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

如行老御歸に付乍便申まゐらせ候未餘寒强御座候得共彌御無爲御暮の由珍重御事に候さては先頃留守間に御手紙歸庵にて拜披申候扨内々拔書の五册相認候而此度進申候御心靜に御寫候而いつにても御かへし可成候さて又木曾路にて落馬の時發句申候事

馬士に落さるゝ身は木の子哉

たわみては雪まつ竹の氣色哉

右の兩く御所望故書入懸御目候尙又委細の儀は如行老御物語可成候不能多筆候かしこ

廿四日　　はせを

一　水　丈

元祿六年

荊口は宮崎氏、大垣の人である。本文は『笈日記』中『大垣部に載つてゐる。

ほとゝぎす聲橫ふや水の上　[一]聲や橫ふか　一聲の江に橫ふやほとゝぎす　水光接レ天白露橫レ江の[二]字橫句眼なるべしや。ふたつの作いづれにやと推敲難レ定[三]所水沼氏沽德と云もの訪來れるに、かれ物定のはかせとなれ[四]ど兩句評を乞。[五]沽曰、橫江の句文ニ對シ考候時は何輩尤いみじかる[六]べければ江の字拔て水の上とくつろげたる句のにほひよろしき方に思ひつくべきの條申出候。とかくする內に山口素堂・原安適など詩歌のすきもの共[七]入來りて、水上の聲よろしきに定て事やみぬ。させる事なき句ながら、[八]白露橫といふ奇文を味合て御覽可レ被レ下候。

荊口丈　　はせを

〔一〕『一葉集』に「聲や橫ふか」を脫す。
〔二〕同「橫レ江ゝに橫たふの字句眼なるべし二の作」
〔三〕同「處に水沼氏沽德」、『笈日記』本文は「水沼氏」とあれど「水間氏」の誤植なるべし。
〔四〕同「なれば」
〔五〕同「沽德云」
〔六〕同「べけれども江の字ぬき候」
〔七〕同「入」を脫す。
〔八〕同「白露橫江と云奇文」

元祿七年

烏明の『ふたつの文』のあとの一通である。

口上

先刻は爲ニ御慶ニ御出早々忝候。御無事にて御越年目出度存候。此方もそく才にて又此春にもうつり申候。さては歲旦のほくあまりよろしくも無レ之候へ共御待にまかせ申入候。

蓬萊に聞ばや伊勢の初便

右の句にて御ざ候。さてよろしくも無レ之候は貴丈ほ句御書遣候。歸り見候もおどろき申候。何事も永〲以上。

正八日　　はせを

元祿七年

伊賀上野今中仁兵衞氏所持の眞蹟による。

尙々狀數重候間追而腹一ぱひに書つくし可申遣候。

百とせの半に一歩を踏出して、淺漬の齒にしみわたり、雜煮の餠のおもみを覺候こと年の名殘も近付候にやとこそおもひしられ侍れ。去年の春まだ片なりのときこえし梅のにほひも、今としは漸々色香しほらしく存候。御慈愛のほど推察致候。久々便不仕無音、去年中は何角心うき事共多く取重候段、同名方迄具に申遣し候間御聞可一被レ成候。早々東麓庵の櫻の比はと漸々旅心もうかれ初候。されどもいまだしかと心もさだまらず候へ共、都の空も何となくなつかしく候間しばしのほど成とも參候而可レ懸二御目一と存候。定而歳旦承度候。愚句京板に出候。尙門人の引付ごとに書とられ候間、いづれにて成共御覽可レ被レ成候。便り一字慈鎭和尙より取傳へ候。

正月廿日　はせを

意專老人

元祿七年

蝶夢の『芭蕉翁三等之文』に眞蹟をかゝげ書中「歳旦の名殘にもや」の考證に「かならず命終のさしの歳旦なること」といふてゐる。『芭蕉翁消息集』には「大津巨州家珍」とあり、『芙蓉文集』には「曲水答文」と題してゐる。本文は『三等之文』によつた。

こなたよりも愚墨進覽の處、其元ゟも預二御音問一忝御對顏の心地に而拜見仕候。愈御堅固被レ成二御坐一候旨、千萬目出度奉レ存候。竹助殿御沙汰いづれの御狀にも不レ被二仰下一候。御成人わるさ日々につのり可レ申と奉レ存候。御歳旦三物の事は、先書に具に申上候。愚句御感心のよし珍碩より被レ告年々は口にまかせ心にうかぶ計に申捨候へども、もはや是を歳旦の名殘にもやなど存候へ而精を出し候處、御耳に留まり候へば、甲斐ある心地せられて悦にたへず候。

一幻住庵上葺被二仰付一候半由珍重奉レ存候。うき世のさた少々遠きは此山の事と、折々の寢覺難レ忘候。露命にかゝり候はゞ、ふたゝび薄雪の曙など被レ存候。

一風雅の道筋、大かた世上三等に相見え候。點取に晝夜を盡し勝負をあらそひ、道を見ずしてはしり廻るもの有。彼等風雅のうろたへものに似申候へども、點者の妻子腹をふくらし店主の金箱を賑はし候へば、ひが事せんには増りたるべし。又其身富貴にして目に立慰は世上を憚り、人事いはんにはしかじと日夜二巻・三巻點取勝たるものもほこらず、負たるものもしひていからず、いざま一巻など又とりかゝり、線香五分の間に工夫をめぐらし事終て即點など興ずる事ども偏に少年のよみかるたにひとし。されども料理を調へ酒を飽までにして、貧なるものをたすけ點者を肥しむる事、是又道の建立の一筋なるべきか。又志をつとめ情をなぐさめ、あながちに他の是非をとらず。これより實の道にも入べき器なりなど、はるかに定家の骨をさぐり、西行の筋をたどり、樂天が腸をあらひ、杜子が方寸に入やから、わづかに都鄙かぞへて十ヲの指をふさず。君も則十ヲの指たるべし。能々御つゝしみ御修行御尤に奉ㇾ存候。

一路通事は大坂にて還俗いたしたるもの、推量いたし候。其志三年以前より見え來たる事に候へば驚にたらず候。とても西行・能因が眞似は成申まじく候へば、平生の人にて御座候。常の人常の事をなすに何の不審か可ㇾ有ㇾ御坐ㇾ也。於ㇾ拙者ㇾは不通仕まじく候。俗になりて成共風雅のたすけになり候半は、むかしの乞食より増り可ㇾ申候。

二月十八日　はせを

曲水様

元祿七年

〔『芭蕉眞蹟拾遺』による。〕

膳所の便致啓上候。其元相替無御座候哉承度存候。拙者道中島田あたりまではつかへなども折々發れ候得共次第に達者に成候て道々二三日里目により五里ばかりも養生の爲歩行、足場能所は馬にも乘勞致候て無恙上着致候。雨天大かた小雨におひ候て、さのみあつき程の事は無御座候。十五日島田へ着候て一夜留候處其夜大雨蜘水出候て三日渡り留候て十九日立申候。いまだ高水にて馬のしりもひやう〳〵かくれぬほどの事に候得共島田の宿は懇意の者共故馬川越随分念入一手ざは高水ふこさする馳走に致候島田より一通書狀頼置候相屆候哉、二十五日の狀曾良猪兵衛より參候早々伊賀にて相達候、名古屋へかけよりゆて三

宿二日逗留佐屋へ廻り候處に荷兮例の連衆道にてぬけがけ待受候て又佐屋半日一宿逗留伊勢長島にとまり候而明る日久居まで參候て二十八日伊賀へ上着申候、同姓よろこび舊友ども日々かけ合候て今月十六日迄伊賀に逗留致候て大和加茂猪兵衞在所一宿十七日大津へ參十八日より膳所に罷在候伊賀同名方あつく蚊も多候へば夏中は膳所、折々京へ出候て去來とかたり若は嵯峨去來屋敷に休足致事も可有御座候。いまだ草臥もしかとやまず候故持病も指出不申候。次第〳〵暑にむかひ候得ばいかゞと存候へ共前々より藥給候醫師なども不替居申候間此方の事御氣遣被成まじく候。

先月十八日深川へ子珊御同道の由申來候、定而俳諧の御心指とは存候へどもはか〳〵敷事も成申まじく候、十七日沾圃會致候とて懷紙指越桃隣發句にて御座候成程何レ出來候間いかあたり先江戸いきと寫し置申候名古屋いかせ候俳諧猶いまだ能所に尻をかけ居申候其元の風情存知もよらず候間深節に御はげませ可被成候。名古屋は深川集を手本にわかき者共修業の由申候惣て俳諧評判の事など有之候得共他にあたり候事も有之候得ばいかゞ故、書しるし不申候間ほのかに筆のはしを御さとり候て最其元御はげみ可被成候。

一同名此度は殊之外力を得よろこび候て拙者も別て大悅仕候委細書付がたく候間不具候。

一猪兵衞病氣桃隣無御油斷被仰付可被下候、折々深川へ御なぐさみに御出あれかしと存候、されども壽貞病人の事に候へばしか〳〵茶をまゐるほどの事も得致まじくと存候、これらが事共などは必御事しげき中萬御苦勞に被成被下まじく候、猪兵衞桃隣指圖にてともかくも留守相守り火の用心能仕候樣に被仰付可被下候。此度折々狀數有之候間重て具に可申進候以上

五月十一日　　はせを

杉風樣

荷兮方にて

世を旅に代かく小田の行もどり

野水隱居所支度の折ふし

涼しさを飛彈の工がさしづかな

すゞしさの指圖にみゆる住居哉

句作二色の内越人相談候て住居の方をさり申候、飛彈のたゝみまさり可申候其外發句も不致候伊賀にて歌仙一卷言捨申候。

元祿七年

『芭蕉翁眞跡集』に編み桃鏡の所持として摸刻し

てある。

一當月十六日加茂へ參平兵衛ニ一宿、御袋様、源兵殿、あねごなどへ逢申。御袋御無事ニ御入候。され共四年已前ゟはよほどとしも御寄、耳も遠く被レ成候。あねごとふたり貴様事のみ、くどくかへすぐ〱逢申度よし被レ申難義いたし候。則、平兵衛、源兵殿、書狀相届候、委ク跡ゟ可ニ申進一候。

十六日好齋老とならちやにて御出會候由、御なつかしく候。好齋老へも此たび狀數多く候而、延引重て可ニ申達一候、御心得被レ成可レ被レ下候。深川の様子共ニ重而御申こし可レ被レ下候。

一二郎兵衛道中達者ニ而、拙者苦勞ニもなり不レ申能つとめ申候以上。

壬五月廿一日　はせを

猪兵衛様

元祿七年

『芭蕉眞蹟拾遺』による。

御文被下忝存候、又當年も時鳥ばかりの集の事被仰下萬事御心添之程察入候、尙席日出名の儀被仰越いかゞにても可然候間御取斗被下度大體に罷出候まゝ其御含にて頼入存候御咄の所にてはかく斗

木がくれて茶摘も聞や時鳥

何も其内拜顔に可申候右御報斗申入候早々以上

孟秋三日　はせを

山月庵

桐坊

元祿七年

桃鏡の『芭蕉翁眞跡集』に松村氏郎ら桃鏡所持さして、眞蹟通り摸刻されてゐる。

一桃隣いかゞ相被レ勤候や。暑氣之節短夜と云會も心のまゝには成申まじく候。杉風・子珊心にたがはざる樣ニ實を御つとめ候へと御申可レ被レ成候。京都俳諧師五句付候事ニ付閉門、俳諧さたひつしりと、蛭に塩かけたる様に候。然に段ゝ拙者口から申上せ候も氣の毒故不レ申候、ケ樣之處、唯實を不レ勤故と合點を致、むざとしたる出合會等心持可レ有旨、桃隣へ御物がたり可レ被レ成候。

一市之進殿御無事に候哉。可然御意得頼度候。

一此方京・大坂貧乏弟子共、かけあつまり日ゝ宿を喰つ

ぶし、大笑ひ致くらし候。

一理兵衛細工無レ之時分せめて煩不レ申候様ニ御氣を可レ被レ付候。右之通壽貞ニも御申きかせ可レ被レ下候。おふう夏かけて無事ニ候哉。様子共ニ御申越可レ被レ成候。

一宗波老、庄兵衛殿へも御心得可レ被レ成候。定而好齋老たへず御見舞可レ被レ下候と存事ニ候。追而無以ニ書狀ニ可レ得ニ御意ニ候以上。

六月三日　　桃青

猪兵衛様

これも『芭蕉翁眞蹟集』の編者瀧鏡所持として出てゐる。

元祿七年

壽貞無仕合もの、まさ・おふう同じく不仕合、とかく難ニ申盡ニ候。好齋老へ別紙可ニ申上ニ候へ共、急便ニ候間、此書狀一所ニ御覽被レ下候様ニ頼度候。萬事御肝煎御精御出しの段ゝ、先書ニも申來、扨ゝ厚誠のふしぎの緣に候。此御人頼置候も、ヶ様ニ可レ有端と被レ存候。何事も〳〵夢まぼろしの世界、一言理くつは無レ之候。ともかくも能様ニ御はからひ可レ被レ成候。理兵衛もうろたへ可レ申候間、とくと氣をしづめさせ、取亂し不レ申様ニ御しめし可レ被レ成候以上。

六月八日　　桃青

猪兵衛様

元祿七年

伊賀より名古屋の露川宛の書翰である。澤市郎右衛門氏の所藏による。

なほ〳〵先日御狀御扣□□共遂ニ一覽ニ候。尤珍重の何共拜見申候。重而ながら便りに委可ニ申進ニ候。

熱田鷗白興風預ニ御尋ニ候而御噂承珍重被レ存候。先いつぞや佐夜の泊り殊の外に草臥取染候爲不レ得ニ御意ニ思召殘念の至に被レ存候。愈風雅無ニ間斷ニ御勤被レ成候由、感心申事に御座候。且又いつやらの便りも御連札並たばこ一箱被レ懸ニ芳情ニ、遠方御厚志不レ淺義忝被レ存候。拙者盆ゟ舊里に逗留の處、伊勢ゟ支考が來テ待居候。追付他□致□押造候而、越年に又舊里へ可レ歸覺悟に御座候。正月は□貴様が在所へ御出可レ被レ成候。其節緩可レ得ニ御意ニ候。

取あへず早〻不具以上。

八月廿日

元祿七年

〔芭蕉翁眞跡集〕に「駿府小西氏子來」所持さして出てゐる。

尙〻四五日中に又〻委可㆓申進㆒候。先大坂へ出候を御しらせの爲早〻申殘候。

夏より七月までの御狀、尤遲速御座候へども、だん〳〵無㆓相違㆒相達候。久〻伊賀に逗留故、便りも不㆑致候。無㆓心許㆒被㆑存候。愈御無事に御勤、御家內相替事無㆓御座㆒候哉承度存候。おしめ祝言、當月中にて可㆑有㆓御座㆒推量申候。定て御取込可㆑被㆑成候。定て首尾能相調可㆑申と御左右まち入候。

一拙者先は無事に長の夏を暮し、漸〻秋立候て頃日夜寒の頃にうつり候。いかにも秋冬の間無㆑恙暮し可㆑申樣に覺候間、少しも氣遣被㆑成まじく候。追付參宮心掛候故、先大坂へむけ可㆓出申㆒、去ル八日に伊賀を立候て、重陽の日南都を立、則其暮大坂へ至候て、洒堂方に旅宿、假に足をとゞめ候。

菊の香やならには古き佛達

きくのかやならはいく代の男ぶり

ぴいと啼尻聲悲しよるの鹿

いまだ句體難㆑定候。他見被㆑成まじく候。追付爰元逗留の句共可㆑懸㆓御目㆒候。早〻御狀御こし可㆑被㆑成候。其元兩替丁か、するが丁酒店にて稻寺や十兵衞と申もの、爰元伊丹屋長兵衞店にて候間、早〻御左右承度候。子珊秋の集被㆑催候哉。左候はゞ爰元の俳諧一卷下し可㆑申候。上方筋別座鋪、炭俵にて色めきわたり候。兩集共手柄を見せ候。少は桃隣にも師恩貴キすべをわきまへ候へと御申成るべく候。桃隣俳諧俄に替上候と專沙汰にて候。急便早〻。

九月十日　　はせを

杉風樣

元祿七年

〔芭蕉眞蹟拾遺〕による。

尙〻はゝ樣およし御心得奉㆑賴候

彼是仕末以書狀不申上候愈御堅固被成御座候哉承度奉存候頃日意專より便御座候而其元相替も無御｜旨は被相傳候私南部に一宿九日に大阪へ參着道中に又右衞門かげにてさのみ苦勞も不仕なぐさみがてらに參つき申候大阪へ參候而十日の曉よりふるひ付申毎曉七つ時分夜五つまでさむけ熱頭痛參候而もしはおこりに成可申かと藥給候へば廿日頃よりすきとやみ申候就者心むづかしく早々御案内も不申上漸かめや、はかたやへ今廿二日見舞折節亰屋被下候間啓上仕いまだ逗留もしれ不申候へ共長逗留は無益之樣に奉存候間二三日中にはせ名張越にて參宮可申と奉存候相替事無御座候得共爲御案内如此御座候又右衞門方へ別紙に不及候間乍慮外御心被遊可被下候以上

九月廿三日　　桃　青□(花押)

松尾平左衞門樣

元祿七年

宛名の杉風は『もとの水』の寫し違へであらう。

惟然のむだ書など落柿舍寓居中の事らしい。『一葉集』も杉風宛である。

昨日は渡紙澤山御惠み忝存候。然處昨夜惟然一宿、例のむだ書、剩筆の先棒になし困り入申候。四今五枚申請度候。此人に御こし可レ被レ下候以上。

七　　はせを

杉風丈

元祿七年

越中　波の本願寺連枝浪化への書翰である。重厚の『もとの水』による。

山頭月挂雲門餅
屋後松煎超州茶

佛法は障子のひきてみねの松
火打ぶくろに鶯の聲

此心をもて俳諧の變化を知べしと、許六が去人に示候由。又惟然がたば粉呑ぬ傾城と菓子喰ぬ俳諧師はすくなきものと、はし書して、

ちり塚や鶯あさる聲のひま　房

あまりおかしく、書とめ懸二御目一申候。

十六日　　桃　青

浪化樣

元祿七年

大垣の如行へ大阪から送つたのである。本文は「一葉集」による。

升かふて分別替る月見かな

右の句申入候。處々に參候へども、さして是と申ほどの句も出來不ﾚ申候。またも此句かと存候故申まゐらせ候。これより直にはりま路に參候而、來月末に歸申候。其許連中へもよろしき様に御心得可ﾚ給候。旅宿故あら／＼申入候かしこ。

十八日　　桃　青

如行丈

元祿七年

名古屋の野水宛書翰である。西村燕々氏所見、岡山の佐々木氏所藏による。

口上

先日は參上候て種々得二御意一候。殊に茶まで被ﾚ下候て結構成御道具共拜見此上なしと奉ﾚ存候。乍二慮外一御同性様よろしく奉ﾚ祈上一候。

秋ちかき心のよるや四畳半

追て古き句申上候へ共、指當り出來不ﾚ申候故申入候。何事もあと／＼以上。

廿二日　　桃　青

野水様

元祿七年

支考の「笈日記」によると嵯峨の落柿舍から「その比支考は下の京に侍りて文つかはしける」返事に出したのである。

されと與風此間存知(一)出したる去歳武府脚半わすれ候、脚半の事にて季を定可ﾚ申候也。

二種被ﾚ懸二芳情一旅店の一德珍重不ﾚ淺賞翫(二)申候。今日去年(三)きせるの掃除去來一世の初たる故(四)、きせるの掃除壬五月と季を定(五)申候折節に貴僧初(六)音信、是亦壬五月の季を定候間、向後左様に御覽可ﾚ被ﾚ成候晩方御入來所ﾚ仰候

廿三日　　はせを

支考丈

〔一〕「一葉集」に「知」なし。
〔二〕同「賞味」に誤る。
〔三〕同「去來」に誤る。

〔四〕同「初たる持」に誤る。
〔五〕同「定めり」に誤る。
〔六〕同「初」を脱す。

元祿七年

本文『一葉集』による。

追て申入ル。其許より出來參ルはん袋、あまりそこね申ル。今一つあたらしくいたし度ル。大サ下地の通りにたのみ入ル。則、古袋飛脚へ登せ申ル。いづれにもよろしく賴入ル。御内様御せはにてルへどもたのみ入ル。依て一句、

物ほしや袋のうちの月と花

いかゞ思しル哉。當座間に合ル間、此句雜にて御ざル。くはしき事追ゝ可ニ申入一ル以上。

廿三日　　　　　はせを

杉風丈

元祿七年

去來が浪化の發句に對する脇句に附け煩つて、芭蕉の添削を乞ひたる手紙と、芭蕉からの返事と共に、明和六年板の「平安廿歌仙」に出てゐる。

三吟　　　　　　浪化

鶯に朝日さす也竹格子

雛の道具を取出ス春　　去來

又

雛のほこりを拂出ス春

又

袷はなりを取出ス春

又

いそがし事も先仕舞春

又

めつた吹する衣更着の風

又

小いそがしさも埒明る春

隨分あんじルへども出不レ申ル。あさ方もし能句出ルはゞ又々申べくル。雛のほこりの句可レ仕やと存ル。とかく御了簡可レ申ル。

是よりハ翁ノ書ナリ

小いそかしさも埒明ル春

此御句ヶ様ニ仕候而は
　ゆるりと春をかまへたる庭
此中素牛集に春の句をのぞまれ候而
　即事
　鶯や雀よけ行枝うつり
いかゞくるしかるまじきや。とかく手ぬるくなり候而きのどく／＼
史邦との三吟はいかゞ成候や。あたら三吟にて候何ぞにいたし申度候以上。

元祿七年

支考の『十論爲辨抄』に大坂花屋裏に於ける遺言狀を三通載せてある。其の中の一通は『一葉集』所載のものと相違するので『一葉集』の分を別に附載して置く。

一伊兵衛に申候。當夏は壽貞義に付、様々骨折之段而上に御禮も不ㇾ申、無ニ是非一仕合に候。
一好齋老・榮順老・禪可坊いづれも暇乞申入候。禪可坊は御病氣御養生可ㇾ被ㇾ成候。
一桃隣へ申候。不慮なる所にて相果不ㇾ能ニ對面一可ㇾ被ニ力落一候。杉風・子珊・八桑などへ、よろづ御投かけ老後の用意一日くらしと可ㇾ被ㇾ存候。

元祿七年十月　日

支考此度前働驚入候。親切被ㇾ盡ㇾ實候万事賴入候。
草庵の出山佛は形見ニ可ㇾ被ㇾ遣候。

はせを判

○

一伊兵衛に申候。當年は壽貞事に付、いろ／＼御骨折面談に御禮も存候處、無ニ是非ニ事に候。殘り候二人のものども、十方なうしなひうろたへ可ㇾ申候。好齋老など御相談被ㇾ成可ㇾ然了簡可ㇾ有候。
一好齋老、萬御懇切生前死後難ㇾ忘候。
一榮順尼・禪可坊、情ふかき御人也。面上に御禮不ㇾ申殘念の事に存候。
一貴様病起、御養生隨分御勉可ㇾ有候。
一桃隣へ申候。再會不ㇾ叶可ㇾ被ㇾ力一候。彌・杉風・子珊・八草子、萬御なげかけ、兎も角も一日暮しと可ㇾ存候。

元祿七年十月

一支考此度、前働驚深切實を被レ盡ゟ。此段賴存ゟ。庵の佛は
　則出家の事にゟ間遣しゟ以上。

はせを判

支考云、前後の後の字落なるべし。命終の近さに落字却て殊
勝なりとおい〳〵淚をこぼせしと云々。（一葉集）

○

遺物覺

一三日月日記。　伊賀に有。
一發句書木。　同　所。
一埋　木。　半殘方に有。
一新式書入。
是は杉風へ可レ被レ遣ゟ。落字等有レ之本寫にて可レ被考
ゟ。支考も可レ被レ寫ゟ。
一文章、反故等。
右は杉風方に有レ之ゟ。文章之草稿は支考可レ被レ爲二點檢一
ゟ。

はせを判

○

一羽州岸本氏之發句、炭俵集に紛入ゟ。公羽と翁との違
　にて可レ有レ之ゟ。杉風より斷賴入ゟ。
一猿蓑のうち、座頭の句引直し。
一古今の序傳、百人一音祕開抄、是は支考へ可レ被レ遣ゟ。

元祿七年十月　日　　はせを判

元祿七年

重厚の『あさかり』その他にあるが、本文は『一葉集』によつた。

御先に立ゟ段、殘念に可レ被二思召一ゟ。如何樣とも又右衛門便に被レ成、御年被レ寄御心靜に御臨終可レ被レ成ゟ。こゝに至可二申上一事無二御座一ゟ。市兵衛・次右衛門殿・意專老をはじめ不レ殘御心得奉レ賴ゟ。中にも十左衛門殿・半左殿、右之通にゟ。はゝ樣、およし力落し可レ申ゟ以上。

十月十日　　桃　青

松尾半左衛門樣

新藏は殊に骨被レ折忝ゟ。

元祿年中

『芭蕉消息集』に「此書翰松山侯藩中所持」とし

てある。

此度上り候を引切たるやうに皆おぼさるゝと見へ申候。左様にはなく候。日向殿在京の中にはやがて又まいり歸べく候。御はなむけ五種のうち、梅は所の名物なれば殊更ながめ入申候。

　はなむけも都ににほへ梅の枝

此事と京察のみやげにも何寄と存られ候。

　わすれ申さじ難波津の春

引出とて祝ひの日茶

　花の春も同じ祝ひの白茶哉

御覽有べく候。恐惶謹言

　正月廿五日　　　はせを

元祿年中

　伊賀上野田中善助氏所持の眞蹟による。

御芳翰辱致二拜見一候。如來命久々ニ而得二芳慮一珍重奉レ存候。羽二重大根往々珍敷賞翫可レ仕候。毎々御懇情不レ淺義存候。いまだ草臥中候而遠方不二罷出一候間、御非番の節御入來御所にて俳談可レ仕候。昨日も牛殘子被二見舞一さま

く氣情語合申たる事に御座候以上。

　壬五月五日

元祿年中

　「芭蕉翁消息集」に「金城諸々所持」とあるによる。

洒堂方書狀こし此度返翰ともに遣申候。いまだ御見舞にも不レ參候由、沙汰のかぎりと申遣候。

一正秀が子規の句驚入申候。夏中物むつかしさに何方へも文通不レ仕候處、此方のこ何事をさしはさみ候哉。書狀もくれ不レ申候。此方いたはりて書狀不レ遣候哉。其器量に應じておもひはかり申候。

一竹介殿御成人、おとめ女御無事大慶候。

　霜月一日　　　はせを

　　曲水様

元祿年中

　本文は「一葉集」による。

只今田舍方僧達二三人參候。俄に出し可レ申貯無レ之候。さぶく候故にうめんいたし可レ申候。そうめんは澤山有

レ之候。酒二升御こし賴入候。さかなは、つぶ納豆、茶碗に入、貴樣御出候而世話賴入申候。其次手に引合せ可レ申候。はや〳〵御出まち入候以上。

二　日　　　はせを

かふじや茂作樣

元祿年中

宛名の晩山は吟花堂爪木晩山ではなからう。晩山は松堅の門人だから季寄の事はより多く心得てゐる筈である。本文『もとの水』による。

二白誹諧御執心之由、先は珍重。物しりにならんよりは心の俳諧肝要に御坐候。句者は澤山御坐候へ共、心法を守る人はまれ〳〵なるものにて候。

一季よせの御不審御尤に候。愚老は此事にうとく候まゝ考え跡より可ニ申入一候。增山非御用可レ然候。

十七日　　　はせを

晩山樣

元祿年中

伊賀上野田中善助氏所持の眞蹟による。

炭取被レ懸ニ芳情一非挽炭斗の名殘三枝風情見物ありて一入峰感入仕候。藥の爐邊無念たるべく候。前宵綏々與御語被レ成大悅不レ淺奉レ存候。風麥子へ被レ遣被レ下候よし、是又忝、案のごとく客僧今日被□歸、茅屋に滯留に候。猶客僧送り立候而可レ得ニ御意一候。ほこりの中も珍敷思召候はゞ隨分御出御かたり可レ被レ成候以上。

十九日

元祿年中

天保七年寫本『芭蕉消息集』による。

曲水子の書狀もたせ被レ下忝候。是は去來が差圖と相聞候間、只そのまゝにて可レ被レ置候。尤考可レ申處一理御座候條愚考も同心仕候。委は後刻ゝゝ。

元祿年中

伊賀上野田中善助氏所持の眞蹟による。

今朝白ニ旦那樣一御肴頂戴仕雖レ有奉レ存候。私宅に而は女兄弟共打寄頂戴仕、又權右衞門方に而念比之もの共寄合戴申候とて、今日は權右衞門方にて寄合罷有候。後程御禮に參上可レ仕候以上。

年代不明

○

關更の『芭蕉翁消息集』による。逍遙遊の文章は芦文の『つばさ』にあるが。支考の『和漢文操』に作者東花坊として、標題も内容の同一な文章をかゝげてゐる。判斷に苦しまざるを得ない。

逍 遙 遊

道に逍遙の二字ある事は心に天遊ありて、世をおもしろからむといふ事也。天はこれを得て月淸く、地は是を得て花咲り。鳶と魚とはひらめきて遊ぶもの也。野馬は風にうかれて遊ぶものを、草くふ牛の飽て靜なる。蛇は其尾にあそばむとすれば、うしのぬしはさまらせてうたん事を思ふ。そはたとうたれてかなしからむは、遊ぶ時の心にかへよ。そのぬしの牛にはぢかれて、ふたつなき鼻のかけたるためしもあらむに、すべて遊ぶ事は先にして、くるしむことはのち也。誰か遊んでくるしまざらん。くるしまずして遊ぶ人は世にありて何人ぞや。世に實あり虛あり。實にあそぶ人は虛にくるしむ。たれか實(一)なく虛にすゝむ人はある時のあるにぞいさゞくるしむべき。虛に實有實に虛あらば虛實は虛にして自在なるべし。むかし莊周が夢に胡蝶と遊びしも、觀音の花によめ入せられしも、もとより虛なもて虛なさかれば、ましで實なもて實なさかす。かゝる聖人の虛なさし(二)て、いまの人もいふてあそばざらんや。此故に春(三)になりては川狩にあそぶ。茸狩の時は浪人なあそばしめ、鷹狩の時には大名な遊ばしむ。寔よく天の遊ぶものにして貴賤貧富は人の苦しむなり。

一逍遙遊先書に反故に可被成候、書直し進候。我もこれに遊ふものに候へば、深く苦しみも候はず候故おもしろき事なく候。御約束の茶はいかゞに候哉うち申候以上。

三月廿日　　　　はせを

惟然丈

〔一〕『つばさ』に「たれか虛なからむ、なからん人はある時のあるにぞ」

〔二〕同「虛なさへに」

〔三〕同「春になりてはさくら狩にあそび、夏になりては川狩に遊ぶ」

○

本文『もとの水』による。『一葉集』に「又こえ

ん小夜の中山初かつを」の句を添へてあるが、
『もとの水』には書翰と別になつてゐる。

初がつを御振舞被レ下候由、斯る隱居の似合しからず候へども、おもと殿御志追付參上

太右衞門樣　　桃青

○

『もとの水』にあるが宛名はない。『一葉集』に「水油なくて寐る夜や窓の月」の句を添へたのは「もとの水」を讀み違へたのである。

新麥一斗〔一〕・筍三本・油のやうな酒五升と云は富貴の沙汰也。蕎麥粉一重・小遣錢二百文忝ぞんじ參せ候

〔一〕『一葉集』に「一升」

○

『もとの水』による。『一葉集』に「口上にかき落しけり土大根」の句を添へてある。

枕屛風むだ書いたし、則御使え相渡申候。糯半せんたく糊少々と御申付可レ被レ下候。

杉風樣　　はせを

おふくろ樣

○

『枇杷園隨筆』に「芭蕉翁の評なり」として書翰の斷片をかゝぐ。

犬蓼に殘る螢の覺束な
月に狸の良をかけおく

句作のあらひ又感心申候。

霧くろく包める瀧の落る音
守なき堂に紅葉まゐらせ

かゝるけしき此春多く見申候あはれ催し候。

○

守輔白亥の『俳諧眞蹟の鏡』に芭蕉の舊友高山麋塒の遺物として、芭蕉の書翰を一部分眞蹟にてかゝげて全文を附載してある。

五月十五日　　松尾桃青 書判

高山傳右衞門樣

貴墨忝致二拜見一、先以御無爲被レ成二御坐一候珍重奉レ存候。私無二異義一罷在候。仍而御卷致二拜吟一候。尤感心不レ少候

共古風のいきやう多御座候而一句の風流おくれ候様に覺申候段近比御尤。先は久〻爰元俳諧をも御聞不レ申哉、其上京・大坂・江戸共ニ俳諧殊之外古く成候而皆同じ事のみに成候。折ふし所〻思入替候を、宗匠と申者もいまだ三四年已前の俳諧になづみ、大かたは古めきたるやうに御坐候。一日學者猶俳諧ニまよひ、爰元ニ而も多くは風情あしき作者共みえ申候。然る處ニ遠方御へだてニ而、此段御のみこみ無二御坐一、御尤至極ニ奉レ存候。玉句之内三四句も加筆仕候。句作のいきやうあらまし如レ此に御坐候。

一一句前句ニ全體はまる事古風中興共可レ申哉

一俗語の遣ひやう風流なくて、又古風ニまぎれ候事

一一句細工に仕立候事不用之事

一古人の名を取出て何〻の白雲など〻云捨たる事第一古風ニ而候事

一文字あまり三四字五七字餘りニ而も句のひゞき能候へば一字ニ而も口にたまり候を御吟味可レ有候事

子供等も自然の哀催すに

つばなと暮て覆盆子刈原　才丸

賤女とかゝる蓬生の戀　同

よこし摘あかさか菌に垣間みて

今や都は鰒を喰らん　其角

夕端月燕は栗ごしに成にけり

といはれし所杉郭公　同

心野を心にわける幾ちまた

山里いやよのがるゝとても　町庵

鯛賣聲に酒の詩を賦す　愚句

葛西の院の住捨しあと

ずいきの戸蕗壺の間は霜をのみ　同

○

本式俳諧之次第

一初折の面十句

但シ面十句之内名所一ッ必出すなり

一名殘のうら六句なり

一花は先四本五六七八も有之面に花をひとつヅヽしてもくるしからず

一月は五句去にいくらもあるべし

一雪月花郭公寐覺是五色の内いづれも二句去なり

一猿と檜原山類に用ゆ。往古之式には初折の面十句之内何れも賦物をとる。一順のはじめに賦物を書つくすなり。其後はむづかしき故に發句斗りにふしものをとれるなり

一降ものとふりものとの間二句

一五句のもの三句〻〻の物は二句去

一七句去のものは十句去なり

右あらまし如此

一みゆ　ウクスツヌフムルシ

　むかふの山に雲のたつ。みゆ

　あれなる海に舟をこく。みゆ

　花の垣根に胡蝶とぶ。みゆ

一下の句つゝ留り

大やうものを二ッ言ならべてとまるべし

譬ば

　右も左も袖はぬれつゝ

また

　二艘のふねを漕流しつゝ

又ものゝかぎりなき心にもあり

譬ば

　たえず深谷の水流れつゝ

一上の句つゝ留

是難儀大切なる手爾波なりとて先達も多くはせざるなり

譬ば

　散花は筏に波にながしつゝ

此上の句の留も下の句のつゝどまりとしたての心相似たり。物を二ッにいふと、又かぎりなき思入などにてとまるべし

一下の句て留

前句の上の句の五文字に、さればこそ心こそなどある時下の句にてて。と留るなり。また前句にもかまはずしてて。どめあり

譬ば　ラリルレロ

此五文字ての字の上におくなり

　花のにほひは袖にとまりて。

ものおもふとは色にしられで。

一下の句に留

譬ば

前句上の句五文字にかさなりてつらなりてなど有時に。と留るなり。また前句にもかゝはらずにと留るあり

譬ば

涙は袖に露はたゞもとに

花は園生に露はまかきに

有二ツ手本なり。是山を見る玉を見るといふ手爾遠波なり。一大事の祕傳あなかしこ〳〵

一大まはし發句

有山玉の字を坐の句のかしらにおくなり

譬ば

稲莚敷島の道草の種

式は三段切。かさね切。らん留。をまはし五文字切。

但シ坐の五文字なり

一脇てには留

腰に韻字をすゑてあるなり

一第三韻字留

前句の五文字にかゝらず長高くして一句慥にとまる。同第三のてにて留中内、あるひはらん。らん。は常の事のやうにいへども口傳あり。又もなし留に。留前の句のおひしらひによりあるべし口傳あり

一二字のらん留

にほひのみ花は霞に咲ぬらん

雪いと高しふみ迷ふらん

有口傳

一過現未三ツのし文字

現在のし

山遠し　水高し

過去

過し　見えし　敎へし

未來

去りぬべし　來たるべし

一こそかゝえ手爾波　いハいハ　ヘケセンメ

一下句のこそどめ　ニバ

一下の句上の句もの字の留
野も山も。山も埜も。雪もあられも。などゝも文字を
二ツ對していへば留るなり

一花に櫻付やう
是別て祕する事に侍る。前句の花、花がつを、花の袖
などゝいふたらば櫻を付てくるしからず。前の花別の
ものなるゆゑに又たとへ本花に仕立たる句なりとも、
名字の付たる櫻を付ゆはゞくるしからず。乍去此分に
ても不功者の人ならば付はだへ相違あらんかと覺束な
し。功者ならではいかゞ

一上の句やと言て下にてと留る事とかく口あひのやなら
ばとまるべし。譬ばその原や近江路やなどゝ名所にか
ゝるや文字にててと留る事は大かたの人存じたる手爾
波なり。又はの字に通ふやあり是にててと留る也。或
はや文字ならずともか文字などにてうたがひの字にて
もおさへ字にならひあり、留る事なり

右万ゝ先聖の祕しおかれたまへる事ども也。とくと心
にをさめ手に握るごとくにても、大事の手爾遠波など
をばせぬが連俳のいのちなるべし〳〵

翁在京猿雖への返書

竹人の「芭蕉翁全傳」に元祿元年の吉野紀行の
大概を報じた書翰を附錄してゐる。紀行として
はその體をなさず、書翰としては長文に過るの
で便宜こゝに載する事としたのである。

大坂迄御狀忝拜見。此度南都の再會大望生この樂ことは
にあまり、離別之恨み筆に不ㇾ被ㇾ盡ゆ。我たのもし人に
したる奴僕六にたに別れて、彌おもき物打かけゆ而、我
等一里來る時は人ゝ一里可ㇾ行也。三里過る時は各今や
三里可ㇾ行也。いまたしや、梅軒何がしの足の重きも道連
の愁たるべきと、墨賣がおかしかりし事ども云〳〵、石
の上有原寺井筒の井の深草生たるなど尋て、布留の社に
詣、神杉など拜みてこゑばかりこそむかしなりけれと詠
し郭公の比にさへなりけれど、おもしろくて瀧山に昇
る。帝の御覽に入たる事古て、集に侍れば、猶なつかし
きまゝに、貳拾五丁わけのぼる。瀧の氣色言葉なし。丹

波市やキと云所耳なし山の東に泊る。ほとゝぎす宿かる頃の藤の花と云て、なほおぼつかなきたそがれに、哀なるむまやに到る。今は人々舊里にいたり、妻子童僕のむかへて、水きれいなる水風呂に入て、足のこむらをもませなどして、大佛の法事のはなしとり〴〵なるべき。市兵衛は草臥ながら、梅額子へ登ひけらかしに可レ被レ行。梅軒子は孫どのにみやげねだられておはしけむなど、草のまくらのつれ〴〵に、ふたりかたり慰て、十二日竹の内いまか茅舍に入。うなき波入たる水瓶もいまだ殘りて、わらのむしろの上にて茶酒もてなし、かの布子うりたしと云けん万菊のきる物のあたひは彼におくりて過り。おもしろきもかりのたはぶれにこそあれ。實のかくれぬものを見ては身の罪かぞへられて、万菊も暫落涙おさへかねられけり。當麻に詣て、萬のたつときもいまをみるまでの事にこそあなれと、雨降出たるを幸に、そこ〳〵に過て、駕籠にて太子、葺、譽田八幡にとまりて、道明寺藤井寺をめぐりて、つの國大江の岸にやどる。いまの八間屋久太あたり也

杜若語るも旅のひとつかな　愚句

山路の花の殘る笠の香　一笑

朝月夜紙干板に明初て　萬菊

二十四句にてやむ。

十九日あまが崎出船、兵庫に夜泊、相國入道の心をつくされたる經の島・わだのみ崎・わだの笠松・內裏やしき、本間が遠箭を射て名をほこりたる跡などゝきゝて、行平の松風村雨の舊跡、さつまの守の六彌太と勝負したまふ舊跡、かなしげに過て西須磨に入て、幾夜ね覺ぬとかや關屋の跡も心とまり、一ノ谷逆落し・鐘懸松、義經の武功おどろかれて、てつかひが峯に昇れば、須磨・あかし左右にわかれ、あはぢ嶋・丹波山、かの海士が古里田井の畑村などめの下に見おろして、泉の皇居はすまの上のと云り。其代のありさま心に移りて、女院おいかゝへて舟にうつして、皇を二位どのゝ御袖によこ抱にいだき奉りて、寶劍內待所あはたゞしくはこび入、或は下〳〵の女官は、くし箱油つぼをかゝへて指くし根卷を落しながら、緋の袴にけつまづき臥轉びたるらん面影さすがに見ることゝ地あ

はれなる中に、敦盛の石塔にて泪をとゞめ兼ゆ。磯近き道のはた松風のさびしき陰に物古たるありさま、生年十六歳にして戰場にのぞみ、熊谷に組ていかめしき名を殘し侍る。其日のあはれ其時のかなしさ、生死事大無常迅速君わするゝなかれ。此一青梅軒子へも傳度し。須磨寺のさびしさ、口を閉たるばかりに。蟬折・こま笛料足十疋見るまでもなし。此海見たらんこそ物にはかへられじと、あかしよりすまに歸りて泊る。

廿一日布引の瀧に登る。山崎道にかゝりて、能因のつか、金龍寺の入の相鐘を見る。花に散けるといひし櫻も、わか葉に見えて又おかしく、山崎宗鑑屋舗、近衞どのゝ宗かんがすがたを見れば餓鬼つばたと遊しけるをおもひ出て、

有難きすがた拜まんかきつばた

と心のうちに云て卯月廿三日京へ入。

通説

俳諧文學に正しい出發點を與へたものは芭蕉である、といふ事は今日異議のない所である。歴史的に見るならば、俳諧文學といふものは決して芭蕉が發明したものではなく、其時代に於て、すでに一の傳統をなしてゐたのであるが——此事は第二卷第三卷に於て云ふ——其傳統的形式のうちに新しい内容を盛つたといふよりも、新しき發想的衝動に依て、在來の傳統的觀念に、一つの生命ある進轉を與へたといふ事が、芭蕉の力である。それは、又、芭蕉の詩人としての識見とも云へようし、人間としての趣味性とも云へようが、兎も角、俳諧文學といふものが、こゝに初めて藝術的のモーションを生じたので、即ち「正しい出發點」を得たのである。傳統といふ觀念も亦、こゝに正しく生かされた。といふのは、傳統とは昔からある池として貴いのではなくて、過去あり未來ある流として其意義を持つべきだからである。

今日、俳諧文學に指をそむる者は、それぞれに主義、傾向、趣味等を異にし、幾多の流派に岐れてゐる觀をなしてゐるが、何れも、芭蕉から出發したといふ考に於ては一致してゐる。嘗ては、蕪村の時代に於ても、諸多の俳風の中に立つて、芭蕉の精神に歸らねばならぬ事を悟つたのは蕪村であり、一茶の時代に於ても、ほんとうに芭蕉の肚裏を讀んだものは一茶である。しかも、蕪村の俳風は芭蕉の其と違ひ、一茶の句調は芭蕉のそれと異つてゐる。そこが面白い所であり、又、眞實の所であると思ふ。芭蕉こそは、俳諧文學の流に於ける源である。いつの時代に於ても、その流の方向に正しい暗示を與へるものは芭蕉である。今日の如く、俳諧文學に對する見解が殊に多岐にわたり、外觀

的には或混亂をすら感ぜしむる時に當つて、芭蕉の作品に對する研究は一層重要だと思ふ。

芭蕉は「出發點」であると私は云つた。私流の言葉をそれに加へれば、「歸着點」ではないといふ意味でもある。「芭蕉に歸ればいゝ」といふ譯のものではなく、「芭蕉の心とした所を進めよ」といふ事である。然し、其は餘りに評論にわたるから爰に說く事は差控へるとしても、芭蕉には、其れから種々に生長すべきものゝ發芽を悉く含んでゐるといふ意味で、「出發點」であるといふ事は議論がなからうと思ふ。

先づ、芭蕉の俳句を見よう。其中には、蕪村的なるものも、一茶的なるものも、今日新傾向、新しき俳句などゝ唱へる奇風なるものも、また子規が月並調として排斥したる通俗的なる口調も、すべて爰に其芽を見出す事が出來る。それを如何に生かすか、殺すか、其に捉はれるか、其上に自由を得るか、人々の境涯と技倆とである。芭蕉の俳句全體が珠玉を列ねたものであるとは云はれない事は、多少とも批判の目を持つたものには誰にも氣が付くことである。其故に、子規の如きは、芭蕉句集中、佳作とすべきは寥々たるのみなどゝ酷評を下してゐるが、其佳作たるや、後の俳人の所謂佳作などゝは比較にならぬほど、飛びぬけて、強く光つてゐるのである。芭蕉の俳句は、その製作年代に依つて一概には云ひきれないが、自敍的なる實情のものが勝れてゐる。自然の景物を寫すとしても、其景趣の中に自分の感情が融け込んでゆき、いはゆる物心一如の境に入る。客觀の、主觀のなどゝいふ分類をゆるさぬ全一的な氣持である。そこに作者の「人」が出る。芭蕉の作品が多くの人に親しさを感ぜしめ、好みを感ぜしめる所以も亦、此の「人」の味である。而して、是は又、俳句といふものゝ本質を考へる上で、大きな參考となる事である。

芭蕉の俳句が實情を主とする爲に、それだけ純粹に凝晶し、それだけ窮屈に跼蹐する傾きのある一方に、想像の翼をはばたかせて、自由に着想し、自在に詩化する變幻の妙をきはむるものは連句である。連句の製作の初めに於ては

全内容の豫想がない、たゞ自然なる移行に依る創作衝動がある。いはゞ「無目的」である、目的なくして心をやる、これ「遊び」である。但し、此の「無目的」の貴さ、「遊び」の貴さを解し得るものは、此地上のものが凡て「無目的」にして亂れず、「遊び」の中に行成するといふ眞實を解してゐるものである。連句の席に同座する人々が、それ〳〵の心を承けては轉じ、承けては轉じて行く間に、一つの世界が、變化と諧和とを以て織り出されてゆく、それは不思議なる創造の表現的藝術であるともいへる。連衆の間に於ける親和力といふものも特殊なる性質をもつ。彼等は大管絃樂に於ける一人々々の樂手のやうである。たゞ管絃樂に於ては同時的に諧和するものを、連句に於ては移行的に諧和する。即ちメロデイカルに進展するのである。此管絃樂に於ける指揮者たる芭蕉の力量がその演奏的効果に大きくはたらきかけてゐることも勿論である。連句を管絃樂にたとへれば、獨立したる俳句（連句の發句たる場合は別として）は獨唱にたとへることも出來よう。俳句は唱ふもの、自分の心を述べるもの、己れを打出すものである。連句は和するもの、己れを忘れるもの、自と他との隔てを去つて、一つの俳諧世界に共生するものである。

芭蕉時代に於ては、「俳句」といふ名稱はなく（特殊の用例は別として）、「俳諧」といふ語が多く用ひられ、「俳諧」とは主として連句を指し、連句のうちの第一句、即ち「發句」であつて、發句が其一句のみとして詠まれたもの、やはり「發句」であるが、それが所謂「俳句」に當るのである。所が、子規以來――子規が連句といふものを不當に非難した爲めに――連句を研究するものが少く、今日では俳句のみが全盛をなしてゐる。此現狀に就ては、根本的に考へてみなければならぬ多くの問題が打すてられてあると思ふ。其二三を擧げれば、俳句一方主義に於ては取材の範圍が約束的に限られてゐるが故に行きづまり易い事、又、リズムが一定型的に限られてあるが故に單調にして飽き易い事、一句充全といふ考が自家說明の中毒にかゝり易い事、兎角まとまりすぎる爲めに自由さの新味を缺きがちなる事、

等等……。さりとて、私は手ッとりばやく、連句復興を叫ぶものでもない。そこには私見がないではないが、何にせよ、芭蕉時代の連句といふものは、解りにくいもの、つまらないものといふ風に輕視せられることなくして、新しい心を以て味索してみねばならぬものである。

芭蕉の句合と其判詞といふものも、之を單に勝負を決する興味として見るのでなく、句の優劣といふことは句境の深淺そのものであり、其を判ずることは、正しき意味に於て、其句境を純化せしむる爲めの指導であるといふ風に味ひたいと私は思ふ。判詞そのものは、しやれた書き方をしてあるが其華にまぎらはされずして、其實を見るべきだと思ふ。連句の附味に對しての芭蕉の評語は、かなり親切をつくしてある。こゝには、批評家として、又、解說者としての芭蕉が出てゐる。是等の批評や解說は其作の動機、氣分、表現を作者の立場として充分に呑込んでゐるものでなければ出來ない言葉だから、其は單なる批評や解說でなくて、其儘、創作的の味ひを持つてゐるものだとも云へよう。其言葉に一種の文巧があるのも其譯である。

芭蕉は殆ど其一生を旅に於て暮らした。否、旅の氣持に於て暮らしたといふ方が正しいであらうが、芭蕉といふと、何人も一笠一杖の其行脚姿を思ひうかべる如く、旅に於ける芭蕉が、水に於ける魚の如く思はれるのである。げに、芭蕉の名吟といはれるものが、多く旅中に於て得られたと同じに、芭蕉の文章も亦、旅の記が最も佳いと私は思ふ。「甲子吟行」は紀行といふよりも、俳句を珠數つなぎにして詞書を挿んだといふ風のものであるが、芭蕉が世間といふものを捨てゝ、獨り旅の心に入りきる最初のものであつて、其時より前と後との作品を較べて見れば、此心境の變化が如何に確に其作品に影響を與へてゐるかといふことが解り、それは俳句が心境的藝術であるといふことを證するものとして意義が大きい。その「甲子吟行」に於ける頃の淋しく、獨りにして、自ら慰め、興を求むるといふ風の心

持が漸次にやはらぎ、潤ひを帶びて、「笈の小文」に於ては、ふつくりとして圓く、又、しみ〴〵と澄んだものになつて來てゐる。それが其まゝ、其中の俳句となつてもゐる。さうした自足的な氣持を、もう一度、放下して、ほんとうに大きな自然の中に自分の姿を見出して行かうと、それこそ旅人の謙虚な心を以て詩を尋ねて出たのが、最も長途の旅となつた奧羽一巡で、其記が「奧の細道」である。芭蕉の心持が張りきつてゐたからであらう、此文は實に力がある。すべて、芭蕉の紀行は文飾や技巧の妙味ではなく、ひたと其呼吸と脈搏とが出てゐる所がしたはしい。文がそのまゝ「人」である。上に、俳句に於て云つたのと同じである。さういふ意味では、其日常を其まゝに記した「嵯峨日記」が、一さう好く芭蕉の人間としての味、其生活の相をいき〴〵と打出してゐて、一さうなつかしく讀まれるものでもある。「幻住庵記」も亦、さうである。

なほ、芭蕉といふ「人」がしんじつに現れてゐるものとしては――芭蕉の生活を如實に覗ふべき資料としては――其書翰に如くはない。芭蕉のおつとりとした人格、つゝましやかな性質、何事にも行き屆いた心やり、すべてを大きく包むやうな力、知己友人に對する純情、自分は貧しさに處してゐながら、寧ろ高貴な綽々とした氣持、家庭を持たぬ代りに門弟達を子の如く愛したる氣持、それらは書簡のそれ〴〵の文言からにじみ出てゐる。此人にして此藝術がうまれ、此藝術が此人を作つたといふ消息も、之によつてはつきりと理解されようと思ふ。

芭蕉の遺語が其門弟等に依て忠實に筆錄されてゐることも芭蕉の人がらをよく現してゐる。その當時當座の言葉が今日に當てはめて立派に生きて通用するものが少くない。又、それは素より俳諧に關する義が多いが、勿論藝術上の意見であると共に、其まゝ人生自然に對する見方、考へ方として味の深い言葉が澤山にあることも注意をひく。之も芭蕉の藝術と其生活とが一つの根源から生じてゐるものだといふ事の一證ともいへようと思ふ。

『芭蕉一代集』、輯めて見れば、かなりの大冊となつた。此大部分は芭蕉が深川隱栖以後の作であるから、夫から歿年まで僅か十二三年間のものである。俳句や連句は、散文の如くすら〳〵と書き流せるものではない。一句、一字を得るにも苦心に時を費すことが多い筈である。それにして且つ之だけの收穫があつたといふことは驚かれる。いや、それ所ではない。芭蕉の作品にして、散逸し去つたものは、此外にどれ程あつたかもしれないといふことを考へると、一さう驚かれる。尤も、俳句俳諧の作は量を以て計るべきものではないが、ともあれ、此分量は書かんが爲めに書かれたものでなくて、しぜんに作り、しぜんに詠つたものが、しぜんに遺され、しぜんに集められて、之だけになつたといふ事實は、「製作」といふよりも「人」としての價値を語るものであつて、ほんとうの意味に於て、其「生活」の貴さがしぜんに記錄されたものだと云つても然るべきだと思ふ。（荻原井泉水）

日本俳書大系第一卷 終

大正十五年六月五日印刷
大正十五年六月十日發行

非賣品

日本俳書大系
（1）

著作者　神田豐穗

發行者　神田豐穗
東京市日本橋區數寄屋町一番地

印刷者　谷口熊之助
東京市牛込區早稻田鶴卷町四〇三

印刷所
春秋社印刷所

發行所
東京市日本橋區數寄屋町・春秋社內
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手 二一二四 / 二二二四





